
- d r a w -

かっぱ同盟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

- draw -

【Nコード】

N8468X

【作者名】

かつぱ同盟

【あらすじ】

不思議な老女に出会ったオノダ・キクマサは、その出会いによって美術の道を極めようとルネ・ヴィルトン美術学校に入学する。ルネ・ヴィルトン美術学校にはルネ・ヴィライアーと言う特殊な特待制度があり、キクマサもそれを目指す……。個性豊かなヴィライアーを中心に、世界の文化、遺産、神話を交え、美術と言う視点からそれぞれの問題と向き合っていくリアル&ファンタジー。再投稿作品です。長いです。キャラクターが多いです。

プロローグ

一生涯において、出会える美しい物の数って決まっているのだろうか
人によって、差があるのだろうか

美を極めた者にしかたどり着けない場所ってあるのだろうか
そういう人にしか見えない物ってあるのだろうか

世界って広い

僕らが思ってる以上に奥深く

僕らが思ってる以上に美しい

「それなら君にとって、美術って何だい？」

細かい金の細工のイスが、またギシツと音を立てる。50代前半ほどの男の教授が、長い机の向こう側から聞いた。最後の質問であった。

彼はこの質問を、3年前に聞かれたことがあるけど、その時は答えられなかった。

向かい側、教授の座っている金のイスが、再びギシツと音を立てる。

「それは……世界の美しいものを、ちゃんと見つけれられる力だと……」

彼の目の前の紅茶が、イスがギシギシ鳴くたびに、少しゆらぐ。でも、それで現れた水の模様だって、彼には美しく見えた。

教授はダリのような髭を撫で、

「…よろしい……的を得ていて」

満足そうに笑う。そして、付け加えるようにさりげなく。

「そうですね。君にはなかなか、どうにもよろしい天性のものがあるようです。それは、沢山の美術品を見ることで、更に良ろしくなるもので」

「…はあ……、 “良ろし” ですか……」

彼は、どうにもこの教授の言い回しについていけずに反復してみた。
教授は、片眉根を上げて、彼の書類に印を刻んだ。

「ようこそ、ルネ・ヴィルトン美術学校へ。それならばきみがこ
こで……」

「世界の美しいものを、見極められますよう」

教授が立ち上がったことで、また金のイスが鳴いた。

d r a w

* シーズン1の登場人物

< drawシーズン1の登場人物 >

シーズン1のキャラクターを大雑把に説明します。読んでいる途中に「こいつ誰だっけ……」となったら見てみてください。気になった時に覗いていただけると嬉しいです。

> i17044—488<

〈 絵画科ルネ・ヴィライアー 〉

* オノダ・キクマサ (ルネ・アメジスト) / 二年生
主人公。クールそうに見えて案外天然。記憶力が病的に無い。

* ルナシー・ミディエム (ルネ・トパーズ) / 二年生
ヒロイン。金髪美少女。いつも笑顔でおっとりしているように見えるが……

* フォルテ・ゴットバルト (推ルネ・クリスタル) / 二年生
キクマサのルームメイト。雑学が多い。考古学オタク。

*レイデル・リローズ（推ルネ・ペトリファイウッド）／二年生
二年生一の天才。フォルテの幼なじみ。感情的。

*ハク・リュオン（ルネ・テクタイト）／五年生
みんなの団長。恐い事で有名だがそうでもない。可哀想なくらい
運が無い。

*メルベリー・セレネーム（ルネ・パール）／五年生
副団長。メルベリー嬢と呼ばれている。ミス・絵画科

*ティアン・レーゼス（ルネ・ターコイズ）／五年生
団長補佐。実際はこいつの天下。鬼畜メガネ。

*サイオンジ・ナギ（ルネ・ダイヤモンド）／五年生
日本画留学生。アトリエが腐海の森。ミーハーである。

*レッドリー・ヘッドバーン（ルネ・ルビー）／五年生
貧乏だがイケメンの男子寮長。人気者。ウインクが癖。

*シャンデリー・リオール（ルネ・ガーネット）／四年生
ルネ美新聞による学園ランキングで、全てにおいて一番輝いてい
る男子部門一位。

*シルフィード・ケイド（ルネ・カーネリアン）／四年生
リオの彼女。メンバーにお母さんとも言われる。世話焼き。

*フレイ・レステヴァン（ルネ・エメラルド）／四年生
プレイボーイ。不真面目そうで、意外と仲間思い。

*シャルロ・グレディア（ルネ・アンバー）／四年生
賞金女王。女王様気質で、勝負事に強い。

*スノーフリーク・ロズベルト（ルネ・オパール）／四年生
絵画科きつての天才。基本ローテンション。

*カイ・ヴォストン（ルネ・ハウライト）／三年生
ヨーロッパの鑑定王子。学校にいるよりテレビに映ってる事が多い。

*ジェイル・クォーション（ルネ・サファイア）／三年生
男嫌いで有名。強がっているが案外臆病者。

*クレハ・ドルフォード（ルネ・コーラル）／一年生
野生児系電波少年。なぜか会話が通じない。チヨコレート中毒。

* ヘルクロー・ラヴィーニ（ルネ・アクアマリン）／一年生
名家のおぼっちゃま。小心者でクレハに振り回されている。

《イメージボード》

> i 1 4 3 6 9 — 4 8 8 <

> i 1 4 3 7 2 — 4 8 8 <

〈彫刻科ヴィライアー〉

* パリス・ヴァレリー（ルネ・ゴールドロッド）／五年生
彫刻科団長。表は優しそうだが、絵画科の研修地などを裏で操る。
鍵を探している。

* ロードルーン・アイスキネス（ルネ・シルバーロッド）／五年生
彫刻科副団長。淡々とした青年。

* エマ・ベリル（ルネ・プラチナロッド）／五年生

よくパリスに意見する。タロット占いを得意とする。

*アルマ・カイザード（ルネ・アイアンロッド）ノ四年生
気の短い青年。パリスには忠実。

*フィル・レグール（ルネ・ブロンズロッド）四年生
知的で落ち着いた青年。

*ブリジット・バルーン（ルネ・スチールロッド）三年生
太ったおかつぱ娘。おしゃべり。

*シャトー・オークラン（推ルネ・ウッドロッド）二年生
穏やかな天然少年。いつもニコニコしてる。

*スカーレット・マリーニ（ルネ・グラスロッド）一年生
無口な少女。言うときは言う。

（他学科団長）

*リーベル・キルマー（ルネ・XIEI）/五年生
デザイン科団長にして、団長総会長。さわやかぶっているが腹黒
そう。

*オペリア・フォード（ルネ・ミカエル）/五年生
ファッションデザイン科団長。モデルでもある。高飛車。

*ジーク・ウィリアムズ（ルネ・シリウス）/五年生
映像科団長。ハリウッド俳優を両親に持つ。アホ故のカリスマ性
を持つ。

*レクサ・ホープキンス（ルネ・サンフラワー）/五年生
建築ガーデン科団長。団長の中で基本空気。しかし人は良い。

〈教師陣〉

* エリック・オーデイル（理事長）

ルネ・ヴィルトン 理事長。この職にストレスを感じている。

* エリーゼ・オーデイル（絵画科ヴィライアー主任）

カトレアの娘。やり手の教師。厳格で、無表情。

* ネイリー・ドールマン（二年生担当教師）

キクマサ達の担任。基本優しい。

* ガイル・アンドリユー（絵画総主任）

ですぞ口調のおじいちゃん先生。変人。

* ヴィンセント・フレジール（彫刻科ヴィライアー主任）

名前だけ。詳細は不明。

くエジプトプラン編く

*セティさん

観光案内人だったはずだが、謎多いまま消える。

*ツタンカーメン

悲劇の少年王。キクマサと仲良くなる。

*アンケセナーメン

ツタンカーメンの妻。夫を強く愛する。

*アクエンアテン

ツタンカーメンの前のファラオ。アマルナ改革を強行する。

*ネフェルティティ

アクエンアテンの妻。現代で有名な“ネフェルティティの胸像”のモデルである。

*宰相アイ

アクエンアテン、ツタンカーメンと仕えてきた老宰相。ツタンカーメンの次のファラオである。

*ホルエムヘブ

若き將軍。宰相アイの次のファラオである。

*タハール

ラーの神官。勇ましい若者であったが、後に呪いの化身となる。

*タハール少年

タハールの息子。

*カーロン

ラーの神官団の長。タハールの父。黄金のマスクの隠し場所を知っている。

*セト神

黒い神官とされていたが、後に神だと分かる。タハールを呪いの化身に変える。

〈その他〉

*カトレア・オーデイル
キクマサに絵を教えた師匠。

*ジェシカ・バーナード
キクマサ達の同級生。レイにコンプレックスを抱いている。

*レミオ
キクマサ達の同級生。情報通。

*マクナスさん
学校内の画材屋の老人。

*ミハエル先生
大御所鑑定士。カイの力を認めている。

*マルティン

評論家。ルネ・ヴィライアーを嫌っている。

*オノダ・キクジ

キクマサの父。日本の外務省大臣。

*カツキ・サキコ

キクマサの母。画家であったが自殺した。

*オノダ・ミチコ

父の再婚相手。

*オノダ・キヨシ

父の隠し子。ミチコの子供。

01：色の無い時代

人生に色ってあるのだろうか

例えば、バラ色の人生とかって言うし、画家のピカソには、青の時代とか、あったって言う。

意味合いが違うかもしれないけど、人々はきっと、時代時代によって、彩られて生きている。

何と美しいこと。

ガタン…ガタン…

木製のイスの趣のある汽車。「世界の車窓から」とかでよく見るあれに近いと思う。

オノダ・キクマサは16歳の日本人だった。茶髪に焦げ茶の瞳、い

かにも今時な輝かしい年頃を王道に楽しんでいるような、ちょうどいいくらいに垢抜けた少年。この髪と目の色は母親譲りで、日本人にしては少々華のある顔立ちである。

彼は今、とても虚ろな顔で窓から外を見ていた。

見渡す限りの小麦畑。青い空、広大なプスタ。

ちょうど、ハンガリーくらいだろうか。

『全くあの人は、一体何を考えているのだろうか。ギリシアへ行かないといけないのに、オーストリア行きの航空チケットしかくれなかったじゃないか。おかげでそこからギリシアまで、長い長い列車の旅だ』

キクマサは淡々とそんな事を考えていた。文句のような、不満事のような、しかしどこことなく異国の空気に取り入れながら、何だかんだ言っただけで楽しんでいるようにも見えた。

突然黄金のプスタが途切れ、暗いトンネルに入った。入ったと思ったら、再び青い空。

しかし、小麦畑は淡い金色から姿を変えていた。

何とまあ広大な、どこまでもどこまでも続くヒマワリの畑。

太陽の花だ。

虚ろだった瞳が、一変して色を得る。

「……うそだろ……」

ポツリと呟いた。

だって今は3月中ほど。

日本でも、今年は桜さえ見ないで出てきたというのに。

桜を待たずに、飛び出したというのに。

やっぱり世界って広い。

広大な太陽の花は、地平線の遙か彼方まで広がっていて境なんてわからない。

やっぱり気候が違うのか。はたまた土が違うのか。

日本だったら、この時期にこんな景色見られるはずがない。

キクマサは、じわじわと心の中の焦燥感に気がついた。

ああ、まただ。

またしても、あの人にしてやられた。

敬愛する、カトレア・オーディール先生。

あなたはこれを見せたかったのですね。

世界には美しいものが沢山ある。

あなたはいつも、そう言っていたから。

列車の汽笛の音がする。

あれは、3年前の雨の日のことだった。

そうだ。あの日こそ、自分にとって幸せだった日はない。
人生の色を塗り変えたあの日。

あのアトリエを見つけたあの日。

美しい世界に足を踏み入れた日。

あのころの自分はただ弱くて、滑稽なほどに愚かだったから、今は
思い出すだけでも恥ずかしい。

世界の美しいものを見たこともなくせに、見ようとしなかった
くせに、

勝手に世界は真っ黒だと思い込んでいた。

真っ黒でも何でもなかったのに。

ただ、色の無いつまらない、くだらない時代だっただけなのに。

雨の止まない一日だったと思う。

キクマサは体中傷だらけで、とにかく奴らから逃げていた。

とにかく奴らから逃げていた。

中学生になって、そうそうのことだった。

学校なんてほとんど行かなかった。

不良の中でさえ有名な、手に負えない不良だった。

今となっては、かなり馬鹿げたことだと思っけど、

ちよつとしたことで、本当に地獄を見るような、そんな暗い世界だった。

言えない様な悪事もしてきたし、

他人が傷つくのを見て、嘲笑っていた。

そんな、色の無い時代だった。

こんな抗争よくあることだったけど、とにかく今日はひどいものだ。

雨の音が、やけに耳に付く。

キクマサは街角のビルの、灰色の壁に手を当て、息を整えた。

壁に血が付くけど、すぐに雨に流される。

まるで、自分たちみたいだ。自分たちみたいにあっけなく跡も残ら

ない程意味の無い存在。

足音が聞こえる。

早くここから立ち去らなければ、奴らに見つかる。

血が落ちる。

足がふらつく。

ああ・・・だめだ。目がかすむ。

あちこちで耳障りな争いの声。まだ子供であるくせに、粹がって強がって、くだらない事ばかりやっている。

金属バットを引きずるような、叩き付けるような音。

誰かがキクマサを見つけたようで、何人もが追いかけてくる。キクマサは舌打ちをして、痛む足を引きずって逃げた。

捕まってたまるものか。

あんな奴らに。あんな奴らに。

自分もあんな奴らと何も変わらないくせに。

ビルの隙間をぬって、行く当ても無く逃げた。

ふと、目の前の色が変わる瞬間をキクマサは見抜いた。

暗いビルが立ち並ぶ通りを抜けたら、そこには、不思議なくらいに

場違いなレンガの壁。なぜだかそれにハッとさせられる。
ひび割れたところから、庭が見える。

何とも異様な空気。
でも、不思議と吸い込まれるような。

洋風の庭、静かな霧。呼ばれているような、ぬるい雨。
誘いの風。

ここが、誰かの家で、誰かの庭だなんて考えてなかった。
キクマサはレンガをよじ登る。
その小さな庭に降り立ったとき、無意識に深呼吸した。

レンガの道と、雨にぬれた花々。
道に沿った木々と、不思議な霧。

こんな空気初めてだ。

しんとした、たった数秒の沈黙。
音の無い存在感。

あまりにも不思議な感覚に、キクマサは傷の痛みや、奴らから逃げ
ていたことを忘れていたが、急に目の前がふらついてひざまずいた。

息が荒れている。やっぱり、傷は酷いのか。

その時だった。
空気の流れが変わったように思えたのは、きっと勘違いなんかじゃない。

目の前に誰かが現れた。

「……………誰だい？」

長いスカートに、長い長い銀の髪。

誰だ……………？

意識は途切れた。

暗い闇に、銀の粉がチラチラ降り始めた。
綺麗で胸騒ぎがする。

切ないくらいに美しい。美しくて苦しい。

いつたい自分は何を求めていたのだろうか。

砂を手を取った。

「……………」

息を荒げ、キクマサはソファから飛び起きた。

「おや、起きたのかい。ああ、まだ動いちゃいけないよ、酷い傷なんだから」

「……………」

その人は、髪がすべて真っ白になった老女だったが、とても不思議なムードを持った人で、キクマサはいまいち自分の状況が読めずにバツの悪そうな顔をしていた。

「あんた、私の家の庭で倒れていたんだよ。いつたい何だっそんな傷を負って。血だらけだったんだもの、驚いたよ」

老女はポットで、ティーカップにお茶を入れ、キクマサの前に置い

た。
ふわりと、濃いハーブの香りがする。

キクマサは相変わらず、顔も上げずに黙りこくっていた。

「…私の名前は、カトレア・オーディール」

キクマサはドキツとして顔を上げた。異国の名前だったからだ。初めてしつかりと、そのカトレア・オーディールの顔を見た。やはり外人のはつきりした顔立ちであった。すらつとした体に、長く緩やかな白髪。

カトレアはゆつくりと笑った。

「不良少年達と喧嘩でもしたのかい？ オノダ・キクマサ君」

「……！？ 何で俺の名前……」

キクマサは顔をしかめる。

カトレアはくすくす笑うと、エプロンのポケットから黒い財布を取り出した。

「……！！？」

それは、キクマサの財布だった。カトレアはニヤアと愉快そうに笑うと、財布の中から1つのカードを取り出し読み上げた。

「オノダ・キクマサ……ふーん、この歳でカードをもっているとはけったいな。今は学校の時間じゃないのかい？ ……まあいいか」

カトレアはカードを財布の中に戻して、キクマサのほうへ投げ返し

た。
キクマサはとても複雑な顔でそれを受け取り、そしてまた、その女を見上げた。

ここから出て行きたい。
こんな所に居たくない。

それなのに、体中が痛くてどうしようもない、そんな自分に腹が立つ。

自分はいったい何をしているのだろうか。こんな見ず知らずの外人の所に居たって、何にも得な事は無い。

「私、あなたの名前が好きだねえ。“キクマサ”って、この国でも珍しいだろ」

「……………」

「この国、日本の美しい花だ。菊の花から付いているのなら、なおさら……」

キクマサは、冷めた目でカトレアを見上げた。その視線は今までの会話の中で一番鋭かった。

「あなた、この花がいったい何なのか知ってるのかよ」

「……………」

「…菊の花が美しいもんか」

キクマサは、声を絞り出すように言った。

カトレアは、最初は驚いたように目をぱちぱちとさせたが、その後はなんだか落ち着いた瞳でキクマサを見つめる。

「…どうして？」

「死んだときに、捧げる花だからだ」

キクマサは、もうそれ以上に答えなんて無いんだ、というように断言した。

カトレアは一時、じっとキクマサを見ていたが、視線をそらす。

「…なんだ。あんた死が美しくないとか、言うのかい？」

「……………」

「死は人生の終わり。締めくくり。自分のすべてを白紙にもどす。綺麗じゃないか」

カトレアの物言いに、キクマサは睨む様に彼女を見る。

「死んだら終わり。何もかもだ」

「そうだ。でも死んで、残るものだってある」

カトレアはそう言うと、ぼろぼろのエプロンから何かを取り出した。それはバラバラと音を立て、テーブルの上に色とりどり美しく散らばっては、規則な形で静止した。

ただの絵の具のチューブだったのに。もうほとんど絞り出したようなもので。

「人々に植え付けられた、鮮明で色鮮やかな記憶」

そして彼女は立ち上がった。

「…まるで絵のような」

キクマサは言葉に詰まった。まさかそのように言い返されるとは思っても見なかったから。

自分の状況に翻弄されてあまり意識していなかったが、この部屋はオイルの匂いで満ちている。

しかしまあ、なんと懐かしい匂いがするものだ。

油の古い、その香り。

キクマサは、部屋のその奥を見た。そこには、先ほどのような、絵の具や油、筆などが雑においてある。

後ろ向きに立ちぼうけのイーゼル。

物言わぬキャンバス。

「あんだ、油絵を描くのか…？」

キクマサは不意に尋ねた。

「ああ…よくわかったねえ。あんだみたいなのが油絵だって」

カトリアは少し驚いたように。

キクマサは、なんだかよく解らない焦燥感にせかさね、立ち上がった

た。彼の視線は一直線に、背を向けたキャンバスの方へ向いている。体は痛いのに、わざわざ堪えて引きずって、それでも、その絵を見たいと思ったのだ。

「……………」

それは、F50のサイズ。割と大きなキャンバスである。

青の色を基調として、菊の花が描かれていた。

死してなお、生き続ける花よ。

私をいつか、彼の国へと。そしていつか、この国へと。

それを繰り返し、何度この花を軽蔑したか。

再び、戻れる日まで。

／以下省略

キクマサの頭の中で、何かが途切れた。
まるで、急にテレビが壊れたみたいに。

コンセントを抜いたみたいに。

何だったんだ、今のは。

絵を見て引き込まれたのだ。その世界に。

何とも言えぬ衝撃にクラクラしたキクマサは、その場に座り込んだ。座り込んだまま、それでも目の前の絵から視線を逸らす事が出来なかった。

訳も分からず涙が出た。ただ、目の前の絵を見ただけなのに、押し寄せる感情は嘘をつけない。

これが、感動というだけで終わらせられるものなら苦労はしないのに。

「あんだ…もしかして……」

カトレアは、キクマサに駆け寄ってから、その様子をジッと見た。

そして、その先の言葉に詰まった。

それくらい、彼は泣いていた。

ただ、その絵を見ただけ。それだけで心の中は乱され暴かれたのだ。

そういう絵だったのだ。

今思えば、そう言った“感動”という名の物語を直に見れたことは、この上なく幸せで稀なことだったのかもしれない。

そういう絵と出会えたということ。

キクマサは、“絵”をみるのが初めてではない。
彼の実の母は、昔日本で名の知れた画家であった。

母の絵が、キクマサにとって唯一の“絵”であった。
今までは。

d
r
a
w

02・情熱を知っている

絵を描きたい、描かなければと願っていた自分が居る

自分は情熱を知ってたはずだ

「へえ、あんたあの“カツキ・サキコ”の息子かい？」

キクマサがようやく落ち着いて、自分の話をポツポツと言い出した。カトレアは、有名な画家の息子だと言う彼に驚く。彼女は長い外国の葉巻を吸いながら、そんな彼をまじまじと見ていた。

「それは何とも奇運なことだ。私も一応あちらでは名の知れた画家だったんだよ。それで、あんたは絵を描くのかい？」

「もう…とつくの昔にやめたよ。…見たらわかるだろ、今じゃ喧嘩ばかりの不良だよ」

「そりゃそうだ」

カトレアは大声で笑った。彼女は何だかとても御機嫌で、一方的にキクマサと馴染んでいる。

「それならもう、絵を描く気は無いのかい？」

「……………」

キクマサはハツとして、一瞬目をそらし、

「描くわけないだろ…絵なんて…。母さんは絵にのめり込みすぎて…あの男に捨てられたんだ…。絵って残酷だよな…」

どこかを酷く睨んでいる。過去の向こう側を。

「母さん…自殺したんだよ」

美術は時として、人を惑わす。そういう力を持っている。

カトレアはキクマサ向かって静かに、でも意味深な笑みを浮かべるとテーブル越しに身を乗り出し、キクマサにとって、きつと一生ついてくるであろう質問をした。

「それなら…あなたにとって、美術って何だい…？」

「……は？」

「怖いかい、美術が…」

カトレアの声音はよく響く。痛いくらいに。

キクマサは言葉が出ずに、ただ、その質問への驚きに瞳を揺らしていた。

「…何だって？」

「怖いかいって聞いたんだ。美術は時として残酷。お前の言っていることは正しいよ、キクマサ。私はそれをよく知っているのだから。お前は母を殺した美術が怖いかい？ だから絵をやめたのかい？ お前も父親に捨てられるのがこわかったんだろう？」

カトレアは、まるでわざとキクマサの心の奥を引きずり出そうと、ズバズバ言いたい放題だった。

しかし、キクマサは何だか疲れきったように、少しだけカトレアを睨むと、

「だったら何だって言うんだ。お前に何の関係があんだよ」

声を低めてそう言った。

目の前の彼女は口元に妖しい笑みを浮かべ、「ほお」と満足げにしている。

「あれだけチクチク言ったのに、熱くならないねお前は」

「おあいにく様、俺はもう父親には捨てられたも同然でね。今や一人で他のマンションに住まされているからな。…あいつはさっさと新しい家庭作って、幸せにやってる」

キクマサはいたって冷静だった。

でもその分、落ち着いた声で自分の現状を口に出すと、何だか少しだけ胸が痛かった。

キクマサは次の日もここにいた。何だかこの場所から離れられないのだ。

きつと、懐かしい。懐かしすぎるから。

母と同じ香りが、絵画を描く空間の匂いが、このアトリエには溢れている。

カトレアもキクマサを追い出さなかった。この外国の老女は不思議な人だ。キクマサは今まで、こんな人に会ったことがない。

彼女はよく、自分の庭を散歩してスケッチして回ることが多かったから、キクマサはその間に、この家のアトリエをこっそり見て回った。

白い石膏像が並ぶ部屋。油まみれの古臭い部屋。
ガラス張りの日当たりの良い部屋。

この家の中はどんな場所でも不思議な力を帯びている。

キクマサは油絵の道具が沢山置いてある部屋の、あるキャンバスの前で立ち止まった。それは白い、無のキャンバス。

変な衝動にかられるのを、自分自身良く分かっていた。

久しく絵など描いてないし、長い間描きたいとも思わなかったのに、昔の、絵が好きで好きでたまらなかったころをどうしても思い返してしまうのだ。

母はキクマサに絵を教え、彼が絵を好きになるのを見守ってくれていた。

しかしそれだけでなく、外で自然と触れあったり、様々な生き物を見たり、音楽を聞いたり、そういうことも一緒にしてくれる人だった。

キクマサは絵が好きだ。

本当は今でも。

キクマサにとって、絵とは母だったから。そして、母とは憧れだったから。

だからこそ母が死ぬと、自分の中の絵だって消えてしまう。
絵を描く意味も、理由も目標も無くなったのだ。

「……………」

彼は、ただその白いキャンバスを手でなぞった。
手触り、こすれる音、それは今も昔も変わってなどいない。

そして、その場に転がっている筆を取る。
もう、筆を取る意味などなかったのに。

ただ、がむしゃらに、ただ自分の思うままに、

絵を描く怖さに負けたくなくて、

油の光、色の魔力に翻弄されながら、彼はただ夢中で色を乗せた。
その白いキャンバスに。

神様

美術の神様

どうか、絵を描かせて下さい

カトレアはスケッチから帰ってきて、そのキャンバスを見た瞬間に息をのんだ。手に持つスケッチブックを落としてしまうくらいに、力が抜けていった。
何も描かれてないはずのキャンバスに、見知らぬ色がついている。しかし、それは到底無視出来るようなものではない。

それは言葉より確かな、訴えだったから。

“罪”

僕が再び筆を手にしたことをお許し下さい。

母さん

彼女はその絵から目をそらすことなく、頭に強く響く訴えを直で感じ取り、へなへなと座り込む。

『……何と…』

震える手を握りしめ、ニヤリと笑うと、胸に湧くザワザワとした感覚に鳥肌を立てた。

『素人の絵で、“イマジン・ストーリー”を見ることになるとは…』

それは、歓喜の歌。驚きと裏表の喜び。

ただの色をざんばらにのせただけの、デタラメな絵だ。
なのに。

「…なのに…あなた…本当に絵が好きなんだねえ…」

疲れきって、ソファで眠るキクマサに向かってそうつぶやいた。
技術とか、上手い下手とか、そういうレベルの話ではない。

そうではないのに、他人に訴えかける絵が描けるのだという事。
カトレアは原石を見た。

この、良くも悪くも、強い絵への執着心。

これがどれだけ、この少年の感性と才能への大きな武器となること
か。

キクマサはソファで静かに涙を流した。眠りの中で泣いた。
やはり、自分は絵を忘れてはいなかった。

体が覚えていて、今か今かと待っていたのだ。

ごめん。

ごめんね、母さん。

あなたを殺した絵を、俺は諦められなかった。

あれだけ、落ちるだけ落ちて、色の無い時代を生きてきたというのに。

次の日の朝、カトレアはキクマサに言うことになる。

「…絵を描きな、キクマサ。あんたは絵を描かなきゃだめだ。…ここで絵を教えてあげる」

彼女の視線は、彼を一心に捕えている。

「私があんたに、絵を教えて、そしてその先を示してあげる」

教えてあげる。

世界には、美しいものが沢山あるのだと言っこと。

「…見せてあげる、世界の広さを」

君のような子こそ知らなければいけない。
見極められなければいけない。

この世界の、あらゆる姿を。

後に彼は彼女の手を取り、美術という紙一重の世界に足を踏み入れることになる。

この出会いから約三年間、キクマサは彼女の元で、彼女の弟子として、絵画の技術や美術の精神を叩き込まれる。

時は彼を待っていたのかもしれない。

彼の力が目覚めるのを。

キクマサは16歳になる。

ある日の朝、カトリアは二人で過ごしたテーブルに、一通の手紙を残してアトリエから消えて居なくなった。それは前触れも無く突然の事で、キクマサはと言う気持ちにもなれなかった。

彼はこの空虚な空間で、彼女の手紙を読んだ。

“キクマサへ”

私はもう、次の場所へ行かなくてはいけません。

私の旅は、まだまだ続くのですから。

あなたはこれから知るでしょう。美術の本当の意味を。

あなたにとって、美術とは何なのか。

今なら答えられますか？

私はあなたに、次の舞台を用意します。

もう手続きは済ませているので、心配せずに、世界の広さ、美しさを知りに行きなさい。

カトレア・オーデールより

弟子 キクマサに、私の全てを込めて

次の紙は、ある美術学校への入学手続きであった。

汽車の音がキクマサを現実の世界へと戻す。
キクマサは窓から、その目映いばかりの白と青を。ギリシアの海を
見て、絶句した。

「……エーゲ海って、こんなに青いんだ」

世界って広い。

だからきつと、あらゆる姿の中に、美しいものがあるって信じたい。

世界には、沢山の美しいものがある。

あなたはいつもそう言っていたから。

その本当の意味を知るために、ここまで来たのだから。

d r a w

03：ルネ・ヴィルトン美術学校 上（ルームメイト）

様々な歴史、因縁を掲げた

我が偉大なるルネ・ヴィルトンよ

> i 3 3 4 8 3 — 1 3 6 5 <

キクマサはアテネにいた。

何とか、あの言い様の無い旅を終え、この場所に着いた次第である。

「すごいなあ…これが学校と言えるものなのか……」

都心外れの丘の上に、その学校はあった。広大な敷地であると言うのは、校門の大きさから既に伺える。レンガ造りの小道の向こうに、白い大きな建物が覗く。

とにかくその学校は、学校と言うよりは古い城のようでヨーロッパの情緒を思わせる。

キクマサは初めての空気に胸が躍った。

静かだ。

校門から本館までは遠く、長い広い道が続く。両側はきれいに手入れされた庭で、芝が光に照って美しいグリーンを彩る。そして芝生のさらに向こうは、ずっと森のようであった。緑とレンガの赤と、城の白い色がとても良い調和を作っている。

そして、ふと思う。ここにはやたら噴水が多い。

形は様々、いたるところに噴水があるのだ。常に耳には水の流れる音が聞こえる。

道の途中、今まで見たのよりそれは大きく立派な噴水を目の前にした。

道の分かれる、開けた中央広場のようになっている所に、その噴水はがんとして佇んでいるのだ。

しかし、キクマサが息を飲んだのはその噴水のせいではない。

「……………」

噴水の外に漏れる微かな水しぶきを、ただひたすら見つめる少女がいた。

ブロンドの緩やかに波打った髪が、その景色に見事に映えるのだ。

ポロン…

銀色の高い音が胸の底に落ちた。

ふと、少女はキクマサの方を向いた。キクマサはあまりに凝視していたので、慌てて目をそらしたのだが、彼の動揺は見取れただろう。彼はそのまま通り過ぎる。

二人のすれ違い際に、何かとても不思議な空気が、ふわりと無色のミストを天に放った。

その時の時間の流れは、やけにゆっくりで、印象的であった。

中央棟のガラス張りの玄関の前に、一人の女性が立っていた。キクマサはその女性にペコリと頭を下げる。女性は上品に、にこりと笑う。

「ルネ・ヴィルトンへようこそ。歓迎致しますわ、オノダ・キクマサさん。私は絵画科の教師をしているネイリー・ドールマンです。あなたの担任というわけです」

ネイリー先生はキクマサを招いて、2人で校内へ入った。入ったとたんに、パイプオルガンでも聞こえてきそうなほど、厳かで、神聖な空気。中央ホールと言ったような、最上階まで筒抜けのバロック

調の建築。

キクマサが呆気にとられているのを、ネイリー先生は頷くと、

「今はまだ春休み中だから、新学期まで人は少ないでしょう。新生は、入学式一週間前から、寮に入るのを許されるので、これから次々と寮入りするわね。あなたのルームメイトも今日来るのよ。仲良くなれると良いですね」

見知らぬ土地、見知らぬ世界に戸惑った様子のキクマサに優しく語る。

その後も彼女は、その校内を案内しながら、これから先のことを話してくれた。

「まだ新学期は始まっていないけれど、新生は別として、生徒たちはきつと作品づくりに取りかかっているでしょうね。もうすぐ大きなイベントがありますからね」

「……大きなイベント…ですか？」

「ええ…そうですね」

ネイリー先生はキクマサをチラッと横目で見ると、

「この学校はね、新学期早々大きなコンテストが開かれるのです。そうね…、キクマサさん、あなたも出して見てはいかが？1年生で出す人も少なくはないわ。あなたはあの方が推薦してきたのだから、大きな期待がかかっているのですよ」

さりげなく、でも嫌みに聞こえないような心がけた様子だった。

「あなたは一応、推薦入学という形でこの学校の入学を許されています。明日、少しばかり面接をしますね」

「はい…」

キクマサは、ふむと思ったくらいで、興味はむしろ校内のあちこちの美術品に向いていた。

ふと、その中でもひとときは目を引く大きな絵があった。

キクマサには、その絵が誰のものであるか見ただけで分かったから。

「……カトレアさんの絵……」

それは、柔らかいタッチと優しい色あいの風景画。雰囲気はまさしくカトレアのものである。この学校の庭…あの噴水を描いた絵。違うな…と思う。やはり高見の人物なのである、あの人は。

「……分かるのですね。その通り、これはオーディール夫人の描いた絵画」

「オーディール夫人…？ カトレアさんのことですか？」

「ええ。この学校の旧理事長の奥様でいらっしやいますわ、あの御方は」

キクマサは、これにはやはり驚いた。

しかし、なるほどと納得したのも事実、そうであるからこそそのキクマサの推薦入学なのである。

「ネイリー先生!!」

その時、廊下の向こう側から、先生を呼ぶ声が聞こえた。キクマサとネイリー先生は、同時にその方向を見る。

「まあ……ルネ・ルビー」……ご機嫌いかが？」

「ご機嫌は良いですよ、先生。それよりも、さっき教頭先生がネイリー先生を探していました。…何か急ぎの用事っぽかったけどなあ……」

キクマサは、目の前にやって来た、“ルネ・ルビー”と呼ばれた男を見上げた。

長身で、スタイルの良いかなりの男前で、彼はキクマサに気付くと、愛想良く笑いかけてきた。

「まあ、どうしましょう……。今からオノダさんを寮へ連れていかなければならないというのに。そうですね……ルネ・ルビー、あなたにお任せしてもいいかしら。一応、絵画男子寮の副寮長ですものね」

ネイリー先生はその男子にお願いすると、慌てた様子でチラッとキクマサを見る。

「彼は、絵画科の四年生、レッドリー・ヘッドバーンです。…一応“ルネ・ヴィライアー”の1人でもありますので、分からない事があつたら聞いて下さい。さて、ルネ・ルビー……新入生のオノダ・キクマサさんを、男子寮に連れて行って下さい。先輩らしく、親切に……。まあ……あなたには言うまでもないですけど」

レッドはネイリー先生の顔色を伺うように、ニコリと笑った。

「わかりましたよ、先生。…てか、先生僕について“一応”多すぎますって」

ネイリー先生は眉を上げ、粹に笑うと、クルリと姿勢良く立ち去ってしまった。

この場所には今やキクマサとレッドリー・ヘッドバーンだけで、それ以外は静かな廊下の日の光だけだ。

「…さて……」

レッドリー・ヘッドバーンはキクマサのほうに向き直ると、

「オレはレッドリー・ヘッドバーン…ってさっきも言ったけどね。レッドでいいよ。この絵画科の寮のことなら、知らないことは無いから」

「……よろしくお願いします。オノダ・キクマサです」

キクマサはレッドを探るように見上げ、当たり障りの無いあいさつをした。

彼とは4つ差となるが、とても大人のように見える。

二人は並んで、男子寮まで歩きながらいろいろな話をした。

というより、レッドが上手い具合に話を運んでくれているのだが。

この先輩は、人に好かれやすいだろうかと、キクマサは密かに心で思っていた。

「キクマサ君は日本人かい…?」

「……分かるんですか」

レッドの唐突な質問に、キクマサは多少面食らった。

「うーん……名前の響きから何となくね。俺の友達にも日本人がいるから」

キクマサは隣のレッドを見上げた。

彼は相変わらずだが、視線はやはり大人びていて、片耳についている十字架のピアスが印象的であった。

「ありがとうございます。…先輩」

キクマサは、レッドに導かれるまま部屋の前に着いた。

レッドは顔の前でひらひら手を振って、陽気で爽やかな空気を壊さない。

「いやいや、これも先輩の役目の一つだよ。俺、四階の一番端の部屋だから、わかんない事があつたらいつでも聞きにおいで」

彼の澁刺とした笑顔は、とても清々しい。

キクマサは正面きつて、やっと気づいたことがある。

「……………」

彼の胸には、赤い美しい宝石のついたブローチが。それはとても目を奪われるような。

見ていると、変な魔力に包まれてしまう…。

「おーい、キクマサ君」

レッドの呼び声で、ハッと我に返った。今のはいったい何だったのだろうか。

「大丈夫？」

「あ……………つすいません…」

キクマサは少し頭を叩いた。不思議な感覚はいまだ体に残っているのに。

彼は知る由もなかったのだ。今感じたものへの圧倒的違和感を。美術品の本当の意味も、恐ろしさも。

レッドの胸に付けていた、赤いルビィのブローチ。
この学校の象徴。

歴代の“ルネ・ヴィライアー”の意志を含んでいる、我々の誇りと
因縁の印よ。

キクマサは部屋に入ろうとして、ふと名前の標識に目が止まった。

「……フォルテ・ゴツドバルト……？」

キクマサの名前の下に、もう一つ名前があったのだ。ルーム・メイ
トという事だろうか。

部屋を開けると、温かい空気が溢れてきた。日当たりのよく、簡単
な作りだがとても清々しい部屋だ。白くて窓の大きなせいで、ギリ
シアの青い空がそのまま部屋を飾る絵画になっている。

静かで、窓から差し込む光に乗って、キクマサは何だか胸の奥の温

かい物を感じた。

新しい世界

新しい環境

カトレアのアトリエを見つけた時と、同じ何かを感じる。このワクワクはとても気分の良いもので、それでいて落ち着いている。

キクマサはカバンをベットの脇に置いて、自分の机の表面をそっと撫でた。

その時、扉の外でガタガタと物音がしたので、キクマサはその方を見た。

ガタガタ音はするものの、なかなか開かないのでもしかしたらと思つて、中からキクマサが開ける。

「……あ……」

扉の外には、黄色に近い茶髪の少年が、重そうな荷物を両脇に抱えて立っていた。

額には太いバンダナをしていて、背が高い。

「うわ…ごめん。荷物とかスゴくて、俺。ごめん、ありがとう」

「え、いや……どうぞ」

キクマサは扉を全開にしてあげた。

ズルズル入ってくるその少年を見流しながら、なるほど、彼がルームメイトかと心で頷いた。彼は「やあやあありがとう」とばかり言っている。

彼こそが、フォルテ・ゴツドバルト。

この先、キクマサと共に美術の道を行んでいく、無二の大親友となる男であった。

「そうか……君は日本人なのか。あ、俺はベルギーから来たんだよ」

フォルテという男は、特に臆することなく、キクマサに色々話しかけてくる。

「へえ……ベルギーか……」

キクマサは、『ベルギーってどこだっけ……』とか、実は心の中で思っていたけれど、そんな事とてもじゃないけど言えなかった。

フォルテは、自分のベットのの上に気楽に座り、何だか楽しげにあちこちを見渡している。

「いや、俺まさか、このルネ・ヴィルトンに現役で受かるなんて思っちゃいなかったからさあ。これで“ルネ・ヴィライアー”になれたら最高なのになあ」

「ルネ・ヴィライアー……？」

先ほどからチラホラ聞く言葉であった。ネイリー先生もレッド先輩もごく普通にその言葉を使っていたけれど、キクマサにとっては未知なる言葉でしかない。

「…え？ 知らないのかい？ ルネ・ヴィライアー制度さ。このルネ・ヴィルトンの最大の特徴！」

フォルテはベットから身を乗り出し、キクマサに訴えかけるようにキクマサは慌てて頷く。

フォルテは口をあぐりさせていたから、キクマサは気まずそうに視線を斜め下に向けた。

これを知らないのは、かなり有り得ないだろうな。

「…この学校はね、全5学年で、絵画科だけでも1000人以上はいるんだ。その中の絵画科トップ16人を“ルネ・ヴィライアー”って呼ぶんだよ。要するに特待生だ。“ルネ・ヴィライアー”になると学費が免除されるし、進路の幅も広がるし、何より世界中の研修に行ける。この学校の生徒は皆、この枠を目指しているんだ」

「……へえ」

キクマサは、いまいちピンとこない様子で、他人ごとのような反応であった。フォルテは顎を支えていた腕をズルッと滑らせ、呆れた顔でキクマサを見る。

「本当に何も知らないの??」

「……うん。」

「じ、じゃあ逆に聞くけど、何でこの学校を選んだの？ 大抵はルネ・ヴィライアーを目指してやって来てるのに！！」

フォルテの信じられないというような顔を前に、キクマサはフムと腕を組んで、堂々と無知をさらす。

「…日本で絵を教えてくれた人が、ここの旧理事長の奥さんだったらしくて。まあ俺もさっき知っただけだ…：…いつの間にか入学手続きされてたんだよ」

「まじ？ それってスゴくない？ …：旧夫人ってカトレア・オーデイルだろ??」

「…知ってるんだ」

キクマサは顔を上げた。

「知ってるも何も、このギリシアでは超有名な画家じゃないか。なんか世界中回ってるって聞いてたけど、…：日本でお前に絵教えてたんだな。いいなあ…：」

「……」

確かにあの人は、どれくらい高見にいるのか分からないくらい絵が上手かったし、自分でも画家だって言っていた。

だけど、あのアトリエでは自分とあの人だけで、それ以外はなかったから実感が無かったんだ。

あの人は、やはり世界を舞台に立ち振る舞っていた人。
世界を震撼させた画家であつたと。

「……ま、いいか」

フォルテはコロツと気を直すと、

「話を戻すけどね、とりあえずルネ・ヴィライアーになるのって本当に難しい」

憂いを込めるように、ハアと溜め息をついた。

「もうすぐ、この選抜の“ルネ・ヴィライアー・コンテスト”があるけど。略してルネ・コンね。今年は…何卒だっけな。毎年枠数は去年のヴィライアー卒業者の数で決まるからね…。ほとんど上学年が取っていくしなあ…」

フォルテの話で、キクマサは、さっきネイリー先生が言っていたコンテストの意味を、やっと理解した。

「ルネ・ヴィライアーとは、言わばこの学校の象徴。みんな憧れるんだよ。絵画科のルネ・ヴィライアーは宝石の異名をもらえるんだ。…主な16色を基盤にしてね」

「……宝石の異名…?」

キクマサは待てよと思った。宝石と言えば、思い当たる節がある気がする。

「そう。宝石。…確かルネ・ダイヤモンドって日本人じゃなかったっけな。初の日本画特待生で話題になってたから…」

フォルテは斜め上を向きながら記憶をまさぐっていた。キクマサは探るような口調で、

「…じゃ、ルネ・ルビー…っていうのもその一種？」

「え？…うん。何だ知ってんじゃん」

「知ってるっていうか…、さっき会ったっていうか」

あの長身で、ハンサムだった、レッドリー・ヘッドバーン。確かにルネ・ルビーって呼ばれていた。

そうか、あの人はこの学校の象徴である“ルネ・ヴィライアー”の一人だったのか。

やっと色々なことが繋がりだしたキクマサ。

「へえ！！ 凄いな、会ったんだ！！」

フォルテは、この例の“ルネ・ヴィライアー”というのにとても憧れているようで、反応に熱がこもっている。

キクマサでさえ、確かにこの制度は面白いなと思ったし、何よりそんな、この学校の代表のような人たちの絵を見たら、きっとどんなに凄いのだろうと思う。

“ルネ・ヴィライアー”か…。

高い音を立て、心の奥底に、一つの鍵が落とされた。

見てみたい。

見てみたい。

手が届かないと思いたくもないのに、そのくらいの衝動を絵に求めている自分もいるから。

鍵が落とされた音がした。

d
r
a
w

04：ルネ・ヴィルトン美術学校 下 く美しきものの世界く

落とされた鍵を、そのまま触れずに沈めておくのも、

水から引き上げ、鍵穴を求めるのも自分次第。

キクマサとフォルテは一時談話した後、このルネ・ヴィルトンの校内を見て回る事にした。入学式はまだ5日後だとはいえ、早々に、この広く複雑な学校を覚えてしまわなければ。

絵画科の寮は絵画棟の隣だ。

「ルネ・ヴィルトンは全部で7つの棟に別れているんだ。中央棟と…六つの科だね。…六つの科があることだって今知ったんだろ、お前は。へえーそうなんだー、とか思ってたんだろ、どうせ」

「うん」

キクマサは平然とした顔で、当然のごとく頷いた。

フォルテは「しょうがないな…」とか言いながら、少し嬉しそうに、

「いいかな、キクマサ君。この学校は主に六つの科から成り立っている。その中で選択別に分かれたりするけどね。…例えば…」

フォルテは廊下をキョロキョロと見て回ると、実技室と書かれた表札の前で立ち止まり、それを指差した。

キクマサも、彼の指先に視線を移し、その表札を見た。

それは、実に見事に造られた、金属と木を用いた素晴らしい彫刻であることは一目瞭然であった。

「こういう表札は、確か彫刻科の奴が創ったはずだよ。凝ってるよなあ…」

「…彫刻科…か…」

キクマサはゆっくり頷いた。

なるほど、美術は決して一つではない。絵画だけではないのだ、と納得する。

「他には、ファッションデザイン科とか、映像科とか。珍しいのが建築ガーデン科だな。“庭”を扱うのはうちの学校くらいだよ…。あとは、絵画科と並ぶほど規模の大きいデザイン科だね。デザインも幅が広いからなあ」

フォルテとキクマサは校内を歩きながら。

「それでもやっぱり、ルネ・ヴィルトンって言えばファイン系だけ
ど」

二人は廊下を抜け、絵画科の中央ホールに出た。

広々高々と筒抜けていて、バロック調の造りが廠かで、やはり校内にも噴水があつた。その噴水の中心に立つブロンズ像の女性が、黒く艶かしい光沢を内々に秘めているように謎めかしく、ゾクツとする。

水の、ザアアと流れる音に、キクマサとフォルテは一度立ち止る。

これが、ルネ・ヴィルトンなのだ。

学校とはいえ、空間や空気を全てを材料に美術品を作り出している。

その時、フォルテが急に噴水の向こう側に駆け出した。何かに気がついたように。

「え…、おい!」

キクマサは少し驚いて、彼の後を追った。

「……………」

フォルテは、三枚の絵の前で立っていた。

その絵は真ん中のもを一番高見に、左のものを二番目に、右のものを三番目に掲げ、それは堂々として、とても目を引きつけられた。

「……これ……」

キクマサはその3つの絵を見上げた。

「今年の受験者トップ3の絵だ。……毎年ここに飾られるらしいんだ。……凄いや」

フォルテは三枚の絵に釘付けだった。特に、真ん中の一番高くにある絵に。

「……凄いや、レイ……トップ入学だったんだ」

「……レイ？」

「うん、あの中央の絵。あれはレイデル・リローズっていう子の絵だ。俺、同じ美術学院出身だからわかるんだ……。あいつはいつか、ルネ・ヴィライアーになるよ……」

フォルテの表情からは、何というか、悔しさや後込み以上に、尊敬のまざった喜びに近いものを感じた。

「……」

キクマサは再び絵を見上げる。例の中央の絵を。それは、キクマサが今まで見たことも無いような絵。

一瞬で目に焼き付き、離れない。
何だこれは…。

たくさんの子供が一人の大人の女性を囲み、本を読んでもらっている（ようにみえる）絵。

なんと美しい色、優しいタッチと強いタッチの絶妙なバランス。

なんと焦がれる絵であろうか。

“夢の話―前夜―”

孤児院を出たいかい？

いいえ、ミセス・リローズ。私はもう帰るところはございません。

孤児院を出たいかい？

いいえ、ミセス・リローズ。僕はもうあんな寒い夜を、一人で耐えたくありません。

それなら望みは何なのだい？

(少年と少女は顔を見合わせる。)

ずっとここにいたいのです。

(ミセス・リローズは困ったように笑う。)

それは無理だよ。大人になるのは出ていくということだから。あなたたちが戦争を終わらせなくちゃ。

／以下省略

呆然とした。

頭の中に、鮮明なイメージが叩きつけられたからだ。

イマジン・ストーリーだ。

イマジン・ストーリーとは、美術品から展開する物語のことで、あらゆる種の想像、妄想、そうせざるを得ない魔力である。描き手と鑑賞者の両方に、美術の力を必要とする。

感性だ。

フォルテはその絵を見つめながら、呟いた。

「…凄いよなあ…、相手に訴えかける絵が、もう書けるんだから…」

キクマサはまさにそのとおりだと思う。

技術があるとか、よもやそういう所の評価じゃなくて、いかに相手に語りかけてくる絵なのかという事。ダイレクトに印象強く、はたまた心にじわじわ来るような水の水面のような衝撃でも。

それが、どんなに感動を生むのかという事。

「ほら、レイの絵があるわ」

「ちょっと、待ちなさいよ、ルナシー」

その時、中央噴水越しに、二人の女の子の声がした。
キクマサとフォルテが振り返る。

「…あ、レイだ…」

フォルテは少し後ずさるような態度で顔をしかめたから、キクマサは不思議に思った。

二人の少女が、フォルテとキクマサに気づく。

「……あら、フォルテ・ゴッドバルト。ご機嫌いかが」

黒髪ショートカットで猫目の少女は、フォルテを見つけるやいなや、少し間をあけわざとらしく挨拶をした。

「やあ…、レイデル・リローズ」

フォルテは相変わらずたじろいでいる。
キクマサはフムと思った。

そうか。

この子があの絵を描いた子。

ふと、レイの隣の子が目に入った。

フワフワの金髪で、肌は透けるように白く、まるで西洋人形のような絵本に出てくるお姫様を地で表しているような美しい少女。

「……………あ……………」

見覚えがある。

さっき、外の大きな噴水の前にいた子だ。

金髪の少女はキクマサを見ると、やはりキクマサと同じような反応をして、そのままふわりと微笑んだ。

「レイ、この人たちどなた？」

金髪の少女は、背の高いレイを見上げて尋ねた。

「…ああ、このバンダナの奴は、フォルテ・ゴットバルトっていう幼なじみよ。家が隣なのよ、やんなっちゃう」

「……………」

キクマサはフォルテを見上げた。

フォルテは何か言いたげで、でも何も言えなそうにして、口をつぐ

んでいる。

「それと……、そっちの茶髪の彼は、あんたのルームメイト？へえ、あんたと違ってハンサムね。紹介してよ」

レイはニヤリと笑うと、猫目でキクマサを見上げる。

「オノダ・キクマサだよ。日本人だから、キクマサが名前ね。お前の言うとおり、俺のルームメイトだ」

フォルテはしらじらした顔で、キクマサを紹介した。キクマサは「どおも」と頭を下げる。

「そう、よろしくね。私、レイデル・リローズっていうの。こっちの子はルナシー・ミディエム。私のルームメイトよ」

レイは隣のルナシーを紹介した。

「へえ、君と違って超美人だね」

フォルテは先ほどの事を言い返すように逆手に取った。

レイは右頬をひくつかせたが、フンと鼻で笑うと、

「さ、行きましょう、ルナシー。こんな所で足止め食らってる時間が惜しいわ」

彼女はフォルテを睨み流し、ルナシーを連れそこから立ち去ろうとした。

「あ、待ってレイ」

ルナシーは少しばかり振り返ると、

「ねえ、キクマサ君…私さっきあなたに会ったわ。そうよね」

鈴のような声でキクマサに聞いた。

キクマサは驚いたが、そのまま頷く。

「…ああ、噴水の所でだろ？」

さっきの、あのゆっくりした時間。

何とも印象的な空気は、今でも覚えているから。

君は、美術品のようだった。

ルナシーは、何だか嬉しそうに顔を輝かせ、一度笑うとレイを追って行ってしまった。

金髪が揺れて、空気に光を落としていく。

感嘆の声を、心で呟くしかなかった。

フォルテは口笛を一つ吹いていたし。

「あんな子、実際いるんだな…」

物語から抜け出したような、人離れた不思議な美しさが、あの子にはあった。

あの噴水での出会いは、決して偶然ではなかったと思う。

世界には美しいものが沢山ある。

それは、とらえ方次第で、なんとでも言えるのだから。

この4人の出会いは、彼ら自身にとってとても大きな財産である。
後のキクマサにとって、なくしては有り得ない出会いだっただに違いない。

彼らが踏み入れる世界は、万華鏡のように色鮮やかで、何万何千と見方を変えていく。

妖しく際どい、美術の世界。

歳が近く、絵のレベルも近く、または遠く、それでもそういう人たちの絵を見て、

期待、不安、喜びを心に秘め、

微かな焦燥感を感じ、

今、美しきものの、未知なる世界への扉を開いたのだ。

I
d
r
a
w

05：セレネの祝福 上

月の女神セレネよ

今日の良き日を、我々の未来に繋いでください。

キクマサはベッドから飛び起きた。

昨日はひどく寝つきが悪かったから、何だかいまだに眠いけれど。

長い夢を見ていた。

一年前、この学校へ来た時の夢だ。

向こう側のベットで、フォルテがいびきをかいて寝ている。

「おい、起きろってフォルテ。今日は“新一年生”の入学式だぞ。レッド先輩に言われたじゃないか、今夜の歓迎会の準備は、俺ら“二年生”に任せるって」

キクマサは寝起きの頭のまま、フォルテを揺さぶった。

彼は布団にくるまったまま、小さな声で唸っている。

キクマサは溜め息をついた。

こいつとルームメイトになって一年たっけけど、朝起こすのにはいまだに苦労する。

一年前に、出会ったあの時の事を、俺は夢で見た。
噴水の隙間、合間からのぞく、色鮮やかな記憶。

そう。あれから一年たったのだ。
俺たちは今日から二年生だ。

窓の向こうから、朝日が見える。

一年前から続く、今日も何と、美しい朝。

このような朝が、いつまでも続きますように。

「見てみるよ、キク。新入生がたくさんいるぜ」

「そりゃそうだろ。入学式だからな、去年だってそうだった」

キクマサは、薄黄色と青の、ななめボーダーのネクタイを結びながら、フォルテの背中越しに下界を見た。

寮の部屋の窓からは、ルネ・ヴィルトンの正門あたりがよく見える。

いつもは静かで厳かな学校も、今日は打って変わってにぎやかで華やか。

「俺らもやつと先輩か。いいね、今年はどんなやつらが入ってくるかな」

フォルテはバンダナをつける前に、ワックスを手のひらで伸ばし、髪を立てたり飛ばしたりしていた。キクマサも当然、こういった作業は髪を洗う並に必要な事項である。

「あらー、やっぱダメか。ねえ、キク。お前の貸してくれよ。日本製の味を知ってしまったら、その他なんてただのでんぷんだよね、でんぷん」

「…でんぷんねえ」

キクマサはベット越しに、ポイと投げた。

「ところでキク。今年のルネ・コン、一次審査用の絵どう？ 良い感じ？」

「…どうかな、あと二週間あるし何とかなるんじゃない。去年よりましだよ」

「去年なあ…、あの時は無知だったよ。よもや入学して、たったの二週間で、一次通過できる絵が描けると思ってたこと事態が間違っていた。道理で歴代ルネ・ヴィライアーに一年生がいなかったわけだよ」

去年のことを、フォルテはしらじらと思い出していた。確かにあの時は、本当に無知だったと思う。

上の学年は、もうずっと前からルネ・コン一次審査用の絵を用意していたのだから、一年生が入学して、たったの二週間でどうにかなるようなものでもない。

一次審査では、約三分の二が切り捨てられる。

たとえ一次で残っても、二次ではより強い先輩と競うのだから、なかなか生き残れない。

ルネ・コンは全部で四次までである。最後までとてつもない根気と集中力を要する。

ルネ・ヴィライアーになれるのは、本当に選ばれた人だけだ。去年はそれがよくわかった。

「まあ、今年は二年生だけの推薦ヴィライアー枠も2つあるし。これ狙いしかねーだろ、実際」

「…推薦ヴィライアー枠？ 何それ」

キクマサは、一年たった今でも、分かっていることがたくさんあった。

フォルテはもう慣れたというように、平然と説明する。

「基本的に、ルネ・ヴィライアーになれるのは16人だけど、+2人分、推薦ヴィライアー枠ってのがある。なかなかチャンスの巡ってこない二年生の中で2人、一年契約のルネ・ヴィライアー見習いさ。これは一次の通過作品の中から選ばれる。だから二年生はとにかく、一次に命をかける。推薦ヴィライアーになれば、次の年でのルネ・コンは、そのままストレートで正規ルネ・ヴィライアーになれるのがほとんどだよ」

「…へえ……いいね、それ」

キクマサは、今始めて知った、なかなかおいしいシステムに感動した。

でも、冷静に考えてみて、二年生だけでも200人はいいるから、その中で2人っていうのも、なかなかの確立である。

「2年生で普通にルネ・ヴィライアーになった人っているの？」

「そりゃあ、稀にはいるさ。四年生にルネ・ガーネットがいるだろ、リオ先輩。あの人確か二年生でなつてたはずだよ。5年に1人って言われてんだぞ、二年生がルネ・ヴィライアーになれる確率は」

いったい5年間に何人、ルネ・ヴィライアーが入れ替わったの一人なのか、あまり知りたくないなと思った。

シビアな世界だ。

一年生の入学式があっている間、二年生は男子寮の広間で、歓迎会の用意をしていた。

さすがは天下のルネ・ヴィルトン。

豪華なご馳走も目を輝かせるばかりにあるし、装飾だって妙にこだわっている。

キクマサはテーブルの向こう側で、ルネ・ルビーことレッドリー・ヘッドバーンが行き来しているのが見えた。

「さすがは今年の男子寮長。忙しそうだね、レッド先輩」

隣でフォルテが顔をのぞかせる。

その通り。去年四年生だったレッドは、今年五年生となり、しかも絵画科男子寮長となったのだ。

人望のある人は、肩書きも多いこと。

忙しそうではあったものの、彼は相変わらずにこやかで、周りにはたくさんの方がいて、

キクマサにとって、去年から憧れのまなざしは変わりようも無い。

新入生とは初々しいものだ。

去年の自分たちって、こんなだったのだろうか。絵画科の男子寮の寮入りは、やはり大いに男子寮であった。

「えー、新入生の諸君。入学おめでとう。俺は、絵画の男子寮長のレッドリー・ヘッドバーンです」

レッド先輩のあいさつに、周りの男子は無意味に歓声を上げている。

「こら、男うるさい。…えーっと、何言おうとしたんだっけ…、まあ、堅苦しい挨拶は抜きにして、それじゃあ始めー…っと、っと、っと」

レッド先輩が、うるさい男子をなだめながら、緩い挨拶を終えようとしたその時だった。

横から、黒髪で切れ長の瞳の、なんだか怖そうな五年生が、レッド先輩のスピーカーをもぎ取った。

胸には、黒い宝石。

「かりるぞ、レッド」

「ーっだ、団長!!? ま、まあいいや。…はい! 皆さん、静粛に。絵画科ルネ・ヴィライアーの“団長”から挨拶です。団長は短気で怖いから、言うことは聞いたほうがいいと、俺は思うね」
スピーカーの無いレッドは、できるだけ大きな声で言った。

キクマサでさえ、あの黒髪の男は知っている。

絵画科じゃ、レッド先輩並みに有名人だ。

「うおー、リュオン先輩だ。やっぱルネ・ヴィライアーの団長ともなると、オーラがすごいね」

フォルテはオーバーにのけぞって、キクマサに向かってつぶやいた。
いや、でもそうとしか言いようが無い。

彼は、黒のテクタイト。

絵画科ルネ・ヴィライアーを統べる、団長なのだから。

鋭い瞳は、会場を見渡した。

「俺は、絵画科ルネ・ヴィライアー団長のハク・リュオンだ。基本

的に、俺が今から言うことは絶対に守れ。最低限のルールだからな。守れなかった奴は、即、パルテノン神殿からバンジージャンプさせるからな」

その言葉に、会場中が、ざわざわしている。

これは嘘じゃないぞと、高学年ほど知っていた。

一年生は脅えている。

「一つ、規則は守れ。二つ、校内及び校外で問題を起こすな。三つ、他科ともめたら死んでも負けるな。以上」

リュオンは「ん」とスピーカーをレッドにおしつける。

レッドは小刻みに頷いて、苦笑いでそれを持つ。

「…はい。団長の言うことはちゃんと聞いてね。じゃないと団長が先生に、俺が先生と団長に怒られるから。まあ寮の細かい規則はパンフレットに書いてあるし、後で説明もするから、とにかく歓迎会を始めようか」

いつもは厳かな広間が、今日はいつになく騒がしかった。男子って何でこう、バカにド派手な演出が好きなのだろうか。コークやシャンパンを新入生に振りまいている。

皆が通る道なのだろうけど、（去年されたけど）ちょっとしたイビリだよな、とキクマサはしみじみ思っていた。全5学年だから、歳の差もかなりあるし、五年生から見たら一年生なんてかわいいもんなんだろうな。

二年生は、去年のうっぷんを晴らすがごとく、飲み食いに一生懸命だった。

「おい、二年生!! ちよっと蔵からシャンパン持ってこい!! いくらあっても足りねーから!!!」

4年生のとある先輩が向こうから叫んでいた。キクマサとフォルテは顔を見合わせると、

「俺らもまだまだ下っ端だな。取りに行こうか」

口をもごもごさせながら、フォルテは言う。

「……そうだなあ」

キクマサも“ノンアルコール”のシャンパンを飲み干した。

蔵は、会場から、少しだけ離れたところにあった。ほごりっぽくて、ひんやりしたところだ。

「それにしても、リュオン先輩は恐ーよな。見た目もだけど、雰囲気も」

フォルテはシャンパンのビンが入った箱を持ち上げようとして、重かったのか2、3本抜いてから、もう一度持ち上げた。

キクマサは目を光らせ、2、3本のビンを彼の箱に再び入れ直す。

「……おい」

「ま、あれだな。恐いけどオーラは確かにあるだろ。圧倒されるもんな……レッド先輩とは真逆だけど。陰と陽って感じで」

キクマサはしらっと話を流して、自らも一箱シャンパンをもちあげる。

その時だった。

バタバタとした足音と、悲鳴が聞こえて、2人は驚いた。

「助けてー！ー！ー！」

甲高い少年の声。

ヒィヒィ言っつて、泣きながら逃げている新生が、蔵に駆け込んできてキクマサとフォルテの後ろに隠れてしまった。

「待て待てー！ー！ー！」

向こうで三、四年生くらいの男子生徒が、テンションMAXhigh

h で新入生を追いかけている。彼らは頬を輝かせながら、こちらに気づかず通り過ぎていった。

「……」

三人は多少の沈黙を守っていたが、フォルテがピンときたように、

「あ、そっか。…儀式だ」

「儀式…？」

「ほら、去年されたじゃん。この寮の伝統行事。新入生は先輩に追いかけて、捕まったら、めちやくちや高く胴上げされる。お前、超平気そうだったけどな。オレは恐かったよ、やつぱ」

キクマサは一年前の今日を思い出して、苦笑いをした。

「ああ……あれか」

後ろでガタガタしていた、その一年生は、頭を抱えていまだにしゃがみ込んでいる。

「おい、大丈夫か？ もう先輩たちは行ってしまったぞ」

「あ…、ありがとうございます」

少年はスクツと立ち上がると、かぶっていた黒のベレー帽を取って、ぶかぶかと何度もお礼を言った。

銀の細かい、フワフワした髪をしている。

「俺、ヘルクロウ・ラヴィーニって言います。お世話になります」

その少年は、相変わらず丁寧に挨拶をした。しかし、その名前を聞いた瞬間、フォルテはとても驚いたように、

「ええ!!! ラ、ラヴィーニって、あのイタリア名家の!!!?」

ヘルクロウ・ラヴィーニは「えっ」と気まずそうに顔を背けると、

「まあ…自分の家なんですからけど…、そうですね一応」

フワフワの髪を掻きながら、呟くように言った。

「名家なの?」

キクマサは相変わらずのテンポだが、フォルテはかなり興奮気味に、熱弁する。

「そりゃ!!! だってラヴィーニ家っていったら、イタリアフィレンツェの名門中の名門だよ。芸術に事關しては当然!!!」

「……………」

なるほど、その少年は、多少決まりの悪そうな顔をしていたものの、やはりどこことなく高貴な雰囲気があった。

芸術の縁がいくつもいくつも絡み合う、名門ラヴィーニ。

我々を巡り合わせた月の周期。

I
d
r
a
w

06：セレネの祝福 下

月の光

それは神様が産んだ美術品

それは、魔力を秘めた美術品

「もう大丈夫だよ、ヘル。儀式はとっくに終わったみたいだ」

フォルテは、キクマサの後ろに隠れている、ヘルクローウ・ラヴィーニを呼んだ。

「ほ、本当ですか？ 大丈夫かな…」

ヘルは多少ビクつきながら、小動物のように顔を出して、あたりを

見渡した。

会場では騒ぎ立てている先輩たちと、儀式によりぐったりした一年生だけが、過激な温度差の中に存在している。

『…地獄絵……』

キクマサは持つてきたシャンペンの箱を目の前のテーブルに置くと、周りの様子を見て素直にそう思った。

「一年生の歓迎会なのに……現実って厳しいね」

フォルテは何とも言えない表情で、ため息をついた。

歓迎の時間は刻々と過ぎていき、夜も更けてきたようだった。

「さあ、みんな。明日からは新学期だ。休みボケは今日で抜けたと信じているから、気を引き締めて臨むんだぞ。二週間後にはルネ・コンだつて始まる。いくらにはしゃぎすぎて疲れたからって、さぼる余裕はないんだからな。はい、お開き！！ 散れ散れ！！」

レッド先輩の締め言葉で、会場の人々はリズムカルに散り始めた。新生はげっそりと、高学年はガヤガヤと会場を後にする。

あんなに騒がしかった広間は、こうしていとも簡単に静かになってしまつのだ。

ただ、あらゆる散らかり様だけを残して。

「何で二年生が片付けかな。準備もそうだったけど、ある意味で一番キツイ学年かもね。あーもー眠いんだけど」

フォルテはぶちぶち文句を言いながら、何か必要に、しつこい汚れ

を見つけては、生真面目に磨いている。
なんだかんだ言っつて、やっぱりフォルテはA型だな。

「俺、ゴミ捨ててくる」

キクマサがそういうと、フォルテは熱心に床を拭く手を止めることも無く、「ん」とだけ言った。

ゴミ捨て場は寮の外にあった。キクマサはゴミ袋をせっせと持ってきては、投げ入れた。

背中に感じる、ルネ・ヴィルトンの森のざわめき。

今夜は、それがやけに響いてくる。

キクマサは振り返って、その木々のさわさわ動く様子やモノトーンを見渡した。

夜の空は、月明かりでとても明るく、雲の形がくつきり見える。

幻想的な空だ。

「……………」

キクマサはとても不思議な感覚におそわれた。
絵を描くようになって、周りの物事や流動、すべてに目を向けるよ
うになってやっとわかった、この感覚。

色の無い世界にいたときは気づかなかった、この世界の美しさ。脆
さ、儚さ。

風は、世界を行き来する。

大地のにおい、季節の香りを乗せていく。

あの、運命を変えた出会いから4年たった。

カトレア・オーデイル師匠。

俺は、変わったのでしょうか。

世界の美しさに気づけるようになったのでしょうか。

今夜は白い満月だ。

「……………あれ？ キク…？」

その時、風に乗って、きらきらした鈴のような声がした。横に目を
向けると、少し先で、ルナシーがゴミ袋を引きづりながらやって来
ていた。

「……ルナ」

キクマサは彼女に駆け寄ると、重そうなゴミ袋を持っていった。
「た。」

「女子も、もう終わったの?」

「ええ……そうよ。みんな楽しくやっていたわ。男子は凄いでしょ
うね」

「……うん、まあね」

キクマサとルナシーは、入学当初からの友人だ。ルナシーのルーム
メイトであるレイは、フォルテと幼なじみである繋がりから、4人
は程なくして仲良くなった。

彼女のブロンドの髪は、ウェーブの波を作っては月の光を浴びて実
に見事に美しい。

「ねえ、見て、キク」

ルナシーは急に立ち止まった。森の少し向こうを見ている。
2人が廊下をあるいているときだった。

「あのような所にも、噴水ってあるのね」

彼女が指差す方向を見ると、学校裏だというのに、確かに噴水
があった。

2人は顔を見合わせ、そそくさとそちらに足を向ける。

それは、ブロンズで造られた古い噴水だった。
中央にある噴水ほどの大きさ、派手さはないが、忘れられた産物と
いう雰囲気は何とも言えない。

今日の強い月の光に照らされて、何かの象徴的な姿が、目から離れ
ないのだ。

「…凄いわ…。この学校って、いったいいくつの噴水を持っている
のかしら…。それも全部…何て……」

何て、吸い込まれそう。

まるで、魔力みたいに不思議を取り巻いて。

キクマサは、彼女の言わんとしていることが分かっていた。

確かに、この学校には噴水が多いのだ。絵画科内でもこうやって、
いまだに知らない噴水があるのだから、他科まで行くといくつにな
るやら。

月の光の演出。

キクマサは急に、一年前のことがフラッシュバックされた。初めて
この学校に来た時、初めて君に会った時の事。

「…ねえ、ルナ。君は去年も噴水の前にいたよね。俺たちは、初め
てそこで出会ったんだ」

きらきらと、水しぶきを浴びながら。

あの時俺は、もっとも美しい絵を見ているような気分だった。

「覚えているわ。中央の大噴水の前でしょう？」

ルナシーはキクマサを見上げると、ニコリと笑う。

「私、この学校に来て、あの噴水を始めてみたとき凄いなって思ったわ。…感動して、ずっと見ていたかったの。…時間が止まった気がした……」

美しい物の魔力は計り知れない。

我々は知り得ない。

ザアアと、風が、木々の枝葉を巡る。

ルナシーの髪も、その方向へと流れて、空へと向かう。

月へと。

「でもね、キクが来てハツと気づいたのよ。だからよく覚えてるの、あの時の空気は印象的だったから」

空間、色彩、時間をすべて飲み込んで、美しい物は極みへと昇る。あの時の空気は、普通ではなかった。

「…そうだな。確かに印象的だったよ…」

キクマサは目を細めた。
あれは何だったのだろうか。

君と俺を巻き込んで、あの瞬間、美しき姿は確かにそこにあったのだから。

一年生のヘルククロウ・ラヴィーニは、早々に自分の部屋に戻って、そのまま寝てしまいたいと思っていた。
彼にとっては、とても心臓に悪い歓迎会であったので、疲れきってしまっていたのだ。

部屋に入るやいなや、ソファーに深く座り込み、黒いベレー帽をすべるように取った。

その時だった。

「よお」

二段ベットの上から、ひょこつと赤毛の少年が顔をのぞかせ、ソフ

アーの上のヘルを見下ろしていた。

ヘルは同室の人がいたのをすっかり忘れていたのか、驚きで口をあんぐりさせている。

「俺、同室のクレハ・ドルフォード。よろしく」

クレハは、屈託のない笑顔で挨拶をしてきた。

ヘルはクレハを探るように見上げ、おずおずと、

「俺は…ヘルクロウ・ラヴィーニ…」

クレハは目を見開いた。口をまん丸くして。ヘルは、またしても名門攻撃か、と息を飲んで構えていたが、

「…………ラヴィーニ…？ お前変な名前してんのな」

「……………」

はて、彼はラヴィーニ家を知らないのか、知っているからこそなのか、真意のほどは理解できなかった。

「ヘルでいいよな、なっ！！」

「え…う、うん」

ヘルは、クレハの勢いに押され、小刻みにうなづく。

クレハの笑顔は混ざり気無く無邪気で、ヘルにとっては非常に新鮮であった。

ラヴィーニ家という鎖が、彼にはコンプレックスであるから。

「おい、ヘル。お前もシャワー浴びてこいよ。俺もう入ったから」

「……そうだな、そうしょっか……」

よく見たら、クレハの赤毛が濡れていた。ヘルは、忘れかけていた疲れをやっと思いついたように、ズルズルとシャワー室へ向かった。

ルームメイトがああいうやつで、良かったなと思った。

今までは、自分⇨ラヴィーニ家として見る奴ばかりで、あのように、1対1で接してくれる人なんていなかったから。

ヘルはシャワーを浴び終え、タオルで雑に、そのままふわふわの銀の髪をふいていた。

「……………」

体が温かくなって、何だか眠たい。

シャワー室を出て、やはりまず二段ベッドの上のクレハを見上げた。

彼はヘルが上がったのに気づくと、パツと表情を変えて、

「おっ、やっと上がったな。」

奴はなんと、二段ベットの上から、「とう!!」と飛び降り、

「10・00!!」

スタツと着地した。かなり見事だ。

ヘルには考えられなかった行動だが、そのありえなさが、やはり彼には魅力で、瞳を輝かせた。

「す、すげえええ!!!!」

パチパチ手を打って感心する。クレハはたいそう自慢げに腰に手を当て、気取っている。

「俺、ドイツの森の中で育ったからな。典型的な野生児だから」

自分で言うのも何だかなと思ったが、やはりヘルにとって、正反対の香りに興味を持たずにはいらなかった。

クレハには、温室育ちの自分には無い、何だか強いものを感じる。

二人の部屋の窓からは、まっすぐに、今夜の満月が見えていた。

美術は魔力を秘めている。

月だって。

クレハはちょうどその時見てしまった。目を逸らすことができなかつた。

今夜の満月を。

ガチャン

「!!!!!!」

ヘルとクレハの背後の花瓶が、何の前ぶれもなく急に割れたのだ。砕けた花瓶は、机の上から床に落ち、水が線を描く。

「な、ななな何で…?!?!?」

ヘルは明らかに動揺していた。クレハは顔をしかめ、花瓶の破片と、水がゆつくりこちらへ流れてくる様子をじっと見ている。

目の前の惨状は、意識よりも遅くにやってくるから。

しかし急にクレハは、複雑そうだった顔をくるつと変え、驚いたように、

「あれ!!!? 何で急に花瓶が割れちゃったんだろ!!! 恐!!!」

彼らしさを装い、焦る心を抑えていた。

落ち着け。

たかが月を見たくらいで。

「なあヘル！！ 俺このガラスとか片づけとくからさあ、モップと箒を 借りてきてよ」

「えっっ！！ わ、わかった……」

ヘルは大慌てで、バタバタと部屋の外に出ていった。
足音が遠のいていく。

「……………」

クレハは開けっ放しのドアを、ゆっくり閉め、そのまま背をつけた。
額に手を当て、崩れるようにしゃがみ込む。

「……………ダメだ……こんなじゃ……………」

額の手が震えて仕方がない。
唇をきつくかみ、心の中でせめぎたてる何かを、必死で抑えつけていた。

「……………隠して……いかなきゃ……………」

誰にも知られてはいけない。
見られてもいけない。

花瓶の水が、クレハのもとまで伝っては、月の光を導いていた。

その水を見て、花瓶の残骸を見て、そして、自分の手を見つめる。
一時その手を見ては、何かをずっと思いめぐらせていた。

月は、美しさの中に、秘密めいた力を宿している。
時には祝福を、時には残酷さをもたらすから。

クレハには、誰にも言えない秘密がある。後にそれがこの物語に、
どんな色を添えるのかは、本人すらも知り得ない。

白い孤独の月夜。

それはいったい何を暗示しているのか。

d
r
a
w

07：ルネ・ヴィライアー・コンテスト1～遠い人～

絵を描く楽しさを忘れそうになる事だっである

だからこそ

思い出した時、きっとそれ以上に絵を愛していける

絵画棟の中央ホール、室内噴水の前で、小柄だが表情の凜とした女子学生が、腕を組んで立っていた。

今年の入学生の、優秀者3名の絵を見上げながら。

流れるようなバロックの空気の中、1人の男子学生が、彼女に気付く。

「……シャルロ……」

彼は淡い髪と、淡々とした表情を持つ青年であった。
シャルロと呼ばれた女子学生は、深い色の巻き毛を揺らして振り返った。

「……スノー」

「何してるの？ そんな所で……」

スノーと呼ばれた青年は、シャルロの隣に並んで、彼女の見上げていたものを知る。

シャルロは、背の高い彼を横目で見上げ、

「ねえ見て。今年の優秀者よ……素敵よね……」

意味深に、赤めのルージユが弧を描く。

「……懐かしいな」

「へえ、あんたでも覚えてるのね。四年前は、一番上にあんたが、次に私が、三番目にフレイのが掲げられていたものね」

シャルロの言葉に、スノーは彼女を見下ろした。

スノーフリーク・ロズベルト（4年生）、現ルネ・オパール。

シャルロ・グレディア（4年生）、現ルネ・アンバー。

共に現役ルネ・ヴィライアーであり、“激動の学年”と呼ばれた四年生の中でも特に、天才と言われた二人である。

「私、あの時あなたの絵を見て、凄く衝撃を受けたもの。初めてだったわ、私が絵であんなに動揺したの」

「…僕もそうだよ…。だって君の絵、普通じゃなかったから」

「…どういう意味よ」

シャルロは苦笑いで、淡々と述べる彼を見上げた。しかしスノーは相変わらずマイペースで、

「普通じゃなかったよ。僕にとってはね」

確かに、貴重に、微笑んだ。

シャルロは鼻で笑った。

5年生から、ルネ・ヴィライアーになるうと思う人は、思いの外に少ないけれど、全くいないわけではない。

4年生は今年が勝負だと思ってるだろうし。

3年生からルネ・ヴィライアーになる人は歴代でも多く、2年生はもっぱら推薦枠狙いである。

1年生は何事も経験という感じだ。

「わかるかね、キクマサ君。2年生には一次こそが大切なのだよ」

「わかってるよ、黙れよフォルテ。気が散るだろ」

キクマサは一次の絵の期限に間に合うかどうかという点で、せっぱ詰まっていた。取りかかりは、フォルテ、レイ、ルナシーと共に早かったというのに、終わりは皆一緒というわけにはいかないのだから。

一次の締め切りまで、あと3日。

終わらないというよりは何か足りない気がして、それを気にしながら描き続けるのが、心に変な色の沈殿物を落とし続けるのだ。

フォルテの絵も、ルナシーの絵も悪くないし、レイのにいたっては脱帽だ。技術も表現力も構成も、やはり2年生の中ではトップだと思う。

一年もたっていたら、誰かが彼女を抜いてもおかしくはないのに、彼女は、あの一番上の、高みに掲げられた絵のまま。さらにその上へ。誰にも王座を譲ってはいない。

キクマサは、誰かに勝ちたいなんて思ったことはないけど、誰よりも良い絵を描きたいと思ったことは何度もあるのだ。

フォルテは、実技室の端にある小さな台所で、お湯を沸かしていた。ここは寮のすぐ隣の、自由に使える実技室だ。

キクマサたち4人は、一年生の時からずっとこの444号室を使っている。

フォルテはインスタントコーヒーを作っていた。

「キクはブラック？ シュガー？ ミルク？ ちなみに俺はシュガ

「&ミルクで」

「ちなみに俺はそれと同じで」

キクマサは、彼の言い回しを利用して早口で言った。こんな時に苦いコーヒーは飲めない。

その時だった。ドアの開く音と共に、四月の涼やかな風が流れ込む。フォルテとキクマサは、ドアの方に目をやる。

「やあ諸君。はかどってるかい？」

モデルのようにスラッと背が高く、男前な五年生が、愛想の良い笑顔で現れた。

この男子寮を統べる、レッドリー・ヘッドバーン寮長であった。

「あ、レ、レッド先輩……！」

二人は立ち上がると、軽くおじぎをした。一年間男子寮にいるし、キクマサにいたっては、ルネ・ヴィルトンで最初に出会った先輩だ。面識くらいはある。

それでも今はまだ、彼らにとってこの人は、遠い雲の上のような人だった。

レッドリー・ヘッドバーンは“ルネ・ルビー”でもある。

彼の胸には、その象徴である、ルビーの埋め込まれたペンダントが淡くきらめいている。

「な、何か用でしょうか」

フォルテはたじろきながら、コーヒーを他のマグカップに入れ、レットに手渡した。

彼は

「どうも」と、嬉しそうにとると、

「うん。ねえ、確かキクマサ君は日本人だったね」

「…はい。そうですけど…」

キクマサは不意に“日本人”という、懐かしい単語を言われ、多少面食らった。

「俺ね、知人に君の話をしたんだ。その人も日本人なんだけど。そしたらキクマサ君連れてこいってさ。ねえ、今時間ある？」

「……………えっ」

キクマサは言葉に詰まった。時間は、どうしたって無い。フォルテは空気を読んで、

「あ、レット先輩。こいつ、ルネ・コンの一次に出す絵、まだ出来てないんですよ。俺はもうこれでも良いんじゃないかと思ってるんですけど。どうも本人から見たら、何か足りないらしくて」

レットは目を丸くして、「へえ」と顎をなでると、ズンズンキクマサのキャンバスの前にやって来た。

キクマサは緊張した。先輩に絵を見られるなんて、嫌な汗以外何も出てこない。

「へっえー、なかなか良いじゃん。構成も良いし、青の色なんて凄く綺麗だよ。でもまあ、本人が何か足りないって言うんなら、何か足りないんだろうけど」

レッドの言葉に、心半ばキクマサは頷く。

「…はい。俺にも、何が足りないのかわからないんです」

何かが足りないという事だけが分かる。それがこの絵にとって、一番大切であることも。

レッドはにっこり笑うと、

「やっぱり君は、あの人に会いに行くべきだ。こういう時は、少し違うものを見るといいよ」

さあさあと、手でキクマサの背を押し、慌てふためくキクマサを実技室から出した。

フォルテが中から、何ともいえない顔で、彼に手を振っていた。

キクマサが連れてこられたのは、彼らの実技室から少し離れた、五年生用の実技室の並ぶ階であった。

更にその奥には、噂でしか聞いたことのない伝説のルネ・ヴィライアー専用のアトリエがあった。

「5年生のルネ・ヴィライアーはね、一人一部屋アトリエが貰えるんだ。リッチでしょ…」

「…凄いですね」

キクマサは呆気に取られた。みんながこぞってルネ・ヴィライアーになりたがる理由がよく分かる。

レッドは、自らの“ルネ・ルビー”と表示された部屋ではなく、その隣の、“ルネ・ダイヤモンド”と記されている部屋をノックも無しに開けた。

「入るよ、ナギさん」

キクマサは驚いてレッドを見上げた。キクマサだって新入生じゃない。今のルネ・ヴィライアーの名前くらい知っている。彼らは有名な人だから。

ルネ・ダイヤモンドの事だって、勿論知っている。

日本画専攻の日本人。サイオンジ・ナギ先輩だ。

でも、彼女は女性だ。こつも気安く部屋に入るほど、この2人は親しいのだろうか。

何より驚いたのは、その部屋の在りようだった。キクマサはバツと

レッドの方を向いて、青ざめる。

「勝手に入っちゃっていいんですか!？」

「…え? うん。いつものことだし」

「“ここ”は部屋ですか!？」

「え? うん。すごい物置みたいだけどね」

レッドの言葉は適切だった。入った側から、道はどこだと言った感じで、落ち着く場所もないし、部屋の大きさもわからない。

「おい、ナギさん、どこだい」

レッドは“それら”を慣れたように分け入って、彼女を呼ぶ。キクマサは顔をしかめながらも、レッドの後ろについていった。

カトリアさんのアトリエですら、これほどひどくはないけれど。一応中央にはスペースがあつて、レッドはそこで周りをキョロキョロしていた。

「あつれ〜、おかしいな。さっきまでここにいたのに」

彼は、頭の後ろに手を回し、眉根を寄せる。

キクマサは、その部屋を見回した。

油の香りはないけれど、所々に点々とある顔彩の器が、音も無くそこに静止している。

油画とはまた別の、緊張感のある空間だ。

そんな風に、キクマサが視線を移しているとき、ふと、奥の大きなパネルに気がついた。

「……………」

吸い込まれる。

吸い込まれるかと思った。
もはやそれは、自分の知っている絵画ではなかった。

油とは違う色、光、深み、あらゆる空間性。

細かく複雑な味付け。

それは見事に美しい赤と白の花。
日本画でしかあり得ない透明感。

“紅白”

私たちは共に“あの人”の病状を告知されました。

その時私はあなたを見ることができなかったのです。

それでもあなたは“あの人”の前ではいつも笑顔で

いつものように白い花を手渡しました。

あなたには紅が

“あの人”には白がとても似合う

／以下省略

キクマサは息を飲んで、それでも動けずにいた。

不意に訪れた衝撃に、それでも守られた静寂の時間に、彼の心は乱された。

120

イマジン・ストーリーだ。

ルネ・ヴィライアーとは、こつも次元の違うものなのか。

そう思わざるをえないような質の高さ。

さざ波のように静かなのに、
じんじん染み込んで、
なんて、

なんて遠い。

d
r
a
w

08：ルネ・ヴィライアー・コンテスト〜ルビー&ダイヤモンド〜

一生で一番の奇跡は、俺が再び絵に出会えたこと

その情熱を、もう一度思い出さなければ

「どうかした？ キクマサ君」

レッドの呼びかけに、キクマサは我に返った。

あの一瞬は、とても長く感じられた。

「い、いえ…何でも…」

何でもないわけではないが、今はこうとしか言えなかった。レッドは何て事無く、「そうかい」と答えた。

その時だった。

ドアを開ける音と共に、一人の女子学生が姿を現した。

彼女はとても優雅な身のこなしの、上品で美しい日本人女性だった。

長い黒髪に、淡く赤い唇。

遠くから見たことは何度かあるし、噂でも聞いたこともあったから、美人だとは知っていたけれど、実物は圧倒される。

キクマサにとっては、同じ国の人なのだから、受け入れやすい美しさなのに、実際に日本で、ここまで和風美人をお目にかかったことはない。

「やあ、ナギさん。どこへ行っていたんだい」

「花瓶の水をくんでただけよ」

ナギは顔を上げ、手に持つ細長いピンをレッドに見せた。

「さつき廊下で、メルベリーに会ったわ。何か、今団長たちとエリゼ先生で、会議してみたい。どうやら次はエジプトのようね」

「次って…ヴィライアーの研修かい？」

「そうよ。今年のメンバーが決まり次第、エジプト研修よ」

ナギは、ごまごました道を分け入りながら、中央のテーブルに花瓶を置く。

その時やっと、キクマサの存在に気がついた。

彼女はキクマサを見て、一瞬驚いていたが、再び彼をじっと食い入るように見て、一人勝手にうなずいた。

「なるほど、君が例の日本人か」

微笑みながら言うから、こちらにとっては心臓が痛い。

彼女は艶っぽい。

「ごめんなさいね、キクマサ君。レッドに無理やり連れてこられたのでしょうか？ まったくこの男はお調子者だから」

ナギは長い黒髪を結び上げ、制服をすっかり着替えて、部屋では薄手の浴衣だった。

レッドはニヤリと笑うと、紅茶のカップを差し出しながら、わざとらしい口調でもの申す。

「おや、お気に召さなかったかい？ お姫様」

「いいえ。有り難いですけどね、王子様」

ナギも負けずに嫌みを返す。

キクマサは当初から、この二人の関係がととても気になっていた。

ルネ・ヴィライアー同士というだけにしては、親密すぎる。それに二人は美男美女で、とても絵になる。

「ねえ、キクマサ君。あなた今年ルネ・コンに出るの？」

「あ……まあ……はい」

不意に質問され、紅茶のカップを前のテーブルに置くと、キクマサはなんとも言えない返事をした。

「……でもまだ、一次の作品できてないんですよ」

「そ。でも俺が引っ張ってここに連れてきたという展開」

キクマサの言葉に、レッドが付け足す。

ナギはいかがわしげにレッドを見ながら、でも彼には何も言わずにキクマサの方を優しく見た。

「……ちよつと、行き詰まっている感じがしら」

「……はい」

キクマサは苦笑いで頷いた。そこにすかさずレッドが割って入る。

「だいたい行き詰まっているときは何もしないのが一番なんだって。俺なんて二年生のルネ・コン、時季はずれのインフルエンザで間に

合わなかったからね」

「ふふ、そんな事もあったわね。こいつね、一応トップ入学してるのよ。二年生では推薦枠は確定だろうって言われていたにも関わらず、一週間ドクターストップよ。運がなかったのよ」

ナギはつんとして、レッドの痛い所をつつく。しかしレッドは相変わらずにここにこして、平気そうだった。

「ねえ、キクマサ君は、ルネ・ヴィライアーになりたいのかしら…？」

ナギはテーブルに肘を立て、その手の上に顎を添え、赤い唇に弧を描いた。

キクマサは少し考えると、

「……どうなんでしょうか。…本当の所、よく分からないですね。……実際にこの学校に入る前まで、ルネ・ヴィライアーについて知らなかったですし」

「へえ。予備校とか、美術学院とか行ってなかったのかい？」

「はい…話せば長くなるのであれですけど、俺、ここへ入学できたのは半分コネなので…」

苦笑いで、多少皮肉っぽく言っただつもりだったが、ナギはパツと黒い瞳を大きくすると、

「あら、私もそうよ。推薦入学だもの。新しくなった理事長が日本

画びいきでね。うちの父と知り合いなのよ」

臆することなく、笑顔で言った。

ルネ・ヴィライアーだから言えることなのか、はたまた元々そういうものだと受け入れているのか。

その余裕が羨ましかった。

「そもそも、絵に順番や点数なんてつけられないのよ。見る人によっていくらでも変わるんだから。ただ、やっぱり受験やコンクールでは、しょうがない……」

ナギは紅茶の水面を揺らした。

「この世界で生きていきたいなら、自分の表現を、相手に認めてもらわないと……」

自己満足を芸術とは呼べない。

かといって、真似や流行り、一般受けの良い表現に流されたって、何の意味もない。

常に新しいものを追い求め、それが認められるか認められないかで立場の変わる、紙一重で難しい世界。

「ちようどいいじゃない。ルネ・ヴィライアーになる事にこだわらないのならば、思いつきりやれるわよ。何を描きたかったのか、もう一度考え直してごらんなさい。何か足りないって言うのなら、そ

れは、あなたの表現したいものへの思いじゃないかしら。忘れてしまいたいになるもの、いまだに私だって」

キクマサは、顔を上げた。

目から鱗というか、衝撃というか、難しいパズルの解き方に気付いたように。

何を表現したかったのか。

なぜ、絵を描いているのか。

もう一度思い出さなければ。

「よく言うよね。ナギさん、あれでもルネ・ヴィライアーなる気なんてまったくなかったんだよ。三年生の時まで」

「……そうなんですか？」

ナギの研究室からの帰り道、レッドとキクマサは並んで歩いていた。

「うん。彼女も君と同じ。ルネ・ヴィライアーについてほとんど知らなかったし。ましてや日本画で、ヨーロッパに留学に来てるわけだしね。ルネ・ヴィライアー否定派だったよ」

「…否定派？ そんな人いるんですか…？」

「いるよお、実力あっても最後までコンテスト出ない人だっているし。嫌なんだよ、そういつた“格付け”が…。まあ…分からなくもないけどね」

キクマサはレッドを見上げた。

「でも、ナギさんの場合、俺が説得して、ルネ・コンに出させて…
…無欲の強みというか、結果的になっちゃったんだけどね」

レッドは少し、昔を思い出すように目を細めた。その表情が、とても大人っぽくて印象的だ。

キクマサは少し戸惑いながらも、一番気になっていた質問をした。

「あの…その、お二人ってどういう関係なんですか？ …何というか、前から仲良さそうなので」

「…ハハツ、何？ お付き合いしてますか？ ってこと」

「…はあ。まあそうです」

レッドは少しおどけたように首をかしげると、

「よく聞かれるけどね。俺たちは親友だよ。そんな色っぽい関係じゃない」

キクマサは多少ショックだった。二人はとてもお似合いだと思うのに。

男女を親友と呼べるのは、外国ならではのろうとしみじみ思った。

それにしても、何だか心が晴れやかだ。

「ありがとうございます。レッド先輩。：言われた通り、今日は行って良かったです」

「そうかい。お役に立てたなら何より。ナギさんも喜んでいたしね」
444号室の前で、2人は別れ際に話していた。キクマサはレッドの背を見送った。
不意にレッドが振り返る。

「そうそう。無欲の強みとか何とか言ってたけどね、でも俺は、ルネ・ヴィライアーになって損は無いと思うね」

「……………」

夕方の窓のシルエット。
立ちぼうけの人影。

レッドの笑みはオレンジに溶けていた。

「世界の美しいものを見に行ける」

言葉を残し、足音が遠ざかっていくのを聞いていた。
キクマサは思い出す。

カトレアさんの言葉を。

444号室に入って、人のいないその空間の中で、キクマサは自分の絵と向き合った。

自分は何を描きたかったのか。
それは、かつてカトレアさんに教えてもらった、あのアトリエから見上げた空だった。

カトレアさんの教えを、言葉を、きつと絵に託せるだろうと思って描き始めた。
いつしか焦燥感の中で見失っていたもの。

あの日、あのアトリエで、一生で一番大切なものを見つけた瞬間。

一生できつと、一番幸福な瞬間。

世界の美しいものを見せてあげる。

あなたはそう言って俺を、この世界へと突き落とした。

09：ルネ・ヴィライアー・コンテストの基礎について

僕と君は、違う星の元で生まれてきた

同じように、絵を描いていたって

「……なんだ、レイか」

フォルテは少し目を細め、不満そうにつぶやいた。視線は444号室の入り口に立つ、黒髪でショートカットの少女だ。

「何よ、それ」

レイは拗ねた口調でフォルテを睨みながら、444号室に入る。

「私が来ると、いつも嫌そうにするわね、あんたは」

「嫌そうじゃない。嫌なんです」

フォルテの口調はさっぱりしたものだった。

「何よ……」

レイは、今度は少し大人しい口調で言った。顔を複雑そうに歪めて、フォルテを見下ろしている。

フォルテは彼女を見もせずに、鉛筆をナイフで削っている。

「何の用だい、レイデル・リローズ」

彼は改めて聞く。

「別に……ただ……。私もルナシーも、あんたもキクも、四人とも一次受かったって聞いたから、どうしてるかなって思ってた」

「キクマサは売店だ、速乾剤を買いに行っている。二次は受験と同じように時間が短いから。一次は作品提出だったけど。……推薦組には不利だよな」

フォルテはいつもの明るい調子ではなく、淡々と流れるように話した。そんな彼の態度に、レイは難しそうな顔をしている。

「ねえ……あんたは今年、ルネ・ヴィライアーを目指してるの?」

「……………」

フォルテは鉛筆を削ぐ手を止め、じつとレイを見上げる。優しくでも睨むでも無い、嫌に冷めた視線である。それはレイにとって痛いものだ。

「今年は絶対にならないよ。推薦ヴィライアーは別として」

「……………」

はつきりした彼の強い口調に、レイは口をつぐんだ。

彼は視線を手元に戻すと、それ以降彼女を見なかった。

「ただ、来年は絶対になる。来年を逃せば、“ルネ・テクタイト”にはなれないかもしれない」

「……………あなたは“テクタイト”にこだわるのね」

「そうだ。そうでないなら、俺がこのルネ・ヴィルトンに来た意味がまるで無い」

フォルテはいつになく重い口調だった。

彼がこの学校に来た、一番の目的。その理由は、全て、ルネ・テクタイトという称号の中にある。

「…レイ、君とは所詮、目的が違うんだ。君は絵に生きなくちゃいけない」

フォルテは再び、手元のナイフと鉛筆に視線を落とす。

レイはうつむきがちに、

「ルネ・ヴィライアーになりたいっていうのは同じじゃない……」

彼に聞こえるか聞こえないか程度の声で言った。

「……いつたい何を言いたいんだ、君は」

「……」

一時して、フォルテが冷めた口調でそう呟いた。

いつからか、こうだ。

幼なじみで、家も隣でいつも一緒にいたのに、彼は急に冷たくなった。

レイは一度口を開いたが、思い直したように口をつぐんだ。

何が言いたいか、だって。

あんたはそんな事も分からないのね。

「……もういいわ」

レイは444号室を早足で出て行った。

彼女が出ていった後に、フォルテはやつと顔を上げ、さっきまで彼女の居た場所を、ため息混じりに見ていた。

レイは唇をぎゅっと結んで、押し寄せる胸の痛みを押さえていた。

あいつは私が邪魔なのだ。“目的”を果たすために。

私はただ、一次に受かって、あいつの喜ぶ顔が見たかったただけなの

に。

一緒に頑張ろうって、言いたかった、ただそれだけなのに。

「フォルテのバカ」

歯を食いしばって、怒りと悔しさを絞り出すように言った。

彼女の早い足音は、カツカツと長い廊下に響いていた。フォルテはその足音が遠ざかるのをじっと聞きながら、天井を見上げた。

キクマサは売店で速乾剤を買おうとしていた。

二次は、その場でお題が出され、6時間で描くといういわゆる受験風で、そのような特訓をしてきていないキクマサには、何とも未知数な領域であり、試練であった。

とてもじゃないけど、六時間で一枚の油絵を描くなんて考えられない。

でも、この競争率の高いルネ・ヴィルトンを受かってきた人たちには、慣れた分野なのだろう。

「…さあて…、速乾剤って言っても色々あるんだな…」

キクマサは、顎に手を添え、フムと思った。

メデイウム状、液体状、溶き油状と、形は様々。

どれをどう使うのが一番良いのだろう。

「何かお探しかね」

その時、背後からふと声がした。

しわがれた、落ち着きのある声主は、キクマサたち、ルネ・ヴィルトンの生徒には、よく知られた人だった。

「あ…、マクナスさん。こんにちは」

キクマサは小さくあいさつをした。

マクナス・ベンシ（71）は、このルネ美の画材店の主人で、
どういう時にどういう画材を使うのが良いか、生徒に教えてくれる、
親切なおじいさんだ。

薄くなった白髪の上から、今日みたいな肌寒い日は、よくニット帽
を被っている。

彼に話しかけられると、とても落ち着く。

「速乾メデイウムとシツカチーフか…。一番妥当な所だね。マクナ

スさんいた？」

「うん。よくわかんなかったから、選んでもらったよ」

キクマサは買ってきた画材を見比べながら、

「で、どうやって使うの？」

いつものようにフォルテに説明をもとめた。

フォルテもまた、ハイハイと。いつもの事ですね、と。

「速乾メディウムは、油絵の具にダイレクトに混ぜて使う。量に気をつけてね。…シツカチーフは油の一種だから、溶き油に混ぜるだけ。あんまり入れすぎないようにね」

彼は速乾メディウムとシツカチーフを片手ずつに持ち上げた。フォルテの説明に、キクマサは何度も頷きながら、試しにメディウムを油に混ぜてみた。

油絵の具をナイフで練る感触がいつもと少し違う。

「キャンバスのきれっぱしにでも塗ってみなよ。完璧に乾くのは時間がかかるけど、2時間後には違いが分かると思うよ。速乾って言うってもね、アクリル絵の具ほど速くは乾かないから」

そついうものなのか、とキクマサは半分納得したように頷く。メディウム入りの絵の具を筆につけて、キャンバスの切れ端にスツと走らせた。

鮮やかなカーマイン。

教官たちが腕時計を見ながらうろつろしている。
生徒たちも、木の丸イスに座って、油絵の具や下地用のアクリル絵の具を準備している。

ああ、なるほど。

このソワソワした空気や、ピリピリした空間が、緊張感を誘う受験と言っものか。

キクマサは初めての経験に、一度深呼吸した。

昨日まで練習していたメデイウムとの相性は思いの外によく、速く描くというのには、そんなに嫌気は感じなかった。

あとは、自分の感性和努力を信じるだけ。

10時を知らせる、ルネ・ヴィルトンの鐘の音。
先生が黒板を隠していた布をバツとめくった。

お題は、“過去、現在、未来”

このお題をどのように受け取るかは、自分次第。

「出来たと思う？」

「まあ…、やるだけはやったかな。ここで落ちたって未練は無いよ」
試験が終わって、さっそく学食を食べに行った2人。集中した後で、なんでこんなにお腹が空くのか。

「“過去、現在、未来”か…、こりゃ技術を見るよりも、発想力や構成力重視だろうな。このお題なら、100人いたら100通りの

絵ができるよ」

「それで差って出来るものなの？」

キクマサは落ち着いた口調で、パンをちぎりながら聞いた。

「あとは先生次第さ。ルネ・ヴィライアーとなり得る個性が有るかどうか……。ただし、変な絵を描きやいってもものでもない。基礎だつて大切だよ。三次は石膏デッサンだしね」

フォルテはミネストローネのスプーンを持ったまま、オーバーに言つて見せた。

キクマサはミネストローネをふきだしそうになり、驚いた口調で聞き返す。

「…石膏デッサン？ 今更？」

「そ、今更。でも山場。意外と出来ないやついるよ。ルネ・ヴィルトンの入試には無かったから、今まで個性で押してきた奴なんて、特に落とし穴。俺を含めて」

キクマサはポカンとしていた。散々絵画をさせてきたのに、今更石膏デッサンとは。

でも待てよ、とキクマサは思った。

昔カトレアさんのアトリエで、石膏デッサンは散々やらされた。

あのアトリエには、なぜか一通りの石膏像があったから。

キクマサはその日の夜、今日の二次がどうだったか、とかより、昔カトリアさんに言われた言葉が頭から離れなかった。

「基礎があつての個性だよ」

キクマサは、嫌というほどのデッサンをさせられてきた。石膏像だつてそうだ。

近寄つて、触つて、空間を計つて。

「たとえば最終的に、正確に描くような絵画じゃなくなつて、デッサン力があつてのそれを越えた“表現”なんだからね。どんなに才能があつたつて、基礎があるか無いかは思いの外に大きいよ」

「……………」

ベッドの中で一度寝返りをうつた。窓の外からは、月の光に照らされた雲が、くつきり見える。

あの頃俺は絵の具を使いたくてたまらなかった。

なんでこんな、誰だかわからないような、マルスやらジョルジュやらを描かなきゃいけないのかって、本気で思っていた。

しかし、カトレアさんは分かっていたのだ。これがいつか役に立つこと。基礎がある者が、最後にはどうしたって強い事。

あの人がしつこく基礎をやらせたおかげで、俺のデッサン力は、一年生最後の評価で5だった。レイですら4だったのに。

なんだか、三次に出れたらいいなと思った。

あの、白くて美しい像を描きたい。

キクマサは、二段ベットの上で眠るフォルテの寝息が聞こえてくるのも気にしないで、とにかく二次が受かっていますようにと思った。だんだん欲が出てきてしまっ。

ダメだよ。

“ここまで”で満足しちゃ。

カトレアの言葉が聞こえた気がした。

d
r
a
w

10：ルネ・ヴィライアー・コンテスト4（筋違い）

どろしても

分かり合えない価値観に、我々は価値を見いだすのか

「凄いや、俺達まだ残ってるよ！！」

中央掲示板を見て、まるで受験生のように自分の名前を探す。フォルテは、自分とキクマサの名前が残っていたのに興奮して叫んだ。周りもざわわしてどうも落ち着きがない。喜びの声や嘆きの声が一気に耳に入ってくる。

「あ、レイモルナシーも残ってる…。あの2人もやるもんだね」

「……ほんとだ」

キクマサが、ズボンのポケットに手を突っ込んだまま、ほうと視線を掲示板に戻した時だった。

「なあにが“やるもんだね”よ。私達よりよっぽど、あなたたちが残ってる方がびっくりよ」

「……………」

聞き覚えのある澁刺とした声。振り返るのが恐いくらい。

「ダメよ、レイ。そんなこと言っちゃ」

威勢の良いレイと、それを中和するかのようには、柔らかい声のルナシーが、いつの間にかキクマサ達の後ろにいた。フォルテは一度ため息をつくくと、

「あの子、お前がここまで残るのは、ルネ・コンが始まる前から予想済みだったさ」

「あら、じゃあ予想外だったのは私の方かしら」

ルナシーはクスクス笑いながら、フォルテを覗き込んだ。金の長い髪が肩から流れる。

「…そんなことはないさ、ルナシー」

フォルテは少し困ったように頭をかいた。キクマサは笑いそうになる。

側を通る男子学生は、必ずといっていいほどルナシーに目を止める。
彼女は学年のマドンナだ。

「大体何だよ…何の用だ…。嫌みを言いに来ただけだろ」

フォルテはそっけなく、少し冷めた声で言った。レイは顔をしかめ、
フンとそっぽむくと、

「…ええ、そうよ。…どうせ次はあなたの苦手な石膏デッサンよ。
一緒に最終試験に行けないのが残念だわ!!」

いつも以上にきつい口調で、フォルテを睨みながら言った。キクマ
サはレイとフォルテを交互に見比べる。

なんだか、いつもの感じと違わないか？

ルナシーもそれは感じているようだった。

レイは腕を組んだまま、早歩きで立ち去った。慌ててルナシーが後
を追う。

「……………レイと何かあったの？」

キクマサは意味もなく小声になる。

「別に……………俺最近嫌われてるから」

彼は笑ってそうは言うけど。

キクマサは、そうだろうかと疑問を持った。どちらかと言うとフォ

ルテがレイを避けてる気がする。彼女が近づこうとすると、一線を引く。

仲が良いのか悪いのか、いまだに分からない。

「レイ…、どうしたの急に」

カツカツ足音をたて早歩きのレイに、小柄なルナシーは小走りで追いついた。

レイはむっとして、心配なくらい沈んでいた。

「……あいつ、今日も私を見なかったわ」

「……フォルテ？ どうしたの、喧嘩でもしたの？」

ルナシーはさっきのフォルテとレイの態度で、何かを悟ったようだ。

「ちょっとレイ？ 大丈夫なの？ 明日は三次があるのよ…。彼には悪いけど…フォルテのことなんて忘れちゃいなさい」

ルナシーはかわいらしい声で、なんとも思い切ったことを言う。

でも、そうでなければ、彼女がせっかくの実力を出せないのではな
いかと不安に思ったから。

「……………そうね。あんなやつ落ちちゃえ」

レイはぼつりと呟く。

その時だった。

前から2、3人の女子学生が、なんだか怖い顔でこちらに歩いて来た。

ルナシーは眉間を寄せ、困ったようにしている。

「やだわ……………ジェシカよ。あの子何かとレイを敵視しているじゃない…」

ルナシーがそう言うので、レイはそちらをめんどくさそうに見る。

「何か言われる前に、無視して立ち去ればいいのよ」

肩ほどの巻き毛をハーフアップにした、同じ学年のジェシカ・バーナード。一年前の入試で三番目だったのが彼女だ。お嬢様なのだろうが、わがままで、自分が一番でないと嫌なタイプ。

常にトップのレイを、異常に敵視しているのは皆知っている。

廊下を渡る、その気取った足音といったら。

ジェシカが何人かの取り巻きと共に、レイとルナシーの進行方向に立ちふさがった。

「あら…レイデル・リロズ。ごきげんよう…ルナシーも」

ジェシカは意地悪そうなつり眉を、片方だけ上げた。

「…何の用？ ジェシカ、邪魔よ」

レイは機嫌が悪いのもあって、最初から手厳しい。ルナシーは隣でハラハラしている。

ジェシカは少し目を細めると、顎を上げどうにもレイを見おろしたらしい。

「あら…せっかくおめでとうって言いに来たのに。あなたも私も三次に進めるのだから。それに…」

ジェシカはチラツとルナシーを見た。

「ルナシーさんは分からないけれど、私とあなたは最終に残れるでしょうね…。私今ね…特別にプロの講師に最終の対策をしてもらっているのよ。歴代の課題から、どのような絵が受かっているのか…。それを知っているか知らないかって大きいと思わない…？」

ジェシカの余裕な口振りに、ルナシーはむっとして、「嫌みな人ね」と呟いた。

「…何が言いたいの？」

「……バカね、少しは焦ったら？ 一年前に付いた“一番”の称号もそろそろ期限切れよ」

ジェシカがクスクス笑いながら言うことに、レイはまるで呆れかえっている。その態度が、彼女の全身から出ていた。

「ちょっとあなた…受験じゃないのよ。一番の称号？ 何それ…私以上にあなたがそれにこだわってどうするの…？」

「…何ですって…？」

ジェシカは声音を低めた。表情が、先ほどの薄ら笑いから、一変して堅くなる。

「だってそうじゃない。笑わせないでよ。講師って何よ。受かりやすい絵って？？ それで、ルネ・ヴィライアーになれると思ってるの！？ そんな心構えだからあなたは私に勝てないのよ！！！」

レイは何かのネジが外れたように、ズバズバと言いたい事が溢れたようだった。ジェシカは口をパクパクさせて、驚きで目を見開いている。

「ちょっと…レイ。あなた無視するんじゃないの！！！」

「いいでしょう！ こいつには一度言わないと気が済まなかったのよ」

彼女は人差し指をジェシカの制服のリボンに突きつけた。

「あなたの技術は模範的よ。まるで教科書のように。でもね、あなたの絵には先が無い。自分の力で自分の新天地を開拓していかない限り、あなたは成功しないわよ。いいこと…っ、筋違いちゃん！！！」

レイの勢いは止まらなかった。ジェシカは「何てことを…」と半分放心状態で聞いていたが、ジェシカの取り巻きも、反論する余地がない。

あまりに的を得ているから。

レイは、「フン」とジェシカを尻目に、腕を組んで立ち去る。ルナシーは渋い顔で、わたわたしながらジェシカたちを見る。少し居たたまれないなと思ったが、

「…あなたたちが悪いのよ。“今”のレイにつっかかるから…」

あーあと何度も首を振りながら、彼女たちに言い聞かせた。そして、遠くのレイを追う。

しばらくして、向こうからジェシカの甲高い声が響いた。

「レイ、どうしたのよ、あなたらしくもない。」

ルナシーは、部屋のソファに深く座り込んだレイを覗き込んだ。

「ルナシー……私ジェシカにひどいこと言っちゃった。先が無いなんて、絶対に言っちゃいけないことだったのに……」

レイは頭を抱えて、大きくため息をついた。ルナシーはレイの肩を抱く。

彼女は唇を噛んだ。

「私、ただ単に、フォルテへのイラつきをジェシカにぶつけたただけだわ……。最低……」

「仕方がないわよ。いつもあなたにつっかかるジェシカも悪いもの。でも今度会ったら謝るといいわ」

「……………そうね」

レイはやつと顔を上げた。小さく泣きそうに笑つと、ルナシーを見てコクンと頷いた。

優しい風が、出窓から流れ込む。

これが“あの悲劇”を生むとも知らずに。

「スゴいな、レイ。さっきレミオに聞いたけど、レイ、あのジェシカに“筋違い”って言ったらしいぜ」

キクマサは練り消しを買って、部屋に戻ってきた所だった。

フォルテは「は？」と、今まで読んでいた雑誌を閉じると、帰ってきたばかりのキクマサの言葉を気にした。

「いつになくキツいな。モテないはずだよ。…まあジェシカが筋違いってのもわからんでも無いけど」

フォルテは立ち上がって背伸びをした。キクマサは机のイスに座ると足を組んで、じつと探るようにフォルテの方を向く。

「お前が怒らせたからだ。最近レイを避けてるだろ」

「……………」

フォルテは無言だった。

キクマサはデッサン用具を確認しながら、丸くなった鉛筆をナイフで削ぎ始めた。

「レイは二年生でルネ・ヴィライアーに最も近いんだ。変な態度で、彼女を困らせるなよ。試験に集中出来なかったら可哀想だろ」

キクマサの淡々とした正論。

フォルテは少し黙っていたが、小さくため息をついたのが分かる。

「……………だからだよ、キクマサ。レイは絵に生きなきゃいけない。だから……………俺から離れなきゃ」

「……………？」

キクマサは、ゆっくり顔を上げる。フォルテはそっと出窓に近寄り、薄く淡い夕暮れを眺めた。

ルネ・ヴィルトンからの夕暮れは絶景で、心を引き出して写すように。

フォルテの表情は落ち着いていた。まるで、いつもの彼じゃないように。

ジェシカ・バーナードのご立腹様は、すさまじいものだった。部屋に帰ってからと言うもの、ソファアのクッションは引きちぎるし、植木鉢は壁に投げつけるし、

彼女の髪なんて乱れて、息も荒い。

「あの女…っ、私に向かって“先がない”ですって…っよくも……」

出窓の花瓶を落とす。ガラスの破片が、暗い部屋の中で怪しく光る。彼女にルームメイトは居ない。いびりすぎて退学したのだ。

「……許せないっ！！ あの女…っ！！！！」

机の上の物を、片っ端から床に落としまくる。叩きつけては息を荒げて次を探す。

その時だった。

机の上に、古くて、でも装飾がとても美しい箱があった。何とも妖しい空気。

ジエシカにはまるで見覚えが無かったが、吸い込まれるように箱を開いた。

「……………何よこれ……」

箱の中には、一本のナイフ。外の箱と同様に美しい装飾が施されている。

彼女は顔をしかめた。

“鉛筆でも削って下さい”

ナイフと共に入っていた手紙には、一言そうとだけ書かれていた。

ジェシカはナイフをそっと手に取った。

宙にかざすと、組み込まれた石が淡く光ったように見える。

何て美しいの。

ジェシカはただただそのナイフを見つめた。

冷たい石の感触。

誰がくれたのかも分からないのに、手放せなくなる。

妖しい月明かり。

美術品の魔力。

変な気持ちだが、フツフツと湧き上がって、何だか気分が良い。

これが、我々の最初に触れた、魔力を秘めた美術品。

美しさなんて、恐ろしさと同じ事。

我々はまだそれを知らなかった。

d
r
a
w

11：ルネ・ヴィライアー・コンテスト5〜失明〜

僕の右目を

君にあげられたら良かった

その日の夜は、窓を明けて寝ても暖かくて、だからきつと胸騒ぎがするんだ。

シンとしているのに、どこか騒がしく感じる。

月も遠いのに、目の前にあるみたいだ。

キクマサはそつとベットから出た。

今日は何だか、眠りたいのに眠れない。よく分からないけれど、別に明日の三次が気になるわけでも無いのに。

どうしてだろう。

キクマサの予感は、もしかしたら当たっていたのかもしれない。
でも、まさかこんなことになるなんて、誰が思っただろう。

全ては、三次試験が始まろうとしていたときの事だった。ここまで残った生徒が、静かに鉛筆や木炭を削っている音がする。目の前の石膏像が、静かに布を被って試験を待っている。何の石膏像か分からないのに、静止した存在感、物としての造形から、音の無い息づかいが聞こえてきそうだった。

そう。それは、そんな静かな時間だった。
どうして、こんな事が起こったのだろう。

今更何を思っても遅すぎるけれど。

キクマサもフォルテも、ルナシーもレイも、それぞれがそれぞれの席で、周りの人達と同じように、試験が始まる時間を待っていた。

時計の、チクタクという音。

その静寂を破ったのは、一人の女子学生。

「……………どうかしましたか…？ ジェシカ・バーナード」

試験監督のネイリー先生が、まず、彼女の異変に気が付いた。

ジェシカが急に立ち上がったのだ。

先生が再び声をかけたが、返事をしない。

「……………」

ジェシカは無言で、スタスタとある人の元へ行った。

レイのもとへ。

「……………？ ちょっとあなた、もうすぐ試験よ」

レイは不信に思っ眉根を潜めた。

他の生徒だってそうだ。

その時、悲劇が起こった。

「きゃああああ……!!」

女子学生の甲高い叫び声。連鎖して起こる悲鳴と、席から逃げる人の音。

彼女がイスからガタンと落ちて、床に倒れ込んだ事実。

右目を震える手で抑えながら。

血が、指の隙間から流れて、流れて、落ちる。

「レイっ……!!」

「っジェシカ、止めなさい……!!」

硬直しきった空間を斬るような声。ネイリ 先生は目を見開いて、ジェシカの前に立った。他の監督の先生も、彼女の腕を取り押さえ、手から例のナイフを奪う。

ジェシカは訳の分からないことを叫びながら、暴れまわる。ルナシーは半分泣きそうになりながら、レイに駆け寄った。

「誰か…っ！！ 誰か医者を！！！！ 早く！！！！」

ルナシーの声で、周りの何人かの生徒が教室を出て行った。一気にざわざわし始める教室。

キクマサはもう何が起こったのか分からずに、右目から血を流すレイに駆け寄り、青い顔でレイの名を呼ぶルナシーを見た。

そして、フォルテを探した。

「……………」

キクマサは時間が止まったかと思った。

だってフォルテが、驚きと、絶望を確信したような瞳で、

一筋涙を流したから。

ジェシカは狂ったのだろうか。

地に伏せるレイを見下ろしながら、イカレたように笑っている。

「様はないわね、レイデル・リローズ。…あなたさえ居なければ、私は一番になれるのよ。…あなたさえ居なければっ！！！！！！」

「止めなさい！！！！ ジェシカっ！！！！」

先生達も息を荒げて、彼女を止める。バタバタと、他の部屋からもルネ・ヴィルトンの教師たちが駆けつけてくる。

座ったまま、泣きじゃくっている女子生徒もいるし、震えが止まらない人だっているようだ。

当然だ。

ナイフで他人の目に切りかかるなんて正気じゃない。

ジェシカは天を仰いで、小気味よく笑った。

「…あ あ、目が無けりゃ、いくら天才様でも絵は描けないわ」

「黙りなさいジェシカ。あなたもただじゃ済まなくてよ」

ネイリ 先生は、怒りに震える瞳で、それでも平常心を保とうとしていた。信じられない、信じたくない事実。何度も首を振っていた。

「まさか……こんな事をしてしまうなんて……。あなたにだって素質が合ったのに……っ、誰よりも努力してたじゃない…ジェシカ！！！！」

先生の言葉は痛切で、その言葉に、ジェシカは笑うのを止めた。何だか、何かがプツンと切れたかのように、抵抗する力すら無くて。

「…だって先生……それでも天才には叶わないでしょう……？ 私よりも上に誰かがいる限り、誰も私の絵を見てくれないじゃない！

「！！」

ジェシカは張り詰めていたものを、涙をこぼした。彼女はレイへのコンプレックスが、きつと誰より大きかったに違いない。キクマサは複雑な思いに、拳を握った。

その時、

「だから、レイの目を刺したっていいのか！！　ふざけるなよ！！！！」

フォルテは、今まで見たこともないくらい、憎しみに溢れた形相でジェシカ・バーナードに向かってつかみかかろうとした。

キクマサは、マズいと思つてフォルテの前に立ち、彼の胸ぐらをつかんで止める。

「止める…っ、フォルテ！！！！」

「離せキクマサ！！！！…レイが…っ！！！！」

レイが。

フォルテの言いたいことは、痛いほどわかる。キクマサは涙をこらえて何度も頷いた。フォルテは怒りと憎しみに、涙をにじませながら、ゆっくりとレイを見た。

「世界が…っ、彼女を待っていたのに」

彼女の絵を待っていたのに。

やがて、バタバタした足音と共に、何人かの医者がやって来て、レ
イを担架に載せて連れ去った。
ただ、血の跡を残して。何て量だ。

そしてすぐに警察がやって来た。

ジェシカ・バーナードは抵抗する事もなく、素直に連れていかれた。
と言うよりも、気が無くなったように、ぼんやりしていたと言っ
た方がいいかもしれない。

いったい何が、こんな悲劇を生んだのか。

こんな悲劇を。

当然、その日あるはずだった三次試験は、一週間後に延期された。生徒の中には、ルネ・コンを辞退したり、カウンセラーが必要な人もいて、色々なことが後に尾を引きそうだった。

メディアもメディアで、この報道は世界を揺るがせた。

あれから2日がたった。レイの容態も分からないし、ジェシカがどうなったのかも分からない。

誰もが、その話題に触れたそうにしながらも、触れようとしない。

フォルテはあれから物凄く静かだ。無理も無い。

今日は雨だった。

フォルテは静かに本を読んでいた。さつきから一向に進んでいないけれど。

「大丈夫か…フォルテ…」

「……大丈夫じゃない」

そりゃそうだ。キクマサは顔をしかめた。

フォルテは本を閉じ、いつになくぼんやりとしていて、何を見ているのか何も見ていないのか。

「何で…こんな事になったんだろう…。全部俺のせいだ」

雨の音がうるさい。フォルテの声がかき消されてしまいそうだ。

「…何でお前のせいになるんだ」

「俺のせいだよ。俺がレイにあんな態度を取らなければ、こんな事にはならなかった。……こんな事を望んでいたわけじゃないのに…」

「……………」

フォルテの気持ちは痛いほど分かる。キクマサだって、この一年、ずっとフォルテとレイを見てきたんだ。

いくら文句を言い合っていたって、彼らはお互いを大切にしていた。それだけは分かっている。

レイの目はもう戻らない。

あの時、あの事件があった時、たとえそれを予感していたって、真実を知るのは辛すぎる。

「……………どういうことですか…ネイリ 先生……………」

ルナシーは震える声で、聞き返した。先生の言った言葉を信じたくなくて。

キクマサも、フォルテも言葉を失った。

「……………レイデル・リローズの右目は……………もう見えることは無いでしょう。……………残念ですが」

ネイリ 先生の目が赤く腫れていた。きっと誰もが悔しくて悲しいのだ。

「……………レイは……………これからどうなるんですか……………？ 絵は……………」

絵は、描けるのだろうか。

フォルテの声は、恐いくらいに落ち着いていた。
キクマサもルナシーも、その先が知りたくて、でも知りたくなくて。
不安な面持ちで先生を見上げた。

「……後は、彼女次第です……」

ネイリ 先生は、曖昧な表現をした。でもそうとしか言えない。
後は、レイの選択次第。

でも、今までと同じようにいかないのは紛れもない事実。
絵を描いていく者として、片目を失うのは大きすぎるリスクである。

「フォルテの奴……っ、どこ行ったんだ……」

それは、延期された三次試験の日の事だった。

朝起きたら、フォルテが居なくなっていた。ケータイにいくら電話
しても繋がらない。

もうすぐ三次試験が始まるというのに。

「キク……っ、フォルテいた？」

「いや……どこにも居ない」

ルナシーも、この校内中フォルテを探し回っていた。

「…あのバカっ！！ 一体何を考えてるんだ！！！」

キクマサが、よく分からない怒りで、セットしたばかりの髪をかきむしっているときだった。

ケータイが鳴るのをポケットの振動で気がつく。

それがフォルテであることは、表示を見てすぐにわかった。

キクマサはすぐに繋いで、

「フォルテ！！！ お前何やってんだよ！！！」

彼が何か言うより前に、一度怒鳴らないと気がおさまらなかった。

『おおぅ……キクにしちゃ威勢がいいな……怒ってる？』

ケータイの向こうの声は、紛れもなくフォルテであった。

「当たり前だろ！！ 俺とルナがどれだけ探したと思ってるんだ…

っ！！！！ もうすぐ三次試験が始まるのに、間に合わないぞ！！！」

『……………』

少しの沈黙の後、フツと笑うような吐息がケータイ越しに聞こえた。

『俺、ここでルネ・コン辞退するよ……………』

「……え……」

キクマサは、今フォルテが言ったことが、少しの間理解出来なかった。

「……な、何で……せつかくここまでできたのに……」

キクマサの動揺に、ルナシーは心配そうに様子を伺っている。

電話の向こうのフォルテは、大人びた声で、やけになっていると言う様でも無い。だからこそいつそうちらが戸惑うのだ。

「……今、レイの病院に来てるんだ……。俺はレイと……来年頑張ろうと思っ……」

「……」

キクマサは一つ息を付いた。

「……それで、お前がいいなら……」

来年、ここまで残れるかも分からない。

レイが、戻ってくるかも分からないけれど。

それでもキクマサには、こうとしか言えなかった。

『……レイは、絵をあきらめない……。俺は、それをちゃんと見届けなきゃ』

フォルテらしくもない。
でも、それで良いと思った。

彼の選んだ選択は、きっと正しかった。

レイは、暗い病室で、たった片方になった目を虚ろにさせていた。
結局自分は、人生で最も失ってはいけないものを失った。しかも、
自分が招いた惨事だ。

「……………」

今や痛みさえ感じない。

半分になった視界。

不意に、病室のドアを叩く音がした。

どうせ、看護師さんが、包帯でも替えに来たのだらうと思っていた。

「……………やあ…レイ」

「……………」

レイは絶句した。

どうして。

なんであいつがここにいるの。

フォルテが…。

「……………あ…あなた…、何で…」

だって今日は三次試験の日なのに。私には、もう手の届かない場所。フォルテは、ただじっとレイを見ていた。イスに座るでもなく。暗い部屋で確かめる彼女の右目を、何とも言えない面持ちで見ている。

「……………痛い…？」

「……………」

レイは首を振った。

「痛みすら感じないの…。バカみたい…」

バカみたい。

こんな姿、フォルテにだけは見られたく無かったのに。

バカみたい。

「……もう、分からないの。両目だったころの視野の広さも。……
あなたまでの距離だって……」

片目を失うリスクの大きさは、失ってみて分かるもの。

レイは、片目の包帯を抑えた。

バカみたい。

私には絵しかないのに。

「……まだ、終わった訳じゃないだろ。レイ……」

その時フォルテが、静かな空間を破った。

「……フォルテ……」

「許さないから……。お前が絵をやめるなんて……」

レイはフォルテを見上げ、彼の真剣な表情に、突然胸が苦しくなるのを感じる。カーテンすら開けてない病室の暗がりには、フォルテとレイは見つめたっていた。

彼女は、泣きそうなのを我慢できなかった。

何度も首をふりながら、希望を見いだせない自分のそのままを口に
する。

「……無理よ。前のように描ける訳がないわ……」

そう。

こんな風にあっけなく、私の時代は終わる。フォルテにだって分かっているはず。

数秒の静寂が、痛いくらいに長く感じた。

「……………なあ……………覚えてるか……………？」

ふいに、フォルテがレイに問いかけた。

「どっちが先に絵を描き始めたのか」

「……………」

レイも、フォルテもただ黙って見つめ合っていた。

「最初に始めたのは……………あなたよ……………。だから私はあなたと一緒に絵画教室に通いたくて……………」

「そうだ。でもお前はすぐに俺を出し抜いた。才能があったんだ……………。どんどん高みへ行ってしまった」

悔しさが無かったと言ったら嘘になる。

でも、悔しさ以上に、憧れの方が大きくて、ずっと、世界は彼女を待っていると思っていた。

彼女の絵がいつか、この世界にセンサーションを巻き起こすと、それを見たいと思っていたのだ。

「一番最初に、お前の絵を見つけたんだ……俺が……っ」

フォルテは、泣きそうに笑った。

レイは、ふらつく距離感の計れない手で、必死に彼の頬に触れた。

そう。

あなたが私を、この世界に導いてくれたの。

「……ええ。あなたが私を、連れてきてくれたの……こんな所まで……っ」

はまりにはまっていった。

あなたのせいよ。

カーテンの隙間から、わずかに光が差し込んで、

泣きながら抱きしめ合う二人を照らしていた。

d
r
a
w

12：魔術師の弟子

この世の美術の理を

この世の美術の役割を

いつたい誰が知っているのか

「絵画科のエリーゼ先生が、僕らをお呼びになるなんて珍しい…」

淡い、アプリコットブラウンの髪の毛の男子学生が、静かに微笑んだ。

彼の後ろには、黒髪で長身の青年が控えている。

二人は絵画科とは違う制服を着ていた。茶色いブレザーに、赤く細い、紐のリボン。

絵画棟の中の、生徒たちから離れた部屋で彼らを待っていたのは、眼鏡をかけた厳格そうな女性だった。

「…お座りなさい、ルネ・ゴールドロッド。ルネ・シルバーロッド

…」

彼女はニコリともしないで、淡々と彼らを呼んだ。

ルネ・ゴールドロッドと呼ばれた手前の学生は、アブリコットブラウンの髪を耳にかけると、何かを悟ったように再び微笑んだ。クスクス笑いながらイスに腰掛ける。後ろの青年も、後から彼の隣に座った。

「…わざわざ、あなた方彫刻科のヴィライアーを呼び出したのは、先日我が校で起こった事件について知りたいことがあるからです…」

エリーゼ先生と呼ばれた女性は、目の前のテーブルに数枚の写真を並べた。

それは全て、あのジェシカが持っていたナイフの写真だった。

「…これは……」

ルネ・ゴールドロッドは一枚を手にとって、宙に掲げる。

たった一瞬だけ、彼の瞳が淡く金色を得た気がした。

「我が校で先日起こった事件については、語る必要は無いでしょう…。ひどい出来事でした」

エリーゼ先生は感情の読めない表情で。それでもやはり、この出来事に憤りを感じていると思わせる口調だった。

ルネ・ゴルドロッドと呼ばれた、割と小柄な青年は、彫刻科のルネ・ヴィライアー団長。
名を、パリス・ヴァレリーといった。

「……なるほど。先日の痛ましい事件は、このナイフが原因ではないかと……。エリーゼ先生はそうお考えなのですね」

パリスは相変わらず読めない笑みで、写真をそつと机に置いた。

「……ええ。ジェシカ・バーナードに非がなかったとは言いませんが、普通の人間ならあのようなことは出来ません……」

「……どうでしょうかね」

エリーゼ先生が言い切った事に、パリスは少し間を置いて、

「でも、あなたのお考えは正しい。このナイフは魔力を秘めた美術品“アール・カーヴァ”。……まあ、ランクGといった程度でしょうが。それでも弱い心はつけ込まれる……。」

パリスは写真に指を突きつけた。彼の穏やかな表情は、裏腹に謎めかしい。

エリーゼ先生は瞳を細めた。

「……ジェシカは、美術品に呑まれたと……？」

「そうですね。美術品とは美しくて恐ろしいもの。特に“アール・カーヴァ”になってしまったら」

そしてパリスは、ふと視線を斜めに移す。

空気がヒヤリとした気がした。

「…それにしても、彼女はどうやってそのナイフを手に入れたのでしょうか…」

そつと顎に手を添え、彼は眉根を潜める。エリーゼ先生はふと顔を上げた。

「アール・カーヴァとはそうそう手には入るものではありません。しかし…どうも最近…これらの流動が著しい」

パリスの言葉にエリーゼ先生は静かに頷いた。

「…ええ。“誰が”彼女にナイフを渡したのか…。それが問題ですよ」

「そうなるでしょうね。基本的に、“いかがわしい”者はルネ・ヴィルトンには侵入できない。…ルネ・ヴィルトンの生徒と考えるのが妥当でしょうね。」

パリスは特に表情を変えずに、見解を述べる。それは、とんでもなく大きな問題だったのに。

エリーゼ先生は、視線を彼に向けた。

「あなた方以外にアール・カーヴァの存在を知る者が、この学校にいると…?」

「…それはそうでしょう…。美術品に近しい者なら、たどり着く可能性はありますから…。きっと、少なくともと思いますよ…」

「……………」

エリーゼ先生は無言で、何かを思い巡らしている。それは、美術品に対しての不安か、人間に対しての不満か。

その時、パリスの隣に座っていた黒髪の青年が、貫いていた沈黙を破った。

「…パリス…そろそろ時間だ…」

彼は、パリスの方を向くと、切れ長の瞳を流す。淡々とした、落ち着いた低い声。

「ルーン…もうそんな時間ですか。そろそろ行かないと、ヴィンセント先生に怒られますね」

パリスは立ち上がった。エリーゼ先生と目を合わせると、また意味深に微笑んでいる。

「…わざわざ僕らに聞かなくても、絵画科のヴィライアーには優秀な鑑定士がいらっしゃるではないですか。彼はどうしたんです？」

「…カイ・ヴォストンは今、急な仕事で居ません。それに…魔力のある美術品については、あなた方に聞いた方が」

「……………そうですか」

エリーゼ先生は軽く眼鏡を押し上げ立ち上がった。

「…苦勞様でした。ルネ・ゴールドロッド。ルネ・シルバーロッド。」

あなた方もお忙しいところを…。ヴィンセント先生によるしくお伝え下さい」

彼女は軽く頭を下げた。パリスとルーンも立ち上がり、それに合わせてお辞儀をする。

彼らの長いローブが、緩やかに波打った。

「いえ…アール・カーヴァの問題ともなれば、我々に無関係な話ではありません。寧ろありがたい」

「……………」

エリーゼ先生は、パリスを見た。

彼の背負っているものを見越した。

「…あなた方…彫刻科のヴィライアーは、どの科のヴィライアーとも違う。…目的も…役割も」

「それはそうです。こういう言い方は僕もあまり好きではありませんが、ルネ・ヴィルトンとは、我々彫刻科のヴィライアーのために出来たようなもの…」

そして彼はローブを翻した。

「ではご機嫌よう。エリーゼ先生…」

エリーゼは一人で部屋に佇んでいた。一秒前まではあの2人がいたと言っても良い空間が、ふと静かになった。もともと、そこには誰もいなかったのではないか。そう思わせる程、静かな空間。

あの二人がいなくなって、分かったことがある。

空間が緊張していたこと。

一瞬で、空気が緩やかなものになったのを肌で感じる。

彫刻科のルネ・ヴィライアー

この世の美術の理を、

この世の美術の役割を、

最もよく知る者たち。

「……魔術師の弟子……」

エリーゼは、彼らの居なくなった、その一点を見つめ、ぽつりと呟いた。

彼らの事を語れば、いずれ、ルネ・ヴィルトンの真実にたどり着く。ジハードという名のもう一つの物語。

避けては通れない、神話を巡る物語。

いずれ、時は満ちる。

全ての物語は繋がっているから。

I
d
r
a
w

13：ルネ・ヴィライアー・コンテスト6（黄金期）

僕らが真摯に絵と向き合えたのは、

きつと、彼と彼女のおかげだろう。

「どうだい、キクマサ。最終試験の絵は」

「自信は無いよ。でも満足だ」

淡いスポットライトに照らされた、自分の絵を、こつこつという大きな舞台に掲げられるのは不思議な気分だった。

キクマサとルナシーは、2人して最終試験に残れた。あの、レイの事件と、フォルテの決意。二人の覚悟。

それを目の当たりにしてから、僕らは絵に向かう態度が変わった気がする。

今日は最終審査の日だ。残った20人が、約二週間で、自由に絵を描く。

その展示の準備が今終わった。

「ここまで来ちゃったら、もうやることなんて無いな。あとは待つだけだ」

「…うん。俺は全然満足だ」

キクマサは、フォルテに手伝ってもらって、すでに展示を終えていた。

今日の午後から審査が始まる。

よもやここまで来るとは。

自分の絵が、こんなふうに光を浴びるようになるなんて。

ここに残れただけで、キクマサには十分だった。

幸せだ。

「…キク…」

背後から静かに、ささやくような鈴の声。

淡暗いギャラリーの、薄い光。

「そろそろここから出なきゃ…審査が始まるわ」

「…ルナ…、もう終わったの？」

「ええ…。ジェイル先輩に手伝ってもらったから。」

ルナシーは軽く笑った。彼女の言うジェイル先輩とは、去年の推薦
ヴィライアー。

今年、ルネ・ヴィライアーになるであろうと言う候補の一人だ。

キクマサも名前くらいは知っていた。

「もつ…なるようにしかしかないわ。」

ルナシーも、満足そうだ。

僕らはいわゆるダークホース。
所詮は新人。

だからこそ、欲も無く落ち着いて、描きたいものを描けたから。

「あ、キクマサ先輩！！ フォルテ先輩！！」

ギャラリーから出た時だった。

聞き覚えのある声音。

白いふわふわのくせっ毛。

黒のベレー帽。

「あ……」

キクマサとフォルテは同時にその方を振り返った。そして彼を見つ
け、記憶を巻き戻した。

「ああ……、この前のベレー帽君。」

フォルテはハイハイといったように頷いた。キクマサは片方の手を
ズボンのポケットから出すと、「よう……」と手をあげた。

ルナシーは首を傾げ、キクマサを見上げて、

「……どなた？」

と尋ねた。

しかしキクマサは、はてと固まる。
視線をフォルテに流す。

フォルテは「おいおい」と小声で呟いてから、目の前までやってき
た彼に、

「えーと……、ヘルクロウ・ラヴィーニ……」

と、まるで問題を答えるかのように人差し指を突きつけた。

ヘルはびっくりして、

「は、はい!!! な、な何ですか!?!」

背筋をピシッとさせて、大きな目をさらに見開いた。

キクマサはやっと名前がわかったところで、何事もなかったかのよう
うに、

「…何やってるんだ？こんな所で。」

ヘルを見下ろした。彼は笑顔で、

「あ、俺、残ったんです!!! 最終審査!?!」

驚くべきことを言っただけだ。

2年生三人はもちろん度肝を抜かれた。あんぐりと口を開け、「はい?」と言った感じだ。

だって、1年生でここまで来るのって、そうそうないことだから。

ヘルは、多分一番そういうのに疎い。

高学年になるにつれ、きつとここまで来る難しさが分かるから。

「マジで???それって超凄くない???ほんとに超」

フォルテは真面目にそう思った。

キクマサは、多少面食らったが、共に高学年に立ち向かう下級生が増えて、そういう意味では嬉しくなった。

「まあ…お互いどうなるか分かんないけど、頑張ろうな」

「は、はい！！ありがとうございます！！キクマサ先輩」

ヘルは嬉しそうににっこり笑って、目をきらきらさせた。

しかし、ふと宙を仰ぐと、何かを思い出したように、

「あ、でも…1年生でここまで来たのって、俺だけじゃないんですよ。もう一人、クレハ・ドルフォードっていうやつがいるんです。」

「……………」

今年の1年生は侮れない。

3人は顔を見合わせた。

「……………入ります」

軽いノックの後、彼はその部屋に入った。
標識は理事長室。

彼は絵画科ルネ・ヴィライアー団長

ハク・リュオンだった。

黒髪に、切れ長の瞳が、彼の存在感を象徴している。

「よく来たね。リュオン」

部屋の奥の机に腰掛けた、一人の中年の男性。
机に肘をついて、指をくんでいる。

黒とまではいかない短い焦げ茶の髪を、紳士的に整えてある、優男の風貌。

彼が、このルネ・ヴィルトンの理事長

エリック・オーデールだった。

他にも、理事長の妹のエリーゼ先生。

教頭のガイル・アンドリュウ先生が、理事長の側に立っていた。

「…まあ、座りたまえ」

理事長の一声で、三人は金の細工の、高級そうなイスに、それぞれ

腰掛けた。

「本題に入ろうか。…まあ、今日の午後から、今年のルネ・コンが始まるわけだが」

理事長は広いこの部屋の、わずか三人を見下ろして、

「現ルネ・ヴィライアーと絵画科の教員による採点が、例年通りおこなわれるわけだ。…リュオン、ヴィライアーの統率は君の責だよ」

「……分かってます」

リュオンは腕を組んで答えた。

「しかしまあ…今年は何学年の層が厚いですなあ。例年ならば、最終審査まで、二年生が一人いれば良い方だというのに…」

ガイル先生は丸い眼鏡を鼻に押し当て、そのリストの紙を見つめた。

「…ええ…、今年はある事件によって、コンテストに参加する生徒が大幅に減りました。しかも、最有力候補だった4年生のユリウス・デニスが、最終審査の直前に胃腸炎で入院。3年生のハルト・ウィリアムズはスイスのファームステイから帰ってきていませんので、このコンテストに参加していません」

「……………」

リュオンは頭痛がする思いだった。

理事長も低くうなると、

「…ユリウスはもう何年も前から、ルネ・コンの有力候補なんだけどなあ…。精神力が問題だね、彼は。…ハルトは何というか、自由人だよなあ…」

「大問題ですよ。実力の無い者にヴィライアーになられると…俺が困る」

リユオンは「どうなさるおつもりです」と言わんばかりに、理事長の方を向いた。

「いえ…デメリットばかりではありませんよ。低学年から選ばれる者が増えれば、長い間ヴィライアーでいるものが増えるということ。そうだった、ヴィライアー経験の長い者が卒業したとき、どういった表現者になるのか…楽しみではありません」

エリーゼ先生はクールにそう答えると、目の前の紅茶のカップを手を取った。

「エリーゼ先生の言うことは一理ありますぞ。心配なさるな、ルネ・テクタイト。今年はむしろ豊作ですぞ」

ガイル先生は、ダリのような髭をなでた。

「かの有名なラヴィー二家の長男も最終審査に残ってますし。いえ…鼻屑など致しませんよ。…それに…」

ガイル先生は理事長室に掲げられた、歴代理事長の写真をゆっくり眺め流した。

そして、端のひとりの男性を見た。

「旧理事長の奥様の弟子も残っているとか…。ここまで残ったのだから、やはりカトレア夫人は相当な教育者ですな」

「…そうだな。鼻肩する気はないが、お母様が、どういった者に目を付け、その者がどういった絵を描くのか、興味があるよ。……あの人の目にかなう者など、そうそう居ないはずだ」

理事長は瞳を細めた。遠い何かを思い出すように。

リュオンは黙って聞いていた。しかめっ面なのは元々だが、この話に興味を持たなかったわけではない。理事長から目を背けると、

「…期待はずれだったら許しませんよ」

「はは。リュオン…大丈夫さ。ルネ・ヴィライアーに導かれる者、何かしら持っているのだから」

ルネ・ヴィライアー・コンテストは平等を保つために匿名制。

全ては紙一重な絵の審査。

ここまで残ったものならば、誰が選ばれたっておかしくはない。誰が落ちたっておかしくはない。

全ては紙一重な一枚の絵によって、運命が分かれる。

天使も悪魔もそこにいる。

わかっているはず。

絵を描くというのは、そういう意味で難しい。

悴はたったの七石。

リュオンはルネ・ヴィライアーの集まっている部屋まで、一直線で帰ってきた。

部屋の外の廊下で、ひとりの男子学生が窓の外を見ている。

ふと、リュオンに気がついた。

「…おかえり、リュオン」

「…ティアン…」

眼鏡をかけた、その青年は5年生のルネ・ターコイズ。

団長補佐のティアン・レーゼスだった。

「今年は豊作だよ」

「お前も先生達と同じことを言うんだな」

リュオンはティアンに並んで、窓から外を見た。

悠大ともいえるルネ・ヴィルトンの敷地。
ギリシャの青い空の色。

「…ジェルとカイは去年の推薦ヴィライアーというのを抜きにしても、今年確実になれるだろうね。あの二人には、ヴィライアーでいてもらわなくちゃ…」

ティアンは眼鏡の奥で、ほくそ笑んだ。

彼は優秀な補佐だ。

リュオンを幼い頃から支えてきた。

「…ルネ・ヴィライアーになることは、このルネ・ヴィルトンを象徴すること。…想像以上に過酷なことだ。俺たちが一番わかってる」
リュオンは切れ長の瞳を、さらに細め、低い声でつぶやくように言った。

「…でも、美術界にどれだけ必要な存在か…。世界の美しいものを見に行ける…その舞台上に上げれる」

自分の表現者としての、

一番大切な物を、知りに行ける。

「俺たちは今年が最後だ。…俺にとって……一生できっと、最後の自由」

「……………」

未来の決められた者の、最後の時間。

「……心配しないで。間違い無く、今はルネ・ヴィライアーの黄金期だよ……」

ルネ・ヴィルトンの歴史の数だけ、ルネ・ヴィライアーの存在がある。

もちろんそれが、この学校の全てではないけれど。

それでもヴィライアーの存在が、歴史を左右してきたのは言いつまでもない。

今までも、これからも、沢山のヴィライアーがいる。

でも、この代のヴィライアーが、後に、

黄金期と言われ、長く語り継がれることになるのは、

全ては、この代のヴィライアーによって、大きく何かが動くことになるから。

リュオンは穏やかな窓辺から現実へと戻った。

そして、ヴァイラーたちのいる、その部屋の扉を開ける。

彼の、

彼らの選択が、

きっと、世界を変えた。

I
d
r
a
w

14：ルネ・ヴィライアー・コンテスト7 最後の審判

それは、

最後の審判

“青底”

海辺を歩いていたら、波に乗って、一つの小瓶が転がってきた。

何だろうか？

僕は、そっとその小瓶を拾い上げた。

おや？

ビンの中に紙があるぞ。

僕はその紙を取り出して広げた。

「はじめまして。そしてさようなら。

この星はもうダメです。

今夜、最後の水を飲みました。

僕はこの手紙をコロニーの前の沼に投げます。

いつか、いつの日に
いつかの過去や未来で、

誰かがこの手紙を拾ってくれますように。

3005 / 5 / 10
「

海が泣いている。

この手紙は海の底に沈んだ、
未来からの手紙だった。

風が僕のそばを通り抜けた。

誰かに呼ばれた気がして、
振り返った。

／以下省略

「海をこんな風に表現するのか。恐れ入ったな…」

美術館ばりの展示ギャラリー。

ルネ・ヴィライアーの一人、4年生のルネ・ガーネットであるシャ
ンデリー・リオールが、青い海の絵の前で佇んだまま、その絵のイ
マジンストーリーに身を委ねていた。

シャンデリー・リオールとは、金髪壁眼の、ルネ・ヴィルトンでも
非常に有名な人物である。

ここ10年で、唯一の2年生からのヴィライアーだ。

見目麗しい所もあって、彼は一躍学園の王子と称えられた。

そんな彼が見ていた絵は、細かい技術の光る、隙のない海の絵。

「リオ…!」

彼の腕に抱きついた一人の女子学生がいた。

「シーダ…、どこに行ってたの？」

「シャルロとちょっとね。…リオこそ、立ち止まっちゃって」

シーダと呼ばれた、その女子学生。

4年生ルネ・カーネリアンの、シルフィーダ・ケイドである。

「見てごらんシーダ。この絵…」

「……………」

リオに促されて、シーダはその絵を見上げた。

青と白と。

見えない海底に隠された物語。

シーダの目の色が変わった。

「……………素敵……………。美しい海なのに…、美しさを描いてるわけじゃないのね」

美しさとは

綺麗なものだけではないから。

* シャンデリー・リオール（ルネ・ガーネット）

* シルフィーダ・ケイド（ルネ・カーネリアン）

「……………」

みんながあっけに取られた絵がある。

スノーフリーク・ロズベルトは、ぽかんとした群衆の中で、相変わらず無表情だったのだが、

内心その絵に思うところがあった。

“地下迷宮”

土を踏む。

埋もれる。

キラキラ。

ドカンゴン。
ドカンガンゴン。

キラキラ。

落ちたと言っか滑ったと言っか

キラキラ

上を見る。

手を伸ばす。

チカチカ。
土が光る。

砂の妖精。
優しい怪物。

一番恐いのは、自分自身。

赤の色。

／続く。

「……………連載物？」

スノーは一人顔をしかめた。

彼にとつて、この絵を描いた人物はよく知っている人であり、また、絵があまりに強烈かつ野性的で、いかにもアカデミックとはほど遠い自由気ままなものなので、すぐに分かる。

「すっげーな…とうとうルネ・ヴィルトンもこういうのに手を出すような時代になったんだな…」

“斜め前の人”が、小声でそんな事を言っていた。

確かに今までは、こういう絵の種類の人がルネ・ヴィライアーになることは無かったから。

何を描いているのか、ハッキリとは分からない絵。

ビビッドの絶妙な駆け引き。

メインは自ずとわかる、そんな色との会話。

何も考えていないようで、数ある正解を導き出す、ある意味で物凄い絵画。

「凄いわね。デタラメそうで、でも間違っでないもの」

スノーの隣に、いつの間にかシャルロがいた。

彼女は、スノーとは裏腹に、アーモンド型の瞳に驚きの色を浮かべ

ていた。

“斜め前の人”は、「お、来たね小さいお姉様」とか、よけいなことを言ったので、彼女はそいつをにらむと、「…後で見てください。フレイ」と、小声だが、怖い口調だった。“斜め前の人”は、小さくさと逃げる。

「全く…」

彼女はブツブツ言いながらも、その絵を見上げた。
スノーも再び、視線を絵に戻す。

「これって…もの凄く計算されているわね…」

「…まあ、本人はわかってないかもしれないけどね」

「……知ってるの？」

シャルロは顔をしかめた。不思議そうというか、胡散臭そうにスノーを見上げる。

「………多分ね」

スノーはシャルロと視線を合わせずに、眉根を潜めた。

「花の絵って、スタンダードだけど、それ故に難しいわ」

「…コスモスかな…凄いや、極端に細い筆で仕上げてるね。…良い表現だ」

レッドはまじまじと、驚くべきそのタッチを見つめた。

「………待って……」

ナギはその絵から遠ざかり、振り返る。
その時の、何ともいえない静かな驚き。

爽やかな空気。

「驚いた…。花と花の間に人がいるわ」

「…何だった？」

レッドは小声で聞き返し、小走りでナギのところまで下がった。

何て遠近感。

人物は不確かなタッチなのに、確かな存在感だった。

“ 憧れ ”

私とあなたには、この花畑分の距離がある。

私は花の隙間から、

遠いあなたを目で追った。

私とあなたには、

この花畑分だけ距離がある。

ある日あなたは居なかった。

私はいつものように、あなたを覗いていたのに。

どこにいるの？

私は花をかき分けた。

コスモスが散る。

向こうがわに出たとき、

日差しが眩しさに目を覆った。

太陽の恩恵が、

あなたの視力を奪ってしまった。

／以下省略

静かに、厳かに、審査は続けられた。

絵に答えは無い。

「……大らかそうで、どこか強い。…人物像がわかる気がするよ」

理事長はある絵の前で、落ち着いた声で言った。

エリーゼ先生はその時の理事長の顔を、いつまでも忘れないだろう。

宝物を見つけた、少年のような顔だった。

“生き恥”

過去の罪も、忘れたわけじゃ無かった。

忘れていいわけない。

雨とラベンダー

霧とクロッカス

雲のような、私の憧れ

風のような私の恩師

私は生き恥をさらして、あなたを追います。

私の人生を変えてくれた人よ。

私は生まれ変わったりしません。

このまま、過去のしがらみを背負ったまま、

明るい世界を歩みたい。

／以下省略

エリーゼにも、理事長にも、絵には描かれていない、誰かを見た。それは、人物すら居ない、抽象画だったのに。

でも、それはよく知っている人のような、

よく知っている感情のような気がした。

「お母様は凄い人ね…。偉大だわ」

「おや…エリーゼ。君もこれは、お母様だと思っかい…?」

理事長は横目でエリーゼを見た。微笑む目元に、小さなシワをつくる。

エリーゼは、メガネの奥の瞳を、その絵画から離すことなく、

「少なくとも、私にとっては、お母様よ…。」

絵から読みとる物語。

正解は無く、

また、一人一人あると言ってもいい。

彼らはキクマサの絵に深い感動を覚えた。

目の肥えたこの二人すら、心を動かされたのだ。

それは、キクマサがきつと、絵を描く楽しさを一心に込めていたから。

欲もなく、ただ、絵を描ける喜びと感謝を

奇跡的なものを描いていたから。

最終審査に残ったのは20人。

審査員は絵画科のルネ・ヴィライアーと、60人余りの教授たちだった。

投票は採点制。

その合計点で、すべては決まる。

リュオンは相変わらずしかめっ面で、自分の採点用紙を見ていた。

自分の中で、答えは出ている。

絵から読みとれる、その人間性や、あふれる個性。

ルネ・ヴィライアーとして欲しい人材。

今年は思いの外に面白い。

イメージストーリーを通して、訴えかける絵が多い。

もちろん全てがそうではないけれど。

去年の、優秀な先輩方の抜けた穴を、埋めるだけの人材は居そうだ。

ボールペンが、番号を刻む。

点数を示す。

赤い絨毯。

大理石の壁。

そうやって、世界に導かれるように、

歴史に名を残す者は運命的に出会う。

リュオンは投票用紙を二度折って、

白い箱に入れた。

最後の審判は下された。

いよいよだった。

新生ヴィライアーの誕生。

六つの玉座に

誰かが座る。

I
d
r
a
w

15：新生ルネ・ヴィライアー

新たに玉座は与えられ、

宝石の王冠を授けられるだろう。

† 掲示板 †

> ルネ・サファイア <
ジェイル・クォーシヤン (3年)

>ルネ・ハウライト<
カイ・ヴォストン(3年)

>ルネ・アメジスト<
オノダ・キクマサ(2年)

>ルネ・トパーズ<
ルナシー・ミディエム(2年)

>ルネ・アクアマリン<
ヘルクローウ・ラヴィーニ(1年)

>ルネ・コーラル<
クレハ・ドルフォード(1年)

以上六名を新ヴィライアーとする。

確かにそう書いてあった。

あの最終選考から約三日。

キクマサとルナシーは、掲示板の前でお互い顔を見合わせた。

周りでは、ザワザワ騒がしい。

とにかく1年生と2年生が四人もいる、歴代でも例のないことに、驚いているやら憤慨しているやら、苦笑いやらで。

キクマサとルナシーはそそくさとその場を去った。

とにかく、人目のつかないところに行かないと、上学年のプライドに火をつけかねない。

バン!!

勢いよく444号室の扉を閉めた。

「…見た…?」

「見たわ。どついう事?」

ルナシーは口元に手を当て、何がなんだかわからないようだった。

キクマサも腕を組んで、その場をウロウロしながら、

「…柵からぼた餅って…ういう事かな…」

「何ですって…?」

「いや、日本のことわざなんだけどね…」

まさかというか、とんでもないというか

恐れ多いというか。

「…アメジストと…トパーズか…」

紫と黄の宝石。

栄誉ある称号。

「夢のようだわ。嬉しいけれど、なんだか怖い…」

「……………」

誰もいないその部屋で、埃が光に透けて散る。

静かな日溜まりに、

とんでもない事態に僕らは戸惑いを隠せなかった。

その日、フォルテは寝坊した。

起きたらキクマサが居なかったから、あいつ一人で合否を見に行っ
たんだな、と、多少ばつが悪かった。

急いで掲示板を見に行ったときの、

「ええええええ!!!」

と、とんでもない驚きようだったので、やはりキクマサと共に居な
くて良かったかな、といったところだった。

「だってお前起きなかつたんだから」

「嘘だ。そこまで本気で起こしにこなかつたくせに」

「当たり前だろ。その場でお前に慰められるのは御免だつたんだよ」

当然キクマサは受かつてるとは思っていなかったのだ。

ルナシーとは、掲示板前で落ち合ったけど。

「見たかつたなあ。お前等のビックリしてるどころ」

フォルテは何を想像しているのか。

宙を見てため息をついた。

444号室に、相変わらず籠城していたキクマサとルナシーの所に、先ほど凄い勢いでやってきたのが、このフォルテだった。

「……レイへのみやげ話が出来たなあ」

「……………」

キクマサとルナシーは、ふと顔を上げた。

「…今日、お見舞いに行くのね」

「うん。まあ、あんまり心配すんなよ。あいつ、もうすぐ退院出来るんだから…。大丈夫さ」

フォルテの口調は、とても信頼できそうなほどに、落ち着いた物だった。

この二人なら、きっと大丈夫だ。

ルネ・ヴィライアーの会議室が、いったいどこに存在するのかわからないのに、ルネ・ヴィライアーになってしまった。

「おめでとうキクマサ君！…！」

運がいいことに、レッド先輩が、たまたま目の前を通ったけれど。

「レッド先輩。どうも。…あの、ヴァイアーの会議室って何処ですか??」

キクマサはそこら辺をさまよっていた焦りから、いきなり聞いてみた。

レッド先輩は相変わらずにこやかに、

「絵画棟の最上階だよ。いいね、その誰もが知ってる常識を知らないところが」

「……スイマセン」

キクマサは、冷や汗ながらに、斜め下を見た。

レッド先輩とエレベーターに乗り込む。
彼に偶然会えて本当に良かった。

「今日の会議は戴冠式だよ」

「た、戴冠式!？」

キクマサは聞き返した。

「そう。宝石をね、貰えるんだよ。君も」

レッドは自らの胸のブローチを指差した。

その、深い煌めきを秘めた、ルビーのブローチを。

「君はアメジストだったね」

「…はい。…確か」

キクマサは多少控えめだ。レッドはそんなキクマサを、きよとんとした目で見ると、

「もっと自信を持ったほうがいい。運だけでなれるものじゃないんだから」

「……はあ」

キクマサはゆっくり頷いた。自信がないというより確信がないのだ。

と、その時だった。

エレベーターが、最上階に行く前に止まった。

誰か乗るのかなと、単純に思っていた。

「あ、団長」

レッドは、乗り込んできたその男に、当たり前にもうは言えたけど。

キクマサにとってはいきなりすぎる。

ルネ・ヴィライアーの団長である、ハク・リュオンである。

彼は、レッドには目もくれずに、鋭い瞳で、キクマサを見た。

「……わかった。ちょっと待て」

団長は、キクマサが何か言う前に、ストップをかけた。

「お前、オノダ・キクマサだろ!!」

「は、はい……。え……何で……」

キクマサは戸惑った。

リュオンは腕を組んで、

「俺が新メンバーの名前をチェックしてないと思うか？そして珍し

く唯一のアジア系だったから」

ぶっきらぼうな言い方だが、思いの外な事を言う。

「今年は1年生が二人もいるね、団長」

「そーだ。頭抱えるぜ、今年は」

リュオンはエレベーターの壁に背をつけ、眉間にシワを寄せた。

その時、再びエレベーターが止まった。

ドアが開いた時の、リュオンの嫌そうな顔と、乗ってくるその人のうんざりした顔。

「うーわ。頭痛い原因がここにも」

団長は、乗り込んできた女子学生に向かってそんな事を言う。

深い色の綺麗な巻き毛と、スマイレ色の瞳。小柄だけど、かなり気が強そうだ。

知ってる。

ルネ・アンバーのシャルロ・グレディアだ。確か4年生の。

彼女はこの学園の賞金女王で有名だ。

「嫌だ。変なのとぶつかっちゃった」

彼女は片腕を腰に当て、団長を見て鼻で笑った。

「何だとてめえ。相変わらず生意気だなシャルロ」

「団長こそ、相変わらずの単細胞具合ね。と言うより、どうしてもあなたが団長に抜擢されたのか、未だにわからないわあ」

シャルロは、印象的な瞳を、クールに流した。赤いルージユが、驚くほどよく似合う。

「何だと〜!？」

団長は、大層お冠状態に近かったが、彼女はツーンとしていた。リユオンは上から彼女にメンチを切る。

しかしシャルロは、

「あ、ご機嫌ようレッド先輩」

「や、やあシャルロちゃん」

団長を無視してレッドに愛想よく挨拶。

その視線がキクマサを捉えた。すぐにピンときたようだ

「あら、もしかして新メンバー？」

「あ、はい。オノダ・キクマサです」

キクマサは背筋を伸ばして、早口で挨拶した。

シャルロは、キクマサをじっと見つめ、そして横目で団長を冷やかに見ると、

「ヴイライアーには常識の無い先輩が多いから、君はそうならないようにね」

「お前を含めてな」

団長のツッコミに、シャルロは10センチはあろつかという、黒いヒールで、彼の足を思いつきり踏んだ。

「痛つてええ!!!!」

鈍い音と、悲鳴が、エレベーターに響き渡った。

最上階とは思いの他に遠い。

少なくともキクマサにはそう感じた。

エレベーターの扉が、やっと目的地で開いた。

相変わらず言い争っている、団長とシャルロがまず出て、レッドが出て、げっそりしたキクマサが出た。

「あの二人、とんでもなく仲悪いから気をつけて」

レッドが軽く耳打ちする。

確かに。

見てわかるほどの仲の悪さだ。

何でかは分からないけれど。

最上階は、素晴らしい空間だった。

まるで空中庭園のようだ。

中心部には噴水がある。

歩くたびに、靴の音が響きわたった。

団長たちについていきながら、ガラス張りの壁から透けて見える青い空を眺めた。

白い鳩が、斜めに横切ったのが、印象的だった。

会議室は一番奥に有るそうだ。

木の大きな扉が、彼らの称号を物語る。

リュオンが、その扉を開けた。

「……………」

半円を描く机。

それぞれの席に着いているヴァイライアー達。

彼らの視線が、こちらに一心に向かった。

「…お座りなさい。もうすぐ会議が始まりますよ」

前にいる女性の教授。

エリーゼ先生だ。

「エリーゼ先生はヴィライアーの主任なんだよ」

再びレッドが耳打ちしてくれた。

部屋を見渡して、ルナシーを見つけた。彼女が手招きをし、その隣の席に座る。

250

まだ全員が揃ったわけではなさそうだが、やはりルネ・ヴィライアーの集い。

何というか凄みがある。

その中に、自分が居るといふ、

この不思議な感覚を何と言ったらいいのか。

この学校の、

誇りと期待を一心に受ける

ルネ・ヴィライア！。

宝石の玉座。

キクマサは一つ深呼吸した。

今、ここに居る俺を、

カトレアさんはどう思うだろう。

夢のような事態に困惑して、忘れかけていた事がある。

カトリアさんは、

世界の美しい物を見てこいと言っていた。

ここで満足したら負けだ。

やっと、ここまで来た。

世界への切符を手に入れたのだ。

美術に、

芸術に、

あらゆる名誉と称号に、
翻弄されないように。

今座っている椅子から、転がり落ちてしまわないように。

I
d
r
a
w

16：戒めのアメジスト

未知と想像の象徴

ギリシアの神々による戴冠の儀式

幻想的なアメジスト

「遅れてすみません!!!」

仰々しい空気を裂くように、大きな声で扉を開けた者がいた。

ヘルクロウ・ラヴィーニ（１年）とクレハ・ドルフォード（１年）
だった。

キクマサは、白いフワフワの髪の毛のヘルは知っていたけれど、
その隣の、赤毛の少年は知らない。

二人は、啞然としている前で、息を整えながら、

「ヘルがいけないんだ！体力がないもんだから！」

「な、なにい！？ あれだけ道に迷って、あげくに根拠の無い君の
直感に振り回されたんだよ！！ 君みたいな野生児とは違うんだ！
！」

勇気ある少年達だ。

先輩たちの前で、遅れてきたというのに喧嘩を始めたわけだから。

バチバチにらみ合っている２人の前に、ご立腹な団長が現れた。そ
して…

ガン

人差し指を、何かちょっと立てた、あの痛いげんこつが投下されたのだ。

二人は、ギヤアと、悲鳴を上げてうずくまった。特にヘルなんて、親にも殴られたこと無いのに、と言ってもおかしくはない。

「てめえらしい度胸だな。遅れた拳げ句に、こっち丸無視で喧嘩しやがって…」
団長は、二人より遙かに身長が高いので、より一層凄い迫力だろうなと思った。

ヘルなんて、血統書付きの白いチワワみたいになってる。

「だって先輩、ここ分かんなかったんだもん」

赤毛の方は、頭をいまだにさすりながら、なんと反論してきた。キクマサはあんぐりして、手に汗握った。

確かにそうだけど。

泣く子も黙る、団長様だぞー！！

少なくとも、今のキクマサの団長へのイメージは、これだった。

しかし団長は、

「……確かにまあな」

顔は相変わらず怒ってそうに見えたのに、意外とすんなり認めた。

キクマサは、ほっとしたような、拍子抜けのような気もして、息をつく。

それまで、沈黙を貫いていたエリーゼ先生が、

「……早くお座りなさい、ルネ・アクアマリン、ルネ・コーラル。…
ルネ・テクタイト、あなたもですよ」

無表情が、むしろ恐ろしい。ヘルとクレハは、二つ名に慣れていないので、ピンとこなかったのか一時キョトンとしていた。

全員が、この場に揃ったことは、感極まりない事なのだろう。

新生ルネ・ヴィライアー。

エリーゼ先生は、一番前の大きな教卓から、この集結を確認していた。

「…今年も、こうやってルネ・ヴィライアーが選ばれ、集められるのです。今年の新メンバーの方は、ようこそ…この場所にやってきました。歓迎いたします…」

エリーゼ先生の言葉は、小難しいことは何一つ言っていないかったのに、とても響く。

「栄光に、溺れてはいけません…。あなた達は、その身を持って、芸術家の生き様を、この学校の生徒に示さなければならないのですから」

万人に、理解されなくても、

芸術とは、いつも歴史の一部として、目に見える形で後世に残るのだ。

エリーゼ先生は、赤い宝石箱を教卓の上に置いた。

鍵穴と、鍵の行方。

それは、本当に宝石箱だから。

その箱が開けられたら、全てが始まる。

全てが。

戴冠式とは、よく言ったものだ。

栄光の証し。

役目を忘れないための鎖。

キクマサは、紫の称号。アメジストの恩恵を受けたから。

エリーゼ先生は、宝石箱から、紫水晶の埋め込まれたブローチを取り出した。

その、謎めかしい輝きを。

「ルネ・アメジスト…未知と想像の象徴…。あなたの才能をかつているのは、きつと私達だけではないでしょう。精進なさい」

「……はい……」

キクマサは、その言葉の意味がよく分からなかったが、頷くしかなかった。

手渡された、そのアメジストが、冷たくて、重たくて。

軽いけど、重たくて。

恐いくらいに綺麗で。

新しいヴィライアーが、与えられた宝石の美しさに、

どうか、押しつぶされませんように。

一通り、戴冠式が終わった後の事だった。

宝石を身につけ、不思議な感覚に陥っていた新メンバー達と、それを興味津々に見ている先輩方。

エリーゼ先生は、宝石箱を嚴重に鍵かけた。

すでに中身は無いというのに。

「申し送れました。私は、ルネ・ヴィライアー主任の、エリーゼ・オーデールです。基本的には、絵画科四年生の担当です。そして……」

エリーゼ先生は、部屋の横の長机に座っている、若い男性教師に視線を向けた。

「今年の副任は、リース・ラヴィーニ先生です。研修は、私達2人が引率します」

エリーゼ先生に紹介され、リース先生が立ち上がった。

若くて、ジーンズがよく似合う先生だ。キクマサは余り関わったことはなかったが、絵画科教員の中では、一番若いのではないかと思う。

「え…、先ほど紹介されました、リース・ラヴィーニです。主に絵画科一年生担当で…、あ…お気づきの方いると思うけど、めでたくルネ・アクアマリンになったそのベレー帽の彼は、僕の甥っ子です」

何と。

なるほどラヴィーニ家の名を持つもの、やはり侮れない。

ヘルは恥ずかしそうにうつむいていた。

「今年の幹部を紹介いたしましょう。絵画科ルネ・ヴィライアー団長が、テクタイトのハク・リュオン…。副団長が、パールのメルベ

リー・セレネームです…。」

エリーゼ先生に視線で促され、五年生の2人が前に出てきた。一人はおなじみの団長だったが、もう一人の女性は、長いプラチナブロンドの髪の毛、柔らかく清楚な雰囲気を持つ、有名なメルベリー嬢であった。

彼女は、絵に描いたような、美しいお嬢様だ。

団長は、今更挨拶なんかする気はさらさらなくて、天井からモニターを下ろした。

そこには、いきなりピラミッドの写真が映された。

「さっそくで悪いが、ルネ・コンが長引いたせいで時間が無いから。今年最初の研修は…」

団長は赤いポイントレーザーで、ピラミッドを無駄にグルグル囲んだ。

「想像できるだろうが、“エジプト”だ。見てみる、このピラミッドを……。まあ…エジプトを知るのは、美術を知る上で、基盤的に大切な事だ。無駄な研修にするなよ…」

団長はそう言い終わると、メルベリーに目配りした。メルベリーは

軽く微笑むと、目の前のホワイトのノートパソコンを操作する。

モニターはすぐに変わった。

「研修は来週には出発する。カイロと、アブシンベル大神殿…そしてギザの三大ピラミッド…」

団長が名を出す都市や遺産を、追うようにモニターが移る。

キクマサは、勿論エジプトになんか行ったことはない。それでも、想像をかき立てる写真を食い入るように見ていた。

実際は、きっとこんなものじゃない。

こんな、想像なんてすぐに越えていく。

隣のルナシーも、同じように黙ってモニターを見つめていた。

「研修期間は約一週間。パンフレットを配布するから、目を通すように。……あと、カイは今日居るのか…？ 居ないか」

団長はヴィライアーを眺めた。どうやら一人居ないらしい。

キクマサは多少拍子抜けた。さっき、ヴィライアーが全員揃ってるのかと思つて、あんなに胸が熱くなつたのに。

恥ずかしいじゃないか。

「カイは今日も仕事か…たく…、研修だけでも参加させるぞ。テイアン…手配してくれ。」

「…わかつてるよ」

テイアンと呼ばれた、メガネの五年生は、その読めない表情でうなづいた。

我々新人から見たら、いまいちよくわからないやりとりであった。

「売れっ子の鑑定士さんは、いつも忙しいねえ。」

レッドが、机に肘をついて、かなりマツタリとした口調で言った。

「売れっ子だろうが、鑑定士だろうが、ヴィライアーである以上は、義務をはたしてもらわないとな。いくら世間があいつを“鑑定王子”とはやし立てようとな」

キクマサは目が点になった。しかし、ルナシーは何だか分かつたように小さく声を上げ、瞳を大きくさせる。

団長は、例の“鑑定王子”の話にウンザリしたように、

「あんな不登校野郎の話は無駄だ。本題に戻るぞ…。え〜…」

団長は、背後のモニターを振り返った。

「研修は、ただの旅行じゃない。しっかりと目に焼き付ける。いいか…新人ども…。絵だけ描いていても、絵は描けない」

団長は、前の机に手をついた。

彼は、とても確信的な事を言っていた。

「絵は、内容が必要だ。内容は、どうやって思いつくんだ…。発想は、どこからやってくるんだ…。それは、経験だ」

生まれてきて、今まで生きてきた、その経験。

同じ世界を見ていたって、何通りもの見方に気づく。

世界の美しさ、面白さに気がつく。

「絵だけ描いてればいいと思うな…。技術だけが先走る絵は最低だ。…長い人生の中で、いつまでも絵を描くためには、ここで、この時代に、あらゆるものを見に行くんだ。いづれ、どれだけ大切なことだったか思い知る…」

芸術家にとって、これほど大切に、

これほど気付きにくいことはないけれど。

団長は、前のめりだった上体を起こした。
彼の言ったことは、もっともだ。

キクマサは、雷にうたれたようにビリビリきた。

そうだ。

「……………」

カトレアさんが言っていたことは、この事なんだ。

「ここにいる奴らは、実際稀な経歴の奴ばかりだ。芸術において、
どんな人生を送っていようと、それら全てが大きな武器になる。や

ること成すこと、無駄なんてないぞ……。全部吸収しろ。ヴィライアーの研修は、そのための大きなチャンスだ」

団長は、鷹のような瞳で、一同を見渡す。

「ヴィライアーとしての役割を果たせよ。おまえらのゴールはヴィライアーじゃないんだ……」

ゴールなんて無い。

あえて言うならば千年も二千年も後にやってくるから。

芸術は、いつまでも歴史に残る。

研究される。

時代を示せる。

今残っている、歴史上の絵画は、いつまでも語られている。

そうだ。

それは、これからやってくる未来だって。

キクマサは、重くのしかかる何かに負けたくなくて、胸につけた、紫のブローチを握りしめた。

その、象徴を。

このブローチは、戒めだった。

今の歴史を刻む義務が、我々にはあるのだ。

d
r
a
w

17：トパーズの仮面

我々が、絵画を通して今の時代を刻むと言っているのなら、

どうして“ニコ”に彼女が居ないのだろうか。

ルナシーは、団長の言葉を聞きながら、ぼんやりとそんな事を考えていた。

そんな、大それた義務を持っている人はなかなか居るものじゃない。

でも、彼女はそうだった。

そうなるべき人だったのに。

ならばなぜ、神様は彼女から宿命を奪ったのか。

「……………ルナ……、どうした……？」

それは、会議のちょっとした休憩時間であった。五年生は慌ただしいが、それ以外は割とリラックスしている時間。

隣に座っていたキクマサに声をかけられた。

どうやら、私のもやもやした葛藤が面に出ていたらしい。

「……ちょっと……考えごとをしていたの……。ごめんなさい」

「……何であやまるの」

キクマサは顔をしかめた。

ルナシーは伏し目がちに瞳を細める。

だって、こんな事言えるわけない。

少なくとも、私はルネ・トパーズになったのだ。

それでも私はレイを諦められない。

私よりもずっとふさわしい。それは、一年前にあの子と会った日から、

あの子の絵を始めてみたときから、分かっていたことだ。

「……びっくりした…部屋にお姫様が居たかと思った」

初めて出会った時のことだった。彼女は私にそう言って驚いたけれど。

私はきつと、もっと驚いた。あの一番上に掲げられた衝撃的な絵画を前に。

どうしてこんな絵が描けるのだろう。

鳥肌がたった。

「……レイのこと考えてるだろう」

不意にキクマサが呟くように言った。
ルナシーは顔を上げる。

ザワザワ、会議室の中はそれぞれの話題で騒がしいのに、ここだけ
いやに静かな気がした。

「考えても仕方がないのに…」

「……そうね」

ルナシーはこういう考えが、今や意味のないものだとちゃんとわか
っていた。

キクマサもわかっていた。

ルナシーはキクマサを見ることができなかった。

彼は、ちゃんと受け止めているのに。

自分はいまだにトパーズを直視できなかった。

「レイが悪いと思ってるの？」

「…そうじゃないわ。ただ、レイならきっと、未来に残る絵を描け
ると思っていたから…」

ルナシーは、先ほどの団長の言葉を意識せずにはいらなかった。
キクマサは、少し間を置いて、

「……それは…ルナにはできないの？」

「……」

単刀直入で、ダイレクトな切り返し。

ルナシーはハツとしたように、キクマサを見上げた。

「……レイがいなかったとはいえ、ルナはヴィライアーになったの
に……」

「……キク……。私を見損なった…？」

ルナシーは、少しだけ悲しそうに笑った。

キクマサは、その言葉に多少ヒヤツとしたが、

「いや…、俺にもその気持ちは…よくわかるよ…。ルナを見損なう
なんてあり得ない。でもさ…、もしレイが、この世界に必要なだった
ら……きつと帰ってくるよ」

根拠もないのにそう言ってしまった。

ルナシーは、とても驚いたような顔をしていた。

再び会議が始まった。

今度は、エジプト研修についての細かい説明だった。

ルナシーは多少上の空で、モニターの向こうの世界よりもっともつと遠くを見ていた。

キクは凄い。

先ほどのちょっとしたやり取りで、ルナシーは本気でそう思った。

前々から、彼は多少、そう言つところがあるなとは思っていた。私の一歩前を歩くところが。

何だかクールそうで、でも意外と抜けてて、そう言うところが実に面白い人だと思っていた。

ただ、彼の過去に何があったのかはわからないが、ここぞという時には本当に冷静だ。

彼も、私と同じようにレイの絵を見ていたと思う。

悔しさすら通り過ぎてしまっ、先に立つ憧れを。

あなたの、レイの絵をみる瞳は違った。

私の絵なんて、気にもかけていなかったくせに。

キクマサと初めて会った日の事は、今でも覚えてる。

私とあなたは、きつととても印象的な出会いをした。

だから、私たちが仲良くなるのに時間はかからなかった。

彼は私をルナと呼び、私は彼を、キクと呼ぶ。

そして、あなたの絵を、初めて見た。

「……………」

他の誰も気付かなくなっただって、私はわかった。

レイとは違うタイプの天才。

恐ろしいまでの将来性。

彼自身がそれに気付いてなかったけれど。

私だけは気付いていたの。

あなたは、ルネ・ヴィライアーに成るべくして成ったのよ。

何で、こんな人たちが居るんだろうと思っていた。

絵を描くのが大好きなのに、私はたまにわからなくなる。

フォルテは多少私と境遇が似ていたかもしれない。

でも彼は、絵よりも大切なものがある上での絵画科のように思う。
それが何かはわからないけれど。

一度だけ、フォルテに聞いたことがある。

「レイの絵を……ずっと見てきたのでしょうか。……自信を無くす時って
ない？」

フォルテは、暇さえあれば鉛筆を削っていたから、その手を止めて、
「……そりゃあ……昔はあったよ。でも……多分俺って相当なファンな
んだよね。レイの絵の」

レイに絶対言わないでって言われたから、誰にも言っていないけれど、

とても素敵な考え方だと思った。

この時ほど、レイを羨ましいと思ったことはない。

レイが大好きだった。
彼女は自分の才能を、全く鼻にかけない。私とは正反対で、常に前向きだ。

羨ましくて、眩しくて、

眩しくて苦しかった。

何で、こんな人が居るんだろう。

そんなことを考える時もあった。

なのに

あの日、私たちの秩序は崩れ去った。

レイが、片目を失ったあの日。

頭が真っ白になった。

私は彼女を恨めしく思っていたくせに。

あんなに悔しい思いをしたのは初めてだ。
彼女がもう、絵を描けないなんて。

自分すらわからなくなった。

私は彼女に、絵を描いてほしかったのか、そうじゃないのか。

モニターが、スフィックスを映していた。

視界は正直だ。

嫉妬心が悪いものだとは思わない。

私はそういう女だ。

誰も知らない。

キクマサだって。レイだって。

フォルテは、ちょっと気付いていたかもしれない。

表ではあっけらかんとしているくせに、あの人は本当は凄く賢い。

多少読めないところがあるし、割と客観的に人間を観察している。

でも、それも多分私しか気付いていない。

自分で言うのもあれだけど、みんなからの私のイメージって、きつと、

やさしくて、かわいくて、いつもにこやかなルナシー。

女の子らしくて、気が利いて、学年のマドンナ。

そう言ってくれるのは素直なせいじゃねえよ、

なんて意味がなくて、つまらなくて、

なんてばかばかしいの。

誰にも、私の仮面は外せない。

外させやしない。

「…ルナ…大丈夫？」

いつの間にか、モニターの画像を見るために暗かった部屋が明るくなっていた。

隣のキクマサが小声で聞いてくる。

ルナシーは、何てことないように微笑んで頷いた。
そろそろ切り替えなくては。

突然、会議室の扉が開いた。

ネイリー先生だ。

「推薦ヴィライアーが決まりましたわ…」

彼女は確かにそう言って、エリーゼ先生に目配りをした。

エリーゼ先生は軽く頷くと、

「いったん会議を止めましょう。今年の推薦ヴィライアーが決まったようです…」

キクマサとルナシーは目を合わせた。

そう言えば、そんなものがあつたな、と。

自分達は二年生だから、これを目指していたのに、いつの間にか忘

れていた。

一瞬部屋中がザワザワしたかと思っただら、みんなの視線が扉に集中した。

ネイリー先生は、扉から少し離れて、

「大丈夫ですか…？」

その“誰か”を呼んでいた。

キクマサとルナシーは、それが誰だかわかると、

驚きと、興奮と、押し寄せる胸の鼓動に声が出なかった。どうしたって、声が出なかった。

扉の前には、フォルテがレイを支えながらやってきた。

レイは片目に眼帯を巻いて、いつもの彼女のように凜と立っている。

ルナシーは、口を手で覆った。

小刻みに震えながら、目を見開いて、彼女を見ていた。

その瞳から、ゆっくりと涙がこぼれた。

「…………ルナ……」

キクマサは、ルナシーを見て、レイとフォルテを見て、そして再びルナシーを見た。

ルナシーは、立ち上がってレイに駆け寄った。

幻でも見ているのかと思った。

レイが居る。

考えすぎて、きっと夢でも見てるんだわ。

「推薦ヴィライアーは、二年生の、フォルテ・ゴツドバルトと、レイデル・リローズです。」

ネイリー先生は、確かにそう言うと、そっとルナシーの方を見た。彼女もまた、ネイリー先生と目を合わせた。

信じられないという、ルナシーに向かって、先生はやさしく微笑んで頷く。

胸が苦しい。

信じられなくて、うれしいなんてものじゃない。

先ほどまでの葛藤に、この瞬間答えを出した。

レイは、きつとこの世界の歴史に残る。

神様は、彼女に障害を与え、そしてきつと、

それすら乗り越えた伝説を与えるのだろう。

そして、レイは私にも必要だったのだ。

彼女が居たからこそ、今の私がルネ・ヴィライアーとして存在するのであり、

キクマサが同じように、ここに居るのであり、

そして、フォルテが居たからこそ、レイがここに居るのだ。

誰一人、欠けずに、必要な存在だったのだ。

私はレイに駆け寄った。
何も考えてはいなかった。

あなたが再び、絵を描くために筆を取る。

私はそれを、望んでいたのだろうか。

「ルナ……!!!!」

レイは、おぼつかない足取りで、駆け寄るルナシーを受け止めた。
ルナシーは、しっかりとレイを抱きしめると、

「お帰り…レイ…」

涙声でそう言った。

レイは、片目を潤ませながら、

「わ…私ね…絵を諦められないの…」

「ええ…、そうに決まってるわ…」

ルナシーは、レイの顔をしっかりと見た。
その眼帯を。

「こんな所で終わる、あなたじゃないもの」

今にわかるだろう。

彼女が帰ってくるか来ないかで、私たち四人の運命が、きっと変わってしまっただであろうことを。

キクマサはさりげなくフォルテを見た。

フォルテは、キクマサの視線に気がつくど、

『説得するの、けっこう大変だったんだぜ』

と言わんばかりに、肩をすくめた。

静まり返った、他のヴィライアーをよそに、

これだけは、この四人にしかわからないドラマだった。

I
d
r
a
w

* drawコラム 〈絵画科ルネ・ヴィライアー〉

〈絵画科ルネ・ヴィライアー〉

ルネ・ヴィルトン美術学校の中で最も多いヴィライアー数である。称号は全て宝石から成り立っていて、どういう基準で割り当てられるのかは、いろいろな説が立てられているものの、はっきりとはわかっていない。今の所、最も活躍しているのは四年生組である。基本的に、天才肌の変わり者が多い。

<五年生>

- * ハク・リュオン：「ルネ・テクタイト」/ 団長
- * メルベリー・セレネーム：「ルネ・パール」/ 副団長
- * テイアン・レーゼス：「ルネ・ターコイズ」
- * レッドリー・ヘッドバーン：「ルネ・ルビー」/ 男子寮長
- * サイオンジ・ナギ：「ルネ・ダイヤモンド」

<四年生>

- * シャンデリー・リオール：「ルネ・ガーネット」
- * シルフィード・ケイド：「ルネ・カーネリアン」
- * フレイ・レステヴァン：「ルネ・エメラルド」
- * スノーフリーク・ロスベルト：「ルネ・オパール」
- * シャルロ・グレディア：「ルネ・アンバー」

<三年生>

- *カイ・ヴオストン：「ルネ・ハウライト」/国際鑑定士
- *ジェイル・クォーシャン：「ルネ・サファイア」

<二年生>

- *オノダ・キクマサ：「ルネ・アメジスト」 主人公
- *ルナシー・ミディエム：「ルネ・トパーズ」 ヒロイン
- *フォルテ・ゴッドバルト：「ルネ・クリスタル」
- *レイデル・リローズ：「ルネ・ペトリファイウッド」

<一年生>

- *ヘルクロウ・ラヴィーニ：「ルネ・アクアマリン」
- *クレハ・ドルフォード：「ルネ・コーラル」

/以上18名

主任ノエリゼ・オーディール(36)
副任ノリス・ラヴィーニ(24)

次回のセミナーは<二年生>です。

I d r a w

18：エジプトプラン1〜暗雲〜

世界遺産と呼ばれるものがある
なぜ、それが生まれたのか

人間が、やっとその重要性に気付いたからだ

根本的な、この地球にとっての

エジプトプラン

「ねえ…何だか今年、いやに研修早いと思わない？ 去年ってこんなにすぐあったかしら」

「…そういえばそうだなあ…」

廊下がザワザワしている。

四年生のルネ・ヴィライアーが、その威光を放ちながら闊歩しているからだ。

彼らほど、カリスマ性に富んだ学年はない。

「考えすぎなんじゃねえの。たまたまだろ…深読みし過ぎなんだよ、シャル口様は」

その中の一人、フレイ・レステヴァン（エメラルド）は、気怠そうにあくびをした。

彼は、アッシュブラウンの髪の毛、多少チャラつとした風貌の男だ。

シャル口は彼を冷ややかに睨んだ。

フレイのあくびにつられたのか、スノーまでもが眠そうだ。

「……でも…シャル口の深読みって、基本外れないけどね」

「スノー、たまには俺の味方もしろよ。ルームメイトだろうが」

フレイは、隣のスノーを、期待度の低そうな、諦めかかった目で見る。

スノーは気にも留めずに、もう一度あくびをした。

「まあまあ、喧嘩なんかしないで…。みんな見てるよ」

リオは、火花の散りかねないこの場をおさめようと、必死だった。それでもなくても目立つのだから。

「……………」

でも、実際問題、一番目立つのはリオだった。

彼は、ルネ・ヴィルトンきつての美男子だったから。

しかし今更、この学校の女子たちは、彼をどうすることもできなかった。

「……………」ところで、シーダがどこに居るか、シャルロ、君知らない？」

「……………」先生の所よ」

彼にはすでに、彼女のためなら地獄にだって行ける、と豪語できるくらい大切な人が居た。

同じく、四年生のヴィライアー、シルフィーダ・ケイド（カーネリアン）だ。

今彼女は、先生に呼び出されていていないけど。

リオは「そうか…」と、微かに微笑んだ。

金髪碧眼の、まさしく王子様。性格も非のつけようがないくらい完璧、と言われている。

でも、彼が最も輝いて見えるのは、シーダのことを見ているとき。シーダのことを話しているときだった。

それは、彼を慕う女性から見れば、複雑なことだろうけれど。

しかし、四年生ヴィライアーにとってこの二人のバカップルぶりは、いつものことであった。

「よくあんなうるせえ母親みたいな女と、長続きするよな」

フレイの嫌味もいつものことだった。

シーダは、ツヤツヤの髪を二つに結って、背筋を伸ばして、エリゼ先生の元を訪れていた。

「入ります、先生……」

彼女は、扉をノックして、先生からの返事を待って、それから部屋に入る。

「呼び出したりしてすいませんでしたね…、ルネ・カーネリアン…」
エリーゼ先生は、机の上に山積みになった資料を横にずらすと、眼鏡を押し上げた。

「いえ…なんかいけない事したかなって、ヒヤッとしましたが」

「あら…あなたのようなしっかりした生徒は、他に居ませんよ…。
このルネ・ヴィライアーに、あなたのような人が居て安心している所なのでから」

「はあ…問題児ばかりですからね…」

シータは、四年生全員の顔を思い出して、大きくため息をついた。
私がつっかりしなくてはって、普通の人なら思う。

「本題に入りますが、あさつてのエジプト研修についてです…。
現在、エジプト流行している感染症はあるでしょうか。今だけではなく、過去にはやった病や、気をつけた方がいい事…」

「それは…たくさんありますよ。水にも気をつけないといけませんし…。砂漠に行くのならサソリにも気をつけないと…。というか、行きませんよね。そんな所」

シータは、おそろおそろ聞いてみた。しかしエリーゼ先生は、心配になるくらい涼しい顔だ。

「それはわかりません。この研修…なにが起こってもおかしくないですよ。状況によっては、医者もガイドも呼ぶ事ができなくなる事

もあるでしょう。この私にも、エジプト研修がどうなるのか、予想もつかないのですよ」

「それは、一体全体どういう事ですか。そんな事…、今まで一回もなかったじゃないですか」

シーダは、先生の言葉に、理解が示せなかった。いったいどういう事だ。

「ここでその答えを言う事はできません。言ってしまうば、答えを想像する事もできない」

「答え…？ 想像……？？ 何の話ですか」

わからない事はばかり言うものだ。

シーダは眉根を潜めた。

しかしエリーゼ先生は、平然とした顔で、

「この研修は、今までのものとは大きく違います。とある人物から、依頼されて行くものだからです。ただ、事がおこったとき、最悪な事態は避けなければいけません。だから、あなたにだけ少しお話をしました」

「……………」

シーダは、とにかく、先生が何を悟らせたのか、必死につきもつとしていた。

「…納得は行きませんが、わかりました。…何がおこるのかは教え

られないけど、あらゆるパターンを見越して、内密に対策しておけると言う事ですね」

シーダは、説明口調だ。

エリーゼ先生は、正解と言うようにほくそ笑んだ。

「やはりあなたは賢い。こればかりは、団長および副団長には任せられない。幼い頃から医療を学んできたあなたですから。そして今も……」

「先生……私の事は誰にも言わないでくださいね。特に、リオには……」

彼女は、少し視線を落として、自分の腕を握る力を強める。

知られたくない。

特にリオには。

「……ええ。わかっています。あなたがこの学校に居る理由を、私たちは理解しているつもりですよ」

先生は、机の上に再び資料を置きながら、彼女に語りかけた。

「……すみません先生。私……ルネ・ヴィライアーで居るの、おこがましいとは思っているんです。リオや……シャルロみたい、才能がある訳でもないし、将来画家になる訳でもない……」

シーダは、窓から、ルネ・ヴィルトンの空を見た。

絵を描くのは好きだけど、これは私の生きるべき道ではない。

なのに、ヴィライアーでいる事の矛盾を、考えない事はない。誰もが、絵を描きたくて、ヴィライアーになりたいと思っっているのに。

「…なにも、芸術家だけが、ヴィライアーのとるべき道とは限りません。絵を学び、世界を知った人が、他の分野で斬新な発想を生み、歴史を作る事だって必要なのです…。それに、私たちは、実力の無い者をヴィライアーにしたりしません」

「…はい」

シードはゆっくり頷いた。

先生の言葉は、いつも力強い。口調は淡々としているのに、その内容が。

「わかりました。内々に引き受けましょう。……赤十字の名の下に」

私には、彼らを守る義務がある。

「ねえ…わかつてる？ 研修って遠足と違うんだよ」

ヘルは、さっきからリュックサックにチョコレートばかり詰め込んでいるクレハにいいよ突っ込んだ。

「…俺にとつちや大事なアイテムなんだよ。三時間に一回は食べないと、ヤバいんだって。俺、チョコレートだから」

「何だよ……チョコレートって」

ヘルは、相変わらずマイペースを貫くクレハに、頭を抱えた。

「懐中電灯いるかな。だって、ピラミッドとか見るんだろ。」

「あのねえ…俺たちが見るのって、観光客が見るのと同じようなものだよ。…発掘しに行くんじゃないんだから」

「え〜そうなの！！？」

クレハは、非常に残念そうに、変な声を上げるとカクンとうなだれる。

それでもちやつかり、懐中電灯をリュックに詰めていたけど。ヘルは、育ちのいいおぼっちゃまらしく、着替えの衣類をカバンに詰めていた。

「なあヘル、エジプトって近いのか」

「何言ってるの。目と鼻の先じゃない」

「ドイツより近い？」

「……？ うん、そりゃあ…海を越えなきゃいけないけどね」

クレハは、下唇を出して、眉根を寄せた。非常に真似できない顔だ。

「あゝあ、何て顔だよ」

ヘルが突っ込むと、その顔をこちらに向けたから、たまらなく吹き出した。

「どう思います？ リュオン…今回の研修、今までと何か違いますか？」

メルベリーは、団長の腰掛ける向かい側から、お茶を持ってきた。不意打ちだったので、驚いた。

リュオンは、今回の研修のプランを、くまなくチェックしている所

だった。

一度咳払いをして、メルベリーの持ってきたオレンジペコーを一口飲むと、

「今回は、あらかじめ、指定された研修だ…。エリーゼ先生は何か隠しているな…」

無理矢理口調を落ち着かせて言った。

「大変な事にならなければいいのですが」

「…どうかな。ルネ・ヴィライアーの教員は容赦ないぜ。…多少の危険は何とかなると思ってる」

団長は、しらじらと答えた。実際、奴らは、ヴィライアーをあからさまに過保護に扱わない。

多少無茶しないと、つかめない事があると、知っているからだ。

メルベリーは、自らのティーカップの淵に手を添えると、揺れる飴色の水面を眺めた。

色素の薄い、プラチナブロンドのまつげが、頬に陰を落とす。

リュオンは、メルベリーを横目で見た。彼女が来ると、空気が澄む気がする。

今まで、色んな美人を見てきたけれど、ここまで儂げな、慎ましかな女性はいない。今の所彼女しか知らない。すこく気が利くし、献身的だし、文句のつけようの無い、完璧なお嬢さんだ。

さすがのリュオンも、彼女をむげに扱いはしなかった。

「…？ どうかしましたか？」

「いや…別に」

団長は視線を逸らすと、再びプランの紙を見た。

何かが起こる予感がしてならなかった。

エジプトの歴史は深く遠い。
いまだに暗い、混沌とした謎に包まれている。

これは、我々が初めて触れた、世界の真実の一つ。

物語を終わらせ、結末を創造する。
答えを想像する。

過去も、今も、未来も、本当は行ったり来たりして、歴史を作っているのかもしれない。

美術品とは、

いったい何のために作られたのか。

何が、始まりだったのか。

I
d
r
a
w

19：エジプトプランとフライト

ヨーロッパの文明に、大きく影響した、エジプト美術。

ナイルの賜物。

我々は、失いかけた重要な遺産を、守るための、法を定めた。

「世界遺産の始まりって、エジプトなんだよ」

「……そうなの？」

キクマサは目を丸くさせた。

ここは、既に飛行機の中。我々は、ギリシアからエジプトまで、短い空の旅を満喫していた。

「エジプトに“アブシンベル大神殿”って言うのがあるんだけど、
…まあ、お前が知っているとは思っちゃいないさ。それが、世界遺
産の始まりだ」

フォルテは、飛行機の中で、サービスで配られたレモネードを飲み
ながら、いつものように説明係になっていた。

「1960年、世界遺産誕生のきっかけになった、事件が起こる。
…アブシンベル大神殿っていうのは、もともとナイル川上流のヌビ
ア地方ってところにあっただけけど…そこにダムを造ろうってつて
ことになったわけよ」

フォルテは、持ってきていた、エジプトのガイドブックをキクマサ
によこした。

そこには、四体の巨大な像が守る神殿が載っていた。

「“アブシンベル大神殿”や、ヌビアの遺跡群は、貴重な文化財に
も関わらず、水没の危機にさらされた。…でもな、ダムを造る事自
体を責められやしない。エジプトに住む人たちにとっては、必要不
可欠のものだったから…。ま、確かにそうだよ。裕福な国にすむ俺
たちが、ダムを作るなっつたって、説得力無いよ。現地の人たちに
は生活がかかってんだから」

「…なるほど」

キクマサは大きく頷いた。

ダムを造るせいで遺産が沈むなんて言ったら、裕福な国のやつに限
って、それは駄目だとかって反対するけれど。

もの見次第で、見える景色は違うのだ。

「実際、こういうのって、すつごく難しい話なんだけどね。確かに、遺産とかって、これからの時代に残さなきゃいけないんだから。“アブシンベル大神殿”は沈みかけたけど、救済キャンペーンでダム湖よりも高い丘の上に移設された。これがきつかけなんだ。世界中が注目して、見守った事で、各国の文化財はその国だけの問題じゃなくて、“人類共通の遺産”っていう認識が生まれた。これが、一番凄い事だよ」

「助かったのか…その神殿」

キクマサは、少し安心した。てつきり今は湖の中なのかと思った。フォル手は苦笑いする。

「まあね…かろうじてかな。ブロック状に切り取られて運ばれたから、元のままとはいかなかったけどね」

「うわ……超耳痛いんですけど……」

フレイはとても不機嫌そうな顔をしていた。

「あんだ…いつつも駄目よねえ。飛行機」

シャル口は彼を見て、馬鹿にしたように笑う。
はなからフレイを助ける気はないようだ。

しかしシーダはほっとけないように、身を乗り出すと、

「いつも言ってるでしょう。耳抜きしなさい。ほら鼻つまむ…！」

容赦なくフレイの鼻をつまんだ。

「痛ってえ…！」

「鼻から息を出そうとして。耳がパチンって言ったら、成功よ」

フレイはもはや言われるがままに行動するしかなかった。

どうやら成功したようで、シーダは彼の鼻を離した。

フレイの隣で、スノーが無言で、その一部始終を観察していた。そしてどうでもよくなったようで、寝返りを打つ。

「…母親と不良息子のようねえ」

シャル口は、呆れたように、足を組み直す。

シーダはやっと自分の席に正しく着いた。

「シーダは、困った人を放っておけないんだよ」

「あんたがそんな調子だから…、まあいいけど」

ニコニコしているリオにも、大概呆れるけれど。
スノーは、一人マイペースを保ち、アイマスクをつけて夢の中だった。

エジプトとギリシャは近く、歴史上深く関わり合った国だ。

青い海を越えると、見えてくる砂漠と、異国の空気。最初に降り立ったのは、首都カイロだった。

もちろんキクマサにとっては初めての地で、体中で感じるエジプトの空気に、圧倒されたのは言うまでもない。

「え、いよいよエジプトに着いた訳だが……、おいその一年！
！ 俺の話の聞け！！ 次浮かれてたら、ピラミッドに閉じ込める
からな！！！！」

団長は移動バスの前方で、“研修のしおり”をメガホンのようにして、はしゃぐ一年をしかる。

ヘルは、ピラミッドに閉じ込めると言うフレーズにびくついたが、クレハはおかまいなしで、窓から見えるあらゆるエジプトを叫んで

いた。

いよいよ団長は、丸まったしおりで、スコーンと、勢いよくクレハの頭を叩いた。

「だ〜ま〜れ〜!! 小猿野郎〜!!!」

「痛ったあ!! 何すんだよう団長!!」

「そりゃ、こつちの台詞だ。営業妨害で訴えるぞ」

団長の恐ろしい顔の前で、クレハは何事も無いかのようにきよとんとしていた。

どうやら、クレハには常識が通用しないらしい。

レッドはさわやかに笑うと、

「すごいねえ、リュオンと渡り合えるなんて。君大物になるよ」

前の座席を何度か叩いている。

団長は、眉根を寄せた状態で、困り果てたようにダンと足踏みする。バスの中でそんな事したら危ないけれど。

「いい加減な事言っな。そしていい加減、俺の話聞いてくれ」

切実に聞こえて、キクマサは自分だけでもちゃんと聞いてあげようと思った。

個性豊かなメンバーをまとめるのだから、団長って言うのも楽じゃない。

カイロの中心部にある、大きな大きな、それは立派なホテルが、我々の、エジプト研修の拠点だった。

「何てこった。こんなホテル泊まった事なんか無いよ」

「……同じく」

キクマサとフォルテは部屋を開けたとたん、一度絶句して、よくよく見渡して唾を飲み込んだものだ。

ヴィライアーの男子を二手に分けて、大部屋に泊まるといった感じだった。

この下級生組は、キクマサ、フォルテ、ヘル、クレハ、そしてまだ見ぬ三年生のカイ・ヴォストーンだった。

団長曰く、彼は今日の夜に到着するようで、

「それまでは、この幼稚園児どもの面倒はお前ら二年生が見ろよ」

ということだった。

「……カイ先輩かあ。いまだに実物と話した事無いなあ」

部屋で、やっとくつろいでいるところだった。大きなふかふかのソファにもたれかかりながら、夕食までは自由時間だと言っのだから、思う存分だらけていた。ヘルとクレハは部屋中を駆け巡り、大きな屋根付きベットをトランポリンにして遊んでいた。最近、ヘルまで元気な子だ。

「知ってるんだ……」

キクマサは、大きな液晶テレビをつけ、なんか面白い番組でもやってないかと、チャンネルをいじっている。

「知ってるものにも、ちょー有名人だ。よく鑑定物の番組に出てるよ。あんな若いのに、国際鑑定士の資格持ってんだから」

フォルテの口調から、凄い事なんだろうとは思ったけど、いまいちピンとこなかった。

まず、鑑定士って何。

と、そのときだ。

たまたまつけたテレビのチャンネルに、一人の青年が映った。

凄くイケメンと言う訳ではないが、まじめそうで、なかなか体格の良い、好青年と言った所だ。

黒い短髪と、テレビ慣れした笑顔。

“そのおいしさ、まさに世界レヴェル”

青年は、ペットボトルの飲料を、勢いよく飲んで、何だかとてもすつきりした顔をした。

そして、その飲料を前に突き出して、

決め台詞。

「こいつは憎いですね」

“先生も認める、この一本”

スーパー・コーク

「ルーブル美術館の旅、当たります」

「……………」

「……………」

テレビの光と、何も知らない一年生の無邪気な声だけが、その空間の全てだった。

「……………見た？」

「……………うん。まさか、あれがカイ先輩？」

フォルテは、小刻みに頷くと、あごに手を持って行って、深く唸った。

先ほどの驚きが、今更興奮に変わったようだ。

「凄いな、カイ先輩。これで5本目のCMだよ。先輩の決め台詞は、流行語大賞にノミネートされたんだから」

「……………」

先ほどの説明ではわからなかった彼の凄さが、身にしみるほど理解できた瞬間だった。

I
d
r
a
w

20：エジプトプリンセスのお疲れの鑑定王子

夢を見た

長らく封印していた、世界の真実に辿り着く日の事を

錆び付いた鍵が今にきつと、扉を開ける

その日夜になって、本人に会うまでに、いったい何度カイのCMを見たか。
彼はちょうど夕食後の、会議時にやってきた。

「すみません！！ 長らくお待たせしました！！」

「やっつと来たか、この野郎！！！ お前がここに来るまでに、お

前の新作CM何回見たと思っただよ!!! さつさと座れ、アホ!!!」

団長は、浴びせるように暴言を吐く。カイはのけぞって、その衝動に耐えていた。

彼は今まさにやって来たばかりという格好で、大きな旅行トランクを持っていた。

そのトランクを会議室の隅に置くと、そそくさとなが机に付く。

大きいため息をつき、ひどくお疲れのようだ。

「喜べ。やっと、我々絵画科の研修着が、デザインチェンジされた。去年までの研修着を作っていた、ファッションデザイン科のメンツが、とうとう卒業して行ったからだ。今年のは、去年までの芋ジャ―とは違うぜ」

団長は、前の机に、段ボール箱を置いた。

「各自、サイズにあったものを持って行くように」

先輩たちはザワザワしている。

去年のものがいったいどういう風に酷いのか気になる所ではあるが、今年のは凄く良い物であった。

「格好いいね。確かに制服より動きやすいな」

黒い上着には、沢山のポケットと、胸には銀の細長い板に、“R・

V・O”と彫られていた。(ルネ・ヴィライアー of オイルの略) 腰にはベルトが付いていて、ポーチを取り外し出来るなど、何かと便利そうだ。

ただ、こんな立派な研修着が要るほどの何かをするのだろうか。探検でもするって言うのか。

ちゃんと揃えられたブーツと、ヘルメットみたいな帽子が、かなり気懸かりだった。

「要するに、その服は“体操服”みたいなものだ。まあ、制服で行く研修もあれば、研修着でないとマズい研修があるわけよ…。それは事前に団長が指示してくれるだろ」

リース先生が、段ボールの箱を整理しながら、我々の不安そうな顔に気付いたのだろう。
さりげなく話しかけてきてくれた。

「お前ら幸せだぜ。去年までの研修着は酷いもんだった。あれは趣味の悪いジャージに等しいぜ」

「何で、そんな研修着だったんですか？ 仮にもルネ・ヴィルトン

のファッションデザイナー科が作ったんでしょ？」

フォルテは、首を傾げた。

リース先生は、何だか嫌な事を思い出したような顔を見ると、「あー」と曖昧に説明しだす。

「四年前のファッションの団長が、当時の絵画科の団長とすっげー仲悪かったんだよ。あげくあんな研修着作られて、嫌がらせされたって訳。俺もそのとき四年生だったからな。紛れもなく被害者だよ」

先生は苦笑いした。

部屋に戻ると、噂のカイ先輩が重たそうなトランクを引きながら、ふらふらしていた。

だいぶお疲れだった。それはそうだ、この歳であんなに働いてるんだから。

しかし、彼は二人を見つけると、

「お、ちょうど良かった。君たち二年生？」

パツと表情を変えて、その場にトランクを捨て置いた。
キクマサとフォルテは、はいと頷くと、

「初めまして先輩。俺、二年生のフォルテ・ゴツドバルトって言います」

「…オノダ・キクマサです」

ペコリと頭を下げた。

カイも釣られて頭を下げると、

「あ、ご親切に。カイ・ヴォストンです。三年生です」

「知ってます！！　だって先輩は有名人ですから。さっきもCM見ました」

フォルテは何だが、有名人を前に多少テンションが高い。

カイは苦笑いで、

「え…スーパー・コークの？　参ったな…また団長にドヤされる。

…CMは鑑定協会の陰謀ってやつだよ。俺を利用して、鑑定ブームを巻き起こしたいらしい。馬鹿だよ全く」

照れ隠しなのか、本気なのか、謙遜気味だ。

「でも、カイ先輩の活躍で、鑑定物の番組増えましたよね。確かに」

「はは…いつまで続くかな。ブームって言うのは去るものだから」

彼は、すごく感じのいい人だと思った。

背が高く、バスケット選手みたいな体格だ。鑑定士ですって言われても、初お目見えの人はなかなか信じられないだろう。髪も短髪で、どうみてもスポーツ選手だ。

でも、そんな彼が、誠実そうな態度で、虫眼鏡片手に鑑定していると言うギャップが、世間の方々にはたまらないのだ。

キクマサはカイを観察するように見ていたが、その視線に気づいたカイもキクマサの方を向く。

「で、君が噂のカトレアさんの弟子か」

「……カトレアさんを知ってるんですか？」

キクマサは、思いもよらない名前が出てきた事に驚いた。

カイは歯を見せて笑う。

「うん。あの人が俺を、鑑定の世界に導いてくれたんだ。もう、遠い昔の事だけだね。カトレアさんは元気かい？」

「……どうでしょう。急に居なくなりましたから。あの人の事だから元気だとは思いますが」

あの人が、今どこで、何をしているかなんて、想像もつかない。だって、想像がつく事を、超えて行く人だから。

心配じゃない訳じゃないけど、元気でないはずもない。殺したって死なない人だ。あの人がこそまさしく。

カイも、息を吐くように頷いた。

古代エジプト文明は、紀元前4000年にさかのぼると言っ。

ナイル川を源とし、繁栄して行った王朝。

ピラミッドやスフィンクスなど、謎の多い遺産を数多く残しているのがこの国だ。

「……………どういう事ですか？ エリーゼ先生。」

「ですから、そのしおりに書いてあるスケジュールは全て中止です」

リュオンは、口をぱくぱくさせながら、何と言いつ返せば良いのか分からなくなっていた。

緻密に練った計画を捨てて、いったい何をすると言うのか。

エリーゼ先生は、表情を一向に変えなかった。

リース先生もしらばっくれている。

メルベリーも驚いて、口元に手を添えて、瞬きをした。

「エジプトのカイロまでやってきて、“ギザの三大ピラミッド”も、“アブシンベル大神殿”も見ないで、いったいどうするんですか！
！俺たちの納得する答えがありますか！？」

「落ち着きなさい、ルネ・テクタイト。エジプト自体、毎年必ず向かう研修国です。ギザのピラミッドはいつだって見学できるでしょう。……しかし、あなたたち……まだ行った事のない所があるでしょう」

エリーゼ先生は、リュオンを諭す。

エジプトにおいて、ピラミッドにも勝るとも劣らない、世界の歴史を刻む場所。

リュオンは、何かにピンときたようで、まさかと頬に一筋の動揺が流れた。

「……そんな……まさか“王家の谷”ですか……？」

その言葉に、メルベリーは声も上げずに驚いた。

エリーゼ先生は瞳を細め、ゆっくり頷く。

「その通り。我々が明日向かうのは、エジプトのファラオの眠る、“王家の谷”……。それも、最近秘密裏に発見され、世間も知らない発掘途中の謎だらけの間……」

「そんな……いくらルネ・ヴィルトンでも、発掘権のない我々がそんな所へ行くなんて……可能なんですか？」

リュオンは相変わらず眉根を潜めていたが、いい加減落ち着こうと

していた。

エリーゼ先生に限って、いい加減な事を言う訳がないと理解していたし、今までだって突拍子のないプランを達成したこともあるのだから。

「……可能です。依頼主がいるのですよ、この研修には……」

「……………」

先生は、これ以上の質問を受け付けるつもりはなかったし、リュオンもまた、これ以上は聞かなかった。聞いた所で無駄なのだ。

“王家の谷”で我々がする事など、本当は誰にも分からない事なのだろうから。

説明された所で、ちっぼけな我々ごときが、理解出来る訳がないから。

その場に行つて、リアルタイムで感じるしか無い。

I
d
r
a
w

21：エジプトプラン4〜王家の谷

学校で習う歴史って、どうしてもあんなに無機質なんだろう

遺産や文献から分かる、歴史の欠片を繋いで、結んで、それでも、唯一分からないのは、名を残す偉人たちの心の内である

出来事や、結果は分かっているも

どうしてそうなったのか

何を思っただけそうだったのか

どうしても分からない事だから

ふと、キクマサは目を覚ました。

カーテンの隙間から、チラチラと見える空はまだ薄暗く、ぼんやりした頭では、今が何時なのか考えようとしなかった。ただ、うつらうつらした頭の片隅で、先ほどまで見ていた夢のヴィジョンが繰り返されていた。

暗示的な、象徴的な、“鍵”が、水の底に沈んで行くヴィジョン。

誰かがそれを、必死に掴もうとしていたのに、決して、捕える事ができずに、暗い水底に消えていった。

「……………何だったんだろう」

凄く喉が渴いた。

部屋の男子は、まだ寝ている。

決して起こさないように、とにかく外の風に当たりたくて、

バルコニーに出た。

「……………」

驚いた。

そこから見える景色の、何と不思議な様
薄くたなびく白い空に、朝の日の光。

エジプトの、ここはきっと中心地。

高層の建物も、歴史的な建物も入り交じって、その隙間から見える
物。

「…すつげ、ピラミッドじゃん……」

異次元のように、不釣り合いなのに、向こう側には世界的に有名な
遺産がそびえ立っていた。

ビルの隙間から見える、その出で立ちが、

何だか切なくて、心にしみる。

古の時代には、こんな不自然な切なさは味わえないのだから。

その日、ルネ・ヴィライアーが向かったのは、有名なギザの三大ピラミッドでも、世界遺産の原点、アブシンベル大神殿でもなかった。

「な、何だつて!？ 王家の谷!!？」

フォルテの驚きようと、顔の輝きから、その場所の凄さは容易に想像できた。

ヴィライアー達がザワザワしている。

「そうだ。しかも、俺たちが向かうのは、最近見つかった墓だ。とある複雑な理由から、その墓の存在は世界に公表されていない」

団長は、落ち着いた口調だったが、内心その研修に疑問があったのは確かだ。

フォルテは、その言葉に何を感じたのか、少し顔を潜めた。

「あの……その墓から何か見つかったりしたんですか……?」

「……いや、その墓は、墓と言うよりも、とある墓の延長と言った方がいい。王家の谷の墓は、発掘が始まった頃には、盗賊に荒らされていてほぼ壊滅状態だった。それでもなお、ほとんど手つかずで見つかったファラオの墓」

古代エジプトの謎の中でも、最も秘密めいた、しかし最も注目されているファラオ。

「……まさか…ツタンカーメン……!？」

フォルテは瞳を見開いていた。彼の頭の中には、様々な情報と、歴史のつながりのような糸が、しゆるしゆると動き始めている。

団長は、フォルテの方を向くと、眉を動かした。

「気になるか、ゴツドバルト。お前の親父さんは有名な考古学者だもんな。だったら、これがどういう意味か分かるだろ。ツタンカーメンの墓は、手つかずで発見されたにも関わらず、その時代や、このファラオに関する情報はいっさい出てこなかった。しかもツタンカーメンの名は、他の遺跡からもことごとく消されている。……なぜだ？」

団長は、ひっそりと静まり返っているメンバーに、その疑問を投げかける。

「しかし、先日発見された墓には、その名がしっかりと刻まれている。しかし、公表できないのには理由がある。その間には、重い扉にも見える、巨大な壁画と……」

「“鍵”だけが、見つかったんだ……」

キクマサには、いかにそれが世紀の大発見なのか分からなかったが、ただ気になったのは、“鍵”という物のフレーズ。夢に出てきた、あの鍵は、ただの偶然だろうか。

“王家の谷”に向かうバスの中で、キクマサはその事について、少しだけ考えていた。

だって、町の隙間から見える、ピラミッドと砂漠を無視してなお、我々は、それを見に行くのだから。

フォルテは、さっきからずっと険しい顔をしていた。

キクマサは、彼がこの手の話にやけに詳しいなと思っていたけれど、有名な考古学者の父がいる事は、今日初めて知った。

「なあ…フォルテ。これって凄い事なのか？」

キクマサは、切り出した。

フォルテは、キクマサに話しかけられて、少しハツとしたようだが、軽く頷くと真面目な顔で。

「…うん。…と言うより分かんないや。ツタンカーメンの情報って、本当に少なくてね。ほとんどが考古学者達の見解と言うか、想像っていうかね。…ツタンカーメンの時代が荒れていたのか、この頃

の王の名前って、あらゆる遺跡から消されているから、何かあるんだらうけど……」

フォルテはそこで、言葉を止めた。

それ以上をキクマサに言うことは無かった。

彼には、少しだけ分かっていたのだ。

考古学、歴史の合間合間に存在する、“鍵”の存在を。
隠された真実の、神懸かり的な力を。

呪的な、その重要性。

知ってはいけないのに、知らなければ、前に進めない矛盾した歴史。

それに手を出したら、

何を失い、何を手に入れるのか。

果たして、その真実を、僕らに受け止められるのか。

それすら、イメージできないと言っのに。

22・エジプトプラン5〜記憶の間〜

記憶の間と呼ばれた部屋

扉と鍵を守っていたその部屋を作った者は誰？

なぜか夕刻を示すオレンジの空の頃、彼らは王家の谷についた。沢山の発掘跡や番号、印の書かれた、いかにもまだ発掘中の墓であると云うその景色。数人がまだ作業中であつたが、既に物静かだ。

「こちらが案内人のセティさんになります。彼は昔からこの王家の

谷の墓守をしている方であり、研究者でもありません」

エリーゼ先生が現地の案内人、セテイさんを紹介する。エジプト人らしい白い服に、浅黒い濃い顔、髭の長い顎。彼はとてもにっこりと笑って、挨拶をする。

「では、まいりましょう……ルネ・ヴィライアーの皆さん。ツタンカーメンの呪いにお気をつけて……この墓を発見した者は、“偶然”にも20人が相次いで死んでしまったと言いますから……」

「……………」

行く前にその話は無いだろうと思ったが、ルネ・ヴィライアーは気まずそうにお互い目を合わせたりしている。

セテイさんは「冗談ですよ」と言っ、ほっほと笑っているが、なんて冗談に聞こえない冗談な事か。

彼が案内するのに導かれ、そわそわするヴィライアーは列を作って指定された墓に入る。

暗く、作りたての穴の中。どうしようもなくひやっとするような、土の色の闇の中に。

流されるままに歩いているキクマサであるが、フォルテは少々怪訝そうである。いつもの彼と違って、やたらと真面目で精悍な顔つきだ。頼りがいがありそうに見えるはずが、いつもとの違いに多少心

配になる。考古学者の親父さんがいるせいか、フォルテはその手の話に詳しく通じている。

だからこそ、思う事もあるのだろう。

「……………ねえ、キク……………大丈夫かしら……………」

隣からルナシーの声が聞こえた。

先頭のセティさんが持つ光源の、ぼんやりとした灯が心もとないくらいに、周りがわずかに見える。

ルナシーはいつの間にかキクの隣にいて、何だか神妙に、こわごとと周りを見ている。

そりゃあ、そうだ。墓の中なんて怖いし、しかもツタンカーメンの縁の地であるからこそ、リアルに体がヒンヤリとする。

「……………怖い？」

「少しね……………でも、前を歩く先輩達は何て事無さそうにしているわ……………研修に慣れているのね……………」

「フォルテも平気そうだよ。自分の世界に浸っちゃって、全く話さないんだ。珍しいだろ？」

洞窟のようになった長い通路を歩くヴィライアーの反応は、様々であった。

一年生のヘルは、特にこういうものが苦手な小心者であるため、ガタガタして足が進まないようである。

クレハは「すっげーすっげー」と、相反した反応を見せ、動けないヘルを引つ張る。この二人は本当によく気が合うなと思う、そのくらい正反対だ。

四、五年生は流石に研修慣れしているので、怖さ半分、期待半分と言つように、少々余裕のある足取りである。

「……呪われちゃったら、どうしよっかな」

「あんたは呪いが逃げるわよ」

五年生のナギとレッドは、相変わらず二人で笑っているし、四年生は五人仲良く固まって、普通に道を歩くようにスタスタとスムーズだ。

後ろでクレハが「ギャハハ」と笑えば、前から「ウルサーぞー年！！」と怒鳴り声が飛ぶ。

その間に挟まれた二年生は最も普通の人のように、いちいち衝撃にビビったりしている。

そうこうしているうちに、どうやら目的のポイントについたようだ。セティさんは皆を振り返り、真面目そうな表情で居る。

「ここに注目してください」

彼が指差した所には、古くに掘られた壁画と、小さな暗い穴が見える。気がする。

「この壁画と鍵穴が発見され、私は古くから墓守の間に伝えられる

話を思い出しました。黒い歴史は、鍵をかけ封じられている。真実を知る事が出来るのは、その扉を開け、中に入った者だと……」

彼はフツと光源を消した。瞬間的に暗くなる墓の中、誰もがきつと恐怖を感じた。

「これから、何があっても驚かず、冷静に勇敢に、物事の真を見極めてください。あなた達ならば、きっと上手くいくでしょう」

セテイさんの声だけが聞こえると思ったら、ボウと浮かび上がるように光る、鍵穴の存在を見た。

誰もが息を飲み、次に起こる事を待っている。予想すら出来ないけれど。

セテイさんは鍵を懐から取り出した。

ほとんど見えなかったが、どこか古いような鍵だと思う。

彼はそれを光る鍵穴に刺し、一度ゆっくりと回した。

カチツ……

その音は、鍵を開ける音だったのか。

それとも、歴史の大時計の針が一つ、動く音だったのか。

まばゆい光と旋風が、開かれ出した扉の間から溢れ流れてくる。
ヴィライアー達はその場からどうする事も出来ずに、ただ目映い光に目をつむり、激しい衝撃に翻弄されている。

流れに身を任せるように、彼らは光の中へ、

歴史の扉の中へ吸い込まれていった。

静寂と暗闇の中、セテイさんが再び光源を灯した。
しかし、そのときこの場にいたのは、エリーゼ先生とリース先生だけであった。

先ほどまでいたはずのヴィライアーは、跡形も見受けられない。

「……おっどろいた……話に聞いていたとは言え、現実に目の前で起こると、もう目を疑いますよ」

「リース先生……この事は他言無用ですよ」

「分かってますって、エリーゼ先生」

先生二人は、この状況を見越していたらしい。

エリーゼにいたっては、この研修の真意すら心に留めている。

セティは長いひげをなで、目の前に再び閉じられた扉を見上げた。

約半年前に発見されたこの扉。

それまで、誰も見つける事が出来なかったと言うのに、ある日突然、前触れも無く発見された。

扉を開く時期を、神様がそろそろだとおっしゃったのだろうか。

「……どうか、悲しい歴史に捕われたファラオをお救いください
……」

セティはゆっくりと壁画に手を当て、再び開くはずの無いそれを悲しそつに見ていた。

既に鍵穴は無く、先ほどの事が嘘のようである。

ツタンカーメンの歴史は、誰もが興味深くしていながら最も謎が多い。

彼の名は、あらゆる墓から削り取られている。

歴史に真実を求めるならば、可能性はいくらでもあるし、もしかしたら真実なんて無いのかもしれない。

それでも、哀れな魂を太陽神の元へ導いてくださるのなら。

セティは、既に役目を終えた鍵を握っていた。

古い、錆び付いた鍵であったが、いつになく冷たく重かった。

d
r
a
w

23・エジプト平原の「ヒロタリフ」

過去の全ての物事は、

良くも悪くも、全て、人類の遺産でありますように

ルナシーは目を覚ました。
日差しがじりじり暑くて、とても息苦しかったからだ。

ゆらゆらと、単発的に途切れる視界の中で、夢か現実か分からない世界を見た気がした。

「……………ここは…」

ここは、一体どこなのだろう。
彼女はゆっくり立ち上がった。

柔らかい草の絨毯に、南国にあるような木々。清らかな、そして小さな湖。

ルナシーはその湖の袂で膝をつくとき、理解できない状況と向き合おうとしていた。

私はさつきまで、ルネ・ヴィライアーのみんなと一緒に、王家の谷の一つの遺跡に居た。

セテイさんは、何も言わなかったけど、きっとあの場所こそが、“記憶の間”であつたに違いない。

とても、不思議な感覚だつた。

日没の時間を憂うように、たった一欠片の光が、あの空間を生み出していた。

一瞬、煌煌と輝く光の中に、浮かび上がった、古代の石盤。

その鍵穴。

不思議な感覚だつた。

私は、たった一瞬の、その石盤と鍵穴を、懐かしくさえ思ったから。

古代のノスタルジーに、耐えられなかったと言うのか。

ルナシーは、淡々とそんな事を考えていた。

ここはどこだろう、と考える前に。

ルナシーは、自分の映る水面に、視線を落とすまま、周囲の空気を感知取った。その時だった。

「ルナー！！」

水面に、誰かが映った。

私の背後に、彼が現れたのだ。

「無事でよかった！」

「……フォルテ！！」

「話は後だ。俺たちが落ちたのは古代エジプト。鍵は封印していた歴史を開いたんだ」

フォルテは何だか焦ったように、急いでルナシーを立ち上がらせた。彼の、言っている事は意味不明だった。

「何を言っているの、フォルテ」

「今は、説明してる場合じゃないよ。このオアシスの中に、盗賊がいる。分かるかい」

フォルテは彼女を誘導して、草むらに隠れた。すると、反対側の草むらから、大柄の男が出てきた。

色黒でガタガタの歯並び、彫りの深い顔。

手には、先の曲がった剣を持っている。

ルナシーは息をひそめた。危うく声をあげてしまいそうになる。大男はぎよるぎよるあたりを見渡すと、再び元の場所へ帰っていった。

一時ルナシーとフォルテは物音立てずに、気配を隠していたが、フォルテが長く息を吐いて、

「もう良いんじゃないかな、ルナ」

小さくなっていた彼女の背をポンと叩いた。

ルナシーは、眉根をひそめてフォルテを見上げる。

「あれは何？ いったい私たちはどうしてしまったの？」

「落ち着いて、ルナ。気持ちは分かるけど」

フォルテは、もう一度周りを確かめた。盗賊の気配は、この辺りにはなかった。

「……………ここはきっと、古代のエジプトだよ。俺たちは過去に落とされた」

「どうしてそうだと分かるの？」

「……………それが、“鍵”の役目だから。……………父さんの言った事は、本当だったんだ」

フォルテは立ち上がると、青い空を見上げた。エジプトの空は、青い。

感じた事のない時代の空気をこの身で感じる事に、どうしようもな

い喜びと、とりとめもない不安を感じる。

伝説は、本当だったんだ。

歴史は巻き戻る。

ルナシーは、分からないままだった。

きっと、フォルテにしか分からない事なのだろう。

「……………ここが古代のエジプトだと言うなら、私たちはどうすれば良いの？ みんなは……………」

ルナシーは自分の言葉にハツとした。みんなはいったいどうしたのだろうか。

私たちと同じようにこの時代に落とされたと言うのなら。

フォルテも、複雑そうにしている。

「…みんながこの時代に落とされた可能性は大きいよ。全員かどうかは分からないけれど……………。とにかくもこの時代に戻らなくちゃ……………」

彼は冷静だった。いつものような、おちゃらけた彼ではなく、思慮深い。

「……………戻れるの？」

「……………戻れるさ。……………この物語を正しい結末に導く事が出来たらね」

簡単そうに言った、彼の顔は、暗く複雑である。

ルナシーは、そう言う所にすぐに気がつくから。

「盗賊に見つかったら終わりだ」

フォルテは声を潜めた。

草の間をすり抜けるのに、ちょっとした音でも立てようものならヒヤッとする。

「特に君は女の子なんだから」

フォルテは神経過敏になりながら、あたりをきよるきよるしている。

「あら、どうして。女の子だから助かる事もあるわよ」

「君は、もう少し自分の事を理解した方が良いね」

ルナシーは、くすくす笑っていた。

フォルテが何を言わんとしているのかはわかっていたが、あえてそう反応していたのだ。

「……君は美人なんだから」

「私には何て事なくそんな事が言えるのねえ、フォルテ。：レイにもそう言えたら良いのよね」

フォルテは一度固まって、複雑そうな顔でゆっくり振り向いた。

淡い、オーレオリンの髪が、葉っぱを横切る。

「君の言っている事は、意味不明だ」

ルナシーは意地悪そうに笑うと、ここぞと言っているのける。

「あら、まるでいつものあなたじゃないみたいよ。いつからそんなに賢そうになったの」

「からかわないでくれ、ルナシー。こんな非常事態に」

彼は、本気でピリピリしていた。
今の彼に冗談は通じないらしい。

ルナシーは、ため息をついた後、とても冷ややかな瞳で彼の背中を見つめた。

何て、読めない人。

感情を露わにしていそうで、冷静で分からない。

レイやキクを心配していないはずなのに。

その時だった。ふいにフォルテが止まったから、ルナシーは彼の背中にぶつかりそうになった。

「どっしたの？」

ルナシーの質問に答えもしないで、彼は目の前の崖に駆け寄る。近くで水の音がするから、小川があるのかもしれないけど、この岩場の切り立った崖は、あらゆるところに窪みがあって、少し湿っぽかった。フォルテはその一つの窪みに駆け寄って降りていったのだ。

「待ってよ、どうしちゃったのよ…もう」

ルナシーは眉根を潜めて、周囲を確認しながらついていった。

フォルテは窪みの中の壁に手をあてて、上、下、右左を確認しながら、仕切りに何かを呟いていた。

「…凄い…壁に文字が…」

彼は、少し下がって、全体を見渡した。
ルナシーも彼の視線を追う。

「ヒエログリフだ…」

それは古代エジプトの文字で、合間合間に壁画が彫られていた。フォルテは一時その壁を見つめた後、

「…エジプトの神話だ…太陽神ラーを奉ってるんだ」

「あなた…古代文字が読めるの？」

「ヒエログリフなら少しね。全部じゃはいけどもちろん。…ただ、大切な単語と、壁画の神様の“アトリビュート”で想像は出来るかな…」

フォルテはルナシーの目線に立って、左上を指差した。そこには、意味の分からない古代文字に囲まれた、横を向いた神の姿が描かれていた。丸い太陽を背負っている。

「あれが太陽神ラーだ。太陽のヒエログリフが見えるかい。ラーはエジプト神の主神であり、太陽の神だから。アトリビュートだよ」

「アトリビュートって？」

ルナシーは、先ほどからできていた謎の言葉に疑問を抱いた。フォルテは、いまだにその壁画を隅々まで見ながら、

「神々を判別する、象徴的な物さ。持ち物だったり、姿形だったりするけど」

一つ一つのヒエログリフを確かめていた。

「……サ・ラー……は、ラーの息子。ファラオの事だ。……この壁画、きっとこの時代でも古いものだ」

「どうして……？」

「だって、この時代がツタンカーメンの時代なら、ラー信仰は古くてアメン信仰とアテン信仰が盛んな時代のはずだけど……」

フォルテは相変わらず専門的で、あまりこういうものに通じていないルナシーにとっては、うさんくさいばかりであった。

「何ですって？」

「太陽の神様さ。エジプトにとっては太陽神って言うのはとても大切だね。エジプト神にも、沢山の太陽神がいるんだ。ラーをはじめ、アメン神、アテン神……」

フォルテが太陽神の説明をしようとした時だった。

気付いた時にはもう遅かったのだが、窪みの外には既に何人かの男がこちらをにやにや見ながら囲んでいる。

フォルテとルナシーは一瞬背筋が凍ったような気がした。

「動くんじゃないぜ、異国のお方よお」

その人だかりの中から、長い上着を羽織った浅黒い肌の男が現れた。頬に大きな傷があり、彫りの深い瞳は冷たく二人を見据えている。きつとこいつがお頭なのだ。

今ここで殺されたら現実の世界の私はどうなるんだろう。ルナシーは既にそんな事さえ考えに至る。

「今死んだら、俺たちってどうなるんだろう……」

今まさに、同じ事を考えていたフォルテが、両手を上げた降参のポーズのまま、希望のなさそうな声音で呟いた。

ああ神様。

エジプトの神様。

我がギリシアの神様。

ここで死ぬだけの、ただそれだけのために呼んだのではないでしよう。

こんな所で、むざむざ殺されるくらいなら、どうか、

オシリスの前に祝福されし者でありますように。

カーロンの船が穏やかでありますように。

フォルテは必死になって他教色々な神に祈った。

オシリスは、死者の国の神。

カーロンは冥府への渡し守。

ヒエログリフは、まるで絵画のようだ。

そのウジャトの目は我々を見ている。

I
d
r
a
w

24・エジプトプランフゝオアシス都市“カルガ”ゝ

我々が、この世界に呼ばれた理由はきつとある

どうか、太陽神に栄光あれ

「聞き分けの良い奴らめ。賢いのか、ただの腰抜けか……」

「……………」

あっさり捕まってしまったルナシーとフォルテは、荒い縄に縛られてオアシスの崖沿いを歩かされていた。

「お頭、こいつらどうするおつもりでい。見た所異国者に違いねえが、見た事ない格好をしているぜ」

「珍しいだけ価値はあるだろ。…なあ、美しいお嬢ちゃん」

お頭はそう言うと、卑屈な笑みでルナシーを覗き込んだ。ルナシーは、暑いのに凄い寒気を感じた。
お頭から目を背ける。

「……お前達、一体全体どこからやってきたんだ。このオアシスは、都から遠く離れているのに。見た所“足”も無いようだ……」

お頭は、今度はフォルテの方を向いた。

「おい、小僧。お前ら何もんだ」

「ギリシア人です……」

「ギリシア人だと。何でこんな所にいる……」

「そんなの、俺たちが知りたいさ……。いったい俺たちをどうする気だ」

フォルテは、用心しながらお頭を見上げた。

お頭は、彫りの深い瞳を細めると、あざ笑つように。

「……そうだな。どうしてやるうか。奴隷にしてやるうか、いつそ殺してやるうか」

「……………」

二人には今の所、深い後悔と、絶望しかなかった。

「ボサツとするな。奴隷」

崖沿いを歩かされながら、フォルテはこの国について考え込んでいたものだから、フォルテの縄を持っていた大男に後ろから蹴られた。勢い余って、フォルテは前に倒れた。

「フォルテ！！」

ルナシーはフォルテに駆け寄ろうとしたが、縄がそれを許さない。フォルテは、ルナシーに目配りすると、小さく首を振った。事を荒立てたくないと言つ事だろうか。

お頭が怪訝そうに振り返った。

「何やってるんだてめえら」

「お頭、だってこの奴隷、さっきからボサツとしてるもんだから」

「下手な事するんじゃない。逃げられでもしたらどうする。人間極限まできたら何だって出来るんだぜ。このオアシスから、誰一人一歩も”出したらいけねえんだ」

お頭は、大男に罵声を浴びせると、フォルテに、

「悪かったな、小僧」

と謝ってきた。

「……………？」

ルナシーとフォルテは顔を見合わせる。

先頭を歩いていたお頭は、ある崖の前で立ち止まった。

そこには、先ほどのヒエログリフの書いてあった窪みとは比べ物にならないほどの、沢山の文字が記されてあった。

そして中心部には、巨大な扉が壁画として描かれていたのだ。

フォルテは息をのんだ。

「偽扉だ……………。バーが通る扉……………」

壮大で、圧倒される重々しい壁画。ハヤブサの姿をして、頭部に太陽を掲げた神が描かれている。

ルナシーはその神の姿から目をそらせずにいた。

「お前……………ギリシャ人の癖に、嫌に詳しいな」

お頭はフォルテを見下ろした。

フォルテは顎にてを当てたまま何かまだ考えている。

「でも、偽扉は基本的に墓に描かれるものだろ……。死者の魂……。エジプトで言う“バー”が自由に出入りできるように。何でこんなへんぴなオアシスの中に……」

「……この偽扉は目くらましだ。」

お頭はそう言うと、その扉の前に、手をついた。

そして、一体何と言ったのだろう。

彼は何かを唱えたのだ。

「……最高神ラーよ……。あなた様こそが、ただ一人の太陽の神」

ただそれだけが聞き取れたとき、お頭は懐から手に余る大きさの鍵の様な物を取り出した。

ルナシーやフォルテがひやっとしたのは言うまでもない。

まるで、セティさんが記憶の間”で使ったあの鍵を彷彿とさせたからだ。

丸い輪っかのついた、十字架にも見える。

「…アंकだ。エジプトの神器の…」

二人があっけにとられている時だった。

お頭が“アंक”をその壁画に突きつけた瞬間、羅列したヒエログリフが光を得て、開かないはずの扉が開いたのだ。

そう。

あの時のように。

「ここは、辿り着ける者にしか辿り着けないオアシス都市“カルガ”」。太陽神ラーの恩恵を受ける都市だ」

フォルテは目を疑った。

開いた扉の中には、外から見ただけでは到底分からなかったのだが、何と見渡す限りの町があったのだ。人々が行き交い、とても活気が良いのに、どうして微かな声さえも扉が開く前までは分からなかったのか。

お頭につれられて、その都市に入ってしまった。

向こうもこっちも、もの珍しそうにじろじろ見ている。

「……………どういう事なのフォルテ」

「…分からない。こんなの聞いた事も無いよ…」

ただ、分かる事と言えば、この都市はきっと“隠れ里”なのだろうということ。

あの非科学的な扉に守られているのだ。

町の人々の警戒心の視線も、いたいほど分かるから。

お頭は二人を縄で縛ったまま、重たい扉の部屋に入れた。外には見張りをつけてまで。

お頭は、中心にある石造りのイスに腰掛けた。

「まあ、好きな所に座りな。お前達は運がいいぜ。扉をくぐるとき、太陽神ラーによって裁きが下されなかつた」

「……………何だつて？」

フォルテは突つ立ったまま、お頭を見下ろした。

ルナシーは壁にくつついている長椅子に座って、一つ大きく息をついた所だった。

「この都市はラーによって守られている。かつての“ラーの神官団”が創つた都市だ。もし、王宮のスパイが潜り込もうとしたら、あの扉で裁きを受ける仕組みになっている」

「……………王宮？ どういう事だ？」

フォルテは何もかも分からずにいた。

ただ、彼の好奇心だけがぐるぐる頭を巡っている。

「……………」

お頭はフォルテをじつと見上げた。

そして、ルナシーにも視線を向け、またフォルテに戻る。

「……何を言ってるんだ。そもそも、お前達は何なんだ。どうしてこのオアシスにいた」

「……それは……」

お頭の疑問は最もだった。

でも、だからといって、未来から来たなんて言っただって、理解できないだろう。

どうすれば良い。話が一向に見えてこない。

フォルテは息をのんだ。

「俺たちは、ずっと遠くから来た。：気付いたらこのオアシスにいたんだ……。俺たち以外に、こんな格好をした奴は居なかったのか？」

「……お前達の他に……？ いや、いなかったぜ……誰かがこのオアシスに入ると、俺たちに分かるようになってる」

何だ。

この違和感。

フォルテはお頭を睨んだ。

ただの盗賊にしては、彼からはとても不思議な凄みだけを感じる。悪い気は到底しないのに、ただ者でない事は分かるのだ。

「俺の名前は“タハール”。このオアシス都市カルガの頭で、太陽

神ラーの神官だ」

「……………」

フォルテは唐突に自己紹介してきたタハールに目を見張った。全然盗賊でも何でもなかったのだった。

タハールは、あぐりとして二人を、ただ見据えて、

「今や、この国のファラオに先は無い。“アテン神”だけしか認めようとしな。民は飢え苦しみ、神の定まらない混沌とした空気は、闇を生み出す」

ひやりとする視線を作り出していた。

フォルテは一度息を飲むと、自分の心の中に落とされる好奇心を抑えるのに必死であった。それでも、知りたいと言う気持ちはどんどん溢れてくる。

「…………俺たちは何も知らない。分からない。…できれば、全部教えてほしい」

この国の、今のすべてを。

フォルテは、ある種の焦りと興奮を覚えていた。

ここには、本では分からない“真実”がある。知りたい事が、沢山ある。

知りたい。

全てを。

タハールは、額の中心を押さえて、ガクつと前にうなだれた。そんなジェスチャーの中でも、合間には、二人への警戒心も解いてはいなかったのだが。

「呪いだよ。“セト神の呪い”って呼ばれているけどな。神の決まらないこの国は不安定になり、やがて恨みを残した人々の“バー（魂）”は、呪いとなり、厄災となる。少し前に“セト神”を祭っていた者たちが皆殺しにされ、それから呪いはこの国に漂っている」

「今の……このエジプトのファラオは？」

フォルテはたまらなくなつて聞いた。

カタルは一度瞳を閉じ、再び開けた。

その時の瞳の、憎悪に満ちていた事。

「……アクエンアテンだ……」

その名を口にした時の、憎しみのこもっていた事。

我々は、無機質な歴史しか知らない。

どうしてそうなったのか、何を思ってそうしたのか。

その決断を下すのに、どれだけ苦しんだのか。

歴史はそれを語らない。
心は分らない。

だから、よく見ておいて。

悪も、正義も、簡単に一言では済ませられないと言つ事。

残酷も、失敗も、

負けも勝ちも、

愛も憎しみも、

野望も欲望も、

全て、結果だけを教える歴史の教科書を、否定しようとは思わない。

ただ、想像していこう。

それは、黒歴史の幕開け。

三柱の太陽神を巡って、繰り広げられた、隠された歴史。

エジプトの未来を左右した物語。

I
d
r
a
w

25：エジプトプラン〜中庭〜

どうして人々は、神を求め
神を信じ、崇め

どうして戦うのか

あれは確かに扉だった。

あの光の中で、時空を行き来する歴史の扉。

それを開いた鍵。

それを許したのは誰だったのか。

「……………つわあ！！！」

静かな意識の世界から、キクマサは急に目が覚めた。パンと、大きな音がしたのだ。

「……………??？」

「あら、やっとお目覚めね」

目の前には、深い色の巻き毛の女性が、彼の目前で手を叩いたポーズのまま居た。

キクマサは状況の理解に苦しむ。

彼女は、四年生のシャルロ・グレディア先輩だ。

「……………え……………？先輩……………??？」

「あら、覚えていてくれて光栄だわルネ・アメジスト。あんたは二年生のオノダ・キクマサ君よね」

彼女はぼかんとしているキクマサをよそに、立ち上がると、膝をパンパンはたいた。

キクマサはあたりを見渡す。

そこは、静かで薄暗い庭のような場所だった。高い壁に囲まれ、真ん中に池がある。

パピルスが水面から伸びて、ひっそりと佇んでいる。

「どづいことですか？…みんなは……………」

「分からないわ。目が覚めたら、ここに私達三人しか居なかったんだもの」

「……………？……………三人??」

キクマサは、周りの景色の変化に圧倒されて、すぐそこに転がっている彼に気づきもしなかった。黒髪の男がうつ伏せで気を失っている。

「だ、団長!!」

キクマサは慌てて彼に近づくと、肩を揺さぶった。

「やだ…。そいつ起こすの?」

シャルロはあからさまに嫌そうだった。キクマサは、どうしてわざわざこの三人なのだろうと思ったが、今は団長を起こさなければと、何度も肩を揺さぶった。程なくして、彼は意識を取り戻す。

「……………何だ……………?」

完全に状況の掴めていない、曖昧な意識のまま、団長はムクリと起き上がった。

「…よかった、団長」

「……………あ?……………あれ、何でお前……………あれ??」

団長はキクマサを不思議そうに見て、周りの風景の異常に視線を流

した。

四角く切り立った壁に囲まれた箱庭のような場所。流石の団長もこの状況では間の抜けた表情だ。

「やっとお目覚め？ 見て分かると思うけれど、この場所に、私達三人しか居ないわよ」

シャルロは腕を組んで、目の前の石ころを団長の方に蹴る。

「さつきまで、俺達は王家の谷に居たのに……」

キクマサは、ふとフォルテヤルナシー、レイの事が気になった。彼らは一体どこに居るのだろうか。

ズボンのポケットからケータイを取り出して開く。しかし、

「……あれ?? ケータイが真っ暗」

充電は十分にしてきたはず。海外でも使えるやつなのに。それを聞いたシャルロは、自分の赤いケータイを出して、一時何かしていたがため息をつくとそれを再びポケットに入れた。

「ダメだわ。まるで通じない」

「……………」

団長は黙っていたが、じつと周りの様子を見て、険しい顔をしていた。そして、

「…………ケータイなんて通じるはず無い…………。ここは、古代エジプトだ…………」

低い声でそう言った。シャル口とキクマサは彼の方に、ハッと顔を向けた。特にシャル口は眉根を寄せると、

「……本気？ なにバカな事……」

「ああ、そつだ。ばかげた話だが、多分そつなんだよ」

彼は確信めいた口調だった。表情は相変わらず強面だけど。シャル口は当然いかがわしげに腕を組んでいる。

「……根拠は？」

「別に。そんな気がするだけだ」

「嘘ね。あんた何か知ってるんでしょ……」

シャル口の鋭い視線が、団長に向いていた。キクマサは二人の先輩のやりとりを訳も分からず追っていた。団長は、シャル口を見下ろし、ここにまたピリツとした空気が流れる。

キクマサは気が気でない。その時だ。

カツ……。

壁の方から一つの足音がして、彼らは振り返った。

出口か、入り口か。くり貫かれた口から一人の女性が現れた。白い

衣装を着た、肩までで切りそろえた黒髪の女性。

女性は三人を見つけると、瞳を大きくさせた。

女性の側にいた側近のような女官が、小さく悲鳴をあげ、青ざめている。

「…お…王妃様。こ、この者たちは…」

「静かになさい。気づかれてしまいます」

王妃と呼ばれた女性は、三人に目を向けると、

「そなたたちは…？」

ただ一言、それだけ問いかけてきた。

団長は腕を組んだまま偉そうに、

「ルネ・ヴィライアーだ！！」

と、啖呵を切る。彼はこの状況に動揺していないようだ。

「バカ！！そんな事言ったって意味ないでしょう」

「じゃあ何て言えばいいんだよ」

シャルロが団長につっかかり、二人はいつもの言い合いになってしまった。

しかし、その時、例の王妃の表情が少し変わったのを、キクマサは見落とさなかった。

口元に手をあて、

「…………ルネ・ヴィライアー…………」

小さく呟いている。そして、三人を探るように見ると慣れたように微笑む。

「…………ここでは何ですから、よろしければ客間へお通しいたします」

「あの…」

キクマサは彼女に問いかけた。振り返る彼女から、不思議な香油の香りがする。

「ここはどこですか…？ あなたは…………」

あなたは誰ですか？

分からないことだらけの状況を、教えてくれる人がいるのならば。

「…………ここはルクソールの王宮です。私の名は“アンケセナーメン”…………」

その名を聞いたときの、シャルロと団長の驚き様は、きつと空気に伝わった。二人は同時に顔を上げたのだ。

王妃アンケセナーメン。

キクマサは、歴史上有名なその名を、この時はまだ知らなかった。

「今夜はこの部屋でお休みください。王妃様は、明日こちらに伺うと言っております」

女官が通してくれた部屋は、石造りの淡白な部屋だった。

「王妃様は内密にとおっしゃっております。あまり物音を立てませんように」

彼女はそう言うと、そそくさと立ち去っていった。部屋の中は、三本のローソクしか光源がなく、とても薄暗い。

三人はローソクを側に置いて、固まって座った。

「……どういう事なの…?」

シャルロは冷ややかな目で団長を見る。団長はうつうつしそんな顔をしたが、

「おい、どういう事だ。新人、簡潔に述べてみよ」

キクマサに振って、その場をしのいだ。振られたキクマサはただの被害者。こういうのを無茶振りっていうのだろうか。彼は困ったが、あえて全く関係ない事を尋ねた。先程から、ひどく気になっていた事だ。

「……さっきの人…アンケートメンって、先輩知ってるんですか…？」

「おい、質問の答えになってねえぞ。とんでもない新人だな」

団長はあぐらをかいて、苦笑いをした。シャルロは肩の髪を払うと、

「それでいいのよ、キクマサ君。あなた面白い子ね」

意味深に笑みを浮かべた。

「だ、だから…アンケートメンって……」

「気をつける新人。この女はマジでヤバいから。目付けられたら身ぐるみはがされるぞ。いろんな意味で」

団長はキクマサの言葉をかき消した。

「……あの……だからアンケートメンって……」

「何言っているの団長。誤解を生むようなこと言わないで。それに私、お金にしか興味ないもの」

「金の亡者が。モテないぜ」

「……あの……」

キクマサの入る余地がない。

二人のケンカはますますヒートアップする。

「どの口が言っているのかしら。くだらないこと言う前に、私達に説明することがあるはずよ」

シャルロ先輩の口調はあくまで冷静なものだった。団長は、「可愛くねえの」と嫌みを残して、キクマサに向き直る。

静かな空気の中、それでも二人の先輩に隙はなかった。

「新人。え…、ルネ・アメジストだったな…。まあ、なんだ。最初の研修で偉く当たりだったな。よろこべ」

キクマサの肩にポンと手を置き、まるで、よろこべという名のドンマイに聞こえる。

キクマサは何のこっちゃん分らなかった。

「回りくどいのよ。核心だけ述べて」

「てめえは黙ってる」

再び二人の先輩の間に火花が散る。どうしてこんなに仲が悪いのか。

「…アンケセナーメンっていうのは、あの有名なツタンカーメンの奥さんだ。歴史上な。さっきの女がそうとは限らないが…。ただ、服装や建物を見ても、現代ではなさそうだ」

深刻なような、でも割と落ち着いた口調の団長に、シャルロは相変わらず胡散臭い視線を向けている。キクマサは、さっきの女性を思い返していた。あつという間に部屋に案内されて、状況を把握するどころではなかった。

それに、あの人…。

「あの人…ルネ・ヴィライアーっていう言葉に聞き覚えあるのかな…」

「……何…？」

団長が顔をしかめて、小声で聞き返してきた。シャルロも視線だけキクマサに向ける。キクマサは慌てて、

「いや…、何ていうか、あつさり受け入れてくれたじゃないですか…。俺達の事…」

「……………」

シャルロは石段に座って足を組むと、

「…確かに。普通はこんな怪しい格好をした奴を、客間に招いたりしないわ…。ましてや宮殿よ。それにさっきのお付きの人…」

巻き毛を片側に流す。これは彼女の癖だ。

「……内密に、お静かになって言っていたわよね」

「…何笑ってやがる」

「いやね…あまりお静かに出来ないなあって思っ
て。……気づいてる？」

「……………?」

彼女がそう言って、顔を上げたときの、ヒヤリとするような冷たい微笑み。

キクマサは一瞬、息が止まりそうになった。

団長は一度だけ瞳を大きくさせる。そして、いかかわしそうな顔を入り口に向けたとき、きつとすでに、我々は籠の中の鳥だった。

ローソクの炎が、三人の影を作っては、幻のように揺らめかした。

見えない敵に、止まった吐息。

歴史を変えてはいけない。
でも、我々は“何か”を変えなければ、話にならなかった。

d
r
a
w

26：エジプトプリンセスラーの使徒

その、現代でも有名な王と王妃は

呪われた運命と共に生きた

僕らはそれを、知っていたはずだ

シャルロ先輩も団長も、偉く淡泊なものだった。しかし、視線だけは隙が全くない。

キクマサだけが一人、周りの気配にドキドキしている。

これは、嫌な気配だった。殺気とでもいうのか。ザワザワした。こんなに緊張しているのは初めてだ。

「おいおい…。はめられたんじゃないの？ 俺ら」

「それは分からないけれど…ドアの外に三人…」

シャルロは立ち上がると、腰に片手をあて瞳を閉じる。

「窓際に2人…。天井にも2人…。あら、外にはもつと沢山居るわね。でも…何かしら…」

彼女は呪文でも唱えるように呟いてた。しかし、何だか何かにしつくりこないようだ。

団長は眉間にシワを寄せると、妙な警戒心を伺わせる。

「…相変わらず…殺気を読むのが得意で。…何なんだよお前」

「お黙りなさい。気にかかることがあるのよ」

シャルロは団長を相手にする事もなく、相変わらず冷たい視線をあちこちに向けていた。相手にされなかった団長は、額に怒りのマークを浮かべたが、一応落ち着いて改めて聞く。

「…どうしたんだ」

「うるっさいわね。黙ってって言うてるでしょう」

「……………」

団長が不機嫌そうに、ひそひそ声で、

「どう思う？」「この女…最悪じゃね？」

キクマサに何とも答えにくい質問をした。

ふわりと、ローソクの揺らめきが一瞬大きくなったその時、空気の流れが変わった。

バン！！！！

扉が激しく破られて、バタバタ足音と砂埃を巻き上げ、ターバンの男たちが剣を持って突入してきた。ぴったりシャル口の読みと同じ数だ。

「！！！！！！？」

キクマサにしてみればこんなの映画の世界で、自分が剣の男たちに囲まれるなんて考えたこともなかった。

団長はそいつらを一回見渡し、シャル口は相変わらず腰に手を当て、冷ややかな表情だ。

「何の真似だ。俺達を殺そうって言うのか」

団長は冷ややかな声で問う。

すると、男たちの一人が、

「我々は“厄災の再来”を見逃したりしない」

不気味な声で、確かにそう言った。

シャル口は、どういふ事かと眉根をひそめたが、こちらが疑問を投げかける間も与えられず、男たちが襲いかかってきた。

「下がってる!!」

団長はキクマサを壁際に追いやる。

「お前に下がってるとは言わないぜ。シャルロ」

「…結構。あなたに守られるくらいなら、死んだほうがましよ」

シャルロは流し目でそう言うと、襲いかかってきた男の剣撃をかわして、サラッと手首を払うと剣を奪う。団長とシャルロは一度視線を交わすと、再び目の前の敵を睨んだ。

シャルロは余裕を持った動きで敵の足をはらうと、仰向けに倒れた男を一度、底の高いヒールで踏みつけた。彼女は目の色を変え、赤いルージュは弧を描く。

その後すぐに、背後から襲ってきた男に向かって、奪った剣を投げる。まっすぐに飛んできた剣は男のわき腹を掠めると、端で小さくなっているキクマサの横の壁に突き刺さった。男はうずくまる。

「……………」

キクマサは目を疑った。もう、とんでもなく驚いた。

団長は向かってくる男に真っ向から殴りかかって、男が落とした剣を拾うと、それを構える。

まあ、実際向かってくる奴らの剣撃を受け止めるだけで、基本的には蹴倒しているのだが。

とにかく、目まぐるしいほどに二人は強かった。

何なんだこの二人は。とても美学校の一生徒とは思えない。思い様も無い。

団長は分からなくもないが、シャルロ先輩は一応女性だ。小柄だし、（少し怖いけど）きれいな人なのに。

キクマサは知らなかったが、彼女は団長に唯一勝ったことのある百戦錬磨のヴェイライアーであった。それは、奇しくも有名な伝説で、そういった意味でも彼女は女王様であった。

ローソクが不規則にあちこち揺れている。戦闘の衝撃が、儂い炎を脅かしているのだ。それだけに心配だった。

だって、光はそれしかないから。この光が消えてしまったら、いったいどうなるんだろう。

キクマサは、その三本のローソクを守ろうと、そろそろ床を這った。隣でシャルロ先輩にいびられている男の悲鳴が聞こえるが、それを無理矢理気にしないようにして。

その時、キクマサは何とも不思議な事に気がついた。

地面にうつる影の数が、我々三人の分しか無かったのだ。

「……………?」

薄暗い部屋の中で、不可解にもローソクの周りには、半径一メートル

ルほどの空間があつた。ターバンと、口元を布で覆つた男たちの顔なんて見えないけれど、とにかくローソクに近寄ろうとしていないのだ。

影もない。

ローソクの光に触れたがらない。

『……………どういふ事だ……………？』

キクマサは、目の前で繰り広げられる逆集団リンチに目を伏せ、自分なりに状況を理解しようとしていた。

壁沿いに、自分の荷物の所へ行つて、あるものを取り出した。

もしかしたら。

もしかしたら、あいつらは…。

「……………あつた!!」

彼がそれを取り出した時だった。そちらに集中しすぎて、自分がローソクの光の守備範囲から出ていることに気がつかなかったのだ。後ろから、ターバンの男が剣を振り上げ、今にもキクマサに切りかかるうとしていた。

「新人!!!!」

「キクマサ君!!!!」

団長とシャルロ先輩の呼ぶ声で、とっさにキクマサは振り返り、振り落とされんとする剣にキツく目をつむった。

そして、先ほどカバンから取り出したものを前に掲げ、男に向かってスイッチを入れた。

どうか、自分の考えが正しくありますように。

男は“それ”を見て、目をかっと思開いたかと思ったら、

「ぎいやあああ!!!」

おぞましい悲鳴をあげた。

キクマサの持つそれは、“懐中電灯”である。

男は、“懐中電灯”の光を真正面からあび、サラサラと崩れだしたかと思ったら、驚いたことに砂となり果てた。

カランと、剣が目の前で落ちる。

「!!!?」

団長もシャルロも、意味不明だったに違いない。

キクマサだけが、ホッと胸をなで下ろしたい気分で、手に持つ懐中電灯を見つめた。

奴らは人間ではないのだ。

それは、受け入れがたい事実ではあるが、そうとしか思えない。
残った男たちは、その状況に酷くおびえだした。
ガタガタ震えながら、

「……光だ……。厄災の再来だ……」

「……再び“ラーの使徒”が現れたのだ!!」

後ずさりながら、そんな事を口走っていた。

そして、残党は慌てて逃げ出した。

バタバタと、足音が遠ざかる中、三人は呆気にとられて立ち尽くした。

しばらくして、シャルロと団長はキクマサの方を向く。

「……なんかよく分からないけど……、結局あいつらって人間じゃなかったのね」

シャルロはそのまま、キクマサの足元の砂を見下ろした。

団長はキクマサから懐中電灯を取ると、

「……どうやって気づいた……」

視線は懐中電灯に集中させて、彼に問う。キクマサは一度深呼吸すると、

「……影が……無かったんです。……奴ら、ローソクに近づいてなかったから、もしかしたら違って……」

いまだにザワザワする心を落ち着かせた。

団長は相変わらずのしかめっ面で、懐中電灯を無造作に返した。

そして、シャルロに向かって、

「おい、どっする」

「何が」

「何が、じゃねーよ。あいつら確実に俺たちを殺そうとしてたぜ」

「……………」

シャルロは片側に髪を流しながら、何かを考えていた。
なぜ、我々を殺そうとしていたのか。

その時だ。

「…お見事です」

入り口に人が立っていたのに、今まで気づいていなかった。

「…アンケセナーメン…」

団長は、低くつぶやいた。目の前の女性を探るように見る。
声の主アンケセナーメンは、

「…先ほどの刺客を滅した光こそ、“ラーの使徒”の証…。あなた
方は、再び我々の前に現れてくださった」

キクマサの持つ懐中電灯を見つめる表情は、切実なものだった。

「…再び…？」

シャルロが聞き返す。すると、アンケセナーメンの後ろから、金飾りのついた、青と金のストライプのかぶりものを身につけ、付け髭をつけた若い青年が現れた。

彼が現れた瞬間、見たこともないくせに、一人のファラオの名がよぎった。

「…先ほどの刺客は、“アテン神官団”の手前者。やはり、義母上は“ラーの使徒”を葬りたいらしい…。それに、この宮殿に刺客が入り込んでいる事も疑いようが無い」

若きファラオは、アンケセナーメンの前に出て、気を許さない我々に向き合った。

歴史の流れが、どうにかなってしまいそう。

こんな状況を素直に受け入れる事が出来たらそれこそおかしい。

「私は、ファラオ“ツタンカーメン”。よくぞ再び現れた。“ラーの使徒”よ…。この、呪われた時代を、どうかその光で照らしたまえ」

若きファラオが、絞り出すような声で我々に願ったのは、呪われたこの時代の再生である。

この時はまだ分からなかったけど、二つの時代を導いたラーの使徒。

太陽神ラー。

アメン神。

アテン神。

信仰する神を一柱に絞る、一神教を唱えたファラオと、

そのせいで起こった混乱を、たった一人で背負った、若きファラオ。それを支えた王妃。

信仰する神が違うだけで、しかし違うからこそ、呪いは色濃くなっただのだ。

伝説では、“ラーの使徒”にしか、それを救えない。

我々が成すべき事とは、何だろうか。

この先起こる、悲惨な結末を知っていても、それを変えることすら許されないというのに。

d r a w

27：エジプトプラン100〜宗教改革〜

少年王ツタンカーメンと、その妻アンケセナーメンは

時代に翻弄されながらも、正しい道を選ぼうとしていた

この時代背景を説明するならば、少年王ツタンカーメンによる統治の時代であった。

しかし、問題なのは前王アクエンアテンによる大規模な宗教改革である。

強大になりすぎた“アメン神官団”の力を押さえるために、アクエンアテンは一神教の“アテン信仰”以外を許さず、逆らう者は容赦なく罰した。

人々は王家と神官団の戦いに巻き込まれ、信仰の自由も奪われた。

アクエンアテン亡き今も、王家への恨みは大きく、反乱や争いは絶えない。

人々に受け入れられなかった“アテン信仰”の時代は短く、今や再び“アメン神官団”が力を得た。

この都のあるメンフィスには、アメン神官団が、

前の都のあった、テル・エル・アマルナには、今や廃れたアテン神官団が存在していた。

しかし、アテン神官団は、再び力を取り戻そうと、反乱を画策していると言われている。

団長とシャルロとキクマサがこの地に現れ、3日がたった。

「ここまでは、俺達が習った歴史と変わりない……。前王アクエンアテンの宗教改革は、失敗に終わったわけだ。その尻拭いをさせられたのが…今のファラオ“ツタンカーメン”だ」

団長とキクマサは、二人で用意された部屋にいた。エジプト風の白い衣服を着て、風通しの良い場所で、時代の説明をもらっている。

た。団長は、この時代に早くも適応している。やはりただ者じゃない。

「…団長はもう、納得しているんですか？」

「……何が」

「だって、有り得ない事じゃないですか…。要するに俺たちは過去にタイムスリップしたわけでしょう…？ まさか、ルネ・ヴィライアーの研修って、こんなのはかりなんですか？」

あまりにキクマサが真面目に聞くものだから、団長は吹き出すと、

「まさか。こんなのがあつてたまるかよ。でも、ヴィライアーの研修って、たまに変なことが起きるから、まあ…無くもないんじゃない？ って感じ」

「……………はあ」

まあ、実際いまだに驚きまくってるのはキクマサだけだったので、共感を求めていたわけではないが。

用意された朝食は、パンと水だった。

「…それにしても固　な」

団長は顔をしかめていたけれど。
キクマサは、

「シャルロ先輩はどうしてるでしょうね」

別の部屋にいる、シャルロを思い出す。団長は白々と無関心そうに、固いパンを頬張っている。

「寝てんじゃないの……。どうでもいいよ、あんな女」

「……………」

本当に仲悪いな。

キクマサは苦笑いした。しかし、仲が悪い理由を聞くことも出来ないので、ほおっておく。

「どの道、俺たちが現代に戻るには、この物語を終わらせなきゃならないんだよ」

団長は黒髪をかきあげながらそう言って、カッソとコップを机に置くと、立ち上がる。

最初は怖かった団長だが、怖いところ含めて、それに慣れてきたキクマサだった。

シャルロは自室で女性用の白い衣服を着て、大理石のテーブルと椅子に腰掛け、金の盆に盛られたブドウを摘みながら物思いにふけていた。

さて、何がどうなっているのだろうか。

奴らは、“厄災の再来”と言った。ということは、過去にも私たちと同じ様に、未来から来た者がいたという事だろうか。

「…考え過ぎかしら」

ブルネットの巻き毛を手櫛で片側に流す。彼女の癖である。

持ってきていたコンパクトで、軽く容姿を整えると、唇に赤いルージュをひく。

過去のエジプトに行くなんて想定外だった。

嫌な予感がしたわけだ。スノーが「この研修は長くなる」と言っていたのを思い出す。彼は本当に敏感だ。

シャルロは一粒ブドウを摘むと、足を組み直した。

その時、不意にドアを叩く音がして、誰かが訪ねてきたようだ。

「…はい…どうぞ…」

何とも気の抜けた、やる気のない声で答えた。どうせ、団長にパシられたキクマサ君が呼びに来たのだろう。

しかし、

「入りますよ…」

入ってきたのは、キクマサではなく、まっすぐの黒髪を切りそろえた、アンケセナーメンであった。シャルロは驚いて立ち上がる。

「…王妃…」

「お気になさらないで、シャルロ。…私はあなたに聞きたいことがあるのです…」

アンケセナーメンは、シャルロの前に立つと、彼女を見下ろし、微笑んだ。

シャルロも軽く笑い返すと、

「私でよろしかったら。」

胸元に手を当て、頭を下げた。

かつての歴史を、少なからずシャルロは知っていたが、決してそれを変えてはいけないことも、彼女は承知していた。

「…あなた方は、きっと未来から来た。そうでしょう…?」

「よくご存知で…。その通りですわ…」

シャルロは特に何て事なく答えた。アンケセナーメンは顎に手を添えると、

「…今から約10年ほど前になると思うのですが…私の父アクエンアテンの時代です。…私も、ファラオも幼かったころ、最初の“ラーの使徒”が現れたのです」

「……………」

シャルロは、視線だけをアンケセナーメンに向けて、黙って聞いていた。

アンケセナーメンの華やかな首飾りが、シャランと音を立てる。

「…彼らもまた、未来から来たと言っていました。私はハッキリと覚えていません。彼らは…私の父の成そうとしていたことに、真つ向から異を唱えたのです」

“アマルナ改革は失敗するだけでなく、あなたの一族ごと、呪われるでしょう”

彼は確かにそう言った。未来を知っていたから。

シャルロは、目を見開いた。

「かつても、未来から来た人がいたのですか？」

「ええ…、勇敢な若者が二人…。彼らは反乱を起こした“ラーの神官団”と共にいたために、“ラーの使徒”と呼ばれていました」

アテン神以外の信仰を禁じた大規模な改革を、現代では“アマルナ改革”と言うが、そのせいで、他神を祭っていた神官団からの反乱があいついでいた。

かつて、ラーの神官団と共に現れたのが、今で言う“ラーの使徒”。

「…しかし、私は覚えているのです。あの方たちは正しい方に導こうとなさっていた。私の父は、その助言を聞き入れようとしていたのです…。しかし…。」

アンケセナーメンは膝の上の拳を握りしめた。何かに憤りを感じているようで、シャルロもそれに気づいていた。

「…私の父アクエンアテンの正妻、ネフェルティティ様は…前王妃で、私の継母となるのですが…彼女はアマルナ改革をどうしても進めたかった」

ネフェルティティは王妃でありながら、ファラオと並ぶほどの権力をもっていた。宗教改革は加速し、逆らう者は容赦なく殺された。民の心は、離れていくばかりだった。

「あの時代を見てきたからこそ、私たちは時代を元に戻そうと、アメン神官団と手を組みました。しかし、いまだに民は王家を信用していませんし、アテン神官団の残党が、ネフェルティティ様と共にいます。あの方はきつと、あなた方“ラーの使徒”を何よりも恐れられているでしょう」

朝日は、もうだいたい昇って、相変わらず青い空には、ワシが羽ばたいている。薄いカーテンから、それが透けて見えた。シャルロは一時黙って聞いていたが、ふいに口を開いた。

「…王妃様…。私達に望むことは何ですか…？」

それは、アンケセナーメンにとっては予想外の質問のようで、しかし、ダイレクトに要件を伝えるには、きつと望ましい質問であった。シャルロは腕を組んで、後には引き返せないなど、内心鼻で笑った。

アンケセナーメンは一度深く瞳を閉じると、何かを決意したように瞳を開け、

「……私は…ファラオを支えたい…。あの方は幼い頃より、ずっと周りに翻弄され、自分を殺して生きてきた…。今こそ、あの方の望む世界を築くとき…」

砂の悪霊を見たはず。あれは、人々の遺恨が生んだ、呪いの産物であった。

呪いは、まっすぐに王家に向いている。

「呪いを解かない限り、平和な世など有り得ない…。どうか…王家にかけられた呪いを解いて下さい」

呪いを予言したのが未来人なら、それを解くのも未来人である。それは、いにしえの伝説であり、王妃はそれを信じていた。

アンケセナーメンは思い出す。10年前に現れた“ラーの使徒”の言葉を。

美しい金の髪を風になびかせて、あの中庭で、私は女神を見た。幼かった私には、あの人があまりに美しく、女神かと思ったのだ。

“…きっと、闇を照らすのは光に違いないわ。いまに真実は分かるから。”

彼女はそう言っつて、中庭に咲く、小さな菊の花で、花輪を編んでくれた。

今でも中庭に行くと思ひ出す。
かつての二人の“ラーの使徒”

あなたたちが、今でも私とファラオの道しるべ。

若かった私達の支えだったから。

アンケセナーメンが去った部屋で、シャルロは窓際に佇みながら、見える景色に瞳を細めた。

呪いを解く事。

それすなわち、この物語を終えることならば、私達のするべき事は分かったじゃない。

「……………」

シャルロは、王妃が部屋を去るとき、最後に一つ質問をした。

「…かつての“ラーの使徒”は、どうなったのですか…？」

彼女は、探るように、アンケセナーメンを見上げた。

王妃は少しだけ振り返って、視線を床に落とすと、

「…一人は、アテン神官団の者に殺され、一人は光の中に消えました。それ以外は知りません」

彼女は確かにそう言った。

この物語の中で死ぬと、どうなるのだろうか。

だって、みんなが無事でいられると、誰が保証してくれる？
誰が、それを示せる？

他のヴァイライアーが、まだどこかにいるかもしれないのに。
確かな答えなんて、無いかもしれないのに。呪いを解く方法なんて
無いかもしれないのに。

シャルロはエジプトの街を見下ろして、その先の砂漠を睥んだ。

的は、古代エジプト。

私達が、

歴史を動かすことになるなんて。

d
r
a
w

28：エジプトプラン11〜砂漠〜

砂漠とともに生きた民

太陽の怖さも恩恵も、全てを受け入れていた

「……………あつつつ!!!!」

一年生のクレハは、さっきまで鉄板焼の上で焼かれる夢を見ていたのじゃないかと思うくらい、激しく照りつける暑さで目が覚めた。赤毛が、汗で頬に貼り付いている。

勢いよく起き上がったのは良いものの、目の前がものすごい熱気で、もわんもわんする。

「……………もわんもわんする……………」

クレハは視界を平然と見ていた。その、灼熱の砂漠を。

「何でこんなとこにいるかな…」

彼はピヨンと立ち上がり、キヨロキヨロ辺りを見回す。

すると、所々に人らしき何かが、砂漠の砂を被りながら倒れていた。

「っひゃ、こりゃまずい」

クレハは一番近かった人の側に駆け寄った。

アッシュブラウンの髪の男。きつとクレハから見たら、覚えの無い先輩。四年生のフレイ・レステヴァンであった。

「おーい」

クレハは、フレイの肩を揺さぶって、誰だかわからないくせに、

「寝たら死ぬぞ　！！」

必死に起こそうとした。間もなくフレイが険しい顔で起き上がった。

「…何だ…」

「砂漠に落ちたよ。先輩」

クレハはそういうと、ここからまた5メートル離れた所に倒れた人影に向かった。

フレイは「はあ？」と頭をかいて、しかし目の前に映る広大な砂漠

も無視できずに。

クレハが見つけた人物は、これまた四年生のスノーフリーク・ロズベルトであった。

「……………スノー!!!」

クレハは彼が誰だか分かると、驚いて名を呼んだ。何度も肩を揺する。

「スノーもいるのか!？」

フレイも声を聞いて駆けつけた。

「てかスノーって…。おめー先輩に呼び捨ては無いだろ。流石に…」

「だってスノーはスノーだもん。俺の兄ちゃんだ」

「ああ…兄ちゃんなんだ…」

フレイはしゃがみこんで、小刻みに頷いた。

「……………」

俺の兄ちゃんだ。

「…っええ!!!」

ワントンポ遅れた反応。ちょっと待て、ちょっと待て、ちょっと待て。

その時、タイミングよくスノーが目覚めた。
淡い髪についた砂が、サラサラ落ちる。

「……………暑い」

起き上がったの第一声。

「おいスノー！！ この一年生、お前の弟なのか！？」

フレイは、ビシッとクレハを指差した。

起きて急に唐突な質問を投げかけられたスノーは、フレイを見上げて顔をしかめる。

「……………何？……………急に」

「だってこのガキがお前のこと、兄ちゃんって」

「そうだよ」

スノーは起き上がって、額の汗を拭った。どうやら暑いのが苦手なようだ。

「クレハはロズベルト家の養子なんだ。兄弟っていつても、血は繋がってないよ」

隣でクレハが頷いていた。

血がつながっていないくて当然だ、彼らは全然似ていないから。それ

でも流石のフレイもこれにはたまげた。

「初耳だぜ……。お前何にも言わなかったじゃないか……」

「……………どうして?」

スノーは冷ややかにフレイを見た。その、見ていたらどこかへ行ってしまいそうになる瞳で。

「……………どうして君に言う必要があるの?」

「……………」

彼は、余りの暑さにご機嫌斜めのような顔だった。

さっきいた所と違う場所にいることは、別に驚いちゃいけないけれど、とにかく暑い事が嫌なのだ。あんぐりしているフレイから目をそらすと、スノーは少し先の何かに気づいた。

「それより……あれいいの?」

彼は無表情でそちらを指差す。

クレハもフレイも、一緒にそちらを向く。

「……………彼女、ルネ・サファイヤじゃない?」

「……………」

頭に白いカチューシャを付けた、肩までの黒髪。

三年生の、ジェイル・クォーションだった。

彼女は暑さにつながれながら、砂漠の真ん中でコロんと倒れていた。

ジェイルは、さっきまで焼けるように暑かったのに、急に、照りつける痛い暑さが遮断されたのを感じた。

何だろう。

額にヒヤッと、冷たいものがあたって気がした。

彼女はゆっくりと目を覚ました。

「あー!! 目え覚めた!？」

「……………」

目の前には、赤毛の少年が、目をくりくりさせてジェイルを伺っていた。

この子は確か、一年生のクレハ・ドルフォード。天井は岩のガタガタした壁。

ジェイルはゆっくり起き上がった。ぱさりと、濡れたタオルが地面に落ちる。

「よお……起きたか、ルネ・サファイア」

フレイは壁際に座っていたが、ジェイルが起きたのを見ると、立ち上がって近寄る。

「お前、砂漠の中で……」

「来るな!!!!!!」

その時だった。

フレイが、ハッと足を止めてしまったほどの凜とした声。

ジェイルはフレイを睨み上げていた。

冷たい、拒絶の瞳で。

「私に近寄るな……っ。男なんて……」

男なんて。

フレイは少し驚いて固まっていたが、つい鼻で笑うと、

「そ だった……。男嫌いで有名だったな……」

再び彼女に近寄った。ジェイルは立ち上がると、クレハの後ろに隠

れる。フレイを睨む瞳は相変わらずだった。

「…おい、その赤毛の小猿も男だぞ」

「……お前よりマシだ!!」

「……………」

クレハは訳が分かっていない様子だった。

面切って話したのは初めてだと言つのに、えらく嫌われたものだ。

フレイは何故か、少し笑っていた。

「そこら辺にしときな……フレイ」

少し離れた岩壁にもたれて、だるそうに座っていたスノーが、やつと口を開く。

「ルネ・サファイアは男嫌いなんだから……」

「しょーがねーじゃねーか。ここには男しかいねーぞ」

スノーは相変わらず無表情だった。研修着の黒い上着を脱いで、白いワイシャツ姿だ。

視線をフレイからジェイルに移すと、

「…ルネ・サファイア、よく聞いて……。僕達はさっきまで、砂漠の真ん中に倒れていたんだ。…運良く近くに岩穴があったからよかったけど……」

ジェイルは、何だか緊張した面持ちで、スノーの話聞いていた。クレハが突然手を挙げる。ジェイルはビクツとした。

「はいはい！！　ここはいつたいどこなの??」

重苦しい空気の中、彼の声だけ明るかった。

ピョンと立った寝癖が、相変わらず楽しげに揺れている。

スノーは淡々とした目で、

「…それは勿論エジプトさ…」

何かを悟ったように答えた。

「でもきつと…僕らの今までいたエジプトとは違つと思つよ」

「全く、女に振られたことのない俺様が、こんなに拒否られるとは

…」

「……きつと君みたいな男…生理的に受け入れられないんじゃない…？」

「……今サラツとひどい事言っただよな」

フレイはため息をついた。この岩穴に籠もってから、一体どれだけ時間がたっただろうか。

相変わらずジエイルは隅っこで防御張ってるし、クレハはリュックを抱き枕に寝てしまった。

だんだん日が暮れて、涼しくなってきた。

「なあ……お前これ、どう思うよ」

「……何が？」

スノーは、何だか疲れきった表情である。こんな所へ来ただけで疲れるのはよくわかる。

「あのオツサン…まんまと俺達をはめたのかって聞いている」

「……まあ、セテイさんに悪意があるかどうかは分からないけどね……」

スノーは、半ばうつらうつらしながら、そのまま沈没していた。

「……ありえねえ。寝やがった……」

フレイは、気になる言葉を残して寝てしまったスノーに、頬をヒクヒクさせたが、

『…まあ、こいつにしちゃ起きてたほうか……』

諦めてうなだれた。

しかし、その時ピンときてジエイルの方を向いた。

ジエイルは相変わらず目を光らせていたが、急にフレイに振り替えられ、ビクツと反応する。それがどうにも小動物の様で面白い。フレイはニヤリと笑うと、

「なあ…何で男が嫌いなのか？」

唐突に質問した。

しかし、ジエイルはしらっとした表情で視線を合わせようとしない。まるで自分に聞かれてないように無視をしている。

「おいこら」

「うるさいだまれ」

ジエイルは余裕の無い口調だった。フレイは無性に吹き出すと、立ち上がり、背伸びをする。

そして、ポケットに手を突っ込んで、彼女に歩み寄った。そこに転がっているクレハをまたごす。

「く、来るな!!」

「静かにしろ。坊やが寝てんだから。成長期のガキは寝かしてやんねえと…。そうだろ？」

フレイはクレハに目配りをした。ジェイルは身を小さくして、フレイを睨んでいる。

「…お話しようぜ、お嬢さん。スノーも寝ちまって、お兄さん暇だからさ。……別に取って食ったりしないから」

フレイはジェイルの目の前でしゃがみ、彼女の視線の高さに合わせた。ジェイルは、“取って食う”というフレーズに青ざめたが、すぐに持ち直すと、

「お、お前と話す事なんて無い…」

ふいとそっぽ向いた。

「残念。もったいねえなあ、可愛いのに男嫌いなんて」

フレイは意味深に、片口上げて笑うと、不意に彼女の髪に触れた。ジェイルは驚いて一時硬直してしまった。瞳を丸くさせて、彼をやっと見た。

もう、暗い夜が近づいている。

背筋が凍るようだった。

フレイにとってはこんなの、あらゆる女の子にしてきたよくあるパターンで、基本的に、自分が狙った獲物は逃がさないがモットーであったので。彼は彼女から目をそらさなかった。それも一つの必勝スキルである。

男嫌い男嫌いって言ったって、どの程度のものか確かめてみるか。

しかし、ジエイルは、スツと表情に影を落とすと、まるで夜の訪れのような冷たい瞳をフレイに向けた。

彼女もまた、彼から瞳をそらさなかった。

逃げなかった。

その瞳は印象的で、自分への拒絶を痛いくらいに感じる。彼女は、彼の手を断固として振り払うのだ。

「私に触れるな…私に関わるな…」

声は凜としていて、ピンと張り詰めた緊張感の中で、嫌によく響いた。

「……お前、嫌いだ」

それは、まるでギリシャ神話のアルテミスのように。

彼女は正に、何者にも壊せない、固い意志の強さがあった。

男嫌いのくせに、ひるみもしない。

むしろ、戸惑ったのは自分。

砂漠の真ん中で、これから起こる、長い時の旅の物語。

最初の彼らの関係なんて、

こんなものだった。

29：エジプトプラン12ヶ月の石

月と星と砂だけの、幻想的な世界を、

旅をする、僕らはキャラバン

「でね、だからね、俺は言ってやったんだ。確かに俺はヘルより背が低いけど、ヘルより大きく見えるよって。何でだか分かる？ っ
て。え？ だって、絶対みんな俺の方が背―高いって思ってるって。
うんでもね、実は健康診断したとき分かったんだけど、俺の方が二
センチ小さかったわけ」

「……………」

「あのね、でも俺の方が五センチは大きく見える。何でだか分かる？ あとね、体重は俺の方が重かったんだけど。だってあいつ筋肉ないもん。おぼっちゃんだからな。あ、それでね、えーっと、何話してたんだっけ」

「……………なげえよ……………そして激しくどうでもいい」

フレイがいよいよ突っ込んだ。

クレハが目覚めてからというものの、やたら長くて、要領の掴めない話を、延々と語りかけてくる。

しかし、聞いていなかったと思っていたスノーが、淡々と、

「……………何で背が高く見えるのかって話……………」

崖の壁にもたれかかって座ったまま、ポツリと呟いた。

クレハは人差し指を立て、「そうそう！！」と頷く。こういうとき、流石兄弟だなと思う。

「それはね、何でだか俺にも分からないんだ」

フレイはあぐらをかいたまま、後ろにずっ転んだ。

どうしようこいつ、激しく会話の繋がらないタイプだ。

なぜかクレハが持って来ていたランタンを、中心において。

スノーは一時して、

「……………きつと、君の態度が大きいからだよ」

ぼんやりした瞳で、淡いランタンの光を見ていた。
クレハは、

「……………へ〜……………そっか〜」

と。

本当にこいつ、分かってんのか、と。

フレイは大きいため息をついた。目の前の黄土色の小石を手に取りると、軽くスノーに投げつける。

スノーは、ものすつごく「何こいつ」みたいな顔をしていた。いつもの事だ。

ここにきて、どのくらい経ったのだろうか。時計の時間なんてあてにならないし、もう深い夜だというのに。

自分たちはここから動けないでいる。

ジェイルは、端っこで小さくなって気を張っていたが、かなりお疲れの様だった。

「……………ルネ・サファイア……………少し寝なよ。僕がフレイを見ておいてあげるから」

スノーはジェイルの様子に気がついていて、彼女は何も答えずにいた。

フレイは心外だというように。

「おい。どういう事だよ。まるで俺をケダモノのように」

「……………違うのかい？」

平然と、冷たい深い瞳を向けられるスノーは、相変わらずのローテーションションである。

それは、昼間の暑さが嘘みたいな、夜の涼しい風が吹いた時だった。クレハがハッと顔を上げたのだ。

「……………どうしたの……………クレハ……………」

スノーが顔をしかめた。

船をこいでいたフレイも、首を回して目を冴えさせていた。

「何かここに来てるよ」

「……………は？」

フレイは寝ぼけまぶたで反応する。

クレハは立ち上がると、洞窟の入り口の、その向こうを見た。目を凝らして。

彼は目をぱちぱちさせると、急に表情を明るくさせた。

「すげー！！ ラクダだあ！！」

砂の中を、いくつかの黒い人影。そしてラクダの影。こちらの洞窟に向かって来ているようだ。

「うわ……どうする？」

「どうするもこうするも……」

スノーとフレイは、お互い苦笑いで、その人影を見ているしか無かった。

人が来た事は幸い。でもそいつらが良い奴らかどうか分からないし。でもそんな事言ったら何も変わらないし。

ていうかその前にランタンの光のせいでもうとっくに手遅れっていうか。

色々複雑な状況で、頭がショートしそうだ。

しかし、複雑な思いなど持ち合わせていないクレハは、

「おーい、おーい！！！！ ここだよー！！」

なんと洞窟から飛び出して、その人影に向かって叫んだのです。

アーメン。

「おじいちゃん、あちらから光が見えるよ」

「…ほう。人がいるのかの…」

十にも満たない少年が、ラクダの上から淡い光を見つけた。少年の掴まっている老人は、白い眉毛を動かす。

砂漠の真ん中を渡るキャラバン商隊。列をなすラクダ。

老人の前のラクダに乗った男が、怪訝そうに、

「あちらには確か、休憩所の洞穴があったはず。…まさか盗賊では…」

「それも有りうるのう…。砂に隠れて、夜に紛れるのじゃ。出来るだけ気づかれないように…」

その時だった。

少年は、砂の間から、風に乗って聞こえる声に気がついた。

「おじいちゃん…人が呼んでるよ」

「…なんじゃて…」

少年は指をさした。

その方向から聞こえる声は、紛れもなく我々を呼んでいた。

キャラバンはそこで、ラクダを止めたのだった。

「スノー……！！ 人だよ……！！ 俺たち助かるんだ……！！」

クレハは顔をキラキラ輝かせながら、洞窟に飛び込んで来た。

「……よく言うよな、別に心配してもなかったくせに」

フレイは立ち上がると、ジェイルに向かって、

「おい、起きろ。人が来るぞ」

さりげなく言っただつもりだが、彼女は眠りながらにして耳を抑えた。

「おい」

「君の声じゃ起きない。えらく嫌われちゃったもんだね……。いいじゃない、まだ寝かせてあげようよ……」

スノーは、ムカツときているフレイに向かって、淡々と事態を分析。ジエイルは険しい顔で身を小さくさせた。

「……ふ、ふん……。まあいい。後でたっぷり嫌がらせしてやる」

「……君が言つと、何だかなあ……」

ちやっかりシヨックを受けているフレイは、強がってかっこつけるが、やはり心穏やかではなかった。スノーは、白けてしまっている。

そんなやりとりの中、洞窟の入り口から、数人の男達が現れた。無地のマントと、ターバンの男達。

彼らは、クレハに導かれ、この場所にやってきた。我々をもの珍しそうに見ている。

「……見た事の無い風貌じゃのう……。若いの……」

杖をついた老人が、男達の中から一步踏み出した。

老人の足下には、小さな子供がピツタリついている。

クレハは口を丸くさせると、

「俺たち、いきなり砂漠に落ちたんだ。おじいさん達、どこどこか分かる？」

「……は？」

男達は意味不明というように顔を見合わせていた。
老人はぴくりと眉毛を動かす。

スノーは頭を抱えてクレハを横にやると、

「いきなり失礼しました……。僕たちは先ほどまで、こことは違う世界に居たのですが、いきなりこのような所に来てしまったのです。……信じられないとは思いますが……。何かご存じないでしょうか」

「……………ほう」

老人は肩眉を上げて、奥から見える瞳をこらす。

彼らヴィライアーの風貌、出で立ちを、しっかりと目に焼き付けている。

そして、ゆっくり頷いた。

「違う世界から来たとは……………これも何かのご縁」

何やら老人は疑っていない様子で、不思議と彼らを受け入れている。しわがれた声は落ち着いたもので、彼らを安心させるように優しい。

「わしはかつて、他にも違う世界から来た者と会った事がある……。力になれる事があれば、言ってください」

ゆっくり、固くなったその厚い手を、スノーに差し出した。

彼らは砂漠を渡る商人、キャラバンの商隊で、あらゆる町の品物を運んで旅をしていた。

老人の名はカーロン。少年の名を、タハールと言った。

ばちばち、焚き火のはじける音がする。

キャラバンの一行と、我々だけが、その火を囲んでいた。洞窟の壁に、いくつもの影が大きくのびている。

端っこで、タハールとクレハが遊んでいた。

老人は、そんなタハールを見ながら、

「……………あれは、10年前の事でした。あの子、タハールは父の名を受け継いでいるのですが……………あの子の父が、未来から来た者と出会ったのです。それは、運命だったのでしょうか」

あの時代は、混沌とした不安定な時代。

アクエンアテン王は自らの力を絶対的な物とするため、宗教改革を行った。

民の愛した神々が、ことごとく消されていく。

像や神殿は壊され、逆らう者は容赦なく殺された。

それは、民の悲しみが、神の怒りかは分からないけれど。

「……当時、よからぬ災いが相次ぎましての……。ちょうど、“セト神”の神殿が壊された後だったので、皆“セト神の呪い”と言っておりました。いやはや、思い出したくないものです……酷い時代でしたから」

子供達二人の笑い声とは裏腹に、こちらは老人の話に息を飲んだ。

「酷い時代……？」

フレイは眉根を寄せた。

スノーは淡々と、黙ってたき火の揺れる光を見ていた。

「……王家による宗教改革で、当時はアテン神以外の神を崇める者が弾圧を受けていたのです」

老人は、どこか遠くを見ていた。

忌まわしきあの時代を、思い返すかのように。

クレハは、タハールの相手をしていて。対等に遊べるのだから、あの意味凄いいけれど。

「あのね、お兄ちゃんに僕の宝物を見せてあげる」

タハールは、クレハに耳打ちをした。
何だかとても無邪気な笑顔だ。

「へえ、なにになに??」

「あのね、本当は誰にも見せちゃいけないんだけど、お兄ちゃんは特別」

タハールが懐から取り出したのは古い小袋で、茶色く、かなり古いものだ。

彼は袋を開け、その小さな手の上に、何かを取り出す。

「……………え……………」

クレハは目を大きくさせた。

その輝かしい、黄色い宝石に。

どこかで見た事がある気がする。知っている気がする。
タハールは、再びクレハに耳打ちをした。

「これはね、父さんの形見なんだ。お守りなんだって」

月のように、黄色くて丸い宝石。金の飾りの中で、時を経てもなお美しい。

知っていて当然だった。

見た事があって、当然だった。

だって、それはルネ・トパーズの称号。

紛れもなくヴィライアーのペンダントだったのだから。

十年前の物語と、今の物語。

砂の王国に消えた、空白の時間。

繋ぐ事ができなければ、結末は訪れないよ。

I
d
r
a
w

30：魔術師の予言

鍵を閉めて、扉の向こうに閉まった物って、
いったいなんだったのだろう。

誰がそんな事をしたのだろう。

「パリス……どうやら絵画科のヴィライアーが扉を開けたようだ……」

「……………そうですね……………」

黒いローブを羽織った青年が、錆び付いた鍵を手に、アンデスの山

の、切り立った崖から夕焼けを見ていた。

彼は、パリス・ヴァレリー。

彫刻科ヴィライアーの団長であった。

「古きインカの歴史を握る“入り口の鍵”を手に入れるために、僕らはあえて、エジプトを絵画科に任せました…。エジプトの入り口の鍵は、すでに持っていましたからね…」

パリスはロープを翻して立ち上がった。

アプリコットブラウンの髪が、夕焼けのオレンジを受けて、なおさら燃えているようだ。

彼は手に持つ古くさい鍵を見つめた。

「世界の歴史を司る鍵…入り口の鍵を見つけるのは難しい…。でも、出口の鍵を見つけるのは、違うように難しい…」

「……それでも我々は、鍵を探し続けなければならない…」

彫刻科副団長の、ロードルーン・アイスキネスが、パリスの側で、彼の行動を待っていた。

「そうです、ルーン…。出口の鍵は、その歴史の中にしか存在しない…。それを全て集めることが、僕らの使命…」

彼は振り返った。いつの間にか、音もなく全員の彫刻科ヴィライアーが、彼の元を集っていた。

八つの、茶色いロープ。

不思議な風が、彼らを取り巻いている。

その中の一人が、顔を上げた。

「パリスさん…、鍵は見つかりましたが扉は出てきませんね…」

「まだ、時期じゃないって事だよ…シャトー。時が満ちたら、扉は現れる…」

まだ、あどけなさの残る少年は、小さく微笑み頷く。

二年生のシャトー・オークラン（ルネ・ウッドロッド）であった。

「でもよ、絵ばっか描いてる絵画科のお坊ちゃんたちに、エジプト攻略なんて大仕事が務まるとは思えない…。どうなんですか？ パリスさん」

三白眼の男が、パリスを探るように見る。彼は四年生のアルマ・カイザード（ルネ・アイアンロッド）。腕を組んで、不機嫌そうな表情だ。

「あっはは。アルマ兄さんってば、エジプトに行く気満々だったもんね。拗ねてるんだ」

背が低く、太っついておっぱいの少女がお腹を抱えて笑っていた。彼女は三年生のブリジット・バルーン（ルネ・スチールロッド）。

「止めなよ、ブリジット姉さん。アルマ兄さんはすぐ怒るんだから」

「おい…ブリジットもシャトーも、後で覚えてろよ…」

アルマは苦笑いで肩を震わしながら、三白眼をさらに釣り上げる。二人は口を押さえて黙る。

パリスはクスクス笑いながら、

「大丈夫だよ…絵画科の人たちって意外に凄いんだから」

他のヴィライアーに笑いかける。

彼の後ろで、夕日が今にも沈みそうだ。

「お言葉ですが、パリスさん…彼らはただの人間です…。美術能力は優れているとは思いますが…しかし…」

「……そうだね。確かにフィルの言う通り、彼らは普通の人間だ。何も知らないし、“イマジン・ヒストリア”を攻略するのに時間もかかるだろう。僕らとは違う。……でもね、違うからこそ、僕らには紡げないエピソードがあるでしょう…?」

パリスは、目の前の青年、四年生のフィル・レグール（ルネ・ブロンズロッド）に語りかける。その瞬間の精霊の風に、フィルは銀の細い髪をなびかせ、ゆっくり頷く。

「……ええ。何か、お考えの事とは思っていましたが……」

すると、フィルの隣に居たアルマが、腕を頭の後ろに組んで、

「ま、普通の奴らって言ったって、変人だらけだけだな」

「……僕らがそんな事、言えないと思うんだけど……アルマ兄さん」

シャトーは視線を斜め下に流し、溜め息混じりに言った。

今までずっと黙っていた、五年生のエマ・ベリル（ルネ・プラチナロット）は、茶色い肩までの髪を風に委ね、疑念の瞳でパリスを見る。

「……………そんな、甘い事でもいいのか、パリス……………。これであいつらが帰ってこなかったらどうする……………。私たちには時間がないと言うのに……………」

「……………エマ……………」

彼女の瞳は鋭く、声は厳かだった。彼女はこの中で誰よりパリスに手厳しい。

ルーンはそんな彼女に眉根を潜めたが、パリスは口元に手を当てる
と、

「確かに、君が焦るのも無理は無い……………僕ら五年生は今年で卒業だから……………。そんなに心配なら、君の得意な占いで、彼らの未来を読みなよ、エマ。僕は彼らを信じているよ……………」

「……………」

彼女は相変わらず、パリスを探るように見ていた。

雲の流れが速い。

星がいくつか姿を見せ始めた。

エマは、いつの間にか、手に一枚のタロットカードを持っていた。

彼女はそのカードを見て、クスリと笑うと、その表をパリスの方向に向ける。

「……………なるほど、“審判”のカード……………」

彼は瞳を細めた。

「このカードは、復活・変化・結果を意味する……………絵画科が古代エジプトに行く事で、確実に何かが変わる。お前はこれを狙っていたのだろう……………パリス……………」

「……………それはどうだか……………僕に未来を読む力は無い。それは君の仕事だろう……………エマ」

「……………」

二人の探り合いは、この悠久の大地と、神秘的な風を呼んだ。エマは鼻で笑うと、カードを一度見て。

「まあいい……………腹黒いお前の事だ……………先の事まで計算し尽くしているのだろう……………？ これ以上は聞かないでおいてやる」

「……………ありがとう、エマ。君のそういう所、凄く好きだよ」

パリスはニツコリ笑うと、再び空を仰いだ。

彫刻科ヴィライアー。

六大科の中で、最も歴史が古く、謎の多い科。彫刻科のヴィライアー

ーが、それぞれのヴィライアーの称号であるペンダントを創ったと言われている。

彼らは、かつてインカ帝国のあったと語られる、アンデスの地に居た。彼らもまた、ヴィライアーの研修としてやって来たのだ。

パリスはクスクス笑うと、今にも沈みそうな夕日を振り返り、前から吹く向かい風に、ゆっくり瞳を閉じた。

風の匂い、その歴史、精霊の声を、全身で感じ取るように。

「世界に点在する鍵を、全て集めてしまわないとね……………“夜”が奪いにくる前に……………」

彼は風の中に消えそうな声で、そう呟いた。

鍵の力の、本当の意味を知る者。
それは僕らだけではないから。

ヴィライアー全員が、パリスと同じように、いずれ来る暗闇を睨んでいた。
彼らのローブが翻る。

風が、大地の精霊が、まるで彼らと共にあるように。

ふと、今まで黙りこくっていた、一年生のスカーレット・マリーニが顔をしかめた。

その表情に、パリスはすぐに気がつく。

「……………どうかしたかい……………？ スカーレット……………」

彼女は、雪のように白く、長い髪を抑え、風に耳を澄ませる。

その声を、聞き逃さないように。

「……………ヴィンセント先生が呼んでる……………そろそろ戻らなければ……………」

彼女は淡々とした声でそう言った。

視線だけパリスに向ける。

「……………そうですね……………研修とはいえ、あまりゆっくりしてられない……………。絵画科のエジプト攻略も気がかりですし。僕らも、他の鍵を探しに行かなければ……………」

パリスは意味深に視線を流し、訪れた暗闇を一瞥した。

その瞬間の、強い風。

彼らは、音も無くその場から消えた。

まるでもともと、そこには居なかったかのように。

彫刻科ヴィライアー。

いずれ、絵画科と深い繋がりのできる者達。

真実に、最も近い者達。

歴史を、封印しなければいけなかった者達の、その意志を継ぎ、

それを創った業として、“鍵”の結末を求められた者達。

鍵をかけてまで、扉の向こうに封印したもつて、いったいなんなのだろう。

それを知った時、どうなってしまうのだろうか。

I
d
r
a
w

*drawコラム(二年生)

(二年生)

No.1

オノダ・キクマサ(小野田 菊正)

*ルネ・アメジスト

*日本人

特徴/茶髪の外ハネ。割とあか抜けた感じ。

性格/クールそうにしているが、案外天然。頭が理系脳なため、物覚えが悪い。小学生のころ、野球をしていたため、運動神経は良いほう。元不良だが、今ではすっかり丸くなった。

絵画の特徴/基礎がしっかりしているため、バランスがよい。母親譲りのセンスと潜在能力があるが、何しろまだまだ経験不足である。

> 同級生から見たキクマサ君<

フォルテ

「…あ…、いいかげん俺の名字覚えて」

ルナシー

「…ちゃんと男の子」

レイ
「意外と真面目」

No.2

ルナシー・ミディエム

*ルネ・トパーズ

*ギリシヤ人

特徴/金髪巻き毛。瞳が大きくておとぎ話のお姫様系

性格/普段は、みんなのイメージ通り、可愛らしく振る舞っているが、心の中では計算高い思考をする。人間観察が密かな趣味。自分でもその性格を自覚している。かなり美人だが、本人はそこに、あまり価値を置いていないようだ。

絵画の特徴/点画の要領で、前後感を出す遠近法を得意とする。淡い色使いを好み、高い評価を得ているが、技術があるだけに、時として自分の殻を破る表現を求められる。

> 同級生から見たルナシーさん<

キクマサ

「…学年のマドンナ」

フォルテ

「…あゝ…その…やっぱりルナシーと言えば、ヨーロッパのお姫様のイメージ」

レイ

「私の天使」

No.3

フォルテ・ゴッドバルト

*ルネ・クリスタル

*ベルギー人

特徴ノイエローオーカーの髪をバンダナで上げている。長身。性格ノ明るく、お調子者のように振る舞っているが、実はかなり思慮深い。父親が考古学者で、本人もかなり頭が良い。見た目の割にインドア派で、運動は得意ではない。ルネ・テクタイトにこだわる。絵画の特徴ノ物知りで賢いため、発想力がある。応用的な技術を数

多く知っているが、基礎がなおざりになる傾向がある。厚塗りで、マツトな表現を好む。

<同級生から見たフォルテ君>

キクマサ

「寝起きが最悪」

ルナシー

「…いつも鉛筆削ってる気がする」

レイ

「考古学オタク」

No.4

レイデル・リローズ

*ルネ・ペトリファイウッド

*ベルギー人

特徴／黒髪のショートカット。猫目だが、右目を失明。眼帯をつけている。

性格／気が強く、明るく元気。第二学年きつての天才である。多少感情的な所があり、その点でルナシーとは正反対である。自分に正直で、一途。

絵画の特徴／とにかく、絵作りにおいて、ずば抜けたセンスがある。構成力があり、高い技術力もある。片目を失ったことで、今後どのような絵を描くのか注目されている。

<同級生から見たレイさん>

キクマサ

「何て言っただって、構成の申し子」

ルナシー

「…典型的B型」

フォルテ

「……………小さい頃からストーカー」

～二年生のまとめ～

他の学年に比べて、これでも多少おとなしい方だ。

ただ、絵画においては粒ぞろいで、向上心がある。4人の結束は固いが、まだお互いにわかっていない部分も多い。

全然ヒヨっ子な学年。先輩たちに、いい影響を受けることを期待す

る。

次回のコラムは〈五年生〉です。

I
d
r
a
w

* drawコラム 〱 五年生 〱

〱 五年生 〱

No. 1

ハク・リュオン

* ルネ・テクタイト

* 絵画科ルネ・ヴィライアー団長

* 中国人

特徴／黒髪に、切れ長のつり目。常にしかめっ面。

性格／荒々しくて、非常に男らしい。俺様主義だが、何気にヴィライアーの事はかり考えている心配性。なんだかんだ言つて、みんな団長はこの人しかいないと思つている。かわいそうなくらい、運がない。実は中国マフィアの跡取りで、ティアンは幼い頃からの友人。絵画の特徴／中国人のたしなみとして、水墨画もかなりの腕だが、本人は油絵の方に力を入れている。主にモノトーンを基調とした、白と黒の調和を巧く表した、割と完成度の高い絵を描く。昔は色鮮やかな絵も描いていたが、最近また、水墨画の要素を取り入れた、新たな表現を探っている。

<同級生から見た団長>

レット

「……結構すぐ落ち込むよね（笑）」

ナギ

「メルベリーには優しいくせに、私には全然優しくくないんですけど」

メルベリー

「最初は怖そうな人だと思ってましたけど、実は真面目で、しっかりした方だと思います」

ティアン

「君、小さい頃大切にしてたトーマスのおもちや…あれ僕が壊した事まだ根に持ってるの？」

「何それ！！ 初耳なんですけど！！！！（一同爆笑）」

No.2

メルベリー・セレネーム

*ルネ・パール

* 絵画科ルネ・ヴィライアー副団長

* イギリス人

特徴／プラチナブロンドの長い髪。清楚で、おしとやか。良家のお嬢様と言った感じ。

性格／出で立ちがまさしくお嬢様で、ヴィライアーの中でも高嶺の花である。優しく、気が利いて、申し分の無い完璧な女性。基本的に団長を立て、自分は雑務をこなす事になっている。突っ走る団長のオアシスの存在で、彼女もまた、自分はそうあるべきだと思っている。時に鋭い意見を言うので、団長は彼女に一目置いている。

絵画の特徴／精密画を好み、こつこつ時間をかけて、レベルの高い絵を描き上げる。時に、社会に対するメッセージ性のある絵を描き、そう言う物に関心があると思われる。被写体の向こう側を、じっくり見る目があり、彼女の描く絵は良い意味でのリアル感がある。

< 同級生から見たメルベリーさん >

レッド

「うわー、メルベリー嬢には変な事言えないなー。とにかく美しい、これに限るでしょう」

ナギ

「全てにおいて、白いー!!」

団長

「良い女」

ティアン

「ぶっちゃけ、僕ら、いとこ同士だから」

ティアン・レーゼス

*ルネ・ターコイズ

*イギリス人

特徴／眼鏡の優等生スタイル。基本的に腹黒そうな微笑み。

性格／実際、ヴィライアーの活動、行動はこいつが握っていると言っても過言ではない。リュオンの幼い頃からの補佐役で、リュオンもこいつには逆らえない所がある。眼鏡で、良いとこの息子さんと言った所だが、毒舌で、目的のためなら犯罪すれすれの所まで手段は選ばない。ただ、全てはリュオンと自分の会社のためである。メルベリーとは従兄弟。

絵画の特徴／実際、リュオンのために入学し、ヴィライアーになつたため、元々絵が好きだった訳ではない。ただ、その分、ここまでくるのに、見えない所で非常に努力してきた。最近はおっぱら絵を描かずに、パソコンでグラフィックの作品を作る方が楽しいようだ。こちらで才能が開花し、賞も貰っている。

<同級生から見たティアン>

レシド

「……実際、ヴィライアーを支配しているのは彼だと思えます」

団長

「……………」(今までの記憶が脳裏をよぎり、言葉にならない様子)

メルベリー

「頼れるところです。私が困っていたら、すぐに助けられます」

ナギ

「底知れない…：いかがわしさを感じるけど、こいつのおかげでウイライアーがうまく機能しているのは事実」

No.4

レッドリー・ヘッドバーン

*ルネ・ルビー

*国籍ギリシヤ

*絵画科男子寮長

特徴/赤みがかった、淡い栗色の髪。良い意味で庶民派のイケメン。性格/父親がイギリス人。母親がギリシヤ人であるが、物心ついた頃は、両親は亡くなっていたので、記憶が無い。年の離れた姉が彼を育てたくれたが、今度はその姉が、末期のガンに冒されている。幼い頃から貧しい生活をしてきたが、その分、人の気持ちがよくわ

かり、慕われている。ナギとは親しい仲だが、男女の関係ではない様子。人間味のある、粹な性格だが、非常に寂しがりや。

絵画の特徴／五年生きつての天才で、彼は既に、注目を浴びている画家である。人物画を得意とし、彼の絵画は独特のノスタルジーを感じさせる。幼い頃から英才教育を受けていた訳では無いが、とある画家に見込まれ、絵画を学んだ。現在教員免許の取得に励み、卒業したら、ルネ・ヴィルトンの教師になるつもりである。

<同級生から見たレッド寮長>

ナギ

「ものすっごいマメ男。たまに部屋を片付けてくれるから、助かるわ。旦那にするにはもってこいのタイプよ」

団長

「のーてんき野郎。うっとおしい」

メルベリー

「…人望もあって、優しくて、素敵なお方だと思います」

ティアン

「君のせいで、男子寮に変なお祭りできたじゃん？ あれ、経費食うからやめてもらえる？」

サイオンジ・ナギ（西園寺 凧）

*ルネ・ダイヤモンド

*日本人

特徴/ストレートの黒髪。普段は結っている。大和撫子で、部屋着は着物。

性格/片付けが非常に苦手で、見た目の割に大雑把で、面倒くさがり。さつぱりした性格だが、多少ミーハー。同じ日本人であるキクマサをかわいがっている。レッドとは気の合うマブダチで、よく一緒にいるので、付き合っているのではないかと学校では噂になる事もある。家は日本でも有名な神社。

絵画の特徴/日本画おたくの理事長に頼まれ、推薦で入学したため、数少ない日本画専攻の学生。彼女の描く花鳥風月は見事で、油絵とは違う趣がある。ヨーロッパには熱心な日本画マニアが少なくないので、彼女のファンはすでに多い。日本画は時に、ヨーロッパの方が、高い価値をつけられる事がある。

<同級生から見たナギさん>

レッド

「あんな部屋見たら…誰もお嫁に貰ってくれないよ…」（遠い目）

団長

「日本人のくせに不器用きわまりない女」

メルベリー

「…ナギは私の憧れです」

ティアン

「……この前ファンの御曹司に求婚されたって本当？ そいつも見
る目無いよね（笑）」

『……………ひでえ……………』（一同）

〈五年生のまとめ〉

基本的に、全員付き合いは長いため、お互いの事はよく分かっている。しかし、五人で活動する事は少なく、割と個人プレイ派が多い。最上学年だけあって、大人びているため、やはり絵画科の憧れの的である。五人の間に今の所恋愛的發展は無く（個人の心の内は別として）、かといってヴェイライアー以外の人と付き合い合っていたと言ふような話も無い。一人一人の力は凄く、最上学年として人の上に立つ能力を持った人間が多いため、今回のヴェイライアーは歴代でも例のない可能性を秘めている。

〈おまけ〉

「五年生を童話に例えるなら」

団長：泣いた赤鬼（鬼のくせに、意外と友達とか好き）

レッド：フランダースの犬（リアルフランダースの犬。最後、死なずに画家に拾われたネロ）

メルベリー：小公女（どこまでも優しく清らかな、無私精神）

ナギ：かぐや姫（周りを振り回したあげく、帰っちゃった所）

ティアン：金の斧（最後はちゃっかり、おいしい所全部持って行きますよ）

次回のコラムは＜四年生＞です。

I
d
r
a
w

31：エジプトプラン13〜歪み〜

天秤を釣り合わせるためにこの世界に残された僕達

きつと、君たちが帰ってくる扉を見つけてみせる

「これはいったいどういう事ですか!! レッド先輩!!!!」

「お、お、おちつくんだシーダ君。そして、何で俺？」

シーダは、レッドの胸ぐらを掴んで、前後に大きく振っていた。レッドは後輩に吊るし上げられて、青ざめている。

今、ここには9人しかいない。
ヴィライアーは全部で18人だと言うのに。

それにしても、ここはどこだ。

激しい光の中で、あの扉が開いた時、僕らがの見たもの。
彼らは今、先ほどとは違う場所にいた。とても似ているけれど。

「ここは王家の谷なのだろうか……………」

リオは額を抑えるようにして立ち上がると、周りを見渡した。
石造りの神殿のようにも、王墓のようにも見える。

「確かな事は、ここには先生もセティさんもない。メンバーだつて半分しかいないってことだ。どうやら、さっきの場所とは違うようだよ」

五年生のティアンは、眼鏡を押し上げ、なんて事なさそうに涼しい顔だ。レッドは「えっ……………」と苦笑いをして、

「まさか異次元に来たとかそんな……………」

人差し指を立て、冗談まじりで言うものの、心配そうに青ざめている。

「それは分からないけれど、別の所に移動したのは確かだよ、レッド。もしかしたら異次元かもしれない」

「君誰？ 超現実主義人間のティアン君がそんな事言うなんて。遊び心に目覚めた？」

レッドは少しのけぞって、得体のしれない生物でも見る目でティアンを見た。

ティアンは眼鏡を光らせる。

「しかし、ここが先ほどの場所と違うというなら、残りのヴィライアーはいつたいどこへ？」

メルベリーは口元に手をあて、伏し目がちに疑問を述べる。

ナギも、腰に手をあて、暗がりで不確かな周囲の様子にいささか穏やかでない。

「そうよ。それに私たち、いつたいこれからどうすればいいの？
分からない事だらけだわ」

「……………」

ティアンは眼鏡を押し上げると、さつきから黙ったまま、何かを考え込んでいるカイの方を見た。

「だんまりかい？ カイ・ヴォストーン、国際鑑定士の君なら何か分かるんじゃないの？」

「俺は考古学者ではありません。この手の話には詳しくない……むしろ、ゴットバルト教授の息子である、フォルテ・ゴットバルトの方が近いと思います、ティアン先輩」

カイは慌てて首を振った。しかし、最後に少し視線をそらしたのが気になったけれど。

ティアンは頭をかくと、

「その頼みの綱のゴットバルトがここにはいないだろ。頼りになるのは君くらいなんだ、頼むよ？ 後は凡人ばかりだし」

はあく、とオーバーに憂いを込めたため息をつく。他のメンバーがイラッときたのは言うまでもないが、それを誰も言う事が出来ない。

「……………ただ、これは美術品の魔力である可能性が高いと思います……………。絵画にも、イマジン・ストーリーと言うのがあるように、美術品、文化品、遺跡、遺産には、何らかの力が働く事があるんです」

カイは思いの外の事を口にしながらも、はっきりと確信めいた口調であった。

それでもまだ何か、大切な事は言わないまま。

ティアンは吹き出すように笑う。

「なにそれ、オカルト？」

「…信じるか信じないかは自由ですよ。でも、実際にみんな消えてしまったんです」

カイは視線を逸らすと、ここにいない残りのメンバーの事を考えた。彼には分かっていたから。

あの鍵の意味も。
歴史の扉だって。

リオは会話の区切りを見て息をつくと、状況の打開策として一提案

する。

「とにかく、残りのメンバーを探しに行こうよ。ここに居たって何も解決しないよ」

「そ、そうね……。さすがリオだわ」

シードは彼を見上げ、何度も頷いた。

「ここにリュオンが居ない今、リーダーはレッドになってもらおうか……。仮にも寮長だ。いいだろう？」

「な、なに！？ ティアン、君じゃなくて！？」

「僕はリーダーっていうガラじゃないよ。サポートの方が向いてるのさ」

レッドはティアンの言葉に驚き、肩からずり落ちるジャケットを戻した。そうですね。影の支配者ですもんね、と言わんばかりに。眼鏡の奥で光る、その怪しい瞳が、いつも以上に怖く感じるのはい俺だけじゃないはず。

だって、団長ですら彼には頭が上がらないのだから。

「そ、そうかい……。君がそういうのなら、ここは俺に任せたまえ……」

レッドは苦笑いで決意表明。力なく拳を握る。

シードが小声で、「レッド先輩頑張れ」と言ったのが、やけに空しく聞こえた。

ここはまるで、永遠と続く迷路のようだ。
出口の無い、閉ざされた世界に迷い込んだ。

カイは、一同の歩く少し後ろについて行きながら、険しい顔で物思いにふけっていた。

これはあの鍵の能力。

あの鍵こそが、全ての美術品の根源であり、真実であると。

我々、鑑定士にとって、最も崇高なる美術品。

この情報は、ここに居るものたちに言う事は出来ない。むやみに存在を明かしていい代物ではないのだ。

あれが本物なら大事だ。

きっと、ここに居ない人たちは、その能力によって扉の向こうの世界に行ってしまったに違いない。

イメージ・ヒストリアの世界に。

我々はきつとその物語に入れなかった。
登場人物は人数制限があるから。

ならば、ここはどこだ？

「何を考えてる？ カイ……」

「ティアン先輩……いえ……」

カイは探るような視線のティアンを出来るだけ見ないようにしていた。

この人は、警戒するべき人。

鍵の存在は、隠さなければいけないと“あの人”にきつく言われたのだから。

カツカツ、先の見えない古代遺跡の回廊を、当ても無くさまよう足音。

ティアンは相変わらず、手厳しい視線だ。

「まあいいさ。国際鑑定士の君が何も知らないわけが無い。君にも立場ってものがあるだろうしね……」

「……さっきはオカルトだと笑っていたじゃないですか……」

カイはティアンの方を見ないで、さりげなく対応しようと心がけた。この得体のしれない男がただ者でない事くらい、最初から分かっていた事だ。いったいどこまで、何まで知っているのか。

ティアンは頭の後ろで手を組んで、前を歩く残りのヴィライアーの足取りを見ていた。この回廊は、火一つすら無いのに、歩く分には苦勞しないくらいの明るさはあるのだ。

「あのさー、カイ。一つだけ聞いてもいい？」

「……え、あ、……はい……」

カイは唾を飲んだ。団長すら言いくるめるこの男の巧みな話術によって、情報が引き出されたりしないように。心の中で防御態勢に入る。

しかし、ティアンは何とも言えない、彼らしくない真剣な表情で、どこか遠くを見ていた。そんな顔だった。

「……鍵の向こうにあるものって……本当は何なのかな……」

それは、歴史という時間の中に隠された、鍵をかけて、何個もかけて封印しなければならなかったもの。

「…………それは、鍵をかけた者にしか分かりません……。鍵を生み出した者にしか…………」

どこまでも続く迷宮は、まるで僕たちの心理の戸惑いのよう。

ここは、現実でも、イマジン・ヒストリアですらない。

でも、この時空のひずみに、もしかしたら真実は隠れているのかもしれない。

紺の空を掲げて、ローブの影が今しがた聖地にたどり着いた。

「…………この時代、美術と言うものは軽視されやすいけど、美術ほど世界を象徴する物は無い。だって、どんな国の歴史や文明を知るにしても、文字よりも先に美術品が関わってくるのだから…………」

歴史は、常に美術品と共にある。

美意識と言うものは、今も昔も変わらず、人間の本能として備わっているものだから。

「そうでないなら、なぜ歴史を知る事ができた。…………どうやって神

を信仰した」

かつて、美術品とは、神を祀るためのものであった。神話や、信仰、宗教と言ったものに、深く関わりすぎたから、ある時それは、不思議な力を帯びる。

神殿跡地から発見されたって、
海の底から発見されたって、

いまだにどこかに埋まって、文献にしかない幻の美術品だって。
消えそうな壁画だって。

さあ、神様の像の瞳を、じっと見てごらん。

パリス・ヴァレリーは、ギリシアのオリンピア遺跡、今は無き“ゼウス神殿跡地”に立っていた。

瓦礫の前で、寂しい風に吹かれながら、彼は胸に手を当て、片膝をついた。

西洋の美術をたどれば、必ず行き着くのが古代ギリシア。

エジプトも、ローマも、ペルシャも全ては歴史のクモの網のようだ、

最後に行き着くのはギリシア。

I d r a w

32：エジプトプラン14〜嵐の前の静けさ〜

文字だけの歴史に踊らされて、勝手な妄想を抱いていた

あなたを、正義だと

ファルテは青い空を流れる白い雲を、小川の水面越しに見ていた。
ぼんやり、物思いにふけって。

「あ、いた！！ どうしたの、こんな所にいるなんて……」

ルナシーが、スカートのひだに沢山の花を乗せて、金の髪を揺らしながら駆け寄ってきた。

花が道しるべのように、来た道に点々と落ちてるのが微笑ましい所。

「君は適応能力が早いね。ここの生活はもう慣れた？」

「慣れてなんかないわ。でも考えてたつてしょうがないじゃない。

…ここの人たちは親切よ、大して不都合は無いわ」

「……………たくましい限りだね。レイならきつと、イライラし始めるころだ」

フォルテはゆっくりため息をついた。ルナシーは何も考えてないわけではないのだろうけど、この状況を苦とは思っていないようだから、結局悩んでるのは俺くらいのもの。

でも、彼にとつて、この古代エジプトに来た事以上にショッキングな事があるので、どうにもそればかり考えていた。

「フォルテは最近元気が無いわね。考古学好きのあなたでも、実際歴史の舞台に立つのは身がすくんじやうのかしら」

彼女はフォルテの隣に座つて、摘んで来た花を前に並べた。

どうやら花の王冠を作るらしい。

「古代に来れた事は光栄さ。…………ただ、やっぱり史実と事実つて違うんだなつて…………」

フォルテはルナシーの並べた花を横から取ると、彼もまた花の王冠を編み始めた。

「あら、作れるの？ すつごく意外…………」

「……………」

ルナシーが目を丸くしているのに、フォルテは黙り込んで、再び物思いにふけてしまった。

時代背景を整理しよう。

ここは古代エジプト第18王朝。ファラオはかの有名なアクエンアテンである。

そしてこのファラオは、あのツタンカーメンの叔父にあたる。

アクエンアテンほど特異で、大変興味深いファラオは居ないだろう。ブレステッドという歴史家に“人類最初の個人”というあだ名を付けられたほどである。

ではなぜ、彼がこのように言われるのか。

彼が一神教を唱え、それまで祭られていた有力な神“太陽神ラー”や、“太陽神アメン”、“ハトホル女神”や“セト神”を排除して、太陽そのものを神格化した“太陽神アテン”を唯一の神と崇めた話は有名だ。

そもそも、なぜそんな事をしたのかというと、強大化したアメン神を崇拜する神官団の発言力を抑えこむためであった。どんな国の神でも、神官団とは神を背後に力を得やすいのだ。

その大規模な宗教改革を“アマルナ革命”と言うのだが、これと同時にアマルナ芸術も開花する。

“アマルナ芸術”とは、形式的な、理想化された姿を彫刻や壁画に現すような従来のものと一変して、とても写実的な、見たままの真の姿を現すような芸術であった。

代表作は“ネフェルティティの胸像”である。また、アクエンアテン自身の彫像も、今までのファラオと打って変わって、とても衝撃的なものであった。分厚い唇に、長い顎、細い肩やウエスト、大きく張った腰骨や腹は異形な姿であり、それが真実の姿であるならば、彼が先天的な病に冒されていたのではないかと考える学者も多かった。

さて、このような個性的なファラオによって巻き起こされた“アマルナ革命”であるが、民や他神官団の評判はすこぶる悪かったらしい。複数の神々を崇めることに慣れていた国民達は、唯一神というものを受け入れられず、アマルナ革命は彼の世代で挫折することになる。

と言うのが一般的に語られる歴史である。

フォルテは花の冠を全部編み上げると、再びため息をついた。側に子供がやって来ては、花の冠を不思議そうに見ている。

「お花が輪っかになっているねえ」

「なんならあげようか。どうぞ、王様」

フォルテはかしこまったようにその花の冠を少年の頭の上に乗せた。少年はうれしそうに冠を乗せたまま走っていった。

「何よ、私もあげようと思ったのに。黙々と編んじやって、何を考えているのやら」

ルナシーは花の輪っかの端と端を繋ぐと、それをフォルテの頭に乗せた。フォルテは怪訝そうな顔をして、彼女を見る。

彼女は小さな顔を傾けて、普通なら誰しも美しいと思う笑顔を見せる。しかしフォルテは、

「……ルナッてき、見た目の割にあれだね。やな奴だよね。どうせ焦心の俺を心の中であざ笑ってるだろ……」

半分冗談のつもりで、皮肉っぽく笑ってみせた。イライラを彼女にぶつけてはいけないとは思っていたのに。

しかし彼女はきょとんとした顔を見せると、何だかもの凄く驚いた顔をした。

口をぱくぱくさせて、言葉も出ないと。

フォルテは、もしかして傷つけたかなと、多少冷や汗をかいたが、彼女はフォルテの花の冠をパツと取ると、それを自分の頭に乗せた。その時の勢いで、花びらが散って小川の流れにさらわれた。

「酷い事言うのね、フォルテ。せっかく落ち込んでいたから慰めてあげようと思ったのに」

言葉とは裏腹に、彼女は満面の笑顔で、立ち上がるとフォルテを見下ろす。

フォルテは何だか負けた気がして、無性に悔しい気持ちでいっぱいになったが、それをどうこう言うほどのこだわりも無かった。

その時、草を踏む足音が近づいて来た。

「よお、すっかりここに馴染んじまったな。どうだ、居心地はいいだろう」

「タハールさん……」

ターバンを巻いた色黒のエジプト人。この隠れ里ならぬ、隠れオアシスで身を潜めるラーの神官団の男だ。フォルテは彼を確認すると、「第一印象よりはずいぶんいいよ。でも、こんなオアシスが王宮側に見つからないなんて不思議だよね」

「ここは砂漠の砂嵐の壁に守られている。ちょっとやさつとじゃ辿り着けないのさ。俺たちだって町を追われて、やっとの事で辿り着いたんだ。きつとラーのお導きさ」

タハールは自信に満ちた強い表情だ。しかし、急に真面目な顔をすると、

「しかし、このまま黙っておくファラオでは無い。他神の影を見れば、どこまでも追いかけてくる。油断も隙も見せるべきではないだろう。我々も尊き神が砂漠の砂に埋もれていくのを見過ごすわけにはいかない……」

「……………反乱でも起こすのか？」

フォルテは視線を少しあげて、太陽の逆光で見えないタハールの顔を見ようとした。

ルナシーが隣で、不安そうな面持ちだ。

「それは、神がお決めになる事だ。既に他の神官団と王宮側の戦いは始まっている。我々も覚悟を決めなければいけないのかもしれないな」

タハールはそう言うと、マントを翻した。去り際にルナシーを見て、「不便は無いか？」と聞いたので、

「いいえ。人々はとても親切ですわ」

彼女は花の冠にふさわしい笑顔を見せた。

「そうか、ならばずっとここにいといるといい。花飾りはとても似合っているよ。まるで女神のようだ」

当初の彼とは思えないような気の聞いたキザな台詞を、臆する事無く口にしたので、ルナシーも多少面食らったが、

「まあ、ありがとう。この花飾り、フォルテはどうも気に入らないようだから」

フォルテへの嫌味を交えつつうまく答えたものだ。

タハールは鼻で笑うと、この土手の上に登って、繋いでいた馬にまたがると去っていった。

ここエジプトの夕焼けは見事だ。同じ地球の光景なのに、時代と異国の違いが、空気となつて、不思議なノスタルジーを感じさせるのだ。箱庭のようなこのオアシスでも、空だけは限りなくこの地球を包んでくれているから。

ルナシーはあれからフォルテと分かれ、自室に籠って空を見ていた。この夕方になるまで。

だんだん太陽が傾いていって、空の色が変わっていくのを見ていたから、一体何個の雲が視界から消えていったのか言う事も出来る。

昼間のフォルテは機嫌が悪かった。というかエジプトに来てから彼は神経質だ。色々知りすぎていると考える事が多くて大変ですね、と言った感じだ。今の彼にいつものノリを求めてももはや不可能だろう。

レイがいなくて、キクも居ないからかな。

二人は無事だろうか。今頃どこで何をしているのだろうか。もしかしてあの二人も一緒なのだろうか。

今日、フォルテが私に嫌な性格をしていると言っていた。正直、まさか私が、こんな男にそう言われるなんて思っても見なかったけど、素が垣間見えていたのなら改めようと思う。

今まで隠して隠してきた私の心を誰にも触れさせたくないから。仮面はまだ外せない。

ただ、あの時の妙な高揚感もいまだに胸の奥にくすぶっている。

フォルテは私と似ているのね。だから気づき始めている。

表面上の嫌味のキャッチボールからでは無く、本質的な部分の事を。

嫌な性格と言われて少しうれしかったのも真実。

不思議な感情に、つくづく嫌な性格だなと思う。

タハールは、仲間の神官団と共に、門を出て周囲の砂漠の見回りをしていた。

いつも同じ事をしているのに、今日は妙な違和感を覚えた。

こんなに星が見える。

なんて静かな夜なんだ。

何だかぞっとしたのは、いつものように荒れ狂う砂嵐が、不思議な

くらいぴたつとやんでいたから。

「まるで、嵐の前の静けさのようだ……」

彼はたいまつが全く揺れていないのを、吸い込まれるようにじっと見て、そして、風船が割れたようにハツと振り返った。

あの、箱庭のようなオアシスを。

砂嵐はこのオアシスを守っていた。

それがやんだのは、神が我々を守っていた力そのものが打ち破られたのだと言う事。

それは、音も無くいつの間にか。

この、夜を真っ逆さまに突き落とすような、とんでもない静けさの中で。

この夜、崩落するオアシスと、火とその伸びる影と、弱者と強者の理を知った。

I
d
r
a
w

33・エジプトプラン15の紙上の歴史

裏切りは新たな神への忠誠と共に

太陽の下に、皆平等であると

そう言ったあなたが一番、そうである事を恐れていた

フォルテはここ最近上手に寝付けない。

こんな所にやって来て、うまく寝付ける奴もどうかと思うが。

今日はあまりに静かで、雲一つないすばらしい満月の夜。ベッドの隣の岩壁の、広い窓から眺めるのだ。空だけ見ていると、ここが古代エジプトだなんて忘れてしまいそうだ。空だけは、時代に左右されるには人間の存在する時間があまりに短すぎる。

月はきつと、今も昔も変わらない。

そう。それは、こんなにも静かな夜の事。

遠くから近づいてくる悲鳴や騒音に気がついたのは、それから間もなくの事だった。一瞬耳をそばだてて、じつとベットの上で静止していたが、何かがおかしいぞとすぐに起き上がる。

胸がドキドキする。嫌な気分だ。

フォルテは窓から身を乗り出し、ただならぬ空気に眉をひそめた。

オアシスの端の方から昇るまがまがしい煙とオレンジの揺らめき。

遠くで響く鈍い金属の音。

今度はハッキリと人々の悲鳴が聞き取れた。

「ルナ！！ 入るよ！！！！」

フォルテは返事を待たずに彼女の部屋に入った。彼女はこの騒ぎに気づきもしないで、すやすや寝ている。

「起きて！！ このままじゃ巻き込まれるぞ！！」

彼はルナシーの肩を揺さぶって、窓から伝わる緊張感と、自らの不安に焦っていた。さっきまでの「かもしれない」とは違う。確実に近づいている。

ルナシーは目をこすりながら、何事かと起き上がった。

「何なのよ…せっかく寝てたのに」

「今はそれどころじゃないんだ！！ とにかくここから逃げよう！！」

「ど…どうしたって言うの…？」

ルナシーは、フォルテの焦りをやっと理解した。慌ててベッドから出て、彼が取ってくれたマントを羽織る。

窓の外からは、悲鳴と破壊の音が、遠くもなく近くもないところで聞こえてくる。

「タハールさんは今居ないわ。見回りに出ているもの」

「そつだ。きつとその時を見計らって…」

フォルテとルナシーは、出来るだけ遠くへ逃げようと、この状況の中必死に町を駆けていた。

一体何から逃げているかも分からなかったけど。

幸いこのオアシスは町一つ分あるのだから、すぐ追いつめられるに

は広すぎる。

フォルテは背後の炎を振り返りもせず唇を噛んだ。

敵はきつと、王宮の討伐軍だろう。どこからかこの場所を嗅ぎつけたのだ。

「私たち、どうすればいいの？」

「とにかくこのオアシスから出よう。王宮軍に捕まったら適わない」

「でも…でもこのオアシスは門を通らなければ出られないわ！！」

フォルテはルナシーの言葉に、はたと立ち止まった。

待てよ。

待てよ。

そうだ。この町は太陽神ラーの力で守られていたはずだ。ここに入る時に、タハールさんが開いた、あの門。

ならばなぜ、王宮軍はこのオアシスに突入する事が出来た。人間の力でどうこう出来る門じゃないはずだ。

彼は、黒とオレンジの混ざり合った空を、炎の匂いのする方向を振り返った。

それは、神聖な何かが、暗黒の力に飲み込まれているような、

古き神の衰退と、新しき神の勢いを現しているようだった。

二人はこのオアシスの一番端。門から一番遠くに辿り着いたようだ。

「……崖だ……。やっぱりあの門以外に外に出られないんだ……」

フォルテは崖の壁に手をあて、どうする事も出来ずにいる。悲鳴や炎、耳障りな音が聞こえてくるのを、ルナシーは不安そうに顔を歪める。

「タハールさん達は無事かしら……。町の人たちだって……」

「今は自分たちの身を守るのが先決だろう……。あの人達だって結局は歴史上の人物だ……。既に死んでいる人間なんだから……」

「……あなたって意外と冷たいのね」

ルナシーは怒っているとも、悲しんでいるとも言えない口調だった。フォルテは彼女から目を逸らして、

「よしてくれ、ルナシー。……仕様がないうじゃないか……俺たちは無力だ」

強い言葉で言い切った。

その時のフォルテは、いつものようなお調子者の彼ではなく、とても現実的で、どこか冷めた、距離を感じる人だった。どっちが本当の彼なのだろう。

ルナシーは瞳を細めた。

別にそれを非難しようなんて思わないけど。

だって私にも似たような所があるから。

その時だ。

馬の蹄の音と、風の音。気がついた時には、どこからその音が向かって来ているのか分からなかった。と言うより、この崖を背に囲まれたと言った方が早いかもしれない。

二人は後ずさった。いつの間にか数人の兵士が居る。

「ほお、こんな所にまだ生き残りが居たとは……」

一番立派な黒い馬に載った、瞳の鋭い長髪の男が、影の中から前へ出た。

氷のような瞳は、二人を捕える。

「神官様、こいつらは異国者ですぜ。つい最近このオアシスに流れて来たんでやす」

黒い馬に乗った男の隣を、一人の中太りの男が腰巾着のように付い

ていた。

フォルテは眉を潜め、その男をまじまじと見た。そして、ピンと来たように、

「あああああ！！！ てめえ、あの時俺を蹴った……っ！！！！」

びしっと指をさす。そうだ、こいつは確か、このオアシスで捕まった時、俺を蹴飛ばしたあの野郎。

ルナシーも気がついた様で、信じられないと言うように瞳を潜める。

「どういう事！？ あなたはタハールさんの仲間じゃないの！？」

「どうせ裏切ったんだろ。こいつが手引きしたんだ。そうじゃない限り門が開くはず無い！！」

フォルテは、にやにや嫌らしい笑みを浮かべるこの男に向かって、吐き捨てるように言った。この男は最初からあまり良い印象ではなかったので、裏切ったからと言って納得はできるけれど。

しかし、許される事ではない。

男は片方の口の端を上げると、ムカつくような上から目線で言うのだ。

「それはちよつと違うぜ、小僧。俺は元々王宮側の人間。要するにスパイよ。ラーの神官団が都から逃げる時、俺は既に、アテン神に忠誠を誓っていた。とっくにラーへの忠誠心は無かったってわけよ。簡単なもんだぜ、ここの奴らは……特にタハールは、ラーへの忠誠を口にしただけで、そいつは仲間だと信じられる。その後には作られた門の裁きを受ける事は無い」

「……………とんでもないね……………神の怒りがかつても自業自得だな」

「何を恐れるって言うんだ。ラーの神官団の力は今や地に落ちたも同然だぜ？ 神殿だって無いと言うのに……………信仰心が神の力となるのだから、既にラーの時代は終わったんだよ！！」

男は腹を抱えて大笑いしている。何と言う卑劣な奴。神をなんだと思ってるんだ。

その時、さつきから黙って二人を見下ろしていた黒長髪の男が、

「黙れ下僕が……………自分が生き残るために神を裏切った分際で……………」

今度は下僕と罵った男の方に視線を映した。彼は「ヒッ……………」と言葉に詰まらせると、冷や汗を流しながら小さくなった。それ以上何も言えずに尻込みする。

彼の視線は本当に冷たい。

息が詰まりそうだ。

そして再び、フォルテとルナシーの方を向いた。

「……………異国の者であるなら、なおさら生きて返すわけにはいかないな……………。ここで起きた事は、誰も知らない。ラーの神官団など、元々無かったのだ……………この後、この国の神は唯一アテン神だけであつたと。太陽神ラーなど、もうこの国には必要ない……………」

アテン神官の男は、腰から剣を抜くと、ゆっくりそれを振り上げた。ルナシーはフォルテの背中の中を服を掴んだまま、一度息を飲む。背後は崖、周りには王宮軍。

もうどうしようもない。

その時、フォルテが小さく笑ったような気がした。

ルナシーは顔を上げ、フォルテを見上げる。彼はこんな状況下だと言うのに、何が面白いのか、瞳を細めて笑っていた。

「……………ラーの存在が消えるって……………？」

彼はくすくす笑っていたが、いよいよ手で顔を覆ってどうしたと言わんばかりに笑っている。

神官の男は顔をしかめて、

「……………何を笑っている……………」

いつそう瞳に強い冷たさを増す。

しかしフォルテは怯みもしないで相変わらず笑っている。

「……………だっておかしいから……………お前らは何を言ってるんだ……………つてね。ラーの存在は永遠に無くなる事は無い……………。教えてやるのか……………」

彼は顔を覆っていた手を除けると、口元に読めない微笑みをいつそう増して、

「お前らの信じるアテン神の時代は、あと十年もしたら衰退する……………。今のアクエンアテンこそが歴史に葬られるんだ。お前らは結局、長い長いエジプトの歴史の中で生きてきた神を……………」

それは、触れてはいけない神の意志。

「……………神を、怒らせたんだ……………」

長い歴史を持つ神を、

その神殿を壊し、こんな風に追いつめ、信仰を奪い、人々の信じる道を照らす光を消した。

これは既に結論の出ている歴史だし、何が悪くて、何が正しかったのかなんて誰にも語れないけれど、

フォルテは可笑しくて笑って、

悲しくて笑うしか無かった。

歴史は既に決まっている。

決まっている歴史を変える事は出来ないし、この先を知っていたって自分に出来る事なんて無かった。

結局自分は、歴史上の舞台に立って、血の通った人間と触れ合っていたって、

それを紙の上の歴史としか思えない。

こいつらがオアシスを侵略し、町の人々を虐殺していようが、タハールさんを騙していようが、それが歴史上真実なら仕方が無いと思う自分に、悲しくて笑ってしまった。

それなのに、

既に未来は決まっているのに、何をそんなに怒っているんだ。

矛盾した自分の心が分からない。
自分が何をしたいのか分からない。

I
d
r
a
w

34：エジプトプラン16〜風の方へ

紙の上のあなたなら

リアリティが無かったから、凄く偉大に見えたのだ

歴史にも、美術にも、大きな“革命”を与えたのだから

「許されるものか！！許されるものか！！！」

タハールは炎に包まれた町で、悔しさに歯を食いしばった。

女子供関係なく、容赦なく虐殺された“跡”をただ走る。剣を手に、迎える王宮兵を返り討ちにしながら、瞳には怒りと憎しみの色が濃く映っている。

許されるものか。

これが国を守る王のする事か。

あちこちで王宮側と、ラーの神官側での剣の攻防が繰り広げられている。タハールは生きている人間が居ないか血眼になって探している時、悲鳴を聞いた。炎の向こう側から微かに、でも確かに聞こえた。タハールは火だるまの小屋を横切つて、馬をその方向へと向かわせる。

小屋を通りすぎた時、視界に映つたのは、一人の子供が地面に叩き付けられて、剣で刺される、まさにその瞬間であった。

花の王冠が血に染まる時、ハラハラと散る花びらは、あまりにも儂い。

「!!!!!!!!!!!!!!」

タハールは昏間の事を思い出した。そうだ、この子供はあの時、異国の少年に花の冠を貰っていたあの……。
嬉しそうな笑顔だけが浮かんでくるのに。

「……………つ 貴様あ!!!!!!!!!!」

タハールはマントの中から“アंक”を取り出した。そしてそれを目の前の兵に突きつけ呪文を唱える。

太陽神ラーよ。

どうかこの罪人に裁きを与える力をお与え下さい。

一瞬目映いばかりの光があたりを包んだかと思うと、目の前の兵士は体を焼かれ、一瞬で灰となった。
タハールは馬から下りて、子供に駆け寄る。

「……………おい！！！！……………おい、しつかりしろ！！！！」

しかし、もはや子供の瞳には気は無く、ぐったりとした体はただの抜け殻でしかなかった。

タハールは瞳を悔しさとやるせなさに震わせ、子供の前髪を払う。

ラーよ

太陽神ラーよ

この子がいったい何をしようか。全ては我々の争いが招いた事だと言うのに。

王の言いなりになれば良かったと言うのか。

タハールは子供の脇に落ちている、崩れかけた花の王冠を見た。

「……………」

子供の血の泉に半分沈んでいたのは、何かを暗示している象徴にも思える。

彼は瞳を細めた。

憎い。憎い。

神であるラーを、恐れ多くも追放しようとしたアクエンアテンが憎い。

唯一神だと、いきなり崇められたアテン神が憎い。

彼は花の冠を握りしめ、静かに立ち上がった。

その時、ふと脳裏に浮かんだのは、異国から来たというあの二人。

彼の瞳に光が戻った。急いで馬にまたがり、風を切るように走らせる。

しまった。

あの二人は何も知らない。王宮側は彼らを容赦なく殺すだろう。我々の戦いに巻き込むべきではないのに。

フォルテとルナシーは絶対的ピンチに陥っていた。

敵に囲まれているのは愚か、どうやらフォルテの態度、言葉がお気に召さなかったようだ。

黒髪の男は馬から降り、剣を持たない方の手でフォルテの胸ぐらを掴むと乱暴に持ち上げ、その剣を突きつけた。

「…っ！！！！ フォルテ！！！！」

ルナシーは青ざめて、掴んでいた彼の服を離してしまった。彼を助けようと手を伸ばすが、今度はその手ごと他の兵士に取り押さえられた。

「おっと、動かない方がいいぜ、お嬢ちゃん」

鎧を着た兵士の顔は見えなかったけど、威勢の良い、少年の声だった。

「……………くっ……………ルナシー……………」

フォルテは横目に歯を食いしばり、頬に冷や汗を流す。

彼を持ち上げる黒髪の男は、相変わらず感情の無いような冷たい視線だ。

「……………殺す前に一つ聞いてやろう。……………髪の色も、瞳の色も違うお前ら異国者が、どうして我々の国を予言した。……………そもそもどうしてここに居るのだ……………」

「……………」

フォルテは先ほどの事を思い出した。

『……………あと十年もしたらアテン神の時代は終わる……………』

彼は確かにそう言ったし、それは歴史上事実である。

この黒髪の男は、感情こそ読めないが、どうやらこの言葉は気になったようだ。

フォルテはフツと笑うと、

「俺の言った事は予言じゃないぜ……。俺たちは今から起こる未来を知っている。お前らがこのまま、こんな非道な事を続ければ、確実につけがやってくる。……殺すなら殺せ……！！！」

力強く、ためらい無く言った。内心、とてもじゃないけど殺されたらどうしようと思っていたが、これは賭けでしかなかった。黒髪の男は瞳を細め、フォルテを探るように見ている。

たったの数秒がえらく長く感じた。心臓の音が体中に響いている。

その時だった。

キイイイイイイン！！！！！！！！

激しい閃光のような、鋭い金属の音と共に、フォルテは地面に落とされた。何が起こったのか分からないが、尻餅をついたのを痛いなんて言ってられない。

顔を上げるとタハールさんと黒髪の男が剣を交えていた。

「……っタハールさん！！！」

フォルテとルナシーは同時に叫んだ。ターバンを長くなびかせ、既にマントを血で濡らした太陽神ラーの若き神官。

黒髪の男はニヤリと笑った。

「……………ほお……………ラーの神官のお出ましか……………。もう全滅したのか
と黙っていたよ」

「ふざけるな!!! 貴様らの愚行は全てラーが見ている!!!
呪いは避けられないぞ!!!」

タハールさんはぞっとするくらい激しい怒りに満ち満ちているよう
だった。

しかし、黒髪の男はどうということの無いように、軽々彼の剣を跳
ね返した。

そして、情けなくも逃げずに様子を見ていたフォルテをの腕を掴ん
で剣を突きつけると、

「この異国者には何か貴様と縁があると見える。さあ言え…」

彼は剣をフォルテの首に当て、鋭い瞳をタハールに向けた。

「…黄金のマスクは何処にある……………っ!!!」

「……………!!!?」

タハールは目を見開いた。フォルテだって、まさか今その言葉が出
てくるなんて思っても見なかったものだから、大きく目を見張る。

「貴様等が持っているのは知っている……………取引だ……………」

黒髪の男はフォルテを側の兵に押し付け、自らは馬にまたがった。

「今すぐとは言わない。しかし今から7日後の日没までだ。黄金のマスクを持って王宮に來い…持ってこなければこの二人を殺す…っ」

「ふざけるな!!! そんなこと……っ?!?!?」

タハールが再び剣を構え直したちょうどその時、黒髪の男は馬の上から彼を見下ろし、懐から黒い“アंक”を取り出した。そして、小さく呪文を唱えると、彼に向けその言葉を、ヒエログリフの羅列を解き放つ。

「!!!!!!!」

その呪文の羅列は鎖となつて彼の体の自由を奪つた。

「勘違いするな……お前なんて殺そうと思つたらすぐに殺せる……。こいつらも。貴様らラーの神官団が奪つた“黄金のマスク”を返す。許しを請う。懺悔する。そのチャンスを与えようと言っているのだ……」

黒髪の男はアंकを握る力をいつそう強めた。その度にタハールは苦しそうな声を上げ、地でもがく。

「タハールさん!!!」

ルナシーはもう見てられなかった。どうしてこんな事になっているのか理解出来ない。

フォルテは必死で状況を理解しようとしていたのに、自分が死に近いこの場面で、何を考えればいいと言うのか。

黒髪の男は苦痛の表情のタハールに、自身は大した感情もあらわにしないで、彼の呪縛を一瞬で解いた。

「……………！！？」

フォルテとルナシーは、呪縛から解かれたタハールと、黒髪の男を交互に見る。

黒髪の男は冷ややかな瞳に、一つ小さな光を灯すと、

「……………ここで返事はいらぬ。全ては七日後に分かる事だ……………」

口を動かす事の出来ないタハールを尻目に、兵士達に合図をした。その合図で、フォルテとルナシーは乱暴に馬に引き上げられ、そのままオアシスの炎の中に引きずり込まれるように連れ去られた。

瞳は見開いたまま。

地に伏せるタハールの名を呼ぶ事も出来ずに。

崩落したオアシスを、切り捨てられた死体を直視する事も出来ずに。

いまさらやって来た恐れを、十分に実感する余裕すら無く。

特に愛着が付いたわけではないこの町を、フォルテはただ、複雑な思いで見送った。

これこそが、紙の上では語る事の出来ないリアルな光景。惨劇と言葉だけで表す事の出来ない事実。

炎が、全てを壊していく。

歴史上の事実だからと、目の当たりにしておいて別に対した事じゃないと、これを受け入れられるのなら、自分は人間として欠落していただろう。

でも、そうじゃなかった。

怖いと思う。

許される事じゃないと思うよ。

馬が血の池を踏む度に。

ああ、これがリアルな歴史なんだって。

これを引き起こしたのがまさしく、紙の上の歴史だけで尊敬していた、あのアクエンアテンなんだって。

オアシスを抜け、自分たちが最初にこの町に入ったときの門を抜けた。

大きな大きなラーの壁画があったはずだ。

「……………」

炎の隙間から見えるのは、ただの壁だけ。
神の消失した壁だけ。

自分の中でくすぶる、不思議な憤りが消える事は無かった。

止まってしまった風は、今はどこに行ってしまったのだろう。

彼らを守っていた、ラーの風。

止まってしまった、この町の風。

I
d
r
a
w

35：エジプトプラン17〜無礼者〜

年も変わらない僕たちが出会ったのは

あなたがそれを望んだからかもしれない

キクマサは、渡り廊下を渡って、団長の部屋へ向かっていた。

ここに来てからどれくらい経っただろうか。一週間くらいだろうか。自分はそんなに几帳面でもないのに、それすら覚えてないけれど。

昨日シャルロ先輩に言ったら、「それ几帳面とか言う問題と違くない……？」って、呆れた顔で言われたけれど。

そう、ここメンフィスの都にやって来て一週間が何事も無く過ぎ去った。

繊細な団長がこの水に当たったり、シャルロ先輩が日夜宴会で飲

みまくつてる事以外は、何事も無く。

この人たちは自分たちをいかがわしげに見る者も居るけれど、基本的には親切だ。

しかし、自分たちが会っているのは、きっと王宮の一部の人間だけ。自分たちが行動出来るのも一部だけ。

守ってくれているのだろうけれど、物事が一向に進まないので団長はイライラしているようだ。

水が合わなかった団長は、最近床に臥せっていた。

「……………大丈夫ですか？」

暇なので、よくお見舞いに彼の部屋を訪れる。

団長は、いつもキメキメの髪がたらんとしていて、そこから既に勢いが無い。

彼はキクマサが来ると、顔だけを寝床の上で彼に向ける。

「今日はなんて事無いか……………？」

「はい。いつも通り平和なものですよ。初日の事が嘘のように何にもありません」

「……………お前も何て事なさそうだな。日本人のくせにタフだなあ」

団長はじつとキクマサを見て、はあとため息をついた。

「……………あの女はどうしてる」

「……………シャルロ先輩ですか？」

「そうだ。あいつ、俺がこんなに苦しんでるってのに顔一つ出しゃしねえ……………。薄情な奴め」

キクマサは苦笑いで、

「シャルロ先輩が団長のお見舞い来たら、それならそれでびっくりですけどね」

「……………確かに……………その時は賄賂を要求するに決まってる……………あいつの事だから」

「……………」

弱った団長の話し相手をしながら、今日こそは聞こうと思ってた事がある。どうして団長とシャルロ先輩はそんなに仲が悪いのか。確かに二人とも頑固で怖いし、我が強いのは分かる。反発するものも分かる。

でも、二人には何かがある関係のような気がする。

シャルロ先輩だって、個人的に話せばとても常識的な頼りになるお姉さんだ。

「……………シャルロ先輩は日夜宴会で逆ハーレム作って楽しんでますよ。美人ですからね」

「美人だあ？ お前何を見てるんだ？ 目あるか？ あんなのメルベリーに比べたら月とスッポンじゃねーか……………」

わああ、ここにシャル口先輩居なくてよかったあ。

キクマサは引きつり笑いで心からそう思った。というか団長はメルベリー先輩鼻屑なんですね、相変わらず。

「だいたい宴会って何だよ。誰があんな奴誘うんだよ？ 悪趣味すぎるぜ、信じられんな」

「言いたい放題ですね、団長。そんなに元気なら起き上がれるんじゃないですか。仮病ですか？」

「何言ってるんだ、俺様がこんなに苦しんでいるというのに」

団長は顔だけ極道面で、でも体は布団の中で、何とも言いようのない。最近この人の印象が断然変わったなと思う。キクマサは大きいため気を付けて、

「そもそも何でそんなに仲悪いんですか、団長とシャル口先輩……」

思い切って、でもさりげなく聞いてみた。

団長は一瞬顔をしかめると、そっぽ向いて、

「それは話せば長くなる」

「いいじゃないですか。どうせ話すことしか出来ないんだから……」

「……………最近辛辣だな。シャル口の影響か？」

彼は「まあいい」と小さく答えると、何かを思い出すように高い天井の土の壁を見ていた。きっと、シャル口先輩と仲悪くなったエピソードでも思い出してるんだろうな。

キクマサはそう思っていた。

「……………分っかんねえんだよな……………お互いに最初会った時から憎らしくてさ。何でだろうな、俺の第一声が「ちっせ」だったからかな。」

「……………それでしょう……………」

キクマサはガクンと頭をうなだれた。なんだそれ、みたいなのもっとすごい、それこそ血なまぐさい(面白い)話が聞けると思ったのに。

「多分あれだけ、あいつは自分の上に誰かがいるのが嫌なんだ。俺を亡き者にしたいに違いない」

団長はにやっと笑って、意味不明な冗談を言う。しかし、この面白いくない冗談に、不覚にもキクマサは吹き出してしまったのだった。

団長に付き合って夕方まで話し相手をしていたが、やっと解放され

たキクマサは、ひとまず自分の部屋に帰ろうとしていた。研修着のズボンのポケットに手を突っ込んで、夕焼けに伸びる柱の影を踏みながら、とにかく部屋に帰ろうとしていた。

「キ、ク、マ、サ、君」

その時、足音を全くさせないで、背後から目隠しをされた。かなり唐突である。

「うわ……ビビりますって、シャルロ先輩……」

内心ひやっとしたと言う意味で心臓が飛び出そうになった。でも、いつもの事だ。

彼女は忍び足が得意なようだ。

「正解。あいつの所に行ってたんでしょ。どう？ 実は繊細で使えないあの男の容態は」

「はあ……。いまだに弱ってます」

キクマサがそう言うと、彼女は笑いが堪えられないと言うように、

「お笑いよねえ、鬼の団長と恐れられるあいつが、水ごときであんなになっちゃうなんて。あいつは私を笑い死にさせるきなんだわ。そのくらいでなきゃ私に勝てないもの」

見ているこっちがあっけにとられるほどに高笑いをしていた。なんて恐ろしい人だ。気持ちがいいくら薄情だな、団長には。

「ま、うるさいのが大人しくしてくれるのは、いい事だけど……」

彼女はそう言うと、白いエジプトの衣装を翻して、キクマサとは正反対の方へ向かっていた。

「どこ行くんですか？ 先輩」

「今日もお誘いがあるのよ。どうやらこの男達は相当暇なようね」

「あんまり飲み過ぎないでくださいよ……。はめ外しすぎちゃって、変な事になったら後悔しますよ……。まあ、先輩は全てが強いから大丈夫だと思いますけど」

キクマサは、あれ、何で自分こんな保護者みたいな事言ってるんだろう……。とか思いながらも、彼女に忠告した。シャルロは少し振り返って、くすつと笑うと、

「あーら、心配してくれるの？ 女泣かせな顔して意外と優しいんだ、キクマサ君。……大丈夫よ、私だって別に、遊んでばかりじゃないんだから」

「……………」

気になる言葉を残した彼女に顔を上げたが、後ろ向きに手を振り去っていく姿に聞き返す事も出来なかった。

キクマサは自分の部屋に戻る途中、あんなに自室に帰りたかつたくせに、シャルロに会った後はむしろ帰りたくなっていた。

ふと、渡り廊下の途中の庭にあるキオスクに立ち寄った。

キオスクとは、エジプトの東屋の事だ。団長がそう言っていた。

さわさわ、夕暮れの風。

昼間は暑いくせに、夕方になると少し涼しくなる。

真っ赤な夕焼けは、ギリシアよりもなお色濃く、日本よりも断然赤い。

雲の流れが速い。

綺麗な景色に心奪われるのは、創作意欲が湧くのとイコールであるが、ここに来てから絵なんて描いてないから、本当たまらない。

今では全くそんな事ないのだが、不良時代に吸っていた煙草を断つときの、あの中毒性の苦しみに少し似ている。

ほんの少しだけ。

自分ちちょっと危ないのかな……………。

そんな事をぼんやり考えながら、相変わらず夕焼けを見ていた時、草を踏む足音が近寄って来た気がして、その方に顔を向けた。

「……………フェアオ……………」

目の前には、若きファラオが、現代でもあんなに有名なツタンカーメンが、キクマサの方をまじまじと見ながら、おもむろに微笑んだ。

最近、ファラオが良くここに来て、キクマサとぼったり出会った時はお話しするのが普通になっていた。

最初は緊張していたけど、実はかなりの常識人で、何気にお茶目でお話しやすいと分かってからは、気軽に付き合う事が出来た。正直団長やシャルロ先輩の方がよっぽど厄介だから。

「ええええ!!! ファラオ、17歳なんですか!!!? 俺と同じ年じゃないですか!!!」

キクマサは珍しく大声を上げて驚いた。なんてこった。でも、そう言えばそう、この人は少年王と言われた人だ。今更と言えは今更の話。

でも、歴史に疎いキクマサからしてみれば、この人への先入観はあまり無かったから、第一印象が先に出てしまう。どうしても。

「どう考えたって、少なくとも俺より三つは上ですよ」

「もっと驚く事を教えてあげようか。私の妻……アンケセナーメンは、私よりも四つ年上だ」

「うっそ、姉さん女房なんですか!？」

キクマサの突っ込む所もずれてる気もするが、とにかく彼は驚いた。俺と同じ年で、既にファラオ。奥さん有り。しかも四つ上。

なんとこの事だ。

ツタンカーメンは浅黒い肌から白い歯を見せて笑うと、

「まあね。怒ると怖いんだよ、ああ見えてね。……でも、私にとつては唯一の家族だから」

ふと、とても寂しそうな表情を、しかしまた愛しさに満ちたような顔をした。それはとても印象深いハツとする表情で、キクマサは言葉に詰まらせる。

「……………私が九つの時に、先代ファラオが亡くなってね……………。それからはめまぐるしい日々だったよ。何も分からない私は、周りの大人に操られ利用され、それをどうする事も出来ずに生きて来た……………。もしかしたら今でも操り人形なのかもしれない。しかし、彼女だけは私を支え、私だけを見ていてくれた。……………私の理想とする世界を、共に創ろうと言ってくれたんだ……………」

「……………ファラオ……………」

星の瞬きが空を飾る。

ゆっくりと流れる、古代の時間の中で。

寂しそうな顔をするもんだな。エジプトのファラオと言ったって、自分と同じ歳なんだ。

今までいったい、どれだけ重いものを抱えて来たか知れない。いくらキクマサだつて、そのくらい感じ取れる。

大人の都合に振り回される悔しさと不安は、俺にも分かる。

「…………… アンケセナーメンさんが居てくれて…………… 良かったですね」

キクマサはそう言うと、星を見上げた。ファラオはハツとして、キクマサの方を向く。

「…………… たった一人でも自分の側に居てくれる人がいるのは救いです。…………… 俺にも居たんです。ファラオと違って、そんな羨ましい関係ではないけれど、俺に生き甲斐を与えてくれた人が……………。あの人と出会わない人生なんて考えられない。…………… ファラオもそうでしょう？」

星空を見ていると、懐かしさで胸が痛くなる。

今もどこかで、時代を超えたどこかで、あの人が星空を見ている気がして。自由なあの人らしい場所で。

ファラオは一時驚いた顔をしていたが、何だか肩の力が抜けたように微笑む。

「…………… キクマサ、君は不思議な男だ。…………… 君と話していると、とても気分がいい」

「それは多分、俺があまりに無礼者だからですよ。…………… 王様相手に

命知らずだから」

「私には幸いな事だ。……そう言った友人を望んでも、私の周りには腹黒い大人が多すぎる」

二人は何だか可笑しくなつて、膨らませたガムが割れるように、お腹を抱えて笑つた。ファラオもこの時ばかりは、少年らしく笑つていたのだ。

残酷な時代のせいで、こういつた笑いを失っていたのかもしれない。これが本来のファラオの素顔ならいいなと思つた。

涙を流しながら笑う彼は、ファラオと言うよりやはり、同じ歳の友人に思えてしまう。

やっぱり自分は無礼者で、命知らずだ。

でも、この時ばかりはそれが、

無知な自分が誇らしかった。

I
d
r
a
w

36：エジプトプラン18〜毒の誘い〜

銀の器に毒一雫

白い柱に毒サソリ

誘惑の香りも、魅惑の果実も

私には全く意味の無い物

私の名前はシャルロ・グレディア。

ルネ・ヴィルトン美術学校の四年生でルネ・ヴィライアーである。
称号はルネ・アンバー。そう呼ぶ人も居るし、賞金女王と呼ぶ人も

居る。

ヴィライアーの研修でエジプトにやって来たのだけれど、事故か陰謀か、分けあって古代エジプトにタイムスリップしてしまった。しかも、クソむかつく使えない団長と、新人のキクマサ君と共に。

しかし、幸いキクマサ君はなかなかイケメンだし、ぼやっとしてくれるけど機転の効く“使える”二年生だ。

ナギ先輩が「可愛いのよ、あの子」と言っていたのも分かる。

団長は見た目アレなくせに、水に当たるとかギャグですか。片腹痛いわ。

さて、使えない団長と違って私は、この一週間ちゃんと情報収集に勤しんでいた。

女王、アンケセナーメンと協力しあって。

「……………あなたに頼みたい事があります、シャル口……………」

「……………?」

アンケセナーメンが初めてシャル口の部屋に訪れた時、女王はためらいがちに、でも力強くそう言った。

「……………敵はテル・エル・アマルナに居るアテン神官団だけではないと言つのが、私とファラオの考えです……………」

「……………というの……………」

シャル口はもたれていた椅子から身を乗り出した。

女王は口元に手をあて、瞳を細めると、彼女の意見を聞こうとした。

「先日、あなた方を襲った呪いの化身は、あまりに早く出現した。まるであなた方が未来から訪れるのを分かっていたかのように……。私たちだって、あなた方が真つ先に狙われるのは分かっていましたから、警備は万全にしていたのです。それでも……。行動があまりに早すぎる……」

まさかあんなに早く手を打ってくるとは思っていなかったから、ふいをつかれたと言うのもあるけれど。でも、これで疑念はより深まった。

シャル口は、

「……。なるほど……。女王は、このメンフィスの王宮に、刺客が忍び込んでいると考えているんですね……」

「……。ええ。それが誰か全く分からないのですけれど、おそらく……。もしかしたら重臣の中に居るのかもしれない。しかし、私にはどの家臣も味方に見えるし……。敵にも見えるのです」

女王は、まるで言うてはいけない事を言ってしまったように、口を手で覆った。

「……。幼い頃から、私もファラオも、多くの家臣と神官に囲まれ導かれ生きてきました……。私たちは幼さ故に、彼らに言われるがまま、国の政治を行って来たのです。先代が行っていたアマルナ改革を廃止して、アメン神官団と手を組み、都をメンフィスに移し……」。

しかし私は、大人達に導かれたと言うよりも、いいように利用されて来たように思えて仕方が無いのです。……………ファラオは、いまだに家臣達を信じていたいようですが……………」

小声ではあったが、深い思念の感じられる言葉で、長い時を不安に身を焦がしながら生きて来たのが分かる。

若き女王は、膝の上の拳を握りしめた。

「ファラオは……………あの人は純粋で、人を憎む事を知りません……………。家臣に敵が居るなど、考えたくもないでしょう。だから私は、あの人の代わりに家臣を信じたりしない……………。幼いときから側に居た者でも、心の奥ではずっと、冷めた目で見続けて来たのです。……………全ては、ファラオが傷つかないように」

「……………」

シャルロは、女王の苦しみと寂しさ、ファラオへの深い愛情に伴う、周囲への疑心暗鬼を、同情だとしてもかわいそうなものだなと思っただ。ファラオを守りたいが故に、彼女の選んだ道。

「……………なるほど。だから私に、家臣達を探れと……………？ 要するにそう言う事でしょう？」

「……………ええ。……………勝手なお願いだとは分かっているのです……………。しかし、最初に見た時からあなたには思う所がありました……………」

女王は強い瞳でシャルロを見つめた。

「……………あなたの瞳は冷たい……………。表向きはそうでなくても、深い所で、暗く冷たい研ぎすまされた流水のような……………それはまる

で、死にも似た……………」

「…女王」

シャルロは彼女の言葉を遮った。そんな事を言う彼女への驚きもあったが、それ以上は言われなくても自分が一番分かっている。

「……………分かりました。報酬は元の世界へ帰る手伝いつてことで……………私はタダで働いたりはしませんよ」

どうせ、何か行動を起こさないと物語は進まない。

この人が私を利用しようとしているのは明確だけど、こつこつという激しい女心は嫌いじゃない。

「……………探りましょう。家臣の中に敵が居るかどうか……………」

もしかしたら、これ自体罠かもしれないけれど、実態を知るには渦中に入るのが一番早い。

釣られた魚は、どっちだろうか。

宴会の席には、既にアンケセナーメンの姿と、何人かの家臣の姿があった。最初の宴会にはククマサ君も出席していたが、最近では疲れが出たのかお断りしているようだ。

「ご機嫌麗しく、ラーの使徒様。今日も一段と美しい……」

「ありがとう。……おかげさまで」

ここの奴らは、どうも私の姿は受け入れやすかったらしい。ギリシヤと親交があるから当然と言えば当然なのだが、東洋人の団長とキクマサ君はいまだに胡散臭がられている。

銀の器に注がれた葡萄酒は、当然現代のものと比べたら飲みにくく、てしょうがないが、仕方が無い。

せっかくのご好意だ。おいしいと言って、愛想を振りまかなくては。

「細身の体でずいぶん酒にお強い……」

「あら、お酒に強いのに、体格は関係ありませんわよ。それに私、強いと言うよりは効かない体質なので……」

「はは、ご冗談を」

既に酔ってしまった様子の高官の一人が、酒臭い息を吐きながら彼女に言い寄る。シャルロはくすくす笑うと、

「そう……冗談よ」

再び銀の器を口に運ぶ。

視線だけは周囲を注意しながら。

女王が、全員敵に思えてしまうと云つのも納得出来る。どうにも腹黒い、欲に満ちた野心が手に取るように感じられる。

彼女は視線を斜め前の男に向けた。体格の良い雄々しい青年で、近づいてくる下心丸出しの輩と違って感じのいい男前。彼は、軍の総司令ホルエムへブ。金飾りの付いた白い布を頭にかぶり、非常に落ち着いた様子だ。

『…………でもね、こういう奴にかぎって黒幕だったりするのよ…………』

シャルロは足を組み直して、銀の器に入った葡萄酒を全部飲んでしましながら、銀の器越しに彼を淡々と観察していた。しかしまあ、さすがは軍の総司令。彼女の視線にすぐ気がつく。お互いニツコリ笑って返したけど、どうやら向こうも警戒し始めたようだ。体中の意識がピンと張って、まるで隙がない。

『…………黒かな…………？』

分からない。

決めつけるのはまだ早いし、先走ると痛い目を見そうだ。彼を注意して見るにこした事は無いけれど。

「もう一杯いかが…………？」

その時、侍女らしき女性が彼女の器に追加の葡萄酒を注ぎに来た。

「…………あ…………ええ…………ありがとう…………」

將軍様に夢中になっていたせいで、少しふいではあったが、気を取り直して再び葡萄酒を口にした。

「………………………」

シャルロは注がれたばかりの葡萄酒を口にした瞬間、眉根を潜ませ動きを止めた。でも、騒がしい宴会の中で、彼女の異変に気がついた者はほとんど居ないだろう。

シャルロは銀の器を口から外すと、先ほど自分に酒を注ぎに来た侍女を視線で追った。

ついにかかったわね。

シャルロはルージュの唇に弧を描く。酒には毒が盛られていた。間違いない。

毒の味は違っても、今も昔も変わらない毒の気配。

彼女に毒は効かない。

侍女はシャルロが葡萄酒を口にしたのを確認すると、怪しまれないようにさりげなくその場を後にした。

シャルロはすぐにホルエムヘブの様子を確かめる。

彼もまた、侍女を目で追っている。

一週間、慎重に様子を伺ってよかった。

彼女はこみ上げる笑いに耐えきれず、銀の器を持ったまま立ち上がった。

「……………どうかしましたか……………？」

女王アンケセナーメンが、心配そうに声をかける。
しかしシャルロは何て事なさそうに、

「……ええ、大丈夫。……どうやら私も酔ってしまったようです。
……外の空気でも吸って、酔いを醒ましてきましょう……」

視線だけで女王に笑いかけた。
ついに、奴らが動いたと。

騒がしい宴会の間をゆっくり出ると、誰も見ていないのを確認して、
銀の器に入った毒の酒を、器ごと中庭の池に落とす。
透明の水が一瞬赤く揺らいで、水面に映った月を染める。

馬鹿な人たち。

毒なんかで私が死ぬはず無いのに。

「……死にはしないけど、さすがに全部飲んだら体に悪いからね
……」

沸々と体の奥から沸き起こる、命のやり取りのスリルと興奮を、
やり求めてしまう自分が居る。

彼女は顔を手で覆うと、一度大きく深呼吸した。

わし。

始めようか。

きっと侍女は、私を殺そうとした真の人物に接触するはず。
計画がうまくいったと勘違いして。

最初は私に手を出すであろう事は分かっていた。
どう考えたって、私が一番公の場に出ているし、個人の部屋には厳
重な結界が張つてあるらしいから。
あまり部屋から出ないキクマサ君や団長はその後だ。

シャルロは白い薄布の衣装をなびかせて走った。

黒幕は、いつたい誰？

危険の真つただ中に居ると言うのに、彼女の瞳は微塵も恐れを感じ
ていない。
むしろ、喜びにも似ている。

偽りの微笑みは、赤いルージュに彩られ、いつもの彼女からは想像

もできないくらいに冷たい瞳だった。

I
d
r
a
w

37: エジプトプリン19〜団長とロウソク〜

欲望と、野心のつごめくこの都で、神の名を盾に身を守る

甘い言葉に、決して惑わされないで

俺の名前はハク・リュオン

ルネ・ヴィルトン美術学校五年生で、ルネ・ヴィライアー団長だ。称号はルネ・テクタイト。そう呼ばれるより、やはり団長と呼ばれる事の方が多い。

教員どもの陰謀によって古代エジプトにタイムスリップしてしまい、いまだに帰れずに居る。しかも、くそ生意気な後輩シャルロと、見た目の割に控えめな新人キクマサと共に。ついでに、俺様は今訳あって病に臥せっている。

「……………」

最近ずっと寝てたら、夜が思いのほかに寝付けない。

ギンギンに見開いた瞳で、相変わらずしかめっ面のまま、何も無い天井を見ていた。

実を言うと、既に元気であった。

確かに水に当たりはしたが、起き上がれないほど苦しかったのは最初の三日間くらいで、今は何て事無い。

「……………それにしても、引つかかんねえな……………」

こうやって大人しく弱った振りをしていれば、あの胡散臭い“呪いの化身”とやらが再び現れてくれる物と思っていたのに。どうにも物語が進まない。

団長は起き上がると、前髪をかき上げた。

肩をぽきぽき鳴らして、ここ数日動かしていなかった体を捻る。

「あーあ……………とんだ計算違いだ。……………敵もぬるすぎんじゃねえのか？……………俺だったら今のうちに殺りに行ってるよ」

気の短い団長にとって、いよいよ我慢出来ない状態だった。何かアクションを起こさない限り、イベントは立ち上がらない。

彼は暗闇の中、片口を上げてほくそ笑むと、どういう訳か立ち上がり部屋を抜け出す。

遠くから聞こえる宴の音楽に、人々の声。
打って変わって、ここはなんて静かな回廊。

宴会から、うまく抜け出したシャルロは、先ほど自分の器に毒を盛った侍女の後を追っていた。

侍女は拳動不審にキョロキョロしながら、何をそんなに焦っているのか、気配ただ漏れで小走り。

『……………あーあ。……………どうせならもつと手慣れた奴にさせればいいのに……………』

見ているこっちが可哀想になってくる。

きつと、人なんて殺した事無いんだ。罪の意識と、バレたらどうしようという焦りと、言いよつの無い興奮と。

彼女の心臓の音が聞こえてきそう。

侍女は震える足が何度ももつれそうになりながら、宴会場からだいぶ遠のいた、ある部屋にやって来た。

シャルロは、彼女が立ち止まった部屋の一番近くの曲がり角に身を潜めると、視線はその方向に留めたまま、彼女が部屋に入っていく

足音を聞いた。

『……………きつとあの中に……………』

シャル口は巻き毛を耳にかけ直すと、そつと曲がり角から顔を覗かせた。侍女はとつくに部屋に入ったようで、その前は閑散としている。

彼女はゆっくりと部屋に近づこうとした、そのとき、

「……………おい!!」

「……………!!」

叫びこそしなかったが、後ろから肩を掴まれて死ぬほど驚いた。彼女とつて背中をとられる事なんて、あり得ない事だったから。

とつさに振り返り、どこのどいつだと思ったら。

「……………つな……………団長!!!!?」

「……………おい……………。そんなにオーバーに驚かんでもいいだろ……………。何やってんだてめえ」

「ちよつ……………静かに!!」

何てこつた。このタイミングで何てこつた。

シャル口は計り知れないやるせなさを感じたが、今は彼を罵倒している暇はない。顔を引きつらせながら口元に指を当て、静かに!!のポーズ。団長はその凄みに押されて、声を小さくする。

「……………どうしたんだ……………はーん、お前の事だからどうせ、金目の物でも探してたんだろ……………」

「うるさいわね！！ あんたのせいでのこの一週間が無駄になったかもしれないわー！！」

彼女は団長を睨むと、フンと顔を背けて、再び部屋を確認した。

部屋の前は相変わらず人の気配はなく、彼女は足音をさせずに入口に近づいた。

団長はやっと事の重大さに気がついたのか、黙って彼女の後をつける。

「…………………………」

そっと部屋を覗くと、たった一つのロウソクの揺らめきが見える。逆光で人影は暗く、ただのシルエットで、それでも、

『……………二人……………？』

侍女の他に二人居るのは確認出来る。影の形から男だろうけど。

「…………………………殺したか……………」

「……殺したんだろうな……」

低い、籠った声と、怪しい空気の中、彼らはまさにその会話をして
いた。

「はい……はい!! 彼女は毒を口にしましたわ!!」

侍女は震える声でそう言った。

「……その割には宴の間から何も感じんな……。悲鳴の一つも
聞こえて良さそうな物を……」

「で、でも……あの人は何事も無く毒を口にしました。私、ちゃん
と見たんです!!」

「死ぬ所は見て無いんだな、その様子なら……」

二つの影のうち、小柄な方の影の男が、怖いとも感じる口調で問い
つめた。侍女は一瞬固まって、何か考える様に、

「……は……はい……」

ためらいがちに頷いた。

『……いつら……何を言ってるんだ……?』

団長は全く状況が分からない中で、この怪しい談義と、それを険しい目で覗いているシャルロの様子にただならぬ何かを感じた。シャルロはシャルロで、会話を一言一句聞き漏らさないように、ただ気配だけは悟られないように、彼らの会話を盗み聞きしていた。

「……………まあ、あの毒を飲んで死なない奴は居ない……………残り
のラーの使徒はどうする……………」

「大丈夫です。今にも刺客が始末しているでしょう。……………結界
がありました。既に手は打っています……………」

『……………!!!?』

大柄な影が、小柄の影の男に畏まって言った。
シャルロは眉根を潜め、これはまずいぞと内心焦っていた。

『……………キクマサ君が危ない……………』

団長も眉間にしわを寄せ、だんだん状況把握が出来てきた様で、シャルロの方を横目に見る。
どうしよう。

彼女は唇を噛み、手の汗を握る。

ここまで来て、何も掴めずに引き下がるのは悔しいが、今まさにキクマサ君が危険に晒されている可能性があるのは否定出来ない。

彼女は静かに一步下がり、目で団長に合図をすると、その場からおとなしく手を引いた。

団長は急に彼女が引き下がったので何だ？と思ったが、彼はそこから去る瞬間に、タイミング良く部屋の中の小柄な男の顔を垣間見た。ゆらゆら、ロウソクの光が映し出したのは、彫りの深いしわだらけな老人の、それでもただならぬ野心に満ちた瞳だった。

目に焼き付いて離れない、鈍いロウソクのオレンジと、たった一瞬間のコンタクト。

「おい！！！！ 一体何だつてんだよ！！！！」

団長は一目散で走る彼女に聞いた。シャルロは、

「あのねえ！！ あんたが水に当たったとかで寝込んでる間に、私はちゃんと動いてたのよ！！！！ さっきの奴らはきつと、初日に襲ってきた奴らの仲間よ！！！！」

「……………な、なにい!？」

何も知らなかった団長は驚きを隠せず、肩眉を上げた。

「お前、何でそれを俺に言わなかった!?!」

「今はそれどころじゃないわ!?! キクマサ君が危ないのよ!?!
! あんたは運良くここに居るからまず大丈夫だろうけど、彼は部屋に居るのよ!?!?!」

シャルロはキツと目の前を睨み、自分の中の焦りにいらだちを感じながら、どうか彼に何も起こっていませんようにと、祈るばかりだった。

「……………この女……………」

団長はシャルロを睨むように見ていた。

彼女が勝手に動いていたと言うのも死ぬほど気に入らないが、それよりも、危険な事を危険と知りながら、冷静な判断とスキルを彼女が持っていたと言う事に、何だか違和感を感じたのだ。

「……………運動神経が良いとか言う問題じゃないぞ……………」

団長はヴィルトンでも名の知れた、中国系マフィアの跡取りである。闇の世界で生きて来た自分だから、そう言うのに敏感すぎるのかもしれないが、この時ばかりは言いようの無い違和感を感じたのだ。

直感的に。

キクマサは先輩二人の心配をよそに、相変わらず普通に寝ていた。彼は何と云うか、感受性は豊かなのだが、こつこつ所は緩いのだ。

影が、呪いが、災いが、すぐ側まで来ている。

やっと動き出した歴史の物語。

誇り高いファラオと、愛に生きた女王と、二人を翻弄した取り巻きたち。

誰もがきつと、自らの願いを神に祈り、何かを犠牲にして、

誰よりも覚悟を示した者が、世界を手に入れる。

どんな結末だとしても。

I d r a w

38：エジプトプラン20〜動く物語〜

光と闇は裏表

太陽を祭っていたのに何で

何で光を恐れる

キクマサの部屋の前には、ゆらゆらロウソクの炎が二つほど揺らめいていた。

夜になったらアンケセナーメンさんがつけにくる。

寝にくいかなと思っていたが、案外そうでも無く、特にキクマサは意識していなかった。

毎日何をしてもなく、団長やファラオとお話して、こつやって早寝する。

電気の無い時代って、そうなんだろうな。

きつと夜が早い。

そう、それは現代で言う夜十時頃の事だった。

キクマサはとくに深い眠りについていた。部屋の前で何か、暗い闇がうごめいている事に気づきもしない。

ドロドロと、影は人の形を成し、生命を感じさせない冷たい息をはきながら、ひたひたと部屋に忍び込もうとする。

ロウソクの火の前でもたついていたが、すぐ側の木の上に潜んでいた刺客が小言で何か呟くと、一瞬強い風が吹いて、楽々とロウソクの炎を消した。

「……………！！？」

しかし、ロウソクの炎は、何て事なく再び灯つたのだ。刺客の男は眉根を潜め、ロウソクの揺れる炎を探った。

その時、

「……………無駄だ」

空気を斬るような、若い男の声がした。

「このロウソクは結界だ。そうやすやすと光を消しはしない」

声の主はいつの間にか、キクマサの部屋の前に立ちふさがっていた。

「!!!!!!!!!!」

木の上の刺客は頬に一筋の汗を流し、じっと身動きが取れずに居た。男には分かっていたから。そいつが、王宮軍の総司令、ホルエムへブだって事が。

ホルエムへブは剣を手に、向かってくる呪いの化身と斬り結んでいった。

金属のぶつかる音が鋭く響いて、やっとキクマサは目を覚ます。

「……………!?!」

彼は部屋の前で起こっている事を一時理解出来ずにいた。

何度も目をこすり、瞳を細めてみても、目の前で起こっているのは剣と剣の熾烈な争いだった。

「な、ななな、何がどうなっただい……………!?!?!」

彼はベットから起き上がると、部屋の中でたじろぎ、「な、ななな」と、とても言葉に出来ないでいる。

その様子に気がついたホルエムへブは、

「……………おい!!! ラーの使徒!!!!!!」

「……………え、え、はい!!!!?!」

「お前、“ラーの光”を持っていただろう!! それをここに持ってこい!!!」

キクマサは頭に手を置いたまま、最初はこの男が何を言っているのかわからなかったが、

「……………懐中電灯……………っ」

ここへ来た初日の事を思い出した。

確かこの意味不明な化身達は、懐中電灯の光に弱かった。なぜか。それはキクマサが、ロウソクの炎に化身が近づかないのを見て気がついた事だった。

急いでカバンを漁る。が、しかし、

「そうだった!!! 団長が預かるとか言って、持って行ったんだっつた!!! 最悪だ!!!」

キクマサは、信じられん!と言うように両手を頭に当て、さすがにこの時ばかりは団長を呪った。

目の前で、知らない人が自分を守ってくれている。たった一人で、あんなにたくさんの化身を相手に。

ホルエムヘブは、木の上にいる刺客から意識を外さず、それでも多数の化身を相手にしていた。斬っても斬ってもキリがない。

その時だった。

「そこまでだ!!! 現行犯逮捕だぞ!!!」

「…逮捕って何よ」

横からハイテクな電気の光を感じた。

ロウソクの光とは質の違う、白いシャープな光。

キクマサは突然の光に部屋から出る。

「団長！！！！ シャルロ先輩！！！！」

案の定懐中電灯を手に、息を荒げてやって来た二人の先輩を見た。
団長は顎の汗を拭くと、

「へっ……間に合ったぜ」

懐中電灯を持ってこちらに近づいて来た。

すると、呪いの化身の様子が明らかにおかしくなり、彼らは低く唸りながら後ずさる。逃げ出す者もあれば、光をもろに受けて砂となつて消滅した者も居る。

ホルエムへブはその様子を驚いてみていたが、ハツと木の上に居たはずの刺客の気配を探った。

「……………くそ……………逃げたか」

舌打ちすると、もはや決着のついたその場を再び見渡し、その場にいる事の出来なくなつて去る呪いの化身を確かめる。

「……………何だかあつけないものね。シユールな絵だわ」

シャル口はいまいち消化不良と言うように腕を組んだ。
団長はやっと懐中電灯の電源を消すと、

「しょうがねえだろ。これがあいつらの弱点なんだから」

ぽかんと口を開けて固まっているキクマサの方に投げた。

「俺様にそれは必要なくなった。お前が持ってた方がいいな」

「は……………はあ」

そもそも、俺が持って来た物なんですけどね。

キクマサは受け取った懐中電灯を見つめながら、急にハツと思い出したように、ホルエムへブの方を向いた。

「……………そうだ……………あの、助けてくれてありがとうございます。」

……………あなたが居なかったら、俺多分……………」

「……………いや……………」

ホルエムへブは淡々と首を振る。

シャル口はいかがわしそうに彼を見ると、

「……………ホルエムへブさん……………あなた、宴会に居ましたよね。どうしてこんな所に……………」

この人がここに居る事を、とても不審に思ったのだ。
さっきまで、私と同じように宴会に居たはず。

「女王の命令です。あなたが宴会場を抜けた事で、女王は私をこへ差し向けた。……影で動いているのはあなただけではないんですよ」

「……………女王が……………」

なるほど。つくづく侮れない人だ、アンケセナーメンさんは。このホルエムへブから感じた隙のなさは、私と同じように内を探っていたからなのか。

「……………ところで、黒に辿り着きましたか？」

「……………え……………」

シャルロはホルエムへブの唐突な問いに固まるしかない。とてもじや無いけど、何も分からなかったなんて恥ずかしくて言えない。キクマサ君が心配だったけど、この人が彼を守ってくれてたんなら、無理にでも留まっておけば良かったのかも。

「……………俺、一人なら顔を見たぜ」

その時、ふいに団長が、驚くべき事をカミングアウトした。

「……………え、うそ」

「ああ。見えたんだ。最後の最後に、小せえ、老人の顔をな。……おっそろしい、じじいの面してたぜ」

彼は、思い出すだけでも身震いする、老人のあの野心に燃えた瞳を思い出した。しわだらけの顔に、瞳だけは若々しく、ギラギラしていた気がする。

ロウソクの間隙から、一瞬だけ垣間見た、あの人の顔。

「……………老人……………」

ホルエムへブは顎に手を当て、考え込んだ。眉間にしわを寄せ、険しい表情だ。

「思い当たる節があるのですか……………」

「……………重臣の中に、年の進んだ者など沢山居る。しかし……………」

シャルロの問いに、ホルエムへブは落ち着いて答えていたが、明らかに何かに気がついていた。

「……………顔は分かってんだ。後は簡単だろ……………」

団長は頭の後ろに手を組んで、何だか自信に満ちた口調だ。

ホルエムへブは、相変わらず何かに引つかかっているようだったが、

「女王に報告しましょう……………。なかなか掴めなかった敵のしっぽが、やっと掴めたのです」

相変わらず落ち着いた姿勢で、冷静に判断しようとしている。

シャルロと団長は事情が分かっていたようだが、キクマサだけ何の

事だかさっぱり分からなかった。

「えええええ！！！！ シャルロ先輩そんな事してたんですか！！！！？」

キクマサは椅子から身を乗り出して、それはもう驚いた。てっきり宴で良い御身分を満喫しているのかと思っていた。

団長は腕を組んだままブスツとして、勝手な行動を取ったシャルロに対し酷くご立腹であった。

「何でそれを俺に報告しなかった。……勝手に動きやがって」

「だってあんた、水に当たってたじゃない！！ 言った所で、何が出来たって言うのよ」

「……………」

団長は、それを言われたら何も言い返せない。キクマサもフォローの仕様が無い。

彼女は髪を払うと、そっぽ向いた。

「……………でも、よくそんな危険な事引き受けましたね……………」

「何かしないと、このままだったらエジプトに居着いちゃうかと思

ったからよ。他のメンバーがどうなったかも分からないのに、もたもたしてられないじゃない」

「……………まあ、それは確かにそうだ……………。こうなった以上、とことん歴史に関与してやれ。こっちから進めていかないと元の世界には帰れない」

「……………元の世界……………」

キクマサは、今まで出来るだけ考えないようにしていた事が、ふと頭によぎってしまった。

どうしてこんな所に来てしまったんだろうと言う事以上に、元の世界に帰れなかったらどうしよう……………。

フォルテ、ルナシー……………レイ……………

みんなはいつたいどこに居るのだろう。

ここで死んでしまったら、現実の世界の俺はどうなるのだろう。

出来るだけ考えないようにしていたのに、物語が動いた事で、それらがリアルを帯びてくるから。

どうして団長もシャルロ先輩も、こんなに強く向かい風に進む事が出来るのだろう。

歴史に関わる事を、怖いとすら思わないで。

これが、ルネ・ヴィライアーの研修だと言うのか。

ただ技術を学ぶ事だけではなく、全然もつと深く突き落とした、壮大なインパクトの記憶を植え付ける。

経験は糧となり、発想の源となる。

この歴史が俺たちに求めている物は何だ。

それを、考えずにはいられなかった。

I
d
r
a
w

*drawコラム〜四年生〜

〜四年生〜

No.1

シャンデリー・リオール

*ルネ・ガーネット

特徴／金髪碧眼の王子様タイプ的美少年。にこやかで、物腰柔らか。性格／まるで、おとぎの国からやってきたかのような、正統派美少年。しかも、男女分け隔てなく優しく、おっとりしている。しかし彼はすでに、同じくルネ・ヴィライアーのシーダと付き合っている。リオは彼女に骨抜きなので、他の女性には興味が無い。フランスの大企業の息子だが、ここ何年も家に帰ってはおらず、何かありそう

だ。

絵画の特徴／祖父の影響で、絵画を始め、絵画を純粹に愛している。才能に頼らず、とことん努力してきた秀才タイプ。

昔は抽象画も描いていたが、最近はとても現実に近い写真のような絵画を好んで描く。多少騙し絵のような、ユーモアのある事をする

ため、現実感と、非現実感を出す絵画は評価が高い。

< 同学年から見たリオ君 >

シーダ

「リオは私が守るわ!」

「……………」

フレイ

「おいリオ!!!この程度の女で満足するんじゃないやねえ!!!世界は広いんだ!!!お前だったらもっと……………!?!」

(フレイ、シーダに殴られる)

シャルロ

「あなた、若いのに趣味が年寄り臭いのよ……………」

「良いじゃない!!!それがリオなのよ!!!悪い!!!」(シーダ)

「黙れシーダ……………」(フレイ)

スノー

「……………リオはリオ……………」

「……………」

シルフィーダ・ケイド

*ルネ・カーネリアン

特徴／薄黄緑のまつすぐの髪を、ツインテール。瞳が大きい。性格／かなりのしつかり者で、ルネ・ヴィライアーの母と呼ばれる。自己中心的な四年生をまとめているのは彼女。幼い頃から、医者のお母さんについて、様々な国での医療活動を見てきたため、誰よりも命に対する思いが深い。彼女自身も赤十字のメンバー。リオを愛し、どちらかと言えば世話ばかり焼いてきた彼女が唯一甘えられるのは、彼だけである。

絵画の特徴／彼女もまた、絵画よりも先立つ物があるので、将来画家を目指している訳ではないが、ヴィライアーになるだけの実力者である事は言うまでもない。特に、人物や生物の体の仕組みはよくわかっている。彼女の描く生物は生命感に溢れている。リオとともにヴィライアーになるため、かなりの努力をした。

<同級生から見たシーダさん>

リオ

「うん。愛してるよ。」

「……………」(一同遠い目)

フレイ

「おせっかい女。俺のプライベートに口出ししないでください。」

シャルロ

「シーダは一年生からの親友だし、大好きよ。ただちょっとうるさいわね。ま、それがシーダなんだけど。」

スノー

「……………みんなの母」

「……………」

No.3

フレイ・レステヴァン

*ルネ・エメラルド

*国籍アメリカ

特徴/アツシユグレーの外ハネの髪。チャラチャラした風貌。性格/見た目道理チャラ男で、ヴィライアーきつての問題児。不良でかなりのプレイボーイだが、シーダのおせっかいのおかげで毎年なんとか留年は間逃れているという、どうしようもないやつ。スノーとルームメイトで、彼によくちよっかいを出す、いつも冷やや

かな目で見られる。どうやら四年生メンバーは、彼にとって大切な様子。

絵画の特徴／モットーは“美術とエロスは紙一重”と言うほどに、裸婦画やヌードをこよなく愛する。しかし、彼のこれらの官能的絵画は非常に評価が高いため、これに限っては誰も何も言えない。よくこのモデルの女の子と変な関係になるのが最大の問題。彼もまた“激動の学年”と呼ばれた第四学年の天才の一人である。

<同学年から見たフレイ>

リオ

「最近ちよつと丸くなったよね（性格が）」

シーダ

「あんだ、タバコ吸いながら絵描くの、いい加減やめなさい！！！」

シャルロ

「あんだこの前、首にキスマークついてて噂になってたわよ（高笑い）」

『えー……それ言っちゃう！？』（カップルのくせに、四年生の中で一番ピュアなリオとシーダには耐えられない内容）

スノー

「……………」（え…誰そいつ…みたいな目）

『……………存在消されつつある！？…』

シャルロ・グレディア

*ルネ・アンバー（琥珀）

*国籍ギリシャ

特徴ノブルネット（深緑）のきつい巻き毛を片方の肩に流している。小柄だがスタイル抜群。

性格ノお金が大好きな賞金女王。性格も見た目道理女王様で、キツイ。喧嘩で団長に勝った事のある唯一の人物。彼女の過去は明らかでないが、今はエリーゼ先生の養女。スノーとよく一緒にいるが、二人の関係はいまいち掴めない。誰も覚えていない例の研修を覚えていたり、特殊な人材である。何をやらせてもだいたいできる器用な面も。団長と違って、超強運の持ち主。

絵画の特徴ノルネ・ヴィルトンの中で、スノーと並ぶ世紀の天才。彼女の描く世界は、激しくも美しい抽象絵画。既に大きなコンテストで沢山賞も取っていて、若手画家の中で、最も注目を浴びている一人。スノーに追いつきたい一心でここまでできた。

<同級生から見たシャルロ様>

シーダ

「ちよつと気に食わない事があると、女王様スイッチ入れるの、もうちよつと控えなさい。今までいっただい何人病院送りにしたと思っ

てるの!？」

「……………」(全員哑然)

リオ

「……………腕組んで高笑いのイメージしか……………」

フレイ

「……………エロ恐ろしい」

スノー

「……………小さい」

「……………」;(え、そこ!?!?みたいな)

No.5

スノーフリーク・ロズベルト

*ルネ・オパール

*ドイツ人

特徴/淡い細い髪に、黒目がちな瞳。常に眠そうで、淡々としている。ひよろつとされていて、背は意外と高い。

性格／淡々としていて、常にマイペース。天才肌で口数は多い方ではないが、たまに一言凄いことを言う。あまり体力がある方ではないため、隙あらばダラけている。今まで一人勝ちで、他人に興味が無かったが、シャルロには一目置いていた様子。実はクレハの義理の兄。

絵画の特徴／両親ともに画家で、有名な“ロズベルト美術学院”の創設者。兄二人もヴァイアーであったが、スノーはそんな、名のある家族の中でも、最も才能があり、ずば抜けた大天才である。世界から注目を浴びている逸材だが、本人は積極的に賞を出すタイプではないため、学校側に残念がられるが、そこは個性なので諦められている。

<同級生からみたスノーさん>

リオ

「……………あの目を見ると、どこか遠くへ行ってしまいそうになる。」

シーダ

「あんたほとんどの授業寝てるわよね！！夜何してんのよ！！！」

「……………あのね、シーダお母さん、夜も寝てるよ」（フレイ）

シャルロ

「ああ見えて、かわいい所もあるのよ、あの子。」

「……………え……」（みんな何か言いたげ。でも何も言えない。）

フレイ

「……………あいつの周りのダイヤモンドダストが見えるのは俺だけでしょうか……………」

「……………いや…、言いたい事は分かるよ……………うん…。」（一同）

〈四年生まとめ〉

それぞれ非常に個性的で、才能にあふれている。元々第四学年は“激動の学年”と言われるほどの黄金期で、彼らはその中でもトップメンバーである。既に画家として、多大な評価を得ている者も多く、ヴィライアーの中でも、注目度の高い学年。しかし、天才肌が多いため、結構みんな自己中心的だが、五人はとても仲が良く、常に五人でいる事が多い。しかしこの五人、昔は超仲が悪かった訳ですが……………それは後に明かされるでしょう。問題児が多いため、団長も手を焼くのはこの学年である。

〈おまけ〉

「四年生に特殊装備するなら」

リオ 『王子の剣』

シーダ 『何でもなおる天使の薬』

シャルロ 『黒い鞭』

フレイ 『使えないゴッドハンド』

スノー 『何もしてないのに発動するマインドコントロール』

今回のコラムは<三年生>です。

39：エジプトプラン(2)～去年の思い出～

やる事成す事

それは生きていくと言っただけできっと、意義のあるもの

「ねえ、俺たちはいったいどこに行くの？」

クレハは自分に乗せているラクダを操縦している、頭のつるつるしている中年の男に気兼ねなく話しかけた。

「……………都ですぞ」

すると、隣で並ぶようにラクダを連れて来た老人カーロンは、

「我々は今から、都のアメン神官団のもとへ行くのです。災いの多き今、他神とも手を組まなくてはなるまい。それにどうも、アテン神官団の残党も気にかかる。……あなた達はぜひ、都でファラオに助けを求めると良い……。ファラオはきっと、あなた達を助けてくれるでしょう……。」

しわがれた、しかし勢いのある口調でクレハの問いに答えた。残念ながらクレハはそのほとんどを理解しきれなかったけれど、カロンの隣のラクダに乗っていたフレイは胡散臭そうにしている。

「じゃあ、そのファラオに会ったら、俺たちは元の世界に帰れるって言うのかよ」

「それはわしには何とも……。しかし、きっと何か手がかりはあるでしょう」

夕頃の、少し涼しくなって来た時の事だった。

キャラバンの一行は砂漠を横断し、都へ向かっている途中、未来から来たクレハ、フレイ、スノー、ジェイルに出会ったのだった。彼らは右も左も分からず、洞窟の中で小さくなっていた。

「都は沢山の人が居るんだ!!　すごいんだから!!」

タハールは腕を大きくのばして、沢山!!と言つのを強調してみせた。無邪気な声にクレハまで、

「おいしい物ある!？」

「うん!!　お兄ちゃんはきっと好きだよ!!」

仲良しのクレハとタハール。フレイはその様子をしらっと見て、

「よく言うぜ。オメーは何食ってもうまいしか言わないくせによ」
常々楽しそうなクレハとは対照的な態度だ。

クレハの少し後ろからついてくるラクダに、スノーが乗っていた。

「まあ、いいじゃない……。もしかしたら、都に他のヴィライアーもいるかもしれない。都は皆が集まりやすいから……」

「他にも俺たちみたいにタイムスリップなんぞした奴がいれば、な」

スノーの淡々とした言い様に、フレイは大きくため息をつく。確かに、この状況を嘆いても仕方が無いし、ヴィライアーの研修とはこういう物だから諦めもつくけれど。

こうも深刻に考えてくれない奴が多いと先が思いやられる。

フレイは後ろを振り返って、ジェイルの乗ったラクダを探した。

「おい、ルネ・サファイア……。お前はどっ思う」

「……………！？」

ジェイルは彼から視線を逸らし、相変わらず機嫌が悪そうに態度が良くない。

「……………こんなもの、去年の“あの”研修よりずっとました。ヴィライアーの研修など、そういう物だ」

「……………あ、“あれ”な……………。ルネ・ヴィルトンに帰ってこ

い”研修な……”

フレイは何だか嫌な物を思い出したように、苦笑いする。さすがのスノーもこの研修の名が出ると、ビクツと反応する。

「えええ〜。何なに？ ルネ・ヴィルトンに帰ってこい研修って」
クレハはさすがに一年生なので、この史上最低と名高い研修を知らない。フレイは去年の事を、嫌々ながら記憶の棚から引き出そうとした。

「あれは、去年の秋の研修だった……。俺たちはあらかじめ、くじ引きで4チームに分けられ、研修はチームごとに行うと言われていた。基本的に、歴代の秋の研修と言えば、紅葉の美しい国へ行つて、写生とか雅な物なんだが、去年だけは違ってな。俺たちの期待を一瞬で地獄へ突き落とした訳だ」

フレイは、ここがこんなに暑いのに、思い出すだけでなぜかもの凄く寒気がして来た。
スノーもジェルも、心無しかもの凄く明後日の方向を見ている気がする。

「四つに分けられたチームは、それぞれ地球のどこかに降るされ、出された課題が“ルネ・ヴィルトンに帰ってくる事”。しかもしかも、事前にそれぞれの財布は集められていたから、皆無一文だ。俺のチームが降るされたのは、オーストラリアの砂漠だったぜ。……あ、砂漠って言うのはこのこと同じか」

「お金もなくて、どうしたの？」

クレハはきよとんとして、この研修の趣旨を理解しきれないでいた。スノーは伏し目がちに、

「……………要するに、自分たちの力で、全く知らない土地で、ゼロから“衣食住”を学べっていう研修だったんだよ。ルネ・ヴィルトンにはそういう当たり前の事に疎い奴が多いからね。自分達のお金で稼いで、仲間で助け合って、生きて、ギリシアまで帰る。幸い、パスポートや身分証明書は持たせてくれていたからね」

今思えば、あの研修は地獄だったけれど、いかに自分たちが周りに守られていたかよくわかった痛い研修でもあった。フレイは、

「ま、チームにもよるんだけどな。例えば、シーダとシャルロ、レッド先輩がそろっていたチームはそんなに大変じゃ無かったらしいぜ。なんせ、シーダはお母さんだからな。シャルロやレッド先輩は働く事に慣れてるし。あのチームは恵まれてたぜ」

今更だが、自分のチームに団長やナギ先輩という、使えない先輩達しか居なかった事を呪った。クレハは、分かっているのか分かっていないのか、瞳をキラキラさせる。

「何それ!! 楽しそうじゃん!!! ……でも、それってこの研修と何か違うの??」

「……………」

スノーとフレイは顔を見合わせた。

「まだ、このエジプト研修がどういったものか分からないから、何

とも言えないけれど……。多分、現実感がありすぎたんだ、あの研修は……。内容から見たら、あの研修よりもっと大変だった研修はあったよ。でも……。あれは世界の醜い物も綺麗な物も、全てを見る事が出来て、何しろそれこそが、世界のほとんどなんだって思い知らされるから……。」

「……………」

美術館や世界遺産ばかりを巡っていたって、それは知る事が出来ない。

生きていくと言う事がいかに難しいかを。

夢の世界ではなく、現実だとよくわかったからこそ、自分の無力さが辛かった。

「……………ま、あの研修が今年もあるとは思えないけど、これはまた別の話だ」

フレイは、多分これ以上は話したくなかったのだ。

自分の中に留めておいて、そして、たまたま思い出すくらいでないと、やっていけない。

あの研修は戒めだったのだろうか。

スノーもジェイルも、その事はよく分かっていた。

星と月の光が、とても強く地上に降り立つ夜更けの事。

地上に光が無いだけで、天はこんなにも輝けるものなのかと思った。

クレハは昼間も寝ていたと言うのに、今もまた、ラクダの上で操縦者に支えられながら寝ていた。

「こいつは幼児か。本当に自由気ままだな」

フレイは呆れたように首を振る。

そして、夕方から黙ってばかりのジェイルを振り返ると、

「お前、疲れてないか？」

「……………疲れてなんかいない」

彼女は相変わらず、警戒の包囲網をピンと張り尽くしていた。ふいとそっぽ向いて、まるで気を許さない。

「……………すっかり嫌われちゃってるね」

「フツ……………本望ですよ」

フレイはなぜか嬉しそうで、スノーはそれを引き気味に見ていた。

「好き好きってこられると、逆に萎えるんだよなあ……………。ほら、俺ってヴィライアーきってのプレイボーイだし」

「それ、自分で言ってるで恥ずかしくないの？」

「嫌いって言うてくれる方が、何か燃えるというか」

「……………」

スノーは、何か得たいの知れない生き物を見るような瞳で、何かもう、突っ込むことに飽きて星空を見る。

「……………そんな事ばかり言ってる。シーダにまた怒られるよ」

「……………なぜ奴の名が出てくる……………」

眉根を寄せたフレイとは対照的に、スノーは珍しく微かに笑う。

「シーダは君を、不良息子だといつも怒ってるじゃない」

「……………あいつは最初からそうだったよ。おせっかいを通り越して、うるさい母親みたいでさ。俺の事、男として、見ちゃいないんだ」

「……………」

キャラバンのゆっくりとした進行は、この静かな夜の砂漠にとってもぴたりだった。

昼間とは違って肌寒く、借りたマントを羽織っていなければならなかったけど、この冷たい空気もかえって清々しい。

スノーは相変わらず星を数えながら、

「……………ま、そのお母さんのおかげで君は毎年留年を間逃れている訳だ。感謝しないと」

嫌味を含みつつ、彼はくすくす笑うのを止められない様子だった。フレイは「はあ？」と、決して素直に認めようとはしなかったけれど、それがまさしく、反抗期の息子のように見えて面白くて仕方が無かったのだ。

砂の上に残ったラクダの足跡は、造られた先から風に崩され、流され、我々の歩みなど消してしまふ。

こんな風に、歴史なんて儂いもの。
記憶なんて曖昧なもの。

思い出なんて脆いもの。

それでも、そう言ったものをあえて目指すと言いつのなら、

我々が向かう場所は、きっと誰もが知らない場所。

I
d
r
a
w

40：エジプトプラン222ナイル川

星が瞬いている

この大地と、神の川を抱いて

それは、砂漠組が都へ向かう道中、二日目の夜の事だった。
何だか陰気な風が、砂を巻き上げ、星を隠す、そんな夜更けに、彼らは相変わらずラクダに乗って、一刻も早く都へと向かっていた。

既に砂の細かい砂漠は抜け、大地の割と固い、植物のちらほら見られる進みやすい陸地で、それでも砂が多いせいで、まともに目も開けられず、口数も少なくなる。そんな中、カーロンは、

「……………おかしいな……………。さっきまではおとなしかったものを……………。砂が震えておるの……………」

瞳を凝らして、何やら気にかかる事があるようだった。唐突にクレハが呟く。

「……………ねえ……………何だか、沢山の馬の翔る音がする……………」

「……………何だつて……………?」

「沢山来ているよ……………。どこからだろう……………。いや、どこからも……………」

クレハはうまく説明出来ないでいた。それもそのはず、あたりを取り巻く風は、僕らを取り囲むようである。

馬の翔る音が近づいてくる。カーロンは瞳を凝らして、迫り来る何かを見極めようとしていた。

「逃げろ!!!!!!!! 盗賊かもしれんぞ!!!!!!!!」

彼は出来るだけ大声で、周りのキャラバンに指示を出した。

キャラバン隊は列をなして、砂塵の荒れ狂う中を身を隠しながら駆け抜ける。

砂漠とはいえ、今は既に大地の固いため、足場に気を取られる事は無いが、夜の暗闇の中、遠くからやってくる黒い影はとても恐ろしく感じる。

「盗賊なんて本当に居るんだな。おいおい、大丈夫かよ」

フレイは髪を抑えながら、後を追うその影を振り返った。
キャラバン隊が途中二手に分かれ、カーロンやタハール、ヴィライ
アの4人は守られるように先頭を逃がされた。

「ねえ!!! あの人達は!!!」

自分たちを逃がすために、まるでおとりのように敵の目くらましと
なった者達が、クレハはどうしても気にかかった。カーロンは気難
しい顔をしたまま、

「あなた方は気になさるな」

と、それだけ。風を切って、どこへ向かってるのかも分からない。
我々にはどうしたら良いか分からないから。

「……………水の音？」

ジェイルは疲れきった顔を上げた。一夜中逃げた後、日の出にも関
わらず眠くて仕方が無かったが、聞こえてくる激しい流れの音に気
がついた。

他のヴィライアーも顔を上げる。

「……………」

目の前の崖の下には、猛々しい大きな川が、このエジプトの全ての源があつた。

「……………そうか……………ナイル川だ」

スノーは、あまり感情を露にしない瞳を今回ばかりは驚きに染めて、あつげにとられて言葉のでないヴィライアーを現実に戻す。

「ナイルの賜物とはよく言ったものだね。この川があつたから、エジプト文明は栄えたんだ」

砂漠に国に、大蛇のように横たわるナイル川。

人々はこの川を中心に町を造り、農業を発展させた。

太陽と、川の恩恵が、この国を形造つたのだ。雄大な自然の前には、人間の営みなど小さなものだ。

「……………この川に沿って行きましょう。昼間になる前に、どこか町に入らなくては」

カーロンは嫌に落ち着いた口調だった。

先ほどの事が、気にならないはずが無いのに。

ナイル川の濁流の音にかき消されて、敵が近くに来ていたのにも気がつかなかつたのだ。

「!!!!!!!!!!!!!!」

突然の風を切る矢の音。

ラクダの悲鳴とともに、ジェイルの乗っていたラクダが横転した。そのラクダを操縦していた中年の女性と、ジェイルが投げ出される。しかもジェイルは崖すれすれの所まで飛ばされ、体を激しく叩き付けられたようだ。

「……………くっ!!」

彼女は立ち上がる事も出来ずに、その場につづくまる。

「ルネ・サファイア!!!!」

フレイは舌打ちすると、逃げ出そうとしている自らのラクダから飛び降り、恐れと興奮の現場を抜け、彼女に駆け寄った。

「おい!!! 大丈夫か!!!!」

フレイが彼女を抱え起こそうとすると、ジェイルはフレイの手を振り払い、彼を睨むと、

「触るな!!!!」

「今はそんな事言ってる場合か、置いて行くぞ!!!!」

彼も負けじと彼女を怒鳴った。ジェイルは多少怯んだが、唇をきつく結ぶとそれ以上何も言わなかった。

「おい、こつちだ！！！！」

カーロンが、仲間の女性を助け起こし、他のラクダに乗せていた。助けに来たラクダにジェルを先に乗せ、自分も後から飛び乗る。キャラバン隊の残りの若者達が、剣を抜いて戦っていた。

既にいくつかの死体と、ラクダの死骸。

散らばった荷物を踏んで、無我夢中で敵を振り切っていた。

スノーとクレハは崖の端に追いつめられていた。

フレイ達に気を取られて、逃げ遅れてしまったのだ。

クレハは眉毛を吊り上げて、剣を持った男達に迫力の無いガンを飛ばしている。

スノーはこんな状況の中、男達の風貌に違和感を覚えていた。全員が同じような黒いマントをかぶって、盗賊と言うには生きている威勢のようなものを感じない。

言葉すら発さない。

「おい、てめえら！！こつちくんじゃねえよっしっ！！ねえスノー、こいつら倒していい??」

クレハはキーキー何かを言っていたけど、じりじり寄ってくる奴ら相手にこれ以上後退すると、崖から落ちる所まで追いつめられていたためスノーは拳を握りしめた。

クレハは奴らに今にも特攻をかけるつもりだ。

既に臨戦態勢。剣を手に持つ奴らに、素直に勝てると思っている。

「やる気の所悪いね、クレハ」

スノーはクレハの前に手をかざし、そのまま彼を崖から突き落とすた。

「……………え……………」

クレハは一瞬の事でどうにも出来ず、驚きの表情のまま、下へ下へと落ちていく。

スノーの相変わらずの無表情が、視界に映っている。

「……………君ならもしかしたら、倒せたかもしれないけどね」

沢山の敵を前に、現実を見た。あれでも一応自分の弟だから。

ナイル川に落ちたくらいで死ぬような、普通の子ではないのを知っていたから。

「スノー!!!!!! クレハ!!!!!!」

遠ざかっていく中、フレイは目を見開いた。
クレハが崖から落ちて、スノーが奴らに捕って行く様を見ているし
か無い。

「おい!!! あいつらを見捨てる気が!!!」

「現実を見る!!! 今帰ったら、全員が捕まるぞ!!!」

足を止める事は出来ない。ジェルも瞳を揺らして、青ざめている。

「そんな……私たちだけ助かるなんて……そんな……」

こんな事、予想すらしていなかった。

逃げて逃げて、仲間を見捨てて逃げて、今も逃げ続けて、あの人達
を犠牲に、敵を振り払ったようなものだ。

「あの高さから落ちて、生きているはずは無い」

カーロンは低い声でそう言うと、首を振った。

だいが先まで逃げ切って、もう追っ手は居ないようだった。

カーロンの腕の中で、いまだに怯えている小さなタハール。クレハ

が崖から落ちたのを目の当たりにて、相当なショックを受けているようだった。

「そんな事あるか!! いやあるかもしれないけど……でも、あいつはただ者じゃない。あの野生児がナイル川に落ちたくらいで死ぬかよ!!!」

自分がめちゃくちゃな事を言っているのは百も承知だ。でも、ここで見捨てるわけにはいかない。フレイは柄にも無く熱くなっている。

ジェイルも今ばかりは彼に便乗する。

「私も同じ意見だ。彼が早々死ぬとは思えない……。万が一でも、生きている事に賭けて、彼を捜すべきだ」

先ほど地面に叩き付けられ、いまだに痛む左半身の事を気にかけるより先に、あの二人の事が気がかりだった。

「……………珍しく俺に賛成してくれるのな」

「当然だ!! 二人は同じヴィライアーだぞ!!……………私たちだけむざむざ助かって……………」

彼女は、何だか自分に憤りを感じているようで、フレイは少し意外だった。

男嫌いなこいつの事だから、別にどうでもいいのかと。でも、やはり同じヴィライアーという事か。

カーロンは唸りながら、先ほどの黒いマントの男達を思い出す。奴

らは盗賊などではない。

何年も見なかったから、油断していた。
奴らの姿を忘れるはずが無い。

「……………先ほどの奇襲は、盗賊などではなかった……………。忘れるはずも無い、奴らはテル・エル・アマルナの兵士達。血も涙も無い、神に呪われたもの達……………ラーの使徒の香りを、いち早く嗅ぎつけたと言う事が……………」

カーロンの言葉に、生き残ったキャラバン隊はざわめき始めた。
ジェイルとフレイは何の事が分からず、顔を見合わせる。

「……………お前達が彼らを心配する気持ちはよくわかる……………。しかし、彼らを助けたいならば、やはり急いで都へ行くべきだ。今のフアラオならば、助けてくださる。彼はラーの使徒に寛大だ。……………神が授けてくれた使徒ならば、このような所で死ぬはずが無い」

彼の言葉は確信に近く、まるで喜びにも似ている。
こんな状況で、何が神様だと言いたくなかったが、フレイは口をつぐんだ。

スノーとクレハを助けたいと思う反面、彼らが死んだとは到底思えない、妙な安堵感。
ジェイルはとても心配そうにしているけれど。

多分これは、この世界は、古代エジプトでありながら、美術品の魔力の延長線。

イマジンストーリーを超えた、幻想物語。

現実と非現実の狭間を、時という曖昧なものを媒介に、鍵と言う美術品に見せられた世界。

ならば、きつと物語を突破するきっかけはあるはず。

リアル感が無いのに、それでも進んで行かなければ。

リセット出来ない、やり直しの出来ないゲームみたいだ。

41：エジプトプラン23〜ネフェルティティ〜

芸術とは、残酷な歴史だからこそ光る作品が生まれる事がある

本当の姿が、どんな物だって、美しさが優しさを伴っている訳ではないのだから

「なあ、ルネ・サファイア。お前、何で男嫌いなの？」

「……………」

フレイの突然の問いかけに、ジェイルは全く迷惑そうに、彼を睨んだ。
そして、何とも答えずにそっぽ向く。

「ちよつと……お話ししてくれたっていいじゃん……。ガードが固いねえ……」

フレイはひょうひょうと、わざとらしく言ってみる。彼女の顔色をうかがってみるが、眉間のしわはますます深くなるばかりだった。

「……余裕そつだな。仲間が二人も居なくなったと言うのに」

「スノーとあの野生児？……まあな……」

「仮にもロズベルト先輩はお前のルームメイトだろ……。薄情だな」
彼女はラクダの上から、視線だけフレイに向けて軽蔑の口上を述べる。

しかしフレイは何て事なさそうに、

「あいつは大丈夫だろ。俺はいまだかつて、あんなに凶太い奴を見た事が無いぞ」

「……先輩が？」

スノーの印象とはかけ離れた、“凶太い”と言う言葉は、彼女の表情を驚きに変えた。

「ああ。……パツと見、つつけば倒れそうな顔してるけどな。ああ見えて凶太いぞ。……多分考えるのもめんどくさいんだろうな。基本ローテンションだし」

「……………」

ジェイルは少し、眉間のしわを緩めた。
フレイはそう言う所を見逃さない。

「なんだ……。この話になったらやけに食いつきいいな。……ま、まさかスノーに惚れてるのか？ ……や、やめとけあいつは……相手にされねえぞ……」

フレイは、まさかと焦って、わざとらしく顔の前に手を持って来て全力で振った。「あっちゃー、可哀想に！」と話を膨張させる。これはもうわざとの演出である。

ジェイルは頬をひくつかせて、再び彼を睨むと、そのウザたらしいフレイ相手に無駄と分かっているにも反論する。

「……違う！！ どうしてお前はそうくだらないんだ！！ ……ただ、少し……仲間の事はよくわかってるんだなと思っただけで……」
彼女はため息をつくと、どうにもこの男と会話をする事に疲れたのか、その先は言わなかった。
しかしフレイは彼女を覗き込むと、

「あれ……？ もしかして俺に惚れた？ 惚れちゃった？？」

俺は競争率高いぞ、と。

ジェイルは、このしつこくテンションの高い勘違い男に、イライラを募らせていた。

「……その口を縫ってやろうか。私の前で一生、そのつまらない冗談を言えなくしてやる」

「おー恐！！ 恐いなールネ・サファイア。他の男にもそんな風な

のか？」

フレイのチャラチャラした態度は、彼女にはどうも良くないようだ。というよりむしろ最悪。

穏やかなキャラバンの道を、商隊の歩みに任せたまま進む。

自分たちでは何もしようがない中で、フレイは彼女にちよっかいを出す以外に、気を紛らせる事を知らなかった。

その時、前の方に居たタハールが振り返って、

「お兄ちゃん！！ お姉ちゃん！！ 都が見えてるよ！！！！」

小さな手の指差す方を、いつの間にかやって来た丘の下の営みを見下ろした。

「……………」

今まで砂漠ばかり見て来たから、言葉に詰まった。

こんな、生命を感じない砂の王国の中で、彼らはたくましく生きていく。

土の家を造り、灌漑農業を行い、川の氾濫と、太陽の周期を見極めて。

彼らは今でも、世界に誇る文明を発達させたのだ。

再び栄華を取り戻したばかりの生き生きした都、メンフィスであった。

一方、テル・エル・アマルナという、短い栄華を誇った、忘れかけられた古都がある。
いまや重々しい空気と、かつての大きな革命の因果から、その呪いをじかに受けた都市だった。

スノーは冷たい石造りの牢屋で目を覚ました。

「……………」

彼は一時、自分の置かれている状況を理解出来なかったが、記憶のはしばしから自分が捕まってしまった事だけは分かった。
ため息をつく。

「……………」

軽くあたりを見渡して、再びため息。

ごろんと横になって、静寂の冷たさを身に浴びる。

「……………何て事無い。……………快適なものじゃないか」

ここは静かで、何より動かなくていいのだ。

砂漠の暑い中を動き回るより、涼しい静かな場所で好きなだけなら
だら出来るとは。

敵も親切なものだな。

彼はそのまま、自分の置かれている状況すら、何ら気にせず、再び
眠りについた。

「……………おい!! 起きろ!!……………おい!!!!」

乱暴に呼ばれる声で目を覚ました。うつろな瞳をこすって、不機嫌
そうな表情だ。

スノーは牢屋の格子から覗く、彫りの深い男の顔を見た。

「ネフェルティティ様がお呼びだ!!……………さあ、出る!!!!」

「……………?」

スノーはその男に、乱暴に牢屋から引つ張りだされると、手に縄をかけられそのまま連れて行かれた。特に抵抗も見せず、いまだに眠気が取れない様で、うつらうつらとしている。

「全く、のんきなものだな。……今からお前は確実に殺されると言うのに」

手に槍を持った看守が、わざとらしくニヤニヤ笑う。しかしスノーはあくびを返すだけだった。そしてスツと、温かみを感じない視線を向けると、

「……………ていうか、あんた誰」

「……………」

相変わらずのマイペースっぷりである。

立派な宮殿にしては、味気ないというか、暗いというか。全体的に空気が暗いのだ。

縄に繋がれたまま、長い長い回廊を歩いて、いつしか広間に通された。それはとても広々とした。

ゆらゆら、まっすぐに並んだ火の器。

影を落とす数人の男達。多分お偉い様方の視線を浴びている。

オレンジに照らされる広間の中で、スノーは呆然と立ち尽くしていた。

目の前の、人のいない玉座を超えた壁に、大きく描かれている、クラゲのようなイソギンチャクのような図。

膨大なヒエログリフ。

どこかで見た事がある気がする。

普通に授業とかで。

でも、いったいなんだったか思い出せないのだ。

「!!!!」

不意に、頭を掴まれて跪かされた。看守の男がスノーの頭を強引に床へ押し付けたのだ。

「ネフェルティティ様の前で、何たる無礼な!!!」

スノーは壁画に気を取られて、先ほどまで誰もいなかった玉座に、いつの間にか座っていた女性に気がつかなかったのだ。

看守の力に反発して、少しだけ顔を上げた。そいつの顔を見てやるために。

ネフェルティティと言う名前はよく知っていた。

「……………そなたは未来から来た異邦人。“ラーの使徒”に間違いは無かるう。……妾はその風貌を、よく覚えておるからのお……………」

妙齡の女性の声。

威厳に満ちた、よく響く声だ。

頭に長い金飾りの帽子をかぶった、敵ながらに美しい女性だ。

首筋のスツと長い、女性らしいしなやかさは、やはり歴史に名を残すだけはあると。

この女性こそ、後に残る胸像で有名な、アクエンアテンの王妃ネフェルティティ。

「……………」

スノーは彼女をじっと見た。感情の読めない瞳で。

「……………憎きラーの使徒が再び現れるとは思っても見なかった……………十年前の恨みは、今でもこの胸の底で煮えたぎっておるわ。……………お前達は私の……………私たちの理想を打ち砕いたのだ。おかげであの方は“理想”を叶える事無く死んでしまった……………」

「……………？」

ネフェルティティという女性は、玉座から立ち上がると、ゆっくりスノーに近づいた。

手に持つ王錫の、床を打つ音が大きくなる。

彼女は眉間にしわを寄せ、先ほどまでの穏やかな口調とは裏腹に、スノーを見下ろす眼差しは鋭く恐ろしかった。

「おかげで妾は呪いを受けた……。崇めるアテン神は封じられ、この地に残され……。我々の成すべくして成してきたあらゆる改革が無に帰して行くのを見ていた……。それもこれも、貴様らラーの使徒が来たからだ……」

女王は王錫の先でスノーの顔を上げた。

彼女の憎しみは、全身に鳥肌が立つほど凄まじく、禍々しい。

「……………」

「妾は知っている……。お前達が隠した黄金のマスクが、この呪いを解く唯一の手段だという事を……。十年前、お前達が隠した、黄金のマスクだ……」

彼女はまるで、魔女のような恐ろしい顔をしていた。

あの美しい、古代エジプト芸術品の最高峰と言われている、ネフェルティティの胸像のモデルとなった人物だと言うのに。
スノーは息を飲んだ。

「……………命が惜しくば言うがよい。……………黄金のマスクはどこにある

……………」

「……………?」

スノーは相変わらず何も言わずにいた。と言うよりも、話が全く見えてこないのだ。

だんまりのスノーに、前女王は眉をぴくりと震わせて、手に持つ王錫に、いつそう力を込める。王錫の先についた丸い飾りで、思い切り彼の頬をぶつたのだ。それは見事に、痛々しい音をたてて。

「……………気に入らぬのお……………その何を考えているのか分からない瞳が……………。十年前のラーの使徒は、もう少し威勢が良かったと思うが……………」

彼女は体勢を崩したスノーを相変わらず冷たい視線で見下ろしながら、カン！と王錫を地面に打ち立てた。

スノーは一時顔を下げていたが、ゆっくりと、視線だけを彼女に向ける。

「……………美しき者来る……………」

スノーは初めて、ネフェルティティの前で口を開いた。

彼女はその言葉に、ぴくりと反応する。

「……………ネフェルティティって……………そういう意味だったよね。授業でああなたのレポートを書いた事があるから、よく覚えてる。……………あなたの胸像を見た時、ぴったりな名前だって思ったんだよ……………。きつと、いつまでだって、あの胸像は愛され、傑作だって言われ続けるよ……………」

芸術品に衰退は無い。

時が経てば経つ程、傑作はより威光を放つ。

「……………あなたは美しいって……………」

スノーは、彼女が気に入らないと言った瞳で、その人を見つめていた。

まるで、心の中を暴かれそうな、美しい茶色の瞳で。

淡々とした視線は、この状況の恐れ以上に、雪のようなしんとした冷たさを感じる。
落胆の悲しみを。

王妃ネフェルティティの胸像。

美術に通じる者なら一度は見てみたいと思うだろう。

以前、イギリスの研修に行った時、美術館で目にした。

写実性を重んじたアマルナ美術の最高傑作。片目を失った沈黙の胸像。不完全故の芸術。

美しき者来ると、そのような名で呼ばれるほどの美貌は、その美術品に語られるように現代ですら名高いと言つのに。

初めて見た時、心震わせるほどの傑作に、あなたは名を残していると言つのに。

「……………そのような目で見るな……………」

ネフェルティティは、少なからず感じ取っていたのだろう。スノーが向ける、視線の意味を。

憎しみや恨みなんかより、よっぽど心に刺さる、落胆と呆れ。期待はずれと言うようなとんでもない喪失感を。

その、無の眼差しを。

「見るな!!!」

女王は身を震わせ、再び王錫の先で彼をぶった。耐えられなかったのだ。その眼差しに。

十年前もそうだった。

“こいつら”は、私を知っている。そして、とても悲しそうな、残念そうな、そんな顔をする。

だから憎いのだ。

全てを否定されているような気がする。

私と“あの方”が行ってきた全てが、間違っていたと。

「……………でも……………この治世に苦しんできた人には悪いけど……………僕は一つだけあなたを尊敬している……………」

スノーは急に口を開いた。
殴られたって、相変わらず淡々とした口調で。まるで痛みなど無い
かのように。

「……………短い繁栄だったからアマルナ美術とは、より貴重で尊く
て、美しい物となった。皮肉にも、美術品とはそういう物だからね
……………。時代が残酷であればこそ、その価値は高くなる……………。それを
作り出してくれた事は、正しかったと思ってるよ……………」

「……………」

ネフェルティティは、驚きと、言葉にならない感情に、一時何も言
えなかった。

しんと、広間が静まり返る時、呪いを受ける者の哀れな姿を知る。

玉座の後ろから、そつと覗く壁画。

あのクラゲみたいなきは、恐れ多くもアテン神。

太陽の光を意味した姿であった。太陽そのものを神格化した姿。

その光は手となっていて、全ての人々に慈愛を与えると。

いまや、呪いの対象になってしまった、悲しい神様。

I
d
r
a
w

42：エジプトプラン24〜宰相アイ〜

折り返しを迎えた物語

散らばったパズルのピースを集めるように、答えを導いていく

太陽の日差しの強い、午前中の事。
キクマサはいつものキオスクでうつらうつらしていた。

昨日はあまり眠れなかったのだ。
きつと今、団長が、ホルエムヘブさんやアンケセナーメンさんの計らいで、昨日顔を見た老人と言っのを確認しに行っている。

「俺がちゃんと、その男を見て、誰だか分からないと何も始まらないだろ」

「そ、それはそうだけど……」

団長の言葉に、シャルロ先輩はいささか心配そうだった。それもそのはず。

基本的に、高官達の中には我々ラーの使徒と言つのを警戒している者は沢山居るし、再び現れたのは厄災だと言つる者もいるらしい。偉い人ほど宴会にはもちろん出ないし、むしろ宴会こそ、我々の様子を伺うための当て馬とも言える。

きつと、ファラオもなかなか意見しづらい様な高官が集まる議会。それが今朝行われるらしい。

団長はこっそり広間を見るといつ。

「大した事ないさ。俺は影から確認するだけなんだから」

団長はいつものように偉そうに腕を組む。

キクマサも、まあそんなに難しい事じゃないかなと思っていたが、シャルロ先輩だけは相変わらず気難しそうな表情だった。

キオスクでうつらうつらしていたら、急に視界が真っ暗になった。目隠しをされて、ドキッとしたせいで目が覚めた。

「もう……先輩……」

「あら、そんなに驚かなくなったわね。……残念だわ」

パツと視界が明るくなった。

急に手を離されると、目がシパシパする。シャルロはキオスクの柱を手でなぞって、つまらなそうにキクマサの側にやってきた。

「眠そうね、キクマサ君」

「あ、……はい。昨日あんまり眠れなかったんで」

「……あいつが心配？」

シャルロはキクマサの向かい側のベンチに座ると、足を組んだ。

「心配ってどうか……俺はむしろ、シャルロ先輩が団長を心配しているように見えましたけどね……」

「……私が？ 何であんな俺様至上主義の奴を！」

彼女は、まさか！と言うように苦笑いで手を振った。

キクマサは眉根を寄せると、

「だって昨日、団長が確認しに行くって言ったたら、先輩少し戸惑ってたじゃないですか。俺はあれが凄く気になっていたんです」

「……………」

いつになくハキハキした口調で、シャルロを驚かせた。彼女は少し

視線を逸らすと、

「……………何て言うのかしら……………。例えば、銃って強いじゃない。人間なんかすぐに殺せるでしょう?」

「……………?」

「でも、一つの銃より、何も持っていない人間が何百人、何十人つて集まった方が強いよ。結局、女王や将軍が内密に援護していたって、私たちは圧倒的にアウェイなのよ」

キクマサは彼女の言葉にぼかんとしていた。

何を言っているのか分かりづらいと言うより、理解するにはキクマサは経験不足と言うのか。

彼女はそんなキクマサの表情にくすくす笑う。

「まあ、私は疑り深いよ。思い過ごしなら良いわ。……………ただ、考えるのは自由でしょう?」

「……………先輩は凄いですね」

「あはは。私は何もしていないわ。凄いのは団長の根拠のない自信よ。私はアレのようにはなれないわ」

キクマサは、なんだかんだ言っただけでシャルロは団長をちゃんと信頼しているんだなと思った。仲は悪くとも、仲間意識はあるのか。それともただの嫌味か。

どっちにしろ、団長が成果を上げてくれるのを待つしかなかった。

「絶対に、人に見つかってははいけませんよ」

若き將軍、ホルエムヘブはそう言った。

團長は一番隅の柱に身を隠しながら、こんな所しかなかったのかよと文句を言いたくなくなった。

大きな広間の玉座。

そこにはファラオ、ツタンカーメンが。その隣に女王アンケセナーメンが。

そして、ファラオの前には深々と頭を下げた家臣達がずらりと並んでいた。

「…………… どんだけ頭下げてんだよ。これじゃ顔を見るところじゃねーぞ……………」

團長はイライラしながら、舌打ちをした。

しかもあれだけの人数を、どこから確認したら良いんだか。

思っていたよりかなり面倒そうだ。

川の氾濫がどうか、太陽のなんたら、民の生活が云々など、様々な事が議題に上がる中、団長から見てもやはり、高官達の権限は強いなと思った。ファラオもやはり、古株の高官や神官達の意見は無視出来ないらしい。

「先代が我々に残した物は、王家を信じなくなった民と、混乱したままの国だけだ」

「最近では先代の墓を荒らす者も多い。先代の名を、墓から消し去ろうとするのだ」

「それだけ呪われていると言う事よ……。名が無ければ、魂は復活する事は無い」

話題はやはり、荒れた国政についてと、先代の残した傷跡について。死んだ後の方が大切だと考えられていた古代エジプトの思想さながら、アクエンアテンが死去した後も、民は彼を許す事無く、あらゆる遺跡や墓から彼の名を消した。

名前が無くては蘇る事は無いと言うのだ。

「ときにファラオ、例の“ラーの使徒”はどうしておられるか？」

その時、とても落ち着いていた、柔らかい老人の声があった。

「……………アイ……………」

ファラオは玉座で、彼の唐突な質問に戸惑っていた。老人は背が低く、金の杖をついている。彼は宰相アイ。アクエンアテンの時代からファラオに仕え、国を導いてきた者。今では間違いないく国を動かしてきた第一人者であった。

団長は顔をしかめた。こちらからは顔が見えず、後ろ姿しか見えな
いのだが、その背格好は見覚えがある。

アイは優しそうな口調から一変して、

「ラーの使徒は我々に幸運をもたらす者。十年前のラーの使徒の事は、私アイもよく覚えております。彼らのおかげで、この国は救われたのです。……しかし……先代の行いは神々の怒りをかい、とうとうこの国は呪われてしまいました。呪いの化身や、行き場を失った“バー”が、現世をさまよっております。しかも最近では、テル・エル・アマルナの残党共が、密かに動き始めているとか……。奴らは呪いを作った現況の分際で、逆に呪いを利用する術を身につけている様です。魂を愚弄する、許されざる行い……」

「それは重々に承知している。いったい何が言いたい……アイよ」

ファラオは眉根を潜めて、アイの長い話に対して質問をする。

「私めは前から言っております。テル・エル・アマルナの残党をこのまま野放しには出来ませんぞ。彼らは再びこの国を手に入れようとしているのです。生かしておけば、この荒れた時代に、ますます火種を撒く事になります。ここは一つ、ラーの使徒のお力をお借りするのが良いかと」

アイは深々と頭を下げつつ、言葉には勢いがあつた。
フアラオやアンケセナーメンは驚いて、急いで彼に反論を示す。

「何を言っておるのか！ 彼らは尊ぶべきラーの使徒なのだぞ！！」

「だからこそなのです！！ 彼らは伝承通り、この国の呪いを解く者達。きつとテル・エル・アマルナの残党をお裁きくださる」

「彼らを戦場に出せと言うのか！？」

今まで黙っていたアンケセナーメンも、これには口を挟まずに居られなかった。

宰相アイは当然と言うように、

「当然です。彼らは救世主と成るべくしてここに現れたのです。そうでないならば、いったいラーの使徒とは何なのですか、王妃よ」

「……………そ、それは……………」

厳かな広間で、威厳のある声がこだまする。団長も柱の影に身を潜め、息を飲んだ。

何だかとんでもない話をしている。

若きフアラオは一度小さく深呼吸をすると、ゆっくり拳を握って、

「……………テル・エル・アマルナにいるアメン神官団の残党は、確かに厄介だ。国を思うなら、討伐も他ならない……………。しかし、ラーの使徒をいっただいどうしろと……………」

「……………それは簡単な事です……………」

アイはファラオに向かって、相変わらず達者な口上で、再び口を開こうとした時だった。

急に広間の端の通路側が、ざわめき始めた。

跪いている者達も、何事かと顔を上げ、それに伴い団長はより柱の影に身を潜めた。

「……………何だ……………？」

ファラオやアンケセナーメンも顔を上げ、

「いったい何事だ」

ざわめきの大きくなる向かい泡の通路に向かって、疑問の声を投げかけた。

ざわめきの先頭には、集会に参加していなかったホルエムヘブが。

そして、旅人の様な格好をした老人。

何より団長が驚いたのは、その後ろに、同じヴィライアーであるフレイトとジェイルが居た事だった。

それは、大声を上げてしまいそうなほどに。

「……………」

広間は一瞬しんとした。

ファラオも王妃も、宰相アイも、その他の高官まで、皆が驚きの瞳で彼らを見ていた。

「……ホルエムヘブよ……、いったい何事なのだ。そこに居るもの達は……」

「ファラオ。このような時に申し訳ございません。……しかし、時は一刻を争うという事で。私も幼き頃の恩がある身。どうかお許しください。」

「……………?」

ファラオはその言葉に理解を示せなかった。

ホルエムヘブの言っている事がまるで理解出来なかったのだ。

宰相アイはとていぶかしげに、

「ホルエムヘブよ。そなたいったい何をしているか分かっているのか。この玉座の間に、そのような薄汚い民を入れるとは」

「……………ほお。お前も偉くなったものだ……」

そのとき、ホルエムヘブの後ろで顔を下げていた老人が顔を上げた。低い、それでも存在感のある声で、老人はまっすぐに宰相アイを見抜く。

「私の顔を忘れたか！この、太陽神ラーの最高神官であったカーロンを……！」

「!!!!!!!!!!」

老人がそう声を張って言い切った時の、宰相アイヤ、その他の高官の反応。

動揺を隠せないと言うより、あり得ない事に言葉が出ないと言った方が良いでしょう。

カーロンはファラオを見上げた。

「ファラオよ。このようなご無礼をお許してください。しかし事態は一刻を争う事なのです。どうかその慈悲深い心で、我々に力をお貸しください」

「い、一体何なのだ……。そなたは何者だと言うのか……」

「ファラオはきつと、私めを覚えてはいらっしやらないでしょう。

私はかつて、先代ファラオの改革によって都を追われた“太陽神ラー”の最高神官を務めていたものです。かつては太陽神アメン、太陽神ラーの二つの大きな神官団が王家を囲んでいたのです。しかし、改革によりアテン神の台頭著しく、我々アメンとラーの神官団は力を失ったのです。先代への反乱を企てた我々ラーの神官団は、先代亡き後はほぼ壊滅状態に陥り、力を失っておりまして。そこに居るアメン神の神官団共は、事が収まるまで行動を起こさず、おそれながら先代が亡くなってからはここぞとばかりに、幼かったファラオにすり寄ったのです」

カーロンは、言葉でない高官達や、ファラオに鋭い瞳を向け、そして再び頭を下げた。

「無礼をお許してください。このような事はすぎた事。我々として、今

となつてはどうしようもない事。時代の流れなのです。……しかし、ここからの話は、これからの国政に多いに関わりのある事」

カーロンは振り返り、フレイとジェイルをファラオの前に出した。二人は顔を見合わせ、何が何だか分からないと言った様子だった。

「この二人は、かつて国を救ったあの“ラーの使徒”と同じく、未
来から来た者達。しかし、本当はここにいる二人だけでなく、まだ
あと二人居たのです」

カーロンは、今までのキャラバン隊の長老であつた雰囲気から一変
して、威厳のある、まさしく最高神官の風格であつた。

「我々はここへ来る途中、テル・エル・アマルナの軍勢に襲われま
した。そのせいで、仲間の半分は犠牲となつた。ラーの使徒である
少年一人が奴らに捕えられ、もう一人が争いの中ナイル川に落とさ
れ流されてしまった。国を救うはずのラーの使徒を、我々は守れな
かつたのです」

拳を握りしめ、悔しさに歯を食いしばりながら、カーロンはかつて
の威厳ある声を張つた。

「ファラオよ、ラーの使徒の大いなる力を、私もあなたも、よく知
つているはずだ!! テル・エル・アマルナに捕えられた少年をど
うかお救いください。奴らは十年前の事から、ラーの使徒を深く恨
んでおります!!!」

カーロンは深々と地に頭をつけた。

柱に隠れていた団長も、とんでもない事態にあっけにとられるばかりであった。

フアラオは眼下のカーロンと、二人のラーの使徒を見つめ、押し寄せる事態に困惑している。

その中でただ一人、宰相アイだけは冷たい瞳で彼らを見下ろしていた。

その時、一瞬だけ、ぎらりと瞳が光つたのを、団長は偶然目にした。

「……………」

ごくりと唾を飲み込んで、こみ上げるしてやったりと言う感情に、口に弧を描くばかり。

そうか。見覚えがあるぜ。

あの、ロウソクの間隙からみた、野心に燃える老人の薄気味悪い顔。

なるほど。

お前が裏切り者だったのか。

I
d
r
a
w

宰相アィ。

43：エジプトプラン25〜再会〜

我々の再会が示すものは、

十年の時を経て始まる、新たな戦いの幕開け

「ジエイル……！！！！！！」

「シャル口先輩！！！！」

二人は中庭のキオスクを駆け抜け、抱き合った。久しぶりの再会の嬉しさに、心震わせながら。

「ああ、先輩！！ 私、ここ一週間ほど、生きた心地がしませんでした。良かったシャル口先輩が居てくれて……」

「ジェイル、あなたもこの世界に来ていたのね……」

泣きそうなジェイルの髪を撫でながら、シャルロは可愛い後輩を心配した。

「どうやってここへ来たの？　あなただけなの？」

「おい、シャルロ。目の前に俺が居るのにそれは無いだろ」

シャルロはその声に顔を上げた。

懐かしい声はよく知っている者で、同じ四年生の仲間ならなおさら。

「……フレイ!!」

「よお、元気そうだな」

シャルロはフレイを見つけると顔を明るくさせ、彼の肩をぽんぽん叩いた。

「フレイじゃない！　たった二週間会わないだけで、こんなにも懐かしいものかしら」

「ふっ……相変わらずだな。お前はどこに行ったって生きてそうだなもんな」

何だか二人は仲良さげで、お互い再会が嬉しいようだ。ジェイルはフレイを相変わらず睨んでいる。

今しがたこのフレイとジェイルは、シャルロ達の居る中庭に連れてこられたのだった。同じ、“ラーの使徒”として。

その時、たまたまその場から居なくなっていたキクマサが戻って来て、いつの間にもやらそこに居た二人に驚くやら焦るやらで。

「……………！！？ え……………何で！！？」

ジェイルとフレイも、キクマサを確認する。

「お……………ここに居たのはお前だけじゃねーんだ……………。そいつは？」

「何言ってるのよ。二年生のキクマサ君よ。ちなみに団長も居るわ。会ってないの？」

「ああ……………。そっか……………団長が居るのか……………変な事できないな……………」

フレイは顎に手をあて、ううぬと考え込む。

シャルロはしらけた瞳で彼から目を背けると、再びジェイルに目を向け、意外であると言つように彼女とフレイを交互に見た。

「でも、よくあんた達一緒に居られたわね……………最悪の組み合わせじゃない」

「一緒になんて居られません……………！！！！」

ジェイルはここぞとばかりに声を張り上げる。早くこの屈辱を言いたくて仕方が無かったと言つように。

シャルロもキクマサもぽかんとしまっている。

「こんな男とずっと一緒に居なくてはいけなかった私の苦勞が分かりますか！？ こんな、ちゃんぽらんな男と……………！！！！」

キクマサはジェイルのもの凄い怒りっぷりに、シャルロとは違う恐さを感じて、そそくさとシャルロの背中に隠れた。ジェイルからはもの凄い威嚇を感じる。なぜか自分にも。

シャルロはゆっくりフレイの方を向いて、小声で、

「ちょっと……もしかしてあんた、手え出したんじゃないでしょうね」

「まーさーかー。同意の元ならともかく、嫌がってるのにそんなー……」

「うわ……信用出来ない、なにその顔」

しらばっくれているフレイは、話をずらそうとキクマサに目を付け、気軽に絡んでくる。

「よお、新入り。シャルロ先輩に色々教えてもらったか？ そう、色々……」

「？……はあ……色々教えてもらいました」

「ほうほう。それはいい……」

バツシイイイイイイ！！！！

鈍いえぐるような張り手がフレイをキクマサから引き離した。キクマサは青ざめて、その吹っ飛んだフレイの行方を見守る。

しかしフレイも凄いというか、頬を抑えながらすぐに立ち上がり、

「良いパンチだったぜ……」

とか言ってる。なんてタフな人だ。

シャルロは腕を組んで彼の前にデンと立って、フレイを見おろしている。その目がとても怖い。

「キクマサ君にあんたの卑猥感を持ち込まないでくれる？ 彼はねえ、クールそうな見た目の割にイノセントという屬性なのよ。そこが可愛いのよ。いたいけな二年生をあんたサイドに引きずり込まれたらたまらないわ」

「何だと！？ 俺だってクールそうだとか言われますけど……」

「何言ってるのよ。あんたはそう見える、ただの変態よ」

なんか勝手にむちゃくちゃな事を言ってる気がする。キクマサはとりあえずそっと、キオスクのベンチに座る。あまり話した事の無い先輩を前に萎縮しているのかもしれないが、初めて団長がここに居てくれたらなと思った。

そのとき、少しだけジェイルと目が合ったので、ペこりと挨拶したが、きつく睨まれてそっぽ向かれたので、軽くシヨックを受けた。

「……そうだ。こんな話をしている暇はないぞ、シャルロ。実は、ここに来る途中、スノーが捕まってしまったんだ。テル・エル・アマルナの残党とかいうのに」

フレイはさっきまでのテンションと裏腹に、急に真面目な口調で報告する。

忘れていた訳ではない。ただ、あまりにも考えたくない事実だから。

「……………何ですって！！！！？」

シャル口は瞳を大きく開け、捕まってしまったスノーを思う。二人は非常に仲が良かったから。

「まずいぜ。あれから数日がたった。今すぐにも助け出さないと、あいつ殺されるかも……………」

「……………そんな……………まさか」

シャル口は驚きと、一抹の不安から視線を斜め下に降ろし、歯を食いしばっていた。

そのとき、フレイとジェイルを連れて来たホルエムへブが、割り込んで説明をする。

「それについては、ちょうど今ファラオと王妃が話し合っています。リュオン様もそこにいらっしやいます。……………しかし、私が考えても、捕まってしまったお仲間はまだ……………」

「やめてよ！！ そんなはず無いわ！！！！」

ホルエムへブは口をつぐんだ。

シャル口は強い口調で言いきると、キクマサの向かい側のベンチに座って、瞳を細めて何やら考え込んでいた。

キクマサはスノーを知っている。彼とシャル口先輩は、エジプトに来る前にも二人で居るのを見かけたほどだ。深い関係なら、心配な

のも当たり前か。

こんなに焦っているシャル口先輩を見たのは初めてだ。

「おい。忘れているぞ、ルネ・エメラルド。一年生のクレハ・ドルフォードもナイル川に突き落とされた。消息不明のはずだ」

ジエイルは厳しい瞳で、もう一人居なくなった、クレハについて言及した。

彼はいまだにどうなったのか分からない。

「……………クレハが……………？」

キクマサは、彼とは多少面識があるので、驚くべき事態に胸がザワザワかき立てられるのを感じた。

あんなに無邪気で騒がしい一年生が、そんな事になっているなんて自分がここに居たから、外の世界の恐ろしさを知らなかったんだ。もしかしたら、フォルテやレイ、ルナシーも、そんな危険な目にあっているかもしれないなんて。

「……………助けに行かなくちゃ……………」

「でも、どうやって……………。俺たちの力なんてたかが知れているぞ」
フレイはいやに冷静で、冷静と言うより現場にいた者として、考える時間が多かったというか。

キクマサは、先ほどから黙ってしまったホルエムへブに、

「ホルエムへブさん……………ファラオやアンケセナーメンさんに、二人

を助けてもらう事は出来ませんか？」

「……ご安心ください。ただいまナイル川の捜索隊が出ていますし、きつとお力をかしてくださるでしょう……。しかし、もし我々王宮軍が動けば、テル・エル・アマルナとの戦いは避けられないでしょう。あなた達も、戦場に立つ事になる。高官達は、ラーの使徒奪還という名目で、戦いを起こすつもりです」

「仲間を助けられるなら、裏の事情なんてどうでもいいわ」

シャル口は立ち上がり、前を見据える。

睨む視線の先はきつと、遙か彼方のテル・エル・アマルナ。

「助けに行きましょう……団長だってきつとそう言うわ」

「どつ言う事だ……！」

団長は、ファラオやアンケセナーメン、そしてカーロンと宰相アイの前で、大きく石台を叩いた。

「スノーを助けに行くのは無理だと言うのか！！ この一刻を争う時に！！！！」

「控えよ。ファラオの御前であるぞ」

「うるせえ！！ てめえは黙ってる！！！！」

宰相アイの言葉には、敏感に反発してしまう団長。それもそのはず、宰相アイが敵だという疑いが彼にはあったから。しかし、これをここで暴いてはいけない事も、団長には分かっていた。

「リュオン……そなたの気持ちも分かるが、テル・エル・アマルナの者が、ラーの使徒を生かしておくはずも無い。助けに行った所で無駄だ」

ファラオは心苦しそうに、彼とは視線を合わせずに語った。

「そんなの分からねえだろ！！ 俺は仲間を見殺しにはしねえぞ…… お前達が手を貸さないと言うのなら、俺たちだけで行ってやる！！！！」

「そんな事はさせません。あなた様はラーの使徒なのです。私たちを救ってもらわねば……」

アンケセナーメンは慌てて首を振った。このような事態予想もしていなかったと言うように、頭を抱えている。

「ここで俺たちを人形のように庇護していたって、何にも変わら
ないぞー!! お前達の国は救われない。呪いなんて解けるもんか!!
!.....行動を起こさない限り、何も得られはしないんだ!!!」

団長は声を上げ、ここに閉じこもったままの憤りを爆発させた。

そうだ。ファラオと王妃は、我々ラーの使徒を、いつか呪いを解い
てくれる都合の良いコウノトリのように思っている。失うのが恐い
と、箱庭に閉じ込めて、守っている。

しかしそれはエゴだ。

俺たちはそんな、特別な人間じゃない。ただのきっかけにすぎない
のだ。

「.....」

ファラオやアンケセナーメンは、痛い所をつかれたように、顔を伏
せていた。

そのとき、行方を見守っていたカーロンが、冷静さを失っていない
口調で、会話の隙を見つける。

「.....もしかしたら、捕えられたラーの使徒は、まだ殺されてい
ないかもしれません。むしろ、我々をおびき寄せる、人質として生
かしている可能性が高い.....。」

「.....それはどう言う事だ.....カーロン.....」

ファラオは顔を上げる。

「.....黄金のマスクの噂を、ファラオならば一度は聞いた事がある

でしょう……」

「……あ、ああ……。しかし、あれは伝説のマスクだ。……それを身につけ死の床に就いた者は、神として蘇ると言われている……」

その話題が出たとき、宰相アイの表情が変わったのを、団長は決して見逃さなかった。

「……そう。伝説と言われている産物です。……しかし、あれは実在するのです。テル・エル・アマルナの残党はそれを血眼になって探している……」

「……… いったい……… どう言う事だ……。お前は何か知っているんだ………」

ファラオは、カーロンの突然の話題に、息を飲んだ。

何だかただならぬ物の、怪しくも強大な力を感じる。

黄金のマスク。それは現代となつては、誰も知っているエジプトの遺産。

「これについては、まず、十年前の“ラーの使徒”について、語るなければならないでしょう。彼らが何をして、何を守り、何を残したのか」

カーロンは淡々と、静かな口調で語り始めた。

自らも、十年前の物語を思い返すように。

ゆらゆら、ロウソクの揺らめきと、皆の眼差しを浴びて、

やっと解け始めた、難しいパズルゲーム。

I
d
r
a
w

*drawコラム(三年生)

(三年生)

No.1

カイ・ヴォストン

*ルネ・ハウライト

*国籍アメリカ

特徴/黒髪短髪。バスケット選手のような体型。

性格/真面目で好青年。すでに国際鑑定士で、世間では“鑑定王子”と非常に人気。CMを五本持つていて、多忙なためなかなか学校に來れないことがある。しかし、ルネ・ヴィライアーの研修にはちゃんと來るように団長に脅されているので、遅れてでもやって來る体力があり、スポーツ万能。テレビ前での口達者。

絵画の特徴/全ての絵画の技法や、構成を知り尽くしているため、基礎力、応用力、発想力共にバランスが良い。特にずば抜けた物の無い器用貧乏タイプ。彼は三年生からの専攻選択で、芸術文化を選んだため、絵画だけを描く事はあまり無いだろう。やはり優れているのは、他人の作品を見る目である。

> 同学年から見た鑑定王子<

ジェイル

「……………カイはいい人。」

ついでに団長

「不登校！不登校！不登校！不登校！不登校！……」

『……………哀れ……』（五年生・S）

ついでに寮長

「まあね。彼は俺らとは違うからね……。お仕事忙しいんだから多めに見よう……？ね？……団長」

「お前がそんなユルユル寮長だから……！（以下省略）」

No.2

ジェイル・クオーシャン

*ルネ・サファイア

*スイス人

特徴／深い紺色のセミロングの髪。カチューシャをつけている。ク

ールビューティー。

性格／有名なほどに男嫌いで、半径1メートルに男がいるのを許さない。なかなか笑顔をくださらず、常に表情は険しい。特にフレイは最強に嫌いなタイプ。クールな割りに、乙女な面もある。同じ学年のカイには心許しているようだが、理由は謎。

絵画の特徴／ポップな色合いの現代絵画。蛍光色をワンポイントに取り入れた絵画構成は斬新で、女性らしい表現として高い評価を受けている。切り絵や貼り絵も得意とする。

> 同学年からみたジェルさんく

カイ

「…………いや…………、クールっていうか、人見知りか激しいのかと。」

ついでにシャルロ様

「…………いわゆるツンデレ。ほとんどツンの、たまにデレ!!」

ついでにルナちゃん

「ジェル先輩かつこいい!」 (後輩からは憧れの視線)

おまけにフレイ

「…………そんなに俺が嫌い…………?」 (なぜか嬉しそう)

〽三年生まとめ〽

四年生が輝かしい時代を築いた分、特に光るものが無いと言われた、トップ層の少ない学年。

その中でカイとジェイルが唯一ずば抜けて素晴らしいと評価された。もう一人、飛び抜けた人材がいるのだが、今の所ルネ・コンに参加していない。

カイが国際鑑定士でほとんど居ないため、カイとジェイルの二人で行動することはほとんど無いが、仲が悪いわけではなく、むしろ親密。男嫌いのジェイルだが、カイには気を許しているようだ。しかし、その事を知るものは数少ない。二人とも人気があり、カリスマ性に富んでいる特殊な人材。だが、問題の多い二人でもある。あまりとか、そういう次元に無い学年。

>おまけ<

「三年生二人の、人には言えない悩み」

*カイ

有名すぎるだけに、アンチも存在し、影で「ウニ」と呼ばれていること。

最近ゲスト出演した健康番組で、寿命が42歳とか、リアル診断されたこと。しかも死因は過労死。

*ジエイル

最近行ったエジプトで、某チャラ男に絡まれた事。許すまじ悲劇。

最近行ったエジプトで、某チャラ男を亡きものにしようと試みたが、あっさり失敗して、むしろ鼻で笑われた事。耐え難い悲劇。

次回のコラムは「一年生」です。

d
r
a
w

* drawコラム 一年生 *

〈一年生講座〉

No.1

ヘルクロウ・ラヴィーニ

* ルネ・アクアマリン

* イタリア人

特徴 / 白いふわふわした髪に、黒のベレー帽。お坊ちゃんな風貌。性格 / いつも自信なさげで、怖がり。美術界では名門中の名門であるラヴィーニ家というのが、ある意味でのコンプレックスになっている。ルームメイトのクレハは、自分の事をラヴィーニ家無しで見てくれた初めての友達。

自分と正反対の彼に魅力を感じている。歓迎会の時に自分を助けてくれたキクマサを尊敬し、密かに憧れている。強い男になりたいという願望が強い。リース先生は父親の末の弟。いわゆる叔父である。絵画の特徴 / 名門ラヴィーニの才能を色濃く受け継いでいて、ラヴィーニ家の奥義と言われる幻の画法を習得している。海の側で育ったため、海の絵を好んで描く。一年生のうちからヴィライアーになったのは、彼の實力である。

同級生から見たヘルちゃん

クレハ

「ヘルってさ、どうしてそんなにへタレなの（笑）」

ついでにリース先生

「暴露します！！こいつには許嫁がいます！！」

「……………！！？」（一同驚愕の事実の戦意喪失）

団長

「……………生まれたての子鹿。」

「……………」（否定できない自分がいる皆）

No.2

クレハ・ドルフォード

*ルネ・コーラル

*ドイツ人

何を言っても聞こえていないようだった。……俺も、子供の言葉が理解できなかった。……俺は見たんだ、そうきつとあれは、伝説の生物、ドワーフに違いない！！ファンタスティック！！！！！！」

注：彼は人の話を聞きません

注：基本的に言ってる事が意味不明

くおまけく

「ヘルちゃんの、誰にも見せたくない日記」

月×日く曜日

『今日もまた、同級生に呼び出された。お前の席ねえから、と言われた。帽子を取られた。窓から投げられそうになった所を、クレハが飛び蹴りして助けてくれた。ついでに吹っ飛んだジャイアンに巻き込まれて、自分も吹っ飛んだ。クレハは凄いなあ、僕もあんなりたいなあ。だって、このままだったらティアラーゼに嫌われてしまふ。』

「クレハ坊やの、誰も理解できない日記」

月×日～曜日

『チヨツコレイト～、チヨツコレイト～、チヨコレイト～は？

×@:~//* (*・-^)- その日はこんな感じ。』

この先、一ヶ月は日記空白。

次回のセミナーは、彫刻科ルネ・ヴィライアーのメンバーです。

I
d
r
a
w

44：エジプトプラン26〜アクエンアテン〜

老人の記憶の残像は

どうしたって虚しい絵ばかり

崩落したオアシスの片隅で、タハールはただ悔しさに身を任せ、オレンジに揺らめく大地を拳で殴った。
何度も何度も。

いつかこんな事になるのではないかという、嫌な胸騒ぎは昔からあったのに。

「……………」

彼はいつまでもここで座り込んでいる訳にはいかなかった。
悔しさと、抑えきれない憎悪は、実感が無いほどに激しく沸き立っているのに。

タートルは立ち上がり、向かう場所はもう分かっていると云うように、重い足取りでゆっくり歩き始めた。と、そのとき、偶然目の端に映る輝きに足を止めた。いや、それは偶然なんかじゃなかったのかもしれない。

「……………これは……………」

彼は小さく輝くその“ブローチ”を拾い上げた。黄色の、月のような宝石が、怪しい煌めきを宿している、そのブローチ。たしか、あの少女がつけていた物だ。

「……………」

トパーズの輝きは、彼に逃げる事を許さないと云うように、怪しい輝きはまるで呪いのよう。

偶然目の端に入った訳じゃない。

この宝石が、そうさせたんだ。

「ご無事でしたか!! 長よ!!!」

「……………タハールか……………」

オアシスの大地の下に、隠れた空間があった。神官団の生き残りは、ここで戦火がおさまるのを息を潜めて待っていた訳だ。

タハールは足を引きずりながら、まずそこに向かい、ラーの神官団の長である“カーロン”の無事を確認した。

「こんなに早く、ここが見つかるとは思わなかったな。アテン神官団の力が、それほどに強大化しているということか…」

「長よ。敵は“黄金のマスク”を欲しております。長……………あなたはそれがどこにあるのか、ご存知なのですか!？」

「……………」

タハールは、長の前に向き合うや否や、本題である“黄金のマスク”の名を出した。

彼だって、まともにその産物について知らない。伝説の中にしか存在しないマスクだと思って、気にもしていなかった。

カーロンは一瞬言葉に詰まって、妙な顔をする。

「……………アテン神官が、その名を出したのか……………」

「はい。……………アテン神官と思われる男が、あの二人をさらって……………」

取引だと。黄金のマスクを渡せと言ってきました」

「……………あの二人？」

カーロンはピクツと、眉根を潜めた。

「ええ。あの異邦人です。肌の白い、少年と少女の……………。私の家に置いていたのですから、長も噂くらいは聞いているのではないですか？」

「……………」

タハールは多少早口で、事のあらましを説明した。フォルテとルナシーが急に現れた事。二人をかくまっていた事。その二人が、あの男にさらわれた事。

「黄金のマスクを渡せば、あの二人は解放されるのです！！ 長よ……………どうか、黄金のマスクの在処を教えてください！！」

「……………タハールよ……………貴様、何を言っているんだ……………。その異邦人が殺されようが、我々ラーの神官団にとって何の痛手もない。仮に、我々が黄金のマスクの在処を知っていても、助ける必要なんて無いじゃないか。」

長の隣に居た神官が、口を挟んできた。周りの神官達も、いかがわしい瞳で彼を見ている。

「……………それは……………」

「もしかしたら、その二人は王宮側の手下つてこともある。我々を

おびき出して、殲滅する気なんだ!!」

反論の声は高々に、タハールは口を紡ぐほか無かった。確かにそう
だ。

俺は、あの二人の事を何一つ知らないじゃないか。

「……………タハールよ……………」

突然、長が口を開いた。彼の瞳は強く、まっすぐにタハールを見て
いる。

暗い地下の、ほんの狭い空間の暗がりで、彼の声はよく響いた。

「黄金のマスクを奴らに渡すわけにはいかない……………。何があつたと
しても。ラーの神官団は、その秘密を守るために王宮から離れたの
だ」

「……………」

長の瞳は、この惨劇の後だと言うのに、ひどく落ち着いた物である。
この町を犠牲にしたって、守りたい物があると言う事か。

黄金のマスクとは、一体何だというのか。

歴史の偉大さを知る者は、けしてその波に抗ってはいけない。
遙かな時の渦の、そのゆりかごの中で、俺たちが刻む歴史はあまりにも少ない。

「……………うっわああっ……！！！！」

フォルテとルナシーは、手錠をかけられたまま、乱暴に馬から下ろされた。

「着いたぜ小僧……………王宮だ」

裏切り者の男が、ニヤニヤ嫌みな表情で、地面に座り込んでいる二人を見下ろす。

ここは、あのオアシスからだいぶ離れた、でも思っていたほど遠くはなかった場所で、このエジプトの王宮があるテル・エル・アマルナであった。

荘厳な佇まいと同じくらい漂う、陰気な空気。

「……………フォルテ……………」

ルナシーが心配そうな瞳で、力無く彼に問いかけた。

「……………私たち、どうなってしまっのかしら……………」

「ルナシー……心配するな。……きつとこれは、一種のゲームだ。鍵を見つけたら、あるいは……」

「……鍵……？」

ルナシーは、神妙な面持ちのフォルテに疑問を持ったが、何しろひどく疲れていたもので、訳の分からない事を考える余裕なんて無かった。

フォルテだけが、こんな状況下でも絶えずに考え続けていたのだ。

この物語に招待された、自分たちの意義を。

考えるんだ。

この時代の特徴、宗教観、治世……。 “アマルナ改革” の時代を示す鍵は、一体何なんだ。

数人の兵士と、あの黒髪の神官と共に、大きな門をくぐり、長い階段を上る。

神殿の中に入るのをこれほど憂鬱に思った事は無い。

「……おい……」

突然、彼らをここに連れてきた張本人とも言える、黒髪のアテン神官が、フォルテを見下ろし口を開いた。

「今からファラオにお目通りがかなうぞ。……お前達がいつたい何者なのか、それ次第でこの先の運命が決るだろう。せいぜい、下手な事は言わない事だな」

「……………」

フォルテは無言でその男を睨み、歯を食いしばった。長い回廊を抜け、薄暗い広間に、引きずられるように連れていかれた。手錠がキリキリ痛いのに、ヒンヤリとした空間の方が身にしみる。

フォルテは、その高見の人物を、一度深呼吸して見上げた。王座の前に辿り着くのは、彼の思考が繰り返されていた為か早く感じる。

「……………」

じっと、その歴史に名高いファラオを見上げた。

自分が今まで、文字の上でしか知り得なかったファラオが、今この目の前に居るのだ。

皮肉な事に、そのファラオは自分を殺す者になるかもしれないけれど。

「……………あ……………」

と、その時、フォルテは声を上げてしまった。ファラオの隣に居る女性に、もの凄く衝撃を受けたのだ。

そうだった。

そうだった。アクエンアテンの奥さんも有名人じゃないか。すっかり忘れていた。

今まさに殺されそうな状況なのに、さすがの考古学オタク。ふいうちの情報に、不覚にもときめきに似た感情が湧いてしまう。

ルナシーは驚きと不安でいっぱいの表情で、フォルテを見ている。

目の前に居るのは、歴史上最も“個性的”と言われたファラオ・アクエンアテン。

そして、クレオパトラに並ぶほど美しいと言われた王妃・ネフェルティティ。

「そこのお前……。何をそんなにじろじろ見ている。そんなに余の姿が珍しいか」

「……えっ……あ、いや……」

フォルテは指をさされ、しかも予想外の事を言われて少し不意打ちであった。

姿って……。

フォルテはその姿を、あまりにも意識していなかった。だって、とても“壁画”の彼の姿に似ていたから。受け入れてしまっていたのだ。その異形な姿を。

普通の人間にしては、締まったウエストと、ポツコリと出た下腹。

まさしく“アクエンアテン”であった。

「そなた……いったいどこから来た者だ」

「本人達はギリシャと申しております。しかし、どうやって来たのかは……」

「余はその小僧に聞いておるのだ」

アクエンアテンは黒髪の神官の言葉を遮ると、再びフォルテを見つめ、聞いただした。

「そなた達は、いったい何者なのだ。その服装、その姿は見覚えの無い物だ。なぜラーの神官団のもとに居た……」

「……………」

ファラオは一時の沈黙に目を細めた。

隣に居るネフェルティティは意味深な微笑みを絶やさない。その美しさが逆に恐いくらいに。

「答えよ……!!」

ファラオの声に、ルナシーは縮こまって怯えている。無理も無い。さすが、一国のファラオとだけあって、存在感とプレッシャーが半端無い。押しつぶされそうな声だ。

しかし、フォルテは沈黙の中顔を上げ、そのファラオを睨んだ。

もう、何もかもが分からなくなっていた。何をすべきとか、何をすべきとはいけないとか、どうだってよかった。

ファラオの質問だつてくだらない。答えなんかあるはず無い。

「……………アクエンアテン……………。アマルナ改革を行ったファラオ。アテ

ン信仰を唯一とし、他の神々を弾圧した」

フォルテは、焼き付いて離れない、あの崩落したオアシスを思い返していた。

悲鳴と、血と絶望。紙の上でははかれない真実。

「俺たちは、今からずっと先の未来から来た！！ だから、この先に何が起こるか知っている！！」

その先の言葉を止められなかった。

言うてはいけないと、心の奥で何かが止めるのも無視して。

「“アマルナ改革”はこの先十年もしたら終わる。民の反乱は止められないんだ！！ あんなに……あんなに殺しといて、終わりはない、つけなくやって来る。そのつけは、一気に王家が背負う事になるんだ、アクエンアテン！！！」

歴史を解き明かす事の罪を、神様が見ている気がする。

殺されるのは必然かもしれない。

でも、このやるせなさを、言葉にする以外見つからなかったんだ。

落胆と、絶望感。

本当は、今までの形式を変えようとしていたあなたに、憧れを感じていたんだ。

今までにない事を成し遂げようとする、その発想があなたにはあった。

本の中だけのあなたなら、一番好きなファラオだったのに。

「俺は……あなたが一番のファラオだと……思っていたよ……」

アクエンアテン。

I d r a w

45：エジプトプラン27〜フォルテの選択〜

時の神様が見ていたのは、俺の罪か

それとも俺自身か

「……………何だと……………」

一時の沈黙を破るかのように、アクエンアテンが口を開いた。そこに居た誰もが、フォルテの言葉に度肝を抜かれ、言葉が出なかつたから。

「きつ…貴様、何たる無礼な！！ その者を捕えよ！！！」

高官の一人が、やっと反応出来たくらいだ。フォルテはしまったと

思いながらも、心の奥でくすぶるやるせなさは、いまだに消えない。数人の兵士に取り押さえられ、地面に押しつけられた。

「やめよ!! その者を離すのだ!!」

しかし、アクエンアテンはフォルテを拘束する兵士達に命令し、その手を離させたのだ。

兵士や高官達は、戸惑いの表情である。

「小僧……おぬし、未来から来たと言ったな……。この先が分かる
と……」

「……………?」

アクエンアテンはニヤリと笑って、フォルテを見おろしている。

「それが本当なら、この先の未来だって変える事が出来ると言う事だ。お前が居れば。そうだろう?」

「……………!!?」

フォルテを見下ろした。この言葉にはフォルテも驚いたが、もっと驚いたのはその周りの官達。そして、王妃ネフェルティティである。

「ファラオ!!何を言っておられるのですか!!もしや、この異邦人達の言葉を信じると言うのですか?」

彼女はさっきまでの怪しい微笑みから一転して、驚きを隠せずにいる。

「なあに。こやつが嘘を言っているか本当の事を言っているか、全てはこいつの行動次第だ。信じている訳ではない。ただ、面白いと思わんかね？ネフェルティティよ……」

アクエンアテンの表情は、まるでわくわくした子供のような、しかしまた、悪知恵の働く大人の様でもあった。

フォルテはその表情を見て、心の奥で何かが繋がるのを感じる。

やはりこいつは、“アクエンアテン”であると。

「小僧……。お前があくまで“アマルナ改革”が滅ぶと言うのなら、滅ばないようにしてもらおうか。未来から来たのだから？ 余が見定めてやる……。お前が生き残る方法は、これしかない……」

「……………そんな……………」

そんなのありかよ。

ここで歴史を変えてしまつたら、後々の歴史にどう影響してくるかなんて分かったものじゃない。

アクエンアテンはその厚い唇で笑うと、今度はルナシーの方を見た。

「その女も未来から来た者か？ 美しい娘だ。まあ、ネフェルティティには劣るけどな」

「……………」

アクエンアテンの笑い声は、その空間によく響く。フォルテは手錠で繋がれた拳を握りしめ。

「彼女に手を出すな……」

「そう言う訳にもいかない。その娘は人質だ。お前が下手をうてば、その娘の命はない。全てはお前次第だ」

「!?!?……待て、それは……っ!!」

フォルテは前のめりになって、高見にいるアクエンアテンを見上げた。

それは駄目だ。そんなこと、俺に出来るはずがない。

「お前に選択肢はない。あるとすれば、ここで、二人して死ぬかだ」

アクエンアテンは、彼に口答えを許さなかった。

なんてファラオだ。歴代のファラオと一線を越えたその興味深さ。それが、この国を狂わせてしまったと言うのか。

ルナシーはもう、顔を上げてはいない。そんな気力すらないと言うほどに。

どうしたらいい。

俺は、どうしたらいいんだ。

「……………その娘を、牢に入れよ」

アクエンアテンの隣に居たネフェルティティが、彼女を見下すような視線を向け、静かに命令した。

しかし、フォルテはとっさに、ピンと来たのだ。

「やめろ!! 彼女を牢に入れたら、改革は滅ぶぞ!!」

「……………そう来たか」

フォルテはふらつく足で立ち上がり、ファラオと対峙する。
アクエンアテンも、薄ら笑いを浮かべ、彼の言葉の先を、興味津々で待っていた。

「アクエンアテン……………お前の娘に、アンケセナーメンと、甥にツタンカーメンが居るだろう……………。ルナシーをその二人の教育係につけるんだ……………」

「……………なんだって……………？」

アクエンアテンも、ネフェルティティも、そこに居た誰もが眉根を潜めた。当のルナシーは、驚きのあまり顔を上げたほどだ。不安そうな瞳でフォルテを見ている。

フォルテは、一度深呼吸をして、瞳に力を込めた。

「……………それが唯一の、王家が生き残る術だ！！！」

何の根拠もない、ただのとっさのひらめきを、俺は迷いなく口にした。混沌とした時代のただ中で、俺がやるうとしている事は、罪なのか。

時代を左右する恐ろしさの中で、ほんの少しだけ、興奮に似た喜びを感じている自分が居た。

自分自身が、それを否定しようとしていたけれど、心の奥のその感情は小さく火を灯し続ける事になる。

まさか、自分がこんな目に遭うなんて思っても見なかった。

足を、幅のある鎖でつながれ、走る事も出来ない。

唯一の救いは、牢に入れられなかった事だろう。

「入れ。ここがお前の部屋だ」

兵士に乱暴に入れられた部屋は、簡素なものだったが、きつと牢屋よりましだろう。

その兵士は、自分と年端の変わらない、少年兵のようだ。オアシスで私を捕えた、あの兵士。

ルナシーは暗い面持ちをどうする事も出来なかったが、静かに寝床に腰を下ろした。

部屋の前では、兵士が常に監視している。

「……………」

自分がどれほど疲れていたかを思い知る。足はまるで、石のように

固くて動かないし、腰は重い。ゆっくり寝床に横たわって、疲れに
涙しそうだった。体の痛みより、よっぽど心が疲れていたのだ。

足の鎖が、チャリ…と小さな音を立てる。沈黙の部屋では、その鎖
の音だけが全てだった。

フォルテ……とっさの判断で私を救ってくれた。

凄いと言う以前に、あの度胸に感服せざるをえない。

私が、もう何もかもを諦めた時でさえ、彼は絶えずに考え続けてい
たのだ。普通の人間が出来る事ではない。

彼はそのせいで、これからいったいどんな目に遭うのだろう。

「……………心配するな、ルナシー。……………俺の言う通りに動くんだ……………」

別れ際に、彼がそう呟いて、静かに笑った。

結局、全てを背負う事になったのは彼だ。それは間違いない。

「……………ごめんなさい……………フォルテ……………」

彼女は悔しさと、悲しさと、申し訳ない胸の痛みに、顔を手のひら
で覆って必死に涙を堪えていた。

ごめんなさい、フォルテ。

結局私は、何も出来ない。あなたの重荷になる事しか出来ない。

役に立たない。

ごめんなさい、レイ。

もし、彼に何かあったら、私はあなたに申し訳ない。

ふとよぎったレイの顔に、ルナシーはたまらず涙が溢れてきた。

身を震わせながら、でも、声は出さずに。

どうしてこんなことになったんだろう。なんでこんな所に居るんだろう。

私がここに呼ばれた意義は、一つだって無い気がするのに。

それでも私はここに居る。

この物語から、いつまでたっても逃げられない。

私は、ただの美術学生。

ルネ・ヴィライアーであったはずなのに。

「……………」

その時、ルナシーはある違和感に気がついた。

研修着の胸の当たりについているはずの、ヴィライアーの“ブローチ”の感覚がない。

ひやりと、全身を駆け巡る焦り。

おそるおそる、胸元に手をやるが、当然そこにはあるはずの印が無

かった訳だ。

「……………そんな……………どうしよう……………」

謎めかしい、あのトパーズの輝きが無いと言っただけで、私の心はぽっかり穴が空いたようだった。

いつもは、枷のように感じてしまう印なのに。

どこを探しても見つからないブローチは、いったいどこにいったのだろう。オアシスの戦乱の中で落としてきてしまったのだろうか。

彼女は、もう何もかもが嫌だった。

泣いたって何も変わらないのは分かっているけれど、こんな感情の時、他にどうすればいいって言うの。

何だか、どんどん悪い方向へ向かっている気がしてならない。

全てが、悪い方向へ向かっている気がしてならない。

I
d
r
a
w

46・エジプトプラン28〜運命の子供達〜

過酷な運命を約束された二人の子供

私たちは、その運命を知りながらも、それを変えてあげる事はできない

このエジプトに来て、一体何度朝を迎えただろう。もうそれすら分からない。

ルナシーが目を覚めたのは、早朝の涼しい時間帯だった。目が覚めた所で、現実は何も変わらないけれど。

部屋の外には相変わらず見張りが居る。今となつては、それはもう、どうでもいい事だったが。

「……起きたか……。疲れているんだつたら、もう少し寝ていればいいのに……」

そのとき、見張りの少年兵がルナシーに気がついて声をかけてきた。ぶっきらぼうな口調だったが、若々しい、敵意を感じない声であった。

「……いいえ。……もう一度寝るには、考える事が多すぎるわ……」

「……そうか」

彼はそれだけ言って、再び見張りに徹した。こんなに若い子でも、立派に働いているのね。

ルナシーはそれこそ、彼の顔つきや体つき、使命感というものから、若いのに一人前なのねと、素直に感心したものだ。

太陽がだいぶ高く現れ、空の青みが濃くなってきた午前中、ルナシーの所にフォルテがやってきた。フォルテは何人も兵士に囲まれ、自分と比べたらだいぶ警戒されているようだ。

「大丈夫かい、ルナシー」

「ええ。それより、あなたこそ大丈夫なの？」

ルナシーは彼の腕を掴んで、顔色をうかがった。

日頃はあんなに元気で、お調子者の彼が、今はこんなにピンとした空気を纏っている。気を緩めたらいけないんだと言うように。

「俺は大丈夫だ。それよりも、ルナシーにやってもらいたい事がある。昨日言った通り、ツタンカーメンとアンケセナーメンの事について」

「わ、私、どうしたらいいの？」

「大丈夫だ。安心して」

フォルテは不安な表情を隠しきれないルナシーの肩を掴んで、

「君はただ、アンケセナーメンとツタンカーメンに“花の王冠”の作り方を教えてあげるんだ。オアシスでやってたる？」

「……………なんですって？」

ルナシーは意味が分からず、ただ彼の言葉を待った。

「いいかい、ルナシー……………」

フォルテはルナシーの手を取って、周りの兵士に気がつかれないように小さく折り畳んだ紙切れを握らせた。

「大丈夫……君は俺の言った通りに動くだけでいいから」

彼はそう言つと彼女の手を一度強く握つて、気の抜けない表情はそのまま、兵士達に連れられて出て行つた。

緊張感が、常に彼を蝕んでいる様で、ルナシーは心が痛かつた。

そつと、見張りの隙を見て、彼女はフォルテに手渡された紙切れを開いた。

きつと彼も、急いでこのメッセージを書いたのだと思う。字が歪んでいる。

『ツタンカーメンとアンケセナーメンはいずれ結婚するけど、ツタンカーメンは今から十年後に殺される。それを、決して誰にも言わないように。花輪の作り方を、絶対“アンケセナーメン”には教える様に』

紙には、たったそれだけが書かれていた。

「……………？」

そんなに大切そうな事は書かれていないが、気になる内容ではある。彼は、「俺の言う通りに動いてくれ」と言っていた。私は何も知ら

ない身なのだから、ここは彼に従った方がいいだろう。

彼女はその紙を強く握りしめた。

ここでは、彼だけが頼りであり、唯一の温もりであった。

「出る……」

少年兵はぶっきらぼうに彼女を部屋から出し、どこに行くのかも言わずにいた。

「……私は、どこへ行くのかしら……？」

「どこって……王女の所だ。他にも王家の方がいらっしやるが、アラオはなぜかどうして、お前に好きなようにやらせると言う」

「……………」

薄暗い回廊を抜け、急に眩しい中庭に出た。重苦しい神殿とは違い、キラキラした太陽の光と、子供達の笑い声が飛び交う。幻想の中に居るように、今までとは打って変わった光の光景だった。

中庭で、その子供達は笑って、遊んでいた。

ため池に草の船を浮かべたり、実のなっている木に登ったり、それはとても微笑ましい。

そのとき、子供達の中で、一際上品で落ち着いた少女が、こちらに気がついたようだった。

「ホルエムへブ……っ！ お久しぶりね……」

「王女、お日柄もよく」

“ホルエムへブ”と呼ばれた少年兵は、今までぶっきらぼうだった表情を一転させ、優しい顔でその少女にあいさつした。

そうか……この少女がアンケセナーメン……

少女はルナシーをじっと見上げていた。彼女はとても不思議そうにルナシーをまじまじと見ていたが、頬を染め手を合わせる。

「この方だあれ？ まるで女神様だわー！」

「……………」

ルナシーは驚いた。私はどう見たって胡散臭いだろうに。

「今日から、王女様のお世話に当たる者です。……名を名乗れ。」

ホルエムへブは視線をルナシーに流す。

ルナシーは少し緊張したが、息を飲んで心を落ち着かせると、跪いて王女の視線の位置に合わせる。

「私はルナシーと言います。王女様」

優しく微笑んだ。

きつとそれは、誰もがうつとりするような、柔らかい木漏れ日のような微笑みだった。

王女はとても瞳を輝かせて、ルナシーの手を握る。その笑顔は無垢である。

「あなたみたいに綺麗な人が居るのね。こっちへ来てちょうだい、ルナシー」

「……えっ……あっ……」

ルナシーは彼女に手を引かれ、中庭の子供達の輪の中に連れて行かれた。

ホルエムへブはその様子をじっと見ている。

「ねえ、ルナシー。一緒にお花を摘みましょう。キオスクの円卓を、このお花でいっぱいにするの」

王女はあどけなさの残る大きな瞳で、あつて間もないルナシーに笑いかける。

恐れ多くもかわいらしいその小さな手で、常にルナシーを引っ張って、あつちへ行ったりこっちへ行ったりするので、ここ最近久しぶりに心が安らいだ。

「あ、こらっ…ツタンカーメン。その花はまだ咲いてないわ。摘んじゃダメよ」

王女は、いくつか年下に見える少年を見て、軽く叱っていた。叱られた少年はきょとんとしていたけれど。

「……………」

そうか、この子がツタンカーメン。

いずれ、誰もがその名を知る事になるファラオ。

王女の方が頭一つ分大きいから、兄弟のように見える。この二人がいずれ夫婦になるなんて、この子達はきつと知らないわね。

「ねえ…王女様。三人でお花の冠を作りませんか？」

「お花の冠？」

「ええ。作り方を知っていますか？」

ルナシーは先ほど摘んだ沢山の花から、冠に良さそうなものを手に取った。そして、その場にしゃがみ込んで、花の冠を編み始めた。

「……………王冠が出来るの？」

その様子を見ていたツタンカーメン少年も、興味津々にルナシーの手先を見ている。

王女はわくわくした様子で、スカートを折ってその場に座り込んだ。

「ええ。王冠が出来たら、王女にも、あなたにも差し上げます。良かったら後で作り方を教えましょう」

「本当ルナシー!？」

王女は手を合わせて、たまらず明るい声を上げた。
微笑ましいと言うか、子供は無邪気と言うか。昨日までの事が、まるで嘘のような穏やかさだ。

ルナシーは花の冠を編むのがとても早い。それでいて崩れず綺麗に作れるので、大したものだ。

「きつと、あなた方にはお似合いです」

ルナシーはそう言うと、編み上げたばかりの二つの花の冠を、そつと、この子供達にかぶせた。

小花で明るい色の冠を王女に。大きな花が目立つ王冠をツタンカーメンに。

二人はその冠を嬉しそうに見合つて、キオスクの周りを駆け回っていた。

「その冠は、花で出来ているので明日には枯れてしまいますよ……」

あまりにうれしがっているので、前もって言うっておこうと思った時、彼女はふとフォルテのメッセージを思い出した。

『ツタンカーメンは十年後に死ぬ』

今、あの子がいったい何歳だとしても、これから十年後が若い青年である事は間違いないだろう。

悲劇の少年王と、今の時代ですら煽り立てられる彼なのだから。

そして王女は、その妻なのだ。

「……………」

彼らのあどけない顔が、現実を知り得ない幼さが、無邪気な好奇心が胸を刺すかのようだ。

王冠が、一日しか持たない花の王冠が、まるで儚い彼らの運命を象徴している様で。

それは、変えようの無い未来。

47：エジプトプラン29〜ノイズ〜

俺はこの日、何よりも大切なものを得て

知り得ない何かを失った

「アメン神官団を解体するだって？ そんなのダメだ!!」

フォルテはアクエンアテンの前で、断固として意見を変えなかった。

「ほお。それは何でだ？」

「アメン神官団だけじゃない。他の神々への弾圧もやめるべきだ。ラーの神官団にしたような、あんな非道な事を続ければ、いづれ反乱が起こる」

「反乱がこの改革を滅ぼすと言うのか？」

アクエンアテンは半ば冗談を聞いているかのような反応だ。まともにフォルテの話の聞いているとは思えない。しかし、彼の発言に興味を持っているのも確かであった。

「…今でも十分にアメン神官団は弱っている。これ以上は必要ないと言っているだけだ」

フォルテは落ち着いた口調で、出来るだけ威勢よく言う。相手のプレッシャーに流されないように。

俺は、未来を変える気などさらさらしない。アメン神官団を滅ぼされてしまったら、この先の未来に関わる。

アマルナ改革が衰退した後、やはり台頭してくるのは“アメン神官団”であるはずだから。

ただ、俺はこの先の未来を変える“振り”をしなければならぬのだ。

幸い、アクエンアテンは思っていたほど残虐な奴ではない。好奇心旺盛で外道ではあるが、アマルナ改革なんて事をやってのけようとした人物なのだから、変わり者であるはずだ。

「ファラオ！この者の言いなりになってはいけません。我々の大いなる計画の遂行に、あの“アメン神官団”は邪魔なのです！！」

その時、隣で常にかがわしそうに俺を睨んでいた王妃ネフェルティティが、ついに口を出してきた。この人が問題である。

さすがは政治に大きく関与してきたと、名高い王妃だけはある。

「そうですね、ファラオ。いかんせん、この者が本当に未来から来たとも限りません。……もしやラーの神官団の間者かもしれませぬ」

王妃に続いて口を出してきたのは、宰相である“アイ”だ。

もし、しがらみや敵意無しで出会ったならば、サインをもらいたいほどの歴史的な重要人物ばかりである。

しかし、こいつらはどうにも俺に警戒心がある。無理も無いが。

「……まあ待て。別に、この改革をやめるとは言っていないんだ、この小僧は。我々には何の問題も無い。ラーの神官団に何の利益があると言うんだ。そもそも、あいつらはまだ生きているのか？」

「……ファラオ……」

ネフェルティティが小さく拳を握りしめているのが見えた。この人、本当に気が強いんだなと、思い描いていたイメージとぴったりで恐ろしい。

宰相アイはそれきり何にも言わなくなったが、冷めたその瞳がこれまた逆に恐ろしい。

それにしても、なんて手の汗握る状況なんだ。ここで“アマルナ改革”をやめてもらっても困るし、激しさを増して、あらゆる歴史的な神殿や、宗教的遺産を壊してもらっても困る。

歴史を、変えられてしまったら困る。

思いのほかにこのファラオは、俺の言う事に興味を示している。

と、そのとき、ふとある人物が思い浮かんできた。それは、アマルナ芸術に置いて、とても重要な人物。

「……そう言えば、彫刻師のトトメスはここに居るのか？」

「……！？……お前、トトメスを知っているのか？」

「そ、そりゃあ……歴史に残る彫刻科だから……」

トトメスとは、この時代の優れた彫刻家として有名な人物だ。フォールテはそつと、王妃“ネフェルティティ”の顔を見た。今から3500年後、俺たちの時代で最も有名なアマルナ芸術品は、あなたの胸像だから。

アクエンアテンはニヤリと笑うと、何だか誇らし気にしている。

「ほお。我々が見込んだ彫刻師に間違いは無かったと言う事か」

「……あの……もしよかったら、トトメスに会わせてもらえないか？」

フォールテはダメ元で聞いてみた。もし、ここで彼に会えたらえらい事だぞ。彼の芸術品の本来の姿を見る事が出来るかもしれない。

「……………トトメスに？」

アクエンアテンは顔をしかめて、不審そうにしている。無理も無い。宰相アイは意地悪そうな顔を歪めている。

「そのような事、お聞き入れになりますな、ファラオ。そもそも、囚われの身だと言うのに図々しいのです」

『……………おっと……………』

フォルテは、さすがにこれは無理かと、内心苦笑いであった。それにしても、宰相アイはイメージ以上に小うるさいじいさんだ。俺を警戒しているんだらうけれど。

アクエンアテンは、あご髭の飾りを撫でて、一時宙を見て考え込むと、

「……………まあ、良からう。トトメスに合わせるくらい何の問題も無いだろ」

「フアラオ!!」

その時、大声を上げたのは王妃ネフェルティティ。さすがのフアラオも一瞬ビクツとしていた。

「な、何だネフェルティティ……………。声がでかいぞ」

「ですから、この者の言う事など、信じられますな!!それも、たかが彫刻師に合わせろなどと、茶番もいい所です」

「……………」

彼女の憤慨っぷりは、恐ろしいと言うよりむしろ、「変わり者のフアラオの奥さんって大変だな…。」という印象を受けた。

アクエンアテンは高らかに笑って、

「なあに、心配するな。誰もが否定する我々のアマルナ芸術を、こやつは評価しておるのだ。見る目があるじゃないか」

「……………」

エジプトの歴史に置いて、アマルナ芸術の時代は、ほんの一瞬であったが異例なものであった。

それまでの芸術仕様は、様式化された表現思考の、しきたりに則つたものであったが、アマルナ芸術は違う。

どちらかと言うと写実的で、瞬間の動きを現したものが多い。

この時代に既に、現代に近い芸術を試みていたのだ。

『……………トトメスに会えるんだ……………』

それが、どんなに奇跡的で、価値のある事なのか、フォルテに分かる。

手と足を、幅のある鎖で繋がれて、彼は兵士に連れられて王宮の端にある工房に連れて行かれた。

願っても無いチャンスに、不謹慎にも胸が躍る。こんな状況だと言
うのに。

『……………困った奴だな……………俺もつくづく……………』

自分がこれほどどうしようもない奴だと思った事は無い。
好奇心を何よりも優先させてしまうのが自分だ。他の事が見えなく
なってしまうくらいに。

渡り廊下から、久々に太陽の日差しを浴びたように感じた。
穏やかな空気は王宮内とはまるで違う。

アクエンアテン。

あいつがやっていた事は許したくないが、思いの外に面白いフアラ
オだ。

いや、思っていた通りと言うべきか。

人間としては魅力的なのだが、王に向いている性格ではなかったと
言う事か。

「着いたぞ。入れ」

兵士の一人が、工房の前で振り返る。
いよいよだった。

『トトメスだトトメスだトトメスだあああああ！！！！』

フォルテは内心泣きそうなほどに感極まっていた。

トトメスは兵に軽く事情を説明され、一人勝手に浮かれ回っているフォルテを不思議そうに見ていた。

トトメスは優しそうな表情の、中年の男であった。

「……………この作品を見たいって……………？ 変わった子だなあ……………」

彼はそう言うと、フォルテを連れて、工房内を案内し始めた。

「私の作品をどこかで見たのかい？」

「……………はい。……………今からずっと先の未来で」

「……………？」

トトメスは振り返り、とても不思議そうに彼を見ていたが、

「はは……………。面白い事を言うな、君は」

「……………」

彼はきつと冗談だと思ったんだろう。

フォルテは少し緊張していた。ファラオや王妃にはあんなに威勢が良かったのに。

彼の作品は、主に王宮を飾ったり、アテン神殿の彫像などであったが、フォルテが期待していたのは、やはり名高い“ネフェルティエの胸像”である。

「……………あの、王妃の胸像ってありますか？」

フォルテがその名を口にした時、一瞬トトメスの表情が硬くなった気がした。

「……………？」

「……………きみ……………それをどこで聞いたんだい？」

彼は急に小声になって、入口で見張っている兵士をチラチラ気にしていた。

「だ、だから俺は未来から来たんですって。俺はあなたの像を、何度も博物館で見たんだ」

「……………」

フォルテは、彼の小声に習う。どう見ても様子がおかしかったから。トトメスは信じられないと言うように、一度息を飲んだ。

「……………こちらへおいで……………」

彼は隣の部屋にフォルテを促した。兵士が不審そうに見ていたが、トトメスは何て事なさそうに振る舞っていた。

隣の工房は、作りかけの作品があちこちに置かれていて、静かな鼓動を脈打ってるかのような存在感である。

トトメスは声が漏れないようにして、

「……………王妃の胸像の事は、私しか知らないはずだ。君はそれを知っているんだね」

「……………はい。俺はそれが見たくて……………」

フォルテの言葉を待たずに、トトメスは一番隅の麻布のかかった作品の前に向かっていた。フォルテは息を飲んで、体を強ばらせる。

「……………それが……………王妃の胸像ですか？」

「いかにも。人に見せるのは初めてだから、少し心配だけどね」

彼は小さく笑って、そっとその麻布を剥いだ。

ゆっくり現れたその胸像は、滑らかに布を滑らせて、

我々に何を問うのか。

「……………」

きつとそれは、今は見る事の出来ない両眼の王妃。つややかな色は、この瞬間に命を得る。瞳にはめ込まれた玉眼は、まっすぐにフォルテを見ていた。

“ネフェルティティの胸像”

美しきもの来たる

その瞳は、遙か砂漠を眺めている。

その首筋は、母なるナイルの……………

キーーーーー

「!!!!!!!!!!!!!!」

それは本当に突然襲いかかってきた。まるで、頭の中の大切な糸が切れたような鋭い痛みとともに、脳内を響き渡るノイズ。

中断された物語。

「っな……うわあああ!!!!!!」

フォルテは頭を抑えてその場にしゃがみ込んだ。何だこれは。こんなの初めてだ。いままで、こんな事は一度も無かったのに。

「ど、どうしたんだ!？」

トトメスは驚いて彼に駆け寄った。

フォルテは脳内に響き渡るノイズを、とても嫌だと思った。

黒い、テレビの砂嵐のようなイメージの中に、何か居る。

誰か居る。

脳裏に映るヴィジョンは、判断出来ないほどビビビしているのに、隙間から見える何百という色の螺旋。

彼は痛みを耐えながら、必死になって胸像を見上げた。

ちらちらした埃と、静かな光の狭間で、その像は沈黙を守っていたはずだった。

「……………！！？」

プチン。

その時、彼の中で一度切れた糸が、再び音を立てて繋がった。

「……………鍵だ……………」

何かが、やっと繋がった。

彼がそう呟いた時、ネフェルティティの胸像の左目、その玉眼が、まるで涙を零すように「コトン…」と落ち、跪く彼の元に転がってくる。

「……………」

きっと俺は今、

誰もが解き明かす事の出来ない、美術の心理を垣間見た。

I
d
r
a
w

48: エジプト平原に30〜強制終了〜

沈黙の左目は、

全てが終わるのを待っていた

フォルテの心臓の高鳴りは、自分の部屋に戻った後でもおさまらな
かった。

トトメスの工房で味わった、理解出来ない現象。

ネフェルティティの胸像の左目。

彼は、トトメスにもらったその左目をじっと見つめた。

現代では、あの左目が埋め込まれていない理由を、あらゆる学者が憶測していたけれど、誰がこんな事だって想像出来る？

「……………こんな学会に発表したって、誰も信じないよなあ……………」

自分だけが知っている歴史の謎。

昨日のノイズが教えてくれた。この左目は“鍵”であると。

理屈ではない。あれは一種のお告げに近い。

「帰れるかもしれない……………ルナシーに会いに行こう……………」

ルナシーは、アンケセナーメン王女と、ツタンカーメン少年に花輪の作り方を教えていた。

彼らは覚えが早く、一日であらゆる編み方を覚えてしまった。

「凄いですね。もう、どんなお花だって冠になるわ」

ルナシーが手を合わせて、素直に喜んでいた時、アンケセナーメンがふと彼女の足を繋ぐ鎖を見た。

「……………」

「……………どうかしましたか？」

「……………その鎖痛くない？ 私、お父様に言って取ってあげる」

「……………王女様……………」

アンケセナーメンは幼いながら、何だか険しい顔をしていた。そして、今作っただばかりの花冠をルナシーの頭にのせて、

「……………ルナシーってやっぱり、女神様みたいね」

彼女の顔をうつとり見ていた。

彼女はどこへ行くにもルナシーを連れて行き、側に居る事を望んだ。そんなアンケセナーメンにくっついてるのがツタンカーメン少年で、その光景は微笑ましかった。

王女様は優しい心を持っている。

花畑ではしゃぐ二人の子供を目の前に、ルナシーは瞳を細めながら、小さく手を握った。

王家の業を背負う事になるのが、どうしてあの子達なのだろうか。悪い事をした覚えも無く、ただ、流されるままに。

「……………」

「……………おい、ルナシー！！！」

その時、中庭の端から、ルナシーを呼ぶよく知った声だったので、彼女は呼ばれるがままに振り返った。

振り返った時にはこちらに走ってきているフォルテを見つける。

たった何日間か会わなかっただけなのに、懐かしい気さえする。

「フォルテ！！！」

彼女は慌てて立ち上がった。

フォルテは、やはり足や手を鎖で拘束されていたが、最初の頃に比べるとずいぶん自由が利くようになったようだ。

「ルナシー。調子はどうだい？……………花の王冠なんか乗せちゃってさ」

「ふふ。あなたがこれを教えろって言ったんじゃない。…それより、どうかしたの？」

「……………ああ……………」

フォルテは急に真剣な顔になると、ズボンのポケットから小さな麻

布に包まれた“何か”を取り出した。
それは、小さな布に包まれていると言つのに、見た瞬間に感じる禍々しさをルナシーは恐いとさえ思う。

いったい何が恐ろしいのかも分からないのに。

「……ファラオ。一刻も早く、あの者達を始末するべきです」

宰相アイは、相変わらず融通の効かなそうな顔で、ファラオに言い迫っていた。

「そもそも、あの者は身分もわきまえずに、言いたい放題。ファラオに対して、無礼にもほどがあります。それをお許しになるファラオもファラオです。きっとラーの神官団の刺客ですわ」

ネフェルティティは美しい顔を引きつらせて、溜め込んでいる不満を言わずにはいられなかった。

しかしファラオは、側に居る二人の助言には聞く耳持たず、

「そこまでの者を毛嫌いしなくてもいいだろう。私は面白い男だ

「思っているよ。さしずめ、“ラーの使徒”ってところだな」

「それならそれで、問題です！！我々はアテン神を崇拜しているのですよ！！！」

ネフェルティティは頭を抱え、宰相アイは黙っていた。

ファラオは「好きにやらせろ」と、相変わらず物好きで、宰相アイにはそれが不安でもあった。

「……………ラーの使徒……………か……………」

その時、彼の心に生まれたわずかな歪みが、この先の十年間、彼の中でくすぶり続けるとは。

この王家の悲劇に一枚噛んでいる老人の陰謀を、

今更誰にも止める事は出来ないのだ。

ルナシーはフォルテの手の内にあるその瞳を見て、息を飲んだ。圧倒的な威圧感を感じて、萎縮してしまう。

「そ、それは……何？」

「“鍵”さ。…ネフェルティティの胸像の左目が鍵だったんだ……」

「……………鍵？」

鍵、鍵と、今までにも同じフレーズを聞いてきたが、いまいちピンとこない。鍵と言うよりかは、不気味なオカルト品に見える。

瞳は造られた物だと言うのに、滑らかな玉の表面は生々しく、美しくも感じる。

「ああ。…これがあれば帰れる。……ルナシーは知らないかもしれないけど、“鍵”って言うのは……」

その時であった。

それは本当に突然で、風を切る音と、背後に迫る影に気づけなかったのが、より一層我々をどん底へと突き落とした。

生々しい肉を貫く音が、フォルテに言葉の先を言わせなかった。

「……………」

ルナシーが目にした物は、前方から勢いよくフォルテが倒れかかってきたのと、彼の、驚きを通り越したような瞳の色。

フォルテの背中から彼の横腹を貫通した槍は、血の流れよりも速く姿を現し、やがて赤い血で染まっていた。

それでも彼は歯を食いしばり、後ろを振り向いた。倒れてきた彼を支えながら座り込んだルナシーは、何が起こったか理解出来ずに、彼の視線を追った。

フォルテの背後には、ただ一人の見知らぬ兵士が立っている。

「……………強制終了だ。お前は知りすぎた」

フォルテにだけ、そう聞こえた。それは死人のような表情の兵士が口にしたのか、その向こうの誰かの言葉なのか分からなかったけれど。

ルナシーが叫んでいる。

兵士が取り押さえられている。

でも、この物語の何もかもがまるで夢であったかのように、彼の視界が揺らいでいった。どうせ死ぬんだったら、もっと思い切った行動に出れば良かったなど、今更後悔したって遅いのに。

痛みを超えて行く、現実との離別。

「フォルテ！！！」

ルナシーはいまだかつて無いくらい、心の奥がひやりとしていた。彼が背中から刺されて、倒れて、そして今はどうなっているの。

「フォルテ！！！！ 何で……っ！！！！」

何がどうなっているの。

嫌だ。嫌だ！！こんな所で一人にしないで。

あなたが死んだら、レイはどうするの！！ キクだってどれだけ悲しむか。

彼の血がルナシーの膝を染め、いつしか彼女の手を染めた。

「こんなのって無いわ。私たちが何をしたって言うのよ！！ 私たちはこんな事がしたくてルネ・ヴィルトンへ来た訳じゃない。ルネ・ヴィライアーを指していた訳じゃないわよ！！」

彼女の声はその場に居た全ての者を静まりかえらせた。もちろんその光景は、王女と、後のフォラオも見ていた。記憶に焼き付けられた。

動かない彼の手が膝を滑り落ちた。その時開いた彼の手のひらから、自らを主張したように姿を見せたのが玉眼。

彼女はその瞳を見つけた時、抑えきれずに目の端にたまる涙をこぼした。玉眼を拾って、一度握りしめた後、歯を食いしばってそれを

高々と掲げた。

「こんな物……こんな物、今となっては何の役にも立たないわ！！
！ 終わってしまった歴史のせいで、私たちの未来はめちゃくちゃ
にされたんだわ！！！ ファルテのバカ！！ 大バカよ！！！！ こ
んな物が、あなたの命に比べたらどれだけの価値があったって言う
のよ！！！！」

こんな物。

こんなただの石が。

彼女はその瞳を投げつけてやろうと思った。自分にもし、万物を壊
す力があれば、この瞳を砕いてやったのに。

そこに居る全ての人間が敵に見え、全ての人間が憎かった。

エジプトが憎かった。

“死”を意識した時、その瞳は脈打って、命を灯す。

「！！！！？」

急に光を放ち始めた、憎い瞳。

ルナシーは目映い光を全身に浴びて、彼女がそれを手放す暇を与え

ず、

彼らがここに居た事が全て幻であったかのように、二人は跡形もなく消えた。

「……………消えた……………」

言葉の出ない中庭で、そう呟いたのはアンケセナーメン王女。

彼女はこの光景を、きつと一生忘れる事は無い。

ぱさりと、半分崩れかけた花の王冠が大地に落ちた時、教えてくれた。

彼らはここに、確かに居たのだと。

その時、神様が押したのは、deleteのキーだったのか、enterのキーだったのか。

自分たちの役目は何だったのか。

意味があったのか。

I
d
r
a
w

49：エジプトプリンセス〜呪い〜

宝石の導きは

幸か不幸か

タハールが焼けただれたオアシスを後にしたのは、奇襲があった二日後であった。
彼は押し寄せるあらゆる葛藤の中、ついにやるべき事を見いだしたのだ。

彼はルナシーが落としたトパーズのブローチを握りしめていた。

「どんなに考えたって、答えなど見つからないのならば、答えを探しに行くのだ。あの二人が何者であったのか。黄金のマスクとは何

なのか」

彼は馬に乗って、荒れた大地を駆け抜け、砂に身を隠す。きつともう、ここには戻ってこないだろう。

「……………お元気で、長……………。私が息子であった罪をお許しください」

あの二人に出会ってしまった事が、私の運命であり、私の使命に繋がっているのだ。

そう思えてならない胸騒ぎを、決して裏切りたくないから。

どこへ行く当ても無く、ただ思いのままに馬を走らせた。何だか、懐に入れてあるあの黄色い宝石が、彼を導き、急かしているように。

暑い昼と、寒い夜を越え、ほとんど休まないで彼は向かっていた。その、どこか分からない場所へ。

いつしか、彼は朦朧とした意識の中で、トパーズの冷たい鼓動を感じ取っていた。

その石は、彼に何度も何度も責め立てる。

急げ、急げと。
休ませようともしないのだ。

「……………ここは……………」

オアシスを出て、月が三回顔を出した晩。タハールは、砂嵐を突っ切って、その寂れた神殿を見つけた。

灰色の風が、うなりを上げてまで守っている、廃墟と化した神殿。

よく見たら、そこら中に散らばっている、“何か”の像の手足。顔面の欠片。

もう、いったい何の神様の神殿であったのかも分からない。

タハールはもはや、ただ何かに動かされる人形であった。

自分でも分かる。この大いなる力の前では、抵抗は無意味。そして、それが運命であると。

彼は、何も見えない神殿の中に入った。

暗い、暗い神殿の中に。

外の砂嵐が嘘のように、中は物音一つしなかった。暗闇を歩く自分の足音と、ただ、導かれるままの足取り。

どだけ歩いたのか分からなかった。タハールはいつの間にか“そこ”に着いていたから。

「……………」

彼は意識せずに足を止めた。

「……………よく来たな。お前がここに来る事は、分かっていたよ」

「……………?」

暗闇の中、彼は声を聞いた。

ブワツと、小さな炎の揺らめきが、彼の瞳に色を灯す。

目の前に居た声の主は、一つの小さなたいまつを持って、彼が来るのを待っていた。

黒髪の、王宮の神官。あの二人をさらい、黄金のマスクを持ってくるように言った、あの敵の神官だった。

「……………お前……………」

「ふっ……………今のお前にはあの時のような威勢の良さは見られんな……………まるで生気が抜かれてしまったようだ」

黒髪の神官の持ったたいまつは、風もないのに、一度大きく揺らめい

た。

彼は瞳を細め、そのたいまつを掲げた。

「……………」

炎の先にある、その黄金に輝く物を、タハールは見つめた。暗闇に浮かぶ、伝説を。

疲れきっていた彼ですら、それが何か分かった時、一度瞳を大きくさせた。

「……………黄金のマスク……………」

「そうだ。貴様が今目に行っているのは紛れもない“黄金のマスク”。この神殿は、かつて“セト神”を祭っていた神殿だ。今では、あのアクエンアテンによって破壊され、ここに居たセト神官団も皆殺しにされた。外の砂嵐はその怨念である」

彼の言葉は、今までよりも重く、耳ではなく心に響いてくるような気がした。

目の前に居るその人物が、どうしても人に見えなかった。

「……………まさかお前は……………いえ……………あなたは……………“セト神”か……………?」

「……………」

黒髪の男は相変わらずのせせら笑いで、しかし瞳は笑っていないかった。

「“ラーの神官団”は、この砂嵐に守られた神殿に、黄金のマスク

を隠した。これがアクエンアテンに渡れば、このエジプトを築いた、ラーの太陽神、オシリス神、イシス神、ハトホル神、ホルス神……そして私……神々ですら、奴に消されかねないからな……。神とは絶対的な力を持っていたとしても、信仰無くしては存在し得ないものなのだ」

セト神はゆっくり瞳を閉じると、再び鋭く開いた。それは、黒い獣のように、恐ろしい眼差しだ。

タハールはそれでも、その場を離れようとはしなかった。

「……………お前の村は滅んだ。仲間も皆、死んでいったではないか。裏切り者も居た。……………もつとも、あの裏切り者は私が処分したが……。いい事を教えてやろう……………」

「今日、あの少年と少女は死んだよ」

ふわり。

また、風も吹いてないのに、たいまつが揺らめいた。何だか、先ほどより炎が大きくなっている気がする。

タハールはオアシスが崩落した時と同じ感情が、心の奥を蝕んでいくのに気がついていた。

セト神は、そんな彼の憎しみに、何度も息を吹きかけては、その炎を大きくしている。

「……………お前はちゃんと、ここに辿り着いた。七日間のうちに……………」
セト神はゆらゆら揺れるたいまつはその向こうに、先ほどまでは廃人のようであったのに、憎しみに燃える恐ろしいまでのタハールを見た。

「お前の望みを叶えてやろう」

「……………」

タハールは相変わらず、黒いオーラを纏って、憎しみに身を任せている。

「……………全てを奪った王家を呪う。アクエンアテンを呪い殺してやる。……………それが可能ならば、私の命などくれてやる!!!!」

彼がそう言葉を放った時、セト神はわずかに口を緩めたかと思うと、手に持っていたたいまつが、一層大きな火の柱となって、タハールを包んだ。

「ぎゃあああああああああ!!!!!!」

その悲鳴は全て、呪いの糧となり、憎しみは力となる。
炎はやがて黒い影となり、神殿いっぱい広がった。

「ふふ……はははははは！！！！　これでいい！！！！　お前自身
が呪いとなり、奴らを焼き尽くす憎しみの炎になるのだ。その
命を犠牲にした呪いは、王家を祟るであろう！！！！！！」

セト神は高笑いのをこしてその場から姿を消した。

呪いは神殿の天井を突き破り、空高くに昇って、そして流星のよう
に王宮に向かった。

タハールと言う人物は、邪悪な呪いとなってしまったのだ。

やけたタハールの体は、見る見るうちに白骨化して、それでも変わ
らず傷一つついていなかったのは、ルナシーのトパーズである。

空いた天井から覗く月はちょうど満月で、優しく怪しい月の光は、
まっすぐにトパーズを照らす。

キラキラ、誰も、何も知らずに、トパーズは秘密めいた力を宿して
いったに違いない。

それからこのトパーズの宝石は、時空を超え、“空白の十年間”を、
このエジプトで費やす事になる。

誰も知らない、静かな時の中で。

I
d
r
a
w

50：エジプトプランクとクレハと鳥と鳥

落ちていく感覚の中でさえ

きつと俺は楽しんでいた

ここはどこだろう。

水越しに揺れる太陽の光があんなに遠い。

クレハは勢いよく大河に落ちたので、全身をこそばゆい泡に包まれていた。早い流れに攫われて、一直線に水のもっと奥に吸い込まれているみたい。しかし、彼はそんな状況を楽しむかのように、意識をしっかりと持って上へ上へと足を動かした。

「ぶっは……!!」

彼が水面から顔を出した時、そこは既に穏やかな流れであった。気がついた時には、足が水底に着いてたし。

「ええええええ？」

彼は意味が分からないと言うように、疑問を口に出した。さっき、あんな高さでナイル川に落とされたと言うのに、元気なものだ。

クレハは、もう小川としか言いよの無い川を横切つて、とりあえず陸に上がる。

全身びしょびしょで、大地を踏みしめる度に、彼のブーツが音を出す。

しかし彼は、そんなのおかまい無しに、キョロキョロあたりを見渡してばかんとしていた。

「そりゃ無いよ！！ スノーつてば俺が不死身だとも思ってるんだ！！ おい、隠れてないで出てこいよ！！」

彼は急に大声で叫んで、まるで元気な様子で走り回っていた。しかしその開けた土地では、彼の声が一方通行に響くだけだった。

だって、崖自体が無いんだから、そこが先ほどの場所であるはずが無い。

クレハはそんな事おかまい無しに、その草がちよろつと生えた大地を駆け回って、皆を探していた。

と、その時、上空からの大きな影が大地に映つて、クレハは驚いて空を振り返る。

「鳥！……てかデツカ！！！」

クレハが瞳を大きくさせたのも無理は無い。太陽を中心に円を描いて飛ぶ大きな鳥が、雄々しい姿を讃えて飛んでいた。クレハは頬を輝かせて、嬉しそうに手を振る。

「おーい！！　ハゲワシ、　おーい！！！」

鳥はその声に従うように、その大きな翼を羽ばたかせ、砂を撒き上げるような風とともにクレハの前に舞い降りた。

クレハは顔に吹きかける砂を避けるように、きつく瞳を閉じたが、すぐにわくわくしたような顔をしている。

「すげー！！　このハゲワシでか過ぎだぜ、　俺の身長を軽く超えてやがるー！！」

クレハがそう言った時、この鳥は鋭い瞳をギョロツと彼に向けると、

「失礼な小僧だ。私はハゲワシではない。ハヤブサだ」

「……………」

何と、口をきいたから驚きだ。しかしクレハは一瞬固まったものの、先ほどより一層瞳を輝かせて。

「すっげー、すげーよ！！　このハゲワシしゃべるんだ！！」

「だから、ハヤブサだ」

「なあ、お前、俺仲間を捜してるんだけど知らない？」

「……………」

クレハの肝の大きさと、ずば抜けた適応能力に驚かされたのはむしろハヤブサの方だった。

偉大な姿のハヤブサは呆れた口調で、羽を一度振る。

「小僧。いったい自分がどういう状況に居るのか分かっているのか」

「そんなの、俺が知りたいよ。崖から落とされて、気がついたらこんな所に居た。ねえ、頼むから俺をスノー達の所に連れてってくれよ。ねえったら」

クレハはハヤブサの首もとの羽をワツシと掴んで揺さぶった。

「おいハゲタカ！！　それだけでかかったら、俺を乗せて飛んでくれよ！！」

彼はハヤブサの返事を待たずに、その背中に飛び乗ってまたがった。

「おい、ハゲワシからハゲタカに変わってるぞ！！そして、どっちでも無い。ハヤブサだ！！」

ハヤブサは広く大きな翼を広げ、クレハを乗せたまま空高く飛んだ。クレハもクレハで、それに全く動じる事なく満面の笑みで、風を切る事を楽しんでいた。

「おおおおおおお！！！！！！」

「楽しんでる場合じゃないぞ。お前は特別な役目があるのだから」
ハヤブサがそう言ったのも、クレハは全く聞いていない様子であった。浮かれてハイテンションで叫びまくっている。ハヤブサは半ば諦めた口調で、

「……………全く……………こんな子供が、ギリシアの聖なる血を分けたもつとは……………」

独り言を呟くように言った。

ハヤブサはどんどん高くまで飛んで行った。無限なる空の、その先へ先へと、彼を乗せて。

「おい！！ いったいどこまで飛んで行くんだよ！！！！」

「母なるナイルが細い木の枝となるまで。お前達のギリシアが見える所までさ」

低い雲ならば手が届く所までやってきたようだ。クレハはその雲を触るうとして、手を伸ばしてみた、掴めるものは結局空の細かい霧だけ。

やがてエジプトの大地は遙か下の見えるようになり、ナイル川は、枝の先に緑の大地という葉をつけた大きな樹のようだ。かれた大地の多い国だからこそ、たくましく見える。

クレハはナイルの流れに沿って見て、その先の海を見た。そして、さらに向こうのギリシアを見つける。

「あれがギリシアだ。分かるか？」

「言われなきや分かんないよ。そんなもん」

「……………彼の国の運命の子供とは思えないな。…………お前の祖母が聞いたら、泣いて悲しむぞ」

ハヤブサは高い空を飛びながら、ため息まじりだ。

しかしクレハは、その言葉に慌てて反応する。ハヤブサが話せると分かった時以上の驚きっぷりだ。

「お前、ばあちゃんを知ってんのか!？」

「もちろんさ。もつとも、最後に会ったのはお前が生まれる前だったけどな」

「嘘言うな!! バカブサ!! 俺がいくらアホでも、そんな嘘にだまされないぜ。スノーが、ここは大昔のエジプトだって言った。ばあちゃんが来れるはず無いんだ!!!」

クレハはハヤブサの首根つこの羽をぎゅっと掴んで、大声を張り上げた。それに驚いたのか、ハヤブサの飛行が若干乱れたのだが。

「……………何言ってるんだか。お前がここに居るんだ。お前のばあさんがここに来れたって、何らおかしくないだろ。そもそも、お前のばあさんは偉大な人物だったんだからなおさらだ……」

「……………」

クレハは相変わらずむすつとしていたが、それ以上は何も言わなかった。今までの明るさが嘘のように、複雑そうな顔をしている。

ハヤブサはそれでも雲を突っ切って飛んでいた。

「ギリシアの大地をよく見ておけ。いずれ、世界をいくつ巡るうとも、辿り着く場所だ」

クレハはゆつくりと顔を上げ、再び青い海の向こうにあるギリシアを見た。

キラキラしたブルーの宝石に守られた、尊いもののように感じる。胸の奥から沸き起こる、悠久の思いはいったい何だろう。

「ギリシアも、エジプトも……国が、宗教が違えば、それだけ神が存在する。しかし、神々の境界つてのは何なのだろうか……。そんなものあるならば、争いは起きないと言うのに」

「……でも人は神様を求めくせに、人と違う力を持った人を、まるで化け物のように扱うよね。それなら神様と化け物の違いは、一体何だっというんだろう……」

クレハは遠いギリシアの大地から瞳を逸らさず、苦しいほどに懐かしいと思う胸の内に、そつと問いただす。

ギリシアを見つめる瞳の奥は、海のブルーとは裏腹の、悲しい真っ赤な炎が覗く。彼の赤毛のような、その色。

ハヤブサは急に側の雲の上に降り立った。

それは科学的にあり得ない事なのだろうけど、でも雲の上に乗っていたのだ。

「背中から降りてみる。この雲の上は歩けるんだ」

クレハは言われるより早く、その白くて綿菓子みたいな雲の上に飛び降りた。幼い頃に誰もが夢見た、漫画のような世界。

しかしクレハは雲の上で転がって遊ぼうとした時、雲の上で輝く存在を見た。

さっきまでは雲に気を取られていたのに、それ以上に意識がそちらへ持って行かれてしまうほどの、輝かしい存在感。

「……………」

翠はまるで、気高いエメラルド。碧はまるで、純粹なるラピスラズリ。扇形に広がる豊かな尾の羽は、息を飲むほど美しく、美しすぎるとなぜか、悲しくなる。

雲の上に、穏やかに佇んでいたのは、

慈しむようにクレハを見つめていたのは、輝く一羽の孔雀であった。

“雲の巣”

エジプトの雲の上をお借りします。

太陽神よ、曆を創り、時代に時を刻みし大いなる砂の国よ。

海を越え、時空を超えやって来るその者が、いつか私に気がつくまで。

羽の先にあるアルゴスの瞳が、絶えずあなたを見つめ続ける。

／つづく

それは本当に短すぎるメッセージ。
孔雀の眼差しの、語る言葉。

クレハは一度瞬きしたと思ったら、いつの間にか再び真つ逆さまに落ちていた。

瞳にはいまだに、雲の上にはいた孔雀が映っているのに。

「そりゃ無いよー!! つづくって何だよー!!!!」

クレハは真つ逆さまに落ちている事にもおかまい無しで、一言そつ叫んだ。

彼の赤い髪が、落ちて行く力に逆らえずに流されている。

そりゃ無いよ。

ハヤブサと孔雀が二羽で俺をはめたんだ。

「ばあちゃんのバカやるおおおおおー!!!!!!!!!!」

ただ、この時起きた普通でない現象が、全て祖母の仕業である事だけが、今のクレハに唯一分かっていた事だ。

クレハは何がそんなに腹立たしく、何がそんなに悲しかったのか分からなかったけど、この「落ちている」と言う感覚の中で、遠くなるあの雲を見ていた。

あの孔雀はいつたい、何なのだろう。

ハヤブサは何者だったんだろう。

彼がエジプトに招かれた意義は、他のヴィライアーとは少し違う。本筋にはちつとも噛んでいない、茶番とも言える一幕。

ただ、彼は既に、これからに続く新たな物語への招待状を手にしていた。

彼はいまだに気がついてなかったが、固く握りしめていた手の中で、

小さな卵が、一度、どくと脈打った。

51: エジプト平原の墓とシロハゲのミッドガ

暗闇に映るのは真実

大切な人の、血だまりの行方

灯の無い空間なのに、何も見えない訳ではなく、ただ薄暗い不思議な場所。
どれくらい歩いただろうか。彼らは、その時空の歪みをさまよっていた。

「歩いても歩いても何の変化も無い。いい加減飽きてきたよ、俺は」

レッドはわざとらしいため息をついて、肩をすくめた。

「何よ、さっきまでは、俺今インディー・ジョーンズみたい？
とか言つてたくせに。全く……」

レッドの隣を歩くナギは、呆れた顔で笑っていたが、やはり多少の疲れが見える。

ここは、古代エジプトでも、さっきまでいた王家の谷でもない。閉ざされた遺跡のような場所。古代エジプトに招かれなかった者達が閉じ込められた場所だ。とは言つても、本人達はそれすら分かっていないけれど。

レッドを先頭に、彼らは延々と続く細長い空間を歩き続けているのだ。

「文句言つてないで、さっさと進みなよ、リーダー……」

「相変わらず手厳しいね、ティアン……」

レッドは遠い瞳で、何かを諦めたような微笑みを造る。ティアンは相変わらず眼鏡を光らせてレッドの後ろを歩いている。

ずらずらと長い列を作つて、探検とは名ばかりの生死のダンジョン。生きて帰れる保証があつたなら、まだ楽しい気持ちで挑めただろうに。

ティアンよりも後ろを歩いていたリオが、何やらさっきからキョロキョロしていた。

彼氏の異変にすぐ気がつくのは、腕を組んで歩いていたシーダだ。

「……どうしたの、リオ。気になる事があるの？」

「いや……大した事じゃないんだけど、僕たち少しづつ上へ昇ってる気がするんだよね……。さっきから左方向の曲がり角ばかりだし……気のせいかな……」

「……………」

シーダは首を傾げて、足下を見たり、後ろを振り返ってみたりする。その時、ちょうど後ろに居た三年生のカイ・ヴォストンと目が合った。

「ねえ、カイ、どう思う？ この道、上に向かってると思う？」

「……………?」

カイは今まで悶々と考え事をしていたせいで、道の事など気にしていなかった。しかし、シーダの言葉に何かピンと来た様で、急に横の壁や道を目を凝らして観察し始めた。

鋭く研ぎすまされた観察力は、やはり鑑定士の瞳のもの。彼はカバンから懐中電灯を取り出すと、壁や床を照らす。

「…………… やっぱり……荷台を引いたような跡がある……………」

「と、いいいますと？ 先生……………」

「やめてくださいレッド先輩。先生なんて」

レッドは無駄に考え込むように、自分の顎に手を添え、

「なぐにを言ってるんだいカイ。君は優れた鑑定士じゃないか。先生と呼ぶ人の方が多いだろ」

無駄にウインク。彼がウインクすると、星が飛んでくるようだ。カイは半ば諦めたように息をつく。

「リオ先輩が言ったように、この道が上に向かって行ってるのは間違いないと思います。少しずつですけど……。多分ここ……ピラミッドの中ですよ……。俺は考古学者じゃないんで、断言できませんけど」

「まあ…そんな事よく分かったわね」

「この床の、線みたいなの分かりますか？ 右側と左側に、台車を引きずったような跡があるでしょう。ピラミッドの作り方っていまだに解明されてないんですけど、こういった、内部に螺旋を描いて組み立てていく作り方があるんじゃないかっていう学説をどこかで読んだ気がします。だんだん、曲がり角に出くわす間隔が狭くなってきた気がしますし……」

カイは、ずっと向こうに続く二本の線の行方を、視線で追った。

ここがどこかなんて、正直どうでも良かった。ただ、その先にある、自分の追い求めている物に触れられるのならば。

その時だった。

今まで黙って先輩の後をついてきていたレイが、急にふらついたので、側に居たヘルが慌てて支えた。しかしヘルは小柄なので、共に座り込んだと言う感じだ。

「レイ先輩!!」

「まあ……レイ！！大丈夫？……そうよ、どうして私、気がつかなかったのかしら」

シーダはリオの腕から離れて、レイの元へと駆け寄った。

レイは「……大丈夫です。すいません。」と言っていたものの、顔色が悪い。

「そうよ。片目なんでも。平衡感覚が上手く取れなくて、誰よりも疲れるわ」

今まで彼女が普通にしていたため、皆彼女が片目しか無いのを意識していなかった。

しかし、この時誰もがそれを意識し、そして、ルネ・コンで起こった悲劇を思い出す。

「大丈夫ですか？　ここで、少し休みましょうか。…レイさん、お辛そうですもの」

副団長のメルベリーが心配そうにレイの顔を覗く。

「いえ……違っています」

「……………？」

違っています。

ただの疲れとは違う気持ち悪さに、レイは気がついている。

レイは右目を眼帯の上から抑えて、定期的に襲う痛みと、その奥に見える“何か”に戸惑っていた。

レイは、そのヴィジョンに戸惑っていた。

『何なの……これ……』

何も見えないはずの右目の暗闇。その向こうに何かが見える。
青い空。砂の王国。

血……。

血だまりの中に横たわる、その人。

「……………フォルテ……………!?!」

彼女は急に立ち上がり、一度あたりをキョロキョロ見渡すと、そのまま細い通路を駆け上り始めた。

「ちょ……おい!?!?!」

カイは側を横切ったレイを呼び止めたが、むしろそれ以上言葉が出なかったのはカイだ。

カイは見た。彼女の眼帯の奥が淡く光っているのを。

しかし、それはカイにしか分からない事だ。カイにしか見えないもの。

「……………うっそ。この期に及んでまだ走れるとは……………」

「若さね……」

レッドとナギは何をのんきにしているのやら。シィダは慌てて、周りに反応を求める。

「ど、どうしちゃったのかしら。さっきまでふらふらしていたのに」

「お、俺、追いかけます!!」

カイは一度振り返って、そのままレイを追いかけて行った。

「……おお。さすがは体力のあるカイ先生だ。仕事と学業の両立で、さぞ鍛えられたんでしょう」

「私、今更走れないわよ……」

レッドは暗闇に消えていった二人を、特に心配するでもなく見送った。ナギなんて自分がバテている。

しかし、ティアンは胡散臭そうに、二人が消えた通路の先をじっと見ていた。何を言うでも無く。

そんなティアンの様子に気がついたメルベリィ。

「……どうかしましたか……? ティアン……」

「……いや……何でもないよ」

何でもないなんて言葉ばかりに、意味深な笑みを浮かべて眼鏡を押し上げた。

レイは右目を抑えながら、ただ前を見ていた。
先ほどのヴィジョンはもう見えなくなったけれど、あれは、あの血だまりの中に居たのは確かにフォルテだった。

「……………フォルテ……………」

どうしよう。

心の中がもの凄くざわついている。
彼に何かあったらどうしよう。

血の色が、瞳の奥で固まっているみたい。

「ち、ちよ……………君!!」

カイはレイを追いかけながら、勢いつきすぎて曲がり角でぶつかりそうになるのをあつかましく思う。

それにしても、片目が無いと言うのに足が速いな。あの子は。

やっとレイに追いつきそうになったと思った時、その空間が現れた。
言葉を失いそうな、三角錐型のホール。

「……………」

レイはその空間につくと、息を整えながらその場に座り込んだ。どれだけ走ったか分からないが、肺がキリキリする。カイも同様に壁に手をつけて息を整えていたが、

「…………… いったいどうしたんだ…………… 急に走り出して……………」

やっとの事でレイに声をかける。

レイはその時、カイの存在に気がついたようだ。

「…………… 先輩…………… フォルテが……………」

「……………?」

レイは立ち上がって、あたりを見渡すが、そこに居て欲しい人は居なかった。

「どうしたんだ…………… フォルテが何だった?」

「…………… フォルテが…………… 血だらけで……………」

レイは右目の眼帯を抑えて、その向こうで見たヴィジョンを思い出す。カイはハツとして、彼女が抑える右目をじっと見つめる。今は、彼が見た所で光っていないが、さっきは確かに……………。

「私…………… さっき一瞬右目が痛くなって、傷が痛むのかと思ったら…………… 見たんです…………… 青空が……………」

「…………… それは……………」

「そしたら、何だか昔のエジプトの風景が浮かんできて、そして今度は、血を見ました」

レイは、思い出すだけでゾツとする、あの血だまりの中の彼を、再び右目の奥で見たような気がした。
フォルテが苦しんでいる。

不安で心が凍るみたいだ。

「先輩……フォルテは、皆はどこに居るんですか！？ フォルテが……血だらけで……苦しんでいるのに……」

どうしてあんなものが見えたんだろう。

レイは泣きそうになりながら、カイの腕を掴んで揺さぶった。

カイはどう答える事も出来ずに、瞳を逸らす。

きつと、彼らは扉の向こうの世界に居る。

鍵をかけて閉まっていた、封印された歴史の世界に。

ただ、この子はその、扉の向こうの世界を垣間見たと言っただろうか。

そんな事、可能なのだろうか。

閉ざされた三角錐の空間で、カイは思った。

やっぱりここは、ピラミッドの中なんだろうってなと。

それが、現実のピラミッドなのか、あるいはそうでないのか、それは我々には理解出来ない、与り知れない話だ。

I
d
r
a
w

52：エジプトプラン34〜ボーイ・ミーツ・ガール〜

少年と少女が出会った

彼女が連れてきたものは、生と死の鍵

メンフィスの王宮の一角で、ファラオ、アンケセナーメン、宰相アイ、団長……そして、太陽神ラーの神官長であったカーロンが話し合いをしていた。その中で、カーロンは知りうる限りの昔語りをしていたのだった。

「オアシスを出て行った息子を探しに行つて、私はある神殿に行きました。我々が“黄金のマスク”と言うものを隠した神殿です」

「……………!？」

「彼は……息子タハールは無惨な骸となって発見されたのです。……私はすぐに、その場に満ちた気で気がつきました。息子は、その身をもつて、王家に呪いをかけたのだと……。呪いの力は大きく、王家への反乱は勢いを増しました。何よりすぐに、当時のファラオであるアクエンアテンが謎の死を遂げました。……宰相アイ、お前なら分かるだろう。呪いを恐れて、すぐにアマルナ改革を取りやめる様働いたのは、お前だったからな」

カーロンと宰相アイは、静かな睨み合いの中に居た。団長は椅子に座って、しびれを切らしたように、

「で、その長話がスノーと、一体何の関係があるって言うんだ。あいつが生かされているって」

「先急ぐのは良くないぞ、ラーの使徒。……たとえアクエンアテンが死んでアマルナ改革が崩壊しても、その呪いが解ける事は無かった。テル・エル・アマルナの地は呪いの化身で満ちあふれ、元王妃であるネフェルティティ様はその呪いを解きたがっている。どこで知ったか分からないが、その呪いを解くのに必要なものが、“黄金のマスク”なのだ。ネフェルティティ様はラーの使徒を人質に、黄金のマスクを要求してくるでしょう」

「だったら！！ その黄金のマスクとやらをさっさと渡せ！！」

スノーを無傷で返してもらえるなら、それにこした事は無い！！」

団長は大理石のテーブルを思いつきり叩いて、いささか焦った様子だった。

スノーはヴィライアーにとっても、美術界にとっても大切な人材だ。こんなくだらない事で失うわけにはいかない。

しかし、ふと思い出す。黄金のマスクと言うフレーズ。

『……………待てよ……………』

確か、黄金のマスクって、ツタンカーメンのミイラが冠っていたのを発見されたんじゃないかったか？

彼はチラッとツタンカーメンを見る。

ツタンカーメンは指を組んで、困惑した事態に戸惑っているようだった。

歴史を変える事は許されない。

ならば、それならば、ツタンカーメンって……………。

「ラーの使徒。残念ながら、黄金のマスクを取りに行くのにも時間がかかります。王家の者はその神殿には入れない様になっています。固い封印を解き、神々の恩恵にあずからなければ……………」

カーロンの言葉で、団長はハッと我に戻った。

「あ、ああ……………」

やはり、自分たちでスノーを取り返すほか無いだろう。

彼はツタンカーメンを見た後、宰相アイを見た。

歴史を変える事が出来ないのならば、ツタンカーメンの死後、ファラオになるのはこの宰相アイだ。

俺は、この男が陰謀を企てているのを知っていながら、それをどうする事も出来ないのか。

皮肉にも、それが歴史だ。

キクマサは一人、中央のキオスクで相変わらずぼんやりしていた。ぼんやりしていたと言っか、考えようにも分からない事だらけでどうしようもないと言っか。

自分の知らない所で、色々なことが起こっている気がする。スノー先輩だつて、クレハだつて。助けたいのに、時代も国も違っこんな場所で、自分に出来る事はいったい何だろっ。

「悩んでるねえ、新人。初めての研修はいかがお過ごしで？」

「……フレイ先輩……」

いつの間にか背後に居たフレイが、誰もいないのに柱に手をついて

格好つけている。

「大丈夫なんですか？ 先輩達、長旅でだいぶお疲れなんじゃないですか？」

「あんな固っ苦しい所で寝てられるかよ。むしろストレス溜まるって」

「……………はあ」

キクマサは胡散臭そうに、でもそう思っている事を悟られない様に頷いた。

フレイはキクマサの隣に腰を下ろすと、悠々とタバコを吸い出した。カトレアさんのアトリエで、タバコには免疫のあるキクマサなので、どうってこと無く受け入れられたけれど。

フレイは一度、長く煙を吐いて、

「ま、こんな研修そうそうないから。初めてがこれってかなり可哀想だけど。まあ、ヴィライアーに選ばれちゃったから仕方ないか」

片腕を背もたれの後ろに回して、空を見上げる。

キクマサは、何か急に絡んできたこの先輩をチラッと見た。

フレイ・レステヴァン先輩。ルネ・エメラルドでいらっしやる。

彼の噂はそこそこ聞く。良いも悪いも、色々。

少し長めのアッシュ・ブラウンの髪に、チャラチャラした風貌。こんな人でも絵を描くんだな、と言ったような。

「お前みたいな奴でも絵描くんだな……」

「……先輩が言いますか、それ……」

今まさに、フレイに対して思っていたことを自分に言われ、何だかやるせない気持ちで泣きたくなった。

フレイはおかまい無しに笑って、いけしゃしゃあとしている。

「ま、俺は意欲的に沢山作品を造るタイプではないけどな。描きたいと思った時に描く。芸術っちゃそんなもんだよ……。沢山描いて開拓する奴も当然居るけどな、リオみたいな」

「……はあ」

彼は片足を、もう片方の膝の上に乗せて、空を仰いで煙を吐く。
チャラチャラした風貌に惑わされていたが、やはりどこことなく感じる、芸術家の空気。

「……で、お前、モテるだろ」

「……はい!?!」

さっきまでの話はどこへ行ったのやら。キクマサは聞き間違えたかと思つて慌てて彼の方を向く。

「初めて見たときから思ってたんだよ。……なんか来ちゃったぜつて。……ヴィライアーの色男担当は俺だけで十分なのにつて。ま、レッド先輩がいるけど? あの人には遊び入ってタイプでもないし?」

「…………いや…………ちょっと待ってください。自分で言うのもあれですけど、俺も別に遊び人ってわけじゃ……………」

「リオは残念な彼女を持つてるせいで、戦線離脱だし……………」

「いや、…………残念な彼女で……………」

なんか一人で、どんどん話を進めるフレイに追いつけそうにないキクマサ。

フレイはわざとらしくため息をついたりして。

「俺、ピンて来たんだよ。似たような何かを感じるって……………お前、昔荒れてただろ」

「……………え……………」

キクマサはその言葉の瞬間、目を斜め上に逸らした。フレイは「は〜ん」と、これ見よがしに、

「図星かよ。やっぱすげーや、俺」

うんうんと満足そうに頷いている。

いままで隠してきたわけでは無いけど、あんまり気がつかれなかったことだけに、キクマサは気まずかった。

「ま、気を落とすな、新人。…………いや、キクマサだっけ？ 仲良くしようぜ…………あ、タバコいる？」

「結構です。俺、もうやめたんで」

「へえ〜すげ〜。禁煙したんだ。俺には無理だな」

彼はそう言いながら、短くなったタバコを携帯用の吸殻入れに入れた。

「……………そういう所はちゃんとしてるんですね。……………何ていうか……………」

「意外?……………ちゃんとしとかないとシーダがうるさいんだよ。……………母親がよって、なあ?」

「……………はあ」

なんか、この人のことがよく分からない。
不良かと思ったら、思いの外に見直す所もあって。かといったら、の繰り返しだ。

その時だった。

風の流れが急に変わったと思ったら、キオスクの周りの草花が勢いよく流される。池の水面も、その風の方向に。

キクマサとフレイが、吹きつける風に目を閉じた一瞬だった。

目を開いた時、キオスクの前のスマイレの沢山生えた場所に、金髪の少女が倒れていた。

キクマサは、彼女を見た時、驚きのあまりすくつと立ち上がった。

「……………え……………ルナ……………っ!」

彼は彼女に駆け寄って、倒れたまま動かない彼女を抱き起こした。それは、間違いなくルナシーであったのだが、キクマサは彼女が着ている服が、真っ赤な血で染まっているのを見て、心臓が止まりそうになった。

「おいおい……マジかよ」

「先輩！！ おねがいします！！ 誰か呼んできてください！！」

「あ、ああ……」

キクマサは、とにかく彼女を助けたいと思った。

フレイが急いで人を呼びに行った後も、キクマサは彼女の名を呼び続ける。

「ルナ！！ おい、ルナ！！……いったい何があったんだ……」

彼女は、白い顔が一層白く、細い体は一層細く見えた。手と足は鎖で繋がれ、その姿は見られないほど痛々しい。

どれだけ会っていないかただろうか。久しぶりに会えたって言うのに。

「……………ルナ……………」

彼がもう一度、彼女の名を呼んだ時だった。

ルナシーが小さな声を上げ、目をうつすら開いたのだ。

しかし、彼女は目を覚ました瞬間、何かとんでもなく恐ろしいもの

を見た様に青ざめ、キクマサを確かめると、震えながら涙を流した。

「……………キク……………」

そして、すぐる様に彼の胸元の服を握りしめ、強く強く、顔を埋めた。

キクマサは少し驚いたが、彼女が、自分の知らない所で大きな恐怖を抱えたことに、胸が痛かった。手や足の小さな傷が、それを物語っている。

「ルナ……………ルナ、もう大丈夫だ。もう……………」

キクマサは彼女を安心させたくて、強く抱きしめた。

「いったいどうしたって言うんだ……………ルナ……………」

「キ、キク……………フォルテが……………」

ルナシーの声が、一層涙声になる。彼女は、涙の溜まる瞳を見開いて、あの時の、あの惨劇を再び思い出してしまった。

フォルテが倒れる、その瞬間を。

「フォルテが……………死んでしまったわ……………。殺されたのよ……………」

彼女の言葉は、嘘偽りでは決して出せないような、嘆きの声だった。

キクマサはその言葉を理解した時、

目の前の世界が、まるでモノクロ写真の様に色を失い、何が何だか分からなかった。

53：エジプトプラン35〜健闘を祈る〜

失ってからでは遅いのだと

今更ながらに思い知った

ずいぶん夜も更けた頃、それでも俺は眠らずにルナシーについていた。彼女はずいぶんと衰弱していたので、あの後、再び気を失ったのだ。

彼女が目覚めるまで、キクマサは眠れそうになかった。

「……………寝ないの？　キクマサ君」

「……………シャルロ先輩……………」

いつの間にか背後にいたシャルロ。彼女は複雑そうな顔でルナシーを見ていた。

「この子、ずいぶんひどい目にあっただけね。……………可哀想に」

「……………」

キクマサは無言で、ただただ悔しかった。自分が今まで、いかに平和の中に居たかを思い知る。
フォルテのことだって……………。

「……………先輩……………。この世界で死んでしまったら、どうなるんでしょうか……………」

「……………?」

キクマサは椅子に座ったまま、気力の無い言葉で問いかける。シャルロは腕を組み、表情はあまり変えないまま、

「……………分からないわ。全てが分からないんだもの。……………ルネ・クリスタルが殺されたって言うのも、私たちが見た訳じゃない……………」

「でも!!……………でも、ルナシーは泣いてました……………。彼女のあんな顔は、今まで見たことが無い……………」

死と言うものを目の前にした時の、大切なものを永遠に無くしてしまった時の表情。

気づかされてしまう。納得させられてしまう。

彼が死んでしまったのだと。

その時、入口の壁をこんこんと叩く音がして、シャルロとキクマサは振り返った。

団長が、いつもながらに険しい表情で、そこに立っていた。

「すまないが、シャルロ……話がある。キクマサは彼女を見といてくれ……」

彼はそう言つと、シャルロを顎で促した。彼女は少し眉根を潜めたが、

「……………キクマサ君。あなたもあまり、無理しないのよ」

と言つて、軽く彼に笑いかけた後、再び険しい表情に戻してその場を後にした。

「明日、スノーを取り戻しに、テル・エル・アマルナへ行くぞ」

「!?!?」

団長は、自分の部屋の壁にもたれかかって、落ち着いた様子でシャルロに言う。しかし、シャルロは彼を鋭い視線で見上げていた。睨むと言うよりは、もっと違う意味を含んだ視線で。

「……………あなた……………大丈夫?」

「何がだ」

「心ここにあらずって感じよ。……………後輩を失ったかもしれないのが
応える?」

「……………はっ……………」

団長は、バカにするなよと言わんばかりに、苦笑する。

「言つとくが、あまり関わったことの無い後輩が死んで、悲しむなんて逆に怪しいもんだぜ。俺は、今後の展開が気がかりだ」

「……………何?」

シャルロは、話が長引きそうなので近くの椅子に腰掛け、足を組んだ。

団長は、いつものような俺様な態度ではなく、深刻に何かを考えていた。

「これが歴史の舞台なら、俺たちは覚悟しなきゃならないな……………。
ツタンカーメンはもうすぐ死ぬぞ。それは俺たちには変えられない
事実だ」

「……………」

シャル口は一度、瞳を大きく見開いたが、視線を床に落とすと、

「……………そうね。私たちは分かっていたつもりなのにね。忘れていたわ」

「そうだ。そして、その後にファラオになるのが宰相アイ。皮肉にも、俺たちを殺そうとしている、テル・エル・アマルナとも通じている人物だ。やっとそれに辿り着いたのに、俺たちはあいつをどうすることも出来ない」

団長は舌打ちをして、拳で壁を叩いた。

「スノーは、歴史とは関係がない。あいつを助けることが、俺たちに出来ることだ」

今日、ルナシーがどこからどうやって現れたか分からないが、思い知ったことがある。

失ってからでは、もう遅いのだと言うこと。

「シャル口。スノー奪還は、俺とお前と、ホルエムへブで行く。あと……………フレイとジェイルに、黄金のマスクを取りに行かせる。カーロンが案内してくれるそうだ」

「……………何ですって……………？」

シャル口は、急に出てきた“黄金のマスク”という単語に、少し面食らってしまった。しかも、フレイとジェイルを行かせるって。

「あ、あんた……その黄金のマスクが何なのかよくわからないけど、よくもまあフレイとジェイルを組ませようとしたわね……。あの二人は対極に位置する人種よ」

「仕方ないだろ！！　キクマサはこの王宮に長く居たんだ。ファラオや宰相アイを見張ってもらわないといけない。……それにあいつも、色々気がかりだろ。……そしたら残ったのがフレイとジェイルだったんだよ」

「……………」

ぶつきらぼうに言っていたが、やはりなんだかんだ言っていて、団員のことを考えている所が団長らしいと言うか。シャルロは吹き出しそうになった。

「何だよ……………」

彼は不機嫌そうにシャルロを睨んでいたが、シャルロはツンとそっぽ向いた。

「俺は、宰相アイを許せない。でも、あいつが次のファラオになるのは歴史の事実だから、仕方が無いと思う。だが……あいつに黄金のマスクを渡すわけにはいかない。あれはツタンカーメンのものだ」

夜のロウソクが、閑静な空間に影を残す。

団長の言わんとしていることが、シャルロには分かるような気がした。

今の、無力な我々ができること。

この時代に呼ばれた理由。

それはきつと、歴史的には当たり前な、しかし、奇跡のような事実の中に隠されている。

「嫌です！！！先輩たちは私を殺す気ですか！！！」

今朝起きたばかりのジェルは、さっそく大声を上げていた。団長とシャルロは「やっぱりね」と言わんばかりに顔を見合わせる。

「死にはしないわよ。今までだって、一緒に旅してきたじゃない」

「死ぬ寸前でここについたんです。なんか文句ありますか」

ジェイルはしらっとして、当然のごとく断言した。シャルロは頭を抱え、

「お願いよジェイル。今はあなた達しかいないのよ。キクマサ君はこの王宮でやつてもらわなければいけない事があるし、何より私たちが元の世界に帰るためよ」

頑固な彼女に言い聞かせるが、ジェイルは断固として聞き入れてくれない。

「……………あのなあ、お前……………」

団長も何か言いたげであったが、彼が口を挟むと火に油であることは明白だったため、シャルロは慌てて団長の足を踏みつけた。団長の声にならない叫び。

ジェイルは何と言うか、男関係意外ではとても良い子なのだが、この手の事情となると、驚くほど頑固なのだ。まあ、それは分かっていたことであるが。

「私は、絶対にあの男と行動しません!!」

「なになに、俺と一緒に居たいって？　全くルネ・サファイアって本当に俺が好きだねえ」

「……………」

一瞬の沈黙。シャルロも団長もあんぐりして、いつ現れたんだと言う様に、ジェイルの背後にいる男を見る。ジェイルなんて言葉も無い、と。

「さあ、行くぞ。ルネ・サファイア。向こうでカーロンのじじいが待ってる。……仕事放棄はす・る・な・よ」

フレイはジェイルの耳元で、勝ち誇ったような、不適な笑みを浮かべ、嫌味を呟く。

そして、固まってしまったジェイルを引きずって、

「じゃ、行ってくるぜ。スノーのことは頼んだぞ」

最後だけまともな事を言って、「ぎゃああああああ」と叫んでいるジェイルを笑顔で連れて行った。

シャルロは、この時ばかりはあいつの“嫌がらせ”的な女子の扱いの上手さに感謝したが、

「……………私はいまだに、あいつがモテる理由が分からないのよね……………」

「俺、ルネ・サファイアが可哀想だって、初めて思ったよ……………」

団長もシャルロも、この後味の悪さに、微かな罪悪感を感じたのだ。つた。

シャルロと団長が、スノー奪還に向かい、

ジェイルとフレイが“黄金のマスク”を回収に行った。

キクマサは団長との別れ際に、団長に全てを話された。ツタンカーメンがもうすぐ殺される事。その後のファラオが宰相アイである事。黄金のマスクは、ツタンカーメンの死後に必要なのだと言う事。そして、その事がアンケセナーメンにばれてはいけない事。

「お前は、王宮で起こる事をちゃんと見張ってる。深追いはするな」

「で、でも、俺はいつたいたいどうしたら良いんですか。先輩達の帰りを待つだけなんて……！！」

キクマサの焦りは当然だった。

ルナシーはいまだに目覚めないし、フォルテの事だつて分からずじまい。

団長は、キクマサの不安をちゃんと分かっていた。

「……正直言つて、俺はこの王宮が一番ヤバい事になるんじゃないかって思ってる。キクマサ……お前は歴史を理解した上で、自分のやりたい様に行動しろ。……無駄に考えるな、多分とっさに出た行

動が答えだ」

彼は、相変わらず眉間にしわを寄せたような険しい顔だったが、言葉には重みと、後輩を気遣う優しさがあるような気がした。キクマサは上手く飲み込めなかったが、

「……分かりました。……絶対、無事に戻ってきてください」

そう言って、彼らを見送った。

何か、全ての結末がそこまで来ている気がするのに、

“結末” 自体が、まるで俺たちを飲み込もうとしている怪物みたい。

皆が、最後のピースを集めに行っている。

俺はここで、今まで拾ってきたパズルを組み立てなければならない。

どんな、悲しい絵が浮かんできても、それに耐えながら。

I
d
r
a
w

54：エジプトプリンセスの理想

ファラオの理想のそのむこう

あなたの心の内を、誰が知らなくても俺だけが知っている

ルナシーがこの王宮に現れたとき、後からやってきたアンケセナーメンさんとファラオの驚きの顔が忘れられなかった。二人は彼女を知っていたのだ。

アンケセナーメンは涙をためて、彼女の眠る床の間にうずくまって、

「……生きていたのですね……ルナシー……」

涙声で、絞り出すような声を出していた。

ファラオはそんなアンケセナーメンの肩を抱いて、彼もまた暗い表情であった。

そのとき彼らが語ってくれた事は、とても信じられない事だったが、キクマサは受け入れるほか無かった。

ルナシーとフォルテは、十年前のエジプトに迎えられたのだ。

そこで、幼かったツタンカーメンとアンケセナーメンと出会い、ラーの使徒と呼ばれた。

そしてフォルテは、ルナシーとツタンカーメン、アンケセナーメンの前で刺されたのだ。

「あのとき、彼女達は光の中に、跡形も無く消えたのです。……私は今でも覚えています」

ルナシーも。動かなくなったフォルテも。

まるで、彼らの存在が幻であったかのように。過ぎた時間は夢であったかのように。

そして今、十年の時を超え、ルナシーだけが再び古代エジプトの地にいるのだ。

腕時計が、意味の無い時間を刻み続けている。
眠るルナシーの前で、俺はただじっと、彼女が起きるのを待っているだけだ。

ルナシーは、レイに比べたらあまり感情を露にするタイプではない。どちらかと言うと、いつも穏やかで、笑っている事の方が多いから、あまり意識した事が無かったんだ。

抱きしめた時、びっくりするほど彼女は小さかった。
弱っていた彼女の心が、そう感じさせたのだろうか。

キクマサが一人、悶々とそんな事を考えていた時、目の前の白い布が動いた。キクマサはハツとする。

「……………ルナシー……………起きたか」

ゆっくりと瞳を開けるルナシーを、キクマサは顔を覗き込む様子にして見守った。

彼女の顔は青白く、まるで透けているみたいだ。

「……………キク……………」

「ルナ……………大丈夫か？　ずっと起きないから、みんな心配してたんだ……………」

ルナシーは目を覚ましてすぐに起き上がろうとした。彼女にかけていた白い布が、帯を作って落ちる。

「私はいつたい……ここはどこなの……？」

「ここは王宮だよ。古代エジプトの……ツタンカーメンの時代だ。全部……聞いたよ、ルナ……。ここは、君たちのいた時代から、さらに十年経った世界だ」

彼女は、いまいち自分の置かれている状況が分からないと言う様におぼろげな表情だった。

心の中にあるあらゆる情報を整理しながら、彼女はやっとキクマサを見た。

キクマサは椅子から身を乗り出す。

「もう平気か？ どこも痛くないか？」

「……大丈夫よ、病気じゃないもの。……心配かけたわね……」

ルナシーは、いつものルナシーらしく軽く微笑んだ。

そして、ゆっくり目を伏せる。

「私だけがここへ来れたのね。……フォルテはやっぱり居ないんだわ……」

「……………」

キクマサは、その事に関しては言葉が見つからなかった。自分がそ

の場を見た訳ではないし、実感も無い。しかし、目の前でその瞬間を見たルナシーに取っては、リアルな現実なのだろう。

「……フォルテだけじゃないよ。……クレハも行方不明で、スノー先輩なんて、敵に捕まってしまったんだ。……俺たちはいたい、いつまでここに居ないといけないんだろうか……」

「……………キク……………」

ルナシーは、事情も何も分かっていたが、少なくとも、自分がまだこの世界に居るのだと言う事はよくわかった。戦乱の時代の、混沌とした歴史の中に。

ふと、ルナシーは自分の寢床の傍らに置かれている、丸い石を見つけた。

つやつやした、玉眼。

「……………そうだわ……………これ、フォルテが“鍵”だと言ってたわ……………。これがあれば、元の世界に帰る事ができるって」

「……………鍵……………?」

彼女は玉眼を手に取り、まじまじと見つめる。別に、何も変わった事の無さそうな石なのに、持っているとしんわり熱く感じる。逆に瞳に見られると、心の奥がヒンヤリする。

キクマサも感じたのだろう。その禍々しいのに、ピンと張りつめたような空気を。

しかし、二人とも頭いっぱい疑問を抱えるだけで、それをどうすれば良いのかさえ分からなかった。

ファラオとアンケセナーメンは、静かな時間を過ごしていた。短い、二人だけでいられる時間を。

「……………結局私はいつも、何もできずにいるね。国政もままならず、呪いだつて…………ラーの使徒に任せている。ここでじつと呪いが解けるのを待っているだけ、テル・エル・アマルナが落ちるのを待つだけだ……………」

ファラオは、悔しいと言うよりはむしろ、何かに疲れたような精の無い表情だった。

ファラオとは何なのだろうと、幼い頃から考えて考えて、今でも答えは出そうにないのだ。

そんなファラオに、アンケセナーメンは微笑みかけた。

「あなたは頑張っていますわ。父、アクエンアテンの時代の責任をたった一人で受け継いで…………。ラーの使徒が現れてくれたのも、あなたの国を思う心があったこそ。神が使わしてくださったのです……………」

……………」

ずっと、ずっと一緒に、身を寄せあつて生きてきた。
民が苦しんでいながら、何も知らずに幸せに暮らしていた無邪気な
時代から、

父が死に、いきなり現実を突きつけられた、操り人形の時代まで。
あなたはやっと、ファラオとして、自分の理想を抱きつつある。

「……心配なさらないで。きっと、何もかもうまくいきますわ……」

アンケセナーメンは、愛しい夫を抱きしめた。
お互いの心にある不安に気がつかない振りをして。

「……アンケセナーメン……」

ファラオは、幼かった時の自分たちを思い出す。いつも彼女が手を
引いて、その暖かさで導いてくれた。

あの、日だまりの向こうの世界を、もう一度走りたい。

自由だった、あの頃。

今度は私が彼女を、この国を導く番なのだ。

夕方の穏やかな空の色を見てみると、今朝、先輩達が旅立ったのが嘘のようだ。

キクマサはいつもの様にキオスクに来ていた。

中庭の、空の見える場所に居ないと、不安に押しつぶされそうだから。

ルナシーは王妃に呼ばれていた。きつと、つもる話があるだろうか
らと、キクマサは一人そこに来たのだ。

そして、今日はキオスクにファラオがやってきた。

二人は出会う事ができた時はいつも、そのキオスクで話していた。

「考え事かい……キクマサ。皆が心配なのも無理は無いが……」

ファラオは、やはり年の割に落ち着いた声音で、キクマサを気遣っていた。

キクマサも、彼を心配させてはいけないと、軽く笑って、

「大丈夫ですよ。みんな、凄い人たちばかりですから」

自分にも、そう言い聞かせる様に。

今日はやはり、お互い無邪気に、少年らしく語り合えない。

今まで考えない様にしていた、リアルな歴史がそこまで来ているから。

キクマサはふいにファラオに問いかけた。

「ファラオの理想とする世界って、どんな世界ですか？」

前に、そんな話をした事があつた気がする。

ファラオとしての、こんな時代だからこそ望む、理想の国。

ファラオは少々驚いたようだが、真剣なキクマサの表情に少し笑つて、少しずつ口にする。

「そうだな……。歴代に代表するような、名を語られる王ではなくていいから、やはり、皆幸せに」

優しい声で語る理想は、欲など無く、そしてやはり“理想”であつた。

「今までの混乱など、誰もが忘れて、お互いの神を認めあい……。反乱も無く……。ナイルの導きのまま、次の時代が重い責任を負わないように……」

訪れる毎日が、晴れ渡っているような。

この、エジプトの青い空の様に。

太陽の下の民であるのだから。

ファラオの呟く理想は、当然“理想”だと、ファラオ自身がよく分かっていた。

どうして今、俺はこの先の未来を知っているのだらうと、心の奥が痛くて仕方なかった。

「……きつと、あなたの理想は叶います」

キクマサが泣きそうに微笑んだのは、悲しかったからか。

いや、ツタンカーメンと言うファラオが、未来で最も名を残すファラオとして、ふさわしい人物である事が嬉しかったからかもしれない。

嬉しいけど、悲しい。

もうすぐあなたは死ぬんだと、いつたい誰が言えただろう。

早過ぎた死が、あなたを悲劇の少年王と煽り、彼を有名にした。

彼の理想とは裏腹に。

55：エジプトプラン377 美術系をなめるな

歴史なんかどうでもいいからって

全てをめちゃくちゃにできたらどんなにいいだろう

ラーの使徒奪還の名目で、テル・エル・アマルナに王宮軍が襲撃したのは、シャルロと団長が旧王宮へ侵入するためのカモフラージュだった。それかあるいは、襲撃こそが目的か。

「今ならホルエムヘブが兵士達を引き止めてくれる。……できるだけ急いでスノーを取り戻した方が良いな」

「分かってるわよ」

二人は風のように、陰気な回廊を走り抜け、スノーが閉じ込められている牢を探していた。

こういう時に、ヴィライアーの研修着は本当に動きやすい。

突然の奇襲に、あちこちで鐘が鳴っている。兵士達はばたばたと、外の守りに向かっていたため、宮内での人の流動が激しい。

団長とシャルロは臨機応変に柱に隠れたり、息を殺しながら内部へと足を進めていた。

しかし、急いでいるためどうしても見つかってしまう時は、槍を持った兵士相手に、

「美術系を！！！」

「なめるな！！！！」

と、走っているついでに二人して飛び蹴り。

勢いのついた二人はもう誰にも手に負えない。やめられない、止まらない。

腕っ節の強さで言えば、ヴィライアーのツートップであり、それは新メンバー以外の中では当然の常識であった。

走っては、邪魔者に出くわし、殴る蹴るの好き放題の後、屍を乗り越え再び逃走。

「強いな、シャルロ」

「団長だって、なかなかやるじゃない」

いつもはお互い喧嘩ばかりしているのに、こういう時は息がぴった

り合つ、謎の先輩後輩。団長はいかにもマフィアの跡取り息子なだけあつて、力任せで乱暴で、容赦ない。シャルロは余裕のある無駄の無い動きで、たまに捕えた兵士をヒールで踏みつけ、恐ろしい微笑みを浮かべていたため、

「おい、ここで女王様スイッチを押すんじゃない!!」

と団長に怒鳴られていた。

自分たちの存在がだんだん明るみに出始め、向かってくる兵士が面倒くさいほどに多くなってきた。

「いたぞー!!」「あっちだ!!」の声が至る所から聞こえてくる。

こうなつてくると二人は、こそこそするのが面倒くさくなつたのか、行動が派手に、大胆になつてきた。

向かってくる奴らは皆敵。と言わんばかりの猪突猛進っぷりだ。

「美術系なめんなよ。デスク囲つてるインテリと違って、体力勝負なんでね。お前らも一回、油の画材フルで運んでみろってんだ!!そしてキャンバスを貼ってみろ」

団長は、古代エジプト人に言つても何のこっちゃ、と言われそんな愚痴を叫んでいた。そして、目の前の兵士の槍を掴んで、兵士ごと振り倒す。

シャルロも目の前の男にグーパンチを食らわせ、

「そうね。生易しい世界じゃないの……よ!!」

膝でみぞおち。

この光景を見る限り、どつちが悪人なのか分からない。

彼らは前に進むことをためらわなかった。

どこへ行くべきなのか分からなかったけれど、この広い宮殿の内へ内へと、直感だけで進んでいると言った方が良い。

しかし、彼らは突然立ち止まらずをえなくなる。

今までは長い回廊が迷路のようだったのに、広い中庭に出てしまったからだ。

皮肉にも、そこはルナシーが、二人の子供に花の王冠の作り方を教えた場所。

急に訪れた花の香りに、団長とシャルロは戸惑ってしまったのだ。

「!!!!!!」

団長は、この暗闇に紛れた敵を感じていたものの、この時、一瞬の隙ができてしまった。風をきる矢の音に振り返った時は、もう遅い。その矢は団長の肩を貫き、彼は矢の勢いのまま、前に倒れた。

「団長!!!!!!」

シャルロはキツと周囲に注意して、歯を食いしばる。

再び放たれた矢を避け、団長に駆け寄る。

彼の血を見たとき、彼女の中でガラスを突き破るような音がした気がした。

たった一瞬、彼女は団長の研修着の内ポケットを探り、一つの黒い銃を掴み、取り出す。きつとあるだろうと確信していた。

シャル口の乱れる髪の間隙から見えるのは、彼女の冷たい、氷壁の様な瞳。

その激しい銃声は、連なった一筋の赤い光。

さて、それは何だったのだろうか。何が起こったのだろうか。

彼女は暗闇の中で、一斉に襲いかかってきた敵を連続で撃ち抜いた。感覚と、殺気と、自らの衝動に任せて。一瞬の銃声の後、襲いかかってくるのは沈黙と虚無。

いま、そこに立っているのはシャル口だけだった。

彼女は立っていた。倒れた団長の傍らで、“死”を思わせるような殺気を纏って。

「……………」

息を整えながら、銃を持つ手をだらんとたらし、もう片方の手で額を覆った。

「……………やっぱり持ってるものね。マフィアの息子さんって」

一度息を息をつくとき、シャル口は視線だけを右隣の池の前に向け、

いつの間にもやらそこに立っている人物に銃を向けた。

黒髪長髪の、今までの兵士とは明らかに雰囲気の違い、いけ好かない男。

奴は、読めないすかした笑みを浮かべている。

鋭い視線の、睨み合い。

そう。この男は、シャル口達には面識が無かったが、ルナシーヤフオルテには多いにある。

「……………あんだ、何なの」

「……………そう警戒するな。私はお前達の敵ではない」

シャル口は息を飲んだ。さっきまでこの中庭で立っていたのは、自分だけだったのに。

こいつは急に現れた。まさに、湧いて出たように。

黒髪の男は、と言うより、この国の呪いを促したあの“セト神”は、スツと団長の前に腰を下ろし、彼の傷を確かめる。

そして、黒いアंकを取り出し、傷口にそれをかざした。

「……………!?!」

シャル口はその光景に、息を飲んだ。セト神が唱える不思議な呪文は、ヒエログリフの螺旋となって、彼の傷を全て癒したのだった。

驚いていたのは当然だが、銃を急いで団長の上着の内ポケットに入

れなければとむしろ焦った。
だって、彼が今目覚めたら、シャルロが無断で銃を使った事がばれ
てしまうから。

何とヒヤヒヤする事か。

「……………あんだ、何者なの……………？」

「……………ここをまっすぐ進み、右へ曲がると地下牢への道がある。
……………お前達の仲間はそこだ……………」

「……………無視ね」

シャルロは、まるで一方通行な疑問に諦めをつけ、ため息をついた。
セト神は彼女に小さな鍵を渡す。

「これ……………牢屋の鍵……………？」

「急いで連れ出した方が良かったらう……………。じきにここは焼け落ちる
……………」

やはりシャルロの問いは丸無視で、彼女から見れば謎の、胡散臭い
男は立ち上がった。

彼は、暗い夜の空に上がり始めた炎と煙をじっと見ていた。シャル
ロも、この時やっと戦争と言つものを意識する。

そうだ。王宮軍にとっては、このテル・エル・アマルナの压制こそ
が目的なのだから。

セト神は炎を睨むシャルロを横目に見ると、

「……ギリシアの運命の娘よ。その力は先の未来にもご健在のようだ」

意味深な言葉を残して、シャルロが聞き返す暇すら与えず、この神様は消えてしまった。

「……………は？」

彼女からしてみたら、何の事かさっぱり分からない、意味不明の言葉だった。

すっかり傷が治ったくせに気絶したままの団長を、シャルロは両頬を挟む様に思いつきりビンタした。
ここで贅沢に寝ていてもらっては困る。

「いつてええええー!!！」

やはり団長は、それだけで起きる。さっきまで大怪我を負っていたとは思えないような、寝起きのような反応にため息が出そうだ。

「ちよつとそこの使えない団長さん……………」

「何だ!! いや、何だじゃねえや。何だと!？」

団長は若干、混乱気味。

シャルロはますます、「こいつはもうダメだな…」と思わずにはいられなかった。頭を抱え、

「スノーを迎えに行くわよ…。あの子、きっと待ちくたびれてるわ」
チラッと、周りに倒れている兵士を確かめる。
団長がどうか、こいつらの傷のありように気がつきません様に。

殺してはいないが、しばらく触れていなかった銃の感覚に、今でも心がざわついている。

スノーは、地下牢に閉じ込められていた。
ここに来てどれくらい経っただろう。

人間の三大欲の中で、円グラフにしたらほとんどが睡眠欲に支配されているスノーだって、そろそろいい加減牢屋の中は飽きてきた。
拷問でもつけるだろうかと思っていたが、結局ネフェルティティに殴られた程度で、正直何がしたかったのか分からない。

「気高いと言うか、意地っ張りと言うか……」

きつと彼女は、楽な道を選ばずに自分の信念を貫きたかったのだらう。

それがたとえ、非難されるものだったとしても。

彼は石の台の上に座って、もう十分寝たくせに、まだあくびが耐えないようだ。

そろそろ、誰かが来てくれるだろう。

何となくそう直感的に思っていたから、彼は見事に何もしないでいた。自分が行動を起こすと、何かと効率が悪いし。

「スノー……全く、捕まってるのにあくびとは余裕ね」

ほら来た。

彼は牢屋の目の前に居るその人を、特に驚いた様子も無く見上げ、

「だってほら、君が来てくれると思ってたし……」

珍しく少し笑った。

淡い茶色のカラメル色の瞳。

信じてたというより、それはお約束だった。

彼女は鍵を開け、のんびり起き上がろうとしているスノーの手を引いた。

行くわよ、と言わんばかりに、相変わらず勝ち気な微笑みで。こう

いう所を見ると、ああやっぱりシャル口だなんて思う。

「おい、 急げ!! 敵がくるぞ!!!」

牢屋へと続く階段の下で見張っていた団長の声がする。

シャル口は急いで、スノーの手錠と足枷を外した。試してみたら、案の定牢屋の鍵と同じだったから。

「へえ、 団長も来てるんだ」

「へえ、 じゃ無いわよ。ほんと、 あんたつてがむしゃらに生きるタイプじゃないわよね……」

ガシャンと、鉛の鈍い音がして、手足の鎖が解かれた。

二人は急いで牢を出て、団長と合流する。

「よお、 大した事無さそうじゃねえかスノー」

「ええ……。自分でもびっくりするくらい、居心地よかったですよ、正直」

団長は相変わらずだなと鼻で笑って、それでも彼を救い出せた事に安心しているようだった。

スノーは、今ばかりは一生懸命走って逃げている事を嬉しいと思う。

そんな自分に、少し驚いた。

崩落寸前のテル・エル・アマルナの、玉座のある場所で、ネフェルティティは一人、王座の後ろにあるアテン神の壁画を見つめていた。その、アマルナ改革の象徴を。

「……………ファラオよ……………。我々のしてきた事に、意味はあつたんでしようか……………」

彼女はそつと、誰もいない玉座を撫でた。かつて、アクエンアテンが座っていた玉座を。

「その答えは、遠い未来に分かる。ラーの使徒こそが、答えであつただよ」

いつの間にかネフェルティティの背後に、黒髪の男が立っていた。エジプトの偉大なる神の一人、セト神が。

ネフェルティティは彼を見た後、皮肉に笑い、

「ふふ……ラーの使徒とはよく言ったものだ。……お前こそが、真に“ラーの使徒”ではないか。偉大なる太陽神の使いとして、あの小僧達を導いたのであるう……。呪いの化身を操る神官として、わざわざご丁寧に、こちらの味方の振りまでなさって……。セト神よ……」

くすくす笑っていたかと思えば、宮殿を包む炎が大きくなる様に、高々と笑い声をあげている。

彼女は、ただただ笑っていた。

“美しきもの来たる”

彼女の名前は、ある美術品によって、この先の未来に知れ渡る。彼女もまた、時代に翻弄された、呪われた時代に生きた王妃だと。

その胸像を見たものは、涙するのである。

ただ美しいと。

I
d
r
a
w

56：大時計

歴史を司る者よ

時の支配者よ

ゴーン……ゴーン……

チツチツチツチツチツチ……

チツク……チツク……チツク……

規則正しく時を刻み続ける。その音はいつたいなんだろう。

世界が動いている限り、たとえ人間が滅びようと時は進む。時代は常に動いている。

誰がどこで、何をしよう。宇宙にとっては地球はちっぽけで、地球にとっては、人の歴史なんてくしゃみしてたら終わってしまうほど短い。

そんな人間が、この世の理を全て理解出来るはずも無いのだ。行った事も無い宇宙の果てを夢描いて、与り知れない未来を計算する。

世界の範囲ってどこまでだろう。人間達の手の届く所までだろうか。そんな事を考えていたら、無限ループして戻ってきてしまっただけじゃない。

もしかしたら、それは神様の領域で、

自分たちには手に負えない事なのかもしれない。

ある時から俺はもう、宇宙や時間は哲学だと思っ事にした。

耳の中に広がる時計の針の音。

フォルテは、長い長い夢を見ていた気がした。

早送りの時代を漂っていたような、銀河の果てまで行っていたような。
な。

自分じゃ解決出来ない事に、支配されていたような。

ゴーン……

大きな時計台が奏でるような鐘の音がした。

彼は目を覚ます。

「……………ここは……………」

うつろな瞳で、地に足の着かない不思議な空間を見渡した。

空が下に見える。海が上にある。流れてくる小さな色の粒子が、彼にぶつかる。クスクス笑ってはじける。

目の前には、大きな大きな、時を刻み続ける時計。
何本あるのか分からないけれど、長さやデザインの違う針が、それぞれのペースでリズムを打つ。

もしかして、俺は死んだんだろうか。

何となく、エジプトで刺された事を思い出す。
痛みは無かったけど、自分の脇腹から血が流れている。

あのと意識が飛んで、気がついたらこんな、全く見覚えのない、不思議な空間にいた。
不思議と言っか、あり得ないと言っか。

やっぱり死んだんじゃないか、俺。

「こつちへおいで……」

そのとき、目の前の大時計から、自分を呼ぶ声がした。時計の方を見ても、何一つ変わりなく、針は時を刻んでいる。

「……………?」

フォルテはゆっくり、時計の方に足を運んだ。宙に浮かんだ、大きな円形時計は、その目の前まで行くともっと大きく見える。

「こつちへおいで……」

しわがれた老人のような、深く響く声。恐ろしいとは思わなかったけど、不思議と引きつけられる。

「……………誰だ!!?」

フォルテは時計の目の前で声を張り上げた。姿も見せないその声に向かって。

「選択せよ。お前の時のありようを」

時計から、再び声が聞こえた。

フォルテは当然、その質問の意味が分からなかった。

「生きたいか、死にたいか」

「知りたいか、知りたくないか」

細かい粒子の粒が、足下で溜まっている。
時計の針の音が、耳につく。

謎の質問に、フォルテは顔をしかめるしか無かった。

「……………知りたいか…だって？ いったい何を？」

「知りたいか、知りたくないか。時の理を。歴史の意味を。0の前の世界を。24の向こうの世界を。生きる事は知りたいと同じ。知りたくないは死ぬ事と同じ」

誰もが解き明かす事のできない、時間の答え。

フォルテが、考えても考えても、考えれば考えるほど、遠くになっていった真理。

彼は一度、時計を睨んだ。

「俺は、生きているのか？」

「それを選択するのだ……」

声は、目の前にありそうで遠くからも聞こえる。

選択する余地もない。生きる事ができるのならば、俺は生きていた
い。

まだ、もっと沢山、知りたい事がある。

やらなければいけない事があるのだから。

「生きたいに決ってる。こんな所で死ぬほど、俺は意味の無い事を
してきたつもりは無い……」

彼の答えは、目の前の時計、周りの粒子、その空間をわき上がらせ
た。

歴史の大時計は、一番大きな黒い針を回転させ、一度大きく高らか

に鳴った。

その針は、まっすぐに上を向いた所でピンと止まった。

カラン……………

フォルテの背後で、金属の落ちるような、小さな音がした。

驚いて振り返ると、真後ろに金の聖杯だけが、静かに置かれてある。

張りつめた存在感が、こんな小さなゴブレットから伝わってくる。

その凜とした空気は、聖なるものの様に、近寄りがたいオーラを纏っている。

金の聖杯には、美しい彫刻が。

「その聖杯の血を飲むのだ。生きて、知るために」

時計が、秒、分、時間を刻む音が、まるで彼を急かしている様に。

何も入っていないかった聖杯に、空間を漂う粒子のミストが集まって、絞り出す様に赤い血を注ぎ込んだ。

フォルテは今、自分自身が何を考えているのか分からなかった。

ただ、時の流れに促されるまま、その聖杯を手に取り、注ぎ込まれたばかりの鮮血を口に含んだ。

飲んで、ただ飲み干した。

生きたいと願え。

知りたいと。これから目にする事になる、歴史のあらゆる姿を。

それを背負うと覚悟しろ。

これは、神様が与えてくれたチャンスなのだろうか。

それとも、生きて行く事を天秤にかけた呪いだろうか。

聖杯に刻まれていたのは、神話の時代の、運命の戦い。

悲しみのギガントマキア。

ギリシアの血を分けたもう、神々の造った最高傑作。

人の美術品よ。

I
d
r
a
w

57: エジプトピラミッド〜ロゼアウト〜

水面越しの向こうの世界

限りある登場人物と、裏方の法則

「たまげたなあ。ここまで来ちゃったら行き止まりじゃないか。そして結局誰もいない……と」

レッド率いる取り残され組、もといピラミッド組は、その最上部の三角錐の空間に辿り着いていた。しかし、そのような空間のあるピラミッドなど実際の世界には無い。無いというよりは発見されていない。

やはりここは謎だらけの場所だ。

女子はみんなレイを囲って、彼女の様子をつかがっていた。

「大丈夫？ どこか具合でも悪い？」

「……………いいえ。もう大丈夫です」

レイはそう答えながらも、いまだにうずく右目の傷を気にする。痛い訳では無く、ただうずく。さっきのヴィジョンを見てから。顔色の優れない彼女を案じて、とりあえずここで一時留まる事にした。

カイはこの空間の中心にある“棺”のような物を慎重に観察していた。

と言うより、ここに辿り着いて、これを気にしなかった人は居ないだろう。

古い、それなのに埃一つかぶっていない、長方形型の箱。

「……………何だと思う？ これ……………」

「いや……………俺にはとても理解出来ません。」

ティアンの問いかけに、カイは控えめに答えた。ティアンは、その周囲をゆっくり歩きながら、

「まあ、これは鑑定士さんの領域ではないよねえ……………。どうしようか、中にミイラでも入ってたら」

棺の様な物をこんこんと叩く。

カイは苦笑いして、

「やめてくださいよ、怖いじゃないですか」

満更でも無さそうに、ごくりと唾を飲み込んだ。ティアンはうんうんと頷くと、

「おーい!! レッド、リオ!! これ開けるから手伝ってくれ!!」

向こう側で話していた二人に、軽いノリで声をかける。

カイは当然耳を疑って、

「ええええええええ!! 開けるんですか!!?」

「そりゃそうさ。こんな所にぼつんと置いてあって、開けてくれて言ってるようなもんだよ。……それとも何? まさか国際鑑定士ともあるう御方が、こういう物に興味が無い訳?」

「……い、いや……それは……」

ティアンの言い方は、いちいち言葉に詰まるような鋭いものだった。カイは当然、先輩の言う事には逆らえない後輩なので、「分かりました」と小声で答える。

「まあ、君が慎重になるのも分かるよ。……だって、“鍵”が絡んだ世界だもん。……なにが起こるか分からないもんねえ……。君の瞳には何が映っているのやら」

「……………!!?」

カイは、ティアンの言葉に反応して、一瞬固まった。ほんとうにこの先輩は、いったいどこまで知っているのか。それか、俺が“鍵”のことをどこまで知っているのか、試しているような気もする。周りから見たら、ティアンの落ち着いた表情と言うのが、カイから見たら悪巧みをしている悪代官にしか見えない。本当に恐ろしい先輩。苦手な人だ。

「で、これ開けちゃうんだ」

レッドは「うわあ……」と、とても微妙そうな面持ちで、隣のリオの様子をうかがう。リオは青ざめていた。

しかし、ティアンは鼻で笑うと、

「……やだねえ、度胸の無い奴って。もっとヴィライアーとしての誇りを持ちたまえ。どうせここから出られなかったらみんな餓死するんだから」

やれやれと言った様に、目の前の“度胸の無い奴ら”を見下す。

誰も今まで触れなかった事をずけずけと言いつけてるティアンを逆に尊敬する。

「餓死って……。もっと言葉をオブラートに包むとかな……」

「今更気を使ってどうするんだか。レッド、君今リーダーなんだからしっかりしなよ。ほら、開けるから!!」

「……リーダーの権限の無いリーダーですけどね……」

正直、全ての権限はティアンにあると言っても良い。ああ、団長の気持ちも今になって分かるよ……。と言いたい所だけど、ここは心を無にして従った方が良さだろう。

レッドは仏様のような笑顔で、棺に手を持って行った。

四人の大の男が頑張つて、本当に渾身の力を込めて棺桶のふたをずり落とした。重いなんのつて、ふたを退けた時、四人とも中身を確認する前に、その場に崩れ落ちた。

重い石のふたは、下に落ちると、もの凄く大きな音を立てて二つに割れた。

「やっべー！ 割れましたけどー！」

「いいよそんなの……別に誰も見てないし……」

「いいの！？ めっちゃ価値の高い物だったらどうすんのー！」

レッドは座り込んだまま、同じく腰を抑えているティアンに。

ティアンは「ふう……」と一度息をつくると、眼鏡を押し上げ、自らも立ち上がる。

メルベリーがおそろおそろ近づいてきて、

「それ……なんですか……？」

「これ？ さあねえ……どう思っ？」

彼女の疑問に、逆に問い返す。ティアンとメルベリーはいとこ同士

だ。同じ髪の色が、印象深い。
棺の中は、まるで空っぽだった。本当に、綺麗なほどに何も無い。
あんなに苦勞して開けたのに、そりゃ無いよと、レッドは大きくた
め息をつく。

それとは裏腹に、カイはホッと安心していた。
何が起こるか分からないこの空間で、やたらとアクションを起こす
のは正直怖い。

向こう側で女子たち＋一年生のヘルが、何をやってるんだと言いた
げな、冷めた視線を送ってくる。
ティアンは面白く無さそうな顔をしている。

しかしそんな、皆が安心したり拍子抜けしたりしている時、空の棺
の中に、どこからとも無く水が沸き起こってきた。みんな啞然とし
て、棺桶から離れ、何事かと様子をつかがった。

「ああー！！！」

最初に声を上げたのはヘルだった。彼は、何に気がついたのか、ふ
わふわの白い髪を揺らして、水の溜まった棺桶に駆け寄った。

「クレハだ！！ クレハどうしたの！！！」

驚いた事に、棺桶の中の水、その奥から一年生のクレハ・ドルフォ
ードが浮かんできたのだ。

その場に居た者は当然、嘘だろ…と青ざめ、でもそこに現れた少年
を疑う事はできなかった。

「ちょっと……この子息してないわよ……っ!!」

棺から彼を引きずり出し、あわてて様子を見ていたシーダが、クレハの状態に気づく。いったい何があったのか分からないが、彼は青い顔をして、息をしていなかった。

皆がどうしていいか分からない中、シーダはためらわず、クレハに人工呼吸を施し始めた。

慣れた手つき、真剣な表情はまさに人助けを常としてきた彼女らしく、皆を驚かせる。

「……凄いやシーダちゃん……。素人じゃないね……」

レッドは素直に感心していたものの、隣からただならぬ気配がしてぎょっとした。

そして、「あちゃー……」と額に手を当て、

「あの……リオ。君は見ない方がいいと思うんだけど……」

「何言ってるんですか先輩……。僕がそんな心の狭い男に見えますか……?」

リオの顔は笑っていたが、目が笑っていなかった。当然、ここに居る誰よりも、複雑で仕方なかっただろう。

彼の心の中は、「このくそガキ、目覚めたらどうしてくれよう……」
という正直なささやきと、「何言ってるんだ!! シーダは人助けをしてるんだぞ!! それを受け止められないなんて、何てクソな彼氏なんだ!!」という自らの良心が戦っている。まさに葛藤の絵。

さすがの女子たちは、真剣にクレハを心配していたが、男子達は
オが気になって、正直いたたまれなかった。

「クレハ！！ クレハ！！」

「…………戻ってきなさいよ。あんた死ぬにはまだ早すぎるわ！！」

ヘルは彼の側で、クレハ以上に青い顔で、泣きそうになりながら彼
の名を呼び続ける。

シーダがクレハに、何度目かの息を吹き込んだ、そのときだった。
彼は水をはいて、息を吹き返したのだ。

シーダはほっと胸を撫で下ろし、祈る様に見守っていたメルベリ
も、「良かった…………」と安心したようだ。

泣きそうになっていたヘルは、彼が頬の赤みを取り戻し始めたのに
気がついて、むしろまた泣きそうになっている。

シーダも凄いが、クレハも凄かった。さっきまでは死人の様に動か
なかつたくせに、ゲホゲホと数回むせた後、まるでちよつとご飯が
喉に詰まってさ、みたいな感覚で、

「あーっもう！！ 何だよあのバカブサの奴！！！！」

ぴよんと飛び起きると、周囲からしてみれば意味不明の事を叫んだ。
さっきまでの自分の状況をつゆ知らず、何をそんなに怒っているの
か。

「…………て、あれ？…………どうしてみんなこんな所に居るの？ていうか

「……」

「……………」

さっきまであんなに心配していたのが癪だと言っほどの、クレハのユルさ。彼は「何だよ、みんな目が点だぜ!!」とか言いながら、もう普通に元気だった。

リオが黒いオーラを放っていたから、レッドは「早まるなりオ!! 奴はまだ子供だ!!」と、お怒りを抑えようと必死だった。

「だから、エジプトに居たの!! ていうか俺は雲の上に居たっていうか。鳥に乗って、空を飛んだ、みたいな。」

「ダメだ……。もうちょっと会話の通じる奴が帰ってきてくれないと……」

クレハの話は、古代エジプトに皆が居るんだな、と言う事以外は、

全部意味不明だった。彼の身に起こったことは、彼自身もよく分かっていなかったのだから、当然と言えば当然であるが。

古代エジプトに行ってしまった、と言う事もにわかには信じられない事だ。

その時ふと、レイは眼帯の奥の右目が、再びうずくのを感じた。自然と、例の棺の方に視線が向かう。

さっきみたいに何かが見えた訳ではないが、訳の分からない不安が胸をかき立てる。

何だろう。

脳裏に焼き付いて離れない、血だまりの中に居たフォルテ。

彼の身に、何か起こったのではないだろうか。

不確かな情報のくせに、押し寄せる陰りに飲み込まれてしまいそう。

どうか、早く帰ってきて。

彼女は、沈黙の棺桶をじっと見つめた。溜まっている水の面は、何の乱れも無い。

帰ってきて。。

何事も変わりなく、
今までのあなたで、
どっか早く帰ってきて。

I
d
r
a
w

58・エジプトプリンセス〜目をつむるための夜〜

まだ君を許さない

耳を塞ぎ、目を閉じる

全てにシャットダウンしなければ、生きていけそうにないから

都を出て、軽く三日は経ったと思う。

砂と夜空だけを見て、昼との温度差に戸惑うほどの空気の冷たさ。
絶えず人工の光や、人工の音を耳にしている現代で、こついった何も
もない世界はなかなか無い。

フレイとジェイル、そしてカーロンは、黄金のマスクを手に入れるため、この砂漠を横切っていた。カーロンだけが、その場所を知っている。

どのくらいの旅人がその砂漠を横切って、その足跡を消していったのだろうか。徐々に強まる砂嵐は、生きているものを寄せ付けず、大地を削っていく。

「もうすぐ、忘れ去られたセト神の神殿に着きます。……前の改革で弾圧された神の神殿です」

タハールは、神殿に近づくほどに、険しい表情だった。

「よくもまあ、こんな砂と風しかないような場所で、もうすぐですとか言えるよなあ……。本当に位置分かってんのか？」

砂嵐で、なかなか声の届きそうにないお互いの間隔。うっとおしいったらない。

カーロンの背中につかまっているジェイルは相変わらずむすっとした表情で、口数も少ない。

と言うより、フレイとは話したからない。

「おい、大丈夫か！ ルネ・サファイア！」

「……………」

と言った感じだ。フレイの一人ごとは空しく風にかき消されるばかりである。

カーロンはいつたい何を頼りに、神殿に向かっているのだろう。我

々には分からない何かがあるのだろうけど。
大昔の時代は、それこそ科学、機械など、発達した技術のない時代だ。しかし、だからこそ我々の知り得ない古の力があるのだろう。

「見てください……。この荒れ果てた神殿を。神を祀る場所が、このようであっていいはずがないと言つのに……」

カーロンと、フレイ、ジェイルの目の前には、砂嵐に守られた寂れた神殿があつた。

途中から折れてしまっているオベリスクや、そこにあつたのだろう巨像の残骸。

そこは、神殿とは名ばかりの、岩屑の山だつた。

「……やっと着いたか……。三日もかけて、こんな陰気な場所に」

フレイは、目の前の暗い神殿を、白々と冷めた目で見る。

どう見たって、歓迎されている様には見えない、その雰囲気。

「ここにあるのか……。？ その、黄金のマスクって……」

ジェイルは、フレイとは違ってまっすぐな瞳で、その神殿を見つめている。

彼女の瞳には、この神殿はどう映っているのだろう。

「ええ。この神殿の最も奥に封印されているのです。我々ラーの神官団は、もう二度と黄金のマスクが日の元に出ぬ様にと、固く閉ざした扉の奥に隠したのです」

「はああ！？ それじゃあなんだ、俺たち取ってこれないじゃん！」

フレイは、声に抑揚をつけて、ここまで来た意味をもう一度問いた
だす。

「三日もかけたのに、何言っただよカーロンのじいさん！！」

「いやしかし、私が思うにラーの使徒という御方が、真に求める心の内を神に示せば、黄金のマスクを見つucker事が出来るのではないかと……」

「こんのくそじい……。俺たちは便利な魔法使いじゃねえぞ。何夢見てやがる」

フレイの言い分は最もであったが、ここは文句を言っていたって仕方がない。

「いい加減にしろ！！ どうせ、黄金のマスクを持って帰らない限り、私たちも元の世界には帰れないのだ。やらないといけない事は決まっているはずだぞ！！」

ジェイルは眉を吊り上げて、カーロンにつかみかかっているフレイに突っかった。カーロンはニヤツと笑う。

「ちよ、おい。お前この前まであんなに嫌だ嫌だっつってたくせに。

急にやる気満々じゃねえか」

「今更何を言ってる。私が嫌だったのはお前と言っ存在だ」

「……………」

フレイは、もう何も言い返せなかった。

今まで、同じ年頃の女性に、存在まで否定されるほど嫌われた事がなかっただけに、ぽかんとなくなってしまふ。

「お前が消えてしまえばいいのだ」

さらに追い打ち。

彼女はフンとそっぽ向くと、「さあ行こうか」とカーロンに促す。男嫌いと言っても、その男にもレベルと言っのがあるらしい。

神殿の中は、たいまつ炎がなければ、きつと何も見えないのだからうなと分かるほどに暗かった。当然、今は夜だから仕方ないが。ヒンヤリした空気、じめじめした雰囲気。生きている心地がしない。

「…………昔、私たちの隠れ住んでいたオアシスが、王宮軍に襲われた事がありました。忘れもしません、あの時私は、大切にしていたものを沢山奪われたのですから……………」

「……………息子さんがここで死んでいたと……………言っていたな……………」

ジェイルは横目にカーロンを見ながら、ふいに問いかけた。
カーロンは少し瞳を大きくさせたが、髭に覆われた表情は、相変わらよく分からなかった。

「ええ。……………オアシスが崩落した後、息子は突然姿を消したのです。どこへ行ったのか分からなかったのですが、虫の知られと言いますか……………。何年か経った後、私はこの場所を探しにきたのです。根拠はなかったのですが、息子がここに来たんじゃないかと……………」

カーロンの声は落ち着いていた。遠い昔を思い出しながら、彼の瞳はどこか、暗い泉のそこを漂っているようだった。

「ええ。息子はここに来たんです。しかし、見つかったのは息子と思われる白骨と、その持ち物だけ。すぐに分かりました、それが私の息子だと……………。私は、息子の亡がらと、その形見を持って帰りました」

カーロンの息子、タハールにはまた、息子が居た。皮肉にも、彼が目にする事はなかった息子が。カーロンはその子供に、父と同じ“タハール”と名付けた。

よく似た面影、幼かった頃の記憶を、自分の孫に求めて。

決して平坦な道とは言えない、ガタガタした神殿の回廊を進む。くぼんでいたり、急に出ていたり、引っかかりそうで嫌になる。

「本当にこんな所にあるのかねえ……。その黄金のマスクって……」

「文句が多いぞ。嫌なら一人で引き返せ」

「あいつかわらず、手厳しいねえ……」

フレイは、彼女との嫌味のやり取りが、だんだん普通の会話の様に感じてきた。何となくそれを面白いとさえ思う。彼女の頑な態度は勇ましいが、その態度は自身の何かを守っている様にも見える。そう言った意味では、非常に興味深い。

その、心の内を暴いてみたい。

フレイは一人、心の奥でほくそ笑んだ。

と、そんな風に淡々と、どこまで続いているのか分からない通路を歩いていたら、ジェイルは突然立ち止まった。

「……………」

「……………どうした？」

フレイは、様子のおかしい彼女に声をかける。しかし、ジェイルは止まったまま、何かにそっと、耳をそばだてている。

「何か聞こえる……。お前、聞こえないのか？」

「聞こえるって何が……………」

フレイは、耳に手をあて、しんとした空気の、その向こうの音を拾おうとする。カーロンは黙って二人を見ていた。

沈黙の奥の、耳をかすめる声。

フレイは、音のような、声のような。泣き声のような、笑い声のような音を、微かに聞き取った。

『……………何だこれ……………』

ジェイルとフレイは顔を見合わせて、一度頷くと声のする方へゆっくり歩いた。

カーロンはその二人について行こうとしたが、その時、フツと、見えない誰かがたいまつに炎に息を吹きかけた様に、その唯一の火は消えたのだ。

ジェイルは、急に暗くなった視界に戸惑ったが、フレイは、

「いいから、声の方向にゆっくり歩くんだ。……………足下に気をつけるよ」

特に臆する事もなく。

「ま、待ってくれ！！ わ、私は……………暗いのがダメなんだ……………」

ジェイルはガラにもなく、声が震えている。いつもは、痛いほどはつきりした物言いのくせに。

こういう所はやっぱり女の子だな。

「……………そうかい。……………じゃあ……………」

フレイは、側に居る彼女の気配を頼りに、グイッと腕を掴んで引き寄せる。ジェイルは、何が何だか分からなくて、声も出ない。

「俺が引っ張って行ってやるから、離れるんじゃないぞ」

暗闇の中の彼の声は、いつもみために、嫌に勝ち誇ったような余裕のあるものだった。こういう時、いつもの彼女だったらその手を振りほどいてしまう所だが、今この手を離されると恐ろしいと思うしまう。

彼女は黙って、彼の背中の服を握った。

さすがに手は握ってくれないのねと、フレイはこみ上げる笑いと、残念だと言つ複雑な気持ちに、我ながらどうしようもない男だと思う。

しかしまあ、こういうのも可愛いじゃないか。

ジェイルはこの状況の中、複雑すぎる心境に、ただ唇を噛むしか無かった。

こういうのはずるい。

弱みに付け込まれたみたいで悔しい。

ジェイルは、自分のふがいなさに心底呆れたが、

今は、彼が目の前に居る事。その背中 of 温もりだけが頼りなのだと、ちゃんと分かっていた。

59：エジプト平原の40〜砂の丘へ

水を探るような関係

人間と神の手のひら。固いその絡み

逃げる私の歩幅より、近づいてくるあなたの歩幅の方が大きい

自分がいったい、どこを歩いているのかさえ分からない暗闇の中で、その声は微かに、しかし絶え間なく聞こえた。フレイとジェイルは黙って、声を聞き逃さない様に、出来るだけ足音を立てない様にして歩いている。

『……何て言ってるんだ？……ただのうなり声にしか聞こえねーけど……』

フレイは、徐々に慣れてきた暗闇の、その向こうの気配を探る。ジェイルは相変わらず、フレイには出来るだけくっつかない様に、しかし彼の服を握りしめる手はもの凄く固かった。

『……ま、いーけどね……別に……』

フレイは背中にいるジェイルを、何だか愉快に感じた。

男嫌いで、学校ではクールビューティーって言われてるけど、こっつという弱点があるからこそ可愛いというか何と云うか。

「おい、どこへ行っている……そっちじゃないだろう……」

「え……マジで？ あれ、どっち？」

フレイは考えながら歩いていかせいで、完璧に声を聞き失った。ジェイルは、彼の服を引っ張って、

「こっちだー!!」

「いや、こっちって言われてもどっちだよ……」

「こっち……だー!!」

彼女はイライラした様子で、彼の腕を探って、その手を持って方向を示した。フレイは、これには正直驚いたが、

「ほ、ほお……。今のちょっといいじゃん……。俺そそられるよ、

手つきとか……」

「バカかお前は！！ ふざけた事言っでないで、もうちょっと真面目に進め！！！！」

彼女は掴んでいた手をそのまま思いきりつねった。それはもう爪を立てて。

「いつっ……っ……っ……てめえ……」

彼はその痛みに、天を仰いだ。さすがにこの時は、これ以上相手を刺激させるような事は言わない方がいいかなと、背中を取られている状況にヒヤヒヤする。

ここでこいつに殺されても、誰も見つけてはくれまい。彼は素直に、彼女が示してくれた方向へと足を進める。

「お前のせいで、声が聞こえなくなった！！」

「俺のせいだよ！！」

二人は相変わらず言い争いながら、暗い中、細かい足取りを刻む。声は、さっきまで確かに聞こえていたのに、なぜだ。

聞こえそうに聞こえない。自分たちがその声を負っていた様に、声も逃げていたのだろうか。

いや、声は確かに、俺たちを呼んでいたはずだ。

「……………?」

ふと、足下がふわりと地面を抜けた。
心臓がひやりとする、ジェットコースターでよくある落ちるときの
感覚。

「う、うわあああああ！！！！」

「きゃあー！！！」

まず、フレイが落ちて、彼につかまっていたジェイルが引き込まれた。

暗闇で何がどうなったのか分からなかったが、とにかく“落ちただ”と言う事は分かった。

浮遊した感覚は、不確かな現実の様に。

落ちていくのは我々が、リアルか。

柔らかく、くすぐったい感触は細かい砂の、もっとそれを砕いたよ
うなものだった。

落ちていく時間が長く感じられた様で、とても短かった気もする。

「……………あー……………こりゃあ、まいったな……………」

フレイは、勢い良く突っ込んだ砂の中から顔を出し、見るからに嫌

そうな、うつとうしそうな顔をしていた。

口の中を転がる砂の感触に嫌気がする。巻き起こる砂埃を手のひらで払おうとするが、それも結局あまり意味がないようだった。

砂の深さはそうでもなかったが、あまりのも細かくさらさらしていたので、そこから出る事もままならない。

「おい、お前大丈夫か？」

すぐ側で砂埃にむせていたジェイルは、涙目で何も答えられない。服の中に入った砂を振り落とそうとしていたが、結局自分たちがその場から出られないので、どうしようもない。

さあ、とんでもない所に落ちてしまったぞ。

フレイは暗い天井の穴を見上げた。そりゃあこれだけ古い神殿だ。どこかにボロが出たって仕方がないだろうけれど。

ふと、その時気がついた事がある。

さっきまであなたに視界が暗かったのに、今は薄くぼんやりしているが明るいと言う事。

「お、おい……ここ明るくないか？」

「……………？」

ジェイルもやっと、その事に疑問を示した。お互いの存在が見えると言う事の違和感。ここには明かりがないはずだ。彼女は周囲を見

渡す。

腰元までつまっている細かい砂と、この広い地下の空間。古くて形も曖昧だが、高い壁や柱には、祭られている神々の像や壁画が。

きつと、ここは神聖な大広間。

「……あまり、荒らされた跡が無い……。この場所は見つけにくい所にあるのだろうか……」

「かもな。……もしかしたら、現代でも見つかってないのかもしれない。この神殿自体残ってないかもしれないが、俺たちが第一発見者？こりゃいいネタだな」

「……………」

ジェイルの冷めた視線が痛い。

彼女はフレイに言葉を返しもしないで、再び周りの様子をつかがった。

光源は分からないが、受け入れやすい淡い光に、それはもう、理屈ではない何かなのだと思ふ事にする。

あえて言うのなら、神の居る間の神聖な明かり。その空間自体が、信仰と言う名の水色の光源なのだ。

「……………」

それは、突然の視界と聴覚の変化。

徐々に見え始め、聞こえ始めた光景。

笑い声、祈り、崇拜の言葉、そこに生きた者達の残像。

「お、おい……」

フレイはジェイルの側に、砂を横切ってやってきて、自分たちを囲む“彼ら”の様子を見ていた。

驚いた。

これは現実なのか。

「何だこいつら……」

彼らはフレイやジェイルを気にとめず、側を通りすぎたりそれぞれの営みをかわす。

最も驚いたの、彼らは“触れられない”と言う事だ。いきなり走ってきた子供が、フレイの体を通りすぎ、目の前の母親に駆け寄っていったから。

ジェイルは瞳を細め、この穏やかで澄んだ空気の彼らの営みを見つめている。

にぎやかなのに、どこか奥ゆかしく、神を信じ信仰してきた時代。

その穏やかさが逆に訴えかけてくる。

今や誰もいなくなった神殿の空しさ。悔しさを。

彼らはきつと、ここに念を残す亡霊。

権力に滅ぼされてもなお、この場所を守り続けているのか。

「こんなものを見せられて……我々はどうしたらいいんだろうな……」

ジエイルは目を伏せて、悲しそうに笑っていた。彼女の心に訴えかける亡霊の念は、あまりにも重い。

時代を超えて、国を超えて、彼らの訴えたい事は何だ？

フレイは彼女を横目に見て、ガラにも無くそのような事を思った。

腰ほどにある砂まで、過去のヴィジョンには映らないのに、我々の歩みを鈍られるその感触は確かにあるのだ。

笑顔で通りすぎていく残像に追いつこうと思っても、我々の進む速度は遅いのだ。

「……………進歩していく時代が、逆に失っていったもの……………か。痛いねえ……………」

ポツリと出てきてしまった言葉は、素直にそう思った本心だ。

責められている訳ではないが、心が少し痛い。痛いのは切ない寂しい感じに似ている。

彼らは便利な世界こそ持っていなかったが、精神の奥の世界を知っていた。

それが正しいと言う訳では決して無いだろう。

技術の発展は人間の本能。文明のあるべき姿。幸せになるための手段。

ただ、今はその方向が分からなくなっているだけ。ただしそれは、人類の大きな罪。

ふと、再び何も無い、砂と我々だけの空間になった。急に訪れた静けさが怖い。

「……………」

「……………消えた……。何だったんだ、今の……………」

二人は顔を見合わせて、再び周りを見渡す。声も、神聖な音も、もう聞こえる事は無かった。

ここまで導いた彼らの強い念は、二人の心に、大きな衝撃を残して、その場からはすっかりいなくなってしまったのだろうか。いやもしかしたら、まだここに、ずっとここに居続けるのかもしれない。

それだけ強い思いがあったのだろうか。

辺り一面砂だらけの中で、ジェイルはふと、その砂に半分沈んでいる“何か”を見つけた。

「!?!」

さっき、過去の記憶を垣間見る前までは、その場に無かったもの。

彼女は砂をかき分けて、まるで引き寄せられる様に必死にそれを求めた。

「お、おい!!!」

フレイも彼女に必死になっつついていく。

“何か”は少しずつ砂に沈んでいつている。と言うより、砂がそれを中心に、砂時計の砂に吸い込まれるように下へ向かっているみたいだ。

「時間がないんだよ」と、彼らを急かす様に。

待って。

沈んでしまわないで。

ジェイルは、抵抗感のある砂を煩わしく感じながら、それに手を伸ばす。

「おい!!! そっちへ行くな!!! 巻き込まれるぞ!!!!」

フレイはジェイルを追いかける。ジェイルは“何か”を追いかけ、見え隠れする“何か”の瞳は、常に我々から視線を逸らさない。

彼女が“何か”を捕まえた時、今までは安定していた足下が急に安定感の無い物に変わったのが分かる。砂の渦に引き込まれ始めた彼女を、フレイは必死になっつつ捕まえようとした。

彼に気がついたジェイルは、その手を伸ばし、その手を求めるフレ

イが、吸い込まれていく砂の海に身を投じ、

ただ二人は、下へ下へと流されていく砂の中で、固く手を取り合っていた。

その息苦しさは、砂による物理的なものではないと思う。

気がついた時、そこは既に神殿の外だった。

この神殿に来る前までは、あんなにひどかった砂嵐が、嘘の様に止んでいた。

そこは、とても静かで穏やかな砂漠と廃墟。月と夜。

「気がつきましたか……？」

気を失っていた彼らは、カーロンに見守られていた。

彼は、驚いた様子も無くただ穏やかに。

「よくぞ、黄金のマスクを持って帰られました……」

彼の視線の先には、ジェイルが腕に抱える“何か”に向けられてい

た。

夜の月明かりでも、その輝きは見取れる。
表面が輝いているとかではなく、それ自体、“黄金のマスク”と言
うものが持つ、内面的な輝き。

秘めたる力。

“黄金のマスク”

顔を隠す意味など無い。

それは、死んでもなお、先の時代を見張るための瞳。

叱るための口。

嘆きを聞くための耳。

／終わり

フレイとジエイルは、ただあっけにとられていた。
身の上を起こった、あり得ない現象についてでは無い。

ただ、あっけにとられていたのだ。

何か、とても大きな存在の御心に触れた様に。

カーロンは、そんな二人に優しく声をかけた。

「……………我々がこの神殿をマスクの隠し場所を選んだのは、それだけ神と彼らの結びつきが強かったからです……………。他神だとしても……………彼らの存在は否定出来ない。亡霊達は、いつまでもここを離れないでしょう……………」

そして、悲しそうに笑った。

「彼らがここに居たと言う事を、どうか忘れないであげてください……………」

I
d
r
a
w

60：エジプトプラン41〜それは一瞬のレクイエム〜

あなたの理想は叶います

俺が最後に、あの人に言った言葉は嘘なのか

真実なのか

ルナシーは夢を見た。

あの、崩落していくオアシスの炎を。彼らの悲鳴を。

十年と言う月日の流れを知らずに、私はあれから十年後の世界にいる。この不自然さ。

彼女にとってあれは、たった十日ほど前に起きた出来事だ。生々しく覚えている。今の時代ではだいたい過去の出来事だ。

朝だ。

今日はよく晴れた、穏やかな日になるといいと思う。

ベットからの景色しか知らない彼女は、そっとベットを抜け出し、廊下に出た。渡り廊下から見える中庭は、彼女の心を、二人の子供に花の冠の作り方を教えていた日々を思い起こさせる。

「この中庭は、あの王宮の中庭より小さいわね……」

そっと呟いた言葉にどういった意味があったのかは、今の自分には分からない。

彼女が中庭の、中心のキオスクに目をやった時、小さな人影に気がついた。

「……………あの子……………」

彼女はすぐに、その小さな子供が誰なのか分かった。

キクマサが昨日、話していた。私たちが、あのオアシスでお世話になっていたタハールさんの子供が、この王宮にいるって。

横顔しか見えないが、その子はとても彼に似た面影がある。

「……………どうしたの？」

ルナシーは声をかけてみた。この、小さな子供が、朝早くからキオスクで一人、とても寂しそうにしていたから。

「……なにしているの……？」

ルナシーの声に気がついたタハール少年は、子供らしいあどけない顔で、驚いた様子を彼女を見ていた。

浅黒い肌と大きな瞳に、タハールと言う存在を見いだしてしまう。

「……お姉ちゃん……誰……？」

「私……？ 私はルナシーよ……」

彼女はゆっくりと、タハールの隣に腰を下ろした。

タハール少年は、側にいる人の温かみと言うものに安心感を抱いた様に、小さな体に入れていた力を抜く。

「……どうしたの……？ こんな朝早くに」

「……だって……皆いないから……」

「………？」

ルナシーには、よくわからない事だったが、その時ふと思う。彼の父親、タハールは、ずいぶん昔に亡くなったと言いが、いつかどうして亡くなったのだろう。

「旅の途中で、みんな居なくなっちゃったし……今はおじいちゃんも居ないんだ……。僕は一人だ……」

「………」

タハール少年は足をぶらぶらさせながら、とても不安そうな顔をし

ている。当然だろう。

こんな小さな子供が一人、知らない場所に置いていかれる気持ち。

ルナシーは眉根を潜めた。

「なら、私と遊びましょう？ このキオスクで……」

何だかこの子を見ていると、今のファラオとアンケセナーメンの子供の頃を思い出す。とは言っても、私の中であの子達は、最近出会ったばかりの子供達と言ってもいいが。

タハール少年は、何だか嬉しそうに頷いた。

さっきまでのしょんぼりとした空気が、いつの間にか暖かい。

子供って、感情が素直で、それでいて引きずらない。

何とも爽やかなものだ。

「……………」

キクマサは啞然としていた。ルナシーに会いにきたら、部屋に居なかった。それはともかく、キオスクに向かったら彼女が、小さな子供と一緒に花の冠を作って遊んでいる。

「何やってんだ……………ルナ……………」

キクマサはなぜかおそろおそろ近づいて、様子を見ている。隣にいる子供は、例のカーロンさんの孫だろう。ルナシーやフォルテがお世話になった人の子供。話には聞いていたが、実際関わった事は無かった。

「あら……キク。この子、タハールさんと同じ名前なのよ。……ふふ、あなたも冠、作ってみない？」

「え……俺、作り方分からないけど……」

キクマサはとりあえず、二人が座っている草原の上に座った。そこには、スミレや矢車菊、シロツメ草などが生えていた。カーロン少年は、さつきから黙々と冠を編んでいる。

「キク、あなたにも出来ない事があったのね……」

「俺には出来ないことだらけさ。……へえ、綺麗に出来るもんだな……」

キクマサは、もうすぐ編み終わるタハールの“作品”を覗き込んで、素直に感心していた。

タハールは「出来た！！」と、嬉しそうに声を上げる。

そして、今更キクマサに気がついた様に、彼をきよとんと見て、ルナシーに問う。

「……………このお兄ちゃん……誰？」

「この人はキクマサって言うのよ。変わった名前でしょ？ 私たち

は仲間なのよ」

彼女はキクマサに、矢車菊を一輪渡しながら、軽くウインクする。キクマサは、“仲間”と言う言葉に、よくわからない安心感を覚えた。友達と言うより、確かに仲間と言った方が近い様に思う。

タハールは「ふうーん……」と、彼の方をじっと見ていた。純粋な、だからこそ何を考えているのかまるで分からない瞳で。

キクマサは、子供と言うものに免疫が無い。

自分が一人っ子だったし（父親の再婚相手の子供は別として）、このくらいの子供とのふれあいは無かった。

だから、ちょっとどうしていいのかわからなくなる。

「ふふ……ふふふ……っ」

そんな彼を見て、ルナシーは堪えきれずに笑っていた。

「……………何かなルナシー」

「いや、ごめんなさい。…あなたの反応があまりに面白くて」

キクマサの何とも言えない表情に、彼女は顔を背けていまだに笑っていた。何がそんなにおかしいんだか、当の本人は分からなかったのだが、そこまで笑わなくてもいいだろうと。

タハールは、そんな二人を交互に見渡し、一生懸命もう一つの花冠を造り始めた。

誰かと一緒にいるという喜びを、この子は知っている。

穏やかな時間と、胸の不安が混ざりあう。

居心地がいい所が、どこか安定しない。

まるで、一枚の薄い水彩画の様に、儂いものの様に感じる。

夕方近くまで、キオスクでタハールと一緒に三人で過ごした。彼は子供ながらにとっても心配りの出来る、しっかりした子供だ。大変な目にもいっぱいあってきたし、辛い事もあったのだろう。そう言った経験が、このようにたくましく優しく育つ要因になったのはいささか切ない。

タハールは、久しぶりに誰かと一緒に遊んだ事がとても嬉しかったのか、常に動き回ってはしゃいでいた。だいぶ年の上の二人に好かれようと必死なのだ。

それが健気でいたいだけで、小さな感動を得てしまうのは言うまでもない。

はしゃぎ回っていたタハールは、気疲れしたのと、普通に疲れたのとで、こっくりこっくり眠そうにしていた。

ルナシーとキクマサは顔を見合わせる。

「……………どうしましょう。私の部屋で寝かせてあげましょうか」

「…そうだな。俺、おんぶして連れて行こうか……………」

キクマサは立ち上がると、眠そうなタハールに「ほら」と声をかけて、小さくて軽い彼をおぶった。

ルナシーはそっと、おぶさった彼の背中を優しく撫でる。

「ふふ、キクそうやってると、お父さんみたいね」

「……………どうだか」

照れているのか、本気で複雑なのか、キクマサは苦笑い気味だった。タハールをルナシーのベットまで連れて行って、ふと思う。

父親と言うものを。

キクマサにとって、父親とはあまり良い印象のものではない。タハールにとっては、父親とは“分からない”ものだ。

『世の中の父親が……………全て良い父親とは限らないよ……………』

キクマサは、眠るタハールを見つめ、誰に何を言いたいのか、一人そんな事を思っていた。

ルナシーがタハールを見ていると言っていたから、彼は一人、あのキオスクに戻った。

夕暮れの寂しさが、静かになった現実を告げているみたい。

今日はファラオが来るだろうか……。

何だろう。さっきまでの明るく穏やかな気分は、“父親”と言うものを意識したせいで、暗くも明るくもない無の感情に陥る。

ファラオの父親の話は聞いた事が無いが、アンケセナーメンさんの父親が、前ファラオのアクエンアテンだとは聞いている。

彼女は、この争いを引き起こした父親をどう思っているのだろうか。父親と言っただけで、血のつながりが恨む事を許さず、葛藤の中にその存在を置いているのだろうか。

『……そんな事は無い……。血の繋がりがあつたって、父を恨む事は出来る……』

キクマサは、ふと瞳を細めた。

彼の瞳は、静かで寂しい色をしている。さわさわ、草花の揺れる音が、夕方のオレンジに語りかける。

こんな所で、いったい何を考えているんだ……。

額に拳を置き、今はそれどころじゃないだろうと頭を小突く。それに、今の俺に父親なんて必要ないはずだ。

俺の存在を認めてくれる場所を、手に入れたはずだ……。

その時だった。

オレンジの空は、いつの間にか紺色の波を運んで、星の瞬きが目立つ様になっていた、そんな時だ。

それは、闇の訪れる象徴だったのだろうか。

「きゃあああああああああ……！……！……！……！……！」

宮殿の離れまで聞こえた、その悲鳴。悲鳴の後に訪れた、人々のざわめき。

ここまで届く混乱の声。

「ファラオ……！！ファラオ……！！」

分かる。

聞こえる。

誰かが泣いている。ファラオの名を呼んでいる。

キクマサは、心の奥のざわめきと、血の気が引くような、お告げに似た確信を抱いていた。
後ろから追いついてくるような強い風が吹く。

『ああ……そうか……』

彼は、こみ上げる涙を、どうしようもなく抑えられなかった。震える手で頭を抱え、自分の無力さと、やるせなさど、どうしたって変える事の出来ない歴史の流れを憎く思う。

そうか。

とうとうその時がやってきたのか……。

地面に落ちる涙は、目の前がひどく歪んでいたから見えもしない。分かっていた事なのに、こんなにも早く“この時”が訪れるなんていや、それすら分かっていた事だ。

紙の上の歴史なんて、所詮文字。

本当の事は結局、その時になってみないと実感出来ない。

ザワザワしている。

誰も悲しんでいる。

その、雰囲気だけで伝わってくる何か、キクマサの心をひどく痛めつける。

ファラオ。

歴史上名高いツタンカーメン。

あなたの死を知っていながら、俺はそれを受け入れがたい。

見てなくても伝わってくる、
“死”と言つものの絶望感を。

それは一瞬のレクイエム。

I
d
r
a
w

61: エジプト平原に42の神のみぞ知る

苦しかった

この十年間、白と黒の世界しか見えなくて

宰相アイについて話そう。

彼は、アクエンアテンより前の、アメンヘテプ三世の時代から官僚として王族に仕え、アクエンアテン亡き今もツタンカーメンの摂政として、彼が幼い頃から仕えてきた。

彼は、今やかなりの高齢である。

何度となく訪れた王宮の危機は、このアイが居たからこそ乗り越えられたと言えるだろう。彼はそれほどに政治的実力と権力があり、人望があつた。

「……………」

アイは肩からズレ落ちそうになった白い布を、ゆっくりかけ直した。十年前から感じていた、ファラオと国政と、突然現れた“ラーの使徒”といういかがわしい存在への妙な苛立ち。

ラーの使徒は、この国の厄災に違いないとずっと思ってきた。だから、亡き者にしておこうと色々働きかけてきたのに。

結局ファラオも王妃も、前ファラオのアクエンアテンと同様に、奴らを祭り立てる。この国を救ってくれる奇跡の存在だと信じて。

ばかばかしい。そんなものに頼ろうとする時点で、国の王である事を放棄しているようなものではないか。

「ファラオよ……………」

アイはそつと、誰もいない部屋でその名を呼んだ。それが、彼にとつての、いつの時代のファラオなのか分からなかったけれど。

あの時もそうだった。

私の言う通りにことを運んでおけば良かったのに、ファラオは自分の意志で“アマルナ改革”と言うものを強制した。

前のアクエンアテン王は、ファラオとしての存在感は持ち合わせていたものの、王としての我慢強さを持ち合わせていなかった。

先に進もうとしすぎたのだ。

それが徐々に、私に不信感を抱かせた。

今のツタンカーメン王。

幼い頃から私が導き、見張ってきた。今度こそ、間違った方向へと国を連れて行かない様に。

そのままでもよかった。

そのまま、私に導かれていれば。

アイは自分の中に見え隠れする不信感や疑いの念に、失笑した。なんだろつ。

あの時、あのアクエンアテンが亡くなる前も、こんな気持ちになつてしまった気がする。自らがファラオになれない事を、どうしようもなく恨めしく思う。

黒い影が、私に覆いかぶさり、言い聞かせる様に。

彼は一度瞳を閉じて、そしてもう一度開いた。

そして、その数十分後に、全ての終わりと、何かの始まりが訪れる。

キクマサは、こみ上げる悲しみに閉める蓋は無いのかと、本気で思っていた。

こんな所で泣いてる場合じゃない。

「……………行かなきゃ……………」

団長に言われたじゃないか。全てを見届けろって。

彼は、歯を食いしばって、必死でこみ上げる何かを押さえつけていた。怪我をした訳ではないのに、胸が痛い。キリキリする。

これが、誰かの死を突きつけられた痛み。

涙を拭って立ち上がり、渡り廊下のそのむこう。王宮の本殿に向かう。

それは、本殿の奥の、フェラオの部屋であった。

ここに来るまでも、混乱や嘆きがあちこちから飛び交い、自分がどうかなってしまいそうだった。

人々をかき分け、目にしたもの。

「ファラオ!! ファラオ、どうして……っ!!」

アンケセナーメンさんの嘆きの声。

ファラオの横に立ち尽くす、老人の姿。

目の前がくらくらしそうなほどに、ファラオの周りには血だまりが出来ていた。頭から流れる赤の色は彼の顔を半分隠す様に毒々しく、半分見える顔は白い。

「……………」

言葉が出なかった。

出そうと思っても、のどのずっと向こうで詰まってしまう。

つい昨日の夕方、彼に会った時の顔と今の顔が、脳裏を交互にちらついて。

“死”というものが、一文字で言い表せるものではないだろうと痛感する。

アンケセナーメンはずっとファラオの名を呼び続けていたが、勢い良く立ち上がり宰相アイを睨み上げ、指を突きつける。

「お前が!! お前がファラオを殺したのだ!!」

「い、いや、待つてくだされ、王妃!!」

アイは何が何だか分からない様に、青ざめた表情で立ち尽くしていた。

アンケセナーメンは、彼のそんな言葉はおかまい無しで、

「何を言うか!! ここにはお前とファラオしか居なかった。私は見たのだ!!」

「王妃!! 私も何が何だか分からないのです!! 気がついたらファラオが血まみれで……っ!!!!」

宰相アイの言葉は曖昧で、到底信じられるものではなく、それでいてとても嘘の様には見えなかった。

しかし、ファラオが殺された事に嘆き、憎しみでいっぱいアンケセナーメンは、既にアイを犯人と決めつけていた。

彼女のこんな表情は見た事がない。

王妃としての品格を絶やさなかった彼女が、今や恐ろしいまでの憎しみにあふれている。

「前から、そうでないかと思っていたのだ……。お前がファラオを狙っているのではないかと……」

彼女は、夫であるツタンカーメンの亡骸を、いまだに信じられないというような瞳で見下ろしている。このような事になるのではないかと、常に抱いていた不安と恐れ。

彼女は寂しそうに笑うと、懐から小さな短剣を取り出した。

「!!!!!!!!!!」

誰もが、その短剣の向かう矛先を知っている。

王妃の短剣が高々と掲げられた時、キクマサは無意識に駆け出していた。さっきまで声も出なかったのに、今自分がするべき事、見届けなければならぬもの、それらはしっかりと彼の中にあつて、彼を動かす。

宰相アイは、その短剣が振り下ろされるのを呆然と待っていた。

「……………キクマサ……………」

ポタポタと、地面に血の落ちる音。

キクマサは宰相アイの前に立ち、自らの肩に、その短剣を受け止めていた。

彼は齒を食いしばって、それでもアンケセナーメンをしっかりと見つめて。

「ど……………どつして……………」

彼女は混乱している。訳が分からないと、ゆっくり後ずさる。手に握っていた短剣が落ちる、その金属音。

「……………ダメなんです……………。この人を殺したら……………」

キクマサは、自分でそう言いながら、悔しさと悲しきで泣いてしま

いそうだった。

その言葉は、きっと自分にも言い聞かせている。

肩の痛みが襲ってきたのは、すぐその後。彼が片膝をついて、温かい血の流れる傷口を、震える手で押さえた。

宰相アイは、ヘタンと座り込み、目を見開いたまま何も言わない。

ダメなんだ。

たとえこの人がファラオを殺したとしても、歴史はそれを裁かない。

俺だって悔しい。悔しすぎる。

彼は、気を失いそうな意識を、気力で何とか保っていた。

血まみれの手で、座り込んだアイの肩にかけている布を、片手で掴み、

「……………王座なんて……………くれてやる……………っ。そんなもの、ツタンカーメンは……………ファラオは望んじゃいなかった……………っ！！！」

途切れそうになる言葉を必死で紡ぐ。

ファラオの望みも理想も、全てがこの男に引き継がれるという空しさを噛み締めて。

やるせない気持ちを押し殺した。

「……………次にファラオになるのはお前だ。おまえしか居ないんだ……………っ！！それでもツタンカーメンは“黄金のマスク”を手に入れる……………ずっと先の未来まで、何者にも邪魔されず眠りにつき……………」

「伝説になるんだ……っ！！！！」

ファラオ自身が望んでいた未来とは大きくかけ離れた未来。
死してなお存在を知らしめる少年王。

誰もがその名を知っていて、誰もが知らない本人自身を。俺だけが、俺たちだけが知っている。

キクマサは、頬を伝う涙を、今ばかりは拭おうとしなかった。
アイは、自分の周りで起こった全てが信じられないというような、
それすら通りすぎた表情。滑稽だが、それでもこの男が、ファラオ
の死に何かしら関係があるのだろうなと思う。

アンケセナーメンは、もう力無く座り込むだけで、怒る事も話す事
もなく、ただファラオの亡骸を見つめていた。

誰もが動けずに、見守るしかない行方。
それでも、明かされる事のなかったツタンカーメンの死。

そう。

たとえ我々が古代エジプトに訪れ、歴史の一端をまかされたって、
ツタンカーメンの死は、誰にも分からない不透明な死。

神のみぞが知る、
隠蔽された死。

それでいい。

だからこそ彼は、
伝説であるのだ。

I
d
r
a
w

62・エジプトプラン43〜会いにいきます、未来で〜

結局歴史と言うものは、混沌とした、濁った白い水の中

見えてくるのは、ほんの少しの沈殿物

血のような夕焼けの後の、深い紺色の夜。

タハールが眠る傍らで、ルナシーもまた、疲れからうたた寝をしていた。

生暖かいような、少し涼しいような風が心地よい。

「……………」

その様子を、じっと見守る様に、黒い気配のような存在が入口を漂っていた。

何だか、禍々しい存在のはずなのに、どこか寂しい。

黒い霧のような、その存在は、ゆっくり部屋に入ると寝るタハール

の前で静止した。
その顔を、その寝息を全て、愛おしいような、複雑な念で見ている。
霧の向こうの瞳。

黒い霧のような塊から、淡く透けた黒い手が出てきて、そつとタハールの頭を撫でる。

「……………!?!」

その時、タハールの懐が淡く光った。黒い霧は少々驚いた様に揺れ、手は懐の小さな袋を取り出した。

「……………そうか……………」

布かなにかを隔てたような籠った声。

「……………お前が、これをここまで持ってきてくれたんだ……………」

取り出したのは、いまだに淡い光を内に秘めた、ルナシーのペンダント。

ヴィライアーの印。トパーズの宝石。

それは十年前の世界で、なくしてしまったはずのものだった。

「……………それを……………返してやるうな……………。この人の所へ……………。そのペンダントの事は忘れた方が良い……………」

黒い手は、そのペンダントをルナシーの手のひらにのせる。

冷たい感触に、彼女は一瞬顔をしかめたが、すぐにまた安らかな表情に戻った。

トパーズの宝石は、早くもとの所有者の元へ返りたかったと言う様に、淡く籠ったような輝きはゆっくり消えていった。

これで、何もかも全てが終わったような気がした。
自らの存在意義も、役割も全て。

私はもうすぐ消える。そのための、最後の命を、若きファラオが捧げてくれた。

呪いを全て引き受けようと、彼は言ってくれた。

この十年間、人から醜い呪いと成り果て、憎しみの魂が集いこのよ
うな姿となった。
それももう、終わりだ。

この国の呪いは、一人の若きファラオによって解かれたから。

どこからか、嘆きの声が聞こえる。

黒い呪いの化身は、ゆっくりと部屋から出て行った。

一度だけ、もう一度だけ我が子の寝顔を振り返り、そして、音もなく消えていった。

しんとした、だけどピンとした、今の空気をなんて言ったらいいだろう。

ルナシーの手のひらに乗ったトパーズの宝石だけが、“彼”の全てを知っている。

こうして見たら、終わりなんて実にあっけなく、そして空しく。今まで自分たちがしてきた事の、いったいどこに意味があったのかさえ分からない。

結局、たかが未来から来た人間が、歴史を変える事すらままならず翻弄され、その事実を改めて痛感させられただけじゃないか。

「……………無茶をしたわね。私は寝てたなんて……………情けない話だわ……………」

「……………君はタハールの側に居てあげたんだ。それに……………」

それに、あの場面を見るのは俺だけでいい。

結局何も分からなかったんだ。俺だけが、その場面を覚えておけば、それでいい。

キクマサは、痛む肩を包帯のような布で巻かれ、すっかり治療されていた。

幸い傷は深くなく、「このくらい平気だよ」と言う彼の顔色は悪くなかった。

全てが、こうやってあっけなく終わる。

ファラオが死んでからアンケセナーメンさんを見ていない。宰相アイも。今は色々忙しいだろうから、俺たちはこうやって、自分たちの部屋でじつと療養するしかない。

キクマサはベットの上から、ルナシーの胸に光るペンダントを、少し驚いた様に見つめた。

「……………あれ……………そのペンダント……………あったのか？」

「……………いえ、無くしてたはずなのよ……………。でもね、ファラオの亡くなった夜に、目が覚めたら手の上にあったの……………。まるで、誰かが置いてくれたみたいに……………変でしょう？」

「……………」

理屈では分からない事がこの世界では起こる。

いや、もしかしたら、どんな世界でもそうなのかもしれない。

無くなっていたペンダントも、きっと意味があったに違いない。役割を終え、“誰か”がそつと返してくれたのだろう。

次の日、団長とシャルロ先輩が帰ってきた。スノー先輩を連れ戻して。

ファラオが亡くなった事実を知って、団長もシャルロ先輩も複雑な表情だったが、誰より嘆き悲しんでいたのはホルエムヘブであった。信じられないと言う様に、いつもの精悍で何事にも動じない彼は、そこには居なかった。

それだけファラオを慕い、仕えてきたのだ。

一時、この人は敵なんじゃないかと思っていた時期があった。今では、それが本当に申し訳ないと思う。

ファラオをを恨んでいた人が、本当はどれほど居たと言うのだろう。彼が死んでしまった今、王宮は華やかさを控え、彼の死後の世界を祈るばかりだ。

それからまた数日たって、フレイとジェルが帰ってきた。

この二人はそれほどファラオと関わりがなかったが、人の死と言う物の悲しみは、それを感じている人を見るだけでも辛いもの。

彼らが持って帰った“黄金のマスク”は、結局この時のためであったのだから。

久しぶりにアンケセナーメンさんを見た。

「……………ごめんなさい、キクマサ……………。ごめんなさい……………」

彼女は我々の前に現れるや否や、まずキクマサにすがって謝った。
彼は

「良いんです……………大丈夫ですアンケセナーメンさん……………」

そう言つて、謝る彼女をしつかり立たせる。彼女はそれほどにふらふらと、足下が覚束なかったから。

王妃はだいぶ、弱っているようだ。

大切な人が死んで、元気なはずはないが、その様子は痛々しい。

彼女はそれでも、彼らの前では王妃であった。

フレイ達が持つて帰った“黄金のマスク”をじつと見て、その顔が
とてもファラオに似ていると、静かに笑っている。

確かに、まるでファラオのために作られたのではないかと思つほど、
沈黙の表情は、彼の少年王を彷彿とさせる。

「……………ファラオの遺体は、あなた達が集うまでは手を付けないと
決めていました……………。彼の顔を最後に見てやってください……………」

死後の世界を重んじる彼らの宗教観。

たとえ死んだとしても、死後の世界で彼は生きている。

キクマサ達はアンケセナーメンに連れられ、王宮の地下へと。
ツタンカーメンの遺体が置かれている間へと案内された。

冷たい石の台の上に、彼がいる。

「……………」

皆、何も言えずに、ただじつと黙っていた。

それぞれがそれぞれ、何を考えているのか分からなかったが、沈黙の空気が悲しいのは、皆共通である。

少年王のくすんだような青白い顔は、何だか穏やかに見える。

ふと、団長が口を開いた。

「……………安心しろ……………。ツタンカーメンは、ずっと先の未来で発見されるまで、墓を盗賊に荒らされる事も無く静かな眠りにつく事が出来る。発見されてからは、この世で最も有名で、愛された偉大なファラオだ……………」

「……………」

団長はいつもの様にしかめっ面であったが、声は落ち着いた淡々としたものだだった。

アンケセナーメンはそれを聞いて、一時驚いた様にしていたが、

「……………そうですか……………」

何か、今まで彼女を縛っていたものが、静かに彼女を解放した様に穏やかに笑った。

そして、手に持つ黄金のマスクをそっと見つめる。

ファラオ。

これが受け入れるべき運命なのだと。

「……………みんな、帰るぞ……………」

団長はそっと、その場に居るヴィライアーに呟いた。

彼には分かっていたのだ。“黄金なマスク”が、元の時代に戻る最後のピースだと言う事が。

アンケセナーメンがそのマスクを、亡きファラオにかぶせた時、

どこかで、カチツと時計の針が動く音がした。

来た時と同じ、目映い光と、目まぐるしく流れる時の風。
ぐるぐる回る、輪廻の狭間を、我々は漂っている。

ああ、これが本当に最後なんだ。

それを理解したのは、光の隙間から見えた、アンケセナーメンさんの姿。彼女は少し驚いた様にしていたが、消え行く我々にそっと、お辞儀をしていた。

ありがとうと聞こえた気がした。
それが悲しい。

俺たちが出来た事なんて、結局何も無いじゃないか。

「……………さようなら……………」

キクマサは、消え行く視界の、亡きファラオとその王妃、古代エジプトに向かつてさよならを。

別れと言うには奇妙だけれど、この出会いはきっと、一生無かった事には出来ないから。

この世界で出会った人たちが、順番に脳裏を横切っていく。別れの挨拶をしているみたいに。彼ら一人一人に、きっと意味があり役割があった。意味の無い出会いなど、そもそも無いのだろう。

時代があなた達を、どんな風に想像したって、俺たちだけが、あの世界を、

あなた達を知っている。

だから、帰らなくちや。

次の時代に、その意志を持っていくために。

会いにいきます。

未来で。

d
r
a
w

63：エジプトプラン44〜鍵と扉〜

出口の扉のその向こう

手にした鍵の、その重み

長かった、本当に長かったと思う一方で、それは一瞬のようであったとも感じる。

ファラオがどうやって死んでいったのか。
何を思って殺されたのか。

アンケセナーメンさんが、あのとき受け入れた事。
諦めたもの。

古代エジプトの歴史を垣間見て、触れ合って、その間を知って、昔も今も変わらぬ愛を知った。

「うそ………何でいきなりみんな帰ってきたの………?」

レッド率いる、待機組のヴィライアー達は、いきなり帰ってきた残りのメンバー達に、驚いたのは当然。まばゆい光が三角錐の空間を照らし、目を開けたら、いきなり全員がそこに倒れていた。

そう。帰ってきた彼らの中には、フォルテも居たのだ。

レイはフォルテに駆け寄り、彼を揺すって声をかける。

「フォルテ……フォルテ……っ!!」

さっきまで不安でいっぱいだった心が、彼女に焦りをもたらす。彼に何かあったのではないかと、そればかりを考えていた。

フォルテは、レイの声に答える様に、ゆっくり目を開けた。

「……レイ……俺………」

「フォルテ!! 気がついたのね……!!」

それぞれ、いろいろな所で皆を起こしにかかっていたので、フォル

テだけではなく、メンバーが意識を取り戻しつつあった。
フォルテは頭を抱えて、なぜ自分はここに居るのだろうと考える。

体中がじんわり痛い。

古代エジプトに行った事は覚えているが、自分が刺されて、それからどうなったのかが曖昧だ。何だか、大切な事を忘れていている気がする。なんか傷も治ってるし。いろいろ分からない。

レイが泣きそうな顔でこっちを見ている。そんなに心配する事かと、ちよつと笑いそうになった。不謹慎にも。

そのとき、少し向こうでルナシーとキクマサが倒れているのが目に入った。

そうだ。あのとき彼女は、ルナシーはどうなったんだろつ。

彼と共に行動していたのはルナシーだけだから。

「ルナシー……！！ キク……っ！！！」

フォルテは病み上がりの体を起こして、急いで二人の元に駆け寄った。レイは一瞬「……？」と、疑問を抱いたが、彼について二人に駆け寄る。

キクマサとルナシーは、声をかけられるとすぐに目を覚ました。
二人で顔を見合わせて、ぼかんとしている。

しかし、フォルテを顔を見るや否や、ルナシーは驚きを隠せずに、
いよいよ涙を堪えていた。

「……フォルテ……あなた生きてたのね……っ！！！」

「ああ。この通りさ……。すまない、心配かけたたる……」

「当たり前だわ!! 私、あなたはもう死んでしまったとばかり……っ!!」

ルナシーはそれ以上、何も言えなかった。ここに、彼も一緒に生きて帰ってきている事に、どれほど救われただろう。キクマサも当然、彼を心配していたので、安心するばかりだ。

「フォルテは何度も……すまない……ごめん……」を繰り返していた。

ただ、レイだけは、そんな二人を複雑そうに見ていたけれど。

いつの間にか、この二人にしか分からない結びつきが出来ている気がして。

「何ですかね、あれは。……二年生修羅場なフラグが立ってますね、ナギさん」

「ええ、まさかの二年生ですね。二年生がこんなにおいしい関係に

発展しているとは思っても見ませんでしたね、レッドさん。そしてイケメンのキクマサ君が、まさかの蚊帳の外ですね」

ひそひそと、二年生の様子を陰ながらに見ていた五年生のミーハー二人は、勝手に妄想を膨らまして盛り上がっていた。

そんな二人の間を割って、今しがた起き上がった団長はフォルテの前にやってきた。

そして、彼を見下ろすような、睨むような視線で。

「よお。元気そうじゃねえか……。こっちはお前が死んだって聞いてたけどな」

「……………あ、はは……。生きてますねなぜか……………」

フォルテは団長に恐れを成して、妙に声が小さい。キクマサにとっては、団長はもうこれが普通なのだと分かっていたが、あまり関わっていないフォルテにとっては、怖い存在なのだろう。

団長は相変わらず鋭い目つきで、疑問を口にする。

「……………時間軸がおかしくねえか？ お前が殺されてから、だいぶ時間が経ったと思うんだが……。そのルネ・トパーズと一緒に戻ってくることで自体おかしくねえか？」

「……………はい？」

そもそも、フォルテはキクマサ達の物語を知らないのです、何の事やらと。ルナシーは自分が殺された時に一緒に戻ってきたものだと思っっている。

しかし、それ以前に、あの世界での時間軸なんて曖昧だ。

「……………まあ、何が起こったっていまさら、驚かねえけどさ……………」

団長は、笑いこそしなかったが、ちょっと安堵の表情を見せた気がした。それは、共に長く居たキクマサだけが気づいた事だ。

あまり関わらなかつた後輩だとしても、気にならなかつた訳じゃないだろう。

そして、団長はその後、クレハの所へ。

「お前……………俺たちよりだいぶ早く帰ってきたようだな」

「うん。なんか帰ってた」

「そうか……………それは良かった……………うん」

団長は、クレハにだけは視線が泳いでいた気がする。

それもそのはず。クレハが勝手に帰ってきていたからよかつたものの、お前を忘れてたなんて今更言えない。

キクマサもシャルロも、フレイもジェイルも、なんかいたたまれなかつたと言つか、遠い目だった。

「皆、再会に喜んでいる所悪いんだけど、君たちと共に出現した“これ”には突っ込まないねえ……。頭大丈夫？」

ティアンは眼鏡を、相変わらず無機質に光らせ、浮ついている団員に現実を突きつけた。

それは、例の棺の側に現れた大きな扉。

ファルテはとつさに「……あ！！」と叫んでしまった。急いで口を抑えたが、その彼の態度に注目したのが何人か。ティアンはニヤニヤしているし、もっぱらカイは彼をじっと観察していた。

それは、歴史の扉。

来た時も、その入口の扉を知らずに通つたのだから。

我々が元の世界に戻るための扉。

その扉の出現条件が、最後のツタンカーメンが“黄金のマスク”を冠る事だったと、気がついていたのは団長くらいだろう。

「……………鍵が無いわよ……………」

ふいに、シャルロが口にした“鍵”と言う単語に反応したものの達が、何人居ただろう。

シャルロは顔をしかめて、

「……………何よ。だって鍵穴があるじゃない……。鍵が無くても開くものなの……………」

「……………」

団長は彼女をいかがわしそうに見ていたが、彼女は至っていつも通りだった。

確かに、来た時も、案内人のセティさんが鍵を持っていた気がする。団長は試しに扉を押してみたが、びくともしない。

「……………やっぱり“鍵”が必要らしいねえ……………」

ティアンはわざとらしく、隣のカイに問いかける。カイは黙っていた。

ただ、フォルテだけが何かにピンと来た様に。

「ルナシー……………ネフィルティティの瞳はどうなった……………!？」

「え……………? た、確か持ってきたはずよ……………」

彼女は、そう言えばと言う様に、研修着のポケットを探った。しかし、ポケットの中にあつたものは、瞳の丸い感触ではなかった。

「……………うそ……………」

取り出したのは、細長くて少し大きめの金の鍵。

アंकのような装飾に、細かいヒエログリフが刻まれてある。

キクマサも息を飲むほどの、“鍵”と言うものの存在感。威圧感。それは、ネフェルティティの瞳であつた頃感じたものより、凄まじく洗練されたものだった。

「鍵じゃないか……」

「やっぱりそうだったんだ。俺の考えは正しかったんだ……」

フォルテは、胸の奥で今にも爆発しそうな考古学者魂にうち震えているようだった。瞳の輝きが違う。

その様子に気がついた団長は、ルナシーからピッと鍵を取ると、それをまじまじと見る。

「これ……どうしたんだ……」

「あー……話せば長いと言うか……」

フォルテは相変わらず、団長の前では態度が小さくなる。

団長はじつと、フォルテを見おろしていたが、まあいいやと言う様に、鍵を扉に持って行く。

ティアンもカイも、その鍵には多いに瞳を丸くさせた。

彼らはその鍵の価値を、十分に理解している者達だったから。

「……やっぱり世界的に有名な考古学者の息子さんだな、ゴッドバルトは……。ちゃんと見つけてくれたみたいだ……。あの子も“鍵”の事知ってるんじゃない？」

「先輩……。あまり鍵について、深追いしない方が良いですよ。この世の中の、どういった者達が“鍵”を狙っているのか知っていますか……？」

「……覚悟の上さ。どういった者達って……僕たちだってその、“どういった者達”の一員じゃないか。そうだろ……？」

ティアンはそう言って、ゆっくり眼鏡を押し上げた。笑う口元は、いったい何を意味してのものか。カイは、自分たちが、深追いしてはいけない“鍵”を巡る渦の中に巻き込まれている気がした。

団長が、その鍵を鍵穴に押し込むと、それはちょうどピッタリ合うようだった。彼は息を飲み、一度皆の方を振り返る。

「いいか……開けるぞ……」

「いいから早く開けなつて。みんな帰りたくて仕方が無いんだから。そんなもつたいぶるとか激しく要らないから」

「……………」

ティアンの容赦ない突っ込み。団長は一度、とても残念そうな顔をした様に見えたが、再び扉に向き合った。鍵をしっかりと握りしめ、息をつくつと、ゆっくり回す。

カチ……

それは、鍵の開く音だったのか、もしかしたら、歴史の大時計の針の音だったのかもしれない。再びリセットされた物語。

開かれた扉は、出口の扉でもあり、

“鍵”を巡った物語の、始まりの扉でもあった。

彼らはその扉から順番に出て、そして、皆が出てしまった時には、その扉は音も無く消えてしまっていた。

団長の手に残る、出口の鍵だけはそのまま。

皆を驚かせたのは、その出た先だった。やはりと言うか何と言うか、そこはピラミッドの高い場所。

段々に積まれたブロックの、踊り場の様になっている所だった。

視界がもの凄く高い。一瞬足が竦んでしまいそうだった。

「……あー……ここはギザの三大ピラミッドですね。……クフ王です、位置的に」

「さすがはフォルテ君。すぐ分かるね」

フォルテとカイは、隣でお互い、専門的な話をしている。きっとこの二人は気が合う。

そう、彼らが現実の世界として放り出された場所は、世界でも有名な、ギザの三大ピラミッドの一つ。最も名高いクフ王のピラミッド。

王家の谷から、このような所にご丁寧にと、団長はため息をついた。そんな団長を、ティアンは愉快そうに見て、

「ま、要するに、入口の扉は王家の谷に隠され、出口の扉はここ、三大ピラミッドに隠されたと言うだけの事。ツタンカーメンの時代には既に、このピラミッドは存在してたからね……。深い意味は無いよ多分」

「そうか？ 嫌がらせだろ……これ……」

団長は腕を組んで、より一層眉根を潜ませる。

これ、どうやって降りるよ……と言わんばかりに。

時間帯は、太陽が眩しい昼下がり。

熱い空気に、光る砂漠。

激しい温度差に目眩がしそうだ。

ただ、やはり実感としては、戻ってきたんだと言う嬉しさが大きい。それは皆、当然思っている事だった。

ピラミッドの下から、観光客が不審そうに見上げている。どンドン集まってきた。

やばい、これは監視の人に怒られるぞ、と。

団長は長い時間息をついて、やっと電波の届く様になった携帯を取り出した。

そして、疲れきった声で言うのだ。

「……………先生、ただいま戻りました。研修終了です。……………だから、助けてください一刻も早く！！！」

64・エジプトプランFINAL〜ドラマチック〜

歴史を垣間見る事の際どさを痛感した

それでも、出会えてよかったと、いつの日かそう思える様に

「チェックメイト……ですね」

アプリコットブラウンの髪的青年、彫刻科団長のパリス・ヴァレリ
ーは、目の前のチェス版の、キングの駒をコトリと倒す。そこは、
クラシックな雰囲気漂う、彫刻科ヴィライアーの会議室。

「……二日……か。まあ、イマジン・ヒストリアの世界なら二ヶ月
弱……。素人の割には早く終わったな」

「どうだか。俺たちだったら半日で終わってる」

彫刻科四年生のフィル・レグールは、彼ら絵画科のエジプト攻略を割と評価したが、アルマ・カイザードは相変わらず皮肉が多かった。パリスはいつもの様に軽く微笑んで、チエスの相手を見た。目の前の少女を。

彼女は一年生のスカーレット・マリーニ。長い白髪に、無表情を讚えている。

「君はどう思う……スカーレット」

「……分からない……。イマジン・ヒストリアは所詮バーチャルの世界。我々は簡単に攻略する“テクニク”を知っているまで……。彼らが何も知らずに攻略出来たのならば、評価すべきだと思う……」

掠れるような、小さな声だったが、彼女の言葉はしつかりとした。た。

アルマは「けっ……」と、まだ納得のいかない様子だ。

「アルマ兄さんは自分が活躍出来なかったからひがんでるだけよ。じっとしていらんないの」

ソファに座って、お茶とケーキを食べているおかつぱの三年生。ブリジット・バルーンは、アルマを見てはプツと笑っている。

「おい。それ以上食べたならさらに太るぞ、ブリジット」

彼はさりげなく、横目で彼女に嫌味。しかし彼女はおかまい無しで、二つ目のケーキに手を付けていた。

ブリジットの前のソファで、紅茶を飲んでいた二年生のシャトー・オークランは、にっこりと笑うと嬉しそうに。

「でも、良かったですね、パリスさん。これでまた鍵の封印が解けたから……」

「ええ。安心しましたよ。……でも、ゆっくりしている暇は無い様です。……鍵はまだ、いくつも封印されている。とはいえ、後でセティさんにお礼を言わなくてはいけませんね……」

パリスの視線は、皆を見ている様で、もっと遠くの最果てを見ている。これから、彼ら絵画科を巻き込んでしまった責任を取らなくてはいけないだろうから。

それでも、彼らは進まなければならない。

扉の向こうの世界と、この現実の世界では、どうやら時間の進み方が違うらしい。
あんなに長く感じられた古代エジプトの生活。それはたったの二日間
の出来事であった。

色々気になる事も多いし、それぞれの物語を語りたい所だが、まず

はみんな、眠くて仕方なかったのは言うまでもない。
ホテルに帰るや否や、全員死んだ様にぐっすり眠った。

ただ、キクマサだけは、向こうの世界でもらった傷をそのまま持つて帰ってしまったので、一人病院に連れて行かれた。幸い現代の医者が診ても、たいした事は無いと言われたので安心だ。

数週間で治るらしい。

「お疲れだなあ、キクマサ。やっぱり、キツかったかな、新人には今回の研修」

リース先生はお気楽そうに、軽々言ってくれる。
そして彼の運転は荒い。

「……………正直すごく辛かったですけど、まあ終わってしまえば何とやら、ですよ。というか、これからもこんな研修ばかりなんですか？」

「……………いやいや、こついうのは本当、稀だから。次回からは普通に現地の遺産見たり、美術館行ったりだよ。……………まあでも、何事も無く全員帰って来れたみたいで良かった良かった」

「……………何事も無くって……………俺、肩ばっさりだったんですけど……………」

「あははははははは！……！」

先生……………。

キクマサは、これがルネ・ヴィルトンの教員なのかと、正直不安に

思ったが、そうしなければ手に入れる事の出来ないものを知っているのも、やはりここの教員であった。

彼らは容赦ない。

これからも、何が起ころうとももう、そう言つものなんだと受け入れられる気がする。

久しぶりの現代の食事を、誰もがありがたいと神に感謝した。柔らかいベツトを嬉しいと思つた。

そう思えるのも、あの経験があつたから。

目まぐるしく展開していった物語を、忘れてはならない。

そこで見た景色、出会つた人々、感情を。

「やっと普通の研修らしい所に来たね……カイロ博物館だ……」

フォルテは、今まで何度となく来た事のあるその博物館を、まるで始めてきた様に目を輝かせている。

今までと見え方が違う、と彼は言っていた。

「ここは、古代エジプトの遺産が多く展示されている。展示されてなくても、収容されているものはもっと多いよ。それに、ツタンカーメンの縁のものも多い……」

カイロ博物館は、世界でも有名な、エジプトの遺産を扱う博物館だ。何だか、懐かしいとさえ感じてしまう、その展示品の数々。

フォルテは、ふとあるパネルの前で立ち止まった。それにつられて、キクマサ達も立ち止まる。

そのパネルには、ツタンカーメンについてツタンカーメンとアンケセナーメンについて書かれている。

ハワード・カーターが発見したツタンカーメンの墓。そのミイラ。その黄金のマスク。

パネルによって紹介されたのは、それらについてだ。

何だか、最近までこの世界に居たのが嘘の様に、説明のパネルを見ていると遠く感じる。

自分たちがこれらに関わっていたなんて、夢のようだ。

「知ってる？……ルナシー」

フォルテは急に、隣のルナシーに声をかけた。ルナシーは「何を？」と、聞き返す。

「アンケセナーメンは、ツタンカーメンの棺の中に、矢車菊の花の冠を添えたんだよ。君が教えたからだね……」

「……………」

パネルの下の方には、黒く炭の様になった矢車菊の冠の写真が。あのとき、彼らにずっと教えてきた花の冠の作り方。こんな、何千年も経って、その鱗片を見る事が出来るとは。

彼女はどんな思いで、その花冠を添えたのだろうか。

彼女がそれを備えた事で、ツタンカーメンとアンケセナーメンは悲劇のファラオと王妃として、多くの者に感動を与えた。幼いファラオを見守り、ずっと支え続け、そして見送った。

我々は、その歴史の流れを手伝っただけだ。

キクマサは、あの中庭で、彼女が花の冠を作っていた事を思い出す。

「……………うれしい……………？」

ふいに、ルナシーに聞いてみた。

彼女はとても、穏やかな瞳だった。

「…そうね……………私たちのした事って、本当に小さな事だけけれど……………それでも、私たちがあの世界に行った意味は、あったのかしら。たとえ、何を変える事が出来無かつたって……………」

「……………ここで、彼らに会える事。誰もが彼らに、彼らの居た証を見に来れる。その存在を知る事が出来る。そういう事に意味があるんだよ……………。きつと……………」

キクマサは、ずっと心に思っていた事を、自分に言い聞かせる様に。

ルナシーは、少し意外だと言う様にキクマサを見上げる。

彼はあの、まばゆい光の中、彼らに別れを告げるとき、約束した。

また、会いにいきますって。

それは、この現代だからこそ分かる、彼らの歴史的価値。誰もが知っている、博物館に行けば会いにいける。彼自身じゃなくても、その存在に。

それはきつと、永遠に。

「ツタンカーメンのミイラは、ハワード・カーターの意志で、彼の墓に置かれている。ここで見る事は出来ないけど、黄金のマスクは展示されてるんだ。行こうよ」

フォルテは、じつと動かない二人に、博物館と言う事で小声で誘導。しかし、あの世界で“黄金のマスク”には、嫌と言うほど付き合わされた。

呪いを解くと言われていた“黄金のマスク”
結局呪いはどうなったのだろう。

そんな事をふいに考えた時、ファラオの死が頭をよぎる。
彼の、解き明かされる事の無かった“死”

「おい、キクマサ。早く来いよ」

フォルテ達はとつくに、黄金のマスクの展示してあるその前に居た。周りを見てみたら、先輩達もそれぞれ興味深そうに見ている。

「……………」

皆、黙ってそのマスクを見上げる。長い年月を、静かに墓の中でアラオと共に眠っていた。それなのに、凜とした品格と、古代の深みを思わせる風格。その空気は相変わらずで、当時から伝説と言われていた産物なだけはある。

しかし、それを巡る物語を知っているのも、我々だけだ。

そのマスクはいまや、あの時のマスクではなく、“ツタンカーメン”であるのだ。

お久しぶりです。

キクマサは心で呟いた。

今こうやって、長い年月を隔てて、再びあなたの面影を見る。

あなたがこの“黄金のマスク”を冠る事こそ、全ての意味があったから。

あなたの死を知る者は居ない。

でも、あなたが死んで、その黄金のマスクを冠った事で、あの時代のエジプトを救った“何か”であったと信じたい。

ツタンカーメンが崩御した後、そのファラオの座についたのはやはり、“宰相アイ”であった。アンケセナーメンは王家の血を引く者として、彼と再婚させられ、それ以降の彼女の消息は不明である。

しかし、宰相アイも高齢であったため、その治世は四年と持たず終わりを告げる。

その後のファラオとなったのが、將軍であった“ホルエムヘブ”である。

三代前から続くアメン神とアテン神の権力抗争によって乱れたエジプトを、実質立て直したのが彼だと言われている。

彼がどんな思いで、混沌としたエジプトと向き合ったのかは分からない。

結局歴史とは、長い繋がりで作られているもの。

どこが終わりかで、どこが始まりなのかも分からない。

そもそもそんなもの無いのかもしれない。

ただそこにあるのは、紙の上では知り得ない、様々な、一人一人の、
誰が主人公でもかまわないドラマだけである。

我々が“歴史”と言うだけで、ただ、それだけである。

d
r
a
w

エ
ジ
プ
ト
プ
ラ
ン

* drawコラム「エジプトプラン登場人物」

<エジプトプランについて>

絵画科ヴィライアーの研修でエジプトにやって来たキクマサ達。しかし、エジプトの王家の谷で、案内人のセティさんが開いた謎の扉は、古代エジプトへの扉であった。ヴィライアーがバラバラになり、それぞれの時代や場所での物語を展開し、出口の扉を見つけようとしている。舞台は18王朝、ツタンカーメンの時代。太陽神を巡る、混沌とした時代であった。

《メンフィス側》

*ツタンカーメン

かの有名な少年王。十年前にフォルテとルナシーに出会い、今はキクマサや団長、シャルロをかくまっている。若干10歳でファラオとなり、今まで高官たちに言われるがまま政治を行ってきた。先代ファラオの残した混乱を沈めようと勤しんでいるが、なかなかうまくいかないようだ。理想とする世界がありながら、高官の言いなりになってしまう自分に腹が立っている。キクマサとは気が合う様で、同じ年頃の初めての友人として、よく話しに来る。妻のアンケセナーメンとは仲がよく、お互い幼い時から唯一信じられる者として、

肩を寄せあつて生きて来た。先代ファラオの都、テル・エル・アマ
ルナの残党と対立している。国を守るために何をしたら良いか、そ
れを考える毎日である。

* アンケセナーメン

先代ファラオの娘。ツタンカーメンと結婚して、王妃となった。ツ
タンカーメンより四つ年上の姉さん女房であり、彼のためなら何だ
つて出来ると言うほど。行動力があり、芯の通った女性。基本的に
ファラオ以外誰も信用していないが、十年前に“ラーの使徒”と出
会い、それからラーの使徒だけが唯一この国を救える者だと信じて
いる。同じ女性であるシャルロに好感を抱いている様で、よく相談
を持ちかける。

* ホルエムヘブ

ツタンカーメンの時代の将軍。彼は先代の時代から名を馳せるほど
の名将で、ツタンカーメンやアンケセナーメンを幼い時から見守つ
て来た。二人が唯一信頼している家臣で、頼れる存在。雄々しいた
くましい青年で、武術に優れている。

* アイ

ツタンカーメンの時代の宰相。元々先代アクエンアテンの時代から
宰相であり、国を左右してきた人物でもある。すでにかなりの高齡
で、王宮でもかなりの権限がある。実はラーの使徒の命を狙い、黄

金のマスクを探している。

《テル・エル・アマルナ側》

*ネフェルティティ

先代王妃。アンケセナーメンの継母。アテン信仰に熱心で、アマルナ改革を押し進めていた人物の一人。夫であるアクエンアテンを今でも慕い、彼とアテン信仰を蘇らせ、呪いを解こうと黄金のマスクを狙っている。“ネフェルティティの胸像”という有名な美術品があるが、彼女がモデルである。

*アクエンアテン

ツタンカーメンの前のファラオ。アテン神を唯一神とした“アマルナ改革”を実行し、従わない他神の神官団や民に罰を与え、反感をかった。人類最初の個性と言われたほどの変わり者。写実性（あるがままの姿）を重んじた。

《ラーの神官団》

*タハール

若きラーの神官。都から逃げ、オアシス都市でラー信者を守りなが

ら暮らしていた。大柄で乱暴そうな性格のため、最初は盗賊だと間違えられた。

*カーロン

元太陽神ラーの最高神官。タハールの父親。元々冷静沈着な性格だが、ラーの神官団が滅んでからはキャラバンの長老として優しい老人になっている。孫にタハールと名付け、可愛がっている。

* drawコラム く エジプトプランに出て来た世界遺産く

<世界遺産の豆知識1>

世界遺産とは、世界遺産リストに登録されている自然遺産、文化遺産、複合遺産の事です。

文化遺産……記念物や遺跡、文化的な背景からなる。(例：アテネのアクロポリス/メンフィスのピラミッド地帯)

自然遺産……地質や地形、生態系や景観からなる。(例：グランド・キャニオン/知床/ガラパゴス諸島)

複合遺産……文化遺産と自然遺産の、二つの特質を備えたもの。(例：泰山/マチュ・ピチュ)

892

<エジプトの世界遺産>

今回、エジプトプランで取り上げた世界遺産を紹介します。

「古代都市テーベと墓地遺跡」/文化遺産/1979

エジプトプランで一番お世話になった王家の谷を含む、世界遺産で

す。カルナク神殿、ルクソール神殿、王家の谷、王妃の谷などが残る、“アメン神信仰”の中心として栄えた古代エジプトの都です。王家の谷では、あらゆるファラオや王妃の墓、ミイラ、装飾品などが見つかっています。しかし、かなり盗賊に荒らされていたため、謎の多い墓も多々あります。

「ヌビアの遺跡群」 / 文化遺産 / 1979

本編でも取り上げた、世界遺産始まりのきっかけとなった遺産、アブシンベル神殿を含む世界遺産です。古代エジプト新王国時代と、プトレマイオス朝時代に建てられた建築物群です。その中でもやはり重要視されるのは、ラムセス二世が建設したアブシンベル神殿です。この神殿の入口には、高さ22mのラムセス二世の像が四体並んでいます。内部の一番奥の部屋には、太陽神ラー・ホルアクティ、国家神アメン・ラー、メンフィスの守護神プタハ、ラムセス二世が並んでいます。

「メンフィスのピラミッド地帯」 / 文化遺産 / 1979

エジプトプランの最後に、出口の扉があったのがギザのピラミッドです。そのギザのピラミッドを含む世界遺産となっています。メンフィスは言わずと知れた、エジプト古王国の首都です。ナイル川西岸に、ギザからダハシールまで30kmに渡る墳墓群があります。「ギザの三大ピラミッド」とは、クフ王のピラミッドを中心に、カフラー王のピラミッド、脇に王妃のピラミッドのあるメンカウラー王のピラミッドを合わせた総称です。カフラー王のピラミッドの側に、スフィンクスが建っています。ピラミッドの建設目的や運搬技術などはいまだに謎が多く、世界七不思議にも数えられています。

エジプトには現在、六つの文化遺産と一つの自然遺産を有しています。
す。
古く優れた文明を持っていたからこそその、興味深い遺産が多いです。

65：オーティールの箱庭

このルネ・ヴィルトンという存在を

考えた事はあるだろうか

「ありがとうございます…。我々のわがままを聞いていただいて」「
「いいえ……“鍵”に関する問題は、あなた方に委ね、判断される
のが一番でしょう。しかし……どうしてまた絵画科のヴィライアー
を使おうなどと思ったのでしょうか……。私には、それが分からな
い」

絵画科の棟の離れた客間で、エリーゼ先生とパリス・ヴァレリーは
密談をしていた。

というのも、先日エジプト研修で手に入れた“鍵”を、彼ら彫刻家

に引き渡すためである。

パリスは「……そうでしょうとも……」と一度頷き、口元を緩めると、「確かに、我々彫刻科が攻略に向かえば、すぐに済んだ話かも知れません。……しかし、これから起こりうる未来に、我々だけの力で出来る事など、予想がついてしまう。……僕は、予想外の力と言うものを見つきたいのですよ」

例えばそれは、まだ発見されていない原石のような、と彼は言った。エリーゼ先生は、特に表情を変えなかったが、

「……絵画科の中に、そのような者が居りましょうか」

「それは分かりませんが、少なくともエジプトを攻略出来たのです。……何かを得て帰ってきてくれているかもしれません。神々の力が反映されるイマジン・ヒストリアの世界です。恩恵を受けていてもおかしくはない……」

「……………」

緩やかな口調だが、あまりにも落ち着き余裕のある態度の中で、彼の本心を探る事は出来ない。今まで、割と保守的であった彫刻科も、大胆な行動に出る様になったものだ。

「……少なくとも、絵画科の皆さんには、本当に感謝しています。“鍵”は、我々が責任をもって、あるべき姿へと還しましょう……」

パリスは、目の前のテーブルに置かれた、小さな箱を開き、その中

に収められた鍵を見つめた。せつかく手に入れた鍵だと言うのに、何とも言えない表情をしている。エリーゼにはそう見えた。

鈍い金色の、沈黙の鍵。その、見えない光に反発するような、パリスの瞳。

エジプト研修が終わって、約一週間が経った。

あの研修のせいだろうか。その前のルネ・コンのせいだろうか。二年生になって、一日一日が長く感じられるような事ばかりだったから、実感が無いが。

まだ二年生になって、たった二ヶ月ほどしかたっていない。

他の同級生は、いつもと変わらない授業を退屈に感じているようだが、キクマサにとってはこれほどありがたい事は無いと思った。午前中は机に付いて、教養教科の授業を受け、午後は実技の授業。

「明日は裸婦画だぜ。楽しみだなあ」

「あ、ああ……」

と言うような普通の男子の会話。いや、普通ではないかもしれないけれど。

エジプトのカラツとした暑さにも慣れてきてたのに、やはりギリシアの空気は心地よい。

肩の傷も、驚くほど順調に治ってきている。今はぶついたりしない限り、痛みはそれほど無い。

「次の研修っていつなんだろう……。てか、どこなんだろう」

放課後の事だった。キクマサとフォルテは自分たちがよく使っている実技室で、課題のためのキャンバスを貼っていた。キクマサはイゼルの前で四角い椅子に座って、フォルテの質問に頭を傾ける。

「さあね。でも、団長が言ってたけど一時は無いらしいよ」

「なーんだ。つまらないなあ……。またすぐどこかへ行けるんだと思ってたのに」

「あの研修の後に、よくもまあそんな事が言えるな……」

キクマサは、「お前死にかけたんだぜ?」と、軽いノリのフォルテに。

しかしフォルテは、両手を頭の後ろに持って行って、何だかいまだに納得出来ない事でもあるように。

「だって、結局死ななかつたもんなあ。……あれ？ 何で死ななかつたかな……お前は残念な事に傷を持って帰っちゃったけどな」

「ああ……。残念な事に」

キクマサは、確かに不公平だぞと。だって、こいつも刺されたって言うじゃないか。なのはどうして全くの無傷で帰ってきてるんだかまあ、いまさらあの世界の事について言っても仕方ないだろうけれど。

フォルテは、自分の画材箱を探って眉根を寄せる。

「ああー！ ジェツソきれてる……まいったぜ、買ってこなきゃ」

「俺の貸そつか？」

「いいよ。どうせ絵の具買い足したいと思ってたし……。あ、今日女子たちは遅くなるらしいよ。何でか知らないけど……」

フォルテは財布をズボンのポケットに入れ、軽い足取りで、散らかった実技室を抜ける。

「……分かったよ」

そこら辺に並ぶキャンパスの間から、彼が見える隙間を見つけ、聞こえるくらいの声で返事をした。

フォルテが居なくなつたとたんに、しんと静かになる実技室。

温かい空気。

開かれた窓辺から見える青い空と雲の流れ。

こんな時間は好きだ。

彼は出来立てのキャンバスをとりあえずイーゼルにかけて、窓辺に寄り添って、風を感じる。

ここから見える景色は、緑と青と、中央棟。

ルネ・ヴィルトンはアテネ郊外の小高い丘の上にある。敷地も大きいから、学校以外の景色を見るには、それこそヴィライアーの会議室がある最上階まで行かないといけない。

何だか眠い。

平和ぼけもいいけど、次の作品をどうしようか、それもちゃんと考えないと。

柔らかい空気の中、実技室の前の廊下から、誰かの足音が近づいてくる音がした。

あれ、フォルテだったら早いお帰りだな。ルナとレイだったら、今日は遅いはず。

キクマサは、何だか急いでいる様にも聞こえる足音に気を止め、何となく窓辺から、視線を廊下に向けた。

その足音の正体が分かったとき、これほどキクマサが驚いた事は無

い。

「すまない!!! しばらくここに匿ってくれたまえ!!!」

小走りで実技室に入ってきたその男は、紳士的な格好の中年の、この学園に居る者なら誰だつて知っている人。

「……………!!?!? り、理事長!!?!?」

「しいっ!!! 静かに!!!……………つて、おや、君はルネ・アメジストじゃないか……………」

その男、ルネ・ヴィルトン美術学校の理事長である、エリック・オ―デールである。

彼はキクマサと直接関わりを持った事はないが、キクマサからしてみたら勿論知っている人。理事長も当然、現ルネ・ヴィライアーである彼を知っていた。

「……………理事長……………こんなところでいったい何を……………」

「ん?……………ま、まあ……………話せば長いと言つか……………ね……………」

彼は入口から顔を覗かせ、誰もいないのを確かめると、キャンパスの立ち並ぶ実技室の奥へ、画材を乗り越えて入ってきた。キクマサはぼかんとして、理事長の行動を見守る。

彼は濃い茶色の髪をちゃんと整えた、見るからに立派な紳士。優男の風貌で、中年男性だろうけれど、年齢がいまいち読めない。エリ―ゼ先生のお兄さんであるから、先生よりは年上だろうけど。

ん？ ていうかエリーゼ先生はいくつなんだ？

そんな無限ループの考えを巡らせて、彼は頭がこんがらがっていた。理事長は「よっ……ほっ……」とかいいながら、やっとキクマサの居る、窓辺のスペースまで辿り着くと、一番近くにあった木の椅子に座る。

ええっ！！ まさかここに居座る気ですか！？
キクマサは微妙に緊張する。

「すまないねえ。はは……エリーゼに追いかけていてね……。
いやはや理事長と言うのもなかなか大変大変」

「……………は、はあ……。エリーゼ先生が追いかけて……る……？」
いつもは冷静沈着で、多少の事なら眉一つも動かさない厳格なエリーゼ先生が、追いかけるというのもなかなか想像出来ない。
それに比べて理事長は、思っていた以上に愛想良く笑う人だ。彼はキクマサをじつと見る。

「君、確か母さん……いや、カトレア・オーデールの弟子だよな。
どう？ あの人気者そう？」

「……………あ……えー……そうですね、俺が最後に会ったのが一年と少し前なので、今どうなのか知りませんが、当時は元気でした。
嫌ってくらいに」

「あはははは。そりゃそうだね。あの人が元気じゃないって言うのも考えられないね。でもまあ、もう年だからさあ、気になるものだよ……………」

理事長は組んだ手をじっと見て、自らの母を思う。いったいどんな感情なのか分からないが。

「あの……カトレアさんって、いつから居ないんですか？ 昔はこの学校に居たんでしょう……？」

「……そうだね。確かに昔は居た。……いつからかな、父が死んでからかな……学校に縛られず、自分の絵のその先を見てみたくなっただよ……。ここを出て行きたくなる気持ちも分からなくはないが……」

「……………」

彼は言葉の節々で、少しため息のような、微笑のような息をついていた。何だか、理事長としてはだいぶ若い彼に、重くのしかかるルネ・ヴィルトンと言う存在を見た気がした。

理事長は顔を上げると、

「で、あの人は怖かったかい？」

「!？」

急に明るい表情でキクマサに質問。キクマサは驚いたが、顎に手を添え考え込むと、まともに答える。

「いや……嫌味は多かった気がしますけど、基本的にひょうひょうとしてましたね。常に高見にいるって感じの人でした。怒る事なんてあまり……無かった気がしますね」

「おやさうかい。我々にはもの凄く厳しかったんだけどな。……あの人も丸くなつたかな？ 年をとって悟りの領域に入ったかな……。何にしても、君と言う存在をこの学校によこしてくれたのだから、あの人もここを忘れた訳ではないのだろう……」

理事長はカトレアさんの実の息子だ。確かに見覚えのある目元と、面影。

キクマサは遠い昔のような、最近のような、カトレアさんと過ごした日々を思い出す。あの人はギリシアを忘れてなんかいない。いま、ここに居るから分かる事だが、あの人の描く絵画は、どこことなくこの土地の空気を思わせる。

あの人は、ギリシアを忘れていない。

「キクマサ君……きみはこの学校をどう思う？」

ふいに理事長が、さりげなくだが彼にとって、一番重要である事を彼に問うた。

キクマサは目の前にいるのが理事長なんだと言う事をあまり意識せずいたせいか、気軽に考え込むと、

「……楽しいですよ。楽しい事ばかりではないですけど、そこが楽しいです。……確かに行き詰まることもありますし、これからもあると思いますが……少なくとも俺にとって、ここは居場所だと思っています。……カトレアさんの所に居た時よりも強くそう思えるのは、あの人も……」

その先の言葉に、少し戸惑ったが、今ならそうだと信じられる。

「あの人にとっても……そうだったからだと思います……」

理事長にとつてのカトレアさんと、キクマサにとつてのカトレアさんは違う。それでも、あの人の独特の生き方に引かれているのはお互い同じだと思つ。

彼女にとつて、ルネ・ヴィルトンとはいったいどういう存在なのだろうか。

“大切な場所”と一言で言うほど単純なものではなかったのだろう。

それでも、彼女にとつて居場所であつたに違いない。
いま、ここにいなくなつて。

理事長は彼の言葉に、少し目を驚かせていたが、ゆっくり笑つと頷いた。

「……………そうか。……………そうだね……………」

ギリシアの空気は温かい。

カラツとした風が我々に語りかける。

理事長は何を思っているのだろう。

その時だつた。

「……………理事長……………」

一人の厳格な、女性の声。静かなのに、耳から直接伝わるような声。その声を聞いて、理事長はあからさまにビクツとした。おそろおそろの振り返り、

「……………や、やあ……………エリーゼ……………」

「……………」

沢山のキャンパスの間、理事長のすぐ後ろで、音も無く佇んでいたのはエリーゼ先生。キクマサも驚いた。彼女はいつたいつここへ来たんだ。

そして、この氷つくような修羅場な空気に息を飲む。

彼女は冷ややかな瞳で理事長を見おろしていたが、キクマサの方に目を向けると、

「ごきげんよう、ルネ・アメジスト。……………大変ご迷惑をおかけしましたね……………」

「い……………いえ……………そんな……………」

彼は小刻みに首を振ったが、エリーゼ先生は相変わらずの無表情で、

「さあ理事長……………行きますよ」

「……………ああ、はい」

と言う感じで、小さくなっている理事長をその場から連れて行った。連れて行かれる時の理事長が、少しキクマサを垣間見て、「じゃあね」という口をしていたから、彼も小さく頭を下げた。

ルネ・ヴィルトンを相手にすると言ふ事は、世界を相手にしているも同じ事。それだけ重要な“箱庭”であるのだ。

そして、それ以前に、この学校の奥深くで背負い隠している、本当の存在理由を。

「……母さんは、この学校の裏の闇が、どうしようもなく嫌になっただらうね……。あの人は純粹に芸術を愛していたから……」

理事長はため息をつく、自分の首を絞めているようなネクタイを、少しばかり緩めた。

「だからこそ、私たちがこの学校を守っていかなくてはならないのです。……嘆いている暇はありませんよ、お兄様」

エリーゼは相変わらず、淡々とした口調だったが、その瞳は強く、固い決意を感じられた。

理事長もまた、文句は言っていたものの、この学校を守らなければいけないと言ふ思いは強く、そしてそれが自分に与えられた運命だと分かっていった。

この学校をどう思う？

その質問をした時に、“居場所です”と答えてくれる生徒が、一人でもいる限り。

この学校を、ただの“箱庭”としないために。

I
d
r
a
w

* drawコラム 〈 絵画科教師陣 〉

< ルネ・ヴィライアー教員 >

ルネ・ヴィライアーには、五つの科それぞれに、優秀な教員陣がいる。常にルネ・ヴィルトンに居る教員と、外部から招くアーティストの講義や授業を取り入れ、教育も幅広く展開。一般教養の教師は別として、学科指導の教師は、制作活動を行う作家も多い。

エリック・オーデール

* ルネ・ヴィルトン理事長

* 現在 40 歳

特徴 / 短い焦げ茶の髪を紳士的に整えてある。常に疲れていそう。備考 / 現在ルネ・ヴィルトンの理事長で、カトレアの息子。エリーゼの兄。前の理事長が亡くなり、カトレアまでいなくなって、彼がこの学校を任された。彼にはそれほど作家的な才能は無く、どちらかといえば世界の歴史に興味があり、他の学校を卒業した。その後アメリカの大学で働いていたが、前理事長が亡くなり後を継ぐ。いい年頃が一番忙しかったせいで婚期を逃し、いまだに独身。父親譲りの温厚で小心な性格のため、学校のあらゆる問題に頭を抱え、たまに理事長室から抜け出す。その度にエリーゼに怒られている。

エリーゼ・オーデール

*ルネ・ヴィルトン 絵画科 ヴィライアー 主任 / 四年生実技指導教師
の一人

*現在36歳

特徴 / 外ハネの肩までの茶髪。眼鏡をかけていて厳格そうな無表情。備考 / 絵画科のヴィライアー 主任であり、四年生の実技指導。常に厳格そうで、ちょっとやさつとでは笑わない。元々ルネ・ヴィルトンの学生で、ルネ・エメラルドであった。絵画の才能に恵まれ、将来を期待されていたが、自ら教師の道を選びそれに専念した。兄のサポートもこなし、この学校を取り巻くあらゆる問題にも深く関わっている。母カトレアがキクマサの師匠であるように、エリーゼもまたシャルロの師匠である。兄と同じく独身である。

リリス・ラヴィーニ

*ルネ・ヴィルトン 絵画科 ヴィライアー 副主任 / 一年生実技指導教師
の一人

*現在24歳

特徴／常にジーンズとラフな格好。白に近い髪色。ヘルほどではないが軽く癖っ毛。

備考／去年まで助手であった新米教師。元ルネ・アクアマリンで今の五年生とは学生時代が一年かぶっている。そのためいまだに「先輩」と呼ばれる事がある。ヘル叔父にあたり、有名なラヴィーニ家出身。しかし、兄弟の中で最も末っ子であり、甥っ子達と年代が近かったため、ラヴィーニ家としての注目はそれほど浴びる事は無かった。それでも彼は、それも自分の運命だと諦め、「画家の道は選ばず教師になる事を選択。いまでは最も若い人気のある先生だ。しかし、女生徒の恋の悩みは多く聞くが、自分とのフラグが全く立たないのを嘆いている。

ガイル・アンドリユー

*ルネ・ヴィルトン 絵画科総主任

*現在56歳

特徴／ダリのような髭に、細長い体。丸い眼鏡に薄い頭。

備考／「よろし」「ですぞ」といった口調が目立つおじいちゃん先生。現場に出てくる事はあまり無くなってきたが、長くこの学校に居る実力者。リースと違って常に英国紳士の正装。影で“髭長おじさま”と呼ばれている。年の割に目新しいものにやたらと興味を示し、旅好き。ヴィライアーの主任であった遙か昔は、自身が一番研修に張り切っていた。妻がいたが、「ついていけない」と出て行かれる始末。

ネイリー・ドールマン

* 絵画科二年生実技指導教師の一人

* 現在33歳

特徴/落ち着いた栗色の髪を下の方で結っている。

備考/キクマサ達の担任。上品で優しい、生徒思いの教師。日頃は穏やかだが、ルネ・コンの事件の時には身の危険を顧みずジェシカを取り押さえたり、いざと言うときは教師としての強さを見せる。

今年、二年生から多くのヴィライアーが出た事を誇りに思っている一方で、ジェシカがあのように、酷く悲しんでいた。元ルネ・オパールで、今も作家活動を展開している。

Q1：どうして先生達って独身が多いんですか？

A1：「……………何でって……………何でって……………ねえ？」（理事長）

A2：「……………」（一同）

Q2：リース先生には彼女いますか？

A1：「堂々と答えたまえ。リース先生。」（理事長）

A2：「はい！！いません！！募集中です！！！」（リース）

A3：「……………学校の生徒に手を出したら即刻退職です。分かっていますね、リース先生。」（エリーゼ）

A4：「……………」（リース）

Q3 先生達ってどこに居るんですか？

A1：「理事長は中央棟の理事長室に居るけど、基本的に絵画科の先生は絵画棟の職員室にいます。」（ネイリー）

A2：「他の科の先生方も、それぞれの科に居られるのであって。」

それは誠に、全然会う事がないのであって。そしてあまり仲良く無いのであって……。」（ガイル）

A3：「……………ガイル先生、それは禁句です……………」（ネイリー）

くまとめ

絵画科だけでも、もっと多くの教師が居ますが、今の所表に出てきているのはこれくらいです。他科の先生達もいずれ出てくると思います。

66：我が麗しきメルベリー嬢 上

立てば芍薬座れば牡丹

歩く姿は百合の花

絵画科ルネ・ヴィライアーの副団長、メルベリー・セレネームを知らない者は居ない。

彼女の優雅な身のこなし、穏やかな口調、清楚で美しい姿は目を引く。そして、絵画科でありながら頭脳明晰、ピアノとヴァイオリンも得意。どこに出しても恥ずかしくないレディーであり、

誰もが認める“ミス・絵画科”である。

「あまりにお嬢様すぎて、お高い壁を感じるよ。一般庶民は」

ある連休の初日、二年生の男子が集まった寮の一部屋。同級生のレミオがそんな事を言っただけは、ルネ・ヴィルトン新聞に写るメルベリーの写真を見ていた。団長もいたけれど、とりあえずレミオの目には写っていなかった。

「ルナシーは？」

キクマサはTVと新聞を交互に見ながら、さりげなく質問。フォルテはもっぱらTVに集中している。

「そりゃあ、我らがルナシーちゃんも負けずにべっぴんだけど、メルベリー先輩は見た目だけじゃなくて、全てが清廉潔白と云うか。お育ちがいいんだよ、分かるかい？その態度とか、姿勢とか、教養とかね、お嬢様なんだよまさしく。ルナシーちゃんはもうちょっと親しみやすいだろ？とてもじゃないけど、ぼくあ話もかけられないね、あの方には」

「……………そういうものなんだ」

レミオの独特のいい分はさておき、確かにキクマサやフォルテも、それほど彼女と関わった事が無い。ルネ・ヴィライアーの副団長と言えど、彼女は基本的に団長の後ろで、静かにサポートをしている感じだ。

前のエジプトプランでも、この人と関わる事は無く終わった。

何と言うか、第一印象は“白”って感じの人。派手な感じではなく、まさに清楚というか。

いったいどういう人なんだろう。

絵画科棟の最上階、ルネ・ヴィライアーの大会議室の隣にある準備室が、実質ヴィライアーの幹部室となっていた。

団長ことハク・リュオンは、次の研修をどうやって進めようか、どこへ行つて、どうしようかなどを、その部屋で模索するのである。五年生になると、卒業するための単位はだいたい取ってしまったている人が多く、割と時間に余裕がある。なので団長、副団長、団長補佐の三人は、授業が無かった時は基本的にここにおいて、作業をしているのだ。

「次の研修は、ヴィライアーを二手に分けてか……。四、五年生が“中国研修”で、一、二、三年生が“日本研修”……。まあ、アジ

アだね」

「そうだ。だからこそ、次もカイには戻ってきてもらわねえと、誰が日本研修の指揮をとるんだか。あいつにははっきり言っとけよ」

ティアンと団長は、次の研修について確認をしていた。その時、今までこの部屋にいなかったメルベリーが戻ってきて、

「先生との確認が取れました……。プランはこの通りで大丈夫だそうです」

そう言うと、資料をそつと団長の目の前に置いた。

団長は彼女をチラツと見て、「ご苦労」と一言だけ。

メルベリーは団長が資料を読み終わり、横に置くのを見計らって、いつもの様に紅茶を入れにいった。

彼女の入れる紅茶はおいしく、そこら辺のそれとは違う。団長はそれほどお茶にうるさくないが、彼女が入れるお茶はやはり格別だと思ふ。身内びいきだろうか。

今日はアールグレイのストレート。

「……………あの……………」

ふいにメルベリーが、お茶を飲んで休憩している団長とティアンに、

「少しよろしいでしょうか……………」

「……………何だ……………」

いつもはまったく臆せず話しかけてくるのに、今日は少しためらいがちだ。ティアンも団長も、彼女の方を見る。

「明日、お二人は支部の方へ行かれるのですよね。」

「……ああ。親父が来ているからな。……お前は来ない方がいいぞ、あいつに絡まれるから」

「……………」

何て事無く言う団長に、メルベリーは少々様子を伺っている。

「あの、それなら明日、お暇を頂きたいのですけれど……………」

「……………？ そんなの、俺たちに言わなくなっただって、好きに時間を使えばいいじゃないか」

「では、私一人で街へ出てもいいでしょうか……………」

彼女がそう言葉にする直前、ティアンも団長も、ちょうどアールグレイを口に持って行った時だった。その上品な香りに満足して、優雅な気分浸っていた時だ。

二人は、彼女の「一人で街に出る」と言う言葉に、せっかくのアールグレイを思いきり吹き出してしまった。

「だ、大丈夫ですか!？」

「ちょ……………ゲホッ……………おま、一人って……………」

団長は器官に入った紅茶にむせつつ、苦しそうに声を絞り出す。ティアンなんて胸をドンドン叩いた後、血相を変えて。

「ダメダメ！！ 何考えてるんだメルベリー！！ 君、自分がいかに箱入りお嬢様か分かってるの！？」

「そ、そこまで言わなくてもいいじゃないですか……。私はもう子供じゃないんですよ…。？ 二人とも過保護過ぎじゃないですか……。メルベリーは控えめに、彼ら二人の様子を伺った。二人はまだ苦しそうにしてたけれど、ティアンは気を取り直し、ハンカチで口を拭く。

「ダメだね。君に何かあつたら、君の父親に怒られるのはこの僕！ ！ 僕はね、君の父上を尊敬しても居るけれど、“苦手な人間ラッキング”の五本指にも入るのだよ」

「私もです」

メルベリーは、自分の父親について言われているのにあつさり肯定。彼女の父親は、ティアンの叔父に当たるが、娘への溺愛ぶりは相当凄まじく、それは恐ろしいほど。あのティアンですら苦手と豪語するほどだ。

団長もメルベリーの父親については勿論知っている。その人のことを考えればやはり、メルベリーを一人で外に出すことは難しい。それでなくても彼女はお嬢様。どこで誰が狙ってくるかも分からない。

「……何も一人じゃなくてもいいじゃないか」

「最初はナギを誘おうと思ってたんですけど、彼女は今個展を開いているので……。忙しいのです」

「……… ったく、あの女もつくづく使えねえな。……… じゃあレッドは。あいつは暇だろ」

団長は腕を組んで、何とか彼女を一人で外出させまいとしていた。とりあえず、誰でもいいからせめて誰かと一緒に。しかし、メルベリーは“レッド”と聞いて、急に頬を染める。

「そ、そんな……… レッドさんに迷惑はかけられません………！」

「………」

口では否定しているものの、何だその乙女の表情は。団長もティアンも口を半開きで妙に冷めた目になって、

「あ、レッドはダメだな。うん。何かすっげえむかついたから」

「君は本当にレッドへのコンプレックスの塊だね」

こそこそ、二人で作戦会議。

メルベリーはゆっくりため息をついて、視線を落とす。

「……… 分かりました。一人では行きません。……… だれか友人についてきてもらいます」

「そうしろ。ていうか、何の用があつて街まで出るんだよ………」

「……… それは……… 秘密です………」

メルベリーは団長から視線を逸らし気味に、小声で言った。団長は「何じゃそりゃ」と、かなりいかかわしそだった。メルベリーは長い髪を耳にかけながら軽く微笑むだけ。

「で、では私、そろそろ取っている授業があるので。……では……」

彼女はいつもの様に落ち着いた口調では無く、どこかよそよそしい。そそくさと逃げる様に、幹部室を抜ける。

これには団長もティアンも「……は？」と顔を見合わせ、

「何だあれ。……絶対なんか隠してるよな、あいつ」

「よそよそしいねえ。男でも出来たかな」

ティアンは冷静に、眼鏡を上げつつ考え込む。

しかし団長はそれこそ、再び冷めた紅茶を吹き出す勢いで、猛否定する。

「はああああ！！？　ダメだそんなの！！　そんなの俺が許さねえ！！！！」

「何で君が怒るのさ。君は父親か。……ていうか、それが本当なら実の父親に殺されるな、僕ら……」

「……………確かに……………」

二人はメルベリーの出て行った扉をいまだに見つめながら、大きくため息。とはいえ、彼女ももついい年なのだから、当然プライベートルトに干渉する訳にもいかない。

悔しいが、ここは様子を見るしか無いだろう。しかしティアンはケータイを取り出し、

「……………あ、ジャン？ 明日、メルベリーが街へ行くかもしれないからさあ、とりあえずつけといて。……………？ いや、送ったりしないでいいから。ていうかバレない様にね」

ためらいも無く、隙もない。団長は顔をしかめて、彼の行動に物申す。

「……………おいおいマジかよ。……………つーか誰だよジャンって」

「仕方ないだろ。明日彼女が誰とどこへ行こうが、何かあった後じや遅いだろ。……………そしてジャンは僕んとこのボディガードの一人です」

ティアンはケータイを閉じ、ひょうひょうとしている。

「ていうか、君はメルベリーの心配をしてる場合じゃないでしょ。明日君んとこの支部に行くんだから」

メルベリーのことに気を取られていた団長だが、彼ら二人にとっても明日は正念場だ。

「……………ああ。……………中国研修は親父の支援無しには実現しないからな。……………はあゝ頭痛い。本当最近思いやられることばかりだよ」

彼は椅子の背もたれに寄りかかり、天井を見上げた。四角いパネルの秩序の取れた視界は、やたらと気がめいる。

「……エジプト研修も結局、何だったか分からないしね。帰ってきたらガイドのセイさん雲隠れしてたし。先生達はしらばっくくれるし。……おまけに“鍵”まで没収されるとは……」

ティアンはわざとらしく首を振り、嘆いている割に諦め状態の薄ら笑い。

「結局“鍵”はどこへ行ったのやら。僕の情報力を持ってしても、途中からぶつぷり……。お手上げだね。相手が見えてこないけれど、強大だつてことは分かったよ」

机に肘を立て、指を組んでうなだれる。彼のこんな態度はあまり見ない。

「……僕らの努力とは何だったのか……」

「ぶつちやけお前は何にもしてないけどな。言っとくけど」

エスカレーターするティアンの文句に歯止めをかける様に、団長が突っ込みを入れる。エジプト研修で、団長は色々あったにしても、ティアンは結局取り残された側。

鍵を取ってきたのも二年生の活躍あってこそ。結局あの研修はきっかけにすぎないと言うことだ。

「ま……どうせすぐ次の研修あるしな。正直俺は、エジプト研修より遙かに心配だ、次の研修は」

「だから、明日の会合は大切ってことだろ……」

二人は、目の前の資料の束に記されている“中国研修”の文字を、

敵でも睨むような視線で。

団長、ティアン、メルベリーにとって、縁深い中国の地。ヨーロッパとは全く違う文明を築き上げ、文化を育んできた。

ヴィライアーとして、興味深い研修の地であるのは確か。

「……………それにしてもメルベリー……………気になるなあ……………」

「まだ言うか。……………むしろ僕たち、ストーカーに近いんだけど。過保護のレベル？ これ……………」

団長は、空になったティーカップを視界に捕えて、淡々と人差し指で机を叩いていた。その、特に変わった所も無い資料の上から。資料の文字は、あまりにもシンプル。

シンプル過ぎて想像もできない。次の研修がどうなるかなんて。

「中国ばかりに気を取られないでよ。日本研修だってどうなることやら。低学年しかないし……………心配心配」

ティアンはパソコンを操作しながら、次の“日本研修”の計画に取りかかり始める。中国がまとまった所で、日本もある。次の研修まで一ヶ月はあるが、もたもたしてられない。

心配と言っていた声が、あまりにもどうでも良さそうに聞こえたのはとりあえず流すとして。

団長は、指で机を叩くのをふいに止め、真剣なまなざしに戻す。

気を引き締めなければ。

ここでしっかりしなければ、団員全てを危険に晒すことになる。
俺の、俺たちの判断のせいだ。

エジプト研修のような、誰かが死んだかもしれない、殺されたかもしれない、と言っような思いはもうまっぴらだ。

それでも、危険の先に美しいものがあるのなら、

そこに行かなくてはならないのも俺たちだ。

I
d
r
a
w

67：我らが麗しきメルベリー嬢 中

大切なものを考えた時

それは何かを得て、何かを捨てた時

団長のことを、今回ばかりはハク・リュオンと意識しよう。

彼は約二十年前、中国の大きな会社の一人息子として生まれ、手塩をかけて育てられた。

会社と言うよりはいわゆる“マフィア”な組織で、表向きは海運業者。しかし裏の世界では名の知れた力のある組織である。そして、何といても有名なのは代々社長が美術品好きと言う所であり、目を付けたお宝は何が何んでも手に入れる。いわゆるコレクターなのだ。

組織の名を“黒龍会”

中国の由緒ある家柄の出自である。

たかが美術品。されど美術品。

美術品のコレクターをボスに持つマフィアは意外に多い。それは敵の数でもある。様々な理由でマフィア間の抗争は起こるが、黒龍会にとっては美術品の流動における抗争が最も多い。オークションにおいて金を積みすぎて自爆する組織もあれば、手に入れた美術品を裏で横取りされることもある。一つの美術品は、時に人間より重い扱いを受け、時に淡い喜びと、深い絶望を与える。

リュオンとティアンは、共に引き締まった表情だった。

今ばかりはヴィライアーの幹部ではなく、やはり、裏の世界の関係者なのだから。

学校の中に居ると分からなくなる。

自分たちの未来が。

「で、君たちが私に言いたいことはそれだけかい？」

二人の目の前に居る、背が高く黒髪オールバックの東洋人は、目元にしわを絶やさず、終始ピリピリしていた彼らを観察しているようだった。

「ああ…。俺たちの用件はそれだけだ」

リュオンは目の前の、自分にそっくりなその男を警戒しながら、淡

々と話を進めていった。しかしその男は頷きながら、胡散臭くもにっこりと笑う。

「リュオンの頼みだったら、何だって聞くさ。それにしても、見れば見るほど私にそっくりだねえ、さすが我が息子。ティアン、君もそう思わないかい？」

「ええ。瓜二つですよボスと」

ティアンは至って冷静に、眼鏡を粹に光らせて肯定。

リュオンはあからさまに嫌そうにしているが、どう見たって彼らはそっくりだった。違うのは表情くらい。

ここは黒龍会のギリシア支部。何の用があるのか知らないが、ボスはここを訪れた。

リュオンの父親である、ハク・リュウエンだ。

「ところで今日はメルベリーさんが見えないね」

「……あまり、あいつを関わらせない方がいいと思ってるな。ティアンのいとことはいえ、普通のお嬢さんだ」

「……………もったいないねえ」

ハク・リュウエンは、何が言いたいのか意味深に頷いて、席をゆっくり立った。

「すまないが、そろそろ私も忙しい。君たちの用件は分かった。改めて連絡させよう」

彼は側の御付きと共に、彼らの横を通りすぎた。御付きの者は「では…失礼しますリュオン様」と頭を下げて、静かに退出する。

ボスのいなくなった部屋は、緊張感の籠ったお香の香り。リュオンにとってはなじみ深い香りだった。

メルベリーは一人、アテネの都心に来ていた。彼女は元々友人と来るつもりは無く、一人でこの街へ来てみたかった。

彼女のことを話すとすれば、ティアンのいところ。しかし、ティアンの家の会社と、彼女の家の会社は、同じ系列とはいえ違う。セレネーム家にお嫁に行ったのが、彼女の母親と言う訳だ。

レーゼス家とハク家の繋がりには、三代ほど前から。ティアンとリュオンの繋がりには、生まれた時からと言っても良い。しかしメルベリーとリュオンの繋がりには、ルネ・ヴィルトンに入学してからだ。

たまたま、彼女がティアンのいところであったにすぎない。

彼女は、ここ最近思う所があった。幼い頃から両親に大切に育てられ、何不自由無く生きてきた自分は、これからどう生きていけばいいのか。一人の人間として、どう自立していけばいいのか。

今はもう五年生。卒業後のことを考えなければならない。

彼女にとって、ルネ・ヴィルトンの生活は斬新極まりなく、ティアンやリュオンの手伝いをする事で、自分にも出来ることがあるのだと知った。それがいつたい、どんな事だとしても。

人々が行き交う都会のにぎわい。一人でこんな所へ来るなんて、昔の自分だったら考えもつかなかった。

彼女はどこへ行きかけた訳では無い。目的は無くても、どこへ行きたいか、見つけたかったのかもしれない。

歴史を感じさせる空気は、ギリシア独特の物。そこに多く存在する人々を、当たり前のような不思議な感覚で見送る。我々の営み、発展、衰退。

その時ふと、彼女は目的の場所を見いだした。今、とても行きたいと思った場所がある。

今まで穏やかだった足取りが、急に早くなった。

リュオンとティアンは、黒龍会のギリシア支部の、とある別室でゆつくりしていた。さっきまでピリピリしていたからかもしれない。出されたジャスミンティーが、体にしみる。

「それにしても親父、全然元気そうだな」

「ええ。それはもう。いつもリュオン様のことを気にかけておいでです」

「それはそれで気持ち悪い気もするけどな」

ティアンとリュオンにお茶を出した、品のある老人は、リュオンにとってもなじみのある人物であった。彼らが生まれた時から世話になっているマ・コクセイという。

「それにしても、ボスは一体何の用事でここに来たんだろう。中国まで行く手間が省けたからいいんだけど」

「さあな。どうせ、欲しい物でもあったんだろ」

「ボスだってそんな、遊んでばかりな訳じゃないんだから……」

ティアンですら、それを探ることは自重する。

跡取りであるリュオンですら、黒龍会 という組織が、今、いったい何をしているのか分からないのだから。

そんな、とりあえず一段落の付いた時だった。

ティアンのケータイのバイブ音が聞こえる。彼は「はいはい」と面倒くさげにケータイを取り出し、耳に当てる。

「なに、ジャン。………はい？」

「……………？」

ティアンの顔色が、急に変わった。険しいような、あっけにとられたような顔をしている。

「……なにいいいいいい！！！！！！」

「！！！？」

リュオンは、いきなりティアンが叫んだので、口に含むジャスミンティーをそのまま吹き出しそうになってむせる。最近こんなのばかりだ。

「きさまジャン！！ そんな事で僕が君を減給で済ます訳が無いからな！！！！」

ティアンは早口で、なにやらえらく怒っている。

勢いよくケータイを切ると、彼は立ち上がった。リュオンは「は？ は？」と疑問系で。

「まさかメルベリーに何かあったのか！？」

「てか見失ったんだって。急に消えたらしいから、多分気づかれて、あっさり撒かれたんだと思う…。ジャン、相変わらず使えない奴め……」

ティアンはスーツの上着を着て、珍しく焦り気味だ。

なにやらケータイを鋭く睨んで、彼女に電話をかけたようだが、

「……あ くっそ！ ……メルベリーめ、電源切ってる！！」

案の定彼女は、今日1日は雲隠れしたいらしい。

「あいつもたまに変なことするよな。いいじゃねーか、もう放っておいてやれよ。子供じゃねーんだから」

「ダメダメ!! 嫁入り前の彼女に何かあつたら大問題だ。リュオン、君なら分かるだろ。大きな会社の行く末のために、僕らに自由は無い。メルベリーはね、卒業したら、知らないような男と婚約させられるんだ。会社の為にね。そしてそれが運命だ。」

「……会社の為に…かい。それってお前の会社だろ」

リュオンは、彼の思惑を否定出来るような立場では無かった。自分だつて一企業の跡取りだ。恋愛結婚なんて夢の話にすぎない。そしてそんなもの、望んですらいないから。

リュオンとティアンは、急いで車に乗り込んだ。運転手付きとかにしたら、安全性がどうか言い出してキリがないから、この際自分たちで運転。

「僕はね、普通免許は持つてるんだ」

何の免許も持っていない、取る必要も無いと思っていたリュオンは、この時ばかりはティアンの上から目線に齒を食いしばる。

「いいから早くしろよ！！ てかどうやってメルベリー探すんだ」

「ふっ。見くびらないでくれたまへ。メルベリーのケータイにはGPS機能がっている。僕には彼女がどこにいるのか、常に分かるのさ。そしてその事を彼女は知らない」

「怖あああ！！ お前めちゃくちゃ怖いぞ！！ ストーカーのレベルを超え始めた気がする！！」

悪寒の走る背筋をピンとさせて、リュオンは助手席で、やむを得ずGPS機能を扱っていた。ティアンのケータイで。

それにしても恐ろしいまでの執着心だ。どこのどいつがどうなろうと知ったことかと、いつもの彼なら言うのだろうが。いとことなると、こつも扱いの違うものなのか。

それともただ単に、自分の利益に関わる存在だからだろうか。

勢いよく発車された、優雅な扱いとは程遠い黒ベンツ。

「見よ！！ 僕のドラテクを！！」

荒いが巧みなテクニクで、高層ビルのジャングルを抜ける。いったい、何を考えて、何を思っでメルベリーが一人街へ出向いたのかは分からない。

しかし彼女が、愚かな行動をしているとも思えない。

GPSが示す場所は、ここからそう遠くない、でも近いとも言えない場所であった。リュオンが驚いたのは、その場所が、予想外でありながら思い当たる事もある場所だったから。

夕日が、傾き始めた時間。太陽と共に吸い込まれていくような雲の流れ。

あの場所は、自分達の始まりの場所と言っても良い。

68・我らが麗しきメルベリー嬢 下

自分が探しに来たもの

過去に望んでいたものと、今の願いの類似点

アクロポリス展望台から見下ろすアテネの街と、たくさんの歴史の跡。

彼女の視線はそれらを熱心に見下ろすというよりも、焦点の合わないそのむこうを見ているようだった。

観光地なだけあって、人の流動が激しい。しかし、メルベリーの耳に入ってものは何もなく、ただじっと考えていた。

考えるために、ここへ来たのだから。

四年前。自分たちが入学したてのころ、私は初めてここへ訪れた。

ギリシアという国をこの時まで何一つ分かっていなかったのだと思
い知らされた瞬間。

衝動的な感動を今でも感じ取れる。

それは、私だけではなくリュオンもティアンも。あの時、ただ何と
なく訪れたこの場所から、何一つ分かっていなかった私たちの五年
間は始まった。

絵を描くのが好き。それを極めたい。という時、最高峰の学校とし
て候補に上げられるのは、いくつかある。ここ、ギリシアのルネ・
ヴィルトンと、パリのシャトールル美術学校。そしてアメリカのグ
リーベイル美術学校だ。

その中で、このルネ・ヴィルトンを選んだのは些細なきっかけだっ
た。いとこのティアンに勧められた、ただそれだけ。
ただ、それだけだったのだ。

「メルベリーは何のつもりでここへ来たのだろうか」

展望台を昇るエレベーターの中で、ティアンは不思議そうな顔をし
ていた。

「こんな所へ一人で訪れることに、彼女はどんなメリットを求めているのだろう。そもそも彼女らしくもない」

「そんなこと、メルベリーにしか分からないだろ」

リュオンは腕を組んで、落ち着き払ってそう言うものの、やはり彼女の思考が気になった。今まで、自ら何かの行動を起こそうとしたこともなく、またその必要もないのがメルベリーである。ではなぜ、俺たち二人を騙してまでここへやってきたのか。

「……やはり男だろうか……ここで逢い引きしているんじゃないだろうか」

「もしそう言う場面に出くわしても、取り乱すなよティアン」

頭を抱え出しそうなティアンを横目に、リュオンはため息をついた。ここで何を言っても仕方がないが、“男ができた”説が有力な気がする。そもそもメルベリーに、今までそう言う話が出てこなかったことが不思議なのだ。

それでも彼女に、恋愛結婚は無いと決められている。

「ああ……どこの馬の骨がメルベリーをたぶらかしているとしたら、それは一族総出の大問題に発展しかねない。いや、と言うより僕がそうする。間違いない」

「妄言がすぎるぞ、おい。大丈夫か？」

高い展望台を昇っていく、その浮遊した感覚の中で、ティアンもまた淡々とした怒りを高めていた。何の根拠も無いのに、心配故か、

執着故か、妄想で先を読む。

相変わらず、ティアンにとってメルベリーはどういった存在なのか分からない。

リュオンだって、もしメルベリーに男でもできていたら、何ともいえずに寂しい気持ちになるのだろうなと予感はある。

夕日のよく映えるこの街を、いつまでも見ていられたらいいのに。

そして、吸い込んでしまえばいい。

私を。

私を取り巻く、私の世界と一緒に連れて。

あと一年足らずで終わる、今の生活を、私は仕様がなれないと思いたくはなかった。

ティアンやリュオンと共に居ると、今まで何もなく生きてきていた私自身が嘘だったみたいに、今の私が好きになれた。

ただ、御綺麗のまま、何不自由無く生きているより、少し闇のある世界に片足をつけて、それでも見失わない彼らの信念を、私も共に担うのだ。

大企業の跡取りでありながら、リユオンを立てるティアン。そして、率いるものとしての才能、カリスマ性を持ち合わせ、それでも奢らず努力するリユオンに魅せられた者はきつと多い。少ないけど、多い。

多くの者に評価され無くたって、少しの者が、それでも彼のために動くのだ。

私はきつと、卒業したら、またあの平和で不自由の無い生活に戻されるのだろう。

ガラス張りの展望台を、手のひらをつけて強く押す。微動だにしないのは当然だが、私は力を込めていた。

ここに来たのはいつまでもない。

心の中にある、卒業への恐れを確実にしたかった。

確実にして、だからこそ私が何をしたいのか見つけたかった。

ああ。

夕日が沈んでいく。

「メルベリー！！！！」

突然、時を止めるような、私の名を呼ぶ声。

メルベリーはガラスに付く手を離し、近づいてくる足音の方を振り返った。

「リュオン……ティアン……！！」

当然、自分が彼らを騙してここへやってきたことを今更否定はしないが、まさか。

まさか彼らがやって来るとは思わなかった。

メルベリーは、もの凄い形相で近づいてくる二人から、スー…と斜め下に視線を逸らす。

「どーゆーことですかね、これは」

ティアンはわざとらしく、眼鏡を押し上げつつ問いかける。

「まさかまさか？ 君が？ この僕を欺くとは心外っていつか？

さあ言うんだメルベリー！！ 君はいつたい誰とここに居るんだ！

「！」

「……………え！？」

「お、おい、ティアン。あまり熱くなるなよ」

リュオンはとりあえず、周りの目を気にしつつ、珍しくと言うか相

変わらずと言うか熱くなってる彼に忠告する。
メルベリーは目をぱちくりさせ、首をそっと傾ける。

「す、すみません。…私、誰とも一緒に来ませんでした。すみませ
ん」

「なあんだとおお!! うそをつけ!! 探すんだこちら辺で
怪しい男を!!」

「だ、か、ら!! うるせえんだよ貴様はさつきから!!」

あたりを険しく見渡しているティアンは、なんかもう色々残念だが、この域まで来るともはやなんなのだろう。リュオンは、自分がこんなにまともなポジションを担当していることに違和感を感じながらも、ドン引きしているメルベリーに向き直った。

「おい。お前、本当に一人で来たんだな」

「え?……は、はい。……そのことを怒っているのではないのですか?」

「……………い、いや……………ははっ……………」

リュオンは何かを誤摩化す様に、彼女から視線を逸らし、まさか自分たちが勝手に“男ができた”などと妄想していた事を言えるはずがなかった。メルベリーの、このきよとんとした顔と言ったら。こいつは本当に一人で来たのだろうか。

ただ、だとしたら彼女は、なぜこのような場所に来たのだろうか。リュオンは、ガラス張りの窓からのぞく、このギリシアの一瞬を垣

間見た。

“過去の残像”

この先ずっと、切れない縁を保ちたいと思う者だけが、

そう心がければいい

偶然見た、この世界の一瞬の美しさを、永遠に忘れないと言っのなら

／終わり

「……………あ……………」

リュオンは、めくるめくオレンジの空気に、ほんの少しの間、四年前の事を思い出していた。
まだ、入学して間もないあの頃の自分達。メルベリーとは出会ったばかりで、何ともたどたどしい関係であった時。

自分がここで、いつかの俺に誓った事は何だっただろう。

「……………懐かしいと思いませんか。あの日も、こんなに美しい夕日だった。私はあのとき、直感的に感じたんですよ。きつとまたいつかここで、私たち三人で同じ物を見る日が来るだろうって」

「……………」

さつきまで騒がしかったティアンは、いつの間にか落ち着き、静かになっていた。
メルベリーの頬をそのオレンジに染める、夕日の煌めきを、ただ三人で見ている。

「私は、まさかあなた方がここへ来るとは思っても見ませんでした。それでもやっぱり、私たちはここへ来るのですね……」

あのととき、ここで、それぞれの胸の奥に語り、誓った事を今更ほじくり返し、そして戒める。

私たちの関係に、再びうねりを生み出すために。

「何だ。結局僕らはただのピエロじゃないか」

「お前が一人踊らされて、無駄にテンションが高かったただけだがな」

三人は、並んで駐車場まで歩いていた。メルベリーはくすくす笑っていたが、多分本人は色々分かってないだろう。

「ティアンが運転してきたんですか？」

「そうだよ。この中で免許を持っているのは僕だけだからね。全く、本当に君は、いったい何しにここへ来たんだい」

「……………はつきりとした目的がなくても、足が向かう場所つてあるでしょう？ 一人で考えたい事があつたんです。とても一人にはさせてもらえませんでしたけど」

「はいはい。悪かったね、ほんと」

きつと、ティアンは悪かったなんて微塵も思っていないだろうが、彼女は俺たちがどうしてここへ来て、ストーカーみたいなの真似までしたのか聞かなかったし、それを責めもしなかった。

いつも通りの関係だ。

「すっかり夜だ。どこか良い所で飯でも食って帰ろうぜ」

リュオンは助手席に座ると、窓を目一杯開けた。

夜の街に飛び出す、一台の車と、車内に流れ込むとても生温い風。

生温いけど少し冷たい。

ここらへんのネオンの光は、大都会の摩天楼と言うほどではないが、十分に心ざわめく。

夜の訪れは、タイムリミットを感じさせる。

I
d
r
a
w

69：お茶の間のカイ・ヴォストン

いつからだろう

“美術品”が見える様になったのは

メルベリー嬢への憧れを云々と語るレミオをよそに、キクマサはそろそろ、フォルテが熱心にテレビの画面に食いついているのが気になった。

「どうした。今日何かあるの？」

「え？ そりゃあ、今から、特番があるんだよ。“秘宝・鑑定団スペシャル”だ」

「……………」

キクマサは、一瞬「はい？」という反応であったが、すぐにピンと来た。いま、このギリシア、はたまたヨーロッパをまたぐほどの鑑定ブーム。そして、それを引き起こした若き鑑定士。

「カイ先輩！！」

「ピンポン。今日はカイ先輩、五人の鑑定士の一人として呼ばれてるんだ。ほんと、忙しいお人だよな」

フォルテは、何だか瞳をキラキラさせて、番組が始まるのを今か今かと待っている。

エジプトプラン以来、フォルテはすっかりカイ先輩に憧れを持っている様だった。お互い美術品や歴史に詳しいし、何かと話が合うのだろう。

レミオは、猫っ口をフニャンとさせると新聞をぱらぱらめくった。

「カイ・ヴォストンか。先輩っていうか、もう一芸能人の域だから、どうも遠い人に思えて仕方ないけど。ほら、新聞にも載ってるよ。」

“鑑定王子の素顔に迫る”ってね」

キクマサは、“鑑定王子”という、一種のブームを引き起こした単語を、まじまじと見ていた。

厳かな音楽とともに始まった、その特番のメンバーに彼はいた。もともとこの番組の準レギュラーなのだが、何しろ彼は忙しいし、他の番組にも出ている。本だって出している。そして、ここルネ・ヴィルトンの学生であり、ルネ・ヴィライアーなのだ。かろうじて両立している彼の毎日を考えるだけで、胃が痛くなりそうだ。

「はい、今週も始まりました、秘宝・鑑定団！！　今夜は二時間スペシャルでお送りしております！！」

司会の軽快な挨拶から始まり、ゲストの芸能人が紹介される。しかし、その見目麗しい芸能人でも、見た目はどこにでもいそうな青年のカイにはCMのギャラが遠く及ばない。カイ・ヴォストンとはそれほどお茶の間に浸透している一種のスターなのである。

「今夜は何とですね、カイ先生にもおこし頂いてるんですよ。メリアちゃん、本物のカイ先生ですよ！！」

司会の男が、芸能人サイドにいたアイドルらしい女の子に、カイについて投げかける。そのとき抜かれたカイの映像が、何だか苦笑いしている様に見えて面白い。

「私、もうほんっつっとうにカイ先生に会いたかったですよ。だって、カイ先生って、私と同じ歳なのに“先生”なんですよ。もうかっこいいじゃないですか。何っていうか、もう背景がミニトグリーンの風、みたいなの。それに私、美術館とか行くの好きで、本当に一度会ってみたかったです！！」

必死なのか、天然なのか、やたらとオーバーな発言っぷりに芸能人サイドは盛り上がっているが、厳格そうな鑑定士サイドは冷ややかな笑いだっただ。このようなアイドルが美術品になど興味が無いのは百も承知だが。

カイは居たたまれないような表情だった。紺のスーツを着て、席の前の机で指を組むそれが、そわそわしい。

「カイ先生聞きました？ メリアちゃんみたいな可愛いアイドルがこんな風に言ってくれたら、正直嬉しいでしょう？」

「……………あ、は、はい。そりゃあ……………ねえ」

「何ですか、その反応はー！！　メリアちゃん泣きそうですよー！！！！」

すかさず悲しそうな顔を作るメリアに、会場は大爆笑だったが、カイは慌てて、

「いいや、びっくりしただけです。本当に。だって、ほら、芸能人の方達なんて雲の上の人たちですから」

一問置いて「眩し過ぎて」と付け加えた。さすがにTV慣れしていると言うか、カイ先輩は相変わらずカイ先輩であったが、選ぶ言葉が差し障りなく絶妙。

謙虚な態度と清潔感が、彼の売りだ。

TVの中のカイ先輩は、やはりオーラがあった。引きつけられるスター性が。

番組の中盤、贋作と本物を見極めるコーナーで、カイの本領発揮をみる事ができた。

「毎回このコーナーがあるけど、今回どなたがします？」

「やはりここは、エースのカイ先生でしょう」

「ええええええ！！！！ ミハエル先生！！！！ 僕ですかあああ！！！！？」

割と壮年の、眼鏡をかけた四角い顔の名物鑑定士ミハエル先生が、一つ越しのカイを指名した。他の鑑定士もニヤニヤ笑いながら、「ほらほら」と若いカイを促す。

「カイちゃん若いんだから、私たちの荷物を持たなくてね」

紅一点の中年女性鑑定士が、フリルの付いた扇子をはためかせ、カイをいじる。

この、いわゆるベテラン鑑定士の中で、カイが孫のような扱いを受ける関係性も、“鑑定番組”のブームを手伝った。

微笑ましいとか、見ていて和むとか。

カイは渋々前へ出て、カーテンのかかって見えない“何か”と向き合った。

「では、カイ先生、本物を当ててくださいね。これいつも皆さん手こずるんですよねえ」

「普通、鑑定つて言うのは時間をかけてやりますからね。ベテランの鑑定士でも、早見は難しいですよ」

ミハエル先生は前のめりになって、前もって補足。

赤いカーテンが、すっと降ろされた時、その場にあつた物は二つの絵画。

それを目にした瞬間、何だか、カイの瞳が色を変えた。

いつものカイ先輩ではない。鑑定士の瞳だ。

キクマサは、TV越しであれ、初めて見るこのような表情のカイに息を飲んだ。

「右が贋作です。まるで違います」

たった、数秒、これらの絵画を見比べただけだった。カイは、何も問題はないと言うような穏やかな口調でそう言いきった。一般人が見ても、何も変わる所が無さそうな、その二枚の天使の絵を。

他の鑑定士達も、生唾を飲む様に、彼をじっと見ていた。

「……………正解です。驚きの早さですね。信じられません」

司会の男は、瞳を輝かせている。

「ウィリアム・ブグローの絵画は繊細です。贋作とはいえ、タッチの流れや光の違いを読めば分かります」

カイは、そう説明した後、再びまじまじとその絵画を見つめた。一般人から言わせれば、そんな事言われてもって感じだろうが、さすがにプロだ。

しかし、カイを送り出した鑑定士達も、あっけにとられたり、流石と頷いたり、険しい顔をしている者も居る。

カイはその後、五つほど早見鑑定を行い、全問五秒以内で正解した。そして、それぞれを細かく説明する。

その姿を見ると、やはりカイが、こつも人気を博した理由がよくわかる。

「凄すぎるぜ、カイ先輩。ヴィライアーの中じゃあ目立とうとしなけれど、やっぱりプロは違うなあ。TVの中の先輩の方が生き生きしてるよね。天職なんだろうなあ……」

「……………先輩、どうしてあんなにすぐ分かるんだろう」

関心しきっているフォルテをよそに、キクマサは、鑑定を行う前のカイの表情を思い返していた。

確かに、鑑定する上での知識や技術は持っているのだろうが、それ以前に彼は、“美術品”に何かを見いだしている様に思えた。

彼の瞳は、それを目の前にした時、やはり一瞬色を変える。光を得る。

「流石はカイだ。あれには美術品が克明に見えている」

今日、同じ番組に出演したミハエル先生は、楽屋で、冴えない準レギュラーの鑑定士とタバコを吸っていた。

「あれ、本当に分かってたんですか？ TVサイドが番組を盛り上げるために、答えを教えてたんじゃないですか？」

「……………ははっ……………」

ミハエルは、灰皿にこんこんとタバコをたたき、再び口へ持って行く。

とても、残念そうな顔をして。

「君には何も見えてはいないようだね。それでもいつぱしの鑑定士なのだから、相当な努力をしたのだろっけれど。それもある意味素晴らしい事だけだね」

「……………見えるって……………何がですか？」

「……………」

冴えない鑑定士は顔をしかめる。

何も答えないミハエルは、やはり残念そうに首を傾げると、短くなつたタバコをじりじりと灰皿に押しつぶした。微かにくすぶる火の粉は、立ち上がる煙を見送る。

「カイは紛れもなく天才さ。生まれ持った、その瞳故にね」

そう。

それは、鑑定士の世界では、昔は当然の様に知られていた瞳の力。熟年の鑑定士の中には、ほんの微かだが“それ”を見いだせる者も多いと言つのに。

名作

一流の作家の作品

美術品の持つ魅惑のオーラ

その、内に秘めた魔力を見いだす事ができる彼の瞳は、間違いなく
“特別”だった。

I d r a w

70：二人の天才の起承転…

目標とは何だろう

高見とはどこまでだろう

目に見える結果を求めるより

君と共に、その先まで行ってみたい

「号外！！ ルネ・オパールが最優秀新人賞受賞！！ ルネ・アンバーは新人賞！！！！」

そんな新聞が出回ったのは、キクマサ達がちょうどお昼を食べてい

た時だった。食堂がざわつき、新聞を配っている少年に群がる。

「ヒュー、すっげえ!!! ルネ・ヴィルトンですら二十年前に取った新人賞が最高なのに。さすがこの学校の二枚看板だ」

二年に一度の世界規模のコンテスト。ヨーロッパ・アート・グランプリは、それだけ注目される、アート界のオリンピックであった。初めて受賞する者たちは必然的に新人賞までであるので、ルネ・ヴィルトンの生徒にとっては、最優秀新人賞は最高の称号である。そもそも、学生が取れるような賞ではないのだ。フォルテはパンプキンパイを飲み込む前に、興奮を抑えられないようだった。

「羨ましいなあ。これには四、五年生からしか出せないから、私たちはまた二年後なのね」

レイは、一気に沸騰した食堂を、恨めしそうに見流す。

ギリシアの小さなコンテストで賞を取ったりするニユースは、ヴィライアーであれ、そうでなかれたびたび耳にするが、今回のコンテストはとりあえず規模が違う。

スノー先輩。シャルロ先輩。

この二人はやはり、ヴィライアーの中でも群を抜くアーティスト。特にスノー先輩はこの学校の歴史を塗り替えたとも言える。

「素晴らしいわね。こういうとき、やっぱり同じヴィライアーでも圧倒的差を感じてしまうわ」

「仕様がないうよ。あの二人は“別次元”だもん。それより、悔しいだろうなあ、他の先輩達。学生なんだから、一次選考落ちが当然と

言えば当然なのに、側に賞取っちゃう人がいたらね」

ルナシーが、憧れ混じりのため息をつく。それはそうだ。いくらヴィライアーと同列に並べられても、外に出たら差が出てしまう。

黄金期と言われた四年生のうち、それでも賞を取れたのは二人だ。

四、五年生のヴィライアーのうち、応募したのがティアン以外の九人で、最終審査まで残ったのが四人。ノミネートまで残ったのが三人。そして、賞を取ったのが二人である。

しかし、ここ五年間誰一人ノミネートに残らなかった事実をふまえ、それだけでも大変価値のある事である。学生の身なのだから、ほとんどが一次にふるい落とされるのが当たり前であるのに、まさかの二人が受賞した。

今回、最優秀新人賞が一人で新人賞が五人であるが、その中の学生は三人である。

「ま、俺たちの中で間違っつて受賞があるとしたら、まああの二人だろうなとは思つてたけど。その通りでした」

授賞式の客席に、惜しくも受賞しませんでした四・五年生のメンツが並んで、式が始まるのを見ていた。

「だから、そう気を落とすなつてリオ。お前は最終審査までは残つたんだから。俺とシーダなんて一次落ちだぜ」

フレイは、どよんとした暗いオーラを纏つたリオに、気のきかない慰めを。

リオはしらつとフレイを見て、あっさりとした言葉を作る。

「僕だつて満足しているさ。勿論、今の実力で受賞出来るなんて思つていなかったし……。ただ、やっぱり実力の差を思い知つたつていうか。どう頑張つてもなかなか、あの二人を超えるのは難しいらしい……」

「……………」

それは、リオだけでなく、他の全員が思つていた事だった。

ノミネートまでこぎ着けたレッドだつて、当然その素晴らしい実績は変わらないが、受賞者が居るだけでそれは霞み、悔しさになる。

彼は特に、悔しさを全面に出してはなかったが、当然悔しかったのだろう。

悔しくない者なんていない。自分の分身であり我が子である絵を、はつきりとした判断基準のない世界で、それでも必ず評価される。順位がつけられる。

「見なよあのシャル口の不服そうな顔。ありや、よっぼど悔しかったんだね。スノーが自分より良い賞を取ったから」

「相変わらず、シャル口はスノーに負けたくないんだね……」

「贅沢な話だわ。まあ、負けず嫌いのあの子らしいけど」

四年生の、フレイ、リオ、シーダは、授賞式の様子を小声で語る。きらびやかな祭典の、その表彰台の上で、彼らは順番に表彰されていく。表彰された者たちは、少なからず嬉しそうだが、シャル口だけはむすつとしていた。せつかく頂いた名誉ある賞なのだから、愛想良く笑っておけばいいものの。

新人賞シリーズ最高タイトルである、ヨーロッパ・アート・グランプリの最優秀新人賞として、最後に表彰されたのはスノーだった。彼は、今までも数々の賞を受賞してきただけに、名の知れた一画家だ。当然彼を鼻屑にしている愛好家も居るし、スポンサーだっている。そもそも彼は、ロズベルト美術学院という最大のパトロンが付いている。彼の家が営む美術予備校だった。

しかし彼は、その賞をいつもの様に、淡々と受け取るのだ。嬉しいのか嬉しくないのか、全く読めないその表情で。会場は拍手に包ま

れ、誰もが彼を讃える。シャルロだってむすつとしていたが、最優秀新人賞が自分でないならば、スノーであるべきだと、彼女だからこそ思っていたのだろう。

たかが賞、されど賞。スノーにとって、受賞すると言つ事がどのような価値を持っているのか。

授賞式が終わり、専門家による講評会が行われた。この絵画が、なぜ受賞に至ったのかを説明される貴重な場である。

褒められたり、批判されたり、場合によっては不本意な事を言われたりもする。たとえ受賞していたって、専門家の中には批判が好きの人だっているから。

シャルロやスノーは受賞してきた回数も多いし、それなりに名の知れた若手である。しかしその分、批判される事だつて少なくはなかった。何と言つても、見る人によっては見方の変わる、万華鏡のような美術の世界である。見る人の趣味もあるし、素人目に受けの良い絵画、玄人目に受けの良い絵画も違ってくる。

答えの無い世界であり、答えを創っていく世界なのだ。

だからこそ色々な意見を聞いて、考えていかなくてはいけない。

まず始めに、スノーの最優秀賞作品「月面」についてだった。ぼこぼこしたテクスチャーの中に、薄く細かい描写部分のある、淡い斬新な絵画。特に何を描いたと言う訳ではないが、その表面は題名の様に月の表にも思える。

最初の専門家はそこを指摘した後、この絵画が魅せる空間性と、今後の展望について語る。

「たった、この四角の中だけの世界なのです。しかし、我々はその先の、そのもつと広い範囲の“空間”を見ている様な気になる。というのも、この表面のマチエールと、薄く描き込んだ部分の高さの差が、周りに響いてきていると言う事ですね。計算された構図です。こうでなければこの技法は生きなかつたと、言い聞かされるほどの説得力がこの絵にはある」

彼の講評は面白いものだった。簡潔であるが、自分の気持ちだけでなく、客観的に絵画を見ている様に思う。スノーは褒められても特に表情を変えずに、いつもの様に淡々としていた。

続く講評もとても実のある内容であった。褒める所は褒め、厳しい所は理由をつけて指摘をする。

そうであればとても、聞いていて納得のいくものである。

ただ、問題は四人目の講評であった。

「では、次はブライエン・マルティン先生です」

この評論家の名前が出てきた時、その場にいたルネ・ヴィライアーは皆一同に身を強ばらせた。

「……………でーたーよ。マルティン……………」

フレイは小声で、隣にいたリオに耳打ちをする。とても良いイメージを浮かべるとは思えない、嫌そうな声で。

リオも、ゆっくり頷き、心配そうな表情で彼の言葉を待った。

ブライエン・マルティンは、丸々した体を揺らし、獲物を捕らえるような瞳で、スノーを視界に収める。スノーはしれっとしたまま、相変わらずの態度だ。

「えへん。……………ま、こうなる事は予測していましたよ。彼が今まで積み上げてきた実績と評価を見ればね。スノーフリーク・ロズベルトですからね。有名なロズベルト家のお坊ちゃん。たとえ今回の彼の絵画が月並みであろうと、その結果は変わらなかったでしょう。確かに彼の絵画は素晴らしかった。しかしね、正直に言うと、果たして最優秀新人賞を取るほどの作品であったかは疑問なのですよ」

彼は半分身を乗り出して、ねっとりとした口調で語り出した。

その言葉に、他の評論家は眉根を潜め、会場は心無しかザワザワしている。スノーだけが最も落ち着いていたのかもしれない。

「ほらきた。ヴィライアー嫌いのマルティンが。最近スノーを目の敵にしてるからな。自分がシャートルルの出身なもんだから、ヴィライアーに何らかのトラウマがあるんだぜ」

「…………でも今は一様、あれで有名な評論家なんだから。美術界の重鎮の一人さ。彼に逆らったらこの世界を生きていけないとも言われてるよ。スノーだって割り切って聞いているだろ。……いや、聞いてないのかもしれないけど……。耐えるしか無いんだよ」

リオはそんな事を言いながらも、かなりハラハラしているようだった。無理も無い。

ここに居るヴィライアーは何かしら、このマルティンに酷評をされ、苦い思い出を植え付けられてきたからだ。

スノーなんて、これで何回目だ、と言うくらいだ。

しかし、そんな酷評を受け入れながら、それでも制作をしていかなければいけないのだ。

他の評論家だって、他人の評価に口出しは、早々出来やしないから。

「そもそも、強いインパクトを感じないし、技法が殺されている様にも見えるのでね。いや、これが良いと言う人もいるようだが、私には死んだ絵にしか見えやしない。これなら新人賞のセルギー・ブレジナの方がよっぽど魅力的だ。彼の方が最優秀賞にふさわしいインパクトと情熱を感じる。君のその淡々とした物静かな姿勢には、何かと気になつてね。いや失礼、別に“暗い”と言っている訳ではないのだよ。それか、その余裕は今までの栄光故の余裕かね？
奢りかね？」

「……………」

マルティンの酷評は終わりを見せなかった。会場がしんとしているのを他所に、答えづらそうな質問を投げかける。その時初めて、ス

ノーが視線だけをマルティンに向けた。

ステージには、評論家五人と、最優秀新人賞、新人賞五人と、司会だけがスポットライトを浴びている。さつきから、新人賞受賞者の中からシャルロが、ガンとマルティンを睨んでいるのが客席の皆には分かっていた。

「……めちゃくちゃ空気悪……。何でマルティンってあんなにKYなんだ？」

「ああ……。スノー可哀想に……」

シーダはもう、必死に祈りのポーズを取っていた。四年生の隣にいたエリーゼ先生は、ただじっとその場の行方を見つめている。

スノーはいつとき沈黙を作ったが、小さく息を付くと何かを言おうとした。

その時だった。

「良いでしょうか、マルティン先生……」

スノーが何かを答える前に、ものすつごく殺気を隠しもしないシャルロが、薄ら笑いを浮かべて質問を投げかけた。しかし、マルティンもマルティン。以前シャルロとは壮絶な討論をした事があるので「来たか、シャルロ・グレディア」と言わんばかりに白々しく彼女を見る。

「何かね。グレディア君。私は君に、何の質問もしていないがね」

「いいえ。これはきっと、この会場に居る皆が思っている事ですね。先生のおっしゃる“インパクト”の意味がよくわからなかったのです。確かに、そのスノーフリーク・ロズベルトの“月面”は、派手で強さのある絵画では無いでしょう。しかし、じわじわと引きつけられる、目の離せない作品になっていると思うのです。それってインパクトではないのですか？ あと、さつきどさくさに紛れて“死んだ絵”って言いましたよね。あれって……」

「どういう意味ですか？」

シャルロの言葉はいちいち嫌味がかつていたが、誰もが聞きたい事を代弁はしてくれていただろう。他の優秀者達は確かに、よけいな事を言うな、と言いたげなものもいたけれど（セルギー・ブレジナなど）。しかしシャルロは自分の事を言われた訳ではないのに、無性に腹が立っていたのだ。

自分がいつもいつも、スノーより上の評価をもらえないと悔しがる以上に。

マルチンは口を、ニヤリと言葉で言うように動かす。

「どういう意味かだつて？ そのままに決っているだろう。死んでいるのだよ。彼は今までがよっぽどうまくいきすぎて、どんな絵を描いたって受賞すると、そう思わずにはいられなかったのだろう。私には思いつきで描いた様にしか写らない。怠惰で、墮落し、“ロズベルト”の名に守られ、ルネ・ヴィルトンの名に守られ、可哀想に勘違いをしてしまった少年。才能がある者は沢山いるのに、いつも彼のせいで評価されない……」

熱のこもったその口調は、もはや講評ではない様に思えた。さすがに司会も戸惑っているし、他の評論家も「それは、思い込みでは……」と。それでも控えめだ。

シャルロは拳を握りしめ、自分の席を立つと、一直線でマルティンの席に突き進みその机を叩いた。

「ちょ、グレディア君！！ 席に戻りなさい！！」

司会が慌てているが、一番端の、最初に講評をした専門家が、視線で司会の男を止める。良いから見ていこうと言う様に。

シャルロは飛び出しそんな拳を必死に抑えていた。ここで手を出せば、自分は、スノーは、確実にこの世界を生きていけない気がして。

彼女の睨む瞳に、冷たい恐れを感じたマルティンだが、相変わらず嫌味に笑い、彼女を煽る。

「どうした、グレディア君。別に、君の絵を否定している訳ではないと言うのに」

「いえね、どう見たって、あなたがスノーの才能を恐れている様には見えないから」

しんとした会場。無理も無い。まさか、授賞式でこんな修羅場を見る事になるなんて、誰が思っただろう。四年生はさつきからハラハラしているし、シーダなんて泣いている。

五年生は腕を組んでぽかんと言った所だ。

エリーゼ先生だけが、さつきから相変わらず冷静に見ている。

スノーは、シャルロの取った行動を、黙って見ていたが、会場がしんとなって、二人が睨み合っているこのタイミングで、

「いい加減にしなよ、シャルロ」

「……………スノー……………」

シャルロは、今まで膨らんでいく一方だった怒りが、この時初めて緩くなった。

スノーはシャルロを、その茶色い澄んだ瞳でじっと見ている。

ただ、マルティンだけが、その一瞬の間を待っていたかの様に、

「ほう？ 同じヴイライアー同士庇いあいかね？ これだからルネ・ヴィルトンはダメなのだ。シャルロ・グレディア君、君はさっき私に『彼を恐れている』と、そう言ったね。それは君自身だろう？ 君は、いつも、いつまでも彼には勝てない。彼を超えられない。そうだろう？ 現に、今だって最優秀新人賞と新人賞だ。彼がいる限り君は一番になれない。明確に、君が彼より劣っているとされているからだ。たとえ彼が誰かに負けたとしても、それは君ではないだろう。なぜなら、君はさらにその下に居るからだ。グレディア君、君は彼より、明らかに下だよ！！」

シャルロに指を突きつけ、勝ち誇った様に。

シャルロは、これに対しては否定のしようがなかった。悔しかったが、それは心の奥で、自分自身思っていた事だったから。

歯を食いしばり、拳を握りしめ、それでも何も言えなかった。あの

シャルロでさえ。

その時だった。

じつと、じつとその言葉を聞いていたスノーが、席を立ち上がった。立派な赤い刺繍のされた椅子が、ふいにぎしつと音を立てる。

「……………では僕は、この賞を辞退します」

「!?!?!?!?」

「!?!?!?!?!?」

たった一言だけだったが、その言葉は会場を今一度ざわめかせた。さすがに、この言葉にはマルティンも驚きを隠せないようだ。まさか、この最も榮譽ある賞を、しかも最優秀新人賞を辞退する者が、果たして今までいただろうか。

何を言われたって、賞だけは譲らない者がほとんどであり、それが画家にとつての誇りとプライドであると、信じていたからだ。

その場の勢いで言ったにしてはあまりに冷静な口調で。

しかし、彼の瞳には、今まで見た事も無いほどの熱情を感じ取れる。

賞を放棄しているのに、この矛盾は何だ。
何が彼を、ここまで言わせているのか。

「ああそうか。そんなんだ……」と彼を理解出来たのは、この場に置いてはシャルロしかいなかったらう。彼女は今までの事をすっかり忘れた様に、彼女らしい不適な笑みに戻って、

「では、私も辞退します。“彼が”辞退した事で、私にとっても意味の無い賞になったので……」

ただ一言そう言って、マルティンを小馬鹿にした様に見下した。流石のマルティンも、もう何も言えなかった。言いようが無かったのだ。

スノーとシャルロは、啞然としたステージを降りて、二人してその会場を出て行ってしまった。

気まずかった会場は、彼ら二人が出て行った後、なおただならぬ空気が漂っていた。しかしマルティンが何かを言い出そうとした時、どこからか拍手が巻き起こった。それは怒濤の津波の様に会場を包み、大きくなりすぎた風船が割れた様に。

ヴィライアー達はその様子を驚きの表情で見ていたが、お互い顔を見合わせると小さくハイタッチ。

当然渋い顔をしていた者達もいたが、五人の評論家のうち三人が納得した様にぼつぼつと拍手をしていたから、もうどうしようもない。

ただ、その事をスノーとシャルロは知らない。多分興味も無い。彼らはそんなものを望んでいた訳ではない。

だが、それが、良くも悪くも人々の心をつかんだのだ。

良くも悪くも。

悪くも良くも。

やはり、そこには一般常識を超えた、何か特別な“才能”にも似た魅力があると言つ事だろうか。

I
d
r
a
w

71：二人の天才の…結

どうしようもなく

今はただ、開放感に浸っていたい

会場を抜け出したスノーとシャルロは、大きな川沿いのフェンスから、二人して身を乗り出し、大きな流れを見送っていた。逆らえない川の流れに、見いだす現状と立ち位置。

それでも今、彼らは清々しい気分だった。

「やってしまったわね」

「……やってしまったね」

「私たちこれから、どうなっていくと思う？」

シャルロは小気味に笑って、身を任せるフェンスから離れ、背の高いスノーを見上げた。

「……どうなるかって？ 何にも変わらないさ。いつも通り絵を描いていけばいい。それだけの話だよ」

「あなたって本当、物欲がないわね」

シャルロは、先ほどの大舞台を思い出す。私たちのやってしまった事はきつと、世界中で問題になるだろう。それでもスノーは、“いつも通り”を貫くのだろうけれど。肝が据わっているのか、天才故の感性か。

スノーは、ぼんやりとした視界に、向こう岸の摩天楼を映す。いつの間にか、あたりは紺色に染まり、建物の明かりが並び始める。

芸術の街、パリの黄昏。戻ってこない今日。

「僕、君が僕より劣っているなんて、一度も思った事ないよ」

「……何よそれ。私を慰めているの？」

「そうじゃない。僕がそう思っているから、そうなんだ。たまたま、この時代に評価されるのが僕なだけで。長い歴史を考えた時、僕らに果たして差なんてあるのだろうか……」

スノーはフェンスに腕を任せて、ずっと向こうを見ていた。決してシャルロを見てはいないが、彼の瞳の向こうには、彼女の絵だけがあつたのだ。

「君の絵が無かったら、今の僕の絵は無い。さっき、あの評論家が言ってたよね。僕には余裕があるって。そんなものあるはずも無い。いつも、君の絵を意識してしまう。君に勝つとか、負けるとかいう次元の話じゃないんだ。君が“良い絵”を描くと、僕はそれに応えなければとってしまう。触発されてしまう。……どうしようもなく、絵が描きたくなくなってしまふ……」

彼の声は、いつもの様に単調な物だったが、いつもの彼にしては言葉が多く、それが彼の本心だった。

シャルロはそれを、ただ静かに聞きながら、生温い夜風に長い巻き毛を任せる。

「今日はよく喋るわね」

「だって、言っとかないと。君に嫌われたくないからね」

スノーはフェンスを背もたれにして、まっすぐに立った。彼とシャルロの身長差が、二人並んで立つと、際立ってしまう。

「よく言うわよ。いつも私より一歩前にいるくせに。私は悔しくて仕方が無いのよ」

「そんな事言わないでよ。シャルロが描いてくれないと、僕はきつと描き続けられない気がするんだ」

「……………そんな事言って。私が絵を描かなくなったら、あなたどうするのよ」

シャルロは腰に手をあて、白々しくスノーを見上げた。

彼は、瞬き始めた星に気がつき、純粹な瞳でそれを数えたりして、一時の沈黙は、二人にとってとても大きな意味を持っている。

「僕は逆に聞きたいよ。君は、僕がいなくて絵を描いていけるかい？」

「……………」

シャルロは彼の質問に、鼻で笑って「はいはい、降参です」と。答えは、あの時、二人で賞を辞退した時に分かっていた事だ。

この学校に入学してきて、お互いの絵を見たときから始まっていた。二人の天才の物語。

天才と一言で言えるなら苦勞しない。

ただ、お互いの絵を見て、関わって、ヴィライアーになって。賞を目指したり、競い合ったり、意識しあったり。共に響きあい、大きな波紋を築き上げてきた。そんな存在が、すぐ側に現れてくれた事。

「……………とても良い夜ね。ずっとここで、波の音を聞いていたいわ。絵の事を少し忘れて、この空気に浸っていたい。今日の事なんて、この川の流れに捨ててしまっ、海まで連れて行ってくれれば良い。…そして、また明日から私たちは、絵を描いていくんだわ」

「……………肩書きなんて無い方が、かえって身軽さ。僕たちを止められる者なんて居やしないんだ」

川を渡る船の、チカチカと光る二つのライトサイン。

あの船は僕らを、きつと限界の向こうの川岸に連れて行ってくれる。

ゴールの無い芸術の世界で、答えなんて無いのにそれを探しながら、何度も何度も繰り返し、自分の表現者としての意志を示す。

きつと見つかる。

二人はそれから、ちゃんとホテルに戻って、こっぴどくエリーゼ先生に叱られた。その後団長にも叱られた。

後々、あらゆるところで波紋を呼び、色々な所で叩かれ、ルネ・ヴィルトンにも大きな迷惑をかける事になったが、彼らは後悔していなかった。マルティンなんてあらゆる所で、隙あれば彼らを批判し

ている。

それでも、彼らは絵を描き続ける。

その事実が変わらないし、その絵が今まで以上に進化発展を続ける事も変わらない。

あの事件のせいで、今まで以上に彼らの絵画は注目される様になる。もう二度と、最高峰のあの賞を取れなくなったとしても。

二人が目指す物は、そんな簡単な物じゃない。
そんなもの見ていない。

二人の天才はお互いだけを見ていたら、たまたま、

周りよりもずっとずっと先に行きすぎていて、世界中の誰もがついて来れてなかったただけの話。

皆が追いつくのは、きつとまたいつかの時代。

彼らが発展を止め、それにやっと追いつくと言つ事。

誰よりも先へ行く。

それが芸術なのだ、彼らは生き様に示したのだ。

I
d
r
a
w

72：涙

きつと一生

私は“私”を被り続ける。

ギリシアのカラツと晴れた天気は、日常の事だった。空を見れば、今日もいつもの様に穏やかで愉快で、そして、自分のやりたい事について悩む。そんな日常が待っていると思っていた。

時間はいつもの様に流れているのに、非日常は突然やって来る。

「……………はい？明日の午後ですか？……………日本の外務大臣が訪問ですか？」

「ええ。驚く事ではありません。四年前も来ているでしょう？ルネ・テクタイト……………」

「それはそうかもしれませんが……………そうですね、日本の……………」

団長は、いきなり呼び出された事は置いといて、その事情に驚いた。エリーゼ先生はいつも、突拍子の無い事をしれっと告げるから、こちらでも聞き流してしまいたいそう。そして、ワントンポ遅れて事の重大性に気がつく。

理事長室の椅子に座ったままの理事長は、

「まあ、君たちヴィライアーが何をすると云う訳ではないんだが。それぞれの科のヴィライアー幹部には色々手伝ってもらうだろうから。訪問って言ったって、ほんの少しの時間だ。絵画科は四年生の授業を見学していただく」

「……………そうですね」

「突然ですまなかつたね。何しろ、最近日本の内閣が変わったからね。どうなるか分からなかつたものだから……………」

団長は視線を斜め上に流して、そう言えばそうだったと世界の情勢を思い出す。ここギリシアに居ると、自分の国の動きだつて現地に居るより疎くなるのに、ましてや日本の事となると。

そうだった。確か日本の内閣は最近新しくなったんだった。

「そう言う訳です。明日の事は追ってお知らせいたします。どうか日本の外務大臣に、この学校の素晴らしい部分を見ていただけられる様全力を尽くしてください。くれぐれも、問題を起こさない様に」

エリーゼ先生はこれまたしれっと言っていたが、ついこの前、ある大きなコンテストで“あいつ”と“あいつ”が問題を起こしたこともあり、多少警戒しているようだった。

「言っておきます。特に四年生に」

団長はきりつとした表情で、真剣に。当然ですと言わんばかりに。

エリーゼ先生はこくと頷き、

「そして、もう一つ言っておきたい事があります。……とても、重要な事なので。……二年生のオノダ・キクマサ……ルネ・アメジストの事です」

「……え、あいつ何かやらかしたんですか？」

団長は、意外な奴の名を聞いたと言う様に、らしからぬ様に目をぱちぱちさせる。

エリーゼ先生は少々、複雑そうだった。少なくとも、団長にはそう見えた。

「いや、あの子がどうと言う訳ではない……。ただ、明日の“訪問”に関わる事なのだ……」

理事長は机の上にある新聞を指差した。

そこには、“ギリシアに降り立った日本の外務大臣”という記事。今日の新聞だ。

団長は、まじまじと記事を読み始め、すぐに表情を一転させた。そう、読み始めたすぐの事だった。

彼が驚いたのは、その記事の内容でも何でも無い。

もっと、単純な事であり、そしてもっと複雑な問題だった。

ルナシーは一人、学校の林の大きな樹の裏側に座って、ぼんやり考え事をしていた。
心地よい風がさわさわ木の葉を揺らす度、彼女の長い髪がその方向へ流される。

それでも彼女はじっと座って考えていた。

昨日、レイの描いている絵を一生懸命見ているキクマサの姿を見つ

けた。彼女が居ない時に、じつと食い入る様に。顎に手を添え、ただじつと見ていた。焦がれるような瞳で。

すぐ側にあつた私の絵なんて気にもしないで。

キクマサがああなのだから、フォルテなんて当然。もっと柔らかい表情で彼女の絵を見ている。

レイは、片目を失い、とても苦勞しながら絵を描いている。昔の様に描ける訳が無い。いまだにその事を苦惱して、自分の思う様に描けない、上手くいかないと言ふ歯を食いしばりながら、時には一人で泣きながら絵を描いている。

私は一番側で、その姿を見てきたし、それはキクマサやフォルテだつてそうだ。

確かに、彼女の絵はがらつと変わった。昔のような正確さは無く、どこか飛んで見える絵。

しかし、彼女はやはり選ばれた才能を持っている。それすらも武器にして、新しい境地の絵を描こうとしている。

輝かしさは一層増して、何だかもっと遠くへ行ってしまったような気がした。私たちには理解出来ないような、もっと遠くへ。

まだ彼女は進化するのかと、私たちは身震いするのだ。

キクマサもフォルテも、彼女の絵に言い様も無い魅力を感じてしまふのだらう。どうしようもなく、見てしまふ。

「……………私はいつたい、何なのだろう……………」

昨日ほどそう思った事は無い。フォルテは前から、レイの絵に憧れと尊敬を感じていたのは百も承知だったが、キクマサもそうなのだと思います。あの時、私はとてつもなくレイとの差を感じた。

何がショックだったのだろう。

私は悔しくて泣きたくなった。

レイの絵をじつと見るキクマサに、忘れ去られた私の絵。

あの空間に、あの部屋にどうして入れると言うのだろう。

私が廊下を歩いていると、たいていの男子生徒は振り向いたり囁いたりする。割と仲良くしている男子だと無駄に話しかけてきたりする。顔も見た事無いような奴に告白されるなんて日常だ。

だから何だって言うの。

私が美しいなんて、そんな事知っている。

それが、全く持って無意味だと、本当の意味で思い知った。

少なくとも、自分はそこに意味を見いだしてはいない。やりきれない空しさだけが突き刺さる。

「今ならきつと、泣けるわ。……一人だもの」

結局私は、本当の気持ちを誰にも知られたくないからと、人前では笑っている。いつもニコニコしていて、気を使って。それがルナシ
ーなのだと植え付ける。

だってそれが、誰もが求める“私”だから。

だったらそうで居てあげようと、私は仮面を被るのだ。それをこれ
からも止める気なんて無い。

さわさわ、風に身を任せ、一生懸命悲しい気持ちを思い出しても、
結局私は泣けなかった。何かを失った訳でも、誰かに酷い事をされ
た訳でもないのに。どうしてこんなに情けないのだろう。惨めで切
なくて、空しい。

こんなに空しいのに、ただここに居るだけ。

「ルナのやつ、今日描きに来ないな」

キクマサは、いつもなら彼女の居るはずのイーゼルを見た。

普段と違う景色に見えるのは、彼女の揺れる金の髪が無いからか。

「昨日も遅くに来たよな。何かあったのかな。」

「あら〜知らないの〜キクマサ君。ルナは昨日、三年生のエドワード先輩にプロポーズされたのよ。もしかしたら、今日はデートもしてるのかしら」

レイは筆を止め、くるつと椅子の向きを変えた。

とてもわざとらしい口調で、知ったかぶりの表情だ。

「ええええ。マジで？エドワード先輩って言うたら、絵の才能はからっきしだけど、プレイボーイでイケメンの。」

フォルテもその話題に思いつきり食いついて、椅子の向きを変える。前のめりになって、目をキラキラさせて、何か楽しそうだ。こうなったらもう、休憩。お茶の時間だ。

「今日の授業ではいつも通りだったのにな。」

キクマサは授業中の彼女を思い出す。特にいつもと変わらず、穏やかそうにニコニコしていたっけ。

「ほんつと、ルナさんってモテるよね。あれだけプロポーズされたりしながら、今まで何ともなく俺たちといたってことは、要するに断ってきた訳だ。それも凄いよね」

「そりゃあ、あれだけ美人だったら当然だわ。ああ……どんな感じなのかしら、日常的にプロポーズとかされるのって……」

「今までそんな経験無いから……レイには分からないよね」

フォルテが小馬鹿にした様に、わざとらしく「可哀想に」とか言っている。レイはフォルテに黒くなった練り消しのボールを投げつけた。

キクマサは何と言っているのかわからなかった。

今まで、ルナシーがそんなに人気があると意識した事が無かったから。常に四人で居る、それが普通で、これからもそうなのだろうと勝手に思っていたからだ。

でも、もし彼女が他の男性と付き合ったりとかそう言う関係になると、もう四人では居られない。

「そっか……。もしかしたら、そのエドワード先輩と付き合っちゃうのかな……」

「あれゝ気になるの？キクマサ君気になってるの？」

レイがなぜか、とてもワクワクした表情で、しつこいくらいに聞いてくる。

キクマサは首を捻って、

「いや、もしそうなら応援するけど。そうになったら四人で遊んだり出来ないからなあ」

「え〜：ルナさんがあんな男と付き合うか〜？」

フォルテは「どうかなく」と腕を組んで、大きく体を揺らす。キクマサにはその意味さえ分からなかった。

「どうしてそんな事言いきれるんだよ」

「どうしてって……。だってルナさんだよ？ 興味ないでしょー…そこら辺の男なんて」

「分からないわよ。エドワード先輩ってとても美形なのよ。ちよつとナルシストな気もするけど。絵になると思っただけなあ……。それとも何よあんだ、ルナシーに彼氏が出来るとまずいつて言うの？」

レイが妙に怖い口調で、フォルテをいかかわしそうに見ている。フォルテは顔を歪ませて、

「はい？ どうしてそうなるんだよ…ルナさんの性格を考慮した上での分析を」

本人がここに居る訳でもないのに、ルナシーの話題でとても盛り上がる三人。

キクマサはフォルテの発言に多少の違和感を覚えたが、それが何なのかも分からなかったから追求出来ない。

フォルテはキクマサを見る。

「お前はどっと思っ？」

「どっと思っって？ 何が？」

「……まさかとは思っけど、お前達の抱くルナシー像って、いまだに“可愛くて”“優しくて”“気の効く良い子”とかじゃないよな？」

フォルテは、ちょっと白々しい口調で、何だかキクマサとレイを試す様に目を細める。

しかし二人は考えもせずに、

「その他に何かあるって言うんだよ。良い子じゃないか、ルナは」

「あえて付け足すなら、天然で運動神経が微妙って所かしら。でも、言うときは言うのよね、あの子」

レイなんて、私が一番あの子を知っていると云ったような自信だ。フォルテはその時、ふと気がついたのだ。自分と、この二人の違いに。

「……なるほどねえ。……ま、いつか」

ある意味、とても興味深い事に気がついた。

この二人は、本当の意味でルナシーを分かかっていない。でも、それが当然なのだ。なぜなら彼女自身が頑にそうである様振る舞っているからだ。

フォルテとこの二人の違いは、ルナシーへのイメージ。

他人を観察する癖のある自分と違って、この二人は素直なのだ。素直だから、普段の彼女を本当のルナシーだと思っている。

「……………なるほどねえ……………」

もう一度、小さな声で繰り返し呟いた。

そして、今回の件について相変わらず語っているレイ、それを聞いているキクマサを遠い目で見て、困った様に笑った。

こりゃあ、ルナシーだってやりきれないかな。

でも、本当の友達、仲間を目指すならここは、自分たちで本当の彼女を見つめなければ。きっとそれはとても難しい事だろうけれど。

彼女自身が知られる事を望んでいないから。でも、今は静かにしておくしかないか。

フォルテは、もしかしたら自分だって何一つ分かっていないのかもしれないと思つて、とりあえず保留にした。しかし彼はそうやって“疑う”事をするから、レイとキクマサとは違つのだ。

キクマサは夕方になって、ふと林を散歩してみようと思った。
こんなに心地の良い美しい夕方なのだから、一人でふらふらするの
も悪くない気がする。

彼は何も持たないで、スケッチブックすら持たないで林に来てみた。
オレンジの強い夕方だ。整えられた林の、きめの細かい芝生を踏ん
で、背の高い木々を見上げながら歩く。

その時、ある木の根元から、見覚えのある金の髪を見つけた。キク
マサは、今日の話題の人を見つけたと思って、何だか嬉しくなって
駆けつけ、ひよいと覗き込んだ。

「……………」

そこにはルナシーが居た。木の根元に背をつけ寄りかかり、顔を傾
けて眠っている。座り込んだ膝の上には、小さな手が力無く添えら
れている。

「こんな所に居たのか。しかも眠ってるよ……………全く……………」

キクマサは何だかおかしくて吹き出しそうだったが、彼女の横に膝
をついて、肩を揺さぶった。

「起きろよルナ……………こんな所で寝てたら風邪を……………」

ふと彼は、肩を揺さぶる手を止めた。彼女の顔を直視した時、うっすら頬を伝わる涙を見てしまったから。

夕暮れがだんだん遠のいていく。

透き通った風が、一瞬強く吹き抜けていった。

「……………ん……………」

ルナシーはその、風が木々を揺らす音で目を覚ました。膝の上にあった手で目を擦り、まるでさっき見たものが嘘だったかの様に、頬の涙を拭いてしまっていた。

「……………キク……………？」

彼女はキクマサを見ると、一瞬不思議そうにしていたが、すぐにいつもの可愛らしい表情に変えると、

「ふふ…私寝ちゃってたのね。……………とても気持ちよかったから。」

「……………あ、ああ……………」

彼女は本当に“いつも通り”だった。

キクマサはさっき見た、あの彼女の涙をいまだに忘れられず、それは心に大きなしこりを残していた。

ルナシーは背伸びをして、ひょいと立ち上がると、

「キクは散歩でもしていたの？良かったら一緒に帰りましょうよ…」

…。そろそろ夜がやってくるわ。」

夜がやってくる。

とても彼女らしい表現だ。

いや、待てよ……。彼女らしい……？
そもそも、ルナシーらしいって何だ？

「……………？どうしたの？」

「い、いや……」

キクマサは動揺していた。自分の中で、彼女に対して大きな疑問が生じてきているのが分かる。でも、それを言葉にしると言われても無理だ。

ただ、前を歩く彼女の背中を見つめながら、

今、ルナシーが何を考えているのかも分からなかった。

I
d
r
a
w

1000

73・レイニーブルー・ノスタルジア『父』

雨の音がいつまでも消えない

いつまでも、どこまでも

レイニーブルー・ノスタルジア

激しい稲妻が、暗い窓の向こうを走った。一瞬遅れてから聞こえる激しい音は、キクマサを深い眠りから連れ戻した。

「……………」

稲妻の音と雨の音。ただそれだけの午前三時。

昨日はあんなに天気がよかったのに、夜になって急に雨が降り出したようだった。

彼は、胸をよぎる激しい衝動に気がついていて、雷の音に驚いたのだろうか。

もう一度、今度はもっと近くで稲妻が光った。窓全体を包む光は、起きたばかりのキクマサには眩し過ぎて、それでも彼は目を見開いていた。光の向こうに何かを見つけた気がして。

「……………雨……………か……………」

雨の音。

自分はいつも、こんな雨の強い日に、人生において重大な壁とぶつかっている気がする。

人生において、一つの区切りとなるような何かと。

上手く眠れない、そわそわした心のまま朝を迎えた。
キクマサはいつもの様に起きて、フォルテを引きずり起こす。朝食を食べ、一時間目の講義に出なければ。

「あら、おはよう。今日は嫌な天気ね」

「おはよう、ルナ……」

食堂で、いつもの定位置に座る。そこにはレイモルルナシーも居る。だいたい決って女子の方が早くやってきて、既にパンやスープを選んでしまっているから、彼女達は時間に余裕がある様に優雅な朝を迎えるのだ。

ルナシーは今朝も、相変わらずだった。

「知っている？ 昨日、ギリシアに日本の外務大臣が来たじゃない？」

「え……そうなの？……ふーん……」

「キクマサ君。君の国の事だよ？ 本当に世の中の事に疎いなあ君

は

「フォルテは、当然知っていると言う様に、得意げな表情だ。バターロールを半分くらい一気に口へ詰め込む。」

「で、それがどうかしたの……」

「いや、さっきレミオが面白そうに新聞を持ってきたのよ。これ、見てよ……」

レイは傍らの新聞を広げ、レミオがおもしろがっている部分を指差した。

「ただ、その記事はキクマサにとって、ここ何年かで最も驚いたニュースであったが。」

「……日本の新たな外務大臣“オノダ・キクジ氏”の手腕やいかに……ねえほら、日本ってあなたみたいな名前が多いのかしら。この大臣、そっくりな名前だわ。」

「……………」

キクマサは一瞬、その名前を聞き流しそうになったが、じわじわと現実が飛び込んでくる。

言葉も出ない、目もそらせない、その新聞トップの写真。

「……………」

心の奥で、何かがざわついている。驚き以上の焦り、トラウマにも近いその人物の顔。間違いない。

「……………どうしたの……………キク……………？」

ルナシーはすぐに、彼の様子がおかしい事に気がついた。どう見たって明らかに動揺している。表情が固まって、顔がとても青白い。

「……………いや……………」

キクマサは写真から逃げる様に顔を背け、額に手を置いた。なぜだ。

なぜ今、今こんな所で、あの男を見なければならぬのだろうか。もう、忘れてかったその顔を。

「どうしたんだよ、おいキク……………真っ青だぞ」

「……………いや、いや……………いや、何でも無いんだ……………。ちょっと驚いたから……………。何でも無い、大丈夫……………」

とても大丈夫には見えなかった。キクマサは一度深呼吸して、不審がっている皆に向き直った。

「……………そいつ、俺の親父なんだ。……………そっか……………外務大臣になったんだ……………出世したんだな」

「……………うそ」

皆の反応は、予想以上に単純なものだった。大げさに驚くよりはむしろ、驚きすぎて言葉が出ないと言うような。

キクマサは今まで、極力家族の事は口にして来なかったから。

「いやまて。……………え、マジで？ お前じゃあ、経済大国二位の日本の、しかも外務大臣の息子なの？ 何それ初耳にもほどがあるぞ」

「いや、俺が親父と最後に会ったときは、あいつは普通の国会議員だったんだ。まさか、大臣になれるような奴だとは思っていなかったけど……………。こんな遠い国まで来たのに、そいつの顔を見る日が来るなんて……………」

小さく笑いながら、彼は呟く様に言った。しかし表情はとても強ばっていて、キクマサらしからぬ弱々しい瞳だった。彼の顔を見ただけで、フォルテ、ルナシー、レイは、その事に軽く触れられないと悟った。突っ込む事も出来ずに、モヤモヤした疑問だけを抱えて、恐ろしいほど静かな朝食を済ませる。

キクマサは押し黙ったまま、常に何かを考えているようだった。

今日の授業は、まるで上の空だった。午前中の講義授業が何だったのかすら分からない。昼食を食べようと言われたが、とてもそんな気分にはなれなかった。

「おい、お前大丈夫か？ 今日らしくないぜ。」

「……………いや、大丈夫だ。……………大丈夫なんだ、気にしないでくれ」
余裕の無い彼の言葉は、より一層心配になる。しかし、ぴりっとした空気を纏っていたため、何も聞く事が出来ないし、どうしようもない。

キクマサは、自分が周りに心配をかけている事は百も承知だったが、
「……………ごめん……………。俺、今日どうかしている。……………ごめん、頭冷やしてくるよ……………」

今彼らとともに居たら、頭がパンクしてしまいそうで、
一人になりたかった。

「……………」
「……………」

キクマサは一人で、ふらふらと寮に戻っていった。

「……………大丈夫かしら。あんなキク、初めて見たわ!!」

「……………うーん……………。これはいったい、どうしたものか……………」

レイは彼が遠のいたのを確認したら、その事にすぐ突っ込んだ。フオルテは目一杯眉間を寄せ、顎に手を添え唇を噛む。
誰もが、キクマサを“変”だと思った。当然、その通りだから。

「……………何だか苦しそうね…キク……………」

ルナシーは、今まで見た事も無いくらい動揺し、沈んでいるキクマサをじっと、じっと見送った。彼の背中はいつになく寂しい。うっとうしい今日の雨を、物語っている様に。

キクマサにとって、“父親”と言う物が何かしらキーワードになっている事は、誰にでも分かる事だったが、それが果たして何なのか。答えを知るには、時間がかかりそうだ。

「嫌な雨だねえ。まいつちやうよ」

「珍しいわね。最近ずっと晴れていたのに」

五年生のレッドとナギは、並んで寮のフロントに居た。今から絵画棟に向かう、そんな所だろうか。

「団長は大変だね。日本の外務大臣のお相手もしなきゃいけないんだから。それにしても、こんな雨の日に訪問とはついてない。この学校の美しさが伝わらないじゃないか。……………と言うか君は日本人だったね。外務大臣が誰だか分かるかい？ ナギさん」

レッドはニヤニヤしながら、隣のナギをつつく。

「はあく？ そんなの分かるわけじゃないじゃない。いったい何年ギリシアに居ると思ってるのよ。総理が誰だかすら危ういわよ。そもそも日本はすぐに内閣が変わるから」

「ま、もともとそういうのに疎いしね。君が大臣の案内役じゃなくてよかったよ」

レッドは鼻歌を歌いながら、フロントの角を曲がる。その時だった。フロントのガラス張りの談話室に、たった一人で佇むキクマサを見つめる。

激しい雨が、ガラスを網目の様に伝う。それをじっと見ていた。

「…………あれ、キクマサ君じゃない？ どうしたのかしら……………こんな時間にここに居るのって珍しいわね……………」

ナギはレッド越しに、ひょいと彼を覗く。キクマサは先輩二人に見られている事も気がつかず、ただずっと、うつろな瞳で大きなガラス窓の側に立っている。

「なんか……………様子がおかしくない？」

「……………う、うん……………」

二人はお互い頷きあって、いつせーのーせで、

「あれ、キクマサ君じゃない！！ どうしたのこんな所で！！」

「いけないなあ授業をサボるなんて おっと、俺が昨日の色彩学を

「サボった事は内緒だから!!」

いつものノリ以上のテンションで、キクマサに近づき、どうだと言う様に。

「……………」

「……………」

「……………」

キクマサは振り返り、彼らに気がつくとも小さく頭を下げた。

「……………こんにちは先輩」

「……………ん？ 反応が薄いぞ!! 具合でも悪いのかい？」

レッドは滑った事はさておき、キクマサがあまりに淡白な反応だったので焦る。ナギは前のめりになって、彼を覗き込む。

「本当。凄く辛そうよ。無理して起きてなくていいんだから、ちゃんと横になった方が……………」

「いえ……………別に体調が悪い訳ではないんです。すいません……………なんか気を使ってもらって。何でも無いですから……………大丈夫ですから……………」

キクマサは小さく笑った。きっと本当はいつもの様に、違和感無く笑おうと思っていたのだろうが、見ているこっちはからはとても寂しく、痛々しく感じる。

レッドとナギは言葉に詰まった。

「……………先輩達……………今からどこかへ行くんですか？」

「……………え？…あ、ああ……………。うん、今日ね、この学校に日本の外務大臣が訪問してるんだよ。……………公にされてないから知らなかったかもしれないけど。……………そろそろ帰る時間だろうから、団長に頼んで覗きにいこうかなーって……………」

「……………！？」

一瞬、ひやりと背筋が凍る思いだった。

瞳に驚きの色を隠せず、頭の中に色々な雑念が飛び込む。一瞬で、過去の古傷が疼き、震えそうになる。

あいつがここに居る。

キクマサはレッドとナギが何か言う前に、彼らの側を風のように抜けて、誰もいない廊下を走った。

「え！！ き、キクマサ君！！！！」

ナギが呼び止める声もまるで聞こえないで、今自分が何を考えているのかも分からないで、ただ走っていた。

心の奥の何かが、走る自分自身を止めようとしているのに、それでも足が止まらない。

ただ、必死だった。

ルナシーはキクマサが心配だった。今まであんなキクマサを見た事が無かったからだろうか。彼は昨日のような穏やかさは無く、何かに追いつめられた、理解しがたい恐れを抱いているようだった。

ルナシーはそっと授業を抜け出していた。絵画の授業はもともと甘く、先生すら居ない。期限までに提出出来れば良いのだ、という緩いスタンスだ。

寮へ向かって急いで歩いていたら、曲がり角で何かとすれ違う。勢いのある彼は、ルナシーに気がつきもせず、驚いて目を閉じた彼女を通りすぎた。

「……………え……………!？」

ルナシーは慌てて振り返った。あれはキクマサではないか。彼はあんなに必死になって、いったいどこへ行くこうと言っのか。

「き、キク……………!！」

彼女は慌てて追いかけた。なぜか彼を追いかける必要はないと思ったのだ。寮を抜け、雨の中中央棟へ向かって走る。水たまりを何個も蹴つて、それに写る灰色の空を踏んで、びしょ濡れになりながら二人は走った。

速いキクマサのペースにドンドン引き離されるルナシーだが、彼女は待つてと声をかける事もせず、彼を見失わない様に一生懸命追いかけた。

濡れた髪が顔に引っ付いて、とても煩わしく気持ち悪い。服がドンドン重たくなっていく。

「このような天候の中、わざわざ我が校まで足を運んでいただき、誠に光栄な事です。……日本のますますの御発展をお祈り申し上げます」

理事長はかしこまった様に、中央棟の玄関の前で頭を下げた。他の先生方も深々と頭を下げている。

日本の外務大臣は先ほど軽く訪問を終え、本題の方を理事長と話し、SPに囲まれながら、今しがた帰ると言った所だった。

「……オーデイール理事長。この学校はある意味で世界の要だ……。ますますのご発展を」

オノダ外務大臣は硬い表情で、よくある口上をのべ、彼と握手をした。白髪混じりだが清潔感のある、きりっとした出で立ち。五十代半ばの落ち着いた風格がある。

「……大臣……そろそろ……」

「ああ……」

オノダ大臣はエントランスの前にとめられたリムジンに乗り込もうと、雨を避けながら、一瞬車の向こうを垣間見た。

そう、それは偶然、視線が車の向こうに至ったのだ。

キクマサは走るのを止めた。

中央棟のエントランスの前に居る人物に気がついた時、足はそれ以上動かなくなった。

「……………」

何でだろう。

どうして自分はここへ来てしまったのだろう。

あいつの顔なんて見たくもないのに。

強い雨は一層強く、心の中の葛藤は一層複雑になった。

理事長と話しているあの男は、まさしく自分の父親だった。いつからか全く会っていない父親。俺がこの学校に居る事を、おそらく知っているのだろう父親。でも多分、そんな事に興味は無い、あの男。

ずっと走ってきたから息が荒い。

肺が痛い。息をする度に、雨を吸い込んでしまいそうだ。

「…………… 父さん……………」

彼は呟く。雨の中、自分にしか聞こえないくらいの声で。いつぶりに父の姿を見たのだろう。

会いたくなんか無い。会ってしまったら、忘れたかった全てをもう一度、思い出す事になるから。

ならなぜ、どうしてここへ来てしまった。

「……………」

それは、オノダ大臣が車に乗ろうとした時だった。キクマサは奴が車に乗るのを、どうしようもなく見ていたときだった。

たった、一瞬のコンタクト。

お互いの視線が、ほんの数秒、それでも数秒、確かに交差した。父は一瞬とても驚いた様に瞳を見開いた。それはキクマサも同じ。

似た面影を感じる瞳には、その時確かに、お互いの存在が写っていた。

「……………」

父さん。

キクマサは、その言葉で発するつもりだった。それでも、言葉が全然出て来ない。のどの奥で詰まって、何かが邪魔をしている。

オノダ大臣は確かにキクマサに気がついていたが、ふいに顔を背けると、大した事無さそうに車に乗り込んだ。

相変わらずの硬い表情で。さも、気がつかなかったと言う様に。

「……………」

車がドンドン遠ざかっていく。

キクマサは、先ほど視線の交わった、その一点をいまだに見つめながら、

やっと、夢から覚めた様に視線を落とした。

こんなものだ。俺たちの関係なんて。

そんな事、ずっと前から、何度も何度も思い知らされてきた事なのに。

いつから居たのだろう。ルナシーが少し離れた所で立っていた。キクマサより、五メートルくらい後ろで、じつと彼の背中を見ている。

雨が、現実へと打ち付ける、その容赦のない事。

「……………キク……………」

ルナシーはそっと、彼の背中に声をかけた。

キクマサは視線を落としたまま、彼女の声のする方を振り返った。

ルナシーは、その小さな体を、激しい雨の中に置いていた。

彼はふと笑う。視線の先には、灰色の泥水が。

どうしてだろう。何で会いに来てしまったんだろう。全てを忘れるつもりだったのに。

「……………どうしてだろう……………。日本に……………全てを置いてきたつもりだったのに」

過去も、トラウマも、罪も、全て。

家族さえも、思い出さえも忘れて、大切なものだけのために生きていけると信じていたのに。

キクマサは片手で、目を覆った。

悔しさとやるせなさ、この惨めな気持ちはどこから来るのだろう。

今更、家族に戻る訳も無いし、そんな事望んでなんかいないのに。

震える口元からは、食いしぼる歯だけが見えた。

ルナシーはただ瞳を見開いて、初めて見る彼のこんな姿に、胸の奥が痛むのを感じた。

何も、言葉が出ないのに。彼の痛々しい姿だけを目に焼き付ける。

雨の中佇む二人は、同じだけ雨に打たれている。

全てを日本に、置いてきたはずだった。

何もかも、忘れたつもりでいた。

I
d
r
a
w

74：レイニートブルー・ノスタルジア『五年前』

忘れる事なんて出来なかったんだ

心の奥深くに埋めた、トラウマの絵

あれは、キクマサが小学六年生の時だった。と言う事は、今から約五年前。

父の名をオノダ・キクジ。母の名をオノダ・サキコ（カツキ・サキコ）と言った。

その頃の父は、一国会議員で、母は日本ではそれなりに有名な画家であった。

父と母の馴れ初めは知らない。どこかのパーティーで知り合ったと言っくらいだ。

父がなかなか家に帰らなくなったのはいつからだろうか。元々忙しく、家を空ける事の多かった父だが、あからさまに家を避ける様になったのは。

しかし母はそんな事を気にせず、自らの制作に没頭し、キクマサを育てる日々だった。キクマサも小学六年生で、地域の野球チームに入っていたからそれなりに忙しく、家族のサイクルはそれぞれで、皆で居る事はほとんど無かったと言っても良い。

でも、それが当たり前だったから、何の不満も違和感も抱いていなかった。

家に帰れば母が居るし、父が居ないのは仕事のせいだと思っていた。キクマサは野球が好きだったが、同じくらい絵を描く事も好きだった。キクマサが生まれて、一番始めに習った事が絵だと言ってもおかしくない。母が画家であった事が大きいのだろうが、字を習う以前に、絵を描く事から学んできた。

「キクマサ。あなた中学はどうするの？今更勉強したくらいで、良い私立に行けるとは思わないけどね」

「普通に、こここの中学に行くよ。小学校でお受験したんだ。そのままエスカレーターで行くのが筋だよ」

「あら、生意気ねえ。まあ、私の子だから、頭の良さに期待はしてないわ。でも一応お父さんの子でもあるのよ。可哀想に、あまりあの人には似なかったのね」

母は、夕食の時間に、一人ワインを飲んでいた。元々母はお酒が好きだが、夜に一杯飲む程度だった。

キクマサは白いご飯となんかよく分からない野菜炒めを食べながら、

「別に良いよ。父さんみたいな政治家になる訳でもないし」

「じゃあ、あなたこれから、何をしたいの？」

「……………野球と絵」

キクマサは、ぼりぼり固いキャベツを噛み切って、きっぱりと答えた。勉強だって人並みには出来るし、野球だってレギュラーだし。絵はこれからも描きたいし。

「……………そろそろ、どっちを選ぶかしないと。どっちも楽な道じゃないわよ。母さんだって、画家になりたいって思って、それだけのために学校を選んで受験して。そして、その学校の中でも頑張ってる。目指して、いまここにいるんだもの。私の両親には反対されてたから、家出してやったわ」

「いつから画家になりたかったの？」

「……………いつからかしら。今のあなたくらいよ」

母は、ワインのグラスをくるくる回しながら、何だか昔に浸っているようだった。

キクマサはその時の母の顔を、今でも覚えている。

母はやはり、画家と言う事もあって、普通の母親とは違っていた。

茶髪は元々だが、首元で切りそろえられたボブカットに、眉上に円を描くような前髪。目鼻立ちにはっきりしていて、唇はいつも、濃いサーモンピンクのルージュがひかれていた。

奇抜であったが、美しかったんだと思う。背も高く、存在感があった。

彼女が描いていた絵は、今思えばやはり凄いものだった。艶やかな色使いに、透明感のある空間。彼女が個展を開けばそれなりに注目されるし、彼女が画集を出せばそれなりに売れる。当時はそれが当たり前だと思っていたが、今となっては、それがいかに難しい事だったか分かる。

実を言えば、はっきりと彼女の描いていたものを覚えていない。母が死んでから、“カツキ・サキコ”という画家の絵を見ない様になっている。避けている。

しかし、今でも覚えている絵が、一つだけある。

キクマサのトラウマとも言える、彼の過去を全て象徴するような絵。

母が変わってしまったのは、ある夏の日だった。
キクマサは夏休みで、野球仲間と共に遊んでいたような、そんな当たり前のある日。

キクマサが家に帰ってきた時、自宅からスーツを着た女性が出てきた。キクマサは、お客さんでも来たんだろうかと思っていたが、その女性とのすれ違い際に、激しく睨まれたその視線の意味を、その時は知らなかった。

「ただいま……」

キクマサは泥だらけになった靴を脱いで、玄関を上がる。

静かだった。いつもなら母が返事をしてくれるのに。

彼は手を洗って、何かつまみ食いでもしようと思ったリビングへ。

母は、頭を抱えてダイニングテーブルに座っていた。

「……………どうしたの？」

「……………」

キクマサは冷蔵庫からコーヒー牛乳のパックを取り出して、大きなグラスに注ぐ。母は相変わらず頭を抱えていたから、おかしいなと思っ手をとめた。

「ねえ、どうしたの？」

「……………」

「……………母さん？」

キクマサはいよいよ心配になった。母は無言で、何も答えてくれない。

目はうつろで、どこを見ているのかも分からない。

そのとき、母は急に立ち上がり、自らのアトリエに向かう。何を思っていたのか、母は大きな白いキャンバスを取り出し、ただぶつぶつ、何かを呟いていた。

それが、全ての始まり。

母と、キクマサと、父と……………平和だったはずの生活に訪れた、突然の終わり。

母は、何を考えていたんだろう。

何を思い、何に絶望していたんだろう。

キャンバスを見つめる母の顔は、狂気にも似た、激しい憎しみと絶

望を。

そして、それを一枚の絵画として描くという、そのインスピレーションを得られた事への興奮と愉悦を。

その時の顔を忘れられない。

母は知ってしまった。

今まで、父が家へ帰って来なかった理由を。一人の女性が突然現れ、父との関係を告げる。

その女性の名を、ミチコと言う。

父の秘書であり、母よりもずっと前から父を知っている。

というよりも、母と結婚する前から繋がっていたと言ったも良い。

何しろ、父にはキクマサより年上の隠し子が居たから。そのミチコとの間に生まれていた、本当の長男が。

母は、そんな事微塵も知らなかった。

まさか、自分と結婚する以前から、既に浮気が始まっていたなんて。しかも、子供まで居たなんて。

キクマサは小学生だからといって、その事の重大さに気がつかなか

った訳ではない。母が日に日にヒステリックになっていき、浮気を知られた父と喧嘩をする日々。

父は、別れてくれといつも母に頼んでいたが、母はそれを受け入れなかったから。

家に帰ってくるのも、“離婚してくれ”と言ったためだと、母は知っていた。キクマサは両親の喧嘩に絶えきれず、ヒステリックになりやつれていく母を見ていられなかった。

「あの人はねえ……私をずっと騙っていたのよ。私よりも愛している人が居ながら、どうして私と結婚したと思う？……あんな女より、私の方がずっと美しいのに……っ」

母は、一日中、絵を描くか酒を飲むかしていた。

大きなキャンバスは、日に日に色を増し、皮肉にも素晴らしい絵が仕上がっていたと思う。

たった一枚の絵を、母は描き続けていた。

父と母の喧嘩は、日に日に激しさを増す。

浮気相手のミチコは、時に訪れて早く別れると言ってきた。

賢い人だったのだ、そのミチコと言う女は。国会議員の秘書と言う事もあり、父と政治について語り合う事も出来る。いろいろな苦労、当選の喜びも、もしかしたら母よりずっと理解していたのだろう。

母は圧倒的に不利だった。

たった一人だったし、ミチコに言い返せるほど口が強くない。

それ以上に、どうして父がこの人を愛しているのか、話せば話すほど分かってしまう。

キクマサは可哀想でならなかった。母が、こんなに悲しそうにしているのが。

「父さん、行かないでよ！！ 母さんをこれ以上、苦しめないでよ！！！！」

一度、父に向かって言った事がある。母が泣いていて、父とミチコが帰ろうとしていた時だ。

父はキクマサを、久しぶりに見たと言う様に驚いていた。

「……………キクマサ……………」

「ねえ、どうして！！ 俺たちの事は、もうどうでもいいっていうの！？」

父は少し、困ったような顔をしていた。ミチコはわざとらしくため息をつき、面倒くさそうにキクマサを見ている。見ていると言うよりは、睨んでいる。

「……………キクマサ…………… 父さんと母さんが別れたら……………お前はどちらについていく？」

「……………そんなの……………母さんに決ってる……………」

「……………だろっな」

父は分かっていたと言う様に、小さく笑った。

そして、キクマサの言葉を聞かなかったかのように、自らの家を出て行った。

扉が閉まる音で理解した。ああ、この人はもう、俺たちの事なんてどうでも良いんだって。

母が父の浮気を知ってから、もう四ヶ月は経った。今はもう、木枯らしの止まない冬。それは同時に、母がある一枚の絵を描いてきた月日であった。

キクマサと母の会話量も、今では乏しいものだった。と言うより、母はアトリエにこもってばかりで、キクマサの顔を見ようともしない。それは、父に裏切られた悲しみを紛らわすためだろうか。それともただ、画家としての本能が、今のこの絵を完成させよと言っているのだろうか。

取り憑かれた様に、母はその、不思議と禍々しいのに、どこか美しい絵を描き続けた。

キクマサは、そんな母を見ていて、何とも言えない不安と胸騒ぎにかられていた。

自分は今、たった一人なのだ、寂しさも感じながら。

どうしてこんな事になってしまったのだろう。

いままで、何て事無く幸せな、父が居なくても幸せな日々を送っていたのに。

どうしてこんな事になってしまったのだろう。

その本当の意味を知る事になったのは、母が描いていた“その絵”が、完成に至った時だった。

I
d
r
a
w

75：レイニーブルー・ノスタルジア『母、最後の傑作』

母はきつと、その絵で知らしめたのだ

自分と言う存在を

「……………」

「……………起きないわね、二人とも」

フォルテとレイは、保健室で並んで寝ている、キクマサとルナシーを交互に見た。あの、雨の中を、二人はどんな思いで帰ってきたのだろう。そもそも、この二人に何があったのかを知らない。

キクマサが凄い熱を出して、倒れた。

それをルナシーが知らせにきて、その後彼女も寝込んだから。

「まったく、バカだよ！！ あんな雨の中何やってんだか！！」

「……………それだけ、キクが思い悩んでいたって事よ」

フォルテは複雑そうに、壁にもたれかかって腕を組んだ。キクマサの苦しみに、本当の意味で気がついていたのはルナシーだけなのかもしれない。

「……………まったく……………」

やるせないのは自分自身。

こんなことになるなんて思っていなかった。

レイも、丸い椅子に座って、静かに寝ている二人を見つめながら、今の自分に出来る事が何も無いのを、改めて思い知った。

キクマサは何も言ってくれなかった。

彼はそう言う人だ。今まで自分から、“自分”の事を話した事が無い。

何も知らなかったんだ。彼の事を知っていた様で、何にも。

キクマサは深い深い眠りについていた。
過去を行き来しながら、再び全てを実感するために。

忘れる事なんて出来ないんだと、思い知るために。

それは、クリスマスの日の事だった。

家に殺伐とした空気が流れ始め、キクマサ自身ももう、誰を頼る事も出来ず、不安を抱えながら生きる日々。そんな時にクリスマスなんて意識出来なかったけれど、それでも少しは期待しながら家へ帰ってきた。

いつもなら、クリスマスにごちそうを用意する母。決して料理は上手でなかったけれど、キクマサにとっては、“母”が一生懸命造ってくれた事が嬉しかったのだ。

そう、今までなら、家に帰れば母が居て、一緒にクリスマスを祝ってくれていたんだ。

「……………」

家へ帰った時から、何だか嫌な気がしていた。
扉を開けた時から漂ってくる静けさと寒気。不気味なまでの。

「……………母さん……………」

キクマサは母を捜した。カバンを玄関に置き去りにして、居間を覗くけどそこには居ない。そこに居ないと言う事はアトリエに居るのだろう。彼は階段を上り、母がいつも絵を描いているアトリエへ向かった。

階段を上る足取りの重い事。何でだろう、こんなに胸がざわめくのは。

キイイイイイ……………

彼はゆっくり扉を開いた。

開いた時には、もう全てが理解出来た。

もう、何もかもが終わったのだと、理解出来た。

“ホール”

共に行きましょう

このくらい穴の中へ

共に生きましょう

この暗い水底で

血が、その黒い点に吸い込まれながら私を誘う

そこは、私を突き落としたあいつらを引きずり込むための大ホール

／つづく

「……………はっ……………か、母……………さん……………」

目の前にまず、天井からぶら下げたヒモに、首を吊った母の姿が。その、母の下に敷かれた、彼女の大きな絵。まるで、暗い穴を描いたような、中心が漆黒に描かれた油絵。

母は、その穴の中に吸い込まれているようだった。

キクマサは、瞬きすら出来なかった。

自分は母の亡骸に、一種の芸術性を見いだしてしまったのだ。

空間、絵、母は全てを取り込んで、今ここに、一つの美術品が完成していた。母はそれを完成させるために、自らを死に追いやった。

そのイメージストーリーを、幼かったキクマサは直で聞き取ってしまった

母の怒り、憎しみ、恨みが全て、この美術品の中に含まれている。震えが止まらない。

文字通り、母は飲み込まれてしまったのだ。自ら描いた美術品に。

これほど、何かを恐ろしいと感じた事は無かった。

キクマサは美術品を、母を恐ろしいと、こんなにも恐ろしいと思っ
てしまったのだ。

悲しみ以上に、怖くて、血が凍り付きそつだ。

ぶらぶら、くるくる

ゆっくりと、母は回転していた。

暗い世界へ落ちるために。

それは、一種の大スキャンダル。世間を騒がせたニュースとなった。
父は母をしっかりと叩いた。これでもかと言ってくらい盛大に。きつと
父にはこれくらいしか思いつかなかったのだ。

死んでもなお、母が何かしてくるのではないかと。父もきつと、あの絵を見たとき痛感したのだろう。

母が怖くて仕方が無かったのだ。そういう意味では、母の思惑は上手くいったと言っても良い。

キクマサは、気持ちが悪く切れてしまいそうだった。

あの絵を、母の死体を見つけた時から、自分の中で何かが終わったんだと確信する。

母の死体は、沢山の菊の花で包まれている。

単に、葬式だからだろうか。母の好きな花だったからだろうか。それとも、自分の夫と息子の名だからだろうか。

葬式の日も、雨だった。

「オノダ議員、隠し子がいたそうよ……」

「奥さんはそれで自殺を……?」

「まだ若い、これからの画家だったと言つのに……惜しい人を亡くしたものだ……」

色々な所で、それぞれが噂を囁く。

父は母の自殺の性で、一時マスコミの餌食であった。正直、キクマサにはどうでもいい。このまま父が叩かれ、議員を辞めざるを得なくなつたとしても、それならそれで、ざまあみろだ。

でも、そんな事はほんとうはどろどろだったよかったです。

母は帰ってはこない。

この先父がどうなるのが、母は帰って来ないのだ。

母の葬式が、どのように進められ、父が何て言ったのか、そんなのが頭に入ってくる余裕なんて無かった。

ただ、母が死んだと言う事実が、自殺したと言う事実だけが、頭の中で巡っている。母はなぜ、自殺した？

誰のせい？

それは、葬式が一段落ついた時だった。

キクマサは相変わらず、椅子に座って呆然としていた、そんなとき。彼がある意味、目を覚ますきっかけとなったのは、父の方へ、あのミチコが挨拶に来た時だった。

「……………」

キクマサはドッと、心の中で言いよぶ無言の怒りが沸き起こるのが分かった。

それは胸を通って、口に達し、自分でも止めようも無く言葉となった。

「……………これで……………満足かよ……………」

彼はゆっくり立ち上がり、爪が手に食い込むくらい、拳を握りしめた。

「これで満足かよ!! お前ら二人して、まんまと母さんを殺したな!!!」 母さんを……っ!!!」

勢いは止めようも無かった。キクマサはミチコがどうしても許せなくて、憎くて、彼女につかみかかろうとしたのだ。

その時、ミチコの前に、まるで彼女を庇う様に現れた青年。彼はキクマサの腕を取り、彼を止めると、

「……………止める!!!……………これは母さんのせいなんかじゃない……………っ……………!!!」

はつきりとした口調で言いきった。キクマサを見おろし、彼を強い瞳で睨んでいる。

キクマサは瞬時に理解出来た。この青年が何者であるかを。

「……………」

キクマサより、五つは上であろう、その青年。それはまるで“父”であった。父の若い頃を知っている訳ではないが、あえて言っならそう。彼はとてもとても、父に似ていた。

ああ、そうか。こいつが父の隠し子。

ミチコと父の間に生まれた、キクマサよりもずっと前に生まれた子供。

その青年の名を、キヨシと言った。とても真面目そうで、父に似た優秀な青年。

自分なんかより、よっぽど父に似ていた。息子の俺が言っただから、本当にそうなんだと思う。

父は母が死んでから、とても忙しそうにしていたが、いくら世間が反対しようとも、ミチコと再婚するようだった。

何となくそうなのではないかと思っていたが、予想は的中。

父はキクマサに言い聞かせる様に、彼を説得しようとしていた。

「……………キクマサ……………頼む、認めてくれ……………!!」

「嫌だ!! どうして、どうして今更再婚なんか出来るんだよ!

! 母さんは父さんが浮気していたせいで自殺したんだぞ!!!!」

キクマサは父の要望を一向に受け入れられなかった。

どうしてだよ、何でだよ、と言う気持ちが大きくなりすぎて、これでは母があまりに可哀想だと思った。

「……………どうしてだよ……………何で再婚なんか出来るんだよ……………」

母さんがどれだけ悲しみ、どれだけ嘆きながらあの絵を描いたと思っ
っているんだ。

これでは、母さんが自殺した事が、とても都合が良かったと言っているようなものだ。

父は、頑に再婚を諦めようとはしなかった。

どうしてだか分からないが、まるでそれが、とても正しいみたいに。

「……………あんな女……………母さんを殺したあんな女と……………」

「……………ミチコが殺した訳じゃない……………サキコが自殺したんだ。あれは画家の性だ」

「違う、 違う違う!! 母さんは殺されたんだ!!! あの女に!!!」

キクマサがそう、 思いのたけを全部吐き捨てた時だった。

父はギリと歯を食いしばると、キクマサの頬を思いきりぶったのだ。父の瞳は悲しそうで、それでいて煩わしそうだった。

キクマサは何が起こったのか、一瞬理解出来なかった。

「いい加減にしろ、キクマサ!!!……………今まで……………今までミチコやキヨシが……………いったいどんな気持ちで居たか、お前に分かるのか……………っ!!! 父のいない、父を名乗れない……………あの惨めな気持ちを……………」

父は、いったい何が悔しかったんだろう。

初めて見た。この人が泣いている所なんて。

父がこんなにも、ミチコとキヨシの事を思っている。今まで自分のために、あらゆるものを我慢してきた愛人とその息子を、今度こそ幸せにしたいと。

ただ、キクマサにとってそんな事、どうでも良かった。
頬を抑え、憎い気持ちを我慢出来なかったのだ。どうしてお前がそんな事言えるんだと、父を睨んだ。

「……………じゃ何で、何で母さんと結婚したんだよ……………。何で……………何で俺を……………っ……………」

何で俺を生んだりしたんだ。

そんなに可愛い、自分にそっくりな息子がいながら。

キクマサは溢れる悔しさに耐えきれず、そのまま階段を駆け上り、自分の部屋に閉じこもった。

扉を閉め、崩れる様にベットに顔を埋め、その布団を握りしめる。

母さん……………

今俺があいつらを受け入れたら、母さんがあまりに可哀想だ。

キクマサは、この悔しさと悲しみを、どこにも、誰にも受け止めてもらえず、ただ布団にすがりついていた。

こんなのもって無い。こんな、理不尽な事、あつてはならない。

悲しくて、胸が痛かった。

自分は今、本当に一人だった。

母さんはもういない。

あいつらに全てを奪われた。

そう思わなければ、今のキクマサの心を繋ぐものは、何も無かった。

I
d
r
a
w

76：レイニーブルー・ノスタルジア『カザマと言つ男』

きつと、誰の中にも言い訳と言い分があった

誰かを責めなければ、やりきれなかったから

父は再婚した。

キクマサはもう、彼を止めるほどの力も存在も無いのだと、改めて痛感した。

自分が何を言っても、彼にとって自分が、ミチコやキヨシほど大切でないならば仕方が無いなど、力無く考えていた。

父はずっと前から、こうなる事を望んでいたのかもしれない。

母が死んで、一ヶ月経ったくらいだった。

ミチコやキヨシが、この家へやってきたのは。本当は新しく家を用意したかったらしいのだが、今、父が政治家として危うい立場にいるのを考慮し、ミチコがそう提案したのだ。

早すぎるだろ。

キクマサは、自分がまだ母の死を受け入れられていないと言つのに、こんな憎しみの対象でしかないこいつらを、どうやって受け入れられると言つのか。

早すぎる。父は、母が自殺した事を悲しんではいけないのか。

ミチコは、不安定な父を献身的に支えているようだった。

彼女自身、とても賢い人だから、このようなときどうすれば良いかよくわかっていたし、辛い立場に耐える根性もあった。キヨシは、キクマサにはとても届かないような名門高校に通っていて、このまま東大を目指し、父のような政治家になりたいようだった。

まるで、父の行った事が正しかったような、キクマサの周囲のサイクル。

今の自分が、間違っていると言いたげな、彼らの視線。

このような奴らと共にすごし、上手くいくはずも無かった。

ミチコは、キクマサをとて扱いつらいように、いつも彼を警戒していた。最初は上手くやっていこうと、彼に優しく接していたようだが、キクマサが彼女を激しく受け入れなかったから、彼女も諦めたようだ。

キヨシは始めから、キクマサを嫌っているようだった。それはお互い様だが、彼にはやはり、今までの、長い長いキクマサへの妬みがあったのだろう。

会話らしい会話はしなかったし、キクマサはより家へ帰りたくなかった。

家にいたって、彼らに煩わしい顔をされるだけだ。今まであの家にいたのは自分と母さんなのに、そんな事無かったかの様に、我が物顔で暮らしている。あの、母さんと過ごした空間で。

徐々に、母さんのいた面影は無くなっていった。

当然、向こうはそんなもの見なくなかっただろうし、母のアトリエは閉じられたまま。誰もあそこに近づこうとしない。キクマサだって、母に会いたいと思う一方で、母が自殺した場所へのトラウマは大きく、扉を開けようとするのを震えてしまう。

そして、最も大きく失ったものは、キクマサ自身の絵を描く気持ちだった。

居間にいたら、あいつらの顔を見なければいけない。だから、絵を描こうと思っていた。

でも、描けないのだ。

筆を取ってみても、キャンバスを目の前にしても、いざ描こうとしたら苦しくなる。吐き気がしてくる。その油絵の具の香りが、彼を酔わせてしまう。

母がどこかで、それを見ている気がする。

絵が怖いと、彼は心からそう思ってしまっていた。

母を失った事で、彼は絵すら失ってしまった。

「……………そんな……………」

母を失い、父を奪われ、自分の居場所すら無くして、そして今自分に残っているものを考える。
何も無いじゃないか。

「くっそ……………」

キクマサはイーゼルの前で、キャンバスに筆を投げつけた。しゃがみ込んだまま、拳で床を叩き、自分に絶望する。

この孤独を理解出来る者は居ない。
絵を描けなくなった恐ろしさを、この気持ちを理解出来るのは、きつと母だけだった。

家族は分離していた。

キクマサが居ない時の、父とミチコとキヨシは、とても楽しそうで、“良き家族”を絵に描いたようだった。キクマサはだんだん、本当の意味でアウェイになっていった。あんなもの見たくない。奴らが幸せそうにしている所なんて見たくない。

部屋にこもったまま、ミチコの用意した食事も食べないでいる。どうせ、俺が食卓の場に行ったら気まづくなって、嫌がられる。だからこれでいいだろ。こうであって欲しいだろ。

彼と三人の間には、そうやって深い溝が出来ていった。

そんな、ある日の事だった。

「……………何だって……………」

キクマサは、信じられない事実を告げられる。ミチコと父の間に、新たな命が芽生えたのだ。色々な事に諦めがついていたキクマサだが、これには激しいショックを受けた。

この期に及んで、まだ母を侮辱するのか。

キクマサはもう、我慢の限界に来ていた。

幸せそうな二人。お前らにそんな権利、あるはずも無いのに。

「……………何が嬉しいんだよ……………。父さん……………お前、母さんを何だと思ってるんだ。母さんを死に追いやったくせに……………殺したくせに……………」

「いい加減にしなさい！！……………あなた……………いつまでもいつまでも、自殺したような母親を、私たちのせいにして……………！！」

ミチコはいよいよキクマサに言い返した。

ほら。本音がでた。キクマサはもう、鼻で笑うしか無かった。

「嬉しいくせに……………母さんが死んでくれて、嬉しいくせに……………」

「……………キクマサ……………よせ……………！！」

父は頭を抱えた。ミチコの肩を抱いて、お腹の子供を気にかけてながら、まるで腫れ物を触る様にキクマサを見ている。

何だよ、その目は。

「……………俺が居なくなれば、完璧なんだ、そうだろ。……………父さんの理想の家庭が実現するじゃないか……………」

キクマサはもう、何がどうなるうと、どうでも良かった。むしろ、どうにでもなれと。

彼らの前で泣きたくない。

こんなに悔しくて、やるせなくて、悲しいのに、彼らの前で泣いたら負けたみたいだ。

泣くもんか。

キクマサは家を飛び出し、当ても無く走った。

今の父さんに、俺は必要ない。

新たな子供が居る。キヨシだっている。

だってそう言う事だろ。頼むからこの幸せを壊さないでくれ。彼らの瞳はそう語っていた。

空がもう暗い。とっくに夜だって言うのに、キクマサは走った。走りながら、この胸の痛みに耐えていた。目の前が潤んで、声も無く泣いている。

一人にならなければ泣けない。誰も俺を助けてはくれない。

帰る場所も無い。

空の星は、キクマサの涙よりずっと潤っている。
河原の土手の、気持ちのいい草の上で、キクマサは寝転がっていた。

今は何時だろう。

もうずいぶんここで泣いていた気がする。

「……………このまま、何もかも無くなってしまえば良いのに……………」

このまま俺が居なくなっても、誰も悲しまない。
誰かに殺されたって、誰も悲しまない。

さわさわ、冬の寒い風が、キクマサを包んでいる。

寒さに凍えた自分が惨めだ。胸に温かい物は何も無いまま、いつそ
このまま死んでしまいたい。

冬の空の下、沢山の星に見守られながら、たった一人で胸にあふれる、切ない悲しみを誰にも渡さないで。

俺が死んだって、あいつらは胸の内できっと「ああ、良かった」って思うに決っている。

母さんの時と同じ様に。

もう、それで良いよ。

そんな事を考えていたら、また涙が溢れてきた。

お腹も空いた。寒くて凍えそうだ。

その日、キクマサは一日、その川辺で眠った。

怖くなんか無かった。小学生が夜中ずっと川辺に居たなんて、本当は大事だろうけれど。

あの家に居る方がよっぽど怖い。
孤独を突きつけられるから。

朝方、川辺で寝ていたのを巡回していた警官に見つかる。

「……………君、こんな所で何をしているんだ……………」

ハツと目を覚ましたキクマサは、目の前の大柄なお巡りさんに、多少驚いた。怒られるかなと思ったけれど、そのお巡りさんは凍えた彼の体に自分のジャンパーをかけてやり、

「こんなに冷えきってしまった。家はどこだい？送っていくよ」

優しく声をかける。しかし、家を訪ねられ、とっさに首を振った。

「……………い、嫌だ……………帰りたくない……………」

「……………そんな事言っただって」

「嫌だ！……！」

キクマサはガタガタ震えていた。寒さの中で寝ていたからかもしれない。体が冷えきっていたからかもしれない。それでも彼の表情には鬼気迫る物があった。

警官はじつと彼を見て、

「……………そうか……………。とりあえず、この近くに交番があるからそこ」

へ行こうか。……何か温かい物でも食べよう」「

困った様に笑うと、キクマサの体を起こして、交番へと促した。
キクマサは不思議と、この警官の柔らかい空気に懐かしさを感じて
いた。

「私の名はカザマだ。君の名前は？」

「……………キクマサ。……………オノダ・キクマサ」

キクマサは交番の椅子の上で、温かさに身を預けながら、周りを観察していた。淡白で狭い交番だが、家よりずっと落ち着く。名乗ったその男は、自分の父よりは若く見えたが、体格の良い、爽やかな警官だった。

カザマはカップラーメンにお湯を注ぎ、フォークを持ってキクマサの前に置いた。

「こんなものしか無くて悪いね。……………これ、食べな。体が温かくなるよ」

「……………」

キクマサは昨日の夜から何も食べていなかった事に、今更ながら気がついた。

彼はカザマの顔を伺いながら、そろそろカップラーメンのふたを剥がし、一口食べた。

その、温かい香り、湯気、カザマさんの視線。全てがどうしようもなく懐かしかった。そして、自分がこんなにも空腹だったんだと、こんなにも侘しかったんだと思い知る。

目の奥が熱い。

胸がキリキリする。

「……………キクマサ君……………」

キクマサはゆっくり、泣きながらカップラーメンを食べていた。たまには涙を拭いながら、それでも彼は食べていた。こんな風に、何かの温かさに触れたのはいつぶりだろうか。

カザマはただ、その姿に深くショックを受けていた。

事情も、何も知らなかったけれど、彼の胸の痛みが十分に伝わってきたから。

これが、警官カザマとの出会い。

これから、キクマサにとって深い縁のある人物となっていく。

崩れそうだったキクマサの心を、当たり前のような優しさでつなぎ止めてくれた。

この人の息子はどんなに幸せだろう。

キクマサはゆっくり目を覚ました。
長い夢を見ていた気がする。目の前には白い天井しか見えない。

ザアアアアア……………

雨の音がする。
頭が痛い。体が熱い。

自分の状況を理解するためにベットの中から周りを見回した。
すると、隣のベットにルナシーが寝ている。頬を少し赤くさせて、
何だか苦しそうだ。

「……………」

そうか。

俺は父さんに会って、熱を出してぶっ倒れたんだ。なんて情けない。
ここは、ただの保健室じゃないか。

「……………ごめん……………ルナシー……………」

俺を追いかけてくれたんだね。

あの時、雨の中、じっと俺を見守っていてくれた。そのせいで彼女
まで熱を出して……………。

ごめん。

自分がこんなに情けないと思った事は無い。

過去の、あの胸をえぐるような気持ちを、再び思い出してまで、父さんに会おうと思ったのは、俺自身の弱さだ。

きつといまだに、何かを期待していたんだ。あの人に。

「……………ごめん……………ルナ……………。ごめん……………」

夢を見た。

どうしようもない、真実の夢を。

もういい加減、俺を解放してくれ。

俺にはもう、仲間が居るんだ。やるべき事があるんだ。

今の俺に、お前達は必要ない。

それなのに。

思い出とは無情だ。

夢は、容赦なく突きつける。あのととき味わった、深い闇を。

I d r a w

77：レイニーブルー・ノスタルジア『清』

本妻の息子

愛人の息子

どちらに分があり、どちらに非があるのだろうか

どちらも平等なのだろうか

キクマサは再び眠りについた。

頭が朦朧として、体が熱い。

カザマに家まで送ってもらったキクマサであったが、本当は家に帰りたくなかなかつた。

家に帰った所で、何も変わらない。今まで以上に、自信の居場所が無くなる予感しかしない。

カザマは家の玄関の前で、小学生らしからぬ深い不安そうな表情のキクマサに、そつと話しかけた。

「……………何か、困った事があつたらいつでも会いにおいで。おじさん、あの交番にいつも居るからさ」

彼の声が心に沁みる。カザマさんは良い人だ。胸が痛くなるくらい。

家に帰ると、そこに居たのは継母のミチコ、そしてキヨシだけだった。父は仕事で既に居ない。キクマサが出て行った事など、もはやどうでもいい事だったのだろう。

「……………どこへ行ってたのよ。……………あなた……………」

「……………」

「……………もしあなたに何かあったら、全て私たちのせいになるのよ……………。どうしてそう、キクジさんの足を引っ張るような事ばかりするのよ……………」

「……………」

ミチコの言葉は苛立ちに震えていたが、キクマサは何も答えなかった。

ああ、これが現実の世界なんだと、冷たい心で受け流す。

キヨシはミチコの少し後ろから、じつとキクマサを睨んでいた。視線が刺さりそうなほどに、彼の感情は、父ともミチコとも違う。

ミチコは震える拳をぎゅっと握りしめ、今にも泣きそうな勢いでキクマサの前から離れた。彼の前に居ると、どうしても罵声を浴びせてしまうと思ったのだろうか。彼女は冷静さを見失わない様に、頭を抱えたまま居間から出て行った。

キクマサは鼻で笑うと、そのまま階段を上り、自分の部屋に向かう。昨日からずっと外に居たせいで、予想以上に疲れている。そんな気がする。

彼が、部屋に入ろうとした時だった。

「……………おい……………」

低い、自分呼び止める声を聞いた。それがキヨシのものだとすぐに分かったが、キクマサは無視して部屋に入ろうとした。

「おい！……お前！！」

キヨシは今度は声を荒げ、キクマサの襟元に掴み掛かった。

「お前……ふざけんなよ。昨日、お前が出て行った後、父さんがどれだけ心配したと思ってる……っ！！」

「……………」

「お前があんな勝手な事ばかりして、それどころじゃないんだぞ、父さんは……」

「……………父さんが俺の心配なんかするもんか……。それに、今あいつが大変なのだって身から出た錆じゃないか」

キクマサは、面倒くさそうにキヨシに答えた。
どうして俺が、今のあいつの状況を心配してやらなければならないんだ。筋違いにもほどがあるだろ。

「自分の父親を、あいつ呼ばわりするな」

キヨシはギリと歯を食いしばり、キクマサに対して怒りを露にしていた。全く変な感覚だ。自分に取っては他人同然のこんな奴と、自らの父だけは一緒なのだから。

「今更……母さんを殺したようなあんな奴を、素直に父さんと呼べる奴が居たらおかしい……。っ。お前に……お前に分かるもんか！！」

母を失った悲しみを。

居場所を奪われた空しさを。この侘しさを。

そのとき、キヨシはいつたい、何が気に入らなかったのか、キクマサを思いきりぶった。キクマサよりも、五つも上なキヨシは、彼より頭一つ分背が高いのに、目に一杯涙を溜めて。

キクマサは一瞬、何が起こったのか理解出来なかった。

驚きの瞳で、彼を見上げる。

キヨシはキクマサをぶった手を強く握って、

「……いつまでも、自分一人が不幸だと思うなよ……。今まで、何の努力をしなくても、お前は父さんの息子だった。……今だってそうだ!! 父さんに認められる努力もしなくせに、だだをこねやがって!!……母さんも俺も、今の今まで、お前達の陰に隠れて、我慢して生きてきたんだ。父さんに認められなくて、必死に勉強して、お前に負けない様に……。それなのに……」

「そんなの!! そんなの父さんが悪いんじゃないか!! あいつが全て悪いんじゃないか!!」

「違う!!」

キヨシは大きく首を振った。何か、心の奥にしまいこんだ物を、吐き出したいかの様に。

「父さんが悪いんじゃない!! 最初に、母さんから父さんを奪っ

たのは、お前の母親なんだ！！！！ お前の母親なんだよ！！！！」

キヨシは先ほどキクマサをぶった手で、今度は壁を殴った。
なんなんだ。こいつはいつたい、何をそんなに悔しがっている。

「嘘だ！！！」

「嘘じゃない！！ 俺は……この時をずっと待っていた。こうやって、母さんがもう、惨めな思いをせずに、父さんの隣で歩める日を、ずっと待っていた。……やっと、やっと夢が叶ったんだ！！！！」

キクマサはキヨシの勢いに押されて、のどの奥の言葉がまるで出て来なかった。

どうしてこいつが泣いているんだ。泣きたいのはこつちだと、言いたかったのにそう出来ない。それは何でだ。

キヨシは「くそっ……」と呟いて、キクマサから顔をそらし、腕で涙を拭った。

「……………父さんの息子にふさわしいのは俺の方だ。父さんが必要としているのは俺の方だ。俺の方がずっと、ずっと父さんを慕っている！！ 父さんを愛しているっ！！！！……………お前は一生そうやって、一人でいじけてる。父さんの迷惑になるような事をするくらいなら、この家を出て行けばいい。無理してここにすることなんか無い、そうだろ……………」

キヨシの瞳は、もう当然の様に「出て行け」と言っていた。
キクマサは腹の底から沸き起こる怒りに震え、

「……………この家は母さんと俺の家だぞ！！！」

「いい加減にしろ！！ お前の母親はもう居ないんだ！！！ 居ないんだよ！！！！！！」

その言葉が、全てを物語っていた様に。

ここにいたって、母親が帰ってくる訳でもなく、父親に愛される訳ではない。

そっだ。

ここにいたって、別に誰も相手にしない。必要とされている訳ではない。

むしろ疎まれ、煙たがられている。

キヨシは一度舌打ちすると、乱暴に階段を下りていった。

キクマサは一時呆然と立ち惚けていたが、頭をだらりと下げたまま自分の部屋の扉を開けた。

キヨシの言っていた事は、きっと正しい。

今の父に必要なのは、キヨシのほうだ。

キヨシの方が、ずっとずっと父さんを理解してあげられる。父さんの支えとなってくれる。

そっという息子を望むのは当たり前だ。

「……………つく……………」

キクマサは扉を背につけ、顔に拳を当てたまま、声を殺して泣いた。自分だって、こんな風に父さんを憎みたかった訳じゃない。父さんを愛していなかった訳じゃないのに。

だって、どうしたら良かったんだ。
母さんを忘れてまで、父さんを許す事なんて、俺には出来ない。

それから数日後の事。

二月の下旬。卒業の近いこの季節の事。

予感は、きつと心の奥にあった。

「……………このまま、お前を苦しめるだけの家族ならいっそ、共に居ない方が良いのではないだろうか。」

父はそう言って切り出した。キクマサは、その言葉から全てを悟っていた。

もうすぐ俺は中学生になる。条件は、まるでそうある事が正しいかの様に揃っている。

「……………中学校に進学する際、私はお前が望むなら、その近くのアパ

「トに部屋を借りよう。勿論、お前がここに居たいと言つのなら、当然ここに居ていい。しかし、ここに居るのが辛いと言つのなら、私はお前が一人でもやっていけるような環境を揃えようと思つ……。」

父の語り方は、とても慈悲深い物の様に聞こえる。まるで、自分がキクマサの事を、一生懸命考えたんだと言いたげだ。しかし、そうじゃないだろ。俺がここに居たら、迷惑なだけ、そう言う事だ。

キクマサはもう、大声で言い返すほどの気力は無かった。

ああ、やつぱりね。そりゃあそうだ。半分納得出来る、それでいてこの虚無感。

とうとうお前達は、ここから俺を追い出す訳だ。母さんを、追いつめた時の様に。

「……………分かってる。……………出て行くよ」

「……………キクマサ……………」

キクマサは、父を決して見なかった。

もう、父に期待なんてしない。自分はこれから、一人で生きていく。

父の用意した、四角い箱の中で。

「……………一つだけ、頼みたい事があるんだ。……………中学校を、変えたい。……………もう、この街に居たくない」

「……………そうか」

今まで過ごしてきた町並みを、母さんと共に生きた町並みをもう見ていたくない。

もう、あのお金持ち私立に行く必要も、見栄も、もう張らなくて良い。誰も、自分が父の息子だと分らない所へ、母の面影の無い所へ行きたい。

父はそれを受け入れた。ここから、隣の市にある、ごく普通の中学校へ。

父の借りたマンションの一部屋で、キクマサは何も残されていない自分と生きていく。

この時は流石に涙も出なかった。

空しいぽっかり空いた心だけ。してやられたなと言う、寂しい笑いだけ。

もう、どうにでもなればいい。

その気持ち、心の奥でくすぶっていた気持ちが、このとききつと吹き出した。

自分の中の葛藤すら、もうどうでもいいと思ってしまったから。

だからきつと、落ちていったんだ。
母さんが落ちた、あの暗い穴の中に。

I
d
r
a
w

78：レイニーブルー・ノスタルジア『雨上がり』

長い夢が覚めたら

まず、君に謝ろう

キクマサはゆっくりと、半分目を開いた後一度瞬きをして、息を吸う。

静かな保健室の中。ああ、やっと……やっと目を覚ます事が出来たのか。あの、抜けられないかと思うような記憶の中から。

丁度いい所で目を覚ました。これ以上記憶を遡るとたまらない。ここからは、自分の弱さが露呈した時代だから。

悪い事を理解した上でしていた。何度も何度も、何だって。

カトレアさんに出会うまで。

キクマサはゆっくり右側のベットを見た。さっきまでルナシーが寝ていたのに、今はもう居ない。綺麗にベットが整えられ、窓の光に照らされている。

「……………謝らないといけないって……………思ってたのにな……………」

彼女は自分を、あの雨の中追いかけてくれた。たった一人の孤独の象徴は、彼女が追いかけてくれた事で成立しない。それだけが、どれほどに意味があった事なのだろう。

それなのに、俺は父さんの事ばかりで、彼女にありがとうも言わなかった。

温かいベットの中。いや、自分の体が温かいのだろうか。起き上がるうと思っただけれど、上手く体が動かないのもう少しこのままにしておこうと思った。

長い夢だった。

今の頭では、すぐに処理出来ないような感情を、沢山沢山思い出して、まるでパンクしてしまいそうだ。

ただ、何となくだけど、今なら、悲しみや憎しみの向こうに、少しだけ後悔があったのを知る。どうしてあんなに頑だったのだろうか。幼かったからだろうか。

それとも、時間が経ってしまったから、そう思えるのだろうか。

「なーんーで。ヴィライアーには問題抱え込んだ奴ばっかりが集まるのかね」

「人生山あり谷ありの方が、頭おかしい創造ができるんだよ。それすなわち美術」

団長は机の上に足を乗せて、キクマサの父、オノダ・キクジの記事を見ていた。キクマサに似ているかと言われたら、そんなに似ていない。

ティアンは、口を歪めて記事を読んでいる団長を尻目に見る。

「ま、ヴィライアーの中に財閥の御曹司はいても、日本の大臣はいないからねえ。貴重な人材だよ彼は。しかも、彼の母親はカツキ・サキコだ。有名な自殺をした画家だよ。僕らはあんな風にならない様にしないとねえ」

「縁起でもない事言うなよな」

団長は新聞を机に放り投げると、大きくため息をつき、頭をかきむしった。

「キクマサの奴、父親に会っただけで高熱出したって話しだぜ。どんだけトラウマなんだよ。これであいつ、日本研修行けるのかよ！」

「……日本がトラウマな訳じゃないでしょ。今更研修プラン変えるなんてごめんだよ」

ティアンは眼鏡を光らせて、パソコンで研修のしおりを作っていた。あと、一週間弱で新たな研修が始まる。エジプトプラン以上に計画を立ててきた研修だ。

今変更なんて出来る訳が無い。

「別に変更する気はねえよ」

団長は机の隅に追いやられたティーカップを口に運んだが、悲しい事に一滴も残っていない。

仕様がなから自分で湯沸かし器に向かって、ティーパックを開ける。

いつもならメルベリーが気を利かせて、茶葉から入れてくれるのに、今日は彼女がいない。

色々な空しさが、お茶の表面の色に見える気がする。

「子供は親を選べない。それは、俺が一番分かっている事だ……」

「何それ。君、マフィアの……ボスの息子が不服な訳？とても良い御身分だと思うけれど……」

「ほんの一例だ。俺は別に、親父が嫌いな訳じゃないし、そんなに仲が悪い訳じゃない。……奇跡的にな」

彼は最後に、自分でも顔をしかめつつ頷く。

ティアンは特に興味も無さそうに「……あ、そーですか……」とか言っている。

何だか、いまだに信じられないのだ。

最も平凡な人生を送っていきそうだと思っていたキクマサが、よりによってこんなにシリアスだったとは。

もうすぐ、彼の生まれた日本に、彼は再び降り立つ事になる。
彼の育った、あの国に。

時計の針の音の、何と大きい事だろう。
静かな空間だと、こつも聞こえてくるものなのだろうか。

ダメだな。

この4年間、出来るだけ考えないようにしてきたのに。

中学が上がって、父さん達ともうほとんど会わない様になって、カトリアさんの元で描く力を取り戻し、そして探していった。自分の絵と言う物を。

今、父やミチコ、キヨシがどうなっているのかは知らない。きっと新しい子供も生まれて、俺の存在すら知らないでいるだろう。別に、それはどうでもいいし、彼らが上手くいっていようと、いってなかるうと、俺はもう別の人生を歩み始めたのだから。彼らにそれを、知ってもらおうとか、理解してもらおうとは思わないし、向こうだって俺の事を忘れたいだろう。

それを、嫌だとか、悲しいとは思わない。

ならばなぜ、俺は父さんに会いにいってしまったのだろう。

「……………起きた？ キク……………」

「……………ルナ……………」

そのとき、音も無くルナシーが、保健室の扉近くに立っていた。もしかしたらずつとそこに居たのかも知れない。

キクマサは起き上がろうとしたが、ルナはそれを止めた。

「……気分はどう？……まだ、寝ていて」

彼女は小さく微笑むと、キクマサのベットに近づき、横の椅子に座る。

キクマサは何か、不思議なものを見るような表情で、彼女を見つめた。

「……どうしたの？」

「いや……さっきまで君、寝てなかったかい？ 隣で……」

「……ええ。でも、私はすぐに良くなったのよ。………というか、今日が何日か分かってる？ あなた、丸一日寝ていたのよ」

キクマサは「ええっ」と、声に出すほどではなかったが、慌てて時計に目を向ける。時計を見ても何ら意味は無かったのに。時間は夕方。それは、昨日の夕方ではなく、一日を挟んだ夕方だった。

「私は今朝には良くなってたわ。あなたはずっと……ずっと寝ていたの。……みんな心配しているわ」

「……そうなんだ……」

力が抜けていく。なんて情けない、みつともない男なんだ俺は。せつかく熱が下がったって言うのに、恥ずかしさでまた熱が上がる。

「……あー………ダメだな俺……」

彼は手のひらで顔を覆って、恥ずかしさに堪えていた。

「どうしたのよあなたらしくもない」

ルナシーは少し吹き出して、顔を背けてくすくす笑っている。

いつその事、もっと多いに笑い飛ばしてくれ。キクマサの切実な思
いだった。

「……………ルナシー……………君には本当に…悪かったと思っている。だっ
て、俺のせいで風邪までひかせちゃって」

「どうして？ 私がそうしたくてあなたを追いかけたんだもの。あ
なたが謝る事なんて……………」

「違うんだ……………」

キクマサは急に、彼女の言葉を遮った。

「違うんだ。……………本当は、追いかけてくれて嬉しかった。あのとき、
俺は本当にいっぱいいっぱいだったんだと思う。……………父さんを見て、
何て言うか……………胸の奥に隠していた物が、色々溢れてきて……………どう
しようもなかったんだ……………」

彼は布団の中で、その拳を握りしめた。

父と目が合った瞬間に、鍵までしめていたはずの扉が、いきなり開
かれた。そんな気がした。

あのとき、たった一人で雨の中に、果たして立っていられたのだろ
うか。

ルナシーはじっと、黙ったままだ。

「……………俺はあのとき、きつと孤独を思い出していたんだと思う。そんな時に、君がいてくれたから必然的に、孤独ではなかった」

「……………それでもあなたは寝込んでしまったわ」

ルナシーは口を開いた。

「俺が……………弱いからだよ。……………ごめん……………」

「どうして謝るの?」

「……………ごめん。……………謝りたかったんだ。ただ、君に会ったら、謝ろうって思ってた。……………君がいてくれたのに、どうして俺は、あんな風になっちゃったんだろ?……………」

君が側にいてくれた事を、そのときもつと意識出来なかったんだろう。感謝出来なかったんだろう。

どれだけありがたくて、昔の俺から考えたら奇跡みたいな、そんな瞬間だったのに。

ルナシーは何か、とても複雑そうにしていたが、顔をそらし気味で、

「……………キクは……………お父さんと仲が悪いの?」

ずっと、昨日からずっと聞きたかった事。

キクマサは困った様に笑う。

「……………仲が悪いっていうか……………多分もう、親子として成り立っていないんだと思うよ。……………ずいぶん前に、全然会わなくなっただしね」

「……………」

ルナシーはその時の一瞬の、キクマサの表情を見逃さなかった。さりげなく言っているつもりなのだろうが、瞳の向こうに見える濁った暗い色。

白い天井をただ一点に見つめ、彼はゆっくり話していた。

全てを話した訳じゃなかったが、何だかルナシーには、事情を話しておく必要がある気がした。

「……………色々あって……………短い間に色々ありすぎて、頑になりすぎちゃったんだ……………。もしかしたら、誰が悪くて、誰が可哀想だったなんて、そんなもの無かったのかもしれない……………。今なら、そう思えたりするんだ……………。父さんを全部許した訳じゃないし、あのとき黙って現状を受け入れるべきだったとは思わないけれど……………でも、俺にも言い分があったみたいに、キヨシやミチコさんにも……………色々あったんだろうね」

キクマサはそう口にしながら、自分がそんな事を言える、その事に驚いていた。

時間が経ったから、だろうか。あの時の感情を忘れているのだろうか。

そう言う訳ではない。だって、さっきあんなに思い知った。夢とはいえ、俺は昔の自分と父に、母に会った。

それでも、深呼吸を置いてイメージしてみる。あの時の皆の立場と、その感情を。

「……………俺もやっぱり、若かったんだなって思うんだ……………今、こ

んな風に落ち着いて、あの時の事を考えれるなんて……当時の俺では考えられない」

「……………それってきつと……………視野が広がったのよ。絵を描く様になって、色々な方向から物事を考えられる様になったのよ……………。だって、絵ってそう言うものじゃない。対象を色んな角度を見て、表現しようとするじゃない。……………それにしても、あなたは寛容すぎると思うけれど。今でも十分怒っていてもいいわよ」

ルナシーは肩をすくめた。彼女は今のキクマサしか知らない。彼の話を聞いていて、とても信じられないけれど。

でも、納得した所もある。

彼はエジプト研修の時、父親と言う物に若干反応していたときがある。まさかこのような事情があったなんて思わなかったけれ。

夕方の、日の傾き始めている窓辺。キクマサはやっと気がついた。

雨が降っていない事に。

「あれ……………あんなに雨が降っていたのに……………」

「……………そうよ。……………昨日の夜のうちに、いつの間にか止んじゃっていたわ。私も、あなたも気がつかないうちに」

気がつかないうちに。

キクマサは、何か新しい空気みたいな、清々しい気持ちだった。
ベットから起き上がって、夢中で窓辺に向かう。

何て事無い、いつもの夕焼け。

閑静な時間。

知らなかった。

本当はもう、きつと自分の中で、何かが終わり、何かが始まっていた。

氷がゆっくり、溶けていくみたいに。

悪夢は結局、きつかけだった。

雨は既に止んでいるよと。それに気づかせるための。

目覚めさせるための。

解放されるための。

I
d
r
a
w

79：次の舞台へ

全てに、納得のいく答えが出た訳じゃない

それでも、希望を見い出そうとしている
そんな自分が居る

行かなければ

次の舞台へ

キクマサが完全に風邪を治してしまつて、約一週間が経つた。何一つ変わらない日常に、キクマサは戸惑いすら覚える。しかし、この場所に当たり前みたいに居れる事、側に仲間が居てくれる事、その日常に感謝をしたい。

父と再会してから、過去を思い出してから、より一層そう思う。

絵画科ルネ・ヴィライアーの会議が開かれたのは、よく晴れた六月下旬。もう夏みたいに暑い日が、ちらほら目立ち始めた季節。

前回のエジプト研修から一ヶ月くらい経つただろうか。いまだに生々しく、あの時の研修を思い出す事が出来るのに。

「次の研修が決つた。まあ、噂で聞いた奴も居ると思うが、今回は四・五年生が中国研修。一・二・三年生が日本研修だ。……何で二手に分けるかつて? ……毎年恒例だからだ。特に意味はない」

団長はぶつきらぼうに、でもいつものノリで説明をしている。会議室の大きなモニターには、中国と日本あたりの地図が拡大され、団長は説明を加える。

「研修のシオリを見てくれ。今回の研修は、そんなにスパンは長くない。中国研修は主に上海と北京。日本研修は主に京都と東京だ。……あー……前回みたいな研修とは違って、かなり真面目な研修になると思う。……断定は出来ないが、“真面目でまともな”研修に」

団長はチラチラエリーゼ先生と、リース先生を見ているが、二人はあからさまに知らん顔。

ヴィライアーは皆、お互い目を見合わせてくすつと笑ったりしている。

キクマサは“日本研修”と言う今回の研修地に、ついてないなと思っていた。どうせなら他の国に行きたかった。しかも、この時期に何で、よりにもよって日本なんだ。

何で東京なんだ。

ついてないなと思っていたが、顔をしかめる程度で、本気でめっちゃくちゃ嫌だと言う訳ではなかったが。

メンバーは、シオリをばらばらめくったり、研修地に上げられている有名なスポットの写真を見たりして心躍らされているようだった。

「まあ、今回の研修のコンセプトは、その土地の古い文化と、現代の文化の違いみたいな物を感じてもらいたい。美術においてもそう。それぞれ目的を持って挑む様に。特に低学年だけの日本研修は、俺にとっては気がかりでしかないんだが、まあカイにリーダーを任せようと思う。……肝心の本人がここに居ない訳だが……」

カイの席は今回もいつもながらに空席だった。

あの人は本当に忙しい人だ。学校で見るより、テレビで見ることの方が多い気がする。

その後からは、淡々と研修の説明が。何だか、前回のエジプトより Spanien が短いとはいえ、かなり充実した、考え込まれた研修のようだ。

「俺、日本って一回しか行った事無いんだよね」

「一回でも行った事あるんだ。初耳だけど」

「そりゃあ俺、沢山の国に行ってるからなあ」

キクマサとフォルテは、部屋で研修のシオリを読みながら、次の研修地に思いを馳せていた。キクマサとしては、高学年の中国研修が羨ましいと思うけれど、他の人たちは日本も中国も、同じように“外国”何だろうなと思う。

研修は一週間後に控えている。

日常なんてあつという間にすぎていくものだ。次から次へと、違う世界の扉を開いていく。

それがヴィライアーとしての義務。

「それにしても、中国と日本かあ……。どんな研修になるのか全く持つて見当がつかないね。中国は団長の母国。日本はお前やナギ先輩の母国。ヴィライアーの中に、一応三人も居るのにな」

「……そう言えば……そっか。……あんまり意識してなかったや。ここに居ると、皆がどの国の人かなんて分からなくなっちゃうな」

キクマサはそつと、机の上に飾ってある、ヴィライアーの集合写真を見た。この前のエジプトで、あのギザのピラミッドの前で撮った写真を、リース先生が焼き増ししてくれたのだ。

ここに居る18人のヴィライアー。

それぞれが、それぞれの物語を持っている。それは、自身の美術感や、表現方法にも影響して、きつとこれから繋がっていく。

俺が、俺自身が抱え込んだ過去だって。

それは、一種の予感。

この学校に来て、何だかずいぶん時間がたった気がするけれど、俺はまだ二年生なんだ。

これから、長い長い、芸術と向き合う五年間は続いていく。

世界を知る機会を与えられる。

表現を追い求めるための、きっかけとなる一瞬を、見逃す事なんてできない。

誰も、誰にも分からないこの先の未来。
次のステージ。

希望はあった。

まだ、皆がずっと一緒に居られるんだって。
絵を描いていく事を、当たり前な事なんだって思っていた。

誰がどんな過去を背負い、いまだにそれを抱え込んでしようと、この学校に居る事は変わらないと。

エジプトで撮った、皆の集合写真。

太陽の下で笑い合えた。

きっと、それが当たり前なのだと思っていた。

d
r
a
w

*番外編くピーフシチューとアップルパイく

今日のこの日を

精一杯感謝いたします。

春は、キクマサにとって特別な意味を持つ。

長い凍結から、生命が再び命を取り戻すように、彼もまた、年の数だけ生きてきた今までを振り返る季節でもあった。

一年前にこのルネ・ヴィルトンに入学して、めまぐるしい日々を送ってきたが決して辛くはなかった。沢山の新しい事に触れ、自分の表現というものを考えて、悩んで。

誰もいない444号室。長い春休暇で、みんな実家へ帰ってしまった。

キクマサは一人、静かな実技室で、キャンバスと向き合う。油の匂

いと、春の日だまりのせいで、静けさは緊張感を伴う。

そんな時間の流れが、キクマサはたまらなく好きだった。

少し、カトレアさんのアトリエを思い出すから。

東京の一角に、不思議な庭と洋館があった。

カトレア・オーデールという女性は、きっとキクマサが一生一番尊敬する画家であるだろう。

彼女の家に、キクマサは居着いていた。

彼女に出会って、最初に訪れた春の事を、キクマサは忘れられない。

「うわ……。何なの、今日。ごちそうすぎないか？」

キクマサはカトレアが、今日は全く絵を描いていなかったの、何を思っているのか不思議に思っていた。

何を思ったのか、彼女は珍しくキッチンに居たのだ。しかも、これでもかと言っくらい沢山の料理を作って。

「相変わらず、自分の事に鈍感だねえ、お前は。今日はお前の誕生日だろう?」

カトレアは長い白髪を結って、洋風の鍋に調味料を加えていた。キクマサは一瞬固まって、日にちを数える。

「……………マジだ」

「相変わらずバカな子だね。…ほら、ツナギなんか脱いで、ここへおすわり。今日は絵を描くのはやめだ。そういう日があったっていいだろう……………」

北欧デザインの食卓机には、今朝焼いたパンと、鳥のハーブ焼き。揚げたベーコンと菜の花の入ったサラダ。トマトのつぼ焼きと先ほど作ったばかりのビーフシチュー。

「……………」

「……………あなたの母親が、誕生日にどんな料理を作ってたか知らないけど、私の料理も捨てたもんじゃないさ。……………今日はとっておきの紅茶を開けよう。本当はワインが一番だけど、あなたにはまだ早い」

カトレアはニヤリと笑うと、エプロンを外した。

キクマサは、輝かしいごちそうをじっと見つめ、唾をのむ。絵を描いていたら、思いのほかにお腹がすくと言つのもあるけれど、やはり年頃の男の子は食欲には勝てない。しかし、そんな事ではない。

「……………き、着替えてくる」

彼は急いでツナギを着替えて、手を洗う。なかなか取れない油の汚

れがもどかしい。

じわじわと、胸の奥が熱くなる。

蛇口の水の冷たさとは裏腹に、目頭が熱くなる。

「……………取れないなあ……………」

キクマサは、涙がこぼれそうなのを、誰も見ていないのに隠そうと
した。

口元が震える。

去年の誕生日を、あまり覚えていない。

その頃は父親が再婚して、新しい奥さんが妊娠して、どんどん溝が
深くなっていった頃。

自分の家に、居場所が無くなっていった頃。

継母は俺を疎んでいたし、俺もあの人が心底嫌いだった。

父親は出来るだけ、俺と関わらないようにしていた。

自分の誕生日に気がついたのは、もうその日の終わりそうな夜。

気づいたからと言って、だから何だって言うんだ。

世界は何も変わらない。

誕生日なんて意味もない。

「……遅かったね。早く食べてくれないと、せつかく作ったのに冷めちゃうよ」

「……絵の具がなかなか取れなかったんだよ」

キクマサは平静を装って、席に着いた。

カトレアは大きなオーブンから、アップルパイを取り出して、白い陶器の平皿に乗せた。

「これは食後だよ。少し冷ましておこう」

「……………」

カトレアは、日頃はあまり凝った食事は作らないくせに、こういう時は本来の腕前を発揮する。

嬉しいくせに、この頃のキクマサは若かったから、それを表現するのが恥ずかしくて。いつものようにすまして食事を食べ始めた。

しかし、カトレアはにやにやして、それを面白そうに見ていた。

「おいしいかい？まあ、おいしいだろうけど」

「……………お、おいしいよ」

キクマサは彼女と目を合わせる事が出来ず、あからさまにどもった。照れ隠しに食事を続けるキクマサを、カトレアは満足そうに見てから、彼女も食べ始めた。

本当はすごくすごくおいしかった。
自分の母は、あまり料理が上手ではなかったが、誕生日だけは頑張
って作っていたのを思い出す。

どうしてか、その時の料理はとてもおいしく感じたのだ。

「……カトレアさんのシチューは具が大きいよね。……おいしいけ
ど」

人参もジャガイモも、ほぼ丸ごと煮てある。
煮込んで柔らかくなった肉も、ごろんと大きい。

「こつちの方が本来の味が詰まっている気がするね。まあ、好きず
きさ」

彼女は砂糖の入ってないダージリンを口にして、何て事なさそうに
そう言った。

キクマサは黙々と食べ続け、沢山あった料理も、いつしか無くなっ
てしまう。

「……あんたよく食べるねえ。若さかね」

「中学生の男子なんて、そんなものだよ」

呆れたように笑うカトレアは、「だったらデザートもいけそうだね。
」と、さきほどオーブンから出したアップルパイを持ってきた。キ
クマサはもう一度紅茶を入れ直した。

ほのかにシナモンの香りがする。キクマサはアップルパイと言う物をまともに食べた事が無い。

「……焼きリンゴは平気かい？」

「嫌いじゃないよ。多分」

「たまに嫌いな奴がいるからね。私は考えられないけどねえ」

彼女はアップルパイを切り分け、ちよつと大きい方をキクマサの皿にのせた。

ダージリンの香りと、アップルパイ。

去年の自分が見たら、びっくりするだろうな。

香ばしいパイ生地、甘酸っぱいリンゴと、甘さを控えたカスタード。

一口食べて、驚いた。

こんなおいしい物を、今まで知らなかったんだ。

「……アップルパイってこんなにおいしいんだ……」

「はは。私が作ったからに決ってるだろう。お前のために作ったんだから、ちゃんと食べてちょうだいよ」

「……………」

この日は、嬉しさがむしる切なかった。
穏やかで、優しく、おいしい物を沢山食べて。

誕生日って、誰かに祝ってもらってこそ、意味を持つのだろうか。
自分が生まれてきたこの日を、誰かが認めてくれている。

昔は、そうだったかもしれない。

家族が居て、誕生日を忘れずに祝ってくれていたかもしれない。

今はもう、あの場所には帰れないけれど。

「残りは明日食べようか。最近は暖かくて、何事もうまくいきそう
だ」

彼女は残りのパイにガラスのふたをした。

この人に、どうしようもなかった自分を拾われた。その奇跡に感謝
するしか無い。

自分の息子でも、孫でもないよその子供に、不思議で暖かい居場所
をくれた。

カトレアさんは、凄い人だ。

すっかり紅茶を飲んでしまって、キクマサは息をついた。
確かに、今日はこの後、絵を描く気にはなれないな。

「よい食卓はね、人を豊かにするんだよ。誕生日くらい贅沢したいじゃないか」

「……………うん。……………ありがとう」

キクマサははにかみながら、ちゃんとそう口に出した。

ありがとう。

誕生日だけじゃない。あなたはかけがえの無い物を、与えてくれたんだ。

初めて会った、あの日から。

後から恥ずかしくなって、キクマサは食器を片付け始めた。

言葉にするのは思いのほか難しい。恥ずかしくて、照れくさい。

カトレアは相変わらず、何でもお見通しだよと言わんばかりに笑っていた。

キクマサはうたた寝から目を覚ました。
ギリシアの爽やかな暖かさは、心地よすぎるから。

「あら、起きたのね。」

ふと、後ろから声がした。そこには、実家に帰っているはずのルナシーが、自分のイーゼルを整えていた。

「……………?? あれ、ルナ??」

「ふふ。びっくりした? 今日戻ってきたの。……………キクがあんまり気持ち良さそうに寝てたから、そつとしておきました」

彼女は相変わらず、ふんわりした空気を連れてくる。

「……………参ったな。俺ここで寝てたの?」

「そうよ。凄いわね、背もたれの無い椅子で寝られるなんて」

キクマサは立ち上がって、背伸びをした。

ルナシーはくすくす笑って、

「……………ねえ、お茶にしない？私、昨日ワッフルを焼いてきたのよ」

「……………ワッフル？」

キクマサは小首をかしげた。

ワッフルが分からないのもあるけれど、どうしてまた。

彼女はそんなに頻繁に、何かを作ってくるタイプでもない。

ルナシーは緑色の瞳で、キクマサを見上げた。

「今日はあなたの誕生日でしょう？」

「……………」

彼女の言葉に、キクマサは一時ぼかんとしていた。

「おめでとう、キク…。」

ルナシーは、当然のようにそう言った。

誰かが居るから、誕生日を意識出来る。

キクマサのように、自分に疎い人間は特に。

「あ、ありがとう……」

「……なあに、気がついてなかったの？自分の誕生日……」

彼女はくすくす笑いながら、紅茶のポットを取りに行った。

やがて漂うダージリンの香りはあの時のまま。
この日、キクマサは好物が一つ増える事になる。

I
d
r
a
w

*番外編〜drawbaton総集編〜

『瞳に 降るルネ・ルビー、お前はそれでもギリシア男児か!!』

今週のルネ美新聞には、このような煽り文句が書かれていて、キクマサは一瞬何事かと思った。ルネ美新聞のしつこさとねちっこさ、そして煽り文句のセンスの無さは有名だが、ここ最近はおとなしい記事ばかりだったのに。

今度のターゲットはレッド先輩なのか……

キクマサは恐いもの見たさに、新聞を手を取った。

(インタビュー：デイヴィット・カール(デザイン科四年))

Q1有名なあなたを知らない奴は、この学校にいないとは思いますが、他科の新入生のために、自己紹介をお願いします。まず、お名前や所属をお願いします。

「ああ、はい。レッドリー・ヘッドバーンです。絵画科の五年生！称号はルネ・ルビー！もう一つの肩書きは、絵画科男子寮の寮長っ

てとこかな。」

Q2あなたはどんな人ですか？どのような性格だと言われますか？

「自分で言わせてみたら、明るい、うるさい、落ち着かない、ですかね。他人にはマメ男って言われますけどね。まあ普通だと思いますよ。」

Q3生年月日、身長体重、スリーサイズを、許される限り教えてください。
ださい。

「11月12日生まれのA型です。身長は180、体重は毎日違う……え？スリーサイズ？それって男子に聞くものなの？需要があるの？」

あなたに興味のある女子は、この学校に沢山いますからね。それなりの需要はあります。

「デイヴィット君……君は本当に立派なインタビュアーだよ……」

Q4兄弟はいますか？

「……あー……うん。……お姉さんが居るかな」

Q5ルネ・ルビーには前々から色々な噂が飛び交っていますが……例えばルネ・ダイヤモンドとの交際疑惑とか……今、好きな人はいますか？もしくは付き合っている人は？

「またそのはなしか。だから、ナギさんとはマブダチ。親友！！男女とはいえ、色めかしい関係以外の関係って言うの

もあるんだよ」

Q6二日前、ダイヤモンドのアトリエでのお泊まり疑惑が浮上していますが、その所、寮長としてどうお考えですか？

「……………どこネタ？それどこネタ？……………え？……………てか、それ言いたかっただけでしょ。おかしいと思ったんだよね、今更俺の特集がよって。……………え……………？まあね、泊まったっていうか、日を越したって言った方が早いよね。共同制作をしてたら、そう言う事もあるでしょうよ。……………残念ですが、皆さんが期待してるようなめくるめく展開はありませんでした。二人とも屍の様に、ボロぞうきんの様に寝てたって話です。まあ、当然寮長としてはよろしくないかと思えますけど、これこそ美術系の醍醐味ですよね」

Q7……………一緒に寝たんですか？

「だから！！そこ食いつくか！！あちゃー！！もう、ほんとと挙げ足取るの上手いね君は！！寝てた！！倒れてただよ。皆美術系なんだから、覚えはあるだろうけどね」

Q8では、今は彼女はいないってことですね。あなたに憧れている全校女生徒は、希望を持ってもいいってことですか？

「え？……………そりゃあ、未来はどうなるか分からないからね。うん。みんな、青春するんだよ」

Q9……………では、少し簡単な質問をしましょう。好きな食べ物ってありますか？

「最近じゃパニーズ・スシーにはまってるね。サーモンとアボカ

ドを巻いたやつ」

Q10 嫌いな食べ物は何？

「うーん……特に無いかな……。前、どっかの秘境でごちそうになった、名前も分からないような虫の姿焼きは、もう食べたくなかったって思ったけどさ。」

Q11 癖は何ですか？

「ウインク ですね。好きだったハリウッド映画の俳優の真似をしてたら、癖になっちゃったっていうか」

その、星が降るようなウインクにやられた女子は多いと思いますよ。

「本当かい？全然モテないけどね」

Q12 口癖は何？

「神様が俺にウインクという設定を与えた様に、他のキャラクターには口癖の設定がある……。でも俺にはそんな口癖はもらえなかった様です」

Q13 ルネ・ルビーと言えば、人物画ってイメージですが、絵画以外に特技ってありますか？

「家事、料理……。ん？料理は家事に入るのかな？あとは、どんなアルバイトの面接にも受かるって事かな。今じゃ何でもできる様になったよ」

Q14 趣味は？

「世界の映画、ドラマ、日本アニメを朝から晩まで見る事です!!」

趣味がルネ・ダイヤモンドと被ってますね。もしかして一緒に鑑賞会してます？

「……そうですね……。何!?!なんか文句ある!?!なんか文句あるか!?!」

いえいえ別に(笑)

Q15 実は自分は です。の、 に当てはまる事ってあります?でも、秘密とかって無さそうですね。

「実は自分はシスコんだ。サービスカミングアウトしますよ。もうどうにでもなれ」

Q16 へえ〜……って、凄い事聞いちゃった!!(メモメモ)

「ははっ。そんな慌ててメモるような事でもないさ。ゆっくり書きたまえ」

Q17 明日のルネ美の掲示板はこの話題で持ち切りでしょうね……

「うん 覚悟の上さ。俺は絶対にパソコンを開かないっ!!」

Q18 あ、最後に一つ良いですか？

「……………何だい？」

Q19 正直、ヴィライアーの中で苦手な奴、嫌いな奴っていますか？

「はは！！いた方が良かったかい？残念ながら、今のヴィライアーには居ないなあ」

Q20 団長との不仲説が噂されていますが、真相は？

「それもとこネタですか（笑）別に、団長を仲良しって区切りにできないなあ。どっちかって言うと、仲間って感じ。団長はリーダーだからね」

Q21 ルネ・テクタイトより、あなたの方が団長にふさわしかったのではないかってもっぱら話題ですが、どうお考えで？

「……………ふーん。じゃあ君は、俺が団長の方が良かったって思う？俺はそうは思わないなあ。ヴィライアーの団長をしていける器じゃないよ。寮長は適任だったと思うけどさ。ヴィライアーの団長ってね、ほんと、なるべき人がなる様にできてるんだよ。きっとこれは、ヴィライアーにしか分らない。個性的な、自己主張の激しい人たちの集まりなんだから、リユオンくらい亭主関白じゃないと、誰もついていけないよ。……………ま、そう言う事かな」

Q22 そうですか……………ま、もうちょっとネタと証拠を掴んでから、改めて伺います。俺は諦めません。

「君ってほんとたくましいよね……………」

Q23では、最後に作者へ一言！

「神様……俺たちを手のひらで転がしまくる神様……扱いやすいケメン梓で造ったはずの俺と言うキャラクターを、どうしてこんなに空気にしてるんですか！！」

Q25……おつかれさまでした。

「……あ、はい。……おつかれさまでした」

――――
終

「……………」

キクマサはその新聞を立ち読みしていたが、買って永久保存しておこうと、レジに持って行ったのだった。

『ルネ・ヴィルトンに乱入 現代のターザン噂のルネ・コーラル！』

相変わらず煽り文句のくだいルネ美新聞だな……とか思ってた通りすぎようとしたが、キクマサはその衝撃的写真に新聞を取り上げた。

これは一年生のクレハじゃないか。

クレハは赤毛のやんちゃな少年だが、正直キクマサはあまり知らない。しかし、この写真の彼は、絵画棟の二階から、「ようこそサントリーニ島へ」と書かれた布をマントにして、猛烈な笑顔で飛び降りている写真。

こいつバカだろ!!!

しかし、彼が骨折したとかいう噂を聞かないので、無事だったと言おう事だろう。

写真の下には彼へのインタビューが載ってあった。

というより、新聞部はよくこの瞬間を激写したな……。

(インタビューア：デイビット・カール(デザイン科四年))

Q1 今、二階から飛び降りましたね。いったい何をしようとしたんですか？ほら、あなたの存在を皆さんに教えてあげてください。お名前と、その胸に輝く称号を!!

「え？誰お前？……俺？俺はクレハだよ。クレハ・ドルフォーード。……絵画科の一年生さ。称号はルネ・コーラル!!知ってる？コーラルって珊瑚なんだよ!!今のは……なんだろう、ただ、風を感じたかっただけだよ」

Q2 あなたに興味のある読者は多いでしょう。今の写真を撮ってますからね。あなたはどんな人ですか？ルネ・コーラル。

「……どんなって……健康的？……野生児ってよく言われるけど。でも別にゴリラに育てられた訳じゃないよ(笑)」

Q3 生年月日、身長と体重を教えてください。

「あははは。10月31日に爆誕したよ!!身長は160、体重は49」

Q4 あなたがロズベルト家の養子って話がありますが、かの四年生の大天才、ルネ・オパールがお兄さんになる訳ですよね？

「うん、そうだよー。血は繋がってないけど、スノーは兄ちゃんだ。スノーの上には二人また兄ちゃんが居るよ。皆ここのルネ・ヴィライアーだったんだぜ！どーだ！！」

Q5 うーん。……この手の話は、あなたにはまだ早いかもしれませんが、好きな人って居ます？

「……………（ポカーン）」

ですよー……！！！！

Q6 じ、じゃあ、どんな子が好みかな？

「……………（ボケー）」

ですよー……！！……そうですよー……。見るからにそう言うのに無縁そうですもんねー。あ、失礼……（汗）

Q7 あ、え、えっと、好きな食べ物ってありますか？

「チョコ……！！……俺チョコレート中毒だからさ、ヘビイチヨコラーだからさ……この前お医者さんに、これ以上チョコ食べるはやばいよって言われたけど仕方ないよね。だって食べないと死んじゃうし」

Q8 嫌いな食べ物？

「何でも食べるよ」

Q9 癖ってありますか？

「癖？……飛び降り癖かな。……とにかく風を感じたいんだ。あと歯ぎしり」

Q10 ……。あ、じゃあ、口癖ってあるかな？

「ないよ。あるかもしれないけど、俺知らない。分からない」

Q11 一年生でルネ・ヴィライアーに選ばれるのってもの凄い事なんだけど、選ばれた時どうだった？

「……？……わーい……って感じ」

Q12 ……。野性派な絵画を描くそうですが、好きな色ってありますか？嫌いな色は？

「好きな色はねえ、カドミウムグリーンとセピア！！嫌いな色はライトレッドとカーマイン」

Q13 他に特技ってある？

「俺ねえ、授業中にねえ……木を掘って筆箱とか作ってるの。リス先生にうるさいって怒られたけど、筆箱は褒めてもらったよ。」

Q14 ……流石ですね。じ、じゃあ、趣味を教えてください。

「……飛び降りる事かな。風を感じたいんだ」

Q15 実は自分は　だ!!

「……うわあ、これ、マジで物語に影響でちゃうよ。俺メインの話って、もろこの質問じゃん!!だからみんな、本編まで待っていてくれよう!!」

Q16 そ、そうなんですか。なら無理に聞けませんね。神様に怒られますね。

「そつだよ。最悪君、首になっちゃうよ!!次から別の人がインタビュアーになってるよ!!」

Q17 怖い物知らずなルネ・コーラルだけど、苦手な物ってある?

「……月かな。満月だな……気分悪くなるから。あと火もダメだな……気持ち悪くなるから」

Q18へえ、意外ですね。

「そう？君もトノサマバツタ苦手そうな顔してるよね（笑）」

Q19じゃあ、最後に作者へ一言！！

「俺の卵のフラグはどこへいったの？このままだったら卵食べちゃうよ？生まれる前に食べちゃうよ？目玉焼きにせざる終えなくなるよ？」

Q20……………お、おつかれさまでした。引き止めてすみません。

「ども。……………ってああああああ。会議に遅れちゃう！！団長に怒られる……………」

……………終

……………」

スツゲエや。

キクマサは、あのインタビュアーさえもドン引きさせるクレハの力
オスつぷりに、改めて感心させられたのだった。

【フォルテでバトン】

普通の天気の日。

ヴィライアーになりたての頃、新人はそれぞれ集められてルネ美新
聞の取材を受けた事があった。

勿論その中にフォルテもいたわけだが、インタビュアーの、この興味が無さそうな顔。

そんなに俺がどうでもいいですか!!

フォルテは用意された破れたパイプ椅子の、その破れた部分避けながら座り、失礼きわまりない新聞部の態度にイラツ　としていた。

しかも、インタビュアーは、そばかすだらけのぼつちやりした、何かを間違ったようなチャラ男だ。見ているだけでとてつもない憤りを感じざるをえない。

チャラ男は気怠そうな口調で、適当な質問をする。

Q1『んでは、あなたの事を簡単に自己紹介してくださいっす』

「……………俺はフォルテ・ゴツドバルトです。二年生の推薦ヴィライアー。称号はルネ・クリスタル。父が考古学者で、幼い頃からくつついて世界中を見てきました。趣味は研修と、宇宙の端について思いつめぐらせる事です。そしてー」

『あ、もういいっすいいっす。時間ないっすから、次行きます』

「……………」

【ノーマルな質問編】

Q2 『あなたの特技を一つ自慢してくださいっす』

「特技か……美術系の俺たちには難しい話ですね。……一般的に見て、そりゃ絵画って言えるだろうけど、ここにいる限りそうも言えないから。……うーん、雑学が多いって事じゃないかな……考古学しかり、政治しかり、この学校にいる人じゃ珍しいタイプなんじゃないかな」

Q3 『いつものメンバーで集まって王様ゲームをやったところ、貴方が王様のクジを引きました。この王様ゲームでは、命令する人を王様が自由に選ぶことが出来ます。あなたは、誰に何を命令しますか？』

「……………へ？」

『いやだから、王様ゲームで』

「あ、分かった分かった、わかりました。……うーんそうだな……………普通王様ゲームっていうのは、合コンなんかで女子といちやつくための理由をつけるためのものだけだね。……ここはっ……………やっぱりそうだった方がいいのだろうかつ……………だったら、メルベリー先輩に膝枕してもらうのも捨てがたいけど、シャルク先輩にボロぞうきんのように踏みつけられてみたいとも思う！
！ザ・男のロマンン！！」

『……………！！　　いいっすねえ！！』（キラキラ）

「食いついたっ！？お、おい、そこだけ一生懸命メモしてんじゃねえよー！！」

Q4 『あなたがもし一日だけ誰かと入れ替われるとしたら、誰と入れ替わって何をしたいですか？』

「…………… キクマサと一日変わって、あいつの記憶力の無さのメカニズムを検証してみたい」

Q5 『あなたのオフの日の過ごし方を教えてください』

「基本的に寮にいるときは絵描いてるよな。キクマサ達と。…………… ロングバケーションは実家に戻って、親父の奴隷のように働かされてる。バイト代出るから良いけど……………」

【シリアスな質問編】

Q6 『あなたの一番大切な人は誰ですか？ その人に対する気持ちも語ってください』

「！？」

『こつち的には好きな人って解釈してもらいたいんですけど。良いネタ無いと、この記事カットされかねないんで。ルネ・ペトリ

ファイウッドとの関係が噂されてんですけど、そこんところどうな
んでしょつか』

「……………んん……………ん？……………え？？……………あ、レイは何て言うか、お隣
さんだったから幼なじみっていうか。なぜか行くところ行くところあ
いづがいていうか。てか、噂なんか無いでしょう！！どっちかっ
て言うって仲悪いよ俺ら！！……………まあ、癩癩持ち出し、面倒のかか
る奴だけ……………絵の実力は尊敬してる。……………画家としては一番好き
って言えるかもしれないな」

『……………ふうん……………』

「……………なんだよ、そんな目でこっちを見るな」

Q7 『もしも明日世界が滅んでしまつたら、大切な人に何を言
いたいですか？』

「それほど大切な人いたっけか？……………もし世界が滅びようものなら、
この素晴らしい歴史と文明も無くなつてしまつてことだろ？だつ
たら、そうならないように、まず命張るね、俺は」

Q8 『恋愛感情のない相手で、あなたがパートナーとして一番信頼
している相手は誰ですか？ その理由も教えて下さい』

「そりゃあ、二年生の皆だろ。あの4人でいるときが最高に楽しいし、落ち着けるね。まあ、ルナさんやレイは女の子だから、たまに距離を感じるけど、キクマサはルームメイトだし気もあうからね。……ただ、あいつ本当にアホだからな……記憶力ないし。でも、すごい良い奴だよ、俺の話ちゃんと聞いてくれるし」

『……………笑』

「……………おい、今の笑う所じゃないぞ。お前本当イラッ　とくるな
」

【他の作家さんのキャラクターと絡もう編】

Q9 『他の作家さんの作品のキャラクターで、付き合ってみたいキャラクターは誰ですか？　理由も教えてください』

「良い質問だ。そりゃあいつぱいいるけど、『蒼い空、赤い花』（作：風花様）の巴さんかな
。強く清らかかつ、女性としての品を持っている。理想的だね。ふー、うちの女子たちも見習って欲しいものだね。何かと不完全だからね。」

『……………何かちょっと偉そうっすね』

「てめえが言っつなよ！！！」

Q10 『他の作家さんの作品のキャラクターで、友達になってみたいキャラクターは誰ですか？ その理由も教えて下さい』

「そこはやっぱ、『睡蓮の書』（作：あやめゆうき様）のケオル様でしょう。エジプトについて聞きたい事がたんまりあるっていうか、神様社会を垣間見てみたいっていうか。知神だから、良い事お話ししてもらえそうじゃないか！！宇宙の端っこがどうなっているのか、時間に終わりがあるのか教えてくれるかもしれないじゃないか！！！！」

『……………結構くだらない事気にしてるんっすね……………熱くなってやんのーダッサー……………ププッ』

「何ーくだらないだトー！！（怒）貴様表に出ろ！！考古学は真理の泉チヨップを食らわしてやる！！！！」

フォルテが暴れ始めたので、取材は中止になったそうです。当然この記事はカットされ、お蔵行きとなりました。

I
d
r
a
w

*番外編く見れない夢一夜く

ここ最近良い夢を見てなかったせいで、眠るのが少し恐かった。

でも人はきつと眠らなければ、明日へ向かっていく事は出来ない。

> i 8 7 7 7 — 9 4 9 <

(猫乃鈴様作 キクマサ)

晴れた夜が好きだった。

黒より少し明るい紺色の空が、煌煌と光る月を引き立てる。それは平面的な絵画のよう。

自然物なのに、こつも引き立てる要素のある色身には驚かされる。やはり世界の創造主は芸術家であったに違いない。

眠れなかった。

フォルテはいびきをかいて寝ていたが、キクマサは眠れなかった。

父と会った後、長く眠りにつきすぎたのかもしれない。

あの時見た夢は、いつたいどのくらいの時間を巻き戻っていたのだろう。消せない過去の記憶を、どんなに時間が経っても無くならないトラウマを、たった一日で振り返る事が出来る。あの夢という不思議な現象。

窓から眺める景色に、彼は夢を見いだした。

超現象の許される、時間でさえも越えていけるあの世界。目に見えるこんな美しい世界もきっと、いつか夢の要素になる。

夢って一体何なのだろう。

「……………何かフォルテみたいな事考えてないか……………俺……………」

キクマサは、前にフォルテが、時間がどうだの宇宙がどうだの言っていた事を思い出す。

彼いわく、人間の力で解決出来ないような事は、もう哲学だと考えた方がいいらしい。あいつは頭がいいから、そういう意味不明な事を深く考えすぎているのだろう。きっとそれが楽しいのだ。

夢もそうかな。

でも夢は確か、医学的に証明されている。自分の頭じゃきつと理解

出来ないだろうけど。

彼はふと、窓辺から下界に見える人影を発見した。

「……………?」

生温い初夏の風に、彼女は導かれるように森へ向かっていた。

「……………ルナ……………?」

キクマサは目を凝らした。

きつとそれは、いつも一緒にいるキクマサだろうから分かる、その姿形の輪郭、雰囲気、歩き方、彼女にしかない空気。金髪の女子なんてこの学校じゃ沢山いるから。

キクマサは緩い紺のカーディガンを羽織って、静かに自室を出た。

ルナの事が分からないと、一度だけ疑問を持ってしまった事がある。彼女はとにかく感情を露にしないし、いつも穏やかそうにしている。そういう子なんだろうとずっと思っていたが、どうしてだろう。最近彼女の笑顔に違和感を覚えてしまう。

ルナシーはルネ・ヴィルトンの敷地内の森を歩いていた。

本当は夜、あまり寮から出ないようにいわれている。しかし、ここルネ・ヴィルトンは基本的に放任主義で縛りが無い。束縛は創造を促すときもあるが、自由な発想に結びつかない。

そんな事はどうでもいい。

今日は眠れない。

やたらと明るいう月が、心地よい森のささやきが、そうさせるのか。

憂鬱な事ばかりを胸に秘めて、どうにかなってしまいそう。

何でこんなに、言い様の無い不安と気持ち悪さを抱き続けているのだろう。

こんな時に絵の事なんか考えたくないのに、やはりこの憂鬱は絵に對するものなのだろうから。

彼女は森の、一番月の光の当たっている開けた場所に出た。

ザアアアアアア……

夜なのに、古い噴水の流れる音がする。

この学校の噴水は、意味があるのか無いのか、よくわからない所に点在している。

「……………夜なのに……………」

夜なのに、水を送っている。

昼に見る太陽の煌めきをいっぱいを受けた水とは違う。

月と共鳴しているように、水しぶきはダイヤモンドみたいに厳かに輝く。

ああ。どうして美しいと言う概念がこの世に存在するのだろうか。

そんなもの無ければ、芸術だって生まれなかった。

人を美しさで判断したり、美しいものとは何か、こんなに悩んだりしないのに。

私はなげやりになっているのだろうか。

「……………ルナ……………」

後ろから声がした。

それは、思っても見なかった事。

キクマサはルナシーを追っていた。

彼女がこんな夜中にうるついでたら、なんか危ないと思う。そんな考えもあったが、ハタと気がついた。

というか俺が危ない奴じゃないか？

これってストーカーって奴じゃないか？この前もこんな風に森で、彼女を見つけた。

もしかしたら、彼女に変な疑いを向けられるんじゃないか？

それってまずくないかな？

一時こそそこそついでいってたけれど、それもなんか危ない奴みたい
に思えて、彼は足が動かなくなる。

どうしよう。戻ろっかな。

彼女だって子供じゃないんだ。もしかしたら男子寮の誰かと会う約束でもしてるのかもしれないじゃないか。

「……………はっ……………!!」

キクマサはこの前、レイが「ルナシーはエドワード先輩に告白されたよ」って言ってたのを思い出した。

それだ！

彼は自分の腕よりも長いカーディガンの袖をぶらんとさせて、がっくりと頂垂れた。

きっとそうだ。そうに違いない。

「……………ルナは何も言わないからな……………」

なんか自分が悲しくなる。馬鹿みたいだ。

帰ろう。

「……………」

彼は月に背を向けようとした。

しかし、そう出来なかった。噴水の音、その噴水の前に立つ彼女に、何だか言いよの無い懐かしさを感じた。

どこかで、こんな光景と出くわした事がある気がする。

俺がこの学校に来た時、初めてこの学校に足を踏み入れた時に出会った、最初の美しいもの。それが彼女と噴水だった。

止まったような時間は、あの時のデジャブ。水しぶきは彼女から放たれている光みたいで。

「…………ルナ…………！」

思わず声をかけてしまったのだ。

「こんな夜に何してるんだ」

「その言葉は……そのままあなたにも言える事なのよ?」

ルナシーはクスクス笑った。いつもみたいに。

二人は噴水の側の木の根元に座って、その場に落ち着く。

ルナシーのオリーブ色の瞳は、空に浮かぶ月をまっすぐに見ている。

「……寝れなかっただけよ。今日は明るいし、外に行こうと思ったのよ」

「……外が好きなの……?君は前にも外にいたよね」

確か、夕方頃だったとおもつ。あの時も彼女は一人で森にいた。

ルナシーは笑っていたが、どこか遠くを見ているような、それは寂しい気持ちにさせるような微笑み。

「……なんでかしら。建物の中って、ちょっと苦手なの」

「……初耳だな……」

「言う程の事でもないわよ。……でも、そうね……いつだって私は外に出られるんだって事を……確かめてしまうのかもしれないわね

……」

「……」

どういう意味だろう。

キクマサは、少し理解に困ったような顔をしている。

もともと不思議な感性を持った子だなと思っていたが、ここ最近の彼女は少しおかしい。笑っていても心ここにあらずと言うか、何かに不安を抱えているように見える。それに気がつく事が出来たのもここ最近だけだ。

「……………ねえ、何か悩んでる……………?」

「……………え……………」

ルナシーはあからさまに驚いていた。

今まで崩す事のなかった笑顔は引きつって、何と言うかぎょっとしている。

「……………ルナシーってさ……………あんまり自分の事話さないよね……………」

「あなたにそれを言われたらおしまいね。……………お父さんの事、全然教えてくれなかったくせに」

「まあ……………ね……………。それはそうかもしれないけれど……………」

キクマサは視線を逸らし、つい先日起こった、父との事件を振り返る。事件と言っても、ただ自分が一方的に悩んでいたただけだが。

ルナシーはそんな彼を上目で見上げ、ただじっと見つめた。月の光を宿した瞳で。

「……………ねえ……………キクは、絵を描くの好き?」

「……………そりゃあ……………」

キクマサは質問されるがままに素直に答えそうになったが、突然す

ぎる問いかけに、そしてその内容に目を瞬かせる。

「……………って、何それ……………。ルナは絵描くの嫌いな……………?」

「嫌いな訳無いわ。嫌いだったらここにいないわよ……………」

「……………そうだよな……………」

彼はホッと胸を撫で下ろす。嫌いだって言われたらどうしようかと
思った。

しかし彼女は、その笑顔を少し曇らせて、目の前の噴水の流れを見
ていた。その水面に何を思うのか。

「嫌いではないけれど……………嫌になるときはあるわ……………」

「……………それは違うの……………?」

「……………どうかしら。人によっては同じかもしれないけれど、私にと
っては違うわね。……………あなたはそう思う事は無いのかしら。いつも
とても楽しそうに絵を描いているものね……………」

探るような視線は、いつもの彼女とは違うような強いものだ。

しかしキクマサは、そんな彼女の視線に気づきもしない。素直に考
えて、「そうだなあ……………」とか言っている。

ほんと、この人は。

彼女は呆れたように小さく息をつく。

「……………うーん……………嫌になるっていうか……………。描けなくなった事は
あったな……………」

「……………!？」

「……………母さんが死んだ時にね。絵が恐くなつたんだ……………」

芸術が導きだす答え、その際どさを知った日。

母が自殺した、その時完成した美術品。その絵。

ルナシーは瞳を揺らす。

「……………そう……………」

私とこの人の違いは、きっとここにある。

私がこんな風に、自信を無くしたり、絵が嫌だつて思ってしまうのは、絵が描けなくなる恐さを知らないからだ。それは想像した所で理解出来ない感情だと思う。

キクマサが、自分より上の人の実力を素直に受け止め、それでも希望を持ってただ純粋に絵画を楽しめるのは、絵が描けなくなる恐さを知っているからか。

「……………どうしたんだルナ。君はそんな風に悩む程仕方のない絵を描いているようには見えないけどな。迷走しているのは俺の方だ……………」

「……………よく言うわ……………」

彼女はクスツと笑った。

よく言うわ。

あなただつてレイの絵の方が好きなくせに。

「あなたは迷走したって、きっと出口を見つげられるでしょう。私はそうもいかないわ」

「……………そうかな」

「……………そうよ。……………私たちはタイプが違うわ」

タイプが違う。

あなたはレイに近い。今はまだレイに及ばなくったって、持っている物がある。

私は限界を知っている。

芸術は才能と言うものに忠実で、残酷だ。努力や苦悩に恩恵を与えるが、才能の壁だけは越えさせてくれない。どの分野より、それが色濃い。

絵が好きだった。だからこそ極めたいと思ってここへ来た。ルネ・ヴェイライアーになった。

「……………好きだからこそ、嫌になるんだよ。それは俺にだってあるさ……………」

「……………」

「……………悪い事じゃない……………と思う」

彼は星を数えているように、夜の空の向こうに視線を向けていた。その言葉自体が、ルナシーにはどうしようもなく遠く感じる。そんな事が言えるから、あなたは凄いのだ。

キクマサは冴えた頭の奥で、全く眠たくない理由を考えた。

「……眠れないんだ。俺だって……」

「……寝付けないの……?」

「……いや、夢が恐くてね……」

彼は、長い夢を見た一夜の事を、今でも思い出す。たった一夜で味わった絶望の感覚を、恐ろしいと思っている。噴水の繰り返し流れる音は、切っても切り離せない過去との繋がりみたい。

「夢が恐いの……?」

「……どうしてだろう。俺はこの歳になってもよく夢を見るんだ。そしてそれを、鮮明に覚えていたりする」

忘れていたかと思っていたり、思い出したくないかと思っている事程、タイミング良く夢に現れたりする。そういう事は昔からあったような気がする。

ルナシーは不思議そうにしていた。

「……変な人ね……」

「君は恐い夢とか見ないのかい……?」

キクマサは改まって聞き返す。ルナシーは首を傾げ、

「……私、ここ最近何年も、夢を見たこと無いのよ……」

あっさりと凄い事をカミングアウトした。それはキクマサが驚愕するに値する事だ。

夢、夢とは言っけれど、それは現実の事ではない。

ルナシーは夢を見ない分、彼の悩みがよくわからなかった。

そして、キクマサもまた、ルナシーの悩みが分からない。

風が少し冷たくなってきた。今は一体何時なのだろう。

「……そろそろ寮に戻ろうか……。眠れないって言っても、明日も授業があるんだし。もうすぐ次の研修だってあるんだ。」

「……そうね……。眠らないときっと、次へは進めないわね……」

ルナシーは、自分に言い聞かせるように、選んだ言葉で繕った。

眠らないで悩む人。

眠る事が恐い人。

二人は共通の事をしている様で、全く別の悩みを抱えている。

お互いが失った焦がれるものを、お互いが持っている気がする。

月が随分と明るい。

まだ夜は明けない。

噴水の音はいつだって変わらない。

時間を感じさせない。

二人はまだ分かりあえない。お互いが謎で疑問を抱く。

それは当然だ。

絵が大好きで仕方が無いのに、その感情の方向性ですら違っただか
ら。

良い夢が見たい。

出来れば、二人にとって気の晴れるような、明日に希望を見いだせるような夢を。

I
d
r
a
w

*番外編〜見れない夢一夜〜（後書き）

猫乃鈴様にファンタートを描いていただきました！！
キクマサ君をありがとうございます！！

* 番外編く ルネ美ランキング 上 く

いつも側にいてくれる人について

考えてみよう

『今年始めの大一番 ルネ美ランキング祭り結果発表！！ギリシアの神に愛されたのはどいつだ！！』

今週のルネ美新聞の発行部数はいつもより多く、それなのに売店から速攻姿を消したのは、今日の新聞がいつもと少し違うから。天使と悪魔の微笑むような、誰もが気になる内容なのである。ルネ美新聞部は今日のために、ひと月前からアンケートをとっていた。

ルネ美新聞と言えば、しつこさとねちっこさ、そして煽り文句のセンスの無さで有名だが、デザイン科発の長い歴史のある部活で、今ではこの学校の生徒にとって深く浸透している新聞とも言える。ただ、内容は少し乱暴な所もあり、やれどこの科の誰が、誰と付き合ったのだの、誰と別れたのだの、有名人であればある程どうでもいい内容でさえ記事になる。ルネ・ヴィライアーにとっては最も注意すべき相手と言っても良い。ルネ・ヴィライアーと言うだけで注目されるし、新聞部も情報を得るために追っかけ回す。くだらない噂でさえ聞き逃さない。

そんな新聞部が毎年二回程行っているルネ美ランキングとは、この大きな学校にいるあらゆる人物に、募ったアンケートを元にランキングを付け発表すると言う、非常にいかげわしい人権を損ねかねない無情なランキングである。しかし、これが学園の生徒にとって需要があると言うのも事実で、この発表を心待ちにしていた人たちは多い。ある種のお祭り化し、そのランキングに上がった者は必然的に注目される。

ランキングには数種類ある。以下である。

全学科共通

*この学校で全てにおいて最も輝いている男子ランキング（最高ラ

ンキング)

*この学校で全てにおいて最も輝いている女子ランキング(最高ランキング)

*この学校で最も彼氏にしたい人ランキング

*この学校で最も彼女にしたい人ランキング

*この学校で最もカリスマ性のある人ランキング

*抱かれない人ランキング

*抱かれたくない人ランキング

e t c . .

以上と同等のものが、学科別に別れてランキングされているものもある。

ルネ・ヴィライアー編

*今一番輝いているヴィライアーランキング

*今最も気になるヴィライアーランキング

*今年ブレイクするヴィライアーランキング

*この人誰?ヴィライアーランキング

*ヴィライアー好感度ランキング

*ヴィライアー良くも悪くも話題性ランキング

*最もイケメンヴィライアーランキング

*最も美人ヴィライアーランキング

*性格の良さそうなヴィライアーランキング

*性格の悪そうなヴィライアーランキング

e t c . .

被っつていそうな内容もあるが、それがランキングと言うものである。ルネ・ヴィライアーにとって、このようなランキングは脅威であったが、上学年になるほど、もう慣れたと言うふうにもっぱら話題のネタである。

「ほーら、今回も この学校で全てにおいて最も輝いている男子ランキングの一位はリオだけ。お前すげえな、彼女持ちで四回連続一位っつて……」

食堂に四年生ヴィライアーが集まっていた。フレイは今日の新聞を広げ、最も榮譽あるランキングの一位となったりオの名前を見つけた。しかしリオはあまり良い表情をしていない。微妙に疲れたような目をして、飲んでいるアイスコーヒーのストローをもてあそんでいた。

「理由：「何といつても顔がいい」「微笑みは妖精の国の王子特権」「キラキラオーラ半端無い」「金髪碧眼はもはや正義」……意味わかんねーてか恐い」

フレイは何がそんなに楽しいのか、凄く笑顔だ。

シィダはそんな、この学校で最も輝いていると名高いリオを彼氏に持っている訳だが、

「……そりゃそうさ。だってついこの前、ユーロピアン・アート・グランプリの賞をとって、しかも辞退したから……」

リオは顔を上げると、あの時の事を思い出すようにフツと笑った。スノーとシャルロは知らん顔をしているつもりだが、どこことなく冷や汗気味だ。

「ま、あれは今後伝説になり、反面教師的な良い例として語り継がれるだろうよ……」

「……うるさいわねえ、もういいのよその事は……」

シャルロは話題を変えようと、他のランキングを見る。

「……スノーは相変わらず、この学校で最もカリスマ性のある人ランキングの上位に食い込むわね。一位になれないのはレッド先輩みたいな愛想が無いからかしら……でもレッド先輩、今回は二位だわ」

「一位は？」

「映像科の団長よ。……ほら、あの気取った感じの……ジーク・ウイリアムズ先輩……」

「……あ〜ね……」

フレイははいはいと頷きながらも、多少小首をかしげる。まあ、納得出来る部分と納得出来ない部分はあるが、あの誰にも真似出来ないテンションは確かに、カリスマ性といえるのかもしれない。

フレイはあるランキングを見て、プツと吹き出した。

「シャルロくお前また 性格の悪そうなヴィライアーランキングにいるぞ。……しかも前回より順位を上げて、なんと三位だ」

「……なんですって！！前は五位だったのに」

シャルロはそのランキングを恨めしそうに見て、ムカムカと湧いてくる腹立たしさに舌打ちした。

「シャルロは誤解されやすいよね……」

スノーはそういいながらも、顔を背けて笑っている。

シーダは口を丸くさせて、

「良いんじゃない？もう褒め言葉よ」

アイスティーのストローを口に運ぶ。透き通った氷が音をたてるのが涼し気だ。

今日はこの新聞のせいで、何かと視線が突き刺さる。

ヴィライアーを発見してはこそこそくすくすと笑っているような。

良いランキングに昇ったのならまだしも、ネタ的なものだったら恥ずかしいし、一週間はこのランキング熱は冷めないだろうから憂鬱だ。

リオは最も輝かしいランキングに昇ったのに、やたらとため息をつけている。

彼にとってこのランキングはあまりに辛い。

だってこのあと、この学校で全てにおいて最も輝いている男子ランキング 一位の人は新聞部に追い回され、しつこいインタビューを迫られる。

「ま、頑張れ」

フレイはボンと、軽快にリオの肩を叩き、ニヤツと笑った。そして、斜め後方に視線を流し、

「ほーら来なすった！新聞部の連中だ！」

腕を組む。

しかも今年は、ルネ美チャンネル（校内テレビ）との協力体制にあるらしく、カメラまで連れてきた。

「みなさんお昼の中継です！！今日は大盛り上がりのルネ美ランキングですが、何と今日の前に、この学校で全てにおいて最も輝いている男子ランキング 一位の、ルネ・ガーネットこと、シャンド

リー・リオールさんがいまーっす!!」

名物キャスターとして名高い映像科4年生のアドリアン・キャロルが、高いテンションそのまま、こちらの了承も得ずにカメラを回す。リオは当然、「来たよ…」と言わんばかりに憔悴している。

「おいこら、ちょっとちょっと、カメラ回すならシーダお母さんを介してもらわないと」

フレイはカメラ目線をいちいち気にしながら、チャンネル部と新聞部たちにも申す。シーダは腕を組んだまま、彼らを睨んでいた。その光景は全て、この学校のお昼のチャンネルで回っている。どこかで二年生達もぼかんとして見ている。

アドリアンはニッコリ笑顔を崩さずに、

「きっとこの学校で一番幸せな女子と言えば、あなたであろうルネ・カーネリアン。今回の結果、彼女としてどうですか？」

シーダにマイクを向ける。

彼女はむすっとした表情だったが、ここで落ち着いていられるのも彼女の性である。

一度ため息をついて、

「……良いことだと思いますわ。彼は見た目“だけ”では無く、絵画においても、また私生活においても尊敬出来る所がありますし。そういった意味で輝いていると言つのは納得です」

当たり障りが無いような、しかしまた皆に思い知らしめるような言

葉を選ぶ。

シャルロとスノーは顔を見合わせ笑いを堪えていたし、フレイにいたっては「まじめすぎる……」とか呟いている。これはきつとマイクに拾われた。

リオなんて顔を真っ赤にさせている。

「どうです、ルネ・ガーネット。彼女このように言ってますが」

アドリアンは眉を一度ピクツとさせて、今度はリオにマイクを向ける。

「彼女持ちのあなたが今もまだダントツで支持されていると言うことは、きつと女性陣は諦めていないと言うことでしょう。好みなど聞いてもよろしいでしょうか」

「……………」

質問攻めの中、リオはたじろいでいた。

そんな質問されたって困る。彼女がいる時点で、好みがどうかかわれても、だってシーダがいるし……。という無限ループの中にある。

「……………好みですか？……………ここ数年考えても見ませんでした、シーダがいますから……………」

カメラの前で言ってしまった後にポフツと顔を真っ赤にさせる。シャルロとスノーはいよいよ顔を伏せて笑っている。

たぶんこれは、彼らチャンネル部や新聞部の期待していた答えでは

ない。

その時だ、彼らの側を、ファッションデザイン科三年のステファニー・ランドールという、非常に可愛い女子が、友達と通り過ぎようとしていた。肩までのふわふわの髪に、ぽつりとした唇が印象的な、可愛らしさと色気を共に持っているような最強女子。彼女が今回のこの学校で全てにおいて最も輝いている女子ランキング一位である。

アドリアンは彼女を見逃さなかった。

「なんとなんと、<この学校で全てにおいて最も輝いている女子ランキング一位のステファニー・ランドールではないですか！！ちよつと待ってください！！！」

彼は彼女の腕を掴んで、是非に是非にとカメラの前まで連れてくる。ステファニーはきよとんとしていた。彼女が近づいてきたことで漂う良い匂いと半端無い清潔な色気。フレイは大きく息をつき、首を振る。

「たまらんねえ……小悪魔な香りが……」

「……なんなのあれ……オーラ……？ 覇気……？」

シャルロは煙たそうに、お花が咲き乱れてそんな空気をはたく。

「ちよつとお二人並んでみてください！！！」

アドリアンはステファニーとリオを無理矢理並べ、拍手をする。

「素晴らしい！！何と絵になることでしょう！！みなさんの憧れが今、タッグを組んでいますよ」

何のタッグだよ、と言いたくもなるが、新聞部は二人が並んでいる所を今だと言わんばかりに写真に撮っているし、この映像は学校中で流れている。食堂の野次馬からも変な喝采が上がっていたりする。また、ステファニーもノリの良い女子であったため（そこが人気の一つでもある）リオの腕に手を回し、しっかりとポーズをとっている。

「ほら、リオ先輩もカメラの前では笑わなくては」

とか言っつて、輝かしい微笑みで彼を見上げる。

何だか、これにはシーダはもう、どうしようもないと言っつか出る幕が無いと言っつか。

嫉妬とまでは行かないが、ぽかんとしてその光景を見つめるだけである。

だって、ステファニーがいることでリオはよけいに輝いて見える。

今までは自分が隣にいたから、彼の輝きと言っつのをそれほど意識したことは無かったが、こうやって客観的に見ることで、いかに彼が輝いているのか分かる。

そうか、リオに憧れる女の子って、このように見えていたのね。

なるほどと思う反面、カメラのフラッシュの光の中にいる、リオや

ステファニーが遠く感じる。

フレイはぼかんと突っ立っているシーダの肩に腕を乗せ、

「ま、あれだ。……良い機会だから、リオが他の女と一緒にいる所を見とけよ……」

「どういう意味よ。私は別に嫉妬なんかしてないわよ」

「分かってるって。……二度とないだろうからって意味だよ。それにしてもお似合いだな」

彼なりに気を使っているのだろうか。

最後の言葉がよけいだが、お似合いだと私でも思うから仕方ない。

シャルロはシーダ以上にイライラした表情だったし、スノーにいたってはもうこの話題に飽きている。

「なあにあれ。まるで新カップルたんじょ〜うって言いたげな空気は。……いいのシーダ!」

「なんでお前が怒ってるんだよ、たまにはシーダお母さんの懐の大きさを見習えよ」

「何だかとってもむしゃくしゃするのよ……あの女、ここぞとばかりに腕組んで……シーダが彼女ってこと知ってるくせにね!」

シャルロは腕を組んで、インタビューやカメラのフラッシュの塊から少し離れ、文句を言っている。

「お前ってほんと性格悪いよな……」

フレイは丸めていた新聞紙を開いて、「あながちこのランキング間違つてねえな」と笑っている。女子なら普通このようなのだからけれど、それでもだまって、嫉妬もしないでいられるシーダが凄すぎるのか。

お昼休みが終わりに近づき、やっとチャンネル部と新聞部の輩が消えてくれた。

リオはげっそりした表情で、大きくため息をつく。

「おつかれさまでした、リオ先輩」

ステファニーは笑顔で小首をかしげ、リオに挨拶をする。その仕草までもが可愛らしく、完璧である。

「……あ、ああ。……君も大変だったね」

「そんなこと無いですよ、リオ先輩ったら緊張されてるんですもの」

彼女は上目使いでクスクス笑っている。

イラツ

シャル口のイラツとバロメーターが三つ上がる。

シーダは普通に、机に放置されっぱなしの食器を片付け始めた。

ステファニーがこの場を去ろうとした時、シーダの存在を確かめ、

「あつ」と呟くと、

「すみませんシーダ先輩。私、馴れ馴れしくリオ先輩と腕を組んだりして」

深々と頭を下げる。

その瞬間、再びオーラと言うか、色気みたいなものがブワツと漂ってくる。彼女はいったい何から創られているのか。

「ん？いいのよ、ランキングの日だもの、みんなあなた達のこと知りたがっているのよ」

茶碗を片付ける手を止め、ステファニーにちゃんと笑い返すシーダの精神力に拍手を送りたい所だ。

ステファニーは顔の前で指を絡め、

「わ、ありがとうございますっ！！」

と、これまた可愛らしいお花のような笑顔で。

そしてそのまま小走りで友人達の所へ駆けて行った。まるで妖精さんだ。

「なーにが『ありがとうございますっ！』よ。……あんな女……あ

んな女……絶対わざとよ……」

「とりあえず涙ふけよ。しかたねえよ、男ウケする可愛い子なんだから。仕草から愛されオーラもりもりだったろ。ありや確信犯だぜ、シーダは完璧に下に見られたな」

フレイは顎に手を置き、女子らしい彼女の背中を見送る。

小悪魔っぽい可愛らしさに男共がやられるのは無理も無く、わざとなのか天然かを見極めるのが難しい。

シャル口は手を握ったり開いたりして、納まりのつかない苛立ちを体中に纏っていた。

「シャル口だつて十分オーラあるよ」

「種類が全く違うがな。こりゃ殺気だ」

スノーはあくびを一つして、フレイの答えに珍しく頷く。

リオはシーダと共に食器を片付けながら、彼女の様子を伺っている。

「なんか……ごめんねシーダ」

「……どうしてリオが謝るのよ。リオは何も悪くないじゃない」

シーダは顔を上げ、謝るリオに笑いかける。

シーダはいつもそうだ。このような事態でもすんなり認め、全てを許し、受容する。

信頼してくれていると言えれば聞こえはいいが、

「……怒ってくれてもかまわないんだよ……？」

「……リオ……」

リオはむしろ、それが恐かった。

彼女がそのように出来た人だと知っているが、自分が逆の立場だったらきつと嫉妬してしまうのに。

いや、違う。

自分がちゃんとカメラの前で言えたら良かったんだ。

僕にはシーダがいますから、他の誰にも興味はありません、見込みもありませんって。

シーダは食器を片付ける手を止め、少し困った顔をしている。

ごめん。

君を困らせたかった訳じゃないのに。

「…………ごめん…………。もうすぐ授業始まっちゃうね…………行こうか…………」

リオは向こうでヒソヒソ話をしているフレイ達を呼んで、自分の食器をちゃんと持たせた。

こうやって、また明日からいつもの関係に戻って、自分が彼女にした仕打ちは無かったかのようになる。

ちゃんと謝ることさえ出来ない。

罪悪感は溜まっていく。

ちゃんと愛しているのに、それだけでは解決出来ない何かが邪魔をする。

I
d
r
a
w

*番外編くルネ美ランキング 中く

不安はきつと、お互いにあつたのかもしれない

信じていたって、愛故にそれは仕方の無い事

リオとシーダの関係はランキング騒動の後も特に変わり無く良好である。

ただ、リオの中で何かもやもやした焦りがあつたのと、シーダの中で何か気になる不安のようなものがあつただけ。

でも二人はお互い、そのようなそぶりはまるで見せなかつたし、傍目からすれば、あのときは無かつたかのようになっている。

しかし、そうだ。

事件の起爆装置は着々と完成しつつあつた。

男が一人、ある部室の隅の机に脚を投げ出し考え込んでいた。彼の名前はデイビット・カール。デザイン科四年生の新聞部エースインタビュールすることからネタを拾ってくるまで、自画自賛できるしつこさで追及を止めないマスコミ魂を持っている。ドレッドヘアーが少し悪そうに見える、でもそこが素敵！コミカルな言い回しも楽しい！ともつぱらランキングにも顔を見せるほど、ある意味ヴィライアーとは違う方向で有名である。

デイビットは少し面白くなかった。

今回のランキングも滞りなく、いつものように盛り上がったが、何かが足りないと思っていた。大きなネタに欠けたのだ。

話題になったのはやはりシャンデリー・リオールとステファニー・ランドールのツーショット。あのような大物同士でくっつかなければ話題性に欠けるという証明になった。シャンデリー・リオールとシルフィード・ケイドが付き合いだしてはや二年。あのとときの衝撃はいまだに覚えている。学校内はその話題で持ちきりになるくらいだった。

そりゃね、当時は良い話題をありがとう、という気分だったよ。

でも、あれから何事も無く二人の関係は変わらない。

仲が良いことは普通に考えれば良いことだが、こちらにとっては何も面白くない。

変化が無ければネタにもならない。

デイビットは新聞部の机に、ランキングの記事とネタ帳と、シャンデリー・リオールとステファニー・ランドールのツーショットの写真とを並べ、新聞部らしい思考を展開していた。

そもそも、なぜシャンデリー・リオールとシルフィーダ・ケイドは付き合っているのだろう。何があつて、どうにもつりあつていないように見えるあの二人が。確かに二人ともヴィライアーであるが。そもそも、今も上手くいつているのだろうか。

「……………ネタが無いなら作るまで……………」

彼は厚い唇をにんまりとさせて、リオの写真に指を突き立てる。まるで、銃を撃つような真似をして、何か悪巧みを思いついたような、小気味良い顔をしている。

そう、いつだって時代を動かしているのはマスコミなんだよ、と言いたげに。

それはリオの失態であった。自分の人気なんて考えたくも無い、そう思った彼の心が、彼に警戒を鈍らせていた。

それはほんと、些細なことだった。たとえばリオが一人になる時間を、誰かが確認していたのかもしれない。彼だって別に、いつもリーダーと一緒にいるわけではない。

そんなピンポイントで、例のファッションデザイナー科のステファニーが、彼に会いに来た。ステファニーはこの学校で最も輝いている女子ランキング一位の、とびきりモテる可愛い子だった。仕事も男子との関わり方も、女子友達との付き合い方もその無いような凄いい子だ。

ステファニーの様子は、偶然リオを見つけたというようだった。

「リオ先輩……！」

彼女は先日少々知り合ったばかりのリオに、気さくに駆け寄ってきた。少し息を切らしながら、胸元にそっと手を添えて。

「……君は……」

「……はあ……先輩が見えたので走って来ちゃいました」

彼女はけなげな様子で、きらきらした汗をほほに浮かべ、首をかしげ笑う。

そう、普通ならこの様子でほとんどの男子はやられる。

「私、コレを先輩に渡すようにって言われたんです」

「…………？」

彼女は一枚の写真を取り出した。

その写真は、先日取材を受けたときのリオとステファニーの写真だった。

「新聞部の人たちが、せっかくの記念だからってコレをくれたんです」

「…………へえ」

正直、別に欲しいとは思わないけれど、この子がせっかく持ってきてくれたのなら受け取らないわけにもいかない。リオは、記憶に新しい実に不愉快な、その写真をしらつと見た。

いらぬこんな写真。

持っていたって何の足しにも思い出にもなりやしない。

「ほら、見てください。隅に少し、シーダ先輩が写っているじゃないですか？」

ステファニーは写真の右下のほうを指差した。

そこには無表情なシーダが伺える。

彼は彼女を見つけたとき、やはり少しうれしくて、「ほんとだね」とステファニーに笑いかけた。

シーダへの思いがあったからこそその笑顔だったはずだ。

しかし、その様子ははたから見れば楽しそうに談笑しているように

も見えるかもしれない。

ふと、リオは写真を見て気が付いた。

シーダの存在だけでうれしがっていたが、どうにも彼女の表情が気になる。別に笑っているわけでもないし、怒っているわけでもない。そう、ただ無表情なのだ。

彼女は自分が他の女の子と並んでいたって平気なのだろうか。

リオの中に、そっと沸いてきた妙な焦り。

「…………先輩？」

ステファニーはリオの様子がおかしいことに気が付き、彼を覗き込んだ。

リオはできるだけ彼女の接近から遠ざかるように一歩離れ、それでも考える。

今みたいに自分が他の女子との接近に気を遣おうが、何も気を遣わなからうが、シーダにとって特に意味は無いのかもしれない、と。彼女は立派だ。芯がしっかりしていて、同じ年なのに広い心と包容力がある。そういうところに惹かれたのは事実だが、何だろう。

何なんだろう、この虚しさと焦りは。

「…………ごめん…………ありがとう、この写真」

リオはステファニーに軽く微笑むと、じゃあねときびすを返してそ

の場を立ち去った。

ステファニーはきょとんとしていたようだが、今のリオにそれはどうでもいいこと。

なんだろう、凄くシーダに会いたいと思った。

でも今日はきつと、もう彼女に会えない。

リオとシーダが付き合うことになったのは二年前だ。彼らが二年生のとき。

もともと二人はそれほど仲が良かったわけではなく、どちらかといえば微妙。出会ったころ、リオはシーダをあつかましく思っていたし、シーダは別にリオに恋心を抱いていたわけでもない。

そんな二人が、いろいろな事情を経てお互いに惹かれていく。今ではバカップルとまで言われている。

しかし、どうだ。

リオは、自分にとって彼女がどれほどに必要かを考える。

きつと、自分にとって最も必要としているもののほとんどを、シーダが占めている。もちろん絵も大切だが、彼女の存在は絵と同等かきつとそれ以上だ。

しかし、彼女にとって、自分はどれほどに必要とされているのだろ

う。

もしかしたら他の四年生ヴァイアーより少し上、くらいかもしれない。いや、彼女ならありうる。彼女の平等精神ならありうる。

寮の自室のベットの上で、彼はここ最近悩んでこなかったようなことに、頭を抱えていた。

完璧すぎる王子とか言われてたって、ちっとも悩みは減らないし、自分からしてみればいやみにしか聞こえない。

同室のユリウス・デニスは今いない。胃腸炎で入院している。彼はストレスに弱い。

別にそれはどうでもいいが、彼は部屋で一人、開け放たれた窓から、夏が近い季節のからっとした風を受けて、どうしようも無いようなループする考えを巡らせていた。

まさか、こんなことになるなんて思わなかった。

『学園の王子、浮気疑惑！？相手は学園のアイドル！！』

その記事は新聞のトップに大きく掲載されていた。使われている写真はリオとステファニーの二人がにこやかに談笑している写真。

この新聞に驚愕したのは本人たちだけではない。

キクマサは何度も目を疑ったし、団長は飲んでいたモーニングテイーを噴出した。四年生にいたっては朝から表情が険しい。

生徒たちの話題はもっぱらコレ一本だった。

「どういうことよ、リオ!!」

シャルロは朝ごはんを食べる前に男子寮の前で待ち伏せし、リオの前に新聞を突きつけた。

ぎよつとしたのはフレイも。その新聞に書かれている内容には驚かされる。

リオは新聞を凝視して、昨日の状況と照らし合わせてみる。

「ちょ……ええええ!!」

何だこれ。

彼は確かに昨日ステファニーに会ったが新聞に書かれているような事は何一つしっくりこない。

新聞にはこのように書かれていた。

「ランキング一位に輝いたおなじみのシャンデリー・リオールが、放課後お忍びでステファニー・ランドールと会談していた様子! ?ランキングのインタビュで二人は知り合い、意識し合ったか? ?何じゃこりゃ。デザイン科の写真合成技術もここまで来るとキモ

過ぎるな」

フレイは気まずそうにしながらも、リオのフォローを入れようとするが、視線がチラチラ漂っている。スノーは朝起きたばかりで寝癖を立てたまま、あくびを一つした。

「……シ、シーダは？シーダは何て??」

「あの子はまだ知らないわ！！新聞が売店に並ぶ前に、当番でモチーフ台のシーツを取りに行ったから」

「……………」

リオはこんがらがっていた。

この写真はどう見ても昨日ステファニーから写真を受け取ったときの様子だ。どのタイミングでシャツターを押したのか、確かに写真の中の二人はとても仲よさそうに顔を見合わせて笑っている。

コレでは「この二人怪しい」と思われても無理は無いレベルだ。

「…………いや…………この写真は合成とかじゃなくて…………」

「……………はい？」

一瞬そばにいるシャルロ、フレイ、スノーが固まった。リオの次の言葉を待っている。

「…………なんだと？お前身に覚えがあるのか？」

フレイは「おいおい」と、冷や汗ながらに笑っている。シャルロは徐々にリオをにらみ始めた。スノーは何も変わらない。

もちろん、昨日のことは偶然で、この記事に書かれていることなんてぜんぜん真実じゃない。あのステファニーという子に魅力を感じたことなんて無い。

「……………で、でもコレは……………」

リオが必死になって否定しようとしたときだ。

男子寮の前の植え込みのところに、シーダが立っていた。

白いモチーフ用のシーツと、どこから手に入れたのか新聞を持っている。

彼女の表情は穏やかだった。

きつとリオのことを信じきっていて、このようなスキャンダルなんて気にならない。

そう思っているのだろう。

「……………シーダ……………」

リオは表情をゆがめた。この後の展開はここにいる四年生ヴィライアーには容易に想像できる。

きつと、リオが必死になってシーダに釈明をし始め、シーダは何もかも分かっていたわよ、というような彼を信じ許す。それが今までの彼らであり、そういうカップルだった。

しかし、リオの態度は今までとは少し違った。

彼はシーダの落ち着いた表情を見て、何かとてつもなく不安に駆られたのと、言いようの無い苛立ちに襲われた。こんなことになってシーダはきつと自分を許すし疑いもしない。嫉妬なんてしないしショックも受けない。自分が逆の立場だったら気が狂いそうにな

るのじ。

「……………その写真は、真実だ……………」

「……………!?!」

「……………僕は昨日、その子に会ったんだ。……………もしかしたら僕は、その子が気になっていているのかも…。あんな風にキラキラしている子はそうそういないから……………」

リオは一瞬シーダから目を逸らした。

自分の中で何かがささやく。自分たちの愛は本物なのか、ただのこつこなのか。それを確かめたくはないか、と。

シーダは決して僕を怒らない。

嫉妬して欲しいなんて、もしかしたらでたらめな愛なのかもしれない。

もし僕が他の子を好きになっても、君はそのまま僕を諦めるのかい？焦ったりしないのかい？

リオの心情は複雑な念が渦巻いている。

「……………」

静かだった。

リオは顔を逸らしたままだったが、思いのほかに誰も反応を見せない。なので顔を上げてみる。

「……………」

顔を上げてみて、自分がやってしまったことの、言ってしまった事の愚かさを思い知る。

誰もが目を真ん丸くさせてシーダを見ていた。

彼女は目からいっぱい涙を流して、口を真一門に結んで泣いていた。

声を出さなかったからなかなか気が付かなかったが、彼女はぼろぼろ涙をこぼしていた。

リオは青ざめた。

一番やってはいけないことをしてしまったのかもしれない。

シャルロ、スノー、フレイも、この二人の間で固まったまま、シーダの泣き顔に言葉も出ないまま立ち尽くす。そして、チラツとリオの様子を伺ったりしている。

でも誰も動けない。何も言えない、どうしたらいいか分からない。

そんな、三つ巴みたいな状況の中、シーダは手に持つモチーフ用の布を胸にぎゅっと抱きしめ、新聞を目の前に投げつけて走って去って行った。

伺える横顔は涙にぬれ、ずっと長い間見てこなかったくらい、激しく胸を痛めているように見える。

その表情を見たとき、リオもまた胸の奥がズキンと苦しくなった。彼女のある顔が見たかったのだろうか、自分は。

「……ま、ご愁傷様」

一時の沈黙の後、フレイがリオの肩に手を置いた。確実に憐れみを表して。

「大人げねえことするなよリオ……。知ってたか？シーダだってお前と同じように、不安だったんだと思うぜ……」

「……………」

ああ。

リオは頭から、シーダの泣き顔が離れない。

彼女を酷く傷つけた。

やってしまった。

d
r
a
w

や
っ
て
し
ま
っ
た
。

*番外編くルネ美ランキング 下く

どんなに余裕を装ったって

きつと私たちが不釣り合いなのは変わらない

愕然としていたりオがすぐさま立ち上がり、シーダを追いかけて行ったのはその後だった。

その場に残されたフレイ、シャルロ、スノーは一時の沈黙のあと、お互いに顔を見合わせる。

「……つびびったあ。シーダが泣くところなんていつぶりに見ただろ」

「……ほんと、いつぶりかしら」

そもそも、そんなに泣くことなんて無かった気もするが、いつも一

緒にしながら誰かの泣いているところを見ると焦ってしまっただけである。

ふいにスノーが口を開いた。

「……………シーダの両親が、戦場の武装組織に捕まったとき……………」
彼は淡々とした口調だったが、そこにいる誰もがぴんと来る、はっとするようなことだった。それは二年前の、シーダとリオが付き合う前の出来事だった。

いつも元気でおせっかいで、笑顔の絶えなかった彼女の、その明るさを奪った事件。

医者であり、戦地でボランティアとして活動していたシーダの両親が、その国の武装組織に捕らえられた。その事件は世界中でニュースとなり、誰もが息を呑んで見守った。

この時代、荒れた戦場で捕らえられた者が、必ずしも生きて戻ってくる保障なんて無かった。殺された者もたくさんいたから。

フレイとシーダは視線を落とした。

「……………そうだった」

そうだった。あの時彼女が泣いていたのをはじめて見て、そしてそれ以降見なかった。

今回のことが、よっぽどショックだったのだろうか。

「…馬鹿だなあ。どう見たってリオの嘘って分かるのに」

「多分シーダにも分かってたわよ。それでも、リオの口から出た言葉だっと思うとショックだったんだわ」

あの二人の関係は、浅い恋愛を繰り返しそうになる学生の中でも、本物だと思える。それだけのきっかけと下積み時代があったし、お互いを大切にしているのが手に取るように分かる。

「あれだよね……。リオって、完璧とか言われてるけど、一番人間味があるよね。上下が激しいって言うか……」

「……自身が一番をれを分かってるぜ……。そして後悔するんだよな、青春じゃねーか。シーダは……。そういうところをちゃんと受け入れてるんだろっけどさ……」

誰かを一直線に好きでいられるのは凄い。

シャルロは視線を斜めに流すフレイをまじまじと見て、鼻で笑う。

「……あんだっかっていつまでもふらふらしてないで、早く良い一人を見つけないさい。そして、今度こそ出遅れないようにするのね……」

その言葉に、スノーはプツとふき出す。フレイは「はあ？」と円を描くように振り返ったが、その眉間のしわが少しそわそわしい。

そう、誰だって、心の奥にある感情に結末をつけることができるのは、

タイミングを知っていた者だけ。

シーダは分かっていた。

リオが嘘を言っている事。それはすぐにお見通しだった。

何であんなに悲しくなったんだろう。泣いてしまったんだろう。きっと、自分が今まで抱いてきた、自信の無さが突き刺さったのだ。刃物みたいに、心に。

だって、私はリオのことを一番理解している。それは自信があるし、リオに大切に思われている。それも自信がある。

何に自信が無かったのか。それは自分自身だ。

リオの輝き、あのステファニーの輝き。あのようなものは自分には無く、もしかしたらリオの横に立っていること事態間違いなのではないだろうか。そう思ってしまう。

もちろん、恋人同士に答えなんて無いとは思っているが、一度意識してしまったことで、すっかり自分に自信がなくなってしまった。

あの、ランキングの発表があった日、リオとステファニーが並んでいたとき、思い知らされたのだ。

人間の輝きについて。

人々がこぞって、ルネ・ヴィルトンで最も輝いていると言っただけあって、それは確かにシーダにも見えた。みなに認められ、ひきつけられる一種の“オーラ”のような魅力。

ただ、見た目が麗しい人なら沢山いる。
そうでは無く、体中からあふれる魅力のようなもの。

そう。

ただたんに悔しかったのだ。

それだけだ。

ただの嫉妬だ。

シーダは走って走って、絵画科の女子寮の裏手に隠れた。リオならきつと追いかけてくるから、だから隠れた。今は一人になりたい。

レンガ造りの壁に背をつけ、一度涙をぬぐう。手に持つ白い布を顔に押し当て、声が漏れないように。
ゆっくりしゃがみこんで、一人で、ただひとつの単純な悲しみに浸っていた。

すぐにリオはやってきた。

「……シーダ！！シーダごめん……！！！」

「……………」

「……っごめん……っごめん……！！！」

彼はしゃがみこんだ彼女に合わせて、その乾いた芝生に膝をつく。シーダは声を押し殺し、それでも上下に震える肩を抱えるように、白い布で顔を隠していた。

リオは焦っていたのと、彼女をこのように悲しませてしまった罪悪感と、自身の胸の痛みを堪えて、彼女と向き合っている。シーダの顔が見たくて、それでも白い布を無理やり引き離すこともできない。中途半端に二の腕らへんにそっと触れて、何度も謝っている。

「……………ごめん……………シーダ、さっき言ったのはまったくの嘘だ。嘘なんだ……………」

「……………」

「……………ごめん……………。僕は馬鹿だ、大馬鹿だ。君を試そうとしたんだ、愚かなことに。自分だけのために……………自己中心的なんだ、僕は……………」

リオは、何度も何度も言葉に詰まらせ、何度も言葉を考えて、今の気持ちを伝える一番有効なワードを探していた。でも、そんなものは無かった。

「……………何が完璧だ……………何が一番輝いている、だ。そんなもの何の意味も無いのに……………こんなとき、一番大切なことさえ見えてこない。」

……………どう言えばいいのかさえ、分からないのに……………」

知っている。

シーダならこんなとき、人を包み込むような言葉と態度を知っている。

自分はそんな彼女に、何度となく救われ、癒され、そしてすがって

きた。

なのに、今自分は彼女を悲しませ、しかもそこからどうにもできない。結局自分だけが彼女に依存していて、彼女を癒す存在になれない。

情けない。

本当に情けない。くだらない。

所詮僕はこの程度なのだ。あのようなランキングでは分からないだろうけれど、これが僕なんだ。

「……………知ってるわ……………」

急に彼女が言葉を発した。

いつの間にか、震える肩は少しおとなしくなっていて、彼女は白い布越しに、くぐもった声を伝える。

リオははっとして、息を呑んだ。

「……………あなたが本気で言っていないことくらい、分かっていたわ。……………それでも悲しくなったのよ。多分、ずっと恐れていた言葉だった……………」

あなたは、ステファニーが“輝いてる”と言った。

当然その通りなのだが、リオの言葉ではっきりと言われると、とても辛かった。やはり、どうしたってリオとステファニーはお似合いに見えるし、輝いている人に魅力を感じてしまうものだから。

「……………酷いわ……………リオ……………。どうせ私にはあの子の様な魅力は無いわ……………」

「……………シーダ……………」

リオは何度も首を振った。

自分が適当に並べた言葉が、彼女にとってとても突き刺さる言葉だったのだ。

輝き、魅力……………そんなもの、自分にとってまるで意味の無いものでも、彼女はそこに大きな不安を抱えていた。

「……………何言ってるんだ……………僕にとって、そんなランキングなんかで騒がれる魅力より、よっぽど君のほうが輝いているように見える。」

……………僕は君を尊敬しているし、君に劣等感を感じる……………。君は僕をずっと信じてくれていたのに、僕は疑うことしかできなかつたんだ……………」

リオは、今まで彼女が自分を疑わずにいてくれたことの貴重さを思い知る。それが、どれほど自分を思ってくれたことなのか。

そして、自分はやはり彼女以外を愛することはできないと知っていたのに、他の人の名前を出してしまった。彼女が許しても、自分が許せない。本当に、どうしようもない男だ。

シーダは黙っていた。

少しだけ肩の力が抜けたように思えたから、リオは思い切って、顔をうずめる白い布を取り上げた。

彼女は少し驚いたように目を真ん丸くしていたが、リオの顔を見ると、再び涙をいっばいにためた。

涙と汗にぬれた横の髪が、顔にくっついていてる。

「……違うの……私がもつとりオにふさわしくならないといけないの……あなたの優しさの甘えていつまでもこんなだから……。ごめんなさい……もっと、魅力のある人になるよう頑張るから……」

「何でそんなこと言うんだよ。君はもう十分に魅力的過ぎるんだ。頼むから、これ以上僕を引き離さないでくれ……」

リオは、彼女にそんなことを言わせてしまった自分が情けなくて、必死になって彼女を抱きしめた。

こんなに、今のそのままの彼女が好きなのに、それが伝わっていなかったというのか。

シーダはまだひくひく泣いていたが、熱い彼の背中のシャツを強く握り締め、彼の肩に顔をうずめる。

「知っていて？私あなたをとつても愛しているのよ。本当よ。あなたがいなくなったら私はきつともう誰も愛せないと思うわ。あなたが他の人を好きになったら、きつと私、生きていけないわ。そんな自己満足な愛を、あなたに押し付けたくなかったの。でももう、我慢できないわ」

「……シーダ……」

いままで、自分よりはるか高みから見守っているように感じていたシーダが、今はかりは自分の腕の中で小さく泣いている。強い人だと思っていたのに、弱く見える。そしてそれを、いとおいしいと思える。

リオは、なんだか目が覚めたような気持ちだった。

「知っているかい、シード。僕はぜんぜん不完全の、わがままで器の小さな男だ。だけど君をちゃんと愛している。君がもし僕に愛想をつかして逃げたくなっても、多分僕は君を手放さない。なぜなら僕には君しか愛せないからだ。愛する人のいない人生を送るつもりはないし、耐えられない。昔の僕なら、一人でも生きていけると粹がってもいたけれど、今じゃ到底そうは思えない。知っていたかい……人は一人では生きていけないと、僕に教えてくれたのも君なんだ……」

こんな初夏の暑い日差しの中、動かない彼らは熱に後押しされたように情熱的である。

しかし、お互い信じていたと思っていたのに、それが逆に裏目に出て分かり合えていない事もある。だからこそ人間愛は面白い。

リオは抱きしめている彼女をやさしく引き離すと、顔に引っ付いている髪を払ってあげ、ちゃんと確かめるようにキスをする。今までだって、何度となく何事もなく、愛を確かめてきたつもりだったけれど、今回は一種の誓いだと思える。

些細なことがきっかけだったのに、このように深く愛していると信じられる僕らなら、やはりこの恋は本物であると。

大切にしていけると。

「なんだよ、結局ただの“褒めちぎり合い”じゃねーか。くだんねーの」

「素直にうらやましいって言えば」

「……………」

どこかの茂みから、二人を覗く三人組が、今しがたの瞬間をデジカメで捉えていた。基本的に美術学生ならデジカメ、一眼レフカメラなど常備しているものである。

フレイは「くだらねー」とか言いながら、なんどもシャッターを切る。

あとでからかうネタにするのだ。

「……………盗撮……………」

「言っとくけど、おめーも共犯者だからな、スノー」

なんだかんだ言っても、あの二人には仲良くあってほしいのが本音である。

心配で追いかけてきたのだが、どうやら出る幕は無いらしい。

二人の邪魔にならないように、呆れたり安心したりしながら、その場を立ち去るのだ。

もう一人、茂みからリオとシーダの様子を見て、カメラを構えていた人物がいた。しかし、彼は写真を撮るのをためらい、いよいよ自重する。

少し、自分の考えていたあの二人の関係を考え直す。

所詮学生同士の気軽で身軽な、浅はかな恋愛だと思っていた。しかし、どうにもこの二人には自分の計り知れない繋がりがあり、誰かがそれを乱すことなど許されず、そもそも無理なのかもしれない、と。

悪いことをしたなと思いつつ、次のランキングには、“ベストカットプルランキング”でも企画してみようかなと、すでに新しいネタを考えている。

その前に、いったいどうやって今朝の記事を話題から濁そうか。

いまここが、自分のジャーナリストとしての意地の見せ所だぞ。

デイビットはそんなことを慌ただしく考えながら、空を仰いだ。

I d r a w

*番外編〜フレイのお使い 上〜

俺は女をモチーフとして見ることしかできない。

その体、顔、ある種の緊張した空気を描くため、最大限に愛でて一番美しい部分を探す。

フレイは自分の持っている才能がどういうものか理解している。シヤルロやスノーというような天才型とは違い、またリオやシーダのような努力型とも違う。

絵画を愛しているが、常日頃描いていたというタイプでもない。描きたいときに、描きたいものを描く。正直真面目では無いだろう。

しかし、彼の描く“女性”は艶めかしく美しく、危うい官能的な要

素を含んでいる。そこが評価され、彼もまた若手画家として注目されている。

「…あなたは女を愛せないタイプね」

五年生のエリザベータ・ワグナーは、裸で仰向けになったまま、長い髪を無造作にかきあげる。

フレイのアトリエの、白いベットの上。

その少し離れた所から、フレイはイーゼルを立て、彼女をデッサンしている。エリザベータはフレイのモデルの常連であった。

「…俺は女を愛しているよ」

「それは女じゃなくて、モチーフとしての女よ。女の体のラインや肉感、構造…そういうのが好きなのよ。あなたはたったひとりの女を愛する事なんて出来ない。女を抱くのも結局、一番美しい姿を見極めるためでしょう？…でも、あなたはそれで良いのよ…誰も愛さなくて…」

「……………」

フレイは黒いタイトなTシャツに、ジーンズというラフな格好で、襟足の長い髪をちゃんと結んでいた。エリザベータの言葉に反論はしなかった。

イーゼル越しに彼女を垣間見る。

「……俺のためにいつも美しい体を保ってくれるお前の事は、良い女だと思っているよ……」

「光荣だわ」

エリザベータは口の端を上げて、意味深に微笑んだ。フレイは木炭デッサンと彼女を見比べたりして、手慣れた様子の、彼女のモデルっぷりに多少顔をしかめる。

「モデルに慣れるのも考えようだなエリザ。昔のお前はもう少し恥じらいがあつて、それはそれで良い対象だったんだぜ」

「……………」

フレイは一つ年上の彼女の側に近寄り、ベットの端に座った。タバコをくわえ、ライターで火を付ける。エリザベータは無言であったが、白い波打つ布の上を這って、フレイに近づくと、彼のくわえるタバコをひよいと奪った。

唇を一度舐め、そのまま彼にキスをする。しかしフレイはまるで動じない。

生々しい音以外はいたって静寂である。

「……あんたがもつと、私を良いモデルにしてくれるでしょう？」

乱れたワンレンの金髪を耳にかけるエリザベータ。フレイの瞳は覚めた灰色であったが、それは女を見ると言うよりは、向き合うモチーフをまじまじと見ているようであった。

そしてそのまま彼らは、白い布の波の中に身を委ね、泡のように昇ったり弾けたりしながら。

手でモチーフの距離感や手触り、重さ、質感を確かめるように、フレイは全身の感覚で、彼女の本質を知ろうとするのだ。フレイにとつて女とはそのような対象で、彼がモチーフとして見初めた女性は、何もエリザベータだけではない。

気づけば夕方であった。とっくにエリザベータは居なくなっている。昼間の熱を閉じこめたアトリエは、思考を停止しかねないほど温い。

「っあゝ…あの後寝ちまったんだな、頭痛え…。シエスタってか…」

彼は汗だくの半裸のまま、背伸びをする。さて、自室に戻ってシャワーを浴びようか、どうしようかと考えながら、放置された椅子の背もたれに、無造作にかけられた制服を手取る。学期間、校内はあくまで制服でいなければいけないので、面倒でも身につける。

いつもと変わらない学校の様子。自らインスピレーションを高める何かをしたり、どこかへ赴くかしないかぎり、平凡な毎日である。

男子寮へ帰ろうと思って、絵画科棟のロビーから渡り廊下へ差し掛かったときだ。慌ただしくフレイを呼び止めた人がいた。

「ルネ・エメラルド！」

「……メルベリー先輩……」

なにやら急いでいる様子のメルベリーが、彼の前まで駆け足でやってくると、一枚の紙を渡す。

「ごきげんよう。もうすぐ次の研修が始まります。四・五年生は中国となります。説明会がありますので詳しくはそのプリントを読んでおいて下さい」

早口の彼女は、なんとも事務的な差し障りの無い、必要な事だけを並べるに止まる。よほど急いでいるようだ。

フレイは、そうそうお話しする事のできないメルベリー嬢との、せっかくの機会なのだからと気を利かせる。

「何か忙しそうっすね。俺にできることあれば、あなたのために何だってしますよ」

にこやかに、あくまで親切そうに。

メルベリーは「まあ」と瞳を大きくさせ、何だか嬉しそうに。

「そう言って頂けるなんてありがたいわ、ルネ・エメラルド。本当に困っていた所でしたから。よかったら、このプリントをヴィライアー全員に渡しといてほしいのだけれど……。もちろん、リュオンとティアンは結構ですけれど」

流石に、これにはフレイも「…え」と、クソ面倒くさそうだと思っただけだが、一度格好つけて言ってしまったのだから今更引けない。

メルベリー嬢の願いを断ったらばちが当たるに決まってる。

「…わ…分かりました…」

フレイは、彼女の持つプリントの束を受け取った。丁寧にお礼を言った後、彼女は急ぐ様子でどこかへ行ってしまった。

「……………さて……………」

少し後悔していた。こんな面倒なこと、俺のやることじゃないぞ、と。メルベリー嬢に良い顔してきたかったからだが、どのみちあの手の女性と自分は一生縁が無いだろうから、放っておけば良かったものを。

頭の後ろに手を回し、まいったなあと反省する。しかしまあ、自分

の招いた仕事だから、文句も言ってもらえないか。

とりあえず、男子寮の奴らは夜にだって会えるから、今しか接触できない女子をターゲットにするか。そのついでに男子ヴァイパーに渡せたら儲けものだ。

「二年生ヴァイパーって、こんな所でやってたんだ〜へえ〜」

「フレイ先輩!？」

当然、実技444号室に現れた先輩に、驚かなかつた二年生はいない。みな立ち上がって、挨拶をする。素直に、うわ〜できた後輩!と思う。

この中で、直接関わりを持ったことがあるのはキクマサだけだ。

「珍しいですね、フレイ先輩がこんなところにいらっしやるなんて…」

「…ちよいと仕事を任されてね」

フレイは二年生が全員その場にいるのを、しめた!と思って、

「次の研修の説明会があるってよ」

順番にプリントを回す。当然二年生は、なぜにフレイ先輩が?と思う訳だ。

「今、何で俺が?って思っただろ」

「えっ…あ、はい…」

素直な後輩たちである。きよとんとした目でプリントとフレイを見比べたりしている。

そんなときだ。

この実技室に、予期せぬ人物が訪れた。

「あ、フレイだ。え、何があってここに?」

澁刺とした口調と、相変わらず爽やかな笑顔。やあやあと手を上げ割り込んで来たのは、おなじみの人だった。

「あ〜レッド先輩。ちわ〜」

緩い挨拶のフレイである。二人の様子を見る限り、それなりに交流があるように思える。

「先輩〜 この前言ってた例のブツ、手に入ったんで今度集まりま

しょうよ」

「でかしたフレイ君。再び“闇の視聴会”が開かれるのだね」

会話の内容はさっぱりであったが、なにやら二年生そっこのけで、お楽しみを計画中である。「夏休みのはじめにでも」と言うことで話は収まった。

「ところで、何だっつてフレイが二年生に絡んでるんだい？」

「…おっと…こんなところでぐずってる場合じゃなかった。もうすぐ夕飯の時間になっちまう…」

フレイは窓の外の夕焼け具合を確かめて、急に慌て始めた。

「レッド先輩、今日中にナギ先輩と会います？」

「そりゃ…もうすぐディナーだし、今夜は闇鍋しようかって言うってたから…」

「それはそれは！」

オーバーな反応を見せるフレイはレッドに、二枚のプリントを渡した。

「メルベリー嬢から頼まれたプリント、一枚はナギ先輩に渡しといて下さい！俺、今日中にヴィライアー全員分配らなきゃいけないんで！」

レッドは「いいとも」と、ウインクしたが、フレイはそれを見てい

なかった。とりあえず焦っている。
キクマサは空気を読んでみた。

「あの…俺たち多分一年生に会うんで、渡しておきましょうか？」

「…マジでか少年」

ここにきて、予期せぬ助け舟。一年生の生息地さえ分からないフレイトにとっては、ありがたい申し出である。

キクマサが頷く前にすでに二人分のプリントを差し出していた。このようにして、一年生、二年生、そして五年生は片付いたのである。

「…四年生は後回しにして問題ないけど…山場は三年生か…」
柄にもなく下っ端のように学校中を駆け回っているフレイトは、最後の壁にぶち当たっていた。

三年生は、カイ・ヴオストンと、ジェイル・クオーシャンである。
二人とも、この学校であまり見かけないし、カイに至っては学校に
来ているかも分からない。

しかも、ジェイルは男嫌いだ。

「…ルネ・サファイアには嫌われてるからなあ…俺って」

自分で呟いて、自分で吹き出した。

エジプト研修でのことが思い出される。フレイとジェイルの二人は噛み合わない割に、お互いよく協力して頑張ったなあという印象である。フレイにとっては割りと面白い経験であった。

しかし、あれで完璧に嫌われたのと、あれ以来全く絡んでいないのも事実である。

「……………さて……………」

彼は、もう大分弱々しくなったプリントの束をくるくるまとめて、ポンと手のひらに打った。

こみ上げる笑いはどこから来るのだろう。

少し浮かれている自分がいる。
何かを楽しみにしている。

- d r a w

なんだろう。

*番外編くフレイのお使い 下く

死ぬほど男が嫌いな女

女を愛することが出来ない男

ジェイル・クオーシャンと言えば、男嫌いで有名なヴィライアーの一人である。可愛らしい顔をしているのに、常にきりつとした表情を崩さず、周りにはバリアを張っているようで、他人は近づきがたい。特に男子は半径1m以上近づくと出来ないらしい。

強気な口調と裏腹に、持ち物は女の子らしい物が多く、可愛らしいのが好きだったりする。

今日のカチューシャは白いレースのリボンが飾りの、最近手に入れたばかりのお気に入りであった。彼女は食堂へ続く渡り廊下の壁に掛かっている、大きな姿見の鏡の前で、そのカチューシャのリボンがヨレツとなっていることに気がつき、そそくさと直す。割とシンプルなデザインだが、派手すぎず地味すぎず、ジェイルの気を引くには十分な魅力のあるカチューシャである。

彼女はそんな、お気に入りのカチューシャに夢中で気がつかなかったのだ。

背後に迫り来る脅威に。

「ルネ・サファイアっみーつけたっ！」

ポン

両肩に手を置かれ、ジエイルはあからさまにびくつと飛び上がった。鏡に映る、自分の後ろにいる人物を、恐る恐る確かめ、そして一時の沈黙。

「……………」

「……………ははっ」

フレイの胡散臭い笑顔は、ジエイルにとって悪魔の微笑でしかない。彼もまた、それを理解していたからこそ、あえてこのようにした。

「きゃあああああ！！！！いやああああ！！！！」

突然の、耳をつんざく様な悲鳴を合図に、彼らの第1グラウンドスタートである。

ジエイルは肩を掴むフレイの手を、まるで蚊をしとめる様にバシィツと叩き払って、振り返ると彼を見もしないでみぞおちにグーパンチ。必死なのか、きゃーきゃー叫びながら、そのまま風のように走

り去っていった。

フレイは、彼女の猛反撃に動けず、膝をついた。

「……連打は無いだろ、連打は……」

しかしながら、どうにも楽しい気がする。果たして自分は、嫌がる彼女を見て楽しんでいるドSなのか、自分を否定されることを楽しんでいるドMなのか分からないが、何しろ新感覚である。

フレイの持っていたプリントは、彼女に渡ることは無かった。

「あんたって本当にしょうもない変態よね」

夕食の時間だった。四年生はフレイを待たずして、食堂に集まっている。後からフレイがやってきた、という感じである。

今までのいきさつをグチのように語って、四年生のメンツにプリントを配る。ジェイルに殴られた事を話せば、シャルロに変態ねえと白けられ、その通りだなと自分でも思う。

「でもあれだね、君がそんなパシリみたいなことやってるなんて笑

えるね」

「はあ？ やってらんねーよ、全く」

クスクス笑うリオの隣で、フレイは腰を落ち着かせ、大きなパンを取る。

「なあ、もういっそ、お前たち女子がルネ・サファイアに渡してくれよ」

「ダメよ！ あんたの仕事なんだから、あんたがしっかりジェルに渡しなさい！」

「そんな〜 シーダお母さん」

わざと泣き言のように言うフレイを、シーダは決して甘えさせなかった。少々面倒くさくなっていたフレイは、思うようにいかない事態に肩を落とす。

「ジェルって、夕食の後は大抵温室に居るわよ」

しかし、シーダは彼に恩恵も忘れない。ヒントを与え、彼が仕事をしやすいようにしてあげる。

フレイはパンを全部食べてしまって、急いで立ち上がる。

「流石お母さん！」

と言い残し、もうくしゃくしゃの紙をむんずと掴んで、温室へ向かって一直線である。

「……なんか、フレイのキャラじゃないね、今回」

「あらすノー、あの様に走り回るフレイもたまには良いじゃない？
いつもグダグダし過ぎなのよ」

フレイの背中が、食堂の人々の中に紛れるまで、彼らは目を丸くしていた。

「私ね、ジェイルとフレイって正反対のようで、少し似ている気がするの」

「それは…興味深い話だね」

リオは、ナイフとフォークを動かすのを止める。

「…言葉ではとても言い表せないけれど…」

その先を濁したシードは、密かにクスツと笑みをこぼす。

「フレイもジェイルも、そろそろお互いの価値観を壊してくれる存在
が必要な気がする。」

「殻を壊してくれるくらいの、衝撃を求めている気がする。」

託されたプリントは、残り二枚である。

いよいよ面倒になっていた彼は、そのプリントを丸めたり開いたり、手遊びをしながら温室へと向かっていた。

この学校にはいくつか大きな温室施設がある。

絵画棟の側にも、ガラス張りで、アーチ状の天井の温室植物園があった。生徒たちは、ここで絵の素材を見つけたり、写生したりするのだ。

夕食後の時間帯に、この場所へ来る者は少なかった。

正直、フレイはあまりここに来ることは無いが、ここがどのような場所かは知っている。

一歩入っただけで、まるで別の世界に来たようになる。温室植物園というだけあって暑いが、ひらりと目の前を飛び交う南国の蝶も本物で、花と土の香りを連れてくる。

造り物ではあったが、滝や池もあり、魚もちゃんと泳いでいるような立派な植物園であった。

誰も居ないのに、生命の気配はそこから感じる。

フレイは道に沿って歩いた。どこかにルネ・サファイアが居るのだろうか。期待感は半々である。

ジェイルは、池の周りを囲んである、木の柵にもたれて、憂鬱そうにしていた。

彼女の周りを飛び交う蝶は、肩にとまったり、カチューシャの飾りに擬したりしている。

彼女は少し反省しようとしていたのである。

先ほど、フレイを殴ってしまった。確かにあの男は苦手で嫌いだが、問答無用で殴ったのは良くなかった。

一応エジプト研修の時、助けてもらった事だっであつた。いまでもそれは、鮮明に覚えている。

次会ったら、話くらい聞かなければ。

そう、まさにそのように考えていた時だった。

「あー！発見！！ 次は逃がさねーからな！！」

温室の静寂をぶったぎる様な、第二グラウンドスタートを告げる威

勢の良い声。

ジェイルが振り返ったときには、既にフレイが背後に迫っていた。フレイは、ジェイルが逃げないように、彼女の後ろの柵に両手をかける。彼女を囲んでしまったのである。

「先ほどはど〜も、ルネ・サファイア」

フレイはニヤリと、勝ち誇ったように笑う。ジェイルは見分けるくらい青ざめていった。

「き、きゃああー!!」

「おっと！叫ぶなよ子猫ちゃん」

そんな軽いノリで、彼女の口を手のひらで覆ったが、何だか危ない男のようだと自分でも気がつく。とりあえず腹筋に力を入れておく。

案の定、ジェイルは先ほどのように、彼に決死の覚悟でパンチを繰り出す。しかし、それを予期していたフレイには効かない。

「はい残念。さっきは不意打ちでまともにくらったけど、今回は予期してたから全然大丈夫でした」

「!?!?」

これにはジェイルも驚きである。フレイは、急いでプリントを彼女の前にかざす。

「俺はお前にヴィライアーとして、プリントを配りに来たただけだ。」

分かったか！ 逃げないならこの手を離してやる」

「……………」

プリントとフレイの顔を、疑わしげに見比べたりして、ジェルはやっと、コクンと頷いた。

「…よし、いい子だ…」

まるで懐かない子猫をあやすような口調で、彼はそつと手を離れた。ジェルはプリントを受け取り、すぐにそっぽをむく。

「そんな用事なら、さっさと言えば良かったんだ」

「何も聞かずに、人の腹殴って逃げた奴の言うことじゃねーな。男ってだけでそんな態度なら感心しねーな」

「……………」

彼女は思いの外に、気まずそうな顔をしている。「男なんてこの世界から消えて無くなればいい」くらい言ってるのけるかと思ったのに。

「……………さっきのことは……………すまなかったと思っている……………」

「……………え……………」

意外にも謝り始めたジェルに、むしろ焦ったのはフレイであった。彼女の表情は、少し弱々しい。

「ダメなんだ…男というだけで拒否してしまう……………」

自らの腕を抱え込むようにして、彼女はまるで、自分を守っているようであった。フレイは彼女から一步下がって、頭をかく。

「……まさかお前から、謝罪が聞けるとは思ってたよ」

「私だって、罪悪感くらいある」

「……」

気まずい空気の中、滝の音だけは途切れぬ。音もなく飛ぶ蝶が、我々に群がるのは何でだろう。

「……何でそんなに男が嫌いなんだ。前にも聞いた気がするけどな」

「……」

「……言えないのなら、別に無理に聞いたりしないけどな……」

フレイにはまるで分からなかった。想像はいくらでも出来るが、どれも結局想像でしかない。彼女には、ここまで男を嫌いになるだけの理由が、ちゃんとある気がする。

「……きっと、お前には想像のつかない理由だ」

ジエイルは、フレイを見ないまま、それでも後からちゃんと答えた。決して内容は、理解できなかったけれど。

「……ふーん……」

瞳を細め、今のフレイにはその様に反応するしかない。淡白な、それでいて興味深さを匂わすような。

何だか、今まであまり出会ったタイプではない子だ。強がっているくせに、どこか弱々しい。

しかしちゃんと、自分の非を認められる。それは凜とした強さである。

フレイは手を伸ばし、飛び交う蝶の群の中で、指を差し出した。すると、一匹の蝶がその指先にとまったのだ。

「おっ…さっきパンに塗った蜂蜜バターに気がついたな、こいつめ

「……………」

何やってるんだか、といたげな視線のジェイルをよそに、フレイは指先の蝶と戯れている。

そして横目に、ジェイルに話しかけた。

「ま、男も女も所詮おんなじ人間だよ。良い奴もいれば悪い奴もいる。俺だっっていけないお姉さんに何度騙されたことか…」

「……………」

「でもま、美術系が偏った考え方じゃいけねえよな。お前ならきっと、男とか女とかじゃなくて、ちゃんと“相手”と向き合えると思うけどな……………」

俺が言うなよと思いながら、彼は指先の蝶に、軽くキスをする。その光景はキザっぽかったが、美しくも見えたのだ。

そのまま背を向け、彼は一度手を振る。その勢いで、蝶はひらりと彼の指先から離れた。

「おやすみ、ルネ・サファイア」

ガラス張りの温室の外は、きつと暗い。

星と月の見ている下に、私たちはきつといる。

立ち去るフレイをただ見つめながら、「おやすみ」という言葉に夜空を見いだす。

ジェイルは何も答えられなかった。彼女は視線を心なしか落とす。

そんなとき、一羽の蝶が、そっと彼女に口付けた。さっきの蝶だ。

「……!？」

色とりどり、沢山のビー玉が、一気に床にこぼれ落ちたような衝動。

目の前が開けるような感覚。

はっと目を上げたとき、すでに目の前には誰もいない。

それは一種の予感かもしれない。

あの女は思っている以上に興味深いかもしれない。

あの男は思うほど悪い奴ではないかもしれない。

そう思えるまでの、きらめいた夏を隠すことは出来ない。

I
d
r
a
w

*番外編〜フレイの使い方 下〜(後書き)

```
> i 3 4 2 7 2 < r u b y > < r b > 1 3 6 5 ^  
< / r b > < r p > ) < / r p > < r t > フレイとジヘイル < / r  
t > < r p > ( < / r p > < / r u b y >  
>
```

みてみんなの【B×B】企画で描いたものです。

*番外編く強い男！く

もっと強い男になりたい

決して、家の力だけで自分を判断されないように

> i 9 9 3 1 | 8 8 6 <

(黒檀様作：一年生組です。左クレハ、右ヘル)

「てめえ、八百長してんじゃねえよ」

「……………」

誰も来ないような、空き教室に呼び出されたヘルは、自分より遙かに大きな体の同級生に胸ぐらを掴まれた。彼の側には狐目のお供も居る。彼は、学年で一番のいじめっ子であり、一番威張っているジヤイアンである。

彼がヘルの胸ぐらを掴んで持ち上げるのは、簡単な事である。ヘルはぶらーんと地に足着かない状態で、言葉もでないくらい怯えていた。

「どうせ、お前がルネ・ヴィライアーになれたのだから、ラヴィー二家の力だろう！ じゃなきゃ、お前みたいなへっぽこ野郎が一年生からルネ・ヴィライアーになれるのなんて、おかしいもんな」

「ですよーですよーマックス君」

金魚の糞みたいに、彼に賛同している、セコそうな小柄の男の子が、側で飛び跳ねている。

マックス・グリスビーというのが、この大きないじめっ子の名前である。

「……………ち……………違つよ……………」

「ああん？ てめえ、俺様にいちやもん付ける気か？」

か細い震える声で、何とか反論しようとしたヘルであるが、マックスの恐い顔に睨まれ、再び口を紡ぐ。

マックスと言う男は、ジャンクフードを食べ過ぎたような体をして

いる癖に、これでも一応実力者である。彼だってヴィライアーを指してここへ入学して来たのだから、一年生から軽々ヴィライアーとなったヘルが気に入らないのだ。

そんな時だった。

「ああああああ!! いじめいけないんだぞおお!!!!」

パン!と軽快に扉が開かれ、赤毛の少年がそのままマックスに飛び蹴りを決め込んだ。

彼はヘルとルームメイトであるクレハ・ドルフォードである。

「げふうっ!!」

「マ、マックスくん!!」

ひよろつとしたお供たちは、青ざめたまま彼に駆け寄る。

クレハは仁王立ちで、倒れ込んだ彼を見おろしていた。

ヘルは、クレハの飛び蹴りの振動でついでに吹っ飛ばされ、マックス以上に遠くまで行ってしまっただウンしている。

しかし、クレハは得意げであった。

「おめえMAX!! いい加減ヘルをいじめるのやめろよな!!」

「……出たな……野生児やろう……」

流石にマックスは、すぐに立ち上がった。蹴飛ばされた横っ腹を抑えながら、半ば無理矢理強気な笑顔である。

「どうせお前も八百長だろ！！ 実力も無いくせに家の金で理事会を買ったんだろ！！」

「……は？ 八百屋？ お前何言ってるんだ？」

しかし、頭の弱いクレハには、難しい言葉は分からない。マックスは拳を握りしめ、もどかしい気持ちをそれに込め、彼に殴りかかった。

大振りのパンチなんて、クレハには効かない。身軽な彼はヒョイと避けると、そのままマックスの背後に回り込んだ。

「奥義！！ かんちよーMAX！！ いざー！！！！」

鈍い、痛々しい効果音が聞こえてきそうである。

クレハは邪道な技を用いて、彼に痛恨の一撃を食らわせたのだ。

「ぎゃあああ！！」

一メートルは飛び上がらんとする、巨漢のマックスは、そのまま教室を飛び出していった。

ヒョロ男はそんな彼に、必死になってついていく。

「どんなもんだい！と言いたげな、クレハのどや顔をよそに、ヘルは相変わらず白目をむいてぶっ倒れていた。

せつかく、いじめっ子を追い払ったと言っのに。

「ヘルうつう！！ 誰がこんな酷い事を！！」

それにやっと思ついたクレハは、彼に駆け寄つて抱え起こす。ぐったりしたヘルをゆさゆさ揺さぶつて、「死ぬなあああ」と叫んでいる。

悪夢にうなされているヘルの顔は、髪の毛と同じくらい白かった。さらに向こうまで吹っ飛ばされている黒いベレー帽が、妙に寂しい。

ヘルにとって、自分の家柄は重荷でしかなかった。ラヴィーニ家といえば、イタリアのフィレンツェにある昔から力を持っていた名家であり、芸術家のパトロンとしても、歴史ある家柄である。

代々、跡継ぎとなる者はルネ・ヴィルトンに入学しており、その中でルネ・ヴィライアーとなつた者は数えきれない。確かにラヴィーニ家はルネ・ヴィルトンを支援している。この学校とは切っても切れない繋がりが、創立時からあると言つても過言ではない。

もつぱら、ルネ・アクアマリンはラヴィーニと皮肉られる。

ヘル自身も、もしかしたら自分の称号は家柄によってもたらされたのかもしれない、そう思ってしまうときもある。

ルネ・ヴィライアーは基本授業料免除であるが、ヘルのようなお金を持った家の者がヴィライアーになった場合、その権利を辞退する事が多い。その分が奨学金として他の者へ回される仕組みだと言う。実際、今のヴィライアーの中にも、そのようにしている者は多いはずだ。

だから、そこを叩かれる事は無いのだが、やはり一年生からヴィライアーになったのは、他の生徒にとって面白くない事だろう。しかも自分はラヴィーニ家である。八百長だと言われても、否定出来ない自分がいる。

クレハと昼食を食べようと思って、学校の外に出た。相変わらずカラッと晴れた熱い日であるのに、クレハは外で食べたいからと、強引にそのようになったのだ。

ヘルはこう見えて、地中海の暑さには慣れているから、日差しの中でも平気である。

この学校の中には、沢山の猫を見かける事が出来る。一匹の黒猫が、じっと彼らの行方を見つめ、そのままレンガの道を横切って逃げた。

大きな木の下に腰を下ろし、買って来たランチボックスを空ける。しかしヘルは、さっきの事も元気が無いようだった。一口ママレードサンドをかじって、それ以降食べようとしなない。

「……打ち所が悪かったのか？」

「……そんなんじゃないよ……」

自分が吹っ飛ばしたくせに、遠慮なく聞いてくるクレハに、ヘルは力無く答えた。

再び、ゆっくりママレードサンドを口に運び、小さくかじる。

しかしまあ、このようにいじけている所も我ながら情けないように感じる。

クレハはほぼ二口で、そのママレードサンドを食べ終わってしまった。次のポテトサンドに手を伸ばしている。クレハだって同じような境遇であるが、このように毎日明るく、元気であると言うのに。自分ときたら。

彼の無神経さ、鈍感さ、馬鹿さ加減が、この時は羨ましいと思う。

「MAXの言ってた事が、そんなに気になるのか？」

「MAXじゃなくて、マックスだからね、クレハ」

冷静な突っ込みの後、ヘルは大きくため息をつく。隣でクレハが、ぼりぼりリンゴをかじっている。

「……………あ……………」

突然、クレハが目の前を指差した。

暑い日差しの中、中央棟から絵画棟までのレンガ造りの道を、団長

がてくてく歩いている。暑いのか、胸元のシャツをハタハタさせて。彼は脇の木の下で、クレハとヘルが昼食を取っているのに、すぐ気がついた。

そして、「おいクレハ！」と、気づくやいなやご立腹モードであった。

彼がこちらにやってくるのを、クレハは何て事無さそうにしていたが、ヘルにいたっては恐怖で真っ青だ。

「おいてめえ！！ この前の中間テスト全部欠点って、何なんだよ！！」
一桁って何なんだよ！！！！」

彼は叫びながらズイズイやってきた。一度額の汗をぬぐって、切れ長のつり目を光らせて。

「……だって全然分からなかったんだもの」

「お前、このままだったら次の研修行けなくなるからな！！」

団長の焦りの表情だったら無い。クレハだって、流石にぎよっとしている。リンゴをかじるポーズのまま。

「さっき先生に言われたんだよ。次の追試で、お前がちゃんと合格しない限り、研修には連れて行けないってさ。どんだけ悪いのかわ見てやろうと思ったら全教科五点以下かよ！！」

「……………」

ヘルは横目にクレハを見た。マジでそんなに究極に馬鹿であったと

は。

「……………明日から、来週の追試に向けて特訓するからな。時間が無いんだぜ、研修は追試明けにあるからな」

「ええええええ、やだああああ!!」

「馬鹿もんが!! お前、そんなこと言える立場じゃねえからな」
ぽかっと、クレハの頭を殴る団長。殴ったついでに、クレハがかじり始めていた板チョコが真ん中から割れた。なんだかんだ言っ、この人も気苦労の絶えない人だなあとと思う。恐いけれど。

「……………そうそうヘル、お前はほとんど良い点数だったな、よくやった」

団長は、今度はヘルに向き直り、真顔のまま彼を褒めた。意外であったため、ヘルは思いの外に照れくさくなる。

ここ最近、こんな単純な事で褒められたのは久しぶりな気がする。

しかし、嬉しさは先ほどの憂鬱に押しつぶされる。

もしかしたらこの人も、自分がラヴィー二家の人間だから、とりあえず褒めているだけかもしれないと思って。

「……………?」

団長は、様子のおかしいヘルに、顔をしかめる。

「……………なんだ、どうしたんだ。そんな幸薄そうな面しやがって……………」

「あのね、団長。さっきヘルが八百屋にお金がどうとかだって、M AXに言われたんだ」

クレハの意味不明な解説から、団長はすぐに理解出来なかったが、ピンときた。

「……なんだ、八百長って言われたのか」

「……………」

「俺たち審査員が、金で買われたとでも思っているのか」

「ち、違います……！！でも……でも、分かりません……………」

ヘルは一度否定したが、すぐに自信が無くなって視線を落とした。団長はふうと息をつくと、何か探るように、ヘルをじっと見ている。

「……実際、俺もルネ・ヴィルトンは怪しいと思っているから、否定は出来ない」

「……………」

「……でも、俺は今年のルネ・コンの絵の中で、お前のが一番好きだったけどな」

「……………」

ヘルがふと顔を上げた時、団長は既に背を向け、立ち去ろうとして

いた。

再び日差しの中へ出た事で、暑そうに、手のひらで影を造りながら。

「……………」

一番凄い、一番巧み、一番才能がある、このような言葉は一切使わず、彼は「一番好き」と言った。

しかし、ヘルにとってこれほど新鮮で、嬉しい言葉は無い。この言葉なら、信じようと思えるから。

なんだろう。今までずっとモヤモヤしていた心が、少しだけすっきりしている。あんなに恐い恐いと思っていた団長が、太陽の日差しの中でたくましく見える。

そして、自分の悩んでいた事に、たとえ答えは出なくとも、あのような人が団長であるならばルネ・ヴィライアーでいたいと思える。

あの人は、もしかしたら自分以上に家柄で苦労した人かもしれない。
なのに、他人を気遣う余裕すらある。

強くて、かっこいい。

d
r
a
w

*番外編く強い男ーく(後書き)

黒檀様にファンアートをいただきました。

本当に可愛らしい一年生コンビです!!ありがとうございます!!

*番外編くテストは戦争だ 上く

考える事が出来ない、絵なんて描けない

芸術なんて出来やしない

クレハは誰もが知ってるアホである。
テストはいつも五点以下で、欠点ばかり。何しろ全てが意味不明な
回答で、たまにある選択問題の数字なんか合っていて数点取れる
と言う始末である。

「いいか、クレハ！！ 一年生最初のテストだからって舐めてかか

つてたる。美術系だから勉強いらねって、舐めてかかってたる！
でもな、義務教養のあるうちはせめて赤点取らないくらいに勉強
頑張つてねえと、この先いざと言う時に生きて行けねえからな。長
く芸術をしていくつて事は、考え続けるつて事だぞ」

団長はクレハを机に座らせて、黒板の前でバンと教卓を叩いた。

クレハはぼかーんとしたものである。頭に花咲かせたこの阿呆に、
どうやって追試まで勉強を教えれば良いか本当に悩む所。

正直団長だつて全ての教科が得意な訳ではない。勉強は苦手な方
ではないが、それが教えるのが得意かと言うと話は別だ。

「いいか、もうすぐティアンが来るから、奴に教わるんだ。あいつ
は勉強だけはやたらと出来る七三眼鏡野郎だからな」

「ぎゃははは」

クレハは何が面白かつたのかお腹を抱えて笑つたりしている。ほん
つとくにカオスな奴だな。

団長は目の前の一年生をUMAでも見ているみたいに、不思議そう
な未恐ろしそうな顔をしている。

「……誰が七三眼鏡だつて」

いきなりに扉が開いて、いくつかプリントを持ってきたティアンが
入ってきた。何と言う地獄耳であろうか。しらーつとした視線がち
くちく突き刺さる様でかなり冷や汗ものである。

ティアンは持つて来たプリントをバンと机に置いて、団長を多少ビ
ビらせた後、

「これさえやってれば追試は合格すると思うよ。僕が一晩で全教科作ってあげたんだから、感謝したまえクレハ」

眠そうな顔は一切見受けられないが、流石のティアン、後輩に感謝を求めている。

「うん、ありがと先輩」

多分クレハは何の事か分かっていないが、椅子の上で揺れながらお礼を言っている。

しかしティアンはスタスタと扉の方へ行ってしまった。

「おい、ティアン、クレハの勉強は!？」

「何で僕がそこまで面倒見なきゃいけないんだい。それに教えるのは得意じゃないんだ、答えを無様に間違える所とか見たらイラッとするからね」

「……………」

彼はやはり、涼しい顔をしていたものの、疲れからかいつもより嫌味に切れがある。後輩の為のプリントを作ってくれただけ彼にしては慈悲深い。

「だから、僕の代わりにリオを連れてきたよ」

彼は向こう側でげっそりしているリオを引っ張ってきた。「何で僕が……………」とか言いながら、リオは引っ張られるままに教室に入ってくる。

団長は心の中で「すまない」と呟いて、そのまんま立ち去っていく。ティアンの背中を見送った。

「ほらみる、先輩がこんなにいろいろしてくれてんだぞ。お前も頑張れよ！！ じゃないと次の研修、本当に連れてかないからな」

「えええええ！！ それだけは勘弁してよ団長」

「だったら頑張って追試に受かれ！！」

団長は人差し指みたいなのが先っちょについた棒を、ズイツとリオに渡して、

「頼むぞリオ」

「……なんなんですか、これは。何も聞かされずに連れてきたのですが」

「クレハが全教科赤点で、追試に受からないと次の研修に連れて行けないらしい。教えてやってくれ」

「……………そう言う事ですか」

リオはいったい何だと思ってついてきていたのか、クレハの勉強を見ると言う事を聞かされた後は、普通に「なるほど」という顔をしていた。そして、にこっと笑って、

「で、クレハはどのくらいの点数で赤点を取ったんだい？」

「……………んーとね」

聞いてくるリオに、クレハは自分の机をがさがさ漁って、ぐしゃぐしゃになったプリントをいくつか取り出し始めた。

一枚目、化学6点。

「……………」

二枚目、ギリシア語9点

「……………え」

三枚目、数学2点

「……………(汗)」

その後続々とでてくる歴史やら生物やらのテストが、ほぼ全て一桁であった事に、リオは愕然とした。リオ自身、今まで努力してエリートな人生を歩んできた秀才であるがため、このような点数はまるで見た事がなく、世の中に存在する事が驚きで仕方がなかった。そもそもギリシア語が9点って、いったいどうやって話しているんだよ、と言いたい。

「……………凄いだろ」

「ええ、予想外に驚きの点数ですね。追試まで五日しかないってのに、大丈夫なのでしょうか」

「それはお前次第だ」

「……………」

さて、とんでもない事を任されてしまったぞ。リオはいつもの穏やかな表情を引きつらせ、何がおかしいのか「ぎやはは」と笑っている目の前のクレハを、これまた謎の陳種でも見るようであった。

とりあえず落ち着いて、いつもフレイに教えるように接してもみよつかと思った。何しろフレイも赤点の常連で、保健体育以外はほぼ苦手であると言う、生粋のアホ男子であるので。それでも赤点を取るのは多くて4教科くらいだろうか。全部一桁だなんて見た事はない。

今はシーダがフレイを見ている。クレハと同じように五日後の追試を乗り切れるように。

「……………じゃあクレハ、ティアン先輩が持ってきてくれた問題、ちょっと解いてみようか」

「はい」

リオがその数学のプリントを見て、「なんだこれは」と思うくらいに簡単な問題の羅列に、少々恐れすら感じる。

一体全体クレハがこれのどこを間違えるか気になるが、とりあえず渡して、様子を見てみよう。

しかしながら、こんな簡単な問題にクレハは頭をひねらせ、「わかんね」とプリントの端に落書きを始める始末。

「ちょ、何やってんのおおおお!!」

「だって、分からないもん分数なんて」

「分数は分数だよ。分数は所詮分数なんだよ!!」

リオも自分がいったい何を言っているのか、もう訳が分からなくなる程に驚きを隠せない。

小学生で習うような事が、そうクレハには意味不明なのだ。

団長は後ろの方から頭を抱えている。

「頑張つてリオ……」

「団長!! 人ごとだと思つて!!」

リオはもう、どう手をつければいいのか分からなかったが、とりあえず黒板で解説から始めようと思った。

「流石に、 $3 + 5$ くらいは分かるよね」

クレハは一時迷つて（なぜ迷うのか分からなかったが）、大きく手を挙げ

「2」

と、自信満々に言いきった。なぜそうなる。

リオはもう泣きたくなった。

「何でそうなるのかな」

「だって、こうやって指を使うでしょ」

クレハは1、2、3と指を折って、そのまま1、2、3、4、5と追加して指を折った。しかし問題は、3以降を折り返した所にある。戻ってきて、2になった訳だ。

要するに過程を全く気にせず、出てきた答えをそのままどや顔で言いやがった訳だ。

「……………」

「あってる!!」

「全く違います」

リオは一度深呼吸して、教卓にもたれかかった。ちよつと勉強はやめた。この少年の生体を知らねば対策の打ち様がない。きやつきやと笑っているクレハは無邪気で、端から見れば屈託のない後輩であるが、いざこざなると面倒くさくウザタらしい。しかしそれがクレハである。よくわかった。

団長は、どうしたものかと後ろの方で考えている。このままではリオの身が持たないと思って、そそくさと助っ人を呼びに行った。

「ねえクレハ……。君、今までどうやって生きてきたの？ 買い物とか、どうしてるの？」

「買い物くらい出来るよ」

何言ってるの？と言いた気なクレハの視線に、リオは持っている人差し指のマスコットのついた棒をへし折りたくなった。

「数学も同じようなもんだよ？」

「……………フーン」

「……………聞いてないでしょ。もう、全く……………」

リオは、なぜ自分がこんな惨めな気持ちにならなければいけないのか理解出来ないが、そもそもこの少年はアルプスの奥地でヤギと共にでも住んでいたのならともかく、有名なロズベルト美術学院の養子として育ってきているというのに、何と云うとんちんかん。今までいっただいどういいう教育をさせてきたのか。

スノーに聞いてみたいものだ。彼は一応クレハの兄ではないか。

「……………そつだよ」

リオはクレハに背を向け、教卓に拳を打ち付ける。

「そつだ、そうに決まっている。スノーが面倒を見るべきじゃないか。あいつはそれなりに人並みに勉強はできるんだ、努力をしないだけで。出来るだけエネルギーを使わずにそれなりに点を取るやり方を知ってるじゃないか、あいつは！！」

しかし、スノーの事を思い浮かべたものの、とんでもない面倒くさがるの彼が弟の勉強を見る訳なんか無いという結論に行き着く。

大きなため息しかでない。

「どうしたのリオ先輩」

「……いや……なんでもないさ……」

リオは再びクレハの方に向き直った。

少し疲れきった顔をして、机にちよんと座る彼をまじまじと見おろす。

「君、いつもどうやって絵を描いているの？」

「何となく」

「……… だらうねえ」

この答えには大きなため息しかでない。リオにとって感覚で絵を描く奴は苦手以外の何者でもない。この世の中、感覚で絵を描く奴は沢山いるが、そこから本当に天才的な奴って確実に居るのだが、数少ない。それ故に貴重とも言える。だから天才って言われるんだ。世の中には考えて芸術をするの方が圧倒的に多いのだ。勿論、感覚もその中に必ずあるが、何も考えずに描いている奴って、実際には本当に本当に稀な能力者だと思う。

天才と言う言葉は、あまりに好きではない。

「僕はね、感覚とか、やってたら何とかなつたとか、才能とか天才とかって、全然好きじゃないんだ。もちろんね、勉強とは全く頭の使いどころが違うから、頭良くなれとは言わないけどね。でも、必ず芸術って考えるんだよ」

「……………」

「ま、君に何を言っても、何にも分からないだろうけど。君は感覚的なタイプだろうからね。僕は勿論そのようなタイプが居る事を認めているけど……………」

そう言う奴は嫌なんだよね、と言う言葉の先を濁した。だって、これは結局自分に無い物への嫉妬でしかないから。そのとおり、これは嫉妬なんだ。天才とか、才能とかへの。

「……………まあ、聞いてよ。分かってなくてもいいからさ。……………天才って、きつと色々居るんだと思うよ。感覚的に持っている物を持って生まれた人の事も言うだろうし、努力して同じ舞台まで上ってきた人の事も、評価されたならば天才だろうし。……………でもね……………」

リオは、クレハに言っているのか自分に言っているのか、もはやもう、分からなかった。

努力が偉い訳ではないこの世界、最初から才能を持った奴とそこまですていつくばった奴の、どちらがどうであるとか、関係ないと分かっているが。結局は作品だから。

でも……………」

「……………でもね……………感覚だけで絵を描いている人ばかりじゃないんだよ。考えて考えて、考えて勉強して、研究して絵を描いている人だって、勿論居るんだ。クレハだって、いつかスランプや、自分の表現に迷った時に、頼れるものが感覚だけだったらきつと辛いよ。知識や思考能力は、そう言った時支えになってくれるから」

「……………へえ……………」

ポヤンとしたクレハの表情を見ていれば、彼が全くもって理解していない事は分かっているが、まあそれはそれで良い。クレハだって別ににも考えていない訳ではないだろうし。彼は才能肌だ。自分の嫌いな。それでも、欲しくてたまらなかった力。

クレハはニカツと笑って、前のめりになってリオに言った。

「リオ先輩って何でも出来るんだねえ。絵もあんなに凄いのに、勉強だって出来ちゃうんだもん！！　かつこいいしさー！！」

「……………」

いきなり何を言っているんだと思ったが、彼の目を見ればそれが、彼の偽り無い言葉である事が分かるからかえって恥ずかしくなる。ゴホンと咳払いをして、教卓の周りを一度ぐるっと歩いたりしてみる。

馬鹿なくせに、やはり彼は普通の人とは感覚の違う、天才の逸材なのだろう。バカと天才紙一重とは、彼の為にある言葉か。

自分が何でも出来ると思わないし、絵だって努力でやっとヴィライアーに辿り着いたくらいのもんだ。自分にあるのは感覚的な才能ではなく、努力して考える事の出来る力。

『でもそれも才能って言うのよ』

昔、シーダがそう言ってくれたのを思い出す。

少しだけ気持ちに余裕ができたような、優しい気分になれた気がする。

クレハは口をV字にさせて、足をぶらぶらさせていたりする。勉強する事に、文句を言っていないだけ彼は偉いかもしれないな。

もう少し付き合ってみるか。

リオは金髪を後ろに払って、自分に気合いを入れてみた。

そんな時、いきなりにガラツと扉が開いて、

「リオー！　こうなったら団体戦だ。テストは団体戦だー！」

団長がフレイとシーダを連れてきた。シーダはやる気満々であるが、フレイはだらしく猫背で、「勉強やりたくねーよー」とか言っている。

「フレイとクレハ、一緒に勉強させるのよー！　頑張りましょうりオー！」

流石シーダである。人の面倒を見る事に関しては、誰よりもやる気と根気と技術がある。「ほら座りなさいー！」とフレイの尻を叩いて追い立てる。彼女はスパルタだ。

さて、凄い事になった。

問題児二人を相手に、どうしたものか。

d
r
a
w

*番外編くテストは戦争だ 下く

どんな分野の知識だつて、

芸術においては発想の種となる

「いいこと、クレハ・ドルフォード。フレイ・レステヴァン。あなた達このままじゃ、次の研修に行けなくなるのよ」

「その話のもういーよシーダ母さん。お説教はいいから、とっとと始めてくれよ」

フレイは憂鬱そうにハツと笑って、机にだらりともたれている。彼は今回、美術史と考古学を落としたのだ。3年生までの教養学科と違い、おおよそ自分の興味ある教科を選択出来る身分であるのに、彼は今回も懲りずに赤点を取ったのである。

「あんたの落とした教科って、ただの暗記物じゃないの。教える事なんてほとんど無いわ、覚えればいいのだもの」

「どうやったら覚えられるの？ 脳内にメモ紙でも貼付けられればいいのに」

大げさにからかった口調で、フレイは言ってみせた。それにクレハは多いに大爆笑と言った所だ。団長は後ろの方でガクンと頂垂れ、リオにいたってはため息しか出なくて、シーダはお冠であった。

握りこぶしを熱くさせて、彼女は目の前の生徒に隕石を投下したのだ。

割と潔い音が二つ鳴った。

「フレイ……あんたはもう落ちようが研修に行けなかるうが、どうでもいいわ。ほとほと愛想が尽きました。勝手に脳内にポストイトでも張ってなさい。でも、クレハは私が責任を持って試験に合格させます。ええ、私は一度言った事を決して曲げたししないわ」

「……………ちょ……………え、おかーさん」

「じゃあクレハ、あなたの算数から見てあげるわね」

シーダはフレイの方をまるで見ないで、クレハの前ばかり立っ

る。そして、彼の教科は数学であるのに、“算数”と言ってそこから教える気満々である。

リオもどうやらそっちが気になる様で、シーダの隣で顎に指なんか添えたりして、考え込んでいる。

「でもね、シーダ。クレハは凄いや。フレイの中途半端などうしようもなさとは比べ物にならないくらい、それは清々しいよ」

「リオ、あなたが言いたい事は、これから私も分かるでしょうよ」

シーダは何やら持ってきたカバンから、数字の書いたチョコレートのパッケージを取り出した。それを大きく開けて、クレハの前に並べる。当然チョコレート中毒の彼は、目を輝かせるのだ。

「わああ」

「ダメよクレハ。これはね、勉強ができた子にしかあげられないのよ」

シーダの口調はぴしゃりとしたもので、いつもの少女らしい彼女と言うよりは、教え子の世話を焼いている教師に見える。リオには到底真似出来ない態度であろう。彼女は今度は、板チョコを取り出した。

「チョコレートの数ならば、数えられるんじゃないのクレハ。さてこの板チョコ、横に4粒、縦に3粒入っているのよ。だったらいい、全部で何欠片あると思う？」

「12粒!!!」

「ほら正解。あなた本当は出来るのよ」

彼女の思惑はあたった。クレハは数学の全てをチヨコレートに置き換える事で、小学生レベルは出来てしまうのだ。様は考えようとするかしないかの問題で、チヨコレートは彼にとって死活問題であるために、彼も必死になって考えるのだ。

シーダの教育は恐ろしくも効果的である。クレハがチヨコレート中毒である事、定期的に口にしなければ、薬中の様に暴れたい衝動に駆られる事を知っていながら、問題が解けるまでそれを与えなかった。

一問解けたら一欠片、と言う具合に、アメと鞭戦法を貫いたのだ。クレハと言えど、これはシーダの思惑通りであろう。

問題はフレイである。奴はひねくれた勉強嫌いである。

たかが美術史と考古学であるが、興味がなければおおよそつまらない分野なのであろうか。

「古代ギリシアの陶器画なんてクソどうでもいいって話だ全く。今後何の役に立って言うのか、知ってたら教えてほしいぜ」

「……またそんなこと言って。嫌味が言えるなら勉強だつて出来るだろ」

リオはシーダがクレハを見ている間、仕様がなくフレイを受け持った。美術史はちょうどギリシアの古代陶器画の部分で、暗記と陶器画の見方のこつを覚える意外は、このテストをパスする方法はない。記述と、論文、半々のテストである。古代ギリシアの陶器画とは、その名の通り、壺などに神話や文化を描いた絵の事である。学者達

は長年このような古い絵を研究し、神話の暗号を見極めてきた。そして、神話から、絵を研究してきたのだ。

リオは数ある陶器画の資料集をぺらぺらめくりながら、今更これらをどのように教えようかと考えていた。

「ギリシア神話にもほとんど興味のない君が、いきなり陶器画を見ろっていたってね……」

ぶつぶつ文句を呟いたりしながら、めくる冊子の中で、リオはふと一枚の陶器画を見つけた。

自分自身少しハツとした作品であったのと、これは良い例として、陶器画の見方を教えられるのではないかと思っ取り出す。

「ひとつ、見方を言うならね。この陶器画に描かれた人物ってみんな横を向いているだろう……」

リオはその冊子をフレイの机の上において、赤い下地に黒い人物の描かれた陶器画を指差した。そこに描かれていた人物は、全て横顔が見えるように描かれていた。

「基本的に古代ギリシアの陶器画に描かれた人物は横を向いている。真正面はタブーなんだ」

「……………何でだよ」

フレイは少し、興味を示し始めた。

「古代ギリシアの絵画には、正面は“死”の意味を暗示していた。だから、こちらの女神アテナの持っている盾、“ゴルゴンの盾”は

可笑しいけど真正面を向いているだろう？ アテナの盾はメデューサの首が描かれている事が多いから、それに描かれているゴルゴン（メデューサ）は前を見ているんだ。メデューサの神話くらい知っているだろう？ 少なくともその目を見たら石になるって」

「……………まあな、そのくらいなら」

「だから、古代ギリシアの人はそこに“死”を見いだし、正面＝死を表したんだね」

沢山の人々が、どんなポーズを取っていようと横向きであるのに、メデューサだけ滑稽な事に正面を見ている。これは思いの外に笑える絵面である。

リオは再び、机の上に冊子を載せた。新しい写真には、ちよつと想像しがたい絵が載っていた。

「……………これ、何してる絵だと思う？」

「……………人間が目をぱつちり開けたまま横になっていて、そのおでこに小さい羽の生えた妖精みたいなのが乗っている……………」と。何じやこりゃ」

「眠りを示している絵だよ、これ」

リオはぱつちり目を開けたままの人物を指差した。

「古代ギリシアの絵画形式に、目を閉じると言うのはないんだ。それは昔程にそうだよ。目を閉じて描くと言う事をしない代わりに、眠りを擬人化した神、ヒュプノスを頭上に描くんだ。それだけで、暗示的にこの人物は眠っていますよ、と言う事になる」

「……………ほほー」

フレイは分かっているのか分かっていないのか、やけに熱心にその写真を見ている。

ヒビの入った古めかしい陶器に、堅苦しくて意味不明な絵が描かれていると、まあ今までは思っていた。しかし、リオの二つの例を聞いただけで、少々面白いのではないかと、フレイは珍しくそう思っていたのだ。

「よくみたら、結構ウケる絵とかあるな。このおっさんマツゲ凄すぎなんですけど」

「……………それは“エウフロニオス”って言う画家の陶器画だよ。彼はやたらと睫毛を描くんだ」

陶器画の画家まで色々と居るのか。フレイは面倒そうな顔をしながらも、ちょいちょいと冊子をめくっては、思いの外食い入るように見ている。

「……………なあ、背景が黒くて人間が白いのと、背景が赤くて人間が黒いのと二つあるけど、これは？」

「ああ……………。“黒像式技法”と“赤像式技法”って言うんだ。黒像式が、背景が赤くて人間が黒い方さ。こっちが先に生まれて、その後背景が黒くて人間が白く描かれる赤像式が生まれたんだ。多分これは試験に出るから、覚えておいて」

「……………はーん……………」

フレイは試験と言う単語がでると、めつきりだらしくなってしまう。耳を掻いたりしている。隣でクレハが、チョコレート欲しさにも凄いい勢いでプリントを片付け始めているら驚きだ。

「凄いわクレハ！！　あなた、やれば出来るじゃない！！」

クレハは別に問題を理解したと言う訳ではないが、問題をほぼ丸暗記しているらしい。今更全てを理解させようとしたって無理である。うから、とりあえず数学は解き方の手順などを丸暗記させ、付け焼き刃でも無いよりはマシと言う具合で、がんがんやらせていた。

そんな日々が、約五日間。

クレハへのご褒美は日に日に豪華さを増している気がするが、何もしていないからと団長がそれを用意し、それを餌にシーダがクレハを見て、やる気のないフレイに、いい具合にどうでも良いリオがちらほら教えるくらいで、あっという間に追試の日になった。

さて、クレハとフレイはどうなったのであろうか。

それは、今後の中国研修と日本研修に彼らが居るか居ないか確かめれば、自ずと結果が知れると言うものだ。

d
r
a
w

*番外編 五年生の未来視 上 〳

友達以上、恋人未満

それでも成り立つ、愛の形

夜の10時くらいだろうか。

レッドは机に向かって、教員採用試験用の問題集をいくつも開いて、それとにらめっこしている。

彼ら五年生にとって、今後の進路を考えねばならない時期に来ていた。

作品造りに力を入れ、作家として歩いていく道もあったと思うし、

レッドにはそれだけの力が合ったのに、彼はこのルネ・ヴィルトンの教員となる道を選ぼうとしていた。

「……うーん……評論だけは自分で判断しかねるなあ……リース先生にでも聞きにいくかな……」

そんな風に、シャーペン片手に頭を抱えていたのである。

突然、彼のケータイから有名なジャズ音楽が鳴り響く。

彼は「はいはい」と、別段驚いた様子も無くケータイに出る。この時間帯にかけてくる人は、おおよそ目星がつくから。

「……もしもし……ナギさん……」

ケータイの向こうから、何とも勢いのない彼女の声が聞こえる。レッドは手のひらを顔に当て、呆れた様子で立ち上げる。

「……まーたそんなに飲んだのかい。……分かったよ、迎えに行くから……」

台所で、やかんからコップに水を注ぎ、一度一気に飲んでから、彼はケータイをズボンのポケットに押し込み部屋を出た。

全く、彼女の適当さにはいつも呆れる。どうでもいい事には本当に無頓着で、日々の生活も最低限生きていける程度の気遣いだ。

あの見た目で、あの性格なのだから、世の中分らない。長い付き合いの自分はそんな彼女を知っているが、世の中騙されている男は沢山いるだろう。

例えば、今日彼女をディナーに誘った、どこぞの若社長とか。

レッドはルネ・ヴィルトンの敷地内の、長い小道を歩きながら、淡々とそんな事を考えた。

この学校は、出るまでが長い。特に夜は、嫌な感じこそしないが、いつそう噴水の流れの音がよく聞こえる。

夜でも、この学校の噴水は止まらないから。

彼は鼻歌を歌いながら、軽い足取りで校門に向かった。

ここ最近、寮長としての仕事と受験勉強で引きこもりがちになっていたから、ナギを迎えにいくこの時間は、何気に好きだったりする。ルネ・ヴィルトンは、アテネ市外の小高い丘の上にある。周りは森に包囲され、校門から伸びる道路の下には、市内の夜景がよく見える。やがて、道の真ん中に光る車のライトが、どんどん近づいてくるのが分かった。

きつとあれが、ナギの乗っている車である。

しかし今回は、いつものタクシーではなく、例の若社長のリムジンであった。

「……………」

おっと。これはまずくないか。

レッドはいそいそと、壁際の暗闇に背をつけ、息を飲む。

ナギはふらつく足取りで、その車から降りてきた。

「今夜はどうもありがとうございます。アエリックさん……………」

彼女は最期だけしっかりと気丈に振る舞って、彼に深々と挨拶をする。その仕草は優雅で洗練され、良いお家柄の日本女性という感じである。アエリックと言う若社長の話はよく聞くが、実際にお目にかかったのは今日が初めてだ。

なるほど、なかなかハンサムな若社長ではないか。

「……すまない。少し飲ませ過ぎたかな」

「いいえ……大丈夫ですわ」

何が大丈夫なもんか。

そんなふらふらしているくせに。

レッドは暗闇の陰に隠れたまま、出来るだけ存在を隠しつつも、そのようにため息をついた。

車が走り出すとき、どうにもアエリックに見つかった気もするが。

ナギは車が見えなくなるまでその場に立ってニコニコしていたが、車が丘の向こうに消えると、「ハア……」とワントーン低いため息を吐いて、後ろに倒れる。

それを、ちゃんとレッドが支えてくれると分かっていたからだ。

「この、不良娘」

「……レッド……悪いわねえいつも」

ナギはかなり酔いつぶれていた。いったいどれだけ飲んだんだと聞きたくなかったが、今聞いても意味は無いだろう。

彼女をおぶって、ルネ・ヴィルトンの長い小道を歩き出す。

「……全く、君って女は。ほんとはどうでもいいくせに、気のある振りだけしてるんだから」

「仕方ないでしょう……あの人、私のお得意様なんだから。支援してくれる人あつての創作活動よ。……来年からは、この学校が助けてくれる事も無いんだから」

「……………」

彼女は酔っぱらっている癖に、物言いだけは立派である。

確かに、実力だけでつかみ取れるチャンスなんてしている。彼女は現実者だ。お綺麗な理想だけでこの世界を生きていけると思っていない。だから、彼女のやっている事を否定したりはしない。

「……………大丈夫よ。今はまだ、一緒にご飯食べてあげているだけよ」

「今はって……はあ、なんて子だろうね」

「……………私は、自分の売り込み方を知っているもの……………」

ナギはクスクス、レッドの背中に顔を埋めながら笑っている。

どうしようもない子だけど、今、五年生の中で一番画家として成功を収めつつあるのは彼女である。勿論、ヨーロッパでの日本画の貴重性もあるだろうが、彼女は実力もあるし、何より美貌が良いプロモーションとして役立っている。

あの若社長が特別ではない。

あの人が一番長くしつこいけれど、彼女のスポンサーは多い。

「…………プロポーズされたんでしょう。もしかして卒業後、結婚したりするの？」

「…………ふふ、まさか……。画家として疲れたら結婚しようって言われただけよ…………」

「…………いい人じゃないか」

女性つて怖い。男つて馬鹿だ。

彼女と話していると、常々そう思う。

「いやよ、社長夫人なんて……。自由が無いわ」

「主婦としてやっていけそうに無い君には、打ってつけだと思っけどな…………」

レッドは白々と、彼女に言い返す。あの若社長も可哀想に、きっと気づいているんだろうけれど、利用されていたって彼女に骨抜きと言っ事か。

「なによ。今日は少し刺があるわね、レッド」

「君の将来が心配なんだよ…………自分を安売りしてはダメだ。いつか、本当に好きになった人が出来たとき、面倒になるよ」

「……………」

レッドの言葉に、ナギは少し黙ってしまった。

笑いもしないで、彼の肩に頬をくっつけている。

「……あんたって良い男ね。……でも、良い男って早死にするのよ」

「何それ……反撃？」

「もう少し悪い男になった方が、世の中上手くわたっていけるのに……だって、あんただったらそれが可能だったのよ……。あんたは才能があっただから、私たち五年生の中で一番……。顔も良いし……」

「……」

良い人、と言うのはレッドの長所であり、欠点でもある。そのせいで今まで、何度チャンス逃してきたか分からない。画家になりたいか、と聞かれたとき、少しだけなりたいたいと思っていた時もあった。

「……でも、俺は教える人になりたいんだ。出来れば沢山の人が、良い作品を創れるように。……教え子に夢を託したって良いじゃない」

「諦めるには、あんた、まだ若すぎるわよ」

「先生をしながら創作活動してる人だって沢山いるよ。俺は別に諦めた訳じゃない。他の事に、夢を見いだしただけさ」

彼は、自分を納得させようとしていたのかもしれない。この五年間で得たもの、得られなかったものを。

「……あんたって、ほんと、良い男ね」

「良い男は嫌いかい……？」

「ううん、好きよ……でも、良い男はすぐに死んじゃうから……」

ナギはさつきからそればかりだ。

レッドはふと、昔聞いた話を思い出す。彼女の初恋の話だ。

「……………君のおじさんの事かい……？」

「そう。私の大好きだった人。……………優しく、強くて、ちゃんと叱ってくれる人。欲しい言葉を、くれた人よ……。でも、死んじゃった……………」

お酒のせいか、普段はあまりその事について触れないのに、今日は彼女の叔母の結婚相手が、彼女の初恋でもあった。

「良い人ってすぐ死んじゃうのよ。だから、良い人はもう結構よ」

「なるほどね」

「……………あんたって、少しあの人に似てるわ……………愛情深いもの……………」

「……………」

レッドは視線を少しだけ、背中の子ナギに向けた。

「……………俺が早死にするって？」

「…………ふふ。運が悪ければね。なんでだろうね、世の中必要な人程すくいなくなっちゃうのよ。神様に愛されているから、すぐに神様の所に行ってしまうのかしら…………」

彼女はそういうと、ぐったりした様子でそのまま寝てしまった。

ずしっと、一気に重くなった気がする。何でだろう、体重は変わらないのに。

「……………重いよ、ナギさん……………」

つくづく、自分も彼女に利用されている男の一人にすぎないと思う。だって、彼女はそんなつもり無いかもしれないけれど、俺自身がそうなるように動いている。

彼女を責められない。自分だって世話焼きでおせっかいだ。彼女に事關しては、特に。

「……………」

自分たちは、実に気楽な関係である。

どうして、お互いが男女でありながら、恋仲になれないのか不思議に思った時もある。

お互いが大切だけど、それは恋愛ではない。

ルネ・ヴィルトンへの細いレンガの道。

暗くていまいち良く分らないけれど、月がとても明るいのと、転々とした街頭の灯が、自分たちを導いてくれる。

背中でのナギが、安心しきったように寝付いている。
良い大人のお嬢さんのくせして、何だって適当なんだから。

しかしまあ、完璧な女性は面白くないし、自分にはきつと合わないと思う。だからこそ、彼女と気が合っている。

「……………そう考えてるうちは、きつと俺たちは恋人にはなれないね……」

気が合うというだけを恋と言う訳にはいかない。
だからこそ、自分たちはいつまでたっても、友達以上恋人未満なのだ。

いつか、お互いが別の人に恋をして、別の人生を歩んだりするのだろうか。

遠ざかっていくのだろうか、心も。

「……………愛情深い……………か……………」

その言葉は、恋愛の愛とは少し違って聞こえる。
今の自分たちに、一番しっくりくる気がする。例え恋人でなくても、彼女に愛情が無いと言ったら嘘になるから。

遠ざかっていくもの、迫ってくる未来を、きつと今一番感じているのは五年生だ。

団長、ティアン、メルベリー嬢だって、きつと未来を見据えている。戸惑いはあるだろうけれど。

この細い小道の後ろに置いてきて、今まさに歩み寄っている将来の壁。大切な時期。

卒業を考えると、悲しい。

君と一緒にいられなくなる。

I
d
r
a
w

*番外編く五年生の未来視 下く

五年あれば、

変わっていく関係だってある

団長は次の研修のためのファイルを持って、ちょうど中央棟から絵画棟まで帰ってきた所だった。

地中海性気候のこのギリシアの日差しは、今の時期から凄まじい。これで夏を乗り越えられるのか？と自分に問いかけてみるが、どのみち夏は実家に帰って日の当たる時間帯にアクティブに外に出る事

なんて無い。

どうしてルネ・ヴィルトンの棟は、それぞれこんなに離れているのだろう。

彫刻科棟なんて、この敷地内の一番奥にあるのだから大変だ。

絵画棟のフロントは、黒い大理石の床の、ゴシック調の空間である。中心に大きな室内噴水があり、高々と天使の彫刻を中心に飾り、いつも生徒たちを見おろしている。

「……………」

団長はそんな、一番上の階まで筒抜けの空間の中で、荘厳な空気に触れ、足早にエレベーターを目指す。

一番上の階は、ヴィライアー専用の階となっている。

窓が全てガラス張りで、明るい日差しを一番に溜め込む静かな階だ。

ヴィライアーの会議室、幹部の部屋、その他、何に使うのかさっぱりな部屋がいくつか。

団長はその階に辿り着いたとき、一番最初に気がついたのは、澄んだピアノの音だった。

赤い絨毯の廊下の、香る薔薇に誘われて色づく、ピアノの音。何だったっけな、有名な曲なのに。キラキラしているのにどこか寂しいような、細かいようなスローのような、緩急のある音色。

団長は、このピアノの音色がどこから聞こえ、誰が弾いているのか分かってる。この階層で、ピアノを扱っている者なんて一人しかない。

彼は、開け放たれた小さなピアノの部屋の前で腕を組んで、静かにピアノを弾く彼女を見つめる。ふうと息をついて、その音の中に身を委ねるのだ。

優しい音色、澄んだ空気、聞き心地の良い細かい音階の中にと、音楽に通じていない自分でも心に何か水滴の落ちる感覚に見舞われる。それがきつと、音楽なのだ。

メルベリーは黒いグランドピアノの前で、一時音と共にいた。彼女は幼い頃から、ピアノを弾き続けてきた。教養として習ってきたものだったが、その音楽に受けるインスピレーションは、同じ芸術である絵画に反映されている。彼女の絵はどこか繊細で儂く、指先で奏でる音楽のようだ。

最後の盛り上がるの部分は、おとなしい彼女には意外なメロディーであるが、そこが良いのかもしれない。

メルベリーの弾いていた曲が終わり、彼女が一息ついたとき、団長はやっとな手を打った。

「……………!?!」

彼女はさぞ驚いたのだろう。肩を一度ピクツと動かして振り返る。

「流石だな、メルベリー」

「……………まあリュオン……………聞いていらしたんですか？ お恥ずかしい……………」

彼女は頬を染め、軽く視線を流す。

リュオンはしかめっ面のままであったが、澄まして聞いてみる。

「……………なんだ、シヨパンか……………?」

「いいえ、リストです……………」

「……………」

まるで疎い彼は、内心あららという感じであったが、平然を装い、

「…そうか、リストか……………」

クールに答える。メルベリーは相変わらず微笑んでいる。

「リストの、『ラ・カンパネラ』です。優しいような、でも少し悲しい音色が、私は気に入ってます」

「……………」

彼は先ほどのメロディーを思い出す。
優しさの裏にある、切ない音階は、読めない彼女の分身かもしれない。

「……さつき学校側に、正式にOK取ったから、中国プランも日本プランもこのまま行こうと思う」

リュオンは手元のファイルを彼女に手渡し、何気ない振りをした。彼女はそれを受け取ると、「はい、いつもの通りに」とだけ言う。ここ五年間共にいるため、分かりあえる部分は何も言わなくても分かりあえる。それだけ五年間は長かった。

まだ最後の年があるが、追ってくる卒業までのカウントダウンは、既に始まっている。

その中での妙な焦りを、ここ最近同じ学年の者から感じる。

「……おい、メルベリー」

「……何でしょう……」

幹部室へ戻る途中、団長は唐突に聞いた。

「お前、卒業したらどうするんだ……?」

「……………」

この質問に、メルベリーは難しそうな苦笑いを浮かべる。

肩を小さくさせて、前で手をぎゅっと握りしめたまま、彼女はどこか遠くを見ていた。

「……お父様に、実家へ帰ってこいと言われていました。そこで、会社への力添えが出来ればと思いますか……」

「まあ、お前なら良い仕事ができるだろう……。四年前か、ティアンがお前をこの学校へ連れてきた訳が、今ならよく分かる」

団長は少しだけ、四年前の事を思い出した。

この学校へ入学して、ティアンに彼女を紹介された。

今より少し日差しの柔らかかな時期に、まだきつと黒い世界を知らない、真正正銘白を纏ったような清廉潔白な彼女を見たとき、正直、自分との正反対な立ち位置を見た。

白と黒、皮肉な事にそれは石の色にまで反映される程、彼女と自分は遠い存在に思えた。

それを、騙すように誘導し彼女をこちら側に引き入れたのがティアンである。

あの男は何を考えているのか、メルベリーをこの学校に入学させ、自分と関わりを持たせるようにしむけ、黒龍会とも繋がりを作る。優秀な彼女の力を借りると言う名目で、彼女を意図的に巻き込んだ。

しかし後一年で、その関係も終わる。

「……リュオンはやはり、家に戻るのでしょうか？ 卒業したら忙しくなりますね」

「ああ……まあな」

「ティアンもそうですし、私たち五年生で純粹に美術に携わる事になるのは、結局ナギとレッドさんだけですね……」

彼女は少し寂しそうであったが、その奥に何を思っているのか、言葉だけでは分からない。
団長は少し、瞳を細めた。

五年あれば、そして、今、五年生と言う学年最後の年を迎えれば、自ずと自分の器と言う物が計れてくる。しかし、それ以上に頑張ると言う、努力をしていく者もいる。そういった者が成功すると言う事もある。

実際、絵の天才と言われる奴は結局人間に判断される。真の天才が評価されるのは、遙か数年後であったりする。
なんだかんだ言って、いまだにこの世界を理解出来ず、何も分からないままここを去る事になるのか。

四年前、自分たちは希望を抱き、この学校に入学してきた。
最初に現実を突きつけられたのは、入学試験のトップ3の絵だ。

あれの一番上にあった絵を、今でも覚えている。
あれは、レッドの描いた、この世の光を感じるような人物画。

あんな絵は、自分には描けないと思った。

あの絵を描いた奴がどんな奴か知りたくて、調べようと思っていたが、そんな必要は無く、彼はすぐに分かった。彼の噂は至る所で耳にする事になる。ルックスが良く、性格もよく、人望に厚く、爽やかで正義感の強い、こちらからしたら嫌みみたいな奴。

「なあにが、人格者だ。…偽善者め」

あの頃の団長は、そんな風にレッドを見ていた。そして、それはきつと自分には無い物への嫉妬に近い。

自分はどうかやって、何をしたって結局悪者扱いである。それはもう、家柄的に今に始まった事ではない。自分を見る者は皆、恐ろしい者を見るようであったし、近寄ろうとしないし、妙に固い気遣いを心がける。

まあ、それでも良かった。

今までもそうだったし、これはこれで悪くないと思っていた。ティアンがいたし、メルベリーもいた。メルベリーはこんなお嬢さんのくせに、自分を怖がりたりしなかった。

「おいメルベリー……」

「……何ですか？」

団長は幹部室の机にデンと構えたまま、向こうのパソコンと向き合っているメルベリーに話しかけた。

「変な事聞いても良いか……お前、入学したての頃、俺を怖いと思ったりしなかったのか……？」

「……はい……？」

「俺は入学した時から、良い噂無かっただろ」

「……」

メルベリーは宙を見上げるようにして何やら考え込み、そしてクスツと笑う。何でだろう。笑うような事だっただろうか。

「何も怖くなかったですよ。だって私、ティアンに色々聞いてましたから……。ティアンとリュオンって、生まれた時からほとんど同じ場所で教育を受けてきたでしょう？ まあ、内容は色々違うでしょうけれど……。小さい頃から、あなたの事を聞いていましたから」

「……何だと……いったい何を……」

ちよつと嫌な予感がした。ティアンの事だから、変な事を沢山言っただけに違いない。そして、それにふさわしい思い出も多々ある。ティアンは小さい頃から、本当に子供か？と思うくらい賢く腹黒く、そして鬼畜だった。

メルベリーは再びクスツと笑う。

「例えば、あなたが小さい頃に大切にしていた機関車のおもちゃを、ティアンが壁に投げつけて壊した……とか」

「……………」

「例えば、あなたが小さい頃積み木で作ったロボットを、ティアンがボールを投げつけて壊した、とか……」

「……………もういい……………もうやめてくれ頼む……………」

団長は思い出したくもない苦い思い出に頭を抱え、植え付けられたトラウマと光る眼鏡を思い出す。ここにティアンがいなくてよかった。今でこそ少しおとなしくなったが、あいつは本当にびっくりするくらいバイオレンスな子供であった。頭が良かったから、なおさら質が悪かった。

「そんな可愛い事聞かされていたら、何て事無かったですよ。実際あなたは優しすぎるのです……………。黒龍会の上に立つ者ならば、もっと自分の事を考えても良さそうなものを……………」

「……………俺が優しいもんかい……………」

メルベリーは何を言っているんだか、団長は机の上に足を乗せた状態のまま紅茶を飲んだ。

紅茶の表面に映る自分の姿は、やはりどこか強面だ。

「……………きっとヴィライアーなら、ほとんどがそう思っていると思いますけどね……………」

「無理すんな。ヴィライアーにはレッドだってリオだっている。…

…まあ、リオはそんな優しくないか、実際。優しいのは彼女だけか
……あいつはああ見えて、結構きついからな……」

「……そうです。人間見た目で本人を判断出来る程、単純なもので
はないですよ……。少なくとも、五年生で私に一番優しいのはあな
たです。……あの方方は、私に興味無し、といっても良いでしょう」

彼女の答えは、驚くくらいばつさりしたものだ。五年生、皆仲
良し、と言うわけにはいかない関係であるが、彼女がこうもばつさ
り言つてのけるとは思わなかった。

「……それは……どう受け取ったら良いのか……」

団長はルネ美新聞片手に、彼女の言葉に苦笑いする。
メルベリーに一番優しいのは、この俺か。

そんなこと、言われるとは思わなかったな。

メルベリーはクスツと笑った後、作業する手は休めないで、

「……私も、ナギのようにもっと自分を利用出来るような性格だっ
たら良かったのに、と思います。あの子はチャンスを逃さない……」

「やめとけやめとけ。あいつのこれからの人生、きつと波瀾万丈だ
ぞ」

「あら、素敵じゃないですか……。きつとこれから、鳥かごみたいな
場所で一生平穩に暮らすよりは……」

今日のメルベリーはよく喋る。

もしかしたら、先の事を一番考えているのはメルベリーなのかもし

れない。

鳥かご……か。

ガラス張りの窓辺から、白い鳥がこんな空高くを飛んでいる。
この五年間で、自分たちはいったいどれほど世界を見に行く事が出来るのだろうか。

広い広い、この世界の美しさ、謎めかしさ、自分たちで向き合う歴史とリアルを知ってしまった俺たちが、再び鳥かごに戻る。

それに耐えられるのだろうか。
彼女はきつと、それを心配しているんだ。

「……さて、出来ました。明日の会議はこれで万全ですね……」

「ああ……ご苦労」

メルベリーは作り上げた研修のシオリのデータを印刷し始める。
繰り返される機械音の中、彼ら二人はきつと、未来の自分と向き合っていた。

自分がいたい、どうありたいのか。

I
d
r
a
w

*番外編くシーダのスケッチブックく

あなたの結んだ糸は、

あなたがいる限り、ほどける事は無いだろう。

四年生ほど、ヴィライアーの中で結束の固い学年は無いだろう。

五人がそれぞれお互いを理解して、競い合ってきた。それは今でも。

こいつには負けたくないと思っているけれど、こいつは凄いと、ちやんと認めあっている。

最初からこんなに仲が良かった訳ではない。

“激動の学年”と呼ばれ、その中を突き進んだ四年生ヴィライアー。他学年から、尊敬と憧れの眼差しを浴びるとともに、影では凄まじい努力と苦悩があった。

確かに、この世界は努力だけで成功出来る訳ではない。だからといって、“天才”と呼ばれていたって、努力無しでは高見は目指せないのだから。

シーダは古いスケッチブックを整理していた。

古いスケッチは、久しぶりに見ると、良いなと思う物もあれば、消しさりたいたいと思う物もある。

自分しか見ていないのに、恥ずかしくなったり面白くなったり。今の自分に行き詰まったら、こつやって過去を振り返るのも悪くない。

その時、あるページに目を留めた。

そこには一枚の写真が貼ってあり、空いたスペースにこまごまとクッキーしている。

「……………これ……………」

彼女はその写真をペリッと剥がすと、宙に掲げた。

それは、とても懐かしい。

まだそんなに仲良くなかった五人が、偶然同じ写真に写っていた。たまたま撮れた写真なのだが、それが面白くて、シーダはずっと持っていたのだ。

「ねえ、シャルロ。この写真見てよ！」

シーダは二段ベットの上で寝転がっているシャルロに声をかけた。二人はルームメイトだった。

「……………なによ」

彼女はムクリと起き上がり、下の彼女を見下ろす。

「一年生の時の写真が出てきたのよ。……………みんな若いなあ」

「……………うっそ。見せて見せて!!」

シャルロは急にテンションを上げ、ベットから降りた。

「うわ……………。よく見つけたわね」

「スケッチブックに貼ってあったのよ。……………ほら見て、なぜか全員映ってるわ」

「私たちみんな、席が近かったからね。ふふ……スノーかわいいなあ。まだ幼いわね」

シャルロはこみ上げる笑いが抑えられないと言うように、ニヤニヤ笑っている。

シーダは、シャルロと写真の中の彼女を見比べ、

「あなたも幼いわよ。昔は髪の毛を横に結んでたわよね」

「シーダは髪が短いわね」

シャルロは、写真のシーダの髪を指差す。一年生の彼女は、相変わらず澁刺とした笑顔で、肩までのボブカットだった。

「見てよ……。あんたのダーリンがこっち睨んでるわよ」

シャルロは、いよいよ、気になっていた事を突っ込んで、そして耐えられずに吹き出した。

「……ちよっと、リオをバカにしないでちょうだい」

「バカになんてしてないわよ。……でも、この頃のリオって、ほんつっと愛想無かったわよね。ピリピリしてたっていうか、今じゃ考えられないけど」

「……まあね」

シーダは写真に写るリオを見た。

金髪碧眼の、王子様のような容姿は相変わらずだった。

しかしその頃の彼は、決して今ののように穏やかで優しかった訳ではなく、むしろ他人との壁をあえて作っていた様で。笑うどころか、冷やかな瞳だった。

一年生の初々しい頃。

シードとリオは席が隣であった。

彼がクラスに入ってきた時、そこに居た全員が息を飲んだ。確かにしんとなった。

シードだって、言葉を失った。金髪碧眼の、何と言う美少年。

別に、下心なんてなかった。純粹に、彼と仲良くなりたいたいと思っていた。

「初めまして。私、シルフィード・ケイドよ」

「……………」

「……………あなたは？どこから来たの？」

「……………」

席が隣になって、さっそく彼女が声をかけたと言うのに、リオはとも迷惑そうに冷やかに彼女を見下し、しまいには鼻で笑って、

「名前なんて、名簿で調べたらいいだろ……………。君に言う必要があるの？」

「……………」

シーダはぼかんとしてしまった。
これが、この二人の最初の会話。

いまや、バカカップルと言われるこの二人の、最初の会話。

「あの頃は嫌われてたからね、私。……心外よ、リオは私を、しつこく狙ってくるヤバい女だと思ってたのよ」

「覚えてるわよ。話しかけてもことごとくスルーされて、私も見てらんなかったわ」

「……………しまいにはリオのファンの女の子達に目を付けられるし」

シーダは、いやな事思い出したわ…と、写真越しに遠くを見ているようだった。

シャルロは「……………あんたも苦労したわよね。」と。

再び写真に目を向けた。

一番小さく映ってるのはフレイ。今と変わらず、チャラッチャラしていて、どうしようもない感じが溢れている。

小さくとも伝わってくる。

「うわ……。あの頃のフレイも、大概酷かったわよね。女の子とつかえひつかえで問題ばかり起こして。授業はさぼるし、リオには突っかかるし……。この時はよく教室に居たわね。貴重だわ」

「フレイとリオも仲悪かったよね……。喧嘩ばかりしてたし」

「そうそう。……その度にあんたが仲裁に入って、二人からウザがられてたっけ」

「……………」

“ウザがられる”と言う表現は気に食わないけど、正しいと思う。だって、リオは隣で、フレイは前の席だった。

そんな二人が私を挟んで喧嘩してたら、私の性質上止めに入ってしまふ。止めに入る度に、二人からは冷ややかな視線を浴び、フレイからは、「どうせ、俺たちと関わりたいただけだろ。御愁傷様。」とまで言われた。

この言葉は、今まで生きてきた中でベストスリーに入るくらいむかつく言葉だ。今思い出しても腹が立つ。

フレイとリオは、お互いがお互い、気に入らなかったようだ。フレイはリオの、あのすかした態度が気に入らなかったようだし、リオはフレイの、不真面目な所が気に入らなかった。

不真面目だったけれど、フレイの絵はいつも評価された。それがどうしようもなく、リオのプライドを傷つけたのだ。

「私はそんなあなた達を、陰ながらに見守っていました」

シャルロはわざとらしく、皮肉っぽく言った。

シーダとは一年生からルームメイトで、一番最初に仲良くなったので、ずっと側に居たけれど。

シーダは、フンとそっぽ向くと、

「そうね。あなたは一年生の頃は割とおとなしくしていたわよね。少しくらい助けなくても良かったんじゃないの？」

「だって、私が止めに入ったら火に油だもの。行方を見守る方が、ずっと楽しかったわ。いよいよヤバそうだったら、あなたを連れ戻しに行つてあげたじゃない。」

たまに、フレイとリオの喧嘩を懲りずに止めに行つたシーダに、二人の怒りの矛先が向く時があった。

そう言う時はシャルロが「売店ついてきて!!」とか言つて、彼女を助けていたっけ。

出来るだけシャルロは、関わらないようにしていた。

スノーもそうだ。

スノーは一年生から、異色な人材であつただらう。

彼は有名なロズベルト美術学院を家業に持つ家の三男坊で、その才能はこの学校に入学してくる前から名高かつた。当然、ダントツで

トップ入学を果たし、騒がれていた。

しかし彼は、何と言っても他人に興味が無く、基本的にローテンションで、ポーカーフェイス。天才様は何を考えているのか分からない、と言った感じであった。いつも眠そうで、授業中もよく寝てたっけ。

そんな彼が、初めて興味を持ったのがシャルロだった。

シャルロはスノーに次いで、二番目に入学した。彼女の名前は聞いた事が無くて、いわゆるダークホース。

彼女の絵こそ、初めて彼が感動した他人の絵と言って良いだろう。

「スノーって、本当に背が伸びたわよね。一年生の頃、フレイヤリオより、全然小さかったもの」

「今じゃ、フレイと変わらないものね。私も、まさかあいつとこんなに背の差が出来るなんて思ってたわ……」

「……シャルロはほとんど背が伸びなかったわね……」

シーダは意地悪そうに笑った。

今じゃあ、シャルロとスノーの二人が並んだら、背の差が凄い。

シャルロは投げやりに、「男子って卑怯だわ」と、言っても仕方無い愚痴をこぼす。

シャルロとスノーは、席が前後で、ほとんど他人に話しかけなかった彼が、シャルロにだけはよく話しかけていた。シャルロも彼とは居心地が良かったので、よく二人でフレイとリオとシーダの喧嘩を

見ていた。

気が合ったのだ。天才と呼ばれる二人が、こつもあつさり認めあつて、仲良くなつた。

普通なら、追われる恐怖とか、この地位を守りたいとか、負けたくないとか、そんな事を考えがちなのに。

自分を触発してくれる存在が、お互い嬉しかったのだらう。

周りからしたら、それは理解しがたく、むしろ気に入らなかつただらう。

天才の余裕か！おごりか！と、くだらない嫉妬をしていた者も居た。

四年生の始まりなんて、そんなものだ。

全然バラバラで、お互いを知ろうともしなかつた。自分勝手が多すぎたから。

「シーダがいくらウザがられても、くじけないでフレイとリオに関わっていったから、今こうして、五人で居られるのかしらね。……今の子にしては、あんたは相当根性があるわよ」

「…………私だって、別に好きであんな事してた訳じゃないわよ。何
度も、あんな奴らほっとこうって思ったもの」

「でも、ほっとけなかったんでしょ。……あんたって本当、良い意
味でおせっかいよね」

シャルロは写真を掲げて、側のソファに座った。

バラバラだった私たちを、今時珍しいおせっかいで、少しずつ紐を
結びつけていった。

シーダが居なかったら、今の私たちの関係はないだろう。

「…………今じゃ良い思い出ね」

シーダはにこりと笑って、シャルロの隣に座った。

この写真は、一年生の、本当にお互いを知らなかった、むしろ仲が
悪かった頃。

それぞれの表情が、今では珍しい貴重なものとなっている。

やがて、めげなかったシーダのおせっかいが実を結び、自分勝手な者たちの心をほぐして、柔らかくしていった。

彼女はとにかく心がしっかりしていて、器が広くて、自分にも他人にも厳しくて。怒る時は怒って。でもやはり、それは大きな優しさを感ずるものだったから。全てを包み込む包容力は、尊敬に値する。

いつしか彼女を中心に、まるで糸を引き寄せられるように、五人は関わり合っていく。お互いに興味を持ち始める。

リオは、いつしか彼女を愛してしまう。

でもそれは、また別の物語。

I
d
r
a
w

*番外編〜ニンフの言葉〜

太陽の光を一杯に浴びたこの花は

ギリシアの青い空にとても似合う

「終わったーーーー！！！！！！」

フォルテは机の上のあらゆる教科のプリントを宙にばらまいた。
今日、一学期の試験が全て終わり、学生は晴れて自由の身となった
訳だ。

「よく言つよ！！！！ どうせお前は全部満点だろ！！！！」

キクマサは今日のテストに何らかの不安がある様で、晴れ晴れとしたフォルテを恨めしく思った。

「何言つてんだよ。全部満点なんて取れる分けねえだろ。数学とか苦手だよ、俺は」

「むかつく奴だな。限りなく満点に近いくせに」

キクマサは余裕なフォルテに白けた視線を送り、自らの机に力なく座った。

美術学校とはいえ、三年生までは一般教養が入っている。勉強しなくていいイメージがあるけれど、決してそんな事は無く、レベルの高いルネ・ヴィルトンには、ちゃんと勉強してきた者が多い。

キクマサだって、並に勉強はできるが、なんせすれていた時代があるので。

「大丈夫だって。せつかく夏休みになったんだぜ！！ どこか遊びに行こうよ！！！！」

フォルテは瞳をキラキラさせ、気分はすっかり、夏休みモードだった。

「お前、実家に帰ったりするの？」

「……いや、あいにく俺は、帰る所が無くてね」

キクマサは別に、何て事なさそうに答えた。
実家に帰るなんて、まったくもって考えられない。

「……………そうか」

フォルテは空を見つめ、何やら日にちを考え込んで、

「俺が来週帰るから、それまでにどっか行こうぜ。せっかくギリシアにいるんだから」

「……………ここら辺何かあるの？」

「……………」

その時のフォルテの顔が忘れられない。

何と言うか、怒りと哀れみとやるせなさど、ちよっと笑っちゃいそうな、そんな顔。

「……………お、おま……………。ギリシアがいかに素晴らしい所か、全く知らないのか???それこそ神懸かり的な!!!!!!」

ドン!!!!!!!!と彼は勢いよく机を叩いた。

キクマサは少しビビった。

「ギリシアは西洋美術の根源であり、原点である!!! わかるかい!!! ギリシア神話発祥の地で、ゆかりの遺跡や神殿も多い。ギリシア神話は美術にも深く関わっているからね。であるからして……………」

フォルテは得意分野ですよと言わんばかりに、いまだにぺらぺら語っている。

キクマサはぼかんとして、途中から彼が何を言っているのか分からなくなった。ギリシア神話は授業で少し扱うから、何となく分かるけど。

「聞いているのかね!!! キクマサくん!!!」

「……………ごめん。途中から分かんなくなった。(キリッ)」

キクマサはきつぱりと、素直に謝った。フォルテは、

「……………ま、まあ……………いいや……………。これから嫌と言っほど分かるよ、ギリシアの魅力がさ」

「で、どこに行くんだよ。」

キクマサは、フォルテの熱い語りを逸らそうと、本題について。フォルテは斜め上の空を見つめ、「うーん…」と唸ると、

「やっぱりアテネにいるんだから、パルテノン神殿がポピュラーだな。俺はかれこれ三十回は行ってんだけど。お前行った事無いだろ。」

「……………パルテノン神殿……………」

この手の話に疎いキクマサだって、一度は聞いた事のある名前だった。

それもそのはず、この超有名な神殿は、世界遺産にも登録されていて、中学校の世界史の勉強で習っほどである。

ここ、アテネの守護女神“アテナ”を祭る、歴史性、芸術性共に優れた遺産であった。

「どうせだったら、レイヤルナも誘おうよ。俺たち男一人で観光地って、何か痛くないか？心が」

「……………それもそうだな」

キクマサの鋭い指摘に、フォルテは大きく頷いた。
キクマサに取っては、初めてで未知数なパルテノン神殿訪問となるのだが、それはある意味で運命的で、

我々がこれから、嫌と言うほど向き合っていかなくはいけなくなる、ギリシア神話との最初の接点。

それは序章。

知っているだろうか。

世界遺産を取り扱う国連の“ユネスコ”のマークは、ここパルテノン神殿がモチーフとなっている事を。

それほどに重要で、神聖な場所なのだ。ギリシアだけでなく、それは全世界にとっても。

「とは言っても、さすがに人が多いな……」

「しょうがないでしょ……。観光地なんですから。おまけに夏休みよ」

照りつける太陽の、真夏の光線。

パルテノン神殿は、いわゆる“アクロポリス”と呼ばれる丘の上にあつて、観光客はこぞつてそこを目指した。

「ルナシーはここにはよく来るの？」

キクマサは、ギリシア人でもある彼女に訪ねてみた。

「……うーん……。まあ、何度か来た事はあるけれど、フォルテほ

「どじゃないわね」

「実際現地の人間なんて、そう言うものだよ」

フォルテは、もったいなさそうに首を振った。

レイは意地悪そうに笑うと、

「あなたが例外なのよ。……おじさんが考古学者ですものね、興味もあるはずよ。……おじさん、今何を研究しているの？」

「……ん〜、確かここ数年はバビロニアについてかな……。バベルの塔関連について、何かに取り憑かれたように研究してるよ。ほっとんど家にいないぜ。俺も来週帰ったら、速攻アシスタントさ。……まあ、バイト代出るし、良いんだけど」

フォルテは、なんだかんだ言っただけ、楽しみにしているようだった。道理で、長いバケーションの時は、真面目に里帰りしていたはずだ。

一般人には理解しがたいロマンと言うものが、そこにはあるのだから。

パルテノンを前に、我々は何を思う？

古代の神殿の姿は、全てそのまま見る事は出来ないけれど、その威厳に満ちた姿は圧倒的に美しく神聖で、やはりそこには神の存在を信じられる。

「パルテノンのレリーフや彫刻は、ほとんどギリシアにはないんだ。昔戦争で、イギリスが持って行っちゃったから」

「それは、返還されたりしないの？」

「んー……、ギリシアはそれを望んでいるけれど、イギリスは、自分たちが遺産を保護したと主張してるからね。まあ、これからの成り行きさ」

キクマサは、目の前の壮大なパルテノンを見上げた。

鉄杵や工事作業が目立ち、全てを美しく見ることができないのは残念だけれど、白い神殿の姿は、青い空によく映えるから、よけいに輝いて見えた。

「素晴らしいわね……、大昔の人が、機械も何も無い中で、よくこんなに美しい神殿を造る事が出来たわね……」

レイは、片方の瞳で、一生懸命その姿を見つめていた。記憶に焼き付けようとして。

「……………」

ルナシーは口をつぐんでいた。

その時だった。

さつきまで、あんなにザワザワしていた観光客の波の音が、急に静かになったのだ。

四人は、パルテノン神殿があまりに美しくて見とれていせいで、その事に、すぐには気がつかなかった。

瞬きをした瞬間、何だか見ている世界の色が、少しだけ変わった気がした。

「……………あれ……………」

その事に一番始めに気がついたのは、フォルテだった。

フォルテはゆっくりと振り返る。それに釣られて、他の三人も振り返った。

ザアアアアアアア……………

生温い風が、向かい風となって彼らを迎える。
風の中に、不思議と笑い声を聞いた気がする。

柔らかい、暖かい、何だか懐かしい香り。

しんと静まり返った、空虚な空間。
そこには誰一人見当たらなかった。さっきまで、あんなに沢山の観
光客がいたのに。

空は相変わらず青くて、でも、何だか恐い。
穏やかなのに、ピンとしている、神聖な空気が。

「……………な、何で？ あれ……………？ さっきまで人がいたよね！！」

キクマサは信じられない光景に、驚いたのはもちろんの事。先ほどまでとは全く違う場所にいるような気がして、ザワザワ気が気で無い心を、隠しきれずにいた。

それは、フォルテも、レイも、ルナシーも同じ。

「……………閉館しちゃったのかしら……………」

「そんなはずは無い……………。それだったら俺たちだって、ここを追い出されるはずだから」

レイは眉根を寄せ、とても不思議そうにしていた。

ここに何度も来た事があるフォルテだって、こんな事初めてだと言うように、あたりをキョロキョロ不振に見ている。

「……………ここ……………」

その時、ルナシーが急に、何かを思い立ったように走り出した。

「……………！？……………え、ルナ！？」

それにいち早く気がついたキクマサは、彼女を追う。

誰もいないパルテノン神殿。

人々がいたときよりも、もっともっと広く、壮大に感じる。

そしてそれは、寂しくも感じる。

「……ちよつと、キク！！……ルナ！！！」

レイは、何が何だか分からないと言うように、走り出した二人を追いかけてようとした。

そして、ぴくりともしない隣のフォルテを振り返り、

「ちよつとフォルテ……！！ 何ぼさつとしているの……！！！」

フォルテに声をかけたが、彼は静かだった。

「……………？」

彼は、再びパルテノン神殿を見上げていた。
言葉を失うほどに、驚きの瞳で。

「……………フォルテ……………？」

レイは、不安げに彼を見つめ、そして、彼の視線をたどった。

「……………どうして……………」

フォルテは絞り出すように、やっと言葉をつくる。

「……………何で。……………全てが元通りなんだ……………。全てが……………」

あり得ない。

そこには、完璧な姿の、何一つ壊れ乱れていないパルテノン神殿の姿があった。

古代の神聖な空気はそのまま、姿だけは、まるで当時の時間が止まったかのように、完璧に存在していた。

これから先、誰も見る事が出来ないと思っていた、その姿が。

彫刻も装飾も、今やほとんど失われたものが、そこには在るべくしてあった。

「……………ルナ！！！」

キクマサは彼女の手を取った。

「……………いったいどうしたんだ。……………急に走り出して……………」

彼女はキクマサを振り返ると、再び視線を目の前に移した。

そっと、彼女は指をさす。その、アクロポリスから下の世界を。

「……………見て……………キク……………」

「……………」

彼女の指差すものを知った時、キクマサは驚きのあまり、言葉を失った。

何も言えなかったのだ。

本来なら、アクロポリスからはアテネの町が見えるはずなのに、下界は一面、ヒマワリの花畑だったから。

それは、どこまでもどこまでも続く、見渡す限りの。

「……………な……………何で……………」

人もいない。町も無い。ここにあるのは我々と、パルテノンの存在する、アクロポリスだけ。

「……………ここはいつたい、どこなのかしら。」

ルナシーは、なぜか凄く落ち着いてるように見えた。

少なくともキクマサよりか冷静で、どことなく寂しそうな。

目の前で、ヒマワリの揺れる姿が、現実かそうでないのかすら確かではない。

風に揺れる音は、ささやきのようにも聞こえる。

誰もいないのに、誰かに見られているような気もする。

クスクス、小さく笑っている。

“予言”

子供達が来たよ

ゼウスの与えたもう、宝石の子供達が来たよ。

太陽と月が、

曙と黄昏が、

バラ色の指をさしだす時。

時間を縛っていた封印が、もうすぐ解けると言ってるよ。

／以下省略

「……………今は……………」

知っている。

今はイマジンストーリーに、限りなく近い感覚であった。

でも、それは風のささやきのようで、最後まで聞き取る事は出来なくて。

「……………」

目の前で揺れるヒマワリと、金の髪をしたルナシーが、何だか現実のものではないように見えた。
真夏の光線が、そうさせたのか。

彼女の表情は、ここには無い何かを見ているようで。

そこにいるのに、遠く感じた。

一瞬、眩しい光に当てられて、少し意識が遠のいた。

ザワザワザワザワ……

人の波の音がする。

溢れかえった熱気と、観光客の残像が、目の前を行き来する。

「……………」

キクマサは、まるで夢から覚めたような心地だった。

「……………大丈夫？キク……………」

「……………ルナ……………」

目の前には、先ほどの彼女ではなく、いつもの知っているルナシーがいた。

さっきのはいったいなんだったんだろう。

「……………おい！！！！！！」

遠くから、人々をかき分けて、レイやフォルテがやってきた。二人ともやはり、何か思う所ありきな表情だ。

四人は顔を見合わせた。

「……………」

何も言わなくなつたて、何が言いたいのかは分かつていた。
でも、どういっていいのか分からない。

さっきの、あの数分の時間。

確かあの時だけ、僕は違うものを見ていた。

この時はそれが、一体何なのか、知る由も無かった。

神の力を宿した神殿。

見えているのが本当の姿なのか、偽りの姿なのか。

聞いたのは、誰の声だったのか。

I
d
r
a
w

*番外編〱団長総会〱(前書き)

エジプトプラン前の話です。

*番外編〜団長総会〜

もう時間がないのだと、

この学校にいられるわずかな期間を考える。

ルネ・ヴィルトンの一番奥の、暗い林の中に、彫刻科の棟があった。そこは、他の科の者が用事も無しに立ち寄るには、あまりに遠く、そして少し怖い。

彫刻科の棟は、造りも古く、忘れられた古城のように荘厳だ。

「午後から団長総会ですか……分かりました」

その棟の一番上に、彫刻科ヴィライアーの会議室があった。会議室とはいえ、沢山の彫刻作品や絵画が飾られていて、少し薄暗い部屋だ。

そこには今、団長のパリスと、副団長のルーンしかいなかった。

「今年のヴィライアーの予算の事でしょう。……たまには他の科の団長方とお話ししたいですね」

「……そうか」

ルーンはそれだけ言うと、パリスの読んでいる分厚い本の、そのページに目を落とした。

そこには古い暗号のような文字と、何パターンかの鍵の絵が描かれていた。

「……何度読んだ所で、何も分からないのは分かっているんですけどね……。結局は、地道に探して行くしか無いんです。……ヴアレリーの日記さえあれば、こんな事しなくても、全ての鍵の在処が分かるかもしれないのに……」

「……しかし、今やヴアレリーの日記は我々の元には無い……。血眼になって探していても、出てこない」

「そうです……。あの日記は盗まれた……」

パリスは手元の本をパタンと閉じた。

瞳は相変わらず穏やかで、何を考えているか分からないけれど、少なからず事態への憤りは伝わってくる。

団長総会とは、六つの科のヴェイライアー団長が集まって、様々なことを話し合う会議であった。

今日のこの会議が、今年選ばれた各団長の初顔合わせとなった。

絵画科の団長、ハク・リュオンはこの日がとても嫌だった。他の科の団長がどのどいつになったのかは、噂で聞かえてくるし、その中に嫌な奴がいる事だって分かっていた。

まあ、基本的に団長同士は仲が悪い。

「……………やあ、ハク・リュオン。君が団長だった？……………」
（笑）」

「……………（笑）って何だよ……………」

団長が中央棟の会議室に入った時、彼がやってきたのが分かったと、すぐさま反応した者がいた。

淡い、軽く波打った金髪に、人を小馬鹿にしたような瞳。

彼はリュオンに嫌味をぶつけると、机の上の紅茶を優雅に飲んだ。

彼は映像科のヴィライアー団長、ジーク・ウィリアムズであった。

このジークこそ、リュオンが心から消えてくれ と願う、最強にウザあつかましい奴で、この二人は昔からどうにも気があわない。

彼はハリウッド女優、俳優の両親を持ち、彼が生まれた時は雑誌で表紙を飾ったほどで。

しかし、普通は両親のように俳優になりたいと思う所、彼は何を思ったのか映画を作りたいとこの道にやってきた。

基本的にナルシストで、かなり電波な性格の持ち主である。

「およしなさい、ジーク。絵画科の団長さんは、気が立っておられてよ。あまり突っかかると、エーゲ海に沈められてしまいますわ。」

「ハハハ！！ その通りだね、オペリア君！！！！」

「……………」

ジークは隣の女子学生に賛同し、二人してこちらをニヤニヤ見ている

る。リュオンは怒りバロメータの限界に挑戦させられている気がした。

この女子学生は、ファッションデザイン科の団長、オペリア・フォードで、長くカーリングされた髪をハーファップにしていた。背が高く、スタイル抜群で、既に世界で活躍しているカリスマモデルである。

ジークとオペリアはいつもタッグを組んで、何かとリュオンに突っかかる。実績から言って、今年の団長はこいつらだろうと腹をくくってはいたが、実際やはりうるさい。

「僕はてつきり、レッド君が団長になるものと思っていたよ」

「レッドさんてば、見目麗しく、人望も厚いですものね。あの方でしたら、わたくしも納得ですわ」

「……………レッドは寮長になったんだよ……………」

リュオンは額に浮かび上がる（怒）マークを増やしていた。椅子の座り、ジークとにらみ合っている。

「文句あんのか……………あ？このとんでもナルシストさんよお。お前の映画は何かアンモニア臭いんですけど」

「何だと？没落貴族マフィアの分際で。ちなみに君の絵は基本的にしつこい」

ピシーン

二人の間で、何とも言えない稲妻が走る。
お互い机をバンと叩き、一步も譲らぬ態度だ。

「全く……小学生の喧嘩ですわね」

オペリアは「ハアー」とオーバーに首を振ってみせる。
その時だった。

バタン！！！！

激しく扉を開ける音で、いがみ合う二人の喧嘩が一時中断された。
そこには、頭にタオルを巻いた、大柄の男がいた。

「おおおお。やっぱりお前達が団長になったのか！！！」

「……………」

「……………君か」

ジークはシラツとした瞳で、その男を見た。

こいつは、建築ガーデン科の団長、レクサ・ホープキンスであった。

体力ありそうながっしりした体系で、その割にとても人の良さそうな表情だ。

美大では珍しい庭を扱う学科の、代表生徒と言ってもいい。彼は若

巨匠と呼ばれ、既に会社を立ち上げ世界で活躍している。人はいいが、基本的に単細胞で、お気楽。ジークもオペリアも、こいつには大して突っ込まない。基本的にもツナギで、割と上品な装いの団長が多い中、レクサは少し浮いている。

「俺の思っていた通りの顔ぶれだ。」

彼は、今まさにここで喧嘩があっていたにも関わらず、空気も読めずに楽しげだ。

ジークとリュオンは、やる気がそがれたと言うように、お互いの椅子に座り直した。レクサはリュオンの隣に座る。豪快に椅子を引いたから、その振動でリュオンの席がガタガタした。

「よお、リュオン。オメーさんが団長ってことは、副団長はティアンかい？」

「……いや。メルベリーだ」

リュオンは腕を組んで、素っ気なく答える。
すると、ジークが片口を揚げて、

「何と言う事だ。メルベリー嬢のような美しいレディが、このような野蛮な男と組もうとは。君にはもったいないというか、不釣り合いというか……」

「てめえ、そろそろ表出しようか……」

リュオンはガタンと立ち上がり、ジークの胸ぐらを掴んで、何とも言えないオーラをにじみ出していた。

ジークも負けじと手に持つ紅茶カップを、リュオンの頭の上でスタンバイ。

と、これまた良い所で扉が開いた。

「……………すみません、取り込み中ですか……………」

茶色いブレザーに赤の細いリボンをした、アプリコットブラウンの髪青年。彼はこの光景を見た瞬間、少し固まって、こう反応した。ジークは彼が誰か分かると、

「……………いつ、いやいやいや、何とも恥ずかしい所を見られてしまったよ。このクロツパチのせいだね。」

「てめえ！！！クロツパチって何だ！！！」

ジークはリュオンからサツと離れて、何事も無かったように優雅にお茶をし始めた。

団長もぶつきらぼうに椅子に座ると、やってきたその青年を見た。

やはり、彫刻科はこの男が団長になったか。

パリス・ヴァレリー。この男は、何とも言えない存在感があるというか、不思議な空気があるというか。

それは彼の作品にも現れるように、とても不思議な引力、魅力を感じる。とりわけ特別な賞に出したりしないのだが、彼の作品は間違いなく彫刻科では最も優れているだろう。

いつもにこやかで、物腰が柔らかで、

逆に言えば、何を考えているのか分からない。

『しかしまあ……………このメンツの中では限りなくまともな方が……………』

リュオンは、最悪なメンバーの中、こいつだけが救いですかねえと、他の奴らを冷ややかに見る。

パリスはオペリアの隣に腰を落ち着かせた。

オペリアはうつとり彼を見つめると、

「やはり、彫刻科はあなたなのですね。パリスさん。……………パリスさんが団長でしたら、名高い彫刻科も、更なる飛躍を目指せるでしょう」

「……………オペリアさん。あなたの話もよく耳にしますよ。あなたは世界の認めるトップモデルだ。両立はなかなか苦労する事もあるでしょうが、あなたの力なら大丈夫でしょう」

「パ、パリスさん……………」

パリスはきつと、社交辞令でこう言ったのだろうが、オペリアはたまらなく胸をときめかせていた。

あの、自分大好きなジークでさえ、彼の事は卑下出来ない様で、

「どこかのクロツパチとは違って、よく出来たお人だ」

とか言ってる。

リュオンは再びジークにつかみかかろうとしたが、隣のレクサに宥められた。

「デザイン科の団長が来ないですわね」

「今年のデザイン科団長はリーベルだ。それは去年から引き続き変わらない。経験が長いから、今年は彼が総会長をするそう。準備がかかるのだろう」

「……………」

リュオンは、まだここにいないデザイン科団長の事を考えた。

デザイン科は珍しく、去年から四年生のリーベル・キルマーが団長をしていた。今年五年生になった彼が、引き続き団長と言う訳だ。そして彼が、この六人の団長をまとめる総会長となった訳だ。

「……………やあ、悪い。遅くなってしまったようだ」

噂をすれば何とやら。デザイン科団長で、会長となったりリーベル・キルマーが扉から入ってきた。

リュオンは、その男を探るように見ている。

リーベルは背が高く、いかにもエリートそうな、育ちの良さそうな優男の風貌だが、リュオンはこいつほどいかがわしく感じる団長はいないと思っていた。

単に、うちの鬼眼鏡に雰囲気似ているからではない。

笑顔の裏に、何か違和感を覚えるのだ。

そうはいつても、この男、さすがは例外に二年も団長をしているだけあって、実力も凄い。

ルネ・ヴィルトンにとつて、デザイン科は歴史が浅いが、今では需要の多い商業的な学科なだけあり、絵画科をも凌駕する勢いだ。その中で、今最も注目を浴びているグラフィックデザイナーが、彼なのだ。

「さて、いきなりだが本題に入ろう。これからのヴィライアーの予算について。まずは最初の研修をどこに考えているか教えてくれ」

リーベルは机に肘をついて、組んだ手に顎をのせ、他の団長に促した。

この男の優れている所は、どんな人材ですら上手く使える所にある。人の上に立つ、優れたカリスマ性があるのだ。それは尊敬すると同時に、恐ろしくも感じる。

「……わたくしたちファッションデザイン科は、やはり始めと言う事で、パリに行こうかと……」

「僕たち映像科は、アメリカに招待されていてね。最初から大仕事さ」

オペリアとジークは、何やら自信ありげに堂々と言ってみせた。リーベルは納得のいくように頷いている。

「……パリスさん……、彫刻科はどこへ？」

リーベルは急に、パリスに振った。

パリスは一度リーベルを見ると、落ち着いた口調で、

「……………そうですね……………僕達はインカの地に赴こうかと……………」

「ほう……………。いつもながらに彫刻科は歴史深い地に興味があるようだ……………」

リーベルの口調は穏やかだったが、パリスに向ける探るような視線はそのまま。しかし、パリスはそれを軽くあしらい、

「……………彫刻は歴史と共にありますからね……………。絵画もそうでしょう……………？ リュオンさん、絵画科は始めにどこへ？」

「あ？ ああ……………俺たちはエジプトに行こうと思っている……………今年は低学年が多くてね。始まりの研修は、古い文明でも学ぶのが良いかと思っただけ……………」

リュオンはパリスに投げかけられ、不意打ちだったが、特になんて事なく報告した。

パリスはその時、少し眉根を動かしたが、その反応に気がついたものはいない。

「……………エジプトですか……………良いですね……………」

パリスはそう言うと、目の前の紅茶を一口すすった。

視線をわずかに逸らし、何やら静かに考え込んでいるように見える。

リーベルはフツと笑うと、

「まあ、最初の研修はこの一年の中で、一つの道しるべとなる研修だ。……気楽な観光とは訳が違う。我々の活動は全て、この学園の全生徒によって支えられているのだから、その事を君たち団長が、しっかり団員に伝えなくてはいけないよ……。それが団長の義務だ」

では次に進もうと、目の前のプロジェクターに、今年一年の予算についての表を写した。

全員がそちらを見る中、レクサがおずおずと、

「……………あの……………建築ガーデンは……………一応イギリスに行きます、よろしく」

「……………」
「……………」

皆がみんな、気まずそうに顔を見合わせた。
リーベルはコホンとわざとらしく咳をすると、

「……………わかった。……………良い選択だ」

興味無さそうな無表情で、それだけ言った。

「……………ルーン……………知っていますか？」

「……………何がだ？」

「……………今年の絵画科最初の研修は、エジプトらしいですよ」

「……………」

彫刻科の棟の最上階。ヴィライアーの会議室に戻ってきたパリスは、ブレザーを脱いで、椅子にかけた。

ルーンは静かにパリスを見つめると、

「……………何を考えている……………パリス……………」

窓から外を眺めている彼にゆっくり問いたです。

パリスの視線は、木々のうごめく林を抜け、遠く海の向こうにあった。

もしかしたら、これは、

絶望的な状況に変化をもたらす、一つの運命なのかもしれない。

「……………エジプト攻略を、絵画科に任せてみませんか……………」

「……………何……………!?!?」

ルーンは珍しく、表情に変化を見せる。

「正気が……………?大御所様方が、いったいどう言うか……………」

「あんな頭の固い連中には報告しない……………。大御所の重い腰が上がるのを待っていたら、とてもじゃないけど間に合わない……………。本当

は今すぐにも、鍵を集めてしまわないといけないんだ……」

パリスは窓のガラスに手を当て、瞳を細めた。

彼の周りで、何か不思議な空気が漂う。

「この学校には、後一年しか居られないんだ……」

さっきまで晴れていた空が、だんだん怪しい雲を帯びていく。まるで、僕たちの混沌とした、いばらの道のように。

それは、今年のヴィライアーが決まっただけの事だった。

春なのに、嵐が酷くなった、稲妻の走る夜。

変革を望んだ彼らは、

運命的に、絵画科と関わる事になる。

I
d
r
a
w

*drawコラムスペシャル〜シーズン1ダイジェスト〜

< - draw - とは? >

ルネ・ヴィルトン美術学校の特待生である“ルネ・ヴィライアー”を中心に、芸術と言う観点から、世界の文化や神話、遺産などを考える物語。背景に神話的な物があるため、非現実なことも起き、“魔力を秘めた美術品”と言う物がたびたび眩かれる。ギリシアが主な舞台となっていて、ギリシア神話と縁深い物になっている。

< シーズン1のあらすじ >

シーズン1を振り返ります。シーズン1を読まずにシーズン2にトライする方は、ぜひお読みください。振り返りたい方もぜひ。シーズン1から読むから、と言う人は、ネタバレになるのでご注意ください。

〈 導入編 〉 (1 ~ 5 話)

主人公オノダ・キクマサは、日本で外国の老女に出会う。老女の名をカトレアと言い、くすぶっていた彼に絵を教える事になった。彼女に絵画を教えてもらって三年後、キクマサはカトレアの勧めでギリシアの“ルネ・ヴィルトン美術学校”に入学する事になった。ル

ネ・ヴィルトンには面白い特待制度があり、選ばれた16(+2)人は、学校を代表するルネ・ヴィライアーとなる。キクマサはルネ・ヴィライアーを目指し、年に一度のコンテストに挑む。

〈ルネ・ヴィライアー・コンテスト編〉(6〜16話)

キクマサは二年生になり、再びルネ・コンに挑戦する事に。一年生の時に仲良くなったフォルテ、レイ、ルナシーと共に、一次試験、二次試験とクリアしていった。しかし、三次試験の時、同級生のジエシカが、レイの右目を斬りつけると言う、前代未聞の事件が起こる。その事件をきっかけに、レイとフォルテはコンテストを辞退。キクマサとルナシーは二人の分までやりきると誓う。結果、キクマサとルナシーは“ルネ・ヴィライアー”になる事ができる。二年生を対象に、一次審査の作品で判断される“推薦ヴィライアー制度”によって選ばれたレイ、フォルテも、一年契約のヴィライアーに。四人はこれから、ヴィライアーとして、世界中の研修地に赴く事になる。

〈エジプトプラン編〉(17〜63話)

シーズン1のメインストーリー。ほとんどがこのエジプトプランで構成されている。最初の研修地であるエジプトに訪れた、新しく編成されたルネ・ヴィライアーたち。彼らは“王家の谷”で、古代エジプトにタイムスリップしてしまう。そこは“アマルナ芸術”の時代。ツタンカーメンの死に隠された出口の“鍵”を見つけなければ、現代に帰れないと言う事だった。古代エジプトの宗教観や芸術に触

れ、時に死と向き合い、ヴィライアーたちは現代に帰るために奮闘するのである。

ポイントワード：鍵、黄金のマスク、アマルナ芸術

くつなぎく（64く71話）

ピックアップしたヴィライアーたちの個別ストーリー。次の研修までの日常。

くレイニーブルー・ノスタルジア編く（72く77話）

ある日、日本の外務大臣が、このルネ・ヴィルトンに訪問する事になった。キクマサは新聞でその事を知ったのだが、その外務大臣とはキクマサの父であった。父とは疎遠になっていたキクマサだが、この事に動揺してしまう。父と再び出会った事で、キクマサは高熱を出し、寝込んでしまう。今まで心に隠しておいた、過去の記憶と、キクマサは今一度向き合う事になる。それはキクマサに取って、とても辛い事でもあった。母の自殺、父の再婚、奪われていった自分の居場所、そういう思い出したくない記憶をまさぐって、当時の心境と今の自分の心境の違いに、少しずつ触れていく。

以上、シーズン1の振り返りでした。
主人公キクマサの過去に始まり、過去に終わったシーズンでした。

絵画科ルネ・ヴィライアーたち

この物語において、登場人物の軸となる18人の紹介です。一年生から五年生まで、それぞれの関係性や、今後の注目点など、学年ごとに分析していきます。

〈二年生〉（メイン学年）

文字通り、主人公とヒロインを含むメイン学年。まだ二年生と言う事もあり、未知数な可能性を秘めた期待の学年。四人とも一年生から仲が良いが、高学年の関係ほどお互いを知っている、と言うのはまだまだ。基本的に真面目なメンバー。他学年からは“ほのぼのの学年”と言われ、今の所良い子たちである。先輩の大胆さにもまれながら、少しずつ成長していく、そんなこれからの学年である。

*オノダ・キクマサ（ルネ・アメジスト）

不良時代を乗り越え、絵画に目覚めた青年。一応主人公。家族との過去が大きなトラウマになっている。クールそうに見えるが、別にそう言う訳でもない。

*ルナシー・ミディエム（ルネ・トパーズ）

見た目は金髪の美少女だが、心の中を晒す事の無い、隙のない性格。自分自身、その性格を十分理解している。レイとの力の差に、落ち込む事がある。

*フォルテ・ゴットバルト（ルネ・クリスタル推）

考古学オタクの、キクマサのルームメイト。お調子者のようだが、かなりの切れ者。この学校に入学した理由は、いずれルネ・テクタイトになるためらしいが……？

*レイデル・リローズ（ルネ・ペトリファイウッド推）

二年生きつての天才と言われている。しかし、ルネ・コンの途中で右目を失明すると言う不幸に見舞われる。フォルテとは幼なじみで、彼への依存は強い。

『二年生の今後の注目点』

- ・キクマサの過去との決着。これは今後の日本プランにて。
- ・ルナシーの心にどれだけ歩み寄れるのか。彼女の鉄壁の仮面と、その理由。
- ・エジプトプラン時に、フォルテの身に起こった大時計との関連性。
- ・レイの右目について。

以上、二年生でした。

（五年生）（最高学年）

ヴィライアー幹部や、寮長の揃った、一番上の学年。幹部三人と、レッド&ナギの二手に分かれる事が多いが、別に中が悪いと言う訳ではなく、五人で居る事もある。基本的に個人プレイ派が多く、協調性はそんなに無い。しかし、五人の関係を暴くとかなりドロドロしてしまうかもしれない。卒業間近と言う事もあり、後半は卒制に追われる事になる。卒業後の進路について考える場面が見られる。

*ハク・リュオン（ルネ・テクタイト）

絵画科ヴィライアー団長。俺様主義だが、以外と心配性。団長のくせによくいじられ、なんだかんだ言っても慕われている。見た目は怖く、中国マフィアの跡取り息子。

*メルベリー・セレネーム（ルネ・パール）

副団長。穏やかで清廉潔白な、ミス絵画科。生徒の憧れの女性である。一步下がって団長のサポートをするなど献身的だが、世間知らずなお嬢様な一面も。ティアンのいとこ。

*ティアン・レーゼス（ルネ・ターコイズ）

見た目は真面目そうな七三眼鏡だが、基本的には変人。頭がよくかなり鬼畜だが、たまにテンパって思いもよらない行動をとる。団長補佐としては優秀。メルベリーには過保護。

*レッドリー・ヘッドバーン（ルネ・ルビー）

爽やかイケメンで、絵画科男子寮の寮長。皆のカリスマと慕われている。明るくポップな性格で、後輩にも気さくに話しかけてくる。

病気の姉が居るようだ。

*サイオンジ・ナギ（ルネ・ダイヤモンド）

部屋着に着物を来ている純日本人。艶っぽい美女だが、ずぼらで面倒くさがり。自分の日本画をヨーロッパで評価してもらったためにこの学校へ来た。レッドとは友達以上恋人未満な関係。

『五年生の今後の注目点』

- ・幹部三人の関係。中国プランにて。
- ・レッドの姉について。
- ・ナギの実家と、キクマサの過去の接点。
- ・五人の卒業後について。

以上、五年生でした。

（四年生）（黄金期学年）

ルネ・ヴィルトン史上最高の黄金期と言われた学年のヴィライア。天才肌が多く、他の学年とは違う存在感がある。しかし、常人では理解出来ないような問題をたびたび引き起こす学年でもある。五人はやたらと仲がよく、常に行動を共にしている。昔は仲が悪く衝突していたが、ある事件がきっかけで仲間としての意識が芽生える。個性が強いため、次の最高学年として、ヴィライアーを引っ張

っていけるか心配されている。

* シャンデリー・リオール（ルネ・ガーネット）

通称リオ。金髪碧眼の完璧な王子として、学校中知れ渡っているが、最愛の彼女持ち。同じヴィライアーのシードと付き合っている。今ではおっとりしているが、昔はひねくれていた。

* シルフィード・ケイド（ルネ・カーネリアン）

通称シード。素朴な外見とは裏腹に、底知れぬパワフルさがあり、誰よりも命というものを重んじている。リオと付き合っている。四年生の中では唯一の常識人。フレイには母親的なおせっかいを焼いてしまう。

* フレイ・レステヴァン（ルネ・エメラルド）

学年きつてのプレイボーイで有名。チャラつとした風貌だが、マナーはわきまえている。四年生の関係が好きで、実は大切に思っている。最近三年生のジェルにちよっかいを出すのがお気に入り。

* シャルロ・グレディア（ルネ・アンバー）

賞金女王として名高く、絵画科の二大看板の一人。その名の通り女王様気質で、小柄だが気性が荒く、DS。なぜかリアルファイトも強く、団長と喧嘩しても勝てる。スノーをライバル視している。

* スノーフリーク・ロズベルト（ルネ・オパール）

ルネ・ヴィルトンの至宝と言われる天才中の天才。世界最高峰の新人賞を取ったが、辞退。基本的に淡々としていて、何を考えているのか分からない。口数が少なく、常に眠そう。シャルロの絵が好き。

『今後の四年生の注目点』

- ・シャルロの正体。これは中国プランにて。
- ・スノーとシャルロのライバル関係。
- ・四年生全体の過去。
- ・リオとシーダ、フレイの関係。

以上、四年生でした。

（三年生）（特殊学年）

一番特殊な学年と言えば、三年生である。たった二人しか居ない上、カイは仕事と掛け持ちしているため、なかなか学校に居ない。ジェイルは異常なまでの男嫌いで有名。今の所二人に接点は無く、学年として意識出来た事は無い。単体で見れば、二人とも個性的な人材だが、学年としては存在感が無い。

*カイ・ヴォストン（ルネ・ハウライト）

学校で一番の有名人。世間を鑑定ブームに巻き込んだ“鑑定王子”。レギュラー番組を持っていたり、CMを5つも持っている。若くして国際鑑定士の資格を持っていて、その才能は彼の瞳にある。過労死しそうな忙しさ。

*ジェイル・クォーシヤン（ルネ・サファイア）

男嫌いなクールビューティ。意地っ張りで、頑固だが、乙女チックな一面もある。いわゆるツンデレで、本人にその自覚は無い。最近フレイのちょっかいがストレス。カチューシャがポイント。

『今後の三年生の注目点』

- ・カイの瞳と、魔力を秘めた美術品の関連性。
- ・ジェイルとフレイの関係
- ・カイとジェイルの関係
- ・カイは卒業出来る単位を、取得出来るのか否か。

以上、三年生でした。

～一年生～（カオス学年）

そもそも、今までのヴィライアーに一年生が選ばれた歴史は無く、今回は異例。二人の一年生がヴィライアーに選ばれた。金持ちおぼっちゃま君と、電波系野生児のでこぼこコンビではあるが、無邪気で仲良し。しかし、二人とも一年生で選ばれただけあり、かなりの奇才の持ち主。今後五年間、ヴィライアーとしてどうなっていくのか面白い学年である。いたずらをやらかし、団長に怒られる事もたびたびある。

* ヘルクロウ・ラヴィーニ（ルネ・アクアマリン）

華麗なる一族の出身で、それが大きなコンプレックスになっている。気が弱く、学年のジャイアンにいじめられる事もある。その度にクレハが助けに入る。実は許嫁が居る。強い男に憧れている。

* クレハ・ドルフォード（ルネ・コーラル）

運動神経抜群の野生児。性格は無邪気で、かなり電波。何を言っているのか理解するには時間がかかる。チョコレート中毒で、お菓子を常備している。何か秘密をもっているらしい。

『今後の一年生の注目点』

- ・クレハの秘密。
- ・エジプトで手に入れた卵の行方
- ・華麗なる一族ラヴィーニ家について。
- ・二人の将来が心配な件について。

以上、一年生でした。

80：中国プラン〜遠ざかる音〜

新しい物語は、我々の戸惑いすら追い越して

現実を容赦なく突きつける

彼らを導くために

中国プラン

団長は心臓が痛くて仕方が無かった。
自身の国、中国へ皆を連れて行く事は長年の夢でもあったが、心の中ではあまり賛成はしていなかったと思う。

中国研修の案が持ち上がったのは去年だった。
自分がまだ四年生だった時、いまだにルネ・ヴィルトンの研修が行われていないアジアに目を向けようと言う風潮が漂っていた。そこで目をつけられたのが中国と日本だった。

最初、団長は嬉しく思った。中国には歴史深い遺産も、誇れる文化も文明もある。素晴らしいのはヨーロッパだけではないと常に思っていたからだ。

しかし、だんだん不安を抱く。だって、自分が中国へ戻ると言う事、自分がマフィアの跡取りである事。
もしかしたら、ヴィライアーを危ない目に遭わせる事になるかもしれない。

それでも、中国研修をはっきりと実行に移す事になったきっかけは、

あるべくしてそこにあった。

それは、去年の冬の事だった。

長年、行方を眩ましていた、中国王家の秘宝“白龍の玉”が、再び中国に還された。

当時、それは大々的なニュースとなり、世界を震撼させたのだ。なぜなら、その玉は音も無く紫禁城の屋根の上に置かれていたからだ。誰が置いたのかも、いつ置いたのかも分からない。しかし、保存状態は良く発見され、美術品を巡る“謎”として、話題に上がった。

今、その玉は、故宮紫禁城の美術館に展示されている。今の時期しか見ることができないらしい。

それが、この研修を実行に移した一番の目的であった。

「……………玉……………か……………」

中国の芸術品マニアならば、当然“玉”の存在は知っている。ハク家、もとい黒龍会も、芸術品としての玉をいくつも抱え込んでいる。本当は相当な価値のあるものまで。

実際、この世の中で、表に出ている名作がいくつあるのだろう。もしかしたら、裏の世界に埋もれている名作の方が多いのかもしれない。その世界でしか手に入れる事できない、際どい駆け引きを必要とする美術品たち。

「今更後悔したって遅いよ。もう、研修は始まってるんだ」

「分かってる。……あいつらを危険な目に遭わせるわけにはいかない。そのために、念入りに計画を立ててきたんだ」

「……………君が団長ってだけで、とんだ苦労だね」

ティアンは、自分もその世界の住人なのだとして理解した上で、ジョークにしてはキツイ一言を投げかける。

団長は眉根を潜めて、それでも、

ただならぬ予感と胸騒ぎを無視する事はできなかった。

研修の前日、四年生はフレイとスノーの部屋に集まっていた。次の日が研修日で、どうせきつと飛行機で沢山寝れるから、ここで一日中宴会でもしましょうよ。そう言った四年生らしいノリだった。

「でも、ほんつと汚い部屋ね。スノーとフレイの部屋って。……特にフレイのスペース」

シーダは、見慣れた部屋のはずだが、いつもながらに顔をしかめる。

男二人の部屋って、どうしてこう、むさ苦しいのか。

「そんな事言うんだったら部屋を片付けてくださいよ、シードお母さん」

フレイは、部屋の中央にある丸テーブルのゴミをザザーッと袋に入れてしまうと、みんなが座れるスペースを作ろうとした。

「この前片付けたばかりじゃない。私はね、分かったのよ。甘やかしてばかりじゃ、本人は何もしないってことがね。だからあなたたちで片付けなさい。……スノー、あなたもよ。……何関係ない顔してるのよ……」

シードは腰に手をあて、だらしない男二人に指導。スノーは渋々窓を開ける。

基本的に、四年生が集まるのはスノーとフレイの部屋だった。リオの部屋は、ヴェイライアーではないルームメイトが居るし、シャルロとシードの部屋はもつてのほか。この二人が許さない。

リオはくすくす笑いながら、男子共の片付けを手伝い始めた。

「もう！！ リオったらすぐ手伝っちゃって……」

「だって、その方が早いよ。シードの言う事はもつともだけどね」

「どうしてあなたはこんなにしっかりしてるのに、この二人は自堕落なのかしら」

シードは憂いを込めた、しかしうっとりとしりおの背中を見ているよな、乙女の表情だった。フレイは面白く無さそうに。

「じゃあ俺が、常日頃部屋を綺麗にしてるような神経質だったら、イメージ的にどうよ」

「……………気持ち悪い……………」

「だろ？……………つてスノー、お前が答えるな！！」

スノーは本気で気持ち悪そうに呟くから、フレイは冗談のつもりで言ったのに軽く心に刺さる。

シードは「そんな事無いわよ！！」と積み重ねた洗濯物を臆する事無くたたみ始める。

「女の子はそう言うギャップに弱いだよ。見た目ちゃんぽらんでも、意外としっかりしてるんだーって」

「ほほう。俺にこれ以上モテろと言う訳か」

しかしフレイはさらっと受け流し、むしろ自分に浸り出した。

リオはやれやれと首を振りながら、そう言えばと言う様にキョロキョロしている。

「あれ……………？ シャルロは？」

「ああ……………買い出しにいつてるわよ。お金は、今日ゲームで最下位だった人が払うってことで」

「マジか！！ そんなの、シャルロ絶対払わないんじゃない。あいつ、ゲームとか、スポーツとか、絶対負けないじゃん。金がかかると特に！！ それ分かっててルール決めただろ。後でぜってー意義立て

してやる」

フレイは丸机をカンカン指鳴らし、口を尖らせた。流石に四人で片付けてるだけあって、ある程度居心地の良いスペースを作るのに、時間はそうかからないようだ。

キクマサは売店にいた。

絵の具を買い足しにきたついでに、辛いミントガムを買っておこうと思つて。研修中のリフレッシュに役に立ったり、乗り物酔いを防いだり、ただ単に口寂しいときのお供に、いつも常備している。

そして、キクマサはかなり辛口が好きだ。黒いパッケージの奴。でも、この前女子にあげたらえらく不評で、もだえていたので、甘いガムも買つところと思つた。あれはあれで、見ていて面白かったが。

いぎ、ガムを棚から取つた時だった。

急に目の前が暗くなる。

「だーれだ!」

「……………」

キクマサは一瞬唖然とした。いきなりだったと言う事もあるが、あまりに気配無く背後を取られた事で、びっくりしたのだ。しかし、聞き覚えのある声。

「…………え…………? シ、シャル口先輩ですか?」

「あら〜…………あったり〜。もうキクマサ君には効かないわね」

彼女はパツと手を離すと、いつもみたいに不敵に笑った。

「いや、マジでビビりましたよ。だって、エジプト研修以来ですからね」

「そう言えばそうね。学年が違つと、研修以外でなかなか会わないものね。…………でも、聞いたわよ。あなた熱出して倒れたんでしょ?」

「…………はは。…………ま、まあ…………お恥ずかしながら」

キクマサは視線を逸らし気味で、きつとヴァイラー中に広がつてゐるんだろうなつて、情けなくなつた。

シャル口は「ふーん…」と、それ以上突っ込まない様にしていたが、キクマサの手に持つ二つのガムを見ると、それをひよいと取つて、自分の買い物かごに入れた。

「おごつてあげる。なに、気にしないで」

「え？ いや、自分で払いますよ！！」

「なーに言ってるのよ。私を誰だか知ってる？ この学校の賞金女王よ。要するに、この学校で一番、自分で稼いでるってこと。…あんたもいつか、後輩におごってやりなさい」

シャルロは、キクマサが止める間もなく、つかつかレジに向かう。彼女の買い物がごには、異常に沢山のお菓子とか、飲み物が入っていた。

あわあわしながら、キクマサが彼女を追いかける。

「い、いいんですか!？」

「いいわよ。このくらいしないと、先輩らしい事ってなかなかできないじゃない？ あなたは黙って、私におごってもらおうの!!」

「……は……はい……」

シャルロの前では、キクマサは言う事を聞くしかできない。彼女の言葉や口調は、どうにも逆らえないような強さを感じる。こういう人は、一人でもたくましく生きていけるんだろうな。

それにしても、やたらと沢山買うんだな……。

「言っとくけど、これは私だけで食べる訳じゃないから。四年生全員の貫徹グッズなのよ」

「え……？ あ、いや、そんな……。って、貫徹するんですか？」

キクマサの心を、まるで読んだかの様に、凄いタイミングで彼女が突っ込みを入れた。キクマサはドキツとしたが、“貫徹”と言う言葉にさらに驚く。

だって、明日から研修ですよ。

「中国研修って明日からですよ？　だ、大丈夫なんですか？」

日本研修は明後日からで、日にちが一日ずれている。しかし、とても明日、自分たちが貫徹しようとは思わない。四年生って不思議と言うか、パワフルだなとは思っていたが、凄い元気だな。

「貫徹しとかないと、飛行機の中で寝れないのよね。最も辛い事は、長い飛行時間をギンギンで目覚めてる事ね。やる事が無くて暇だし、疲れるしね」

「……………なるほど」

言われてみると、妙に納得出来る。

確かに、今度はエジプトと違って、ずいぶん遠くまでいく。流石に研修慣れしているなと思う。

シャルロは買い物袋からガムを二個取り出す。

「他の二年生にも分けてあげるのよ」

「はい……………肝に銘じて」

キクマサはかしこまって受け取ると、重そうな荷物を、寮の前まで持つ役目を名乗り出た。シャルロは「そんなに重くないけどね」と

言いつつ、悪い気はしなかったようだ。

そんなに重くないって言ったって、普通の女子には重たいだろ、と言うつらい。キクマサはシャル口とたわいのない話をしながら、こんなに小柄な体に、いったいなんでそんなにパワーがあるのかなと改めて不思議に思う。

シャル口は小柄だ。ルナシーとそんなに変わらない。

存在や態度の大きさを、あまりにも意識出来ないが、実際横に並んでみると、小さいなってしまう。

ハイヒールの軽快な、地面を蹴る音。

「ありがとうキクマサ君。ずいぶん持たせちゃったわね」

「いえ。俺もおごってもらいましたし。ごちそうさまです」

「あんたほんとに良い子ねえ……うちの男子にも見習ってもらいたいわ」

シャル口は大きなため息をついて、それでもなんだかんだ言って、四年生の仲の良さを垣間見た言葉だった。

そう言う関係でいて、黄金期と呼ばれる四年生。

皆が憧れるのも無理は無い。

「じゃあね。研修頑張っつて」

「はい。先輩も気をつけてください」

当たり前前に聞こえる、別れの挨拶。

お互いの研修に健闘を祈って、二人は階段の所で分かれた。

先輩も気をつけてください。

この時のこの言葉に、どれほどの意味があったと言っのだろう。
きつと、“挨拶”として言った節が大きいだろう。

キクマサは二つのガムをポケットに入れて、先輩におごってもらった以上に、先輩と久しぶりに話せた事が嬉しかった。エジプト研修でずいぶんお世話になった人だから。

彼女の階段を上っていく、そのヒールの音。軽快な音は実にシャル口先輩らしい。
だんだん遠ざかっていく。

どんな研修があつたって、先輩たちならきつと大丈夫。
そんな、漠然とした思い込みがあつたのかもしれない。だからきつと、この時は分からなかった。

遠ざかっていくハイヒールの音の意味を。

I
d
r
a
w

81：中国プランと黒龍会

黒い世界を知っているか

たかが美術品

されど、美術品

そのため争う者たちがいる限り

長い空の旅を終え、中国に降り立った高学年ヴィライアーたち。中国研修には四、五年生しかいない。いつもより少ないね、とか、今夜はどんなホテルに泊まるんだろうね、とかどうでもいい事を話していたのに、

どうしてこうなった。

「お待ちしてありました、ヴィライアー御一行様」

空港から出たとたん、その異常な事態に気がついた。気がつかなかったらおかしい。黒づくめの、サングラスをかけたような男たちが、黒いベンツを並べて待っている。

「ふーん。……ハリウッド映画でも撮ってるのかな……今回のミッションは中国なんだね、ボンド」

「なななに言ってるのよ。今ヴィライアーって言ったじゃない!!」
レッドは、昨日ナギの部屋で見た映画のシーンを思い出しながら、現実を意識出来ていなかった。当然、みんな固まってしまっている。だってこれ、どう見たって、悪い人たちですよこの人たち。

そんな、虫けらみたいに縮み上がったヴィライアーたちを他所に、団長は一歩前に出ると、

「ホテルまではこれに乗っていく。なあに、心配するな。うちのSPは優秀だぜ」

いつもの団長のはずなのに、何だろう。この雰囲気のせいか、上海の空気のせいか、黒づくめの男たちに囲まれた彼は、やはり、本来の立ち位置を理解していた。

「リュオン様!!」

「若様!!」

団長は一番前の車に誘導され、何ら問題無さそうに乗り込んだ。呆気にとられてその光景を見ていたヴィライアーは、苦笑いだっただ。あれ、あの人がマフィアな組織の人って話は、見た目から来たネタじゃなく、マジだったのね。

誰もがそう思っていた。数人を除いては。

何だか、このギリシアとはかけ離れた空気の、近代的な都市を、四角い黒車に乗せられて生きた心地がしない。そもそもなぜにこんなに厳重警備なのだ。

黒龍会の経営するホテルについて、まず何をされたと思う？ それぞれのボディチェックである。当然、そんなにしつこくされた訳ではないが、いくら研修慣れした彼らでも、こんな事は初めてだった。

「悪いな、ここ最近物騒でな。お前らを疑ってる訳じゃねえが、形だけでもしないとイケないんだ」

「団長ー！！ 何これ！！ マジ今度の研修って何なの！？」

レッドだけでなく、不安は皆にあった。嫌な予感しかしない。まあ、そもそも今までのヴェライアーの研修って、安全な物なんて無かったけれど。

「心配するな。俺たちがちゃんと守ってやる。エジプトよりよっぽど安全ってもんだぜ」

「そうそう。黒龍会総出で、君たちをガードするんだから。そのの段取りがいかに大変だったか分かるかい？」

ティアンは、さも自分も一員ですと言わんばかりに、彼らの空気に馴染んでる。

薄々感づいてはいたが、彼もまた団長と同じ穴の貉と言う事だろう。

フレイは制服のネクタイを締め直しながら、

「てか、団長ってマジでそっちの人だったんっすね。すみませんでしたが、今まで色々無礼な事やったりほざいたりして」

半青ざめた状態で、椅子に座ってくつろいでいる団長に謝罪。

フレイの隣でスノーが笑いを堪えている。リオはごくりと唾を飲んで、チラッと団長を見る。

「ふん……別に気にしてない。本当はこんな所、お前たちに来て欲しくはなかったんだが、何しろ物騒な世の中だからな」

「そうそう。君たちは、ここをただのホテルだと思って、いつも通り研修に励めば良いって話です」

ティアンは、中国仕様の立派な机で、優雅にお茶を飲んでいる。今まで同じ学校の、同じヴィライアーだったのに、ここに来て肝の大きさの違いを感じた、男子ヴィライアーたちだった。

それにしても…とりオは考える。

「物騒な世の中」とは実に曖昧で、本当の理由が見えて来ない。何か、別に心配な事がある様に思えて仕方が無いのだ。

エリーゼ先生は、別室でリュオンの父、すなわち黒龍会のボスと対談していた。彼女の周りには数人の監視役が取り巻いていて、実に恐ろしい。それでもエリーゼはいつも通り淡々とした態度で、そのボスと渡り合っていた。

「お久しぶりです、エリーゼ先生。うちの愚息が実にお世話になっています」

「いいえ……。ルネ・テクタイトは良くやってくれています」

彼女は一度、出されたお茶を飲んだ。

「……それにしても、なかなか厳重な警備ですね。それほどに危ないと言っているのですか？」

「……先生にはお話ししておきましょう。ここ最近、美術品の流動が激しく、我々も警戒をしています。要するに、美術品コレクターをボスに持つマフィアの動きが激しいと言っ事です。水面下の美術品は、気を抜くと別の組織が所持していたりします。………どういう事だか分かりますか？」

「………」
黒龍会ボスは、大きな椅子の上で一度、足を組み直した。彼の黒い瞳は、まさしく息子と同じ物なのに、それ以上に深く黒いと思ってしまう。

「美術品の本当の力を、ご存知のあなただ。話は通じると思いますがね。……世の中では理解出来ない力を秘めた美術品を収集している組織が、数えきれないほどある。黒龍会を含めて。その中で、そのいわく付き美術品の争奪戦、とでも言いましようか。抗争が後を耐えないのです。今までもそうでしたが、最近になってからは特に………」

「………アール………カーヴァ………ですか。」

エリーゼ先生は一度ゆっくりその名を口にした。

「………そうです。その世界に通ずるものは、曰く付き美術品、魔力

を秘めた美術品を『アール・カーヴア』と呼びます。美しさとはすなわち、人を魅了する力。……人の思念、歴史の流れ、儀式的な概念……そう言ったものを、時間をかけて精錬した美術品の成れの果て。……それは時に、我々に力を与えてくれる……」

ボスは、側にいた男に一つの立派な箱を持って来させた。

エリーゼは表情をそれほど変えずに、持って来られた箱を見つめる。

その箱が、彼女の目の前で開かれるまでは。

「……………！？……………これは……………」

彼女は目を見開いた。目の前の箱の中に置かれた、一つの美術品を、その瞳に焼き付ける。

ボスは一度、口元に弧を描く。

箱の中には、龍を象った、黒い玉が。

それは、無機物なものとは思えないような凄みと、生命感を感じさせる。

「……………これは“黒龍の玉”と言われるものです。代々ハク家を継ぐ者に受け継がれる、伝説の美術品。ご存知の通り、最近紫禁城で見つかった“白龍の玉”と対になる、兄弟作品です」

「し、しかし、……………黒龍の玉は歴史から消えた美術品……………なぜこのような所に……………」

「勘違いしないでください。我々がいくらマフィアであるからと言って、こればかりは金や権力で手に入れた訳ではない……………これは、我らハク家が、先の皇太后に頂いたものだ。……………世間には歴史

から消えたと思ひ込ませて、実は我らが管理しているのです……。黒龍会とはそもそも、“これ”を守るためにつくられた組織と言っても過言ではない」

エリーゼはじつと、その禍々しいよな、清清しいよな、静かな存在感を秘めた玉を見つめ、ゆつくりとボスの方へ顔を向ける。

「これは……もしかしてアール・カーヴァなのですか……？」

「その通りです。……おそらく、今紫禁城の博物館に展示されている白龍の玉も……。世界中の組織が、この二つの玉を狙っています。……今の中国は実に危ない」

彼は側にいた男に合図して、その玉を下げさせた。行方不明とされる“黒龍の玉”と、展示されている“白龍の玉”。その二つは今でも、この歴史深い中国にある。

「それでも、あなた方が中国研修を望むと言ったので、私は力を貸しました。……では今度は、私があなたにお尋ねしましょう、エリーゼ先生……」

オールバックのボスは、マフィアの男にしては穏やかそうに見え、それでいて何を考えているのか分かりにくい。彼はエリーゼを見つめ、ゆつくりと瞳を絞る。

「なぜ今、このように危ない中国に訪れたのですか……。ヴィライアーに危険が及ぶかもしれないこの時に」

「……危ないのは覚悟の上です。それでも私たちには、この研修を変える事はできません」

「……………どういう事ですか。まるで、この研修は何か他の、大いなる力にでも定められているみたいに……………」

彼の指摘は的確で、エリーゼは一度手元を見た。

部屋の中に漂うお香の香りは何だろう。アジアチックな、ほんのり甘い香り。

確かにこの研修は、“上”に促されたものだ。何かが起きると、すでに予告されているようなもの。

それを覚悟の上で、ヴィライアーを連れて来なければならなかった。

「……………だからこそ、あなた方の力が必要なのです。ヴィライアーは、所詮は学生です。美術品の本当の恐ろしさも知らない、無力な学生……………あの子たちを守って欲しい……………」

「勿論です。……………それは、リュオンの望みでもある。あれは卒業したら、黒龍会という暗い世界で生きて行く事を運命づけられています。学生のうちは、どんな望みだって叶えてやりたいと思っているのです」

ボスはそう言うと、そろそろ時間だと言う様に時計を気にする。

「すみませんね。……………私はこれでも忙しい身なので、ここら辺で失礼します。……………分からない事があれば、このマ・コクセイに聞くと良い。彼は私が子供の頃からお世話になっている、黒龍会の重鎮だ。時には私も頭が上がりません」

彼は後ろに控えていた老人、マ・コクセイを紹介する。コクセイは、「ご冗談を」といいながら、にこやかにエリーゼと握手をした。

ボスはそのまま退席した。
とても忙しそうだ。何があるのか知らないが。

その日は一日、ホテルの中にいた。ホテルとはいえ、自分たちが行動する範囲に、他のお客が居る訳ではなくほぼ貸し切り状態。ぴりつとした空気、ただならぬ雰囲気、ヴィライアーは常に緊張していたような、そうでないような。

「明日はさっそく、故宮へ向かう。紫禁城は世界遺産だ、変な行動は慎む様に。恥ずかしい真似はしない様に、以上！」

団長は、何だかいつものペースな様で、少しばかり気を張っている様にも見えた。

シャルロは一人、ベットに寝そべって、高い天井を見つめる。シャワーを浴びてしまって、濡れた髪がまだ乾いてない状態で、力無くベットの上で仰向けになっていた。中国に来てから、このホテルに漂う裏の世界の空気に、いちいち敏感に反応してしまう自分が居る。

きつと、この中国に何かあるんだわ。

エジプトの時の予感とは少し違う。

あれは本当に、不可避な現象だったから。

どちらかと言えば、今度の研修には、人々の思惑を感じざるをえない。団長もティアン先輩も、エリーゼ先生でさえ何かを隠している。

彼女は一度、寝返りを打った。

同室のシーダがシャワーを浴びている。その、水の流れる音を聞きながら、彼女は胸の奥に広がる、ある種の嫌な予感を抱く。

「……………気持ち悪……………」

彼女は気怠そうにベットから起き上がり、薄暗くついていた部屋の明かりを全部消してしまって、広いガラス窓から見える都市を、いつそっはつきりと映し出す。

暗い世界に見える、人工的な摩天楼。人間しかいない、脈動を繰り返す都市の夜景。

人々の足取り、闇に隠れる欲望、そんな音が聞き取れそう。

彼女は目を細める。

ギリシアの、歴史に包まれた空気の中に、箱庭のような学校にいたから、忘れてしまっていた。

これがリアル。

この世界の姿。現実の空気。

耳の奥に残る銃声。

「あら、どうして電気を消してしまっているの？」

急に、部屋の電気がついた。タオルで髪を拭きながら、目をぱちくりさせてシーダが出てきた。シャワーを浴びた後の彼女は、少し火照っている。

「……………どうかした？ 顔色が悪いわ……………」

シーダは、シャルロの表情を見ると、眉根を寄せた。

「……………大丈夫よ。……………きっと疲れたんだわ」

彼女はふいと、外の摩天楼から視線を逸らすと、濡れた髪を乾かすためにドレッサーの前に座った。

「あー！！ 私が使おうと思ったのに！！」

「ダメ。……私の方が早かったんだから、あんたはちょっと待ってなさい」

シャルロは、先ほどの気怠さを吹っ切ろうとして、鏡越しにシードに笑いかけた。彼女らしい、不敵で皮肉っぽい笑い方。

シードは「……全く……先に乾かしたきなさいよね。」と呆れながら、ボスつとベットに倒れ込んだ。枕を胸に抱え込みながら、シャルロが髪を乾かし終わるのを待つ。

風が、自分の頬に、髪に当たる。長くなった自分の髪を、ゆっくり指で巻きながら乾かす。鏡に映る自分を直視する。

自分もずいぶん“女”らしくなったものだ。

昔の自分は、こうではなかった。瞳の奥に見えるあの頃の面影を、彼女はじっと睨んでいる。

こんな所に来たからだ。

空気が、摩天楼が、立ち並ぶビルやネオンが、自分を酔わせる。

やめろ。

思い出させるな。

彼女は鏡越しの自分を睨みながら、心の葛藤を相手にしていた。

I
d
r
a
w

82：中国の紫禁城

長い歴史の上に立つ、中国の象徴

朱色に染まる、圧倒的なスケール

その文明

ヴィライアーたちは北京に着いた。

目的は、世界遺産故宮・紫禁城の見学と、故宮博物院に展示されている伝説の美術品『白龍の玉』を鑑賞する事であった。

故宮と言えば、有名な明清朝の旧王宮である。その、世界最大の宮殿の遺構のスケールは見るものを圧倒し、何より美しい。今や博物館となっており、中国の観光地の一つである。歴史深い中国の芸術美術に触れるには、打ってつけの場所でもある。

「有名な玉は、“白菜”の奴だよね。あれは、なんかのテレビで見た事があるよ」

「玉石の彫刻芸術の、代表作品だもの。……今回見る“白龍の玉”が話題になってるから、“白菜”の前は空いてるかもよ。翡翠で造られてるそうだけど……まあ、軟玉とか、硬玉とか色々あるんだろうけど、私も詳しい事は分からないわ」

レッドとナギは、今日の故宮見学に思いを馳せながら、有名な玉石芸術について語っていた。流石に日本人のナギは、レッドよりは詳しく興味も深い。

「それにしても、相変わらず平和でないね。……団長たちはピリピリしっぱなしだし」

レッドは、今朝から会議以外で見る事の無かった、団長やティアン、メルベリーの事を口に出す。彼らはいったい何を考えているのだろうか。

「……私は……たまにあの人たちが分からなくなるわ……。同じ学年なのに、どうしても私たちとあの三人には壁を感じる。きつと、巻き込みたくはないんだろうけれど……」

「……ならなんで、今回この研修地を選んだんだろう……」

目の前に故宮が迫っている。

その存在感は無視出来るようなものではなく、今抱く不安すらかき消してしまいたいようだ。

レッドは、ずっと前を歩く彼ら幹部を、何とも言えない顔で見越した。

朱色に染まり出した視界と、その向こうに待つ、目的の美術品。

実を言えば、団長は今回、初めて“白龍の玉”を見る。

ギリシアにいたから見れなかったと言えばシンプルだが、彼は中国に帰ってまで、この玉を見ようと思わなかった。自身が“黒龍の玉”を守っていかないといけない使命を持ちながら、その兄弟作品を見たくなかったのだ。

何だか、どうしようもなく避けたかった。

「……………どうかしましたか？ リュオン……………」

メルベリーは、彼の様子に気がついていた。中国に来てからの彼は、眉間にしわが寄りっぱなしで、見ていて心配になる。

「……いや……大丈夫だ。……心配ない」

彼はいつも通りを貫こうとしていた。

ここは別に、中国ではない。いつもいくような研修と何ら変わらない。そうであるべきなのだ、常に自身に言い聞かせて。

「……君がそんなだったら、ヴィライアーたちが不安がる。なに、今まですつと下準備をしてきたんだから、そんなに神経質になる事も無いのに」

ティアンは団長の少し後ろで、険しい顔をしている彼の心理を読もうとした。

「別に、この研修の安全性を悩んでる訳じゃない。……ただ、こうまでして中国に来る意味はあったのだろうかとは、いまだに疑問に思っているが……」

「きみは中国人なのに、自らの国の研修が嫌だったのかい」

「学校の意向が分からないと言う意味だ。……そうまでして、白龍の玉を見る必要があったのだろうか。……一つで一つの作品だ。片方が無い状態なのに、話題性だけで研修地を選ぶとは思えない」

彼は、一つの疑問を投げかけた。

この、中国研修以外の道はなかったのかと。

研修地は基本的に幹部が選ぶ事が多いが、今回の中国研修に限っては、学校側からの依頼のもと成り立った部分が多い。そうでないなら、自分が学校にいるうちはこの国を選ばない。

「……………学校側に思う所があるのでしようか……………」

「分からない……………。ただ、今まで学校側が要求してきた研修は、何かしら不可解な事件が起こっていた。エジプトだって、あんなの普通に考えたらおかしいじゃないか……………だから、いくらこちらが手を打とうが、油断はできない訳だ」

過去の研修を紐解きながら、彼らは再び、ヴィライアーの研修の奥に潜む何かを、大きな意志を探ろうとした。

そうこう言っているうちに、故宮博物院の一番奥。広い部屋に、たった一つのガラスのゲージに入れられ、厳かに展示されている“白龍の玉”に辿り着く。

その玉を目にした瞬間、周りの観光客の、あらゆる雑音が耳に入らなくなる。

団長は一瞬、この世界に、自分とこの“白龍”だけが存在している気分になった。

「……………」

ハク家が持つ“黒龍の玉”とは、同じシリーズ性は感じられるが、

まるで違う空気と威圧感。

例えば、黒龍の玉が大地のような猛々しさを持っているならば、白龍の玉は水の様に滑らかで清らか。

美しい白の龍。

一瞬、彼は水墨画を見た気分だった。白と黒で成り立つ世界を、この二つの龍は造り出しているのかもしれない。ほんとうは、二つ揃った時に見えてくる何かがある気がして。

陰と陽の理、その考え方が彼の中で根付いているからこそ、色の無い世界の“色”を、その奥にある世界を垣間見た気がした。

“山水、その天地”

陰と陽の仕組み、その白と黒は裏表

決して離れる事を許さず、重なる事もままならない。

昼と夜の法則、その天と地は世界

決して受け入れる事を認めず、それでいて平行線をたどる。

二匹の龍は、そうやって世界を象った。しかし、お互いを失った石はただの器。

それは、決して離れる事はできない。

あつてはならない。

「……………」

団長は、悠久の、それでいてモノクロームな世界に龍を見た。

二本の線が天空へと昇っていくような、ずっと遠くから。

その二匹の龍は、たった一度、団長を、

リュオンを見た気がした。

ドクン……

心臓の鼓動を打つような感覚。

彼はただ立ち止まって、瞬きすらできなかつた。

「…………リュオン…………？」

メルベリーは、そんな彼の様子を伺いつつも、あまりに真剣に“白

龍の玉”を見つめていたので、声をかけるのをためらう。
それくらい、団長は魅せられていた。

その時、故宮全体を包む、不思議な霧に気がついていた者は何人いたのだろうか。

その日の北京は、カラッと晴れた良い天気ではなかったが、淡く灰色の細かいミストを確認したのはついさっき。

故宮に入場する時はこうではなかった。

紫禁城の大広場では、沢山の観光客が写真を撮ったり、その壮大な建築物を眺めるのが普通だが、霧が彼らの行動を妨げている。

「はあああ？今日の天気は晴れつつたぞ、天気予報では！！」

広場に出た時、四年生は皆、「何だこれは」と顔をしかめた。
フレイにいたっては文句を言っている。

当然、彼らは故宮の紫禁城を広場から見たかった分、拍子抜けな気分も分かる。

太陽の光が、僅かに差ししているような、ほんのりとした明るさは感じられるのに、どうにもその霧は不自然だった。

「……………ねえ……………何だか、変じゃない？人が沢山いてもいいはずなのに、やけに静かだわ……………」

「そうだね……………。霧で向こう側が見れない分、特に……………」

リオがそのように、紫禁城の広場の向こう側を、瞳を細めて伺おうとした時だった。

パアアアアアン……………！！！！！！

彼らの身を、一瞬で強ばらせた一つの銃声。
それは紫禁城の中から聞こえてくる。

四年生は皆、広場から王宮の方へ振り返り、耳に残る銃声に驚きを隠せずにいた。

「……………な、……………今のって……………」

「……………銃声……………！？」

シャルロは無意識に紫禁城の中へ戻ろうとしたが、躊躇した。中で何が起こっているのかまるで分からないこの状況の中で、今、自分たちがどう動けば良いのか。

彼女は足先の方向を変え、側に居る四年生に向かって、

「急いで広場を抜けましょう!! ここに居ると危険だわ!!」

漂う霧の向こうを目指す。

紫禁城の中には五年生が居るが、団長たちも居る。どちらかと言えば、丸腰の四年生の方が遥かに危ない気がする。

「な…なな…何なんだよ!! テロか!? デモか!? 抗争か!!?」

「……………デモはちょっと違う……………」

「落ち着き過ぎだよてめえは!!」

スノーは淡々とフレイに突っ込む。

なんだかんだ言っつて、フレイは誰よりも先頭を走りながら、気になるのか紫禁城を何度も振り返る。

霧のせいで前は見えないが、たまにきよんとした観光客を横切る。

再び銃声は何発か聞こえてきた。

やがて人々の悲鳴が伝わってくる。

「……………これって……………」

シャルロは霧の中を走りつつも、常に背後を気にしていた。まさか、故宮という世界遺産の中で、このような状態に陥るとは夢にも思わなかった。

団長たちは昨日からピリピリしていた。

このような状況を見越していたのだろうか。

その時だった。

シャルロは一瞬、とても不思議な感覚に陥る。

悲鳴も銃声も、彼女の耳には入っていたのに、周囲の気配も把握していたはずなのに。

それは、ほんの一瞬だったが、シャルロのすぐ側を反対方向から横切った者。

シャルロとその者が交差するまで、彼女はその存在に全く気がつかなかった。

「始まるぞ……戦争が」

すれ違い際に、その者が呟いた言葉は、当然シャルロに向けられたメッセージだった。彼女はその声を聞いた瞬間、激しい衝撃と、覚えのある感覚に見舞われる。

既に霧の中に消えてしまった“その男”を彼女は知っている気がする。

目の端に映った黒いスーツと、サングラスの向こうに隠れた鋭い視線。

始まるぞ、戦争が。

その言葉が意味する事。

それは、期限付きだったシャルロの平穩の終わり。

d
r
a
w

自由の代償。

83：中国プリン4〜白い悪魔〜

たった一つの美術品のために

我々は戦いを惜しまない

それが、彼の望みなら

紫禁城の中は混乱していた。

銃声は、どこからとも無く聞こえるのに、いったいそれが、どこから打たれているのかは全く分からない。

「おい！！　ここから出るぞ！！」

団長は、側にいたメルベリーを庇いながら、急いで紫禁城から出ようとする。

「こんな事をするバカはいつたいどこのどいつだ!!」

ティアンは青ざめていたが、いっばしに皮肉は言えるようだった。周りにいたSPが、銃を構えて彼らを守っている。しかし、敵の姿はまるで見えない。

パン！

団長の足下に銃弾がはねる。

奴らは“ハク・リュオン”という存在を認識したようだった。

「くっそ…っ!!」

彼は銃を取り出すと、鋭い瞳で周りを見渡す。

煙なのか、霧なのか、室内なのに視界が悪い。奴らはいったい何を考えている。

そのとき、彼はふと、先ほど目にした“白龍の玉”の事を思い出した。敵が何者かは分からないが、おそらく狙いは俺自身ではなく、“白龍の玉”なのではないかと。

「警備の奴らはいったい何してるんだ!!」

ティアンは相変わらず文句を言っていた。団長は側にいたSPにメルベリーを預けると、一目散で先ほどの展示室へ向かう。

「え……リュオン!!?」

側を風のように抜けていった団長を、ティアンが振り返る。

SPの人たちが口々に「若様!!」とか、「リュオン様!!」とか叫んで、やはり焦っている。

しかし、銃撃に足下をすくわれ、思う様に彼の元へいけない。

「ティアン!! リュオンを追いかけないと……!!」

「メルベリー!!」

メルベリーがSPの手を振りほどいて、走っていつてしまった団長の後を追おうとする。

「ばかっ!! 君はここにいろ!! 死にたいのか!!」

「で、でも……」

そうこう言いながら、ティアンとメルベリーが戸惑いを隠せずにした時だった。

側にいたSPが次々に撃たれ、倒れていく。二人はその場にしゃがみ込んで、事態の深刻さを感じ取っていた。

どういう事だ。

自分たちは、何があっても対応出来る準備をしてきたはずだ。

どうして、今日、このピンポイントで事件が起こる。

「……どこだ……どここの組織だ……」

ティアンは歯を食いしばって、周囲を警戒していた。頭の中にあるあらゆる情報を整理しながら、いま、自分たちが戦っている敵を探

る。

その時だった。

無防備な自分たちに、明らかに冷たい殺気が向けられているのを感じる。

ヒンヤリと、頬に伝わる冷や汗。

カチャリ……

銃口の向けられる音が、その時だけはやけに聞こえた気がした。

「ティアン……」

メルベリーは彼の服をただ握って、ゆっくり目を閉じた。

ティアンは、彼女の肩を抱いたまま、音の聞こえた方を睨む。もうダメだ、なんて思いたくなかった。

放たれた銃声と共に受けた衝撃。

彼らは何者かに、一瞬でその場を突き飛ばされた。

銃撃からは真逃れ、目の前に現れた男に目を見開く。

ティアンとメルベリーの前に仁王立ちになった、その大柄の男。

「全く、お坊ちゃんとお嬢ちゃんは危なっかしくてヒヤヒヤもんだ

ぜ

「イレイ!!!」

ティアンは彼の存在を見つけると、表情を一転させた。

顎髭と、長い黒髪を一本に結んだ、柄の悪そうな男。黒いスーツの中には、奇抜なガラシャツを着て、太いタバコをくわえている。銀の銃を持つ手の甲には、黒い龍の入れ墨が。

「君たちに何かあったら、おっちゃんはリュオンに殺されかねんからな。」

中年程のその男は、すぐに殺気をたどった。

しかし、その男が現れた事で、殺気のはきは速やかに消えていく。

霧がその場から引いていく。

「イレイ!!! 君、北京に来てたのかい!?!」

ティアンは立ち上がると、すぐにその男の方へ駆け寄った。

「ああ。ボスの命令だね。……メルベリー嬢も大丈夫か?」

「……ええ。ありがとうございます。イレイさん……」

彼女は、ずいぶん大きなその男を見上げた。

どう見たって、悪そうなマフィアの男だが、この二人が彼を知っている、そして信頼しているのが分かる。

彼の名を、コウ・イレイ。
黒龍会幹部の一人であり、“四子”に数えられる人物である。

リュオンは、霧の中を走っていた。

どうしてだろう。別に、あの“白龍の玉”を大切に思っている訳じゃない。欲しいとも思わない。

それでも、奪われてなるものかと、ギリと歯を食いしばった。

さっきのイメージストーリーで、俺は確かに龍を見た。

白と、黒の、水墨画のようなモノクロの世界で。

本当は、二つ揃わなければいけない芸術品なのだろう。

奪われてなるものか。

こんな、世界遺産の中でバカな事ができる奴らなんか。

もう、客が皆逃げてしまったような“白龍の玉”の展示室。

彼はその部屋に入った時、既にガラスのゲージには何も無い事を知る。

そして、ゲージの前で、一人の若い男が白龍の玉を掴み持っている。

「……………お前……………」

黒い防弾ベストの様なものを着た、口元に丸いピアスのある青年。
やたらと色素の薄い肌と、幅の広いサングラスに潜む薄い灰色の瞳。
刈り上げた短い金髪。

彼が振り向いたとき、その悪魔のような瞳を感じる、鋭い殺気。

「ははっ！！ なーんだ、戻ってきやがったのか、ハク・リュオン。

……………残念だが、この“白龍の玉”はもらっていくぜ」

「てめえ……………どこの組織のもんだ……………」

リュオンは手に持つ銃を、その男に向けた。

腹の中が煮えくり返りそうだ。このような公の場で事件を起こすなんて、マフィアの掟をとうに破っている。

「黒龍会の次期会長が、こんな所に一人で来て。……………せつかく、今回はお宝だけ奪って、てめえらは見逃そうって算段だったのに。……………どうにも殺されたいらしいな。お前が死ねば黒龍会は終わりだ」

「黙れ。……どこの組織かって聞いてんだよ」

リュオンは銃の安全装置を外した。カチャリと、その音が響く。対峙する男は、しらけたような表情を見せ、堪えきれずにクツと笑った。

「何がおかしい……」

「まさかとは思うけど、そんな銃が俺たちに通用するとも思っていないのかよ。……黒龍会がコレクターってのは、とんだデマか？」

「……まさか……お前……」

リュオンは、周囲の霧や、異常な雰囲気の違いを、やっと理解した。

この不可解な現象を。

「お前……アール・カーヴアの“契約者”か……」

美術品のもう一つの顔を知っている者は少ない。しかし、それに通ずる者が、いずれ辿り着く真実がある。

「……ああ……。そうだ……!」

奴は、手に持つ白龍の玉を思いきり宙に投げると、そのままリュオンの目の前に一瞬でやってきた。そして彼の腹部を蹴る。確かにそれは“蹴り”だったのに、リュオンは何メートルも先にある壁に激突する勢いで蹴り飛ばされたのだ。

しかし、リュオンは壁にぶつかる直前、影の様に現れた辮髪ペンバツの男に受け止められる。中国的な装いの、瞳が糸の様に細い男。頬には黒龍のタトゥーが。

「ーっ!!……テンメイ!!」

テンメイと呼ばれた男は、口をへの字に曲げたまま、目先の男を睨んでいる。男は投げ飛ばした“白龍の玉”をキャッチすると、面白く無さそうに鼻で笑う。

「ちっ……ご自慢の“四子”のお出ましか。……良いじゃねーか、殺しがいが出たってもんだぜ」

奴は、白龍の玉を雑にもてあそびながら、防弾ベストの懐から、細長い筒状の物を取り出す。

銀色の、やけにハイテックに見える、金属の筒。

彼がそれを一振りすると、筒の先から細長い蛍光灯のような光が、剣を象つていく。

「アール・カーヴァ……『パンドラの剣』……」

奴がそう呟いたとき、何とも言えない衝撃の風が、円を描く様に吹き渡った。

リュオンは、その剣を見た瞬間思い浮かんだ事を口に出したくて仕方なかった。

「……お、おい……それはどう見たってライト・セーバー……」

「黙れ！！ それ以上言うんじゃない！！！！」

せつかくのシリアスな雰囲気なぶちこわした団長はさすがで、やはり大物。

しかし、だからといって現状は変わらない。

男は残酷でいて、軽快に口元に弧を描くと、

「こんな所でお前の首が取れるとは儲けもんだぜ！！！！……この世の
アール・カーヴァは全て、“御館様”のためにある！！！！」

その剣を振り上げ、リュオンに飛びかかった。

しかし、その瞬間に、刃は別の刃に受け止められる事になる。

刃を交えた相手に見える、赤いチャイナドレス。

「アール・カーヴァ…… 『桃寿の宝剣』」

刃同士が交わった衝撃で、お互いは反発しあい、弾きあう。

「……………スーファア！！」

リュオンは、その少女の名を呼んだ。

少女とは言え、リュオンより少し下、と言っくらの、赤いチャイナドレスを着た少女。晒し出された腕には、黒龍の印が彫られている。

黒髪を左右に丸く結び、切れ長の瞳で敵を睨んでいる。

彼女は手に、中国様式の剣を持っていた。

「待て！！ てめえらはどこの組織だ！！……俺は、てめえの噂く
らい聞いた事があるぜ、白い悪魔……」

「……………」

リュオンは立ち去ろうとする男に向かって、無力と分かっていても
銃を向けた。男は一度、ピクツと反応する。

「…………… デイルテイル・ファミリーの白い悪魔……。ノーレン・
シュルスタイン。…………… そうだろ」

当たりに漂っていた霧が、さらに濃くなった気がする。
奴は口の端を軽快に上げて笑うと、

「ははははははは！！ 俺もそんなに有名人か！！ ……ま、ど
うせ元々仲の悪い組織同士だ。ばれた所で何も変わらない」

ノーレンは、霧の中に体に任せながら、その血走った瞳だけは、ず
っと彼らを見ていた。

「知っているか、ハク・リュオン。…………… お前たち黒龍会を潰すため
の計画は、もう何年も前から始まってるんだぜ。そして、もうすぐ
終わる……………」

「…………… なんだと……………」

リュオンは、ノーレンの言葉に踊らされまいとしながらも、その声
に、言葉に、いちいち反応してしまう。

彼は銃を何発か撃った。しかし、それはすぐに光の剣に跳ね返され

てしまう。

無駄だと分かっていたが、このまま奴らばかりに全てを持っていかれるのは許せなかった。

ノーレンは瞳を細め、皮肉に笑うと、

「……………ま、足下をすくわれぬ様にしろよ。……………アール・カーヴァを巡る戦争は、とっくに始まってんだぜ」

そう一言言い残し、霧の中に消えた。

まるで、音も無く、元々そこにいなかったかの様に。

何がどうなってやがる。

何が始まるうとしているんだ。

奴の言葉が一言一言、リュオンの心に疑念を生む。

アール・カーヴァを巡る戦い。

それは、彼らには避けられない戦いだったのかもしれない。

I
d
r
a
w

84・中国プリン5〜黒龍の四子〜

かつて、主の為に仕えよと拾われた四人の子供たち

四人の黒龍の覚悟

その日は夜までずっと、北京のホテルから出る事ができなかった。

あの、故宮で起こった惨事の中、よく皆無事で帰って来れたものだ。

ホテルに戻ってから、団長を見ていない。

何とも険しい顔をしながら、強面の連中と、急ぐ様にどこかへ行った。

「はああ……いまだに寒イボが消えねえよ。恐ああ……」

フレイは自分の腕を突き出しながら、それをさすった。

四年生は、談話室のような広い部屋で集まって、先ほどの事件について語っていた。

「私だって、思い出すだけで震えそうよ。……許せないわ、あの事件で人が死んだかもしれないのよ」

詳しい事は分からないが、逃げる様に帰ってきた自分たちには、あの場の真実は分からない。

シーダはとても悲しそうな顔をしている。彼女は人一倍、人の命への思いが深い。

銃声が、耳の奥に残っている。

あの時感じた恐怖が、いまだに消えない。

「団長は、後で説明するって言うてるけど……本当にいったい何だったんだろう。皆無事だったから良かった物の……」

リオは顎に手を添え、眉間にしわを寄せ考え込んでいる。

「……下手したらつかまって、人質にされてたかもね……。テロでよくあるじゃん？」

スノーは表情こそいつも通りで、いたって普通にお茶をすすっていたが、言葉は真実を語っていたかもしれない。

フレイは顔を歪めて、

「うわ……やめるよ怖い……」

嫌な想像をしていたようだった。

シャルロだけが黙りこくつて、何とも言えない硬い表情をしている。スノーに向き合った場所で腕と足を組んで、何かを考えている。

「……………どうかした？ シャルロ……………」

スノーは彼女の様子がおかしい事に気がついていていた。普通なら一番文句を言ってそうな彼女なのに。

「……………どうもしないわ」

彼女はスノーを見上げ、そして視線を逸らすと、一言だけ。フレイはシャルロの肩に腕を乗せると、

「何だ何だ〜。天下のシャルロ様が、もしかしてびびってんじやないだろうなあ〜」

「ばか。そんなはず無いでしょ。……………変な事だらけだもの、私だって色々考えてるのよ」

いつもならフレイをぶちのめしかねないのに、彼女は彼の腕を払う程度で、やはり少し、元気が無い様に見えた。激しさが無いと言っか。

フレイは助かったと言っのに、ぽかんとしている。

「……………変な事？」

リオは聞き返す。

「……………ええ。……………おかしいわよ、都合良く霧が出たり、なかなか警備が来なかったり」

彼女は部屋にあったテレビを付けた。
どこも、この話題ばかりだ。

自分たちは、団長たちの計らいで、大事になる前に逃げたような物だ。

「どこを見ても、犯人が捕まっていって言うてるでしょう？……………
“白龍の玉”だけが盗まれている……………。犯人はこれが目的だったのよ。……………テロリストが一つの美術品に興味があるはず無いじゃない。……………きつと、どこかの組織よ。計算された、組織の犯行。……………
団長たちはこれを予測してたんだわ……………」

彼女は冷静な口ぶりだったが、瞳の奥の方は暗い光を宿していた。
本当は、その犯行組織がどこなのか分かっている。

「……………でも……………組織だからって、誰も捕まらずに逃げたり、ましてや霧をどうにかしたり出来るの？」

シーダの問いかけは、実能的確だった。誰もがそう思うだろう。
それができるのだ、と理解している者以外は。

あり得ない事を、あり得る様に出来る、その力を秘めている美術品がある。

だからこそあらゆる組織に狙われるのだ。

「……………それは……………」

シャルロは、その美術品の存在を知っていた。

その事を言おうか、言つまりか、戸惑っていた時だった。

バタン！！

いきなり扉が開かれた。

神経質になつてゐる彼らにとっては、心臓が止まりそうなほどに驚いたが。

目の前には、怖そうな顔の大柄な男が。

黒髪を一本に結っている。

「……………」

四年生は皆硬直して、青白くなった。

その大きな男の後ろから、これまた死にそうな顔をしたレッド先輩とナギ先輩が現れた。

「……………せ、先輩……………」

「や、やあ、みんな……………げんきしてるかい？」

「先輩、言葉が全部ひらがなですしっかり！」

レッドは苦笑いで男の隣に立つと、

「こ、こちらは黒龍会のコウ・イレイさんだそうです。これから俺たちに、色々説明してくださるようなので、皆しっかり聞くんだぞ……」

語尾に を飛ばすのさえ忘れた彼は、そそくさとソファに座った。イレイはププツと笑いながら、

「そんなに緊張する事も無いのになあ。俺たちだって普通に優しいぜ」

優しいとか言いながら、これ見よがしにチラチラ手の甲の龍の入れ墨を見せる。

ヴィライアーたちは、美術学校で大物でも、ここではか弱い一般人にすぎない。

ビビリ上がるのもムリは無い。

「すまないが、今リユオンは忙しい。あれでも一様、ここのボスの息子なんだ。……今日起きた事件は、結局俺たちの前準備不足にすぎない。……幸い、リユオンだけが打撲ったくらいで、他の奴らには怪我が無かったようだ」

イレイは懐からタバコを取り出すと、火をつけ一度吸った。

その合間に、ヴィライアー全員の顔を見渡す。

「流石に美術学校の生徒さんたちだけあって、えらいお上品じゃねーの。うちの坊ちゃん浮いてたる」

「……………はは。……………そうですね」

レッドは相変わらず半死に状態の瞳で、それでも反応している。しかし、団長が浮いていたのは確かだ。

その時、いきなりイレイのタバコを横から取る人物がいた。

黒髪で、青い中国仕様の服を着た青年。怖そうなイレイとは打って変わって、とても優しそうで端正な顔立ちをしている。

「客人の前でタバコは吸わないでくださいイレイ。……………それでなくても怖い顔をしているんですから」

「……………ジエン……………。おま、ボスに付いてたんじゃなかったのか。……………もしかしてボス、帰ってきたのか？」

「ええ。ボスは連絡を受け、すぐに引き返す選択をしました」

ジエンと呼ばれた青年はタバコを灰皿に押し付け、ヴィライアーの方を向いてニッコリ笑うと、深々とお辞儀をした。

ヴィライアーはきつと、この人が来た事で少しホッと出来ただろう。

「はじめまして。僕はチョウ・ジエンと言います。……………リュオン様のご友人方を、あのような事件に巻き込んでしまい、深くお詫び申し上げます」

彼はとても礼儀正しい青年だった。

しかし、それでもやはり、首元には黒龍の印があり、闇の世界の住人なんだと意識してしまう。

「……あ、あの……さつき、団長が打撲した……みたいな話がありました。彼はその、大丈夫なんでしょうか……」

ナギはおそろおそろ尋ねる。彼女は適当とは言え、同じ学年の団長が怪我をした事が心配なのだろう。

「ああ。大丈夫大丈夫。ちょっと悪い奴に横つ腹蹴られたただけから。……それにしてもお嬢さんエライいべっぴんさんだねえ……。ちよい悪の大人の男に興味ない？」

「……イレイ!!」

ちよい悪どころじゃないだろう、と突っ込みを入れたかったがそれも出来ないうちに、ナギに鼻の下を伸ばしているイレイを、ジエンが睨みつける。

その瞬間、イレイは「はいはい……」と静かになった。

ナギは冷や汗気味だ。無理は無い。

彼らは護衛だった。ここにいる全員の。

緩い雰囲気では話をしていたが、それでもぴりつとした空気を纏わせて。

触れると、首を持っていかれそうな殺気を奥底に隠して。

でも、それに気がついているのも、その場ではシャルロだけだったのかもしれない。

団長はまっすぐ、ボスの部屋へ向かっていた。
彼の少し後ろを、チャイナ服を着た少女が歩いている。

彼女の名は、リ・スーファ。

「親父はオークションに出なかったんだな。……帰ってくるとは思わなかったが」

「ボスは心配しているとおっしゃっていました」

「誰を？ ヴィライアーをか？」

スーファは「それは私には分からない事です」と言うと、ボスの部屋の前で、団長より先に扉を開いた。
立派な木製の扉の中には、一服しているリュオンの父親が。

「やあ、リュオン。派手に飛ばされたらしいね。テンメイから聞いたよ」

ボスの座る椅子の斜め後ろに、深い袖を合わせて立っているベンパツの男がいた。彼はチン・テンメイ。

相変わらず唇の下にしわを造る程、口をへ字につぐんでいる。

イレイ、ジエン、スーフア、テンメイを、黒龍会の“四子”と言う。黒龍会を守るために幼い頃から鍛え上げられた、黒龍の子である。

「私が“四子”を向かわせてよかった。一応、この者たちは私の命令が無いと動けないからな」

「良かったって。親父だって、オークションで危険だったのに。三人も回しやがって、なめてんのか」

リュオンは父親の座っている正面の椅子に座った。

装飾品、美術品に囲まれた部屋は、相変わらずお香の香りに包まれている。

「私の所にはジエンがいたから大丈夫さ。どのみちすぐに帰る事になったし」

「別に……帰って来なくても……」

団長は一度拳を握りしめると、思い直した様に、

「……………いや……………助かった。……………敵はデイルテイルだ。俺の力だけでは、あいつらを守れない……………」

今朝の出来事を脳裏で繰り返す。

盗まれた“白龍の玉”と、出会った白い悪魔。奴の持っていたアール・カーヴァ。

「奴は言っていた。俺たち黒龍会を潰すための計画は、もう何年も前から始まっていると。デイルテイル・ファミリーは強大なマフィアンコミュニティだ。でも、黒龍会だつて肩を並べる組織。そうやすやすとあいつらの罠にかかるとは思えない……。思い当たる節も無い。……俺には分からない」

この黒龍会を潰すわけにはいかない。

それ以前に、この研修中、あいつらに危害が及ぶような事があつてはならない。

ボスは細長い煙管からゆっくり煙を吐くと、一瞬空け。

「実を言えばね、リュオン。私が戻ってきた理由は、単にオークションが中止になったからなんだ。……何しろオークションの目玉商品が、全て盗まれたからね」

「……なんだと？」

リュオンは眉根を寄せた。

裏の組織の間では、絶対にやってはいけない事がある。暗黙のルールってやつが。

でもそれを、あつけなく破る事の出来る、命知らずな奴ら。

「……デイルテイルか……!？」

「いや、それは分からない。……デイルテイルだけが、芸術品を求めている訳ではない。……最近では魔力を秘めた美術品、まあ俗にいうアール・カーヴア存在を知り、なおかつ契約者としての活用法を知った組織が増えている。……契約者さえいれば、何だつて

上手くいく。殺しだつて、世界を動かす事だつて。」

ボスは、黒いソファーにのけぞつたまま、後ろに控え得ているテンメイとスーファを一瞥し、

「黒龍会だつて、彼ら契約者を抱えている。それは、元々芸術品を多く持っていたからだ。……我々は芸術品を、しっかりと“芸術品”として見る事が出来る。それ故に強いのだ。……しかし、今や芸術品を、交渉の道具にしたり、兵器として使う組織が増えてきた。……そんな組織に、我々がどうして負けたりしようか……」

上を向いて、天井に吐く煙に目を細めながら、彼は曇り行く時代を見ていた。

とうとうやってきた時代の波に、覚悟を決めなければいけないのかもしれない。

「……すぐそこまで来ているのかもしれないな。……本当の意味での、アール・カーヴア争奪戦争の時代が」

やれやれと、首を傾けながら、ボスはなかなかお疲れのようだった。リュオンは彼の言葉を一つ一つ抱え込んで、戸惑ってしまひそうな自分に、どうすべきかを問いかける。

「……リュオン……ここはやはり、ヴィライアーには学校へ帰ってもらった方が良く。エリーゼ先生には私から言っておこう。……私とて、明日にはここを立たないといけない。……いざとなった時、誰かを失うのは嫌だろう」

「……当然だ。俺のせいであいつらに何かあつたら……俺は……」

俺はきつと、あの学校には戻らない。戻れない。

このような形で、この中国研修を終わらせるのも情けないが。

「……あまり思い詰めるな。私が言うのもなんだが、君はこの世界の住人にしては、少しばかり優しすぎる。それで良いとは思うが、先の事はなる様にしかない。仕方が無いと思う事も必要だ」

先の事は、なる様にしかない。

導かれる様にしかない。

父親の言葉は、やはり長年「マフィアのボスをしているだけあって、重い一言だった。

でも、本当にそうなら、どうしてこのようなシナリオにした。

彼は後、それを思い知る。

美術品を、美術品として見ないこの時代。

価値が、別の部分で肥大化して行って、大きな争いの火種となる。

それが、誰かのシナリオ。

85：中国プラン6〜フライデイ・チャイナタウン〜

今の自分と、昔の自分は違う

私は今、進むべき道、極めるべき物を持っている

それでも、約束は覚えてる

体が冷たいのに、着ている絹の寝間着が濡れている。

それほどに、シャルロは冷や汗をかいて、悪夢から目覚める様に飛び起きた。

広いガラス張りの窓からうつすら入り込む、緑色の月明かり。

点滅を繰り返す赤いネオン。
その脈動のような息づかい。

彼女は胸元の布を固く握りしめ、汗と、早い鼓動がおさまるのを待っていた。

眠れるはずが無い。

私は今日、ルネ・ヴィルトンに入学してから、最も恐れるべき、その日を迎えた気がする。

「……………やめて……………」

彼女は額に手を当て、ゆっくりまぶたを閉じる。

一時して、隣のベッドですやすや寝ているシーダに視線を向けた。
相変わらず、幸せそうな、優しい顔。

当然、この子は幸せでなければならぬ。それがシーダの役目だ。
この子のおかげで、四年生は皆、お互いを大切に思う事が出来た。

シャルロは疲れた様に、少し笑う。

あんなに仲が悪かった四年生が、彼女の笑顔に感化されていった。
彼女は将来、とても優れた芸術家になるとは断定出来ないが、それでも優れた人間だった。

人間として未熟な、でこぼこな私たちが、彼女の深い心で繋がって、

理解しあう。その空気を造り出してくれる。もしかしたら、シーダはそう言った意味でクリエーターだったのかもしれない。

いまでは、その4年間がとても眩しい。

頭が痛い。

冷たい空気が吸いたい。

彼女は一人、ホテルの空中庭園に訪れた。
ビルの段差に造られた、文字通り空のガーデン。

ここになら来ていいと言われていた。今の所、外の空気が吸える所
って、この場所しか無い。

シャル口は手入れされた草木に目もくれないで、つかつかと、その
庭園の端に向かう。

外の見える、風の当たる場所。

胸元までの柵は彼女と外界の都市を隔てる。

「……こんなに高い場所だったのね」

下を見おろす事ができ、遠くのクラクション音を耳に入れる事が出来る分、それは体で感じ取る事が出来た。
シャルロは考える。

憂鬱程度ですまされない、この心をせき立てる不安。

夏が近いのに、外は少し冷たい。

その時だった。

背後に一瞬で届いたその殺気。

冷たい視線。

すぐそこで聞こえるような、乾いた笑い声。

とっさに振り向いた時に見た、月明かりに映る、二人の影。

「……………あ……………」

シャルロは言葉が出なかった。

瞬きも出来ず見つめる、その先の人物。

再会に浸る余裕も無い、その出会い。

「……………久しぶり、が適當か……………。なあシャルロ」

一人の、スーツを着た男が、彼女に声をかける。

この男はまさしく、故宮で一度すれ違った、あの男。

彼女はその男を睨む様に。名前を思い出すのに、そんなに時間はかからない。

「……………ベルグラス……………」

一言、その男の名を絞り出した。
知ってる。

そいつは、自分ととても深い関わりを持っている。

「…………クソが。俺の事を忘れてんじゃねえよ」

ベルグラスという名の男の後ろで、少し若い男が口を挟む。
薄い金色の短髪で、肌が以上に白い、不健康そうな青年。口に丸いピアスを開けた、少し危なそうな奴。

勿論、そいつの名前も覚えていた。

「…………ノーレン…………ノーレン・シュルスタイン…………。もしかして、団長を襲ったのってあんた…………？」

「フルネームでどうも。…………そうだ、俺があいつらを襲って、“白龍の玉”を奪った。なあに、当然だろ？あいつらは俺たちの敵だ。
なあ、シャルロ・グレディア」

ノーレンはシャルロを見下げ、皮肉めいた口調で答える。
シャルロはノーレンから、ベルグラスの方へ視線を移した。

「こんな、敵の巣の中に入るようなことして……。何を考えているの」

一度、息を飲む。

こいつらの力は、私がよく知っている。

「……そう警戒するなシャルロ……。七年ぶりに再会出来たんだ。すっかり女らしくなっちゃまって、見違えたぞ」

「そりゃあ、あの頃のシャルロは男みたいなもんだったからな」

ベルグラスとノーレンは、嫌みな笑いをうかべている。

「うるさいわね」

彼女は一言だけ。

手に汗握る緊張感を絶やす事は出来なかった。

こいつらは、ディルティール・ファミリーだ。

そして、

私も。

「ここまで来なければ、お前にコンタクトを取れないだろ。……用件は一つ。お前に帰還命令が出ている。すぐにファミリーに戻ってこい。お前の力が必要だ」

「……………何ですって……………？」

ベルグラスの言葉は、シャルロにとって、運命を左右する内容だった。

彼女の本当の姿、それを示すもの。

「何のために御館様が、ためえをあの学校に放り込んだと思ってる……………こつという時のためだけ……………まさか、俗世間に浸りきって、契約すら忘れたって訳じゃねえよな……………あ？ シャルロ……………」

暗い月明かりの下で、ノーレンの髪は白く見える。
もしかしたら、それが白い悪魔の由来かもしれない。

「……………忘れてはいない……………。……………でも、嘘よ！！だって、御館様は、五年間を与えてくれると言った。五年間は自由だって……………！！卒業するまでは……………」

卒業させてくれると。

でも、待って。

「……………どうせ、卒業したって、お前はディルテイルに戻るしかない。だったら、いつ学校を去るうが変わらないだろ」

そうだ。

もしかして、自分は何か錯覚していたのか？

これからもずっと、絵を描いていけると。

ベルグラスは、ざわめく空中庭園の木々を見上げ、彼女の返事が無いのを確かめる。

「……………何をそんなに動揺している。勘違いしていたのか？このまま自由が続くと……………」

「……………」

「……………それもそうか……………。驚いたぜ、お前に絵画の才能があるとはな。……………エリーゼ・オーディールの元に弟子入りさせて三年。ルネ・ヴィルトンで四年。たったそれだけで、お前は今では、世界で期待されている新人アーティストだ。……………御館様はとても喜んでいらした。……………ディルテイルにとつても、美術界にとつても、捨てがたい逸材……………」

彼はシャルロに近づくと、片方の耳に顔を寄せ、呟いた。

「……………取引だ。お前の今後を、お前自身に選ばせてやる」

「……………」

相変わらず、ベルグラスの声は低くて、感情が読めない。だから怖い。

昔からこの男は苦手だった。

「一つ……………このまま、無条件に俺たちと共に、デイルテイルへもどるか」

二つ、彼は一問を開けて、ゆっくり呟く。

「……………二つ、黒龍会のハク・リュオンを殺せ。……………そうすれば、このまま……………お前は自由の身だ。一生な」

風の方が変わる。

紡がれた条件に、彼女は血が凍るような思いだった。すぐ横に居るベルグラスと、視線が交差する。

奴は笑っていた。

「……………何ですって……………そんな事……………っ」

そんなの、どちらかを選ぶだなんて。

「驚く事じゃないだろ。もともと、お前はあいつの監視役で、入学させられたんだ。……………今更何言ってやがる。七年前までは、あんなに人を殺してきたって言うのに。……………“人”になれたとも思っ

んのかよ」

ノーレンは瞳を細めた。

シャル口は絶句する。

忘れた訳ではなかった。ただ、思い出したくなかったただけだ。

あの、幼さ故の、恐れを知らない感情を。

「あの頃お前は子供だったが、強さは本物だったぜ。……血を恐れず、死を厭わず、御館様のためなら何だってしてきたじゃねえか。……全ては、御館様のために」

全ては御館様のために。

あの頃の私は、その感情しかなかった。

確かにそうだ。その通りだ。

そして、それは今でも忘れられない感情。

ベルグラスは、固まってしまった彼女の肩に手をあてる。

「まあ、今すぐ決めろとは言わない。……この中国にいる間、それがタイムリミットだ」

彼は懐から何かを取り出すと、シャルロの手を取り、それを握らせる。

金属の、冷たい感触がした。

「……………いいか、シャルロ。……………御館様を裏切るな。俺たちには、あの御方が全てなんだ……………」

うつむき、言葉の出ない彼女にそれだけ言っと、彼らは不敵な笑みを残したまま、木々のざわめき、下界のクラクションの音に紛れて気配を消した。

何事も無かった様に、その場は自分一人だけになった。
何事も無かった様に、外の世界は動き続ける。

彼女はへタンと座り込む。

どうして。

どうして終わりはやってくる。

「……………どうして……………」

どうして、神様は私に、“絵”を教えた。
その才能を与えた。

どうして団長が、黒龍会なんだ。

どうして。

シャルロはそつと、手のひらを広げた。
ベルグラスに渡された物は、二つの指輪。

金と黒の、古い指輪。

一つは翼が描かれ、もう一つは蛇が描かれている。

どうして。

どうして、どちらかを失わなければならない。

涙など出ない。

そんな暇さえ無いほど、戸惑いの波に全てを持っていかれた。

86：中国プリンター偽りの自由

血の匂いと、銃声と、目の前に広がる黒い影と

死の感覚は

常に私の五感につきまとっている

シャルロは、自分がどの国で生まれたのか知らない。

覚えているのは、深い森の中で父親と住んでいた事だけ。
顔を全く思い出す事が出来ないから、記憶の中の彼は真っ暗な表情
をしている。

そして、父は、

と言うよりこの家系自体が、“殺し屋”であり、それを生業にしていた。

彼女は生まれた時から不思議な体質だった。

父もそうだったが、人並みはずれた身体能力と洞察力を持ち、毒も薬も効かない。

それは、殺し屋としての一族の力が、たまたまそうなのか分からない事だった。

でも、人より頑丈であつたが、怪我をする時はするし、殺されれば死ぬ。それは当然人であるから。

ただ、生まれた時から私は、食べる、寝ると同じ様に、常に銃を持たされていた。

それは人として異常な事だったのだろう。

母親は、私を生んだ時に死んだ。

どんな人だったのかは分からない。家には写真すらなかったし、父も寡黙な仕事人だったから、なかなか教えてくれなかった。

父は私に、常に言い聞かせた。

「銃を手放すなよ……シャルロ。それを手放した時が、お前の死ぬ時だ」

幼い私が、その内容を理解していたとは思えない。ただ、その言葉は繰り返され、暗号の様に私に染み付いていた。どんな時でも、私はそれを手放さなかった。

それだけは覚えている。

私は父以外の人間を知らなかった。

家には父以外居なかったし、父も夜になれば仕事に出て行った。私は幼かったけれど、父が居なくなる事に抵抗はなかった。今思えば、甘える事も知らない冷めた子供だった。

しかしある日、私は父以外の人間に会う。
私が五歳の時だった。

森が、やけにうるさい日だと思った。雷が暗い木々のシルエットをつくる。

それをじっと見ていた、あの日。

家に一人の少年が訪れたのだ。歳は12、13くらいだったと思う。深い茶色の髪で、瞳はダークグリーン。この森のように静かで、でも地に足の着いたような、歳の割にトーンの低い少年。

それがベルグラスだった。
彼と初めて出会った時だった。

「お前の父は帰っては来ない。あいつは死んだ。殺された」

「……………」

「……………いずれ、ここもあいつらに見つかる。我らが御館様は、お前を匿うと言っている。……………お前が死にたくないと思っっているのなら、俺と共に来るんだ」

「……………」

私はこの言葉を、その時どこまで理解していたんだろう。ただ、五歳と言う幼さで父の死を受け入れる事、理解する事は出来ていなかったにせよ、私の心には一つの確信があった。

この男についていけば、ここ以外の世界を見る事が出来るんじゃないだろうか。

「……………これはお前の父の形見だ。この“アール・カーヴァ”はお前の一族にしか使えない。契約者になるのは、お前を置いて他には居ない」

「……………」

少年ベルグラスは、表情をほとんど変えないで、私に手を差し出し

た。私は反応して、手のひらを出し、彼はその上に二つの指輪をのせたのだ。

金と黒の、古い指輪。

これは確かに、父が身に付けていた物だ。

それを受け取ったとき、そのお告げのような感覚に、私は本当の意味で理解した。

「……父さんは死んだのね」

「そうだ。……あいつらに殺された。お前の父ですら叶わなかったのだ」

「……あいつら？」

私は確か、その時聞き返した。しかしベルグラスは、深いダークグリーン色の瞳を光らせただけで、何にも答えなかった。彼はふいに外を気にすると、嵐の向こうの気配を悟る。

「………ついてこい。そうすればいずれ、何もかも分かる」

私は泣きもしない。嫌がりもしない。

何の感情も表現出来はしなかった。

ただ、その時思っていた事は、その古い家を出て行きたいと言う好奇心。

静かで、それでも心の奥ではくすぶっていた、その炎。

家を出るベルグラスに、彼女はただついていった。
手には形見の指輪と、父に手渡されていた銃だけを持って。

雷の強いあの日、私は外の世界へと出て行った。

私がデイルテイル・ファミリーのための“契約者”として仕える事になった、それから7年間。
ベルグラスをはじめ、そこには多くの子供が居た。彼らは皆、御館様に拾われ、そこでマフィアとして生きていくための術を身につけていく。

彼女は、その中でも、異常と言える程の才覚の頭角を見せる。

もともと、生まれながらに銃を持たされ、おもちゃで遊ぶ様にその技術を父に教えられていたシャルロだ。戦闘能力の高さは群を抜き、目覚め始めた力は、デイルテイル・ファミリーの期待であり、それ以外の組織の脅威でもあった。

ただ、彼女と能力を張る少年が居た事も確かだった。

シャルロより一年遅くにデイルテイルにやってきた、肌の青白い、でも目つきだけは一人前に悪い少年。名をノーレン・シウルスタインと言う。

彼がどのような関係でここに来たのかは分からないが、当時は酷くやせていて、人を軽蔑するような、誰も信じていないような拒絶を、その身に纏わせていた。

彼は、確かシャルロより年下であったが、彼女以上に残酷で残酷。人を殺す術を身につけてからは、仕事とは言え、遊ぶ様に殺人を繰り返した。

子供だったのに。

彼はだんだん、裏の世界で“白い悪魔”と恐れられる様になる。

とは言えシャルロにはなんら関係の無い事だった。

彼女はただ、淡々と、御館様のために任務を全うすれば良い。

人と言うものは生きているのだと、教わる前に“人殺し”を教わってしまったから。

彼女はどうしても、人間が生きているとは思えなかった。

ノーレンは、自分より強いシャルロを、異常なまでに敵視して、気に入らないようだった。

何回も彼女を殺そうとしたし、でもその度に喧嘩になって、ディルテイル・ファミリーを巻き込む騒動になりかねなかった。

基本的にシャルロの圧勝だったが、決着がつく前に、いつもベルグラスが止めに入るのだ。

奴が何者であったか、当時のシャルロには興味のない事だったが、御館様への忠誠心、その立ち位置は他のメンバーに比べて特別だったと思う。

彼は、戦闘能力がシャルロやノーレンと比べ高かった訳ではなかったが、その存在感はいつも冷たく、彼の言う事は基本、聞かなくてはいけない気がした。

それは、ノーレンだって一緒だった。

文句は言っていたが、私たちはこいつに逆らえなかった。何だか、少し恐れにも似た対象だったと思う。

そんな彼女の生活が、一変する瞬間がある。

シャルロとベルグラスは、共に“御館様”に呼ばれ、そして、ある長期に渡った使命を預かる事になる。

「私は、ベルグラスとシャルロ、お前たち二人を学校に通わせようと思う」

彼は確かにそう言ったのだ。

私は何の事だか分からなかったが、ベルグラスは、見た事ないくらい驚いた顔をしていた。

その時、シャルロは12歳で、ベルグラスは18歳だった。

「どういう事ですか御館様！！ 我々の力が必要無いとも言つのですか！！」

「いいや、君たち二人は、いずれこのディルティールにとって柱となる逸材だ。しかし、力を持っているだけではダメなのだ。殻を破るために必要な事は、“学ぶ”と言う事だ。……この先、我々がアール・カーヴァを手にし、世界の真実に辿り着くために。……そのために“美術”と言う物を学ばなければならない」

御館様は、彼らにそう言っつて、遠い先を見据えた故の決断をしたのだ。

ベルグラスをアメリカの有名な大学に入学させ、シャルロをギリシアのルネ・ヴィルトンへ通わせるために手をつつた。
エリーゼ・オーディール先生、シャルロにとっては唯一無二の師となる、その人物の元へ。

「エリーゼ・オーディールは、シャルロを拒否出来ない。グレディア家とオーディール家には、それだけの繋がりがある」

御館様はそう言っていた。

彼女は言われるがままに、エリーゼ先生の元へと向かったのだった。

それは、いつもみみたいな任務を受ける感覚であったが、違った事と言えば、父の形見である二つの指輪と、銃を手放す事だった。

「普通の人の様に、学ぶ事に専念しなさい。卒業まで、君は自由だ」

御館様は笑っていた。

自由だと、言われたその時は何の事か分からなかったが、

それから七年間、彼女は偽りであったものの“自由”を知る事になる。

どのようにしてエリーゼ先生の元で、絵を学ぶ事になったのか分からないが、彼女は始めからシャルロを受け入れていた。しかし、シャルロがディルディールから来たと言う事は知らない様で、もっぱら施設からやってきたという設定であった。

エリーゼ先生は、男の子の様に髪が短く小ざつぱりした彼女を見て、
淡々と言うのだ。

「これからは、自分が女である事を意識して生きていきなさい。今のままが特別気に入っているならそれでもかまいませんが、せつかくですもの。……あなたの母親は、それは美しい女性でした。あなたの髪は、母親譲りです。……短過ぎて分からないかもしれせんが……」

「……母を……知っているんですか？」

「……ええ。……あなたの母は、この学校の卒業生ですよ。……昔、私も良くしてもらいました」

シャルロは、思いがけない事実にも、久しぶりに驚いた。
ここ何年間も、特に何があっても滅多な事では驚かなかつたのに。

母の話が出てくるなんて思わなかつた。

シャルロはそれから、短かつた髪を伸ばし始める。
母に似ていると言われ、少し興味を持ったのだ。のばしてみたら、母を知る事が出来る、そんな夢見がちな発想を、シャルロは抱いていた。

彼女は絵を描く事を学んだ。

それまで、御館様の館で沢山の絵を見てきた事はあったが、絵を描く事は無かった。

エリーゼ先生は、そんなにスパルタではなかったが、彼女は思いの外にそれにのめり込んでいく。

シャルロの才能は目を見張る物があり、そして彼女も、世の中にこんな面白い事があるんだと、初めて“人殺し”以外に自分を見いだした。

エリーゼ先生は予想していただろうか。

シャルロがあのように才能を開花させる事になると。

学校へ入学してからの彼女は、今までが無名だった分、大きく高く評価をのばしていく。
そしてたまたま、彼女の学年が才能あふれる、素晴らしい学年であった。

入学する前から才能名高かった天才少年、スノーフリーク・ロズベ

ルトの存在もあり、シャルロは多くの人の中で何かを学び、求め、極める事の意義を考える様になる。

今まで、何の感情も無く生きてきた彼女が、人の命を考える様になる。

ああ、人って生きているんだ。

こんなにも笑って、泣いて、苦しみながらも絵を描いて、

そして、共に階段を上っていく。

ルネ・ヴィライアーになってからは、世界の広さを目の当たりにし、圧倒される。

世界はとにかく広く、自分の今までの視野の狭さを改める様になり、とにかく考える。

考えなければ人は何かを得る事は出来ない。
考えた後は、行動しなければならぬ。

始めから、人間同士は分かりあえる事は無く、お互いを嫌っても意識したりして、

いつの間にか一緒に居て、笑いあったりしている。

それが当たり前だと思い始めて、彼女はだんだん忘れていった。

自分が本当は、このような所で笑う資格なんて無かったんだと言う事。

彼らの中に居場所を見つけてはいけなかった。たつて事。

絵を描く事の、あの色とりどりの世界を知ってはいけなかった。

知りすぎたら抜けられなくなる。

だって、今だって悩んでいるじゃないか。

シャルロは静かに、暗いホテルの部屋の中でうつむいていた。

手のひらの指輪を、何度も捨てたくなった。その衝動に駆られる度に、過去の罪が襲ってくる。

ハク・リュオンを殺せ。

久しぶりに会ったベルグラスは、彼女にそう告げた。そうすれば、私はこれからも絵を描いていける。

あの学校で、皆と共に生きていける。あの世界に留まれる。

一生、絵を描いて生きていきたいと思った。

きつといつからか、そう願っていた。

d
r
a
w

87：中国プリン〜始まりと終わりのキス〜

どのみち私はもう逃げられない

私と同じ痛みを、あなたも感じてくれるなら

私が今まで描いてきた事に意味はあったのだろうか

ルネ・ヴィライアーたちは事件のあった翌日、団長に土下座され告げられる。

「すまん！！俺のせいでこんな事になって！！お前たちの貴重な研修を中断せざるを得なくなった！！」

「べ、別に団長のせいじゃ無いだろ！？仕方ないじゃないか……」

レッドは土下座する団長の前で、あたふたしながら彼を立たせようとする。

ティアンは眼鏡を光らせて、土下座する団長をチラッと横目に見る。

「そうそう。これはもう、僕たちにどうこう出来る範囲を越えてる。何も起きないうちに学校へ帰った方が良いね。エリーゼ先生も納得してくれたし」

「……………」

団長は複雑な表情をしていたが、もう一度キリッと引き締めると、

「夜の便で帰る事にしている。ここを午後には出ないといけねえ。準備をしておいてくれ」

いつもの団長らしくハキハキと纏める。

やはり、ヴァイライアーには団長が必要だった。

お昼に、えらく豪華な中華料理を食べ、満足そうにしていたヴィライアーの中で、当然シャルロだけが神妙な面持ちだった。

流石にエリーゼ先生もそれに気がついたらしく、彼女に声をかける。

「どうしましたか？ シャルロ……」

「……………先生……………」

先生。私はどうしたら良いのでしょうか。

シャルロは一瞬だけ、エリーゼをすぎる様に見つめたが、すぐに視線を逸らした。

私は、この尊敬する先生を、私に芸術の道を示してくれた先生を、裏切っている。

「別に……………何にも無いです」

「……………故宮に行った後のあなたは、どこがおかしいですよ。……………四年生がみんな、あなたの事を心配しているんですよ」

「……………」

四年生。

皆が心配している。

彼女は、先生に呼び止められた廊下に掛けられている鏡で、自分の顔を見てみる。

暗い表情、うつろな瞳には、到底シャルロらしさは見られず、これならば皆が心配するのも無理は無い。

四年生はそうだ。皆が揃つての四年生。

あの人たちなら、私を心配する。

「……………どこか、具合が悪いのですか？ それならば……………」

「……………先生」

彼女は、エリーゼ先生の言葉を遮り、うつむいたまま問いかけた。それは、彼女の生き方を象徴する言葉になっただろう。

「……………芸術に終わりはありますか？」

「……………？」

「美術は永遠ですか？」

永遠ですか？

造形物は、何年も先まで残る。たとえ劣化しても、人類はそれを復元し、知ろうとする。

きっとそれは、芸術にしか出来ない事。

美しさは、人の心をつかむ力。

先生は少し時間をおいてから、

「……………永遠です。人が居る限り。……………芸術だけは、人にしかない力ですから」

先生は、シャルロの質問の答を知っている。

眼鏡の奥のエリーゼ先生の視線は、何だか全てを見透かしているようだ。シャルロは先生に、心のそこから感謝を言いたかった。本当は、そのために質問したような物だ。

あなたのおかげで、暗い道を歩き続けてきた私の、その道に、絵の具の色が落ちていった。

「……………ありがとうございます……………先生。」

ありがとうございました。

あなたは私にとって、最高の師であり、母のような存在だった。

さりげなく、不審がられない様にお礼を言っ たつもりだったが、こ

み上げる感謝の念と、自分があなたを利用していたのだと言う、罪悪感がうずく。

先生は一瞬、少しだけ顔をしかめた。

「……………シャルロ……………」

シャルロはくるりと背を向けると、拳を一度握りしめ先生から遠ざかった。

団長は、学校へ戻ると言うのに、ここに居る限りは安心は出来ないようだった。

ディルティールの動向を探り、奴らの目的を捕えたかった。

「ディルティールと言えば、そのボスがコレクターで有名だ。黒龍会と美術品を巡って争った事もある。それでも今まで、それほど

ぶつかる事が少なかったのは、集めている芸術品の地域が違ったからだ。黒龍会は基本的に、アジアの芸術品が多い。向こうはもっぱらヨーロッパだ」

「でも、今回は“白龍の玉”を持っていったね」

「……そうだ。あいつら、アール・カーヴァなら何だってよくなってるんだ。……最近活動が派手すぎる。何を考えてる……」

団長はモニター室で、画面の世界地図に記された、分かる限りのあいつらの経歴を見ていた。
どこで何を手に入れるために、何と争っていたか。

「……他の組織にしてみたら、たかが芸術品を巡った争いだとバカにされそうだな。……でも、アール・カーヴァを持った組織は脅威だ……」

その時だった。

モニター室に連絡が入る。

『上華街C地区で、ノーレン・シュルスタインの存在を確認。映像送ります』

世界地図の映像は、彼らのシマとなる地区に切り替えられる。
沢山の監視カメラが、この華やかで少し影のある地区に取り付けられている。

その映像には、相変わらず気が触れたような、目に殺意を抱いて笑っているノーレン・シュルスタインが、明らかにカメラを見抜きながら。その地区を治める黒龍会の幹部たちが血まみれで倒れている。返り血が、ノーレンの頬に流れる。

彼は、「来いよ」と言っているようだった。

少なくとも、彼の口の動きは、団長にはそう聞こえた。

「くそっ！！！！」

団長は拳でモニターの前の台を叩き付けた。
なめやがって。

「……………どうするリュオン……………。今ボスは居ない。四子も三人しか居ないぞ」

「どうするって、行くしかねえだろ！！！ あいつら……………黒龍会に喧嘩売ってきたんだ！！ このまま黙ってられるかよ！！！」

イレイは太い眉根を寄せ、再びモニターに目を向けた。
確かに、この国を、自分たちのフィールドを荒らす奴を見逃す事は出来ない。

「ちよつとリュオン！！ 僕たちはもう帰るんだよ！！！」

「ヴェライアーは先に帰す。俺たちがあいつらを引き止めてる方が、ヴェライアーに被害が及ばねえ」

「……そんなの分からないだろ！！ どうするんだ、ヴィライアーが狙いだったらー！！」

ティアンの言う事は最もだった。

もしかしたらこれはおとりで、ヴィライアーを人質に取るかもしれない。

その可能性は、俺がヴィライアーである以上否定出来ない。

でもこのまま黙って見ていろっつて言うのか。

俺は、黒龍会の、次期会長だぞ。

「ヴィライアーには十分な護衛を付ける。テンメイはヴィライアーを守ってくれ……」

「……………」

四子のテンメイは頷いた。

ティアンは頭を抱え、それでも今のリュオンの立場なら仕方ないとも思う。

「……四子をたった二人だけ連れて、もし君が死んだらどうするんだい。……黒龍会もヴィライアーも」

「死ぬもんか。……この国なら俺は死なねえ。……見せてやる、デイルテールに……………」

彼はスーファが持ってきた黒い銃を手に持つと、歯を食いしばった。
あいつらの好きにさせるもんか。

ここは俺たちの国。

契約者はお前たちだけじゃない。

「……リュオン……」

メルベリーは心配そうに、胸元で手を握っていた。
彼女にこのような世界は、つくづく似合わない。

「……メルベリー……。心配するな。お前たちが帰る便には間に合
わないかもしれないが、きっと俺もギリシアへ戻る」

死んだりしない。

団長は、メルベリーの肩を掴むと、優しくポンポンと叩いた。

お前たちを巻き込んだりしない。

団長の決意は固かった。

シャルロは、今皆と一緒に居たくなかった。

だから、この空中庭園から街を見おろしている。

夜の摩天楼とは違う、歴史の空気すら感じる街。

その時だった。

上空をへりが飛び立っていった。

強い風を巻き上げられながら、このビルの最上階から。

へりが空中庭園横切った瞬間、シャルロはその中に団長が乗っていたのを垣間見る。

ドクン……

嫌な胸騒ぎがする。

これからルネ・ヴィルトンに帰るはずだ。
なのにどうして、団長はあの中に居た。

嫌な気がする。

彼女は走って、ティアンやメルベリーのいる、さっきまで団長たちのいたモニター室に向かう。

「……………おい！！ ここは立ち入り禁止だ！！」

途中様々な警備の黒スーツに足止めを食らったが、そいつらをすり抜け、その部屋の扉を開ける。

「……………！！ シャルロ……………！！」

ティアンは凄い顔で驚いていた。
メルベリーも、はっとしている。

「……………先輩……………。団長はどこへ？」

「……………え？ い、一体何の事が……………」

「とぼけないでください！！ 団長、さっきどこかへ行ったでしょー！！」

その時、シャルロはモニターに映るノーレンの姿と、その場に倒れている血まみれの死体を目にした。
隣のモニターには『上華街C地区』と、地図に示されていた。

「……………ノーレン……………っ」

憎しみにも似た声で、奴の名を口にする。
彼女はギリと歯を食いしばり、その部屋から出て行った。

「ちょー！！ シャルロ！！！！」

ティアンは、今頭の中で、何か大きな違和感にぶつかった。

どうしてあの子がその名前を知っている。
それはもしかしたら、とんでもない事なのかもしれない。

彼は今、頭の中で、一番最悪な事態を想定した。

もしかしたら。

もしかしたら……。

「……………！！！！ テンメイ！！！！ シャルロを追ってくれ！！ 絶対にこのビルから出すな！！！！」

「……………」

テンメイは頷くより早く、一瞬で部屋から出て行った。

「ティアン！？」

メルベリーは動揺している。

「どうして……………っ！！」

「くっそ。僕の考えている事がもし、万が一正しかったら、事態は最悪だぞ！！」

ティアンは眼鏡をかけ直すと、モニター室の前の台で突っ伏した。

そして、すぐに頭を切り替えると、モニターの一つをビル内に切り替える。

監視カメラはシャルロを追う。

「……………間違っていてくれ。……………頼むから」

シャルロは、団長を追わなければと言う、ただそれだけの思いで走っていた。

自分がどんな答えを出すべきなのか、きつともう体の中で分かっている。

だから、自分の思うままに走っていた。

いきなり、目の前に現れたテンメイ。

本当に、何も無い所から急に現れる。

足が速いとか、そう言う次元ではないと思う。

「どいて。……私は団長の所へ行かなければならないのよ」

「……………」

テンメイは相変わらず、黙ってこちらを睨んでいる。

何を考えているのか分からないが、その視線には、流石に恐れを感じざるをえないのだろう。

普通なら。

「……………御戻りください。……………なぜ我が主を追うのですか。…

…ここから先は、あなたには手の負えない闇の世界」

「……………あら、あなた喋れたのね……………」

シャルロは少し、鼻で笑った。

今まで言葉を聞いた事が無かったから、少し驚いたが。

彼は中国の武人らしく構えると、

「……………お前……………本当にルネ・ヴィルトンの生徒か……………？」

細い目をさらに細め、目の横に筋をつくる。

その言葉に、彼女はクツと笑った。

もしかしたら、私があい学校に居た事は、夢の話だったのかもしれない。

あの場所に居て、絵を描いていた。
側に皆が居た。

スノーが居た。

彼女は右の手のひらを前に差し出す。

そう。あれは全て、夢の中の話。
私は今日から、また目を覚ます。

「……………アールカーヴァ……………“ヴィクトリアの槍”……………」

暗い時代が始まる。

一瞬、彼女の指の金の指輪が光り輝いた。その光は、どんな者にも

負けない勝利の煌めき。

彼女の手の中には、黒いボディに金のヴィクトリアの羽が描かれた銃が。

シャルロにとって、槍は銃。

生まれた時から手にしていたもの。

「……………まさか……………そんな……………」

モニターの奥から様子を見ていたティアンは、目を疑った。

「シャルロは……………契約者なのか…っ!？」

彼女はカチャリと銃を向ける。

その殺気、視線はもはや誰が知っているシャルロでは無く、アール・カーヴアの持つオーラは半端ではなかった。

「どいて。でなければあなたを殺す事になるわ」

「……………」

激しく睨み合う駆け引きの中、シャルロは敵に向けた殺気を残した

まま、あたかも殺しにくい勢いのまま、テンメイの側を通り抜けた。

「……………何!？」

この人を殺すわけにはいかない。

きつとこの人は、ヴィライアーを守るための残されたのだ。

「……………あなたはヴィライアーを守って」

通り過ぎる時、彼女はそつと、テンメイに聞こえるか聞こえない程度に呟く。

もしかしたら、ディルティールはヴィライアーにも手を出すかもしれない。そう言う組織だ。あいつらは欲しい物のためなら何だってする。

テンメイは彼女を追おうと思ったが、そう出来なかった。

金縛りにも似た、何かに酷く睨まれたような“死”の感覚に、足が動かなかつたのだ。

頬を流れる汗が、地面に落ちる。

何だろう。

彼女にはまだ、何かがある。

シャルロは振り返らなかった。
もう迷ってはられない。

あいつらが私に示したタイムリミットは、ヴィライアーがこの中国にいるまで。
それは今日の夜まで。

彼女はアール・カーヴァを解く。

その時だ。

シャルロの前方にスノーが立っていた。

廊下から窓の外を見つめている。

シャルロは何だか、突然襲われた悲しみの感情に、どうしても立ち止まらなければならなかった。
スノーがシャルロに気がつく。

「……………シャルロ？」

「……………」

「……………」

シャルロはじつとスノーを見つめていた。

ああ。

私はあの時間を、この4年間を、夢に変える事は出来ない。

あなたは一番私の側にいた。

そして私も、あなたの事を、あなたの絵画を、一番知っていた。

あなたの絵画を初めて見た時、まるで教会の鐘の音が響き渡るよう

な、神様の御心に触れたような、そんな奇跡みたいなイマジン・ストーリーを見た。

こんな絵を描く人がいるんだ。

私は初めて、誰かが自分より遙か高見に居る感覚を味わったのだ。

「……スノー……」

「どうしたの……？ 泣きそうだよ……」

スノーはシャルロの顔を覗き込んだ。

彼は何も知らない。

そうか。私は泣きそうなのか。

自分は、絵を失う事を、そんなに悲しいと思っているのか。

シャルロは首元のリボンに付けた、ルネ・アンバーのブローチを、リボンごと外す。

そして、そのままスノーにキスをした。

スノーは、その綺麗な茶色の瞳を大きく見開いている。
一歩身を引いて、でもそのまま動けないでいる。

時間は、私たちの限界を知っている。

たった一瞬を、こんなにも長く感じさせてくれる。

シャルロはそっと、彼の手にルネ・アンバーのブローチを握らせると、やっと唇を離れた。

「……シャルロ……」

彼は、今まで見た事無いくらい驚いた顔をしている。
まあ無理も無いだろう。

「……さよなら……スノー……」

さようなら。

私もし、このままずっとあの学校にいたら、私たちの関係はどうなっていただろう。

どう変わっていっただろう。

あなたがこれから絵を描かなくなる私を、どう思っかは分からない。

でも、私がいなくなる事を、あなたも悲しんでくれるなら、

きっと私たちは、お互いの存在に意味があったのだろう。

その場を離れた時、その瞬間から、

彼女はもうヴェイライアーではなかった。

d
r
a
w

88：中国プリン〜馬鹿野郎！！

俺は、この組織の人間として生まれた事を後悔した事は無いが、

辛いと思った事は何度だつてある

上華街は、黒龍会の持つ高級な繁華街だ。そして、そこには少し危ない奴らも集う。

中国の伝統をデザインしたようなきらびやかな建物。その装飾は、夜になると赤く染まる。

にぎやかで栄えた人の集いは絶えず、楽園のようだ。

今までも、この場所で小さな事件はあったが、それは黒龍会によって裏で処理され、何事も無かった様に消えていく。

しかし今日は、そうもいかないかもしれない。

団長はへりの中で、上空から伺える上華街の淡い光を見つめながら、華やかさの奥にある闇を見つけようとした。

このような闇の世界に居る自分。
ルネ・ヴィルトンにいる自分。

いったいどっちが本当の自分なんだろう。

その時、へりの中にある通信機から、連絡が入った。
それはさっきまでいたホテルから。ティアンからだった。

「ティアン……何事だ」

「大変だリュオン！！ シャルロが……っ！！！」

動揺の見られる彼の声。

ティアンの告げる一言一言に、団長は瞳を驚きに染め、静かな焦燥を感じる。

それは、一つも信じられる事ではなかったが、つじつまの合う事もある。

心の中では、納得してしまっている。

「……あいつは……もしかして……」

「待つてリュオン！！ まだ何も分からないんだ！！ 確実なのはシャルロが、契約者だって事だけだ！！」

はやまるな。あいつが敵かもしれないなんて。でも、そうとしか考えられないじゃないか。

そうだ。あいつは前から、尋常じゃなかった。その強さは、普通の人間にはあり得ないものだった。

今まで、そこに疑問を持った事は何度もあったが、彼女自身を疑った事は無かった。

ヴィライアーと言っただけで、信じていたんだ。

「…………リユオン…………シャルロは君の前に現れるだろう。…………もし彼女が銃を向けたら、君もためらうな。…………シャルロはきっと強い、それは君自身が一番知ってる事だ」

「……………」

確かに。

あいつは、いつも俺と衝突していた。

何をするにも喧嘩ばかりして、それでも仲間だと思っていた。

生意気な後輩だと思っていたけれど、俺の無茶について来れるのも、なんだかんだ言ってあいつだけだった。

1474

どうしてだろう。

何でこんなにも上手くないかない。

全てが最悪の方向に向かっている気がする。

団長は、四子二人を連れて、ノーレン・シュルスタインがいると思われる上華街C地区に向かった。

華やかなはずのこの場所で、何も知らずに居る人々と、ノーレンを追っている役員の、天と地程の差。

「あいつはまだ、それほど暴れてはいないみたいだな。気がついてない奴らが多い」

「……畏かもしねえぜ。……良いのかリユオン」

イレイはさつきから、周囲の異様な空気に顔をしかめている。

問題となっている建物の中に入り、奴がモニターに映っていた部屋の扉を、四子が前になって開ける。

そこには、待ちくたびれた様に、団長たちがここに来るまでに殺した人間を数えて遊ぶノーレンの姿があった。

扉が開かれた音に、彼は満足そうに笑う。

「やーっと来たか。……退屈過ぎて、ここにいる奴ら全員、もう一回殺そうかと思っただぜ」

「……………ふざけるな。もうとつくに死んでる。……………ゲームじゃね
んどくそガキが。死んだ奴は二度とは死なねえ！」

団長は、銃を構えた。

それは一つの合図。四子の二人は、お互いノーレンの右と左に分かれ、三方から奴を囲む。

「こっちは契約者が二人だ。……………お前は囲まれてんだぜ。」

団長は、目の前のノーレンを血走った瞳で睨み上げ、これで終わりだと、合図を送ろうとした。

その時、ノーレンは口の端を引きつらせて、

「挟まれたのはどっちだ。……………ハク・リュオン」

カチャリ……………

突然、団長の背後で、今まで感じた事の無いくらいの冷たい殺気を
感じた。

団長は思わず振り返る。

「……………っ……………シャルロ……………」

そこには、何とも色味の感じない、冷たい氷のような瞳をしたシャルロが、銃を構えて立っていた。
これが、シャルロなのか。

そこに居た彼女は、見目形は本人だったにしろ、感じられる存在は到底彼女とは思えない。

「シャルロ……やっと来たか。ヒヤヒヤしたぜ、お前が裏切るんじゃないかってな」

ノーレンは、何がおかしいのか気が狂った様に笑っている。
その声は、団長には耳障りでしかない。

「どういふ事だシャルロ!!! 答える!!!」

「……………」

全員が動けない、この三つ巴のような状況。

やはり、鍵を握るのはシャルロだった。

団長はどうしても、彼女の口から真実を話してもらわなければ、何も納得出来なかった。

「お前……ディルテイルなのか……………」

「……………」

「今まで、俺たちをずっと騙してきたのか!! 俺を殺すために、あの学校にいたって言うのかよ!!」

「……………そうよ。」

彼女は視線を上げた。

戸惑いも動揺も、本心さえも分からない。

死の匂いを抱いた瞳。

「四子のクズ共。俺の相手をしている暇があったら、あの女を止めた方がよいぜ。俺はもう、高みの見物してるから。…………嘘じゃねえよ」

彼はパンドラの剣を解いて、側にあつたゴロのついた椅子に腰を埋めた。

「肩凝ったぜ」とかいいながら、腕を頭の後ろに回し、本気で高みの見物を決め込むようだ。

ふざけやがって。

「さつさと始末しろシャルロ……………そうすればお前はまた……………」

「黙りなさいノーレン。……………それ以上何か言ったら……………手を出したら、お前も殺す」

ブワツと、生温い風のように、シャルロの殺気が体を横切る。少し遅れてやってくる、谷のどん底にまで落とされたような恐怖。

シャルロの瞳は本気だった。

彼女は団長と一度視線を交わしたと思ったら、そのまま一瞬で彼を押し倒す。

「!!!!!!!!!!!!!!」

心臓に銃を突き付け、刺さるような視線で見おろす。

イレイとスーファが彼女を止めようと、その背後に回った時だ。

シャルロは銃を持つ手の、反対の手を横にかざし、黒いリングに名を刻む。

「アール・カーヴァ……『ゴルゴンの盾』……っ」

それは、ヴィクトリアの槍とは正反対の、禍々しい光を放ち、二人の四子を一気に吹き飛ばした。イレイとスーファは思いきり壁に激突し、ずるりと落ちる。

「……………何だと……………」

団長は目を疑った。

あの二人が、一瞬で、たったの一撃で吹き飛ばされた。

シャルロの持つアール・カーヴァは、並大抵の物ではない。

黒い光は、やがて、蛇の鱗のような、半透明で六角形の結晶を構築していった。

その、無数の結晶はシャルロの周囲をいつも渦巻いて、それは蛇の様に睨みを効かせている。

彼女を守っている。

ヴィクトリアの槍（別名をニケの指輪）

ゴルゴンの盾（別名をメデューサの指輪）

それは、顔の無い女神と、顔だけの女神の、二つで一つのアール・カーヴァ。

生と死、それを分つ、今となつてはシャルロにしか使えないアール・カーヴァであった。

彼女は団長を見おろしたまま、

「……ねえ……団長。……あなたが死ねば、私は自由なんだって……」

銃を押し付ける力を強める。
お互いの視線が交差する。

「……確かに、私はあなたを監視して、あるいはいつか、こうやって殺すために、あの学校へ送り込まれた。……ヴィライアーとなつて、あなたに近づくために、絵画を学んだわ……。でもね、いつからか知ってしまったのよ。あの世界の素晴らしさ。たった一瞬なのに、永遠にも思える美術の世界を……」

「……………」

「私なら……私ならもっと、高見へのぼっていける。……極める事が出来る……。つ。でも、そのためにはあなたを殺さないといけない……」

ゆっくり、もったいぶる様に、銃の引き金を引くための時間を作っていた。

ただ、団長は、シャルロから一度だつて目を逸らさなかつた。その視線は、何の濁りも無くただ、ただじつと、彼女を見据えている。

「だったら殺してみろよ」

団長は銃口を掴んで、心臓の位置から離さない様にする。
シャルロはゆっくり、目を見開いた。

「だったら殺してみろよ！！ さっさと俺を殺せ！！ 殺せばいい
！！！！」

団長の言葉に、確かにシャルロは、一瞬戸惑ったのだ。
彼のまっすぐな瞳と、恐れのない態度。

歯を食いしばる。

団長はその隙を見逃さず、彼女の頬を思いきりひっぱっていた。
その音だけが辺りに響き、彼はシャルロの胸ぐらを掴む。

「馬鹿野郎！！ 殺せねえんだろ！！ そうに決まってる！！
！」

シャルロの中で、じわじわ染み渡る痛みを、頬から伝わる痛みを、
彼女自身がじかに感じ取る。
怒鳴られ、呆気にとられたまま、痛む頬に手をあてる。

この人は、なんて人なんだろう。

「同じヴィライアーなんだ。……お前が、俺を、俺たちを殺せるはずが無いだろう!!! この馬鹿!!!」

シャルロは、口をぎゅっと結んだまま、こみ上げる涙と、目を覚ますような軽快な痛みに、自分を隠しきれない。

殺せる訳が無い。

団長はきつと、最後まで私を信じていた。

痛いのは頬だけじゃない。

彼はやはり、団長だった。

この人が私の、私たちのヴィライアーの、団長だった。

黒龍会なんて関係ないじゃないか。

この人が、自分にとって、何者でもなく、ただ団長であると言っ事。

それが全てじゃないか。

I
d
r
a
w

89：中国プランFINAL〜ガンスの幕開け〜

視線の攻防

駆け引きの結末

始まりのガンズ

「馬鹿野郎！！！！ お前が俺を、殺せる訳無いだろう！！！！」

そう言いきった団長の強い言葉に、シャルロは、今までキツく結ん

でいたヒモが緩くなるのを感じた。
頑に、我慢していたもの。

「……………団長……………」

シャルロは齒を食いしばったまま、

「じゃあ……………じゃあどうすれば良いのよ！…私はあなたを殺せない……………っ！……………」

涙を止める事も出来ずに、彼に全てをぶつけたかった。

「殺せないわよ！…でも、私はもう帰れない！………………どうすれば良いのよ！……………」

もう、どうしたら良いか分からない。

絵を諦める事も、あなたを殺す事も出来ない。

御館様を裏切る事だって、到底出来る気がしない。

何を選べって言うのよ。

何も選べないじゃない。

「馬鹿野郎！！ お前は絵を描くんだよ！……………ルネ・ヴィルトンに帰るんだ！……………」

「無理よ！！ 私はもう帰れない！！ あなたを殺そうとしたのよ！！！」

「俺が良いって言ってんだ！！ 何が無理なもんか！！！」

団長は相変わらずだ。
あなたはそう言う人だ。

自分のリスクを克服出来る人。たとえ、世の中で褒められる立場に生まれなかったとしても、それさえ押しつけて、あなたは日向の世界に居る。

その姿が、いつも眩しいと思っていた。
それは、嫉妬にも似た、尊敬だった。

そんな中、一人、ノーレンだけが面白く無さそうな顔をしている。

「くっだらね。何つー茶番だよ」

ノーレンは座っていた椅子から立ち上がると、

「どのみちハク・リュオン……てめえはここで死ぬんだよ！！！！」

パンドラの剣を構え、二人に飛びかかる。
シャルロは再び、瞳を光らせると、自らも銃を構え、それをノーレンに向かって撃った。

ノーレンはチツと舌打ちをして、その銃弾を避け、後退する。

「シャルロオオオ!!! てっめえ、裏切る気か!!!!!!」

ノーレンは青筋を立てて、怒りをあらわにさせている。しかしそれはシャルロも一緒だった。

静かな、氷のような死を抱いた殺気は、彼女だけの物。

「団長は殺させない……。ヴィライアーにはこの人が必要なのよ……!!」

ノーレンとシャルロは、その闘志をぶつけあい、今、この空間は冷たい電流が走っているような緊張感の中にあつた。

「……………シャルロ……………」

団長は彼女に、「やめろ」と言いたかつた。もう、お前が戦う必要は無いんだと。

しかし、その時の緊張感は、その殺気のぶつかり合いは、自分の入る余地を与えない。少しでも動いたら、体がずたずたに切り裂かれそう。

四子の二人は、体の痛みを抑え、リュオンの前に立った。シャルロはそれを確認すると、

「……………イレイさん……………スーファさん……………。団長を早く、連れて行ってください。……………皆が待ってる」

後ろ姿のままそう告げた。

団長は目を見開いて、

「てめえ……まさか……。ふざけるな！！ お前を待ってる奴らだつているんだぞ！！……てめえは裏切るのかよ！！ 四年生を！！」

「……………」

「ふざけるな！！！！ あの学校には、お前みたいな才能を求めて、それでも報われない奴らが沢山いるんだぞ！！！！ お前は、選ばれた才能を持っているんだ！！！！ ここで絵を描くのをやめてみる。お前はそんな、あの学校の奴らをみんな馬鹿にしてるような物だ！！！！」

「……………」

シャルロはもう、決して団長の方を見なかった。

ノーレンだけをずっと睨んで、彼が動かない様に壁になる。

イレイは、団長の肩を掴むと、首を振る。

「……………リュオン！！！！」

しかし、団長はいつまでもシャルロに向かって叫び続けた。

「ふざけんな！！！！ ふざけんなシャルロ！！！！」

その時だ。

イレイは団長の腹を殴ると、倒れ込む彼を、そのまま受け止める。

「……………っ……………。イレイ……………てめ……………っ」

リュオンは驚きの瞳そのまま、ゆっくり意識を失う。

イレイは瞳を細め、何とも言えない顔をしていたが、

「……………男だろ。……………未練がましい事言ってるじゃねえよ……………」

団長を肩に担ぐ。

そして、シャルロの方に一度だけ視線を送ると、そのまま団長を連れて、部屋を出て行った。

それで良い。

どうか、ギリシアにつれて帰るまで、その人を守って。

シャルロは、彼らの足音が遠ざかっていくのを聞きながら、何度も「それでいい」と言い聞かせる。自分自身に。

さようなら、団長。

さようなら、母なるルネ・ヴィルトン。

ノーレンはやっと、クスツと笑うと、構える剣をくるくる回して、馬鹿にした瞳がいつそう鋭い。

「ほんと、くっだんねー茶番だぜ。てめえ、最初からこうするつもりだったんだろ。ハク・リュオンを殺すつもりなんて無かったんだ」

「当たり前じゃない。私がどんな選択をしようが、あんたたちは、団長を殺そうとしたでしょう。だから私は、あんたを止めるためにここへ来たのよ。団長が、ルネ・ヴィルトンに帰れる様に」

彼女は、ノーレンがアール・カーヴァを解いたのを見ると、自分のヴィクトリアの槍も解く。

その場には二人しかいない様に見えるが、

「出てきなさいよ。さっきからずっと、ここに居るでしょう、ベルグラス」

横目に何も無い空間を睨む。

すると、その場所に薄い霧がかかったかと思うと、黒いスーツにサングラスをかけた男が姿を現した。

彼は、鼻で笑うと、そのサングラスを外す。

昔、こいつが私を迎えにきた、あの時のダークグリーンの瞳はそのまま。

彼はシャル口を見つめた。

「お前の行動にはいつも驚かされる。もし裏切ろつものなら、危うくお前も殺さなければならぬ所だった」

「……あんたが？……私を……？」

シャルロは腰に手を当て、彼を睨む様に笑う。

「無理ね。私は誰にも負けないわ」

「……そうだな。それでこそ、お前を連れて帰る意味があるってものだ」

お互いの探り合いの視線。

本心はどこにあるのかさえ分からない、駆け引きのその向こう。

ベルグラスはほくそ笑む。

「お帰り、シャルロ・グレディア」

むかつく上から目線の顔を、彼女は睨む事しか出来なかった。私から、絵を奪った男。

「暢気なものねベルグラス。あんた、寝ているうちに私に殺されな
い事ね。一生恨んでやる」

「……はは。肝に銘じておくよ」

ベルグラスは相変わらず、胡散臭く鼻で笑う。

彼らを迎えにきたヘリが、シャルロの髪を煽っては、夜の深い匂い
を連れてくる。

もう戻れない。

あの美しい世界には。

彼女は一度、夜の匂いを深く吸った。

自分はこれから、暗い夜に生きていく。
この匂いを引き連れて。

そして、へりに乗る時、ふとその夜空を見上げた。

この濁ったような夜の空も、どこかであるルネ・ヴィルトンと繋がっている。

この風はいつしか、彼らを包む、優しいギリシアの風になる。

目をつぶって、風のを聞いてみる。

今だけは、この切なさを忘れたくない。

そして、彼女が再び目を開けたとき、その時はもう、

彼女は日向の人間では無かった。

それは、ガンズの幕開け。
美術品を巡る、激しいマフィア間の抗争の渦中に、彼女は飛び込んでいく。

シャルロ、ノーレン、そしてベルグラス。
それは、この三人の、ガンズの物語。

この中国から始まった、

どこかでまた、ルネ・ヴィライアーたちと繋がっていく、

I
d
r
a
w

また別の物語。

*draw(中国プランキャラクター)

中国プランで出てきた、今後重要そうなキャラクターを纏めました。

<黒龍会>

中国、上海を拠点に活動しているマフィア。表は海運業者。ホテルも経営している。元々貴族ハク家からなり、沢山の芸術品を保管している。代々美術品コレクターと言う事もあり、組織ぐるみで美術品を求めるちよつと変わった組織。ヴィライアー団長の実家であり、彼がのちに継ぐ事になる。美術品収集組織の三大勢力の一つ。黒龍会アール・カーヴァの“四子”アール・カーヴァと言え、彼ら自慢の優秀なボディガード。四人の契約者を抱えている。

“黒龍の玉”を守っている。

ハク・リュオン

*黒龍会の若頭

*20歳

備考/おなじみの団長です。マフィアを継ぐ事に抵抗は無い。ただし、自分の組織のもめ事に、ヴィライアーを巻き込みたくないと思っっている。

ハク・リュウエン

* 黒龍会会長。通称ボス

* 48歳

備考/リュオンの父親にして、黒龍会のボス。見た目は読めないダ
ンディな大人の男。余裕があるのか、穏やかに見える。リュオンに
は特別優しく、彼を可愛がっている。基本的に、自分の組に属する
物には慈悲深く、敵には厳しい。芸術品をこよなく愛し（特にアジ
アの品）、保護している。芸術品を無下に扱う連中が許せないらし
い。

マ・コクセイ

* 黒龍会老仙。四子を纏める人物

* 75歳

備考/黒龍会のご意見番。先代から仕えていて、時には大きな決定
権を持つ。優しそうなおじいさんだが、実際四子を鍛え上げたかな
りの人物。リュオンを教育してきたのもこの人。ボスとリュオンに
とっては、よりどころとなる存在。黒龍会という組織への忠誠心は
凄まじい。

コウ・イレイ

* 黒龍会“四子”の一人

* 契約者：アール・カーヴァ……???

* 45歳

備考／四子の中で最年長。ボスの良き友。親父臭い一面もあるが、皆に慕われた黒龍会の幹部。リュオンを自分の息子だと思っ
て守っている。女好きだが妻は居ない。ヘビースモーカーで、ニコチンが切れると苦しむ。幼い頃、コクセイに拾われ、ボスの側で育てられた。

1500

リ・スーファ

* 黒龍会“四子”の一人

* 契約者：アール・カーヴァ…… 『桃樹の宝剣』

* 18歳

備考／四子の中で最年少。そして紅一点。しかし、実力は秀でている。ランクの高いアール・カーヴァを使いこなしている。黒髪のチャイナガールで、おとなしい。リュオンの事を慕っていて、陰ながら

ら健気に守っている。幼い頃、人身売買の組織に捕まっていた所、コクセイに契約者になりうる器だと見初められる。

チヨウ・ジエン

* 黒龍会“四子”の一人

* 契約者：アール・カーヴァ…… 『瑠璃弁天琵琶』

* 23歳

備考ノマフィアにしては、上品な青年。四子の中で最も気苦労が耐えない。父が黒龍会の幹部であったため、生まれた時からこの組織に居る。琵琶を得意とし、よくボスやリユオンに弾き聞かせている。幼い頃組織にやってきたスーファを面倒見ていたのはジエン。そのため、スーファは彼の言う事はよく聞く。

チン・テンメイ

* 黒龍会“四子”の一人

* 契約者：アール・カーヴァ…… 『仙脚』

* 34歳

備考／無口でベンパツの四子。基本的に暗殺を請け負っている。片足が無いまま生まれ、生まれた後すぐに捨てられていた所をコクセイに拾われ、アール・カーヴァの“仙脚”を埋め込まれる。非常に努力家で聡明。武術にも長けている。常にむっとした表情なので、怒っているのかと思われがちだが、そうでもない。

<デイルテイル・ファミリー>

詳しい事は不明だが、ボスが美術品コレクターである。美術品なためなら、過激な事もやってのける組織だが、目的は不明。契約者を数名抱え込んでいる。拠点はフランスだが、アメリカの支部も巨大。

シャルロ・グレディア

*デイルテイル・ファミリー

*契約者：アール・カーヴァ……『ヴィクトリアの槍』 『ゴルゴンの盾』

*19歳

おなじみのシャルロさん。元ルネ・アンバー。デイルテイル・ファミリーの間者としてルネ・ヴィルトンに送り込まれていた。父の形見である二つのアール・カーヴァと契約している。殺し屋一家の特殊な体質で、身体能力に長けている。

ノーレン・シユルスタイン

*デイルテイル・ファミリーノ通称：白い悪魔

*契約者：アール・カーヴァ……『パンドラの剣』

*18歳

短いプラチナブロンドに、青白い肌。薄い色素の瞳と、その残虐性から白い悪魔と呼ばれている。デイルテイルのエース的契約者。後の『ガンズ』主人公である。不健康そうな、ファンキーでジャンキーでギャングな青年。

ベルグラス・シヤリア

*デイルテイル・ファミリー幹部

*契約者：アール・カーヴァ……???

*25歳

暗い茶髪で、ダークグリーンの瞳。デイルテイルの契約者を仕切

るポジションに居る。御館様への忠誠心は凄まじく、その意志に反する事柄を容赦なく排除する。美術品にかなり詳しく、切れ者。

> i 8 0 0 5 — 3 7 4 <

<アール・カーヴァとは？>

いわく付き美術品、魔力を秘めた美術品を“アール・カーヴァ”と呼ぶ。今の所これくらいしか分かっていない。アール・カーヴァによつては兵器になりうるため、狙っている者が多い。drawのシーズン1で、レイの目を傷つけたナイフもアール・カーヴァであったと思われる。ランクがあるらしいが、詳しい事は不明。

<契約者とは？>

アール・カーヴァと契約した者の事。一つの美術品に一人しか契約出来ず、その人が死ぬか、契約を解除しなければ他の者は契約出来ない。アール・カーヴァとの契約は一種の呪いで、寿命を天秤にかけるらしいが、詳しい事は不明。

～まとめ～

黒龍会とディルテイルは、今後のdrawでも出てきます。
特にディルテイルは、その活動を含め、他の物語『ガンズ』で詳しく語る事になると思います。

以上中国プランのコラムでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8468x/>

- d r a w -

2011年11月7日09時06分発行